
久 喜 市

栗 橋 宿 跡 Ⅲ

首都圏氾濫区域堤防強化対策における
埋蔵文化財発掘調査報告
(第1分冊)

2019

国土交通省 関東地方整備局
公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 第 117・118 号土壤陶磁器集合



2 第 185 号土壤陶磁器集合

卷頭図版 2



1 在地土器集合



2 玩具類集合

序

埼玉県北部の県境を流れる利根川は、日本の河川の長男として「坂東太郎」の異名を持つ日本最大級の河川です。その広大な流域には肥沃な農地が広がり、約1,280万人もの人々が暮らしています。

利根川は、「刀祢河泊」として万葉集の恋歌にも詠まれており、古くから人々に親しまれてきました。また、交通路として、農業・生活・工業用水の供給源としても限りない恵みをもたらしています。その一方、過去にたびたび恐ろしい水害を引き起こしてきました。国土交通省ではこのような災害を未然に防ぐため、様々な対策を講じています。首都圏の安全を確保するための氾濫区域の堤防強化対策事業もその一環です。

本事業地のある加須・羽生・久喜地区には、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数存在しています。今回、発掘調査を行った久喜市の栗橋宿跡もその一つです。発掘調査は同事業に伴う事前調査であり、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

栗橋宿は、江戸時代には日光道中の宿場で、商人や職人の住まいが並んでいました。また、利根川を渡る房川渡しに栗橋関所が置かれ、交通の要所としても栄えていました。

今回の調査では、宿場の町屋に建ち並ぶ建物跡、舟の部材が再利用された「穴蔵」と呼ばれる地下室などが発見されました。また、陶磁器や木製品などの遺物が数多く出土し、当時の生活をうかがうことができる貴重な発見となりました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部文化資源課をはじめ、国土交通省関東地方整備局、久喜市教育委員会並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

令和元年9月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 藤 田 栄 二

例　言

1 本書は久喜市に所在する栗橋宿跡第6地点の発掘調査報告書である。

2 遺跡の代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

栗橋宿跡第6地点（第1次）

久喜市栗橋北2丁目3452-1他

平成26年9月12日付教生文第2-36号

栗橋宿跡第6地点（第2次）

久喜市栗橋北2丁目3452-1他

平成27年4月30日付教生文第2-3号

3 発掘調査は、首都圏氾濫区域堤防強化対策に先立つ埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課（当時）が調整し、国土交通省関東地方整備局利根川上流事務所の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4 各事業の委託事業名は、下記のとおりである。

発掘調査事業（平成26年度）

「首都圏氾濫区域堤防強化対策（加須・久喜地区）における平成26年度埋蔵文化財発掘調査」

発掘調査事業（平成27年度）

「首都圏氾濫区域堤防強化対策（加須・久喜地区）における平成27年度埋蔵文化財発掘調査」

整理・報告書作成事業（平成29～30年度）

「首都圏氾濫区域堤防強化対策における平成29年度埋蔵文化財発掘調査（整理）」

「首都圏氾濫区域堤防強化対策における平成30年度埋蔵文化財発掘調査（整理）」

「首都圏氾濫区域堤防強化対策における平成31年度埋蔵文化財発掘調査（整理）」

5 発掘調査・整理報告書作成事業はI-3に示した組織により実施した。

第1次調査は平成26年10月1日から平成27年3月31日まで実施し、村山卓、小野美代子が担当した。

第2次調査は平成27年4月1日から平成28年3月31日まで実施し、宮村誠二、岩井直人が担当した。

整理報告書作成事業は、平成29年4月1日から令和元年7月31日まで実施し、水村雄功が担当した。

報告書は、令和元年9月20日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第456集として印刷・刊行した。

6 発掘調査における基準点測量は（株）東京航業研究所、（株）ソレイユに委託した。空中写真撮影は（株）中央航業、（株）東京航業研究所に委託した。写真測量は（株）東京航業研究所に委託した。

7 発掘調査における自然科学分析は（株）パレオ・ラボ、整理作業における自然科学分析は（株）パリノサーヴェイに委託した。

8 発掘調査における写真撮影は村山、小野、宮村、岩井が行い、出土遺物の写真撮影は水村が行った。巻頭写真用の遺物撮影は、小川忠博氏に委託した。

9 文字資料の釈文は、久喜市教育委員会・久喜市立郷土資料館の協力を得た。

10 出土品の整理・図版作成は水村が行い、木製品は矢部瞳、金属製品は瀧瀬芳之の協力を得た。また、町並みの復元、文献調査にあたっては、劍持和夫の協力を得た。

11 文献調査に際して、久喜市立郷土資料館より「栗橋宿往還絵図」に関する資料提供を受けた。

12 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、その他を水村が行った。

13 本書の編集は水村が行った。

14 本書にかかる諸資料は令和元年10月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

15 発掘調査や本書の作成にあたり、下記の関係

機関の方々から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします（敬称略五十音順）。

久喜市教育委員会 江戸遺跡研究会
江戸在地土器研究会

石井たま子 小川望 關根信夫 鈴木裕子
富元久美子 永越信吾 中野高久 堀内秀樹
平田博之 卷島千明 水本和美 両角まり
山崎吉弘

凡 例

1 遺跡全体におけるX・Yの数値は、世界測地系、国家標準平面直角座標第IX系（原点北緯36° 00' 00"、東経139° 50' 00"）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位は全て座標北を指す。

D 7-H 1 グリッド北西杭の座標は、X=15630.000m・Y=-11700.000m、北緯36° 08' 26.8970"・東経139° 42' 11.9696"である。

D 6-D10 グリッド北西杭の座標は、X=15670.000m・Y=-11710.000m、北緯36° 08' 28.1944"・東経139° 42' 11.5675"である。

D 7-F 1 グリッド北西杭の座標は、X=15650.000m・Y=-11700.000m、北緯36° 08' 27.2214"・東経139° 42' 11.9686"である。

D 7-G 1 グリッド北西杭の座標は、X=15640.000m・Y=-11700.000m、北緯36° 08' 27.2214"・東経139° 42' 11.9691"である。

2 調査に際して使用したグリッド名称は、事業地内の全体を覆うように設定した。座標値X=16000.000m、Y=-12300.000mを北西の原点（A 1-A1グリッド）とし、100×100mの大グリッドを設定し、さらにその中を10×10mの小グリッドに細分した。

3 グリッドの名称は、北西原点を基点に北から南にアルファベット（A・B・C…）、西から東に数字（1・2・3…）を付し、アルファベッ

トと数字を組み合わせた。同様に、小グリッドは各大グリッドの北西隅を基点に、北から南にA～J、西から東に1～10とし、グリッド内を100に区分した。

これらを合わせた呼称は、ハイフォン（-）をはさみ、大グリッドを左に、小グリッドを右に表記した。（大グリッド）-（小グリッド）

4 本書の本文・挿図・表・写真図版に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

S B…建物跡 S D…溝跡 S K…土壙
S E…井戸跡 P…ピット・柱穴
S X…性格不明遺構 基礎…基礎状遺構
桶…埋設桶 焼土…焼土遺構

5 本書における挿図は、一部の例外を除き以下の縮尺を原則とした。

全測図 1/300

遺構図 1/100・1/80・1/60・1/30

遺物実測図・拓影図1/2・1/3・2/3・1/4・1/6

建物跡の遺構図は原則、日光道中側を上にして示した。

6 遺構断面図に表記した水準数値は、全て海拔標高（単位m）を表す。遺構の一覧表の計測値単位は全てmである。

7 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

- ・遺物計測値は、陶磁器・土器等をcm、錢貨をmm、重さをg単位とした。
- ・計測値の（ ）は復元推定値、〔 〕は既存値を示す。
- ・陶磁器の計測値の内、口径は口縁部上端部、底径は畳付下端部の径を示した。蓋は底径欄

に下端の径を示した。輪高台状のつまみが付く蓋は口径欄につまみ上端部の径を示した。

- ・瓦の計測値は、「長さ」に瓦当面からの長さ(奥行)、「幅」に全幅、「厚さ」に平瓦部の厚さ、「高さ」に接地面からの高さ、「径」に瓦当径を記載した。

- ・胎土は特徴的な鉱物等を記号で示した。

A : 雲母 B : 片岩 C : 角閃石 D : 長石
E : 石英 F : 軽石 G : 砂粒子 H : 赤色
粒子 I : 白色粒子 J : 針状物質 K : 黒
色粒子 L : その他 M : チャート

- ・焼成は良好・普通・不良の3段階に分けて示した。

- ・残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。

- ・備考には出土位置、推定生産地、文様等の特徴、その他特筆事項を記した。

- 8 遺物実測図の網掛けは、漆、被熱、タール付着の範囲を基本とした。網掛けの濃度によって種類を区分し、図中に例示した。主な網かけは

以下のとおりである。

赤漆20%、茶漆30%、黒漆35%、炭化50%

- 9 本書に掲載した地形図類は国土地理院発行の1/50000地形図、久喜市発行の1/2500都市計画図を編集のうえ、使用した。

- 10 遺構番号は原則、調査時のものを用いた。調査の都合上、遺構番号に欠番が生じているが、これらについても欠番のまま扱った。水塚下の遺構群については、第1地点で報告される予定であったが、調査面の高さの違いから第6地点で報告することとした。そのため、重複番号が多く、遺構番号の頭に「水塚下」を付け加えて報告することとした。また、遺構番号が重複しているものについては、番号の振替を行った。欠番遺構及び遺構番号を変更したものは下記の表に示した。

- 11 文中の引用文献等は、(著者 発行年)の順で表記し、その他の参考文献とともに巻末に掲載した。

遺構番号振替・欠番一覧表

新	旧	備考
硬化面範囲	SB2	
SK39 ②	SB3	
SB13・14	SB13	
SB13・14	SB14	
欠番	SB16	
SB204	SB203	1棟→2棟重複
SB203	SB203	1棟→2棟重複
欠番 (SK203に吸収)	SK204	
SE201	SK211	
SK39 ①	SK39	
欠番	SK49	
欠番	SK50	
欠番	SK51	
欠番	SK52	
欠番 (SK58に吸収)	SK57	

新	旧	備考
欠番	SK65	
欠番	SK70	
欠番	SK79	
欠番	SK108	
欠番	SK129	
欠番	SK174	
欠番	SK182	
欠番	SK183	
欠番	SK222	
欠番	SK234	
砂範囲 1		新規発番
砂範囲 2		新規発番
砂範囲 3		新規発番
欠番	Pit3	
欠番	Pit4	
欠番	Pit8	
遺物集中地点	SX201	

目 次

(第1分冊)

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I	発掘調査の概要	1
1	発掘調査に至る経過	1
2	発掘調査・報告書作成の経過	2
(1)	発掘調査	2
(2)	整理・報告書の作成	2
3	発掘調査・報告書作成の組織	3
II	遺跡の立地と環境	5
1	地理的環境	5
2	歴史的環境	6
III	遺跡の概要	13
IV	遺構と遺物	28
1	第一面の遺構と遺物	
(1)	建物跡	28
(2)	基礎状遺構	79
(3)	硬化面範囲	80
(4)	埋設桶	80
(5)	井戸跡	96
(6)	杭列	100
(7)	溝跡	100
(8)	焼土遺構	122
(9)	土壙	127
(10)	砂範囲	193
(11)	ピット	193
(12)	遺物集中地点	193
(13)	グリッド出土遺物	195

(第2分冊)

2	第二面の遺構と遺物	
(1)	基礎状遺構	205
(2)	埋設桶	209
(3)	井戸跡	216
(4)	杭列	221
(5)	溝跡	221
(6)	焼土遺構	245
(7)	土壙	249
(8)	ピット	444
(9)	グリッド出土遺物	445
3	文字資料	448
4	出土遺物一覧表と遺構の時期	453
V	自然科学分析	482
1	放射性炭素年代測定	
	(ウィグルマッチング法)	482
2	寄生虫卵分析(1)	486
3	寄生虫卵分析(2)	488
4	樹種同定(1)	491
5	樹種同定(2)	493
6	種子同定	499
7	布片の同定	505
VI	調査のまとめ	507

写真図版

挿図目次

(第1分冊)

第1図 埼玉県の地形	5	第34図 第15号建物跡（2）	45
第2図 栗橋宿跡周辺の地形	6	第35図 第17号建物跡	46
第3図 周辺の遺跡	8	第36図 第18号建物跡	47
第4図 遺跡位置図	14	第37図 第19号建物跡	47
第5図 基本土層西壁（1）	15	第38図 第20号建物跡	48
第6図 基本土層西壁（2）	16	第39図 第201号建物跡	49
第7図 基本土層東西壁	17	第40図 第202号建物跡	50
第8図 基本土層東壁	18	第41図 第203号建物跡（1）	51
第9図 調査区第一面全体図	19	第42図 第203号建物跡（2）	52
第10図 調査区第一面分割図（1）	20	第43図 第203号建物跡穴藏（1）	52
第11図 調査区第一面分割図（2）	21	第44図 第203号建物跡穴藏（2）	53
第12図 調査区第一面分割図（3）	22	第45図 第204号建物跡	54
第13図 調査区第二面全体図	23	第46図 建物跡出土遺物（1）	55
第14図 調査区第二面分割図（1）	24	第47図 建物跡出土遺物（2）	56
第15図 調査区第二面分割図（2）	25	第48図 建物跡出土遺物（3）	57
第16図 調査区第二面分割図（3）	26	第49図 建物跡出土遺物（4）	58
第一面		第50図 建物跡出土遺物（5）	59
第17図 第1号建物跡	29	第51図 建物跡出土遺物（6）	60
第18図 第4号建物跡（1）	30	第52図 建物跡出土遺物（7）	65
第19図 第4号建物跡（2）	31	第53図 建物跡出土遺物（8）	65
第20図 第5号建物跡（1）	32	第54図 建物跡出土遺物（9）	66
第21図 第5号建物跡（2）	33	第55図 建物跡出土遺物（10）	67
第22図 第6号建物跡	33	第56図 建物跡出土遺物（11）	68
第23図 第7号建物跡	34	第57図 建物跡出土遺物（12）	69
第24図 第8号建物跡	35	第58図 建物跡出土遺物（13）	70
第25図 第9号建物跡	36	第59図 建物跡出土遺物（14）	72
第26図 第10号建物跡（1）	37	第60図 建物跡出土遺物（15）	73
第27図 第10号建物跡（2）	38	第61図 建物跡出土遺物（16）	74
第28図 第11号建物跡（1）	39	第62図 建物跡出土遺物（17）	75
第29図 第11号建物跡（2）	40	第63図 建物跡出土遺物（18）	76
第30図 第12号建物跡	41	第64図 建物跡出土遺物（19）	77
第31図 第13・14号建物跡（1）	42	第65図 建物跡出土遺物（20）	78
第32図 第13・14号建物跡（2）	43	第66図 第1～3号基礎状遺構	79
第33図 第15号建物跡（1）	44	第67図 基礎状遺構出土遺物	80

第68図 硬化面範囲	80	第105図 溝跡出土遺物(10)	120
第69図 埋設桶(1)	82	第106図 溝跡出土遺物(11)	121
第70図 埋設桶(2)	83	第107図 第1~5号焼土遺構	123
第71図 埋設桶(3)	84	第108図 水塚下第1~4号焼土遺構	124
第72図 埋設桶(4)	85	第109図 焼土遺構出土遺物	125
第73図 埋設桶(5)	86	第110図 土壙(1)	129
第74図 埋設桶出土遺物(1)	87	第111図 土壙(2)	130
第75図 埋設桶出土遺物(2)	88	第112図 土壙(3)	131
第76図 埋設桶出土遺物(3)	90	第113図 土壙(4)	132
第77図 埋設桶出土遺物(4)	91	第114図 土壙(5)	133
第78図 埋設桶出土遺物(5)	92	第115図 土壙(6)	134
第79図 埋設桶出土遺物(6)	93	第116図 土壙(7)	135
第80図 埋設桶出土遺物(7)	94	第117図 土壙出土遺物(1)	136
第81図 埋設桶出土遺物(8)	95	第118図 土壙出土遺物(2)	137
第82図 埋設桶出土遺物(9)	96	第119図 土壙出土遺物(3)	138
第83図 第201号井戸跡	97	第120図 土壙出土遺物(4)	139
第84図 井戸跡出土遺物	98	第121図 土壙出土遺物(5)	140
第85図 第1・201号杭列	99	第122図 土壙出土遺物(6)	141
第86図 第1号溝跡	101	第123図 土壙出土遺物(7)	142
第87図 第2号溝跡	102	第124図 土壙出土遺物(8)	143
第88図 第3・4号溝跡	103	第125図 土壙出土遺物(9)	144
第89図 第4号溝跡木組み	104	第126図 土壙出土遺物(10)	145
第90図 第5号溝跡(1)	105	第127図 土壙出土遺物(11)	146
第91図 第5号溝跡(2)	106	第128図 土壙出土遺物(12)	147
第92図 第6号溝跡	107	第129図 土壙出土遺物(13)	148
第93図 第7号溝跡	108	第130図 土壙出土遺物(14)	149
第94図 水塚下第1号溝跡	108	第131図 土壙出土遺物(15)	150
第95図 第201~203号溝跡	109	第132図 土壙出土遺物(16)	151
第96図 溝跡出土遺物(1)	110	第133図 土壙出土遺物(17)	152
第97図 溝跡出土遺物(2)	111	第134図 土壙出土遺物(18)	153
第98図 溝跡出土遺物(3)	112	第135図 土壙出土遺物(19)	154
第99図 溝跡出土遺物(4)	113	第136図 土壙出土遺物(20)	155
第100図 溝跡出土遺物(5)	114	第137図 土壙出土遺物(21)	156
第101図 溝跡出土遺物(6)	117	第138図 土壙出土遺物(22)	157
第102図 溝跡出土遺物(7)	117	第139図 土壙出土遺物(23)	158
第103図 溝跡出土遺物(8)	118	第140図 土壙出土遺物(24)	159
第104図 溝跡出土遺物(9)	119	第141図 土壙出土遺物(25)	160

第142図	土壤出土遺物 (26)	161	第159図	土壤出土遺物 (43)	191
第143図	土壤出土遺物 (27)	172	第160図	砂範囲 (1)	193
第144図	土壤出土遺物 (28)	172	第161図	砂範囲 (2)	194
第145図	土壤出土遺物 (29)	173	第162図	ピット	195
第146図	土壤出土遺物 (30)	175	第163図	ピット出土遺物	195
第147図	土壤出土遺物 (31)	176	第164図	遺物集中地点	195
第148図	土壤出土遺物 (32)	177	第165図	遺物集中地点出土遺物 (1)	196
第149図	土壤出土遺物 (33)	178	第166図	遺物集中地点出土遺物 (2)	197
第150図	土壤出土遺物 (34)	179	第167図	グリッド出土遺物 (1)	199
第151図	土壤出土遺物 (35)	180	第168図	グリッド出土遺物 (2)	200
第152図	土壤出土遺物 (36)	182	第169図	グリッド出土遺物 (3)	200
第153図	土壤出土遺物 (37)	183	第170図	グリッド出土遺物 (4)	201
第154図	土壤出土遺物 (38)	184	第171図	グリッド出土遺物 (5)	201
第155図	土壤出土遺物 (39)	185	第172図	グリッド出土遺物 (6)	202
第156図	土壤出土遺物 (40)	186	第173図	グリッド出土遺物 (7)	203
第157図	土壤出土遺物 (41)	188	第174図	グリッド出土遺物 (8)	204
第158図	土壤出土遺物 (42)	189				

表 目 次

(第1分冊)

第1表 周辺の遺跡一覧	9	第27表 溝跡出土遺物観察表 (4)	118
第2表 第一面建物跡一覧表	28	第28表 溝跡出土遺物観察表 (5)	120
第3表 建物跡出土遺物観察表 (1)	61	第29表 溝跡出土遺物観察表 (6)	122
第4表 建物跡出土遺物観察表 (2)	65	第30表 第一面焼土遺構一覧表	122
第5表 建物跡出土遺物観察表 (3)	65	第31表 焼土遺構出土遺物観察表	126
第6表 建物跡出土遺物観察表 (4)	70	第32表 第一面土壙一覧表	127
第7表 建物跡出土遺物観察表 (5)	71	第33表 土壙出土遺物観察表 (1)	162
第8表 建物跡出土遺物観察表 (6)	74	第34表 土壙出土遺物観察表 (2)	172
第9表 建物跡出土遺物観察表 (7)	74	第35表 土壙出土遺物観察表 (3)	172
第10表 建物跡出土遺物観察表 (8)	77	第36表 土壙出土遺物観察表 (4)	174
第11表 建物跡出土遺物観察表 (9)	78	第37表 土壙出土遺物観察表 (5)	180
第12表 第一面基礎状遺構一覧表	79	第38表 土壙出土遺物観察表 (6)	181
第13表 基礎状遺構出土遺物観察表	80	第39表 土壙出土遺物観察表 (7)	185
第14表 第一面埋設桶一覧表	81	第40表 土壙出土遺物観察表 (8)	187
第15表 埋設桶出土遺物観察表 (1)	90	第41表 土壙出土遺物観察表 (9)	191
第16表 埋設桶出土遺物観察表 (2)	90	第42表 ピット出土遺物観察表	195
第17表 埋設桶出土遺物観察表 (3)	93	第43表 遺物集中地点出土遺物観察表 (1)	197
第18表 埋設桶出土遺物観察表 (4)	94	第44表 遺物集中地点出土遺物観察表 (2)	197
第19表 埋設桶出土遺物観察表 (5)	94	第45表 グリッド出土遺物観察表 (1)	200
第20表 埋設桶出土遺物観察表 (6)	95	第46表 グリッド出土遺物観察表 (2)	200
第21表 埋設桶出土遺物観察表 (7)	96	第47表 グリッド出土遺物観察表 (3)	200
第22表 井戸跡出土遺物観察表	98	第48表 グリッド出土遺物観察表 (4)	200
第23表 第一面溝跡一覧表	100	第49表 グリッド出土遺物観察表 (5)	202
第24表 溝跡出土遺物観察表 (1)	115	第50表 グリッド出土遺物観察表 (6)	202
第25表 溝跡出土遺物観察表 (2)	117	第51表 グリッド出土遺物観察表 (7)	202
第26表 溝跡出土遺物観察表 (3)	117	第52表 グリッド出土遺物観察表 (8)	204

I 発掘調査の概要

1 発掘調査に至る経過

国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所では「利根川水系利根川・江戸川河川整備計画【大臣管理区間】」に基づき、首都圏氾濫区域堤防強化対策事業として、利根川右岸の堤防を拡幅し、強化する事業を進めている。

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課では、国が実施するこうした公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前より関係機関と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

首都圏氾濫区域堤防強化対策事業に係る埋蔵文化財の所在及び取扱いについては、利根川上流河川事務所長から平成17年1月20日付け利上沿第18号で、埼玉県教育委員会教育長あて、埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて照会がなされた。

事業予定区域については埼玉県指定旧跡や周知の埋蔵文化財包蔵地が所在すること、埋蔵文化財の詳細な状況等を把握するための確認調査を実施する必要がある旨を、平成17年3月17日付け教生文第1780号で回答した。

当該箇所については、近世絵図等から栗橋宿の範囲であることは明らかであったが、遺構の状況等を把握するために平成23年12月に試掘調査を実施した。その結果、近世の遺構、遺物が多量に検出され、「栗橋宿跡」(No.86-011)として埋蔵文化財包蔵地として登載した。

上記の埋蔵文化財の所在が明確になったことから、利根川上流河川事務所長あてに、計画上やむを得ず現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査が必要な旨を回答し、取扱いについて協

議を重ねたが、現状保存が困難であることから記録保存の措置を講ずることとなった。

調査に際し、発掘調査実施機関である公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所、生涯学習文化財課（当時）の三者で、工事日程、調査計画、調査期間などについて定期的に会議を開催し、各種の調整を行った。

文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知が利根川上流河川事務所長から平成24年2月9日付け国関利上沿第27号で、埼玉県教育委員会教育長あて提出された。それに対する埼玉県教育委員会教育長からの発掘調査が必要な旨の勧告は下記のとおりである。

平成24年2月9日付け教生文第4-1337号

また、同法第92条の規定により公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された発掘調査届に対する埼玉県教育委員会教育長からの指示通知は下記のとおりである。

〔1次調査〕

平成26年9月12日付け教生文第2-36号

〔2次調査〕

平成27年4月30日付け教生文第2-3号

(埼玉県教育局市町村支援部文化資源課)

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

栗橋宿跡第6地点の調査は首都圏氾濫区域堤防強化対策工事に伴って、平成26年度（第1次）、27年度（第2次）の2回実施した。調査面積は3,266.00m²（第1次調査1,633.00m²、第2次調査1,633.00m²）である。

第2次調査は当初、近世第二面を平成27年4月1日から9月30日まで実施する予定であった。しかし、国土交通省、埼玉県教育委員会生涯学習文化財課との協議の結果、第一次調査区間の道路部分を含めて調査することとなり、平成28年3月31日まで調査期間を延長した。

第1次調査は平成26年10月1日から平成27年3月31日まで実施した。

平成26年10月1日に囲柵、2日に遺物収納棟の設置を行った。

重機による表土除去作業は、10月1日から20日に実施した。表土除去作業を完了したところから順次補助員による遺構確認作業を開始した。

遺構測量用の基準点測量及びグリッド杭打設作業は、表土除去作業終了後に、平成26年10月23・24日に実施した。

確認作業の結果、第一面から幕末から近代の建物跡、土壙、溝跡などの遺構が検出された。直ちに精査を開始し、順次土層断面図、遺構平面図、写真撮影等の記録作成作業を行った。

平成27年3月16日に遺物、器材を撤収して現地調査を終了した。

第2次調査は平成27年4月1日から平成28年3月31日まで実施した。

重機による表土除去作業は、第二面を平成27年4月6日から22日、道路部分第一面を9月7日から9日、道路部分第二面を12月24日・25日の計三回実施した。

4月13日から遺構確認作業を行い、補助員による作業を開始した。

遺構測量用の基準点測量及びグリッド杭打設作業は、表土除去作業終了後に、第二面は平成27年4月23日、道路部分第一面は10月6日、道路部分第二面は平成28年1月5日の計3回実施した。

確認作業の結果、江戸時代から近代にかけての建物跡、溝跡、土壙、杭列、井戸跡、穴蔵などの遺構が検出された。直ちに精査を開始し、順次土層断面図、遺構平面図、写真撮影等の記録作成作業を行った。

平成28年3月14日に遺物、器材を撤収し、現地調査を終了した。

(2) 整理・報告書の作成

整理報告書の作成作業は平成29年4月1日から令和元年7月30日まで実施した。平成29年度は、第一次調査、第二次調査第一面の遺構と出土遺物、平成30年度は第二次調査第二面の遺構と出土遺物、平成31年度は第二次調査第二面の遺構と出土遺物の整理を行った。

各年度の作業は出土遺物の水洗・注記から開始し、順次、接合・復元作業に着手した。復元を終了した遺物は、実測、トレース、採拓を経て遺構ごとにパソコンで印刷用の挿図を作成した。実測には磁気式3次元位置計測装置、正射投影画像撮影機を活用した。掲載遺物の一部は写真を撮影し、写真図版の版下データを作成した。

同時に、発掘調査で記録した遺構の断面図や平面図等の照合作業を行い、修正を加えた第二原図を作成した。第二原図は仮版組を行った上で、スキヤナでパソコンに取り込み、画像編集ソフトを用いてデジタルトレースと編集作業を進め、印刷用の挿図版下データを作成した。

発掘調査で撮影された遺構写真は、選別を行い、写真図版用の版下データを作成した。

自然科学分析は、木製品の樹種と大型植物遺体の種同定を委託した。口絵写真は、特徴的な遺物を対象に、平成30年11月に撮影を委託した。

作成した遺構・遺物のデータ、自然科学分析結果等をもとに、原稿を執筆した。また、遺構・遺物の挿図と写真図版等を組み合わせて、報告書の割付・編集を行った。入稿後、3回の校正を経て、令和元年9月20日に、埼玉県埋蔵文化財調査事

業団報告書第456集『栗橋宿跡III』(本書)を刊行した。

遺物及び図面類・写真類・データ類等の諸資料は、令和元年6月から7月に整理分類の上、埼玉県埋蔵文化財収蔵施設の収蔵庫へ仮収納した。

3 発掘調査・報告書作成の組織

平成26年度（発掘調査）

理 事 長	樋 田 明 男
常務理事兼総務部長	大 嶋 紳一郎
総務部	
総務部副部長	瀧瀬 芳 之
総務課長	藤倉 英 明

調査部	
調査部長	昼 間 孝 志
調査部副部長	富 田 和 夫
主幹兼調査第二課長	木 戸 春 夫
主 事	村 山 卓
専 門 員	小 野 美代子

平成27年度（発掘調査）

理 事 長	樋 田 明 男
常務理事兼総務部長	木 村 博 昭
総務部	
総務部副部長	瀧瀬 芳 之
総務課長	安 田 孝 行

調査部	
調査部長	金 子 直 行
調査部副部長	富 田 和 夫
調査監兼調査第一課長	赤 熊 浩 一
主 事	宮 村 誠 二
主 事	岩 井 直 人

平成29年度（報告書作成）

理 事 長	塩野谷 孝 志
常務理事兼総務部長	川 目 晴 久
総務部	
総務部副部長	黒 坂 穎 二
総務課長	曾 川 浩 二

調査部	
調査部長	赤 熊 浩 一
調査部副部長兼整理第二課長	吉 田 稔
主 事	水 村 雄 功

平成30年度（報告書作成）

理 事 長	藤 田 栄 二	調査部	
常務理事兼総務部長	川 目 晴 久	調 査 部 長	瀧瀬 芳 之
総務部		調査部副部長兼整理第二課長	山 本 靖
総務部副部長	田 中 広 明	主 事	水 村 雄 功
総務課長	新 井 了 悟		

平成31年度（報告書作成）

理 事 長	藤 田 栄 二	調査部	
常務理事兼総務部長	高 津 導	調 査 部 長	黒 坂 祩 二
総務部		調査部副部長兼整理第一課長	上 野 真由美
総務部副部長	山 本 靖	主幹兼整理第二課長	福 田 聖
総務課長	新 井 了 悟	主 事	水 村 雄 功

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

栗橋宿跡第6地点は、久喜市栗橋北二丁目3452-1ほかに所在する。JR宇都宮線、東武日光線の栗橋駅から北東0.8kmにあたる。久喜市は埼玉県の北東端に位置し、利根川を挟んで茨城県古河市、五霞町に接している。JR宇都宮線、東武日光線が通り、国道4号・125号、県道3号さいたま栗橋線・12号川越栗橋線が交差する、県北東部における鉄路・陸路の結節点である。

久喜市は平成22年に久喜市・栗橋町・菖蒲町・鷺宮町が合併して、新市としての久喜市となった。旧栗橋町域は現在でも栗橋地区と称されている。

栗橋地区は日光街道の宿場町として栄え、南流する利根川を用いた舟運と合わせて現代に至るまで大いに賑わいをみせている。また、市街を離ると、水田の中に自然堤防に沿った帶状の屋敷林が点在する景観となる。

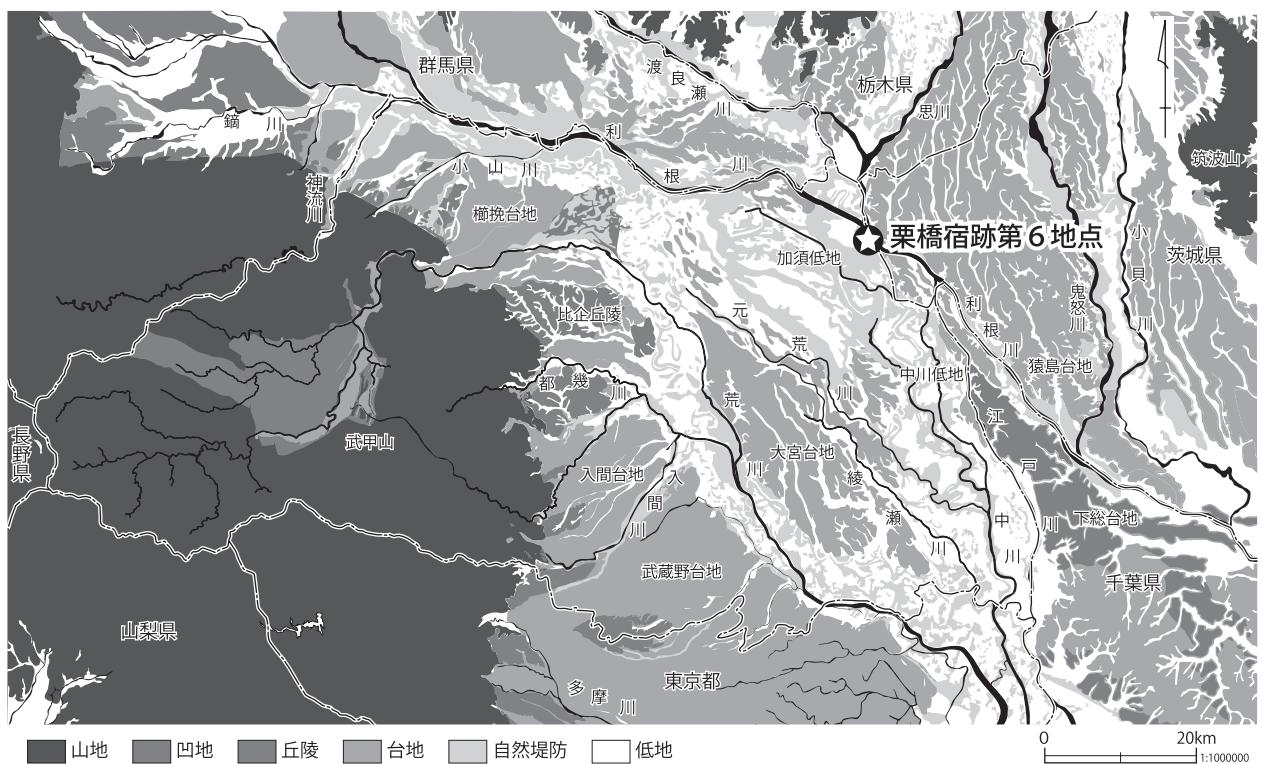
遺跡は中川低地の北に位置している。中川低地は関東平野のほぼ中央、利根川中流域低地である

加須低地の南東側に当たる。南側は大宮台地、東側は利根川を越えて古河台地になる。

妻沼低地、加須低地付近は関東造盆地運動の最も沈降の度合いが強い地域として知られ、現在でも沈降が進んでいる。羽生市小松1号墳が地下約3mに埋没しているのは、沈降が進んだ結果である（矢口・瀧瀬1996）。沈降前の利根川は現在の荒川筋を流れており、この造盆地運動によって現在の利根川の方向へと東遷したとされている。しかし、その流路は安定せず、多くの蛇行する流路跡とそれに伴う自然堤防が形成された。

近世初頭段階の利根川本流筋として、会の川、合の川、利根川分流、北川辺蛇行流路、島川、渡良瀬川、浅間川、大落吉利根川、庄内古川が考えられ、それ以外にも細かな流路が推定される。

中川低地にはこうした多くの河川の流下によって、砂礫が多く供給され、その両岸には自然堤防が発達した。また、浅間川と会の川が大落古利根



第1図 埼玉県の地形図

川に合流する久喜市（旧栗橋町）高柳には、大河の証しである河畔砂丘が形成され、微高地として旧鷺宮町以南に連続して分布している。

栗橋宿跡は、近世初頭以前に渡良瀬川の右岸に形成された北西—南東方向の長さ約300m、幅120mほどの自然堤防上に立地している。後述す

る江戸幕府に始まる東遷事業後は、遺跡の北を流れる事となつた利根川の右岸に位置し、現在では利根川の堤防に接している。遺跡付近の標高は11～12mで、南側の後背湿地に営まれる水田との比高差は約1.0mである。遺構の覆土や地山は、砂質もしくはシルト質である。

2 歴史的環境

（1）中世の栗橋とその周辺

栗橋宿跡の所在する中川低地周辺の地表は、地形の沈降と河川の乱流による堆積土に厚く覆われている。そのため遺跡の分布は未だ不明な部分が多く、本来は現在検出されているよりも多くの遺跡の存在が予想される。

栗橋地区では、古代以前に遡る遺跡は確認されていない。縄文時代前期（約6000年前）の海進時には栃木市藤岡付近まで海が入り込み、栗橋地区

は海底であった。海退後は河川が乱流し、付近は湿地のような状態が長く続く。

平安時代には下総国葛飾郡新居郷に属し、12世紀には摂津源氏源頼政の郎党下河辺氏によって下河辺荘が開かれ、鎌倉時代中期には金沢北条実時が地頭となる。栗橋地区に当たる狐塚、高柳の両郷は金沢氏の支配を受けていたとされている。

鎌倉時代には、『吾妻鏡』に大河戸兄弟に関する記事があり、三郎行元は地区内の高柳が本貫地



とされている。高柳から伊坂にかけては、鎌倉街道に比定される古道が今も一部残っている。近くには静御前終焉の地も伝承されている。

旧大利根町や旧栗橋町などの地域では、中世の遺跡はほとんど検出されていない。唯一、旧栗橋町の佐間小草原遺跡（2）が知られるのみである。中世墓を中心とした遺跡で、板碑37基、古瀬戸の瓶子、常滑の大甕などが工事中に出土した。板碑の年代は、文和3年（1354）から明応7年（1498）に及んでいる。平成17年の調査では、溝跡や土壙などが検出され、板碑、漆塗り椀などが出土した。

中世段階の利根川は、羽生市川俣で会の川、加須市大越で北川辺蛇行流路跡、浅間川に分流していた。栗橋地区周辺では、洪水による大量の土砂の堆積と、関東造盆地運動による地盤の沈降が進み、遺跡の存在は定かではない。

一方、渡良瀬川（太日川）の左岸、および権現堂川の左岸では、栗橋城址、古河城址をはじめとする数多くの遺跡が知られている。

近世初期までの「栗橋」といえば、現在の茨城県猿島郡五霞町の元栗橋を指す。享徳4年（1455）の享徳の乱後、御座所を古河に移した鎌倉公方足利成氏が古河公方と称して以降、元栗橋にはその支城の栗橋城（3）が置かれた。

鎌倉街道中ツ道（奥州道）の利根川の渡河点があった栗橋城は、水陸の要衝として後北条氏の関宿城（10）攻略の拠点となった。天正2年（1574）に関宿城開城後は北関東攻略の起点となつたが、豊臣秀吉の小田原攻めにより天正18年（1590）に開城する。『鷺宮町史』、『町史五霞の生活誌』によれば、栗橋城の城下町は城の東側に広がり、古河方面への道と関宿方面への道が分岐していたという。また、南側には鎌倉街道中ツ道・奥州街道の渡船場があったとされている。遺跡の分布は、その街道沿い、および東側の福田近辺の関宿・古河を結ぶと考えられる道沿いに分布している。

古河城（14）も栗橋城同様に、後北条支配下の

足利氏によって戦国城郭として整えられたが、やはり小田原攻めによって破却された。

その後、徳川家康に従っていた小笠原秀征が古河城を修復し、近世以降も幕閣を含む歴代の城主によって拡張され、古河は城下町として栄えていく（古河市史編さん委員会1985、茨城県古河市教育委員会2004）。

古河城南の御所沼の奥に舌状に突出した台地上には、古河公方の御所として知られる鴻巣館跡（15）がある。初代古河公方足利成氏によって、享徳4年（1455）に築造された連郭式の城郭で、最後の古河公方足利義氏の娘姫の居館として知られている。足利の後裔、喜連川氏の尊信が寛永7年（1630）に古河を離れた後は、時宗十念寺の寺域となった。

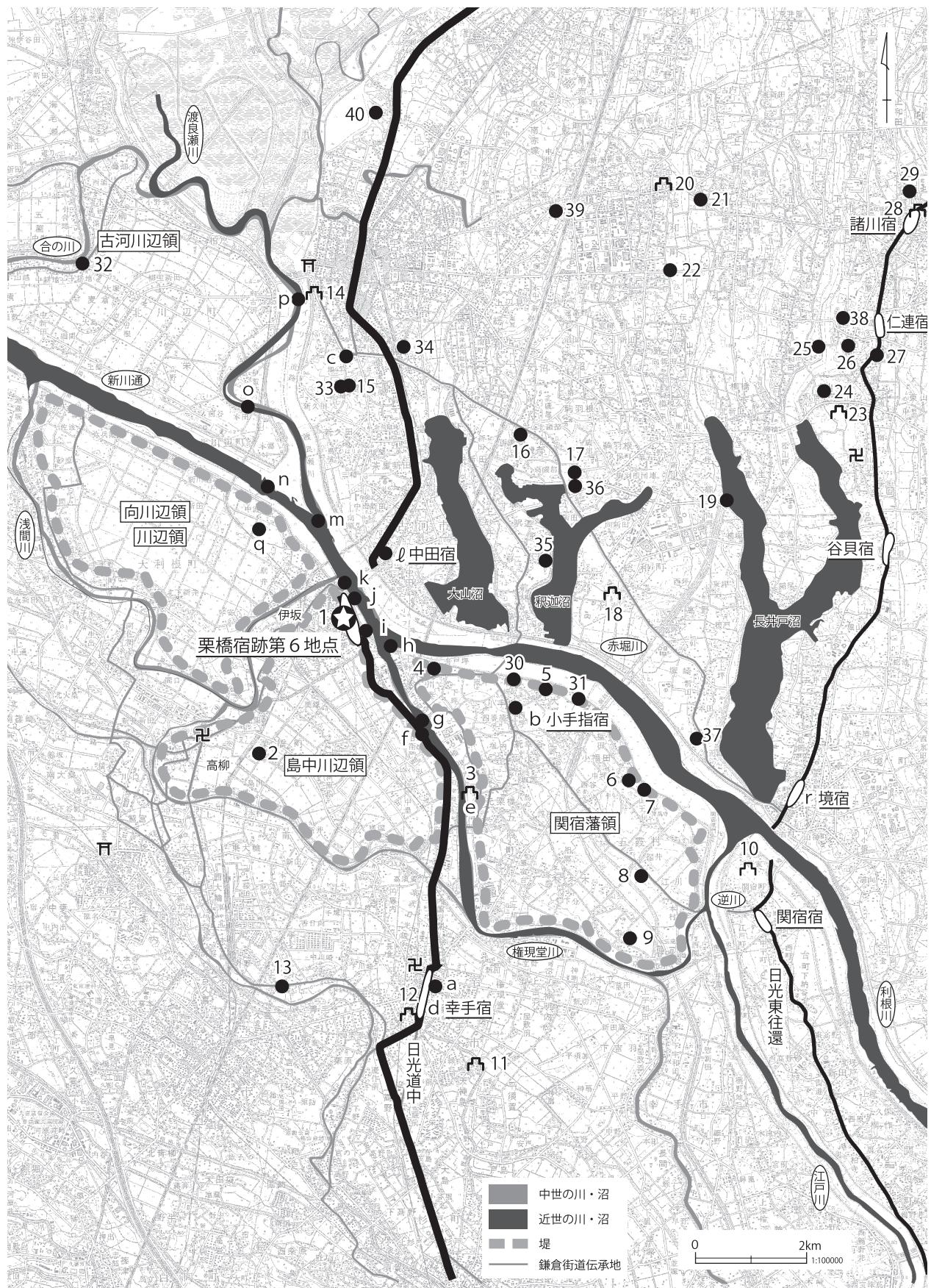
渡良瀬川、利根川の左岸には、現在大小の沼沢地が多く認められる。その多くは利根川改修以後の赤堀川の開削によって形成されたもので、本来は猿島台地を開析した中小河川による支谷であった。その縁辺部に古河公方入府とともに、足利成氏の重臣たちの城や館が造られたと考えられる。小堤城跡（20）、磯部館跡（16）、水海城址（18）等が知られるが、詳細についてはほとんど明らかでない。茨城県側の城館跡や周辺の中世遺跡については、既刊の『栗橋宿番士屋敷跡』や『栗橋宿跡I』（ともに埼玉県埋蔵文化財調査事業団2018）に詳しいので参照されたい。

（2）近世の栗橋とその周辺

利根川の改修

中世の古河を中心とした栗橋周辺の様相は、徳川家康の江戸入府によって一変する。

特に大きな影響を与えたのが、利根川改修事業、所謂利根川の東遷である。徳川幕府は、家康の関東入府後早々に利根川の改修に着手した。それまでの本流であった浅間川、会の川、古利根川の川筋から、新川通、赤堀川を開削して常陸川に結び、合わせて権現堂川を介して江戸川とつなぐ大



第3図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧（第3図）

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	栗橋宿本陣跡・栗橋宿跡	21	本田山遺跡	a	田宮町
2	佐間小草原遺跡	22	藏王遺跡	b	小手指宿
3	栗橋城址	23	東の門西の門城址	c	徳淑院
4	宿北・宿東遺跡	24	北山田北久保遺跡	d	幸手宿
5	釧迦新田遺跡	25	御領遺跡	e	道標
6	同所新田遺跡	26	大膳屋敷跡	f	一里塚
7	新田遺跡	27	関根豪族屋敷跡	g	勘平の渡し
8	桜井前遺跡	28	諸川西門城址	h	川妻の渡し
9	瀬沼遺跡	29	本田遺跡	i	下河岸跡
10	関宿城址	30	上原遺跡	j	栗橋河岸
11	天神島城址	31	殿山塚	k	房川の渡し
12	幸手城址	32	倚井陣屋遺跡	l	中田宿
13	渡辺氏屋敷跡	33	城地遺跡	m	本郷渡し
14	古河城址	34	石行塚遺跡	n	中渡し
15	鴻巣館跡	35	羽黒遺跡	o	鈴木の渡し
16	磯部館跡	36	釧迦才仏遺跡	p	古河の渡し
17	香取東遺跡	37	清水遺跡	q	旗井小学校
18	水海城址	38	新屋敷遺跡	r	境宿
19	向坪B遺跡	39	大塚遺跡		
20	円満寺城址（小堤城址）	40	野木宿遺跡		

規模な流路変更で、利根川東遷事業として知られている。その目的は、江戸を水害から守るためにいう治水が第一義とされてきた。また、古河城を合わせた江戸の北の防衛線とする説も知られている。最近では、「内川廻し」と呼ばれる内陸航路の確保、水田開発目的とする説も有力である。

栗橋周辺では、文禄3年（1594）忍城主松平忠吉の命を受けた忍藩家老小笠原三郎左衛門が羽生市上新郷で会の川を締め切ったのに端を発する。元和7年（1621）には、利根川と常陸川を結びつける意図のもとに旧大利根町佐波から旧栗橋町中渡までの新川通、五霞町川妻から境町長井戸への赤堀川が開削された。しかし、当初の赤堀川の掘削は失敗に終わり猿島郡釧迦沼にまでしか至らず、現在の五霞町域に甚大な被害をもたらした。その後、2度の拡幅、増掘（二番堀、三番堀）を経て、漸く承応3年（1654）に通水に成功した。銚子へ至る新たな利根川の主流路が形成されたのである。更に、天保9年（1838）に合の川と浅間川が完全に締め切られ、利根川の流れは新川通の流路

へと一本化され、現在に至っている。

利根川本流の開削、整備とは別に、天正4年（1576）の權現堂堤の築堤に始まる五霞町、幸手市域でも大規模な河川改修が行われた。赤堀川通水以前の利根川では、寛永18年（1641）に逆川が開削される。これにより常陸川と寛永12年（1635）から開削が進められていた江戸川が、関宿の北で繋がった。江戸川は、更に拡幅工事が進められ正保元年（1644）に完成し、前述の赤堀川三番堀の完成以前は、利根川、渡良瀬川両大河の水は、一部逆川を介して常陸川に注ぐものの、ほとんどはこの江戸川を流れていた。

このような利根川を中心とした河川改修の結果、前述の「内川廻し」の航路とともに、利根川上流域の上野、渡良瀬川上流域の下野との航路が確保され、北関東が江戸を中心とする経済圏の一部となつた。また、利根川、荒川両大河の河川改修は、埼玉平野に広大な新田開発をもたらし、航路の開発とともに、その経済効果は絶大であった。

更に、栗橋地区を含む島中川辺領は、外縁部に

囲堤が造られ河川の流路が固定されるとともに、領域全体が輪中となり、治水環境が整えられた。

日光道中と栗橋宿の成立

日光道中は、元の奥州街道のうち江戸・宇都宮間を含み込み成立したものと捉えられる。寛永13年（1636）に日光東照宮の造替が竣工し、徳川家光・家綱が盛んに社参を行うようになる頃には、日光道中としての整備も進んだと考えられる。一方、元栗橋は、利根川の河川改修による度重なる洪水が発生し、宿と房川渡しは荒廃した。そのため、栗橋宿の位置を現在地に移したようで、『栗橋町史』では、その時期を元和7年（1621）前後と想定している。なお、『新編武蔵風土記稿』では、慶長年中に池田鴨之介と並木五郎兵衛による開墾と伝え、明治45年の『栗橋町郷土誌』では、その時期を慶長19年としている。

寛永期に入ると「今栗橋」と「元栗橋」を区別した史料がある。また、宿内深廣寺の石造名号塔群の銘文には、承応3年（1654）7月までに建てられた8基が「新栗橋」とみえるが、同年8月以降に建てられた12基は「栗橋」とのみあり、「新栗橋」「今栗橋」が「栗橋」として定着していく過程が窺われる。

寛永元年（1624）には栗橋関所が開設され、明治2年（1869）に關所が廃止されるまで、245年間にわたり日光道中六番目の關所として機能した。

徳川幕府は、河川改修による舟運の整備と合わせて、陸路、五街道の整備を行った。日光道中は、江戸日本橋を起点に下野国坊中までの20宿、36里11町の街道である。県内では、草加、越ヶ谷、粕壁、杉戸、幸手、栗橋宿があった。栗橋の対岸の下総側には中田、古河があり、野木、間々田、小山、新田、小金井、石橋、雀宮、宇都宮、徳次郎、大沢、今市、鉢石を経て日光坊中に至る。

栗橋宿は、江戸から14里15町、幸手から2里3町で、江戸から7番目の宿である。対岸の中田宿と合宿で、栗橋町史に引かれている『日光道

中宿村大概帳』には、宿高689石余、宿往還の長さ15町13間余、宿町並10町30間、宿の家数404軒、本陣・脇本陣各1軒、旅籠屋25軒、人口1741人（男性869人、女性872人）と記されている。日光道中では規模は小さい宿場であるが、渡しを控える立地上、旅籠屋や茶店が多いのが特徴である。

また、文化文政期に編まれた『新編武蔵風土記稿』には「小名」として上町、中町、下町、三ツ俣、船戸、鍛冶町の六つの町名が記されている。このうち、栗橋宿の中心は北部の上町と船戸であり、主要な施設が集中していた。商店の多くも上町と船戸に集中し、南下するに従って農家の割合が多くなっていった。

栗橋宿跡は、当事業団が平成24年度から調査を継続している。これまでに、本陣跡、脇本陣を含む西本陣跡に加え、宿跡の9地点を調査し、調査面積は32,000m²に及ぶ。

合宿としての中田宿は、宿高456石余、宿往還の長さ12町18間余、宿町並4町50間、宿の家数69軒、本陣・脇本陣各1軒、旅籠屋6軒、人口403人（男性169人、女性234人）である。

栗橋宿と舟運

利根川では舟運による輸送が発達しており、栗橋近辺でも權現堂河岸と関宿河岸が古くから知られている。栗橋河岸は、近世当初の元禄年間には年貢米を江戸へ送る「津出し湊（河岸）」ではなかったが、明和8年（1771）には中里村の、天明期（1781～1789）には加須市域の水深村の津出しが行われ、近世中・後期にはその役割があった。栗橋町史に『武蔵国郡村誌』から作成した栗橋町域の明治初期の船の一覧が掲載されているが、その数610艘に上る。いかに栗橋区域が舟運と密接な生活を送っていたかが分かる。

この内、栗橋宿が有していた舟運に関わった所謂川船は、高瀬舟10艘、小高瀬舟2艘、似艦（にたりひらた）船8艘、屋形船17艘である。

江戸へ向かう下り船は大豆に代表される農産物

などを積み、空となった帰りの上り船には、塩、砂糖、干鰯、灰などの肥料、木綿、乾物、陶磁器などが積まれた。水揚げされた河岸場は、地域経済の要であった。

栗橋河岸には、房川渡しから堤沿いに続く舟戸町の船着き場と、やや下った利根川と権現堂川の分岐付近の下河岸があった。

栗橋関所では、船改め役を務める船問屋が船荷を改める「船改め」が行われていた。『栗橋関所史料一』によれば、船改めは享保年間（1716～1736）に下河岸で行われていた。しかし浅間山噴火（1783）の泥流の影響で、利根川の川筋が変化して下河岸に接岸できなくなり、舟戸町近辺に場所を移したとされている。従って、津出し湊や、江戸との川船の往来に利用されたのは舟戸町の河岸場と推定される。

近世の栗橋村

近世初頭では栗橋宿を含む井坂、松長、佐間、島川、広島、河原代、狐塚、中里、小右衛門の各村は幕府の蔵入地で、代官伊奈半十郎忠治によって支配されていた。伊奈氏の支配は関東諸国に及び、特に武藏国東部の低地開発を強力に推し進めたことで知られている。その結果、開発された広大な新田は伊奈氏の支配地として引き継がれていった。利根川東遷事業による新田開発もその一環とも言えるだろう。

元禄10年（1697）の所謂元禄の地方直しでは、高柳村、高柳新田は酒井対馬守、島平村は酒井監物、広島村は久津見斧太郎、河原代村は久津見斧太郎・榊原大膳の旗本知行へ支配替えが行われた。

加えて、松長、間鎌、間鎌新田、佐間、佐間新田、井坂の各村は、18世紀中葉の延享年間（1744～1748）、19世紀前半から中葉の文政年間から安政年間に徳川御三卿領への支配替えとなつた。

近世の周辺遺跡

栗橋周辺の近世遺跡は、日光道中と將軍の宿城である古河城を中心に展開する。

古河城（14）は、近世以降小笠原、松平、奥平、永井、土井、堀田、松平の多くの幕閣を含む歴代の城主によって、拡張、城下町の整備が行われた。特に、度々將軍の日光参詣の宿城となつたため、その都度、特別な手当金が支給され整備が進んだ。

利根川の東側は、利根川の河川改修以降も、この古河城を中心として遺跡が展開している。

旧総和町香取東遺跡（17）では18～19世紀の土壙（墓壙）、井戸跡、溝跡が検出された。南側に隣接する釈迦才仏遺跡（36、茨城県教育財団1998）には、南北11.4m、東西8.4m、高さ1.0mの不整隅丸方形を呈する近世後半の塚が造られた。

長井沼の奥になる本田山遺跡（21）は、中世に引き続き近世でも墓地として継続している。柳橋城の南側となる旧総和町向坪B遺跡（19、茨城県教育財団1986）からは近世の土壙、溝跡が検出され、土壙墓が含まれていると考えられる。長井沼東側の旧鎌倉街道は栃木県多功に通ずる日光東街道として、元和年間には整備されていたとされている。街道には仁連宿、谷貝宿が設けられた。仁連宿の北、諸川には中世から続く本田遺跡（29、技研測量設計株式会社2010）があり、17世紀後半を中心とする掘立柱建物跡、竪穴状遺構、地下式坑、土壙、墓壙、井戸跡、溝跡が検出された。

（3）近世から近代への栗橋

幕末の栗橋宿

幕末の19世紀中葉には、天保の飢饉に端を発する打ちこわし、慶應2年（1866）から始まる武州世直し一揆、元治元年（1864）の水戸浪士による天狗党の乱など、社会情勢が不安定になつた。栗橋でも、慶應4年（1868）羽生陣屋焼き払いに始まる打ちこわしが波及した。『足立家文書御関所日誌』には、9000人余りが宿内へ侵入し、名主良右衛門宅に放火し、仲町百姓弥平次宅、本陣池田由右衛門宅を打ちこわし、また関所へも押し入り、番士が関所から退去したとある。

明治2年2月には、葛飾県役所から関所廃止の通知が出された。番士四家は関所道具を栗橋宿へ預け、関所改めの廃止を各所に通知し、関所を引き払った。一方栗橋宿は、明治22年（1889）に町村制が施行され、北葛飾郡栗橋町となった。交通の要衝としての役割は引き継がれていった。

近代の栗橋地区

本陣池田家の池田鴨平は、明治新体制下において、葛飾県の組合取締役・勧農取締役方を務め、行政区画が埼玉県に移行すると、第八区区長となった。明治9年の明治天皇行幸に際しては、案内人を務めている。

交通網における大きな変化は、大宮～宇都宮間の鉄道敷設で、明治18年7月に栗橋駅までが開通する。当所、渡船連絡であった利根川の渡河も、翌年7月には鉄橋が架設された。一方、明治10年内国通運会社が東京深川から栗橋を経て、生井（栃木県小山市）まで蒸気船通運丸を就航させた。同13年には長島良幸が長島丸を、同35年には栗橋の廻船問屋古川平兵衛が古川丸を就航させるが、内国通運会社との競争に敗れ撤退している。その後、鉄道の発達により、舟運は衰退し、大正8年、内国通運も撤退している。

このころの栗橋町の様子は、明治35年（1902）に全国営業便覧発行社から刊行された『埼玉県営業便覧』（以下『営業便覧』）にみることができる。『営業便覧』には当時の栗橋町の家並みが収録さ

れており、旧日光道中の表通りには商家が連なり、回漕、運送業に関わる店が多いのも特徴である。明治31年に町の地主や商人による出資で開業した栗橋銀行や、明治33年開業の栗橋商業銀行、いずれも池田鴨平が設立に関わった栗橋学校（明治5年に私塾として開校）・淑徳女学館（明治22年）等、主要な施設が旧宿場内に設置されていたことが分かる。利根川沿いの船戸町には回漕業や料理店等が立ち並び、文豪田山花袋が度々訪れたという鯉料理店の稻荷樓（稻荷屋）も船戸町にあった。

近世の宿場町を骨子としつつ、近代化を遂げた栗橋町であったが、前代に引き続き水害・災害と直面することも多かった。明治43年の水害では冠水を逃れたが、それ以前の明治23年の水害では栗橋町の戸数の25%強が冠水したとされる。

明治33年からは、利根川の抜本的な改修計画（利根川改修計画）が始まり船戸・鍛冶町は河川敷となる。利根川における近代治水事業は以後、継続的に実施されている。

栗橋宿跡の利根川渡河地点という立地は、交通の要衝としての発展と、水害によるリスクが表裏一体の関係にあったと言えよう。

引用・参考文献については、紙数の都合上全てを挙げることができない。埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第448集『栗橋宿跡 I』の引用・参考文献一覧を参照されたい。

III 遺跡の概要

栗橋宿跡の調査は、首都圏氾濫区域堤防強化対策事業に伴って実施したものである。所在地は久喜市栗橋北二丁目である。

栗橋宿は、慶長年間に池田鴨之助、並木五郎平らが元栗橋から移住して開宿した宿場と伝わる。南北に走る日光道中を挟んで町屋が並んでいた。『日光道中宿村大概帳』には、宿高689石余、宿往還の長さ15町13間余、宿町並10町30間、宿の家数404軒、本陣・脇本陣各1軒、旅籠屋25軒、人口1741人（男性869人、女性872人）と記されている。

栗橋宿関連の発掘調査は、既に報告された平成24年の栗橋関所番士屋敷跡・栗橋宿跡第1地点に始まり、継続的に続けられ、範囲も広範囲に及ぶ。このため、調査区全体を網羅するように、大グリッドと小グリッドを組み合わせて方眼を組んでいる。詳細は凡例と第4図に示した。今回報告する栗橋宿跡第6地点は、大グリッドのD 6・D 7グリッドにまたがる。既に報告された栗橋宿本陣跡の町屋及び栗橋宿跡第1地点に隣接するエリアであり、日光道中から東におよそ40m離れた町屋の裏手に当たる場所に位置している。

発掘調査では、上下二面の遺構確認面を設定し、実施した。調査区南端は、既に報告されている第1地点で調査された吉田家水塚の真下に位置し、調査の都合上、水塚下第一・二面と設定し、遺構番号の先頭に「水塚下」を付した。都合標高は、上面の第一面で10.30～10.60m前後、下面の第二面で9.60m前後である。検出された遺構は、近世以降の建物跡20棟とその関連遺構（基礎状遺構5基・穴蔵1基）、を始め、硬化面範囲1箇所、埋設桶35基、井戸跡4基、杭列5条、溝跡16条、焼土遺構10基、土壙247基、砂範囲3箇所、ピット17基、遺物集中地点1箇所である。

第一面は幕末期頃の面と考えられ、堅固な造りの建物跡が杭列、溝跡によって区画された短冊形の区画に整然と並んで検出されている。杭列や溝跡は19世紀前半以降に機能していたものと考えられ、多くは現在の敷地境と一致する。日光道中に対して直交する敷地境が第一面の時期に整備され、現在まで引き継がれてきたことを示している。なお、砂範囲とした遺構は、調査時に遺構としての認識がなく、その堆積範囲を平面図に示したのみであった。しかし、その後の栗橋宿跡の調査及び既に報告された『栗橋宿本陣跡I』に掲載されている第447号土壙を始めとする砂のみが人為的に入れられた長方形の土壙が確認されたため、同様の遺構と考えられるこれらを砂範囲として報告する。

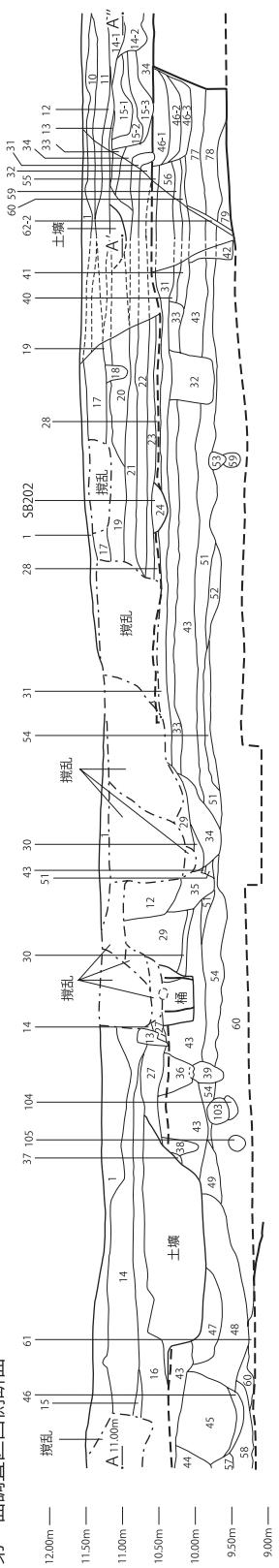
第二面は18世紀後半を中心に利用されたと考えられる面で、明確な区画施設等は少なく、遺構も土壙が主体であった。第一面の敷地境を跨ぐ位置にも土壙があり、第一面と第二面の各時期で敷地が若干変動している可能性が高い。この点については、既に報告されている栗橋宿跡第3地点、栗橋宿本陣跡でも指摘されている。ただし、第二面でも東西に沿って土壙の集中域が散見され、ある程度の区画意識があったと考えられる。

基本土層は、D 6-c 8～D 6-g 10グリッド付近の調査区西壁、D 6-e 9～D 7-e 1グリッド付近の調査区東西壁、D 7-f 8グリッド付近の調査区東壁の3箇所で記録を行い、東壁は更に2箇所に分けて記録をとった。日光道中側である西壁は大きく人為的な手が加えられており、整地層や調査された遺構以外にも遺構と考えられる掘り込みが多く見られる。35・79、71～73、95～101、103～105層は杭列の痕跡の可能性が高い。調査区を分断する東西壁は、概ね水平の整地層が多く見られるが、西壁より遺構の密度が低く、東側へ行くほど遺構の密度は薄くなる印象である。

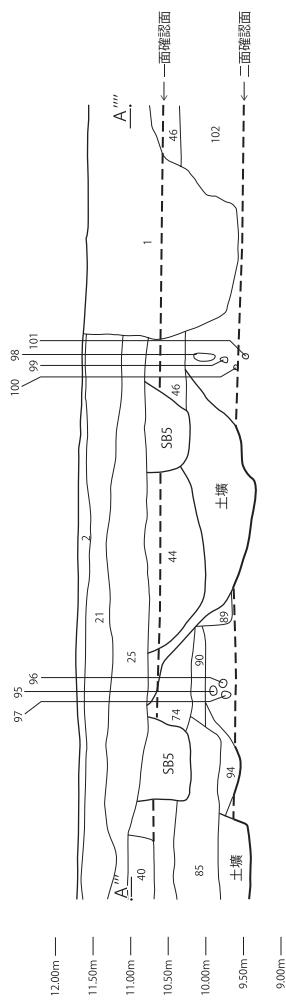
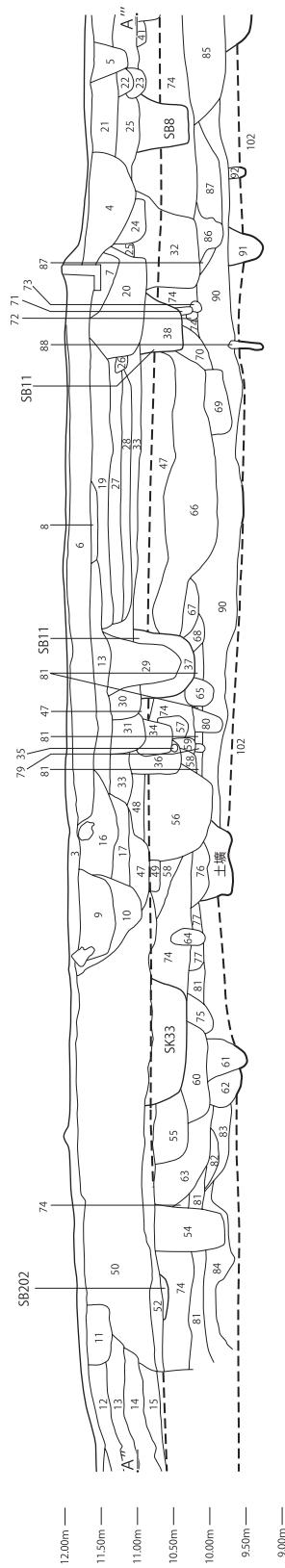


第4図 遺跡位置図

第一面調査区西側断面



第5図 基本土層西壁 (1)



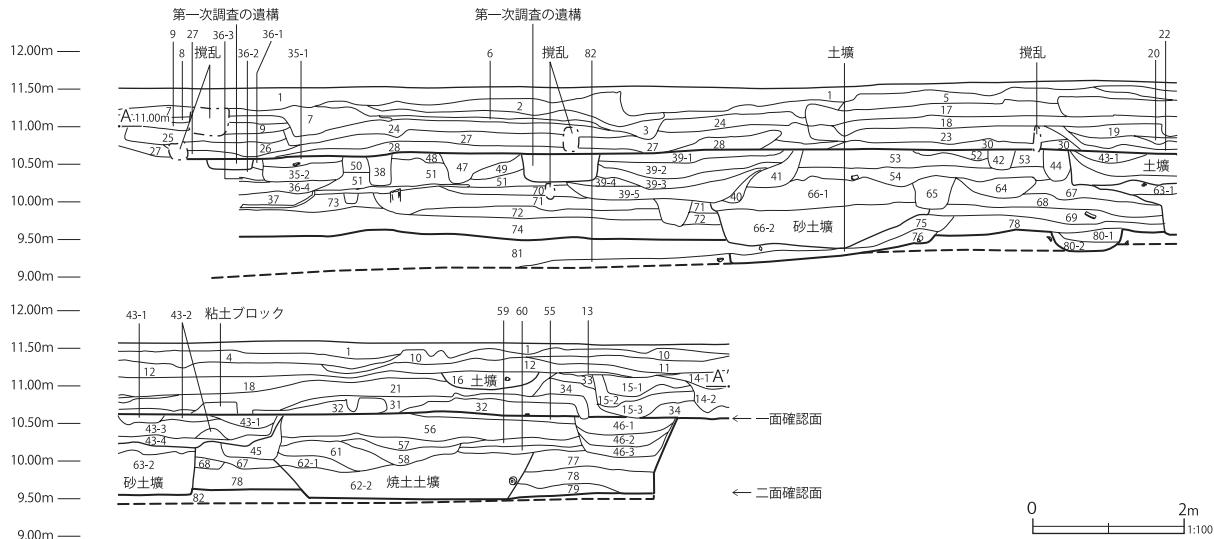
0 2m 1:100

基本土層① 調査区西側断面

1 褐色土	砂・瓦礫多量 陶器片含む しまり弱い 重機による搅乱か
2 暗褐色土	表土 炭化物・焼土の塊多量 ややしまりあり
3 暗褐色土	表土 磯(φ1～3cm)多く含む しまり強い 粘性なし
4 褐色土	磯(φ1cm程度)多量に・ガラス片・レンガ片・貝殻等含む しまり強い 粘性なし 現代の搅乱
5 暗褐色土	塙と管設置のための掘り込み埋土 しまり強い 粘性なし
6 橙褐色土	碎石(φ1cm程度)多量に含む 間隙多い しまり強い 粘性なし
7 青灰色碎石層	(φ1cm程度)の細かい碎石である 下位には拳大の磯含む コンクリート障壁設置に伴う掘り方 しまり強い 粘性なし
8 褐色土	黒色土をまだらに含む しまり強い 粘性なし
9 暗褐色土	褐色土をまだらに・磯(φ5cm程度)・コンクリートブロック・下位には碎石含む 間隙多い しまり強い 粘性なし
10 暗褐色土	黄褐色土をまだらに・磯(φ1～2cm) 少量・レンガ含む しまり強い 粘性なし
11 灰褐色土	磯(φ20cm程度)多量に含む しまり強い 粘性なし
12 黄褐色土	しまり強い 粘性なし
13 暗褐色土	小磯(φ1～2cm)含む しまり強い 粘性なし 東西断面の14-1に対応
14 褐色土	(φ2～3cm)の焼土及び炭化物ブロック状に含む 粘性なし 第6地点東西断面の14-2層に対応
15 褐色砂層	炭化物(φ3～8mm)微量含む しまりなし 粘性なし 第6地点東西断面の34層に対応
16 暗褐色土	人頭大の磯・土管含む しまり強い 粘性なし
17 暗褐色土	土管含む しまり強い 粘性なし
18 暗黄褐色土	磯少量・塙・瓦片含む しまり強い 粘性なし
19 黄褐色土	磯少量・炭化物(φ1cm程度)・瓦片含む しまり強い 粘性なし
20 暗黄褐色土	磯・炭化物(φ1cm程度)多く・瓦片少量含む しまり強い 粘性なし
21 暗黄褐色土	黄褐色土ブロックが下位に多量・白色磯(φ5mm程度)少量・炭化物微量含む 焼土や炭化物をやや多く含む部分がある しまりやや強い 粘性なし
22 暗褐色土	炭化物(φ5mm程度)少量含む 土管設置のための掘り込み埋土 しまり強い 粘性なし
23 灰褐色土	橙色土ブロック状に多く・炭化物(φ5mm程度)少量含む しまり強い 粘性なし
24 暗褐色土	橙色の焼土や炭化物多量・被熱した瓦片少量含む しまりやや強い 粘性なし
25 黄褐色土	整地の可能性有り しまり強い 粘性なし
26 暗黄褐色土	黄色土ブロック状に多量・炭化物微量含む しまり強い 粘性なし
27 黄褐色土	やや砂質強い 炭化物(φ5mm程度)微量含む しまり強い 粘性なし
28 暗褐色土	27層と似るが27層より炭化物の含有量多い しまり強い 粘性なし
29 褐色土	炭化物(φ1cm程度)少量・瓦片・石膏ボード含む しまりやや弱い 粘性なし
30 黄褐色土	炭化物(φ2～3mm)微量含む 磯少量混じる しまり強い 粘性なし
31 暗褐色土	炭化物(φ1cm程度)少量含む しまり強い 粘性なし
32 暗黄褐色土	白色粒(φ1mm以下)微量・炭化物(φ5mm程度)少量含む しまり強い 粘性なし
33 黄褐色土	やや砂質 炭化物(φ5mm程度)微量含む しまり強い 粘性なし
34 暗灰色土	炭化物(φ2～3mm)少量・瓦片含む しまり強い 粘性なし
35 暗灰色土	杭の抜き取り跡である しまり強い 粘性なし
36 暗褐色土	砂をやや多く含む 鉄分沈着目立つ しまりやや弱い 粘性なし
37 暗褐色土	炭化物(φ5mm程度)微量含む しまり強い 粘性なし
38 暗灰色土	炭化物(φ5mm程度)微量含む しまりやや弱い 粘性なし
39 暗黄褐色土	炭化物(φ1cm程度)・焼土ブロック多く含む しまり強い 粘性なし
40 暗黄褐色土	炭化物(φ2～3mm)少量含む しまり強い 粘性なし
41 暗黄褐色土	白色粒(φ2～3mm)少量・瓦片多く含む しまり強い 粘性なし
42 暗褐色土	部分的に黄褐色土・(φ1cm程度)の磯(円磯)多量含む しまり強い 粘性なし 遺構
43 暗褐色土	部分的に黄褐色土・(φ1cm程度)の磯(円磯)多量含む しまり強い 粘性なし
44 灰褐色砂	100%砂層 しまり弱い 粘性なし
45 暗褐色土	炭化物多く・貝殻等の現代ごみ含む 鉄分沈着あり しまり弱い 粘性なし
46 灰褐色土	炭化物(φ5mm程度)微量含む しまりやや弱い 粘性なし
47 灰褐色土	シルトブロック・炭化物(φ5mm程度)微量含む しまり強い 粘性なし
48 灰褐色土	炭化物(φ2～3mm)微量含む しまりやや強い 粘性なし
49 橙褐色土	灰色シルトブロック多く・炭化物(φ5mm程度)微量含む 鉄分沈着有り しまり強い 粘性なし
50 暗褐色土	炭化物と灰多く・焼土微量・人頭大磯多量(積まれたようである)・瓦片多く含む 上層にガラス瓶入る しまり強い 粘性やや弱い

51 暗褐色土	黄橙ブロック・焼土少量・磯(φ5cm程度)多量 (SK33)・炭化物(φ1cm大)多量・鉄製品・陶磁器・瓦片・ガラス瓶含む しまり・粘性やや弱い
52 暗黄褐色土	炭化物・焼土微量含む しまり強い 粘性なし
53 黄灰色砂混じりシルト	磯多く・瓦片(小破片)多く含む しまり非常に強い 粘性なし SB202
54 褐灰色砂層	灰色シルトブロック少量・石・瓦片多く・陶磁器少量含む しまりなし 粘性なし
55 褐灰色砂層	しまりなし 粘性なし
56 褐灰色砂層	しまりなし 粘性なし
57 暗褐色土	炭化物(φ5mm程度)微量・瓦片少量含む 杭穴 鉄分沈着有り しまりやや強い 粘性やや弱い
58 黄灰色土	炭化物(φ2～3mm)微量含む しまり強い 粘性なし
59 褐灰色土	炭化物(φ2～3mm)・瓦片少量含む 杭穴 しまり強い 粘性やや弱い
60 暗褐色土	炭化物(φ5mm大)少量含む 鉄分沈着有り しまりやや強い 粘性やや弱い
61 暗褐色土	炭化物(φ5mm大)少量・陶器片含む 鉄分沈着有り しまり弱い 粘性やや弱い
62 暗褐色土	黄褐色シルトブロック多量・炭化物(φ1cm大)微量含む しまり・粘性弱い
63 灰黄褐色土	炭化物(φ2～10mm)・瓦片・石材・陶器・磁器少量含む しまりやや強い 粘性弱い
64 暗褐色土	炭化物(φ2～10mm)少量含む 杭穴 しまり弱い 粘性やや弱い
65 橙褐色砂層	炭化物(φ2mm大)少量含む 鉄分沈着有り しまりやや弱い 粘性なし
66 暗灰褐色砂層	炭化物(φ5mm大)少量含む 鉄分沈着有り しまりなし 粘性なし
67 暗灰褐色土	灰色シルトブロック多量・炭化物(φ5mm大)微量含む しまりやや弱い 粘性やや弱い
68 灰褐色砂層	炭化物(φ5mm大)・焼土微量含む しまりやや強い 粘性なし
69 暗灰褐色土	炭化物(φ2～10mm)多く含む 鉄分沈着有り しまり・粘性やや弱い
70 灰褐色土	炭化物(φ2～10mm)微量含む 鉄分沈着有り しまり弱い 粘性やや弱い
71 暗褐色土	しまり強い 粘性弱い 杭跡
72 暗褐色土	しまり強い 粘性弱い 杭跡
73 暗褐色土	炭化物(φ2mm大)少量含む 杭跡 しまり強い 粘性弱い
74 暗灰褐色砂質土	白灰色シルトブロック(φ10mm大)・炭化物(φ2～5mm大)少量含む 整地層 しまり強い 粘性なし
75 暗褐色砂質土	白灰色シルトブロック(φ10mm大)少量・炭化物(φ2～5mm大)微量・土器片含む しまりやや強い 粘性弱い
76 黄褐色土	白灰色シルトブロック(φ1cm大)少量・炭化物(φ5mm大)微量含む しまりやや弱い 粘性弱い
77 黄褐色土	白灰色シルト多量含む しまりやや強い 粘性弱い
78 黒褐色炭化物層	焼土ブロック(φ5～20mm)多量・不明鉄製品・磁器片 少量含む しまりなし 粘性なし
79 暗褐色土	鉄分沈着有り 杭穴 しまりやや弱い 粘性弱い
80 暗褐色土	炭化物(φ2～10mm)少量含む 鉄分沈着有り しまり弱い 粘性やや強い
81 黄灰色砂層	鉄分沈着有り しまりやや弱い 粘性なし 第6地点東西断面の77層に対応
82 暗褐色土	炭化物(φ2～10mm)少量含む しまり弱い 粘性やや強い
83 黄褐色土	炭化物(φ5mm大)少量・焼土(φ2mm大)微量含む しまりやや弱い 粘性やや強い
84 褐色土	炭化物(φ3～5mm)・焼土(φ5～15mm)多量含む しまり強い 粘性強い 第6地点東西断面の78層に対応
85 灰色砂層	100%砂層 しまり非常に弱い 粘性なし
86 黄褐色砂質土	しまりやや強い 粘性弱い
87 褐灰色土	炭化物(φ5mm大)・土器・陶器片少量含む しまりやや弱い 粘性やや弱い
88 杭	鉄分沈着有り しまりやや弱い 粘性なし
89 暗褐色土	炭化物(φ2mm大)微量・陶器片含む しまり弱い 粘性やや強い
90 暗褐色土	炭化物(φ2～10mm)少量・焼土(φ2mm大)微量含む しまりやや弱い 粘性やや強い
91 暗褐色土	炭化物(φ5mm大)・陶器片少量含む しまりやや弱い 粘性やや強い
92 暗褐色土	黄褐色砂質土多く含む 杭穴 しまりやや弱い 粘性やや弱い
93 暗褐色砂層	100%砂層 しまりなし 粘性なし
94 暗黄褐色土	炭化物(φ5mm大)微量含む しまり弱い 粘性やや強い
95 暗灰色土	鉄分沈着有り しまりやや強い 粘性やや弱い 杭跡
96 暗灰色土	鉄分沈着有り しまりやや弱い 粘性やや弱い 杭跡
97 暗灰色土	鉄分沈着有り しまりやや弱い 粘性やや弱い 杭跡
98 黑褐色土	しまり・粘性弱い 杭跡
99 黑褐色土	しまり・粘性弱い 杭跡
100 黑褐色土	しまり・粘性弱い 杭跡
101 黑褐色土	しまり・粘性弱い 杭跡
102 暗灰褐色土	焼土(φ5～10mm)微量含む しまり強い 粘性やや強い 第6地点東西断面の79層に対応
103 暗褐色土	しまり強い 粘性やや弱い
104 褐灰色砂層	しまりなし 粘性なし
105 褐灰色砂層	しまりなし 粘性なし

第6図 基本土層西壁 (2)

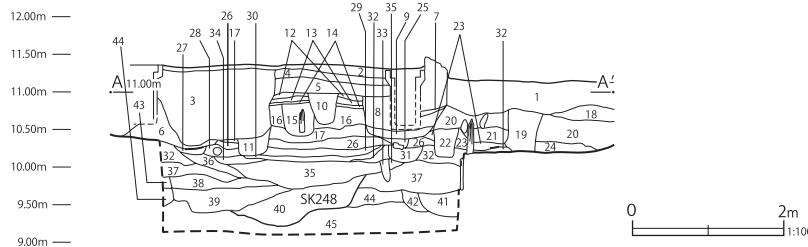


栗橋第6地点 東西基本土層（北側と道路部分の境界線）

1	黒褐色土	表土層 コンクリート片・瓦・礫等が多量混在
2	暗黄褐色土	しまり強い 全体硬化
3	黒褐色土	炭化物（ $\phi 5 \sim 15$ mm）多量 瓦片混在 しまり強い 全体硬化
4	褐色土層	極めて固い層 円礫（ $\phi 1 \sim 5$ cm）及び凝灰岩の碎片（ $0.5 \sim 1$ cm）含む 建物基礎の一部か
5	黄褐色土	小礫（ $\phi 1 \sim 2$ cm）混在 炭化物（ $\phi 3 \sim 5$ mm）多量 しまり強い
6	淡黄褐色土	極めて固い層 粘質土
7	黄褐色土	炭化物（ $\phi 5 \sim 8$ mm）多量 しまり強い やや粘性あり
8	暗黄褐色土	極めて固い層 小礫（ $\phi 1 \sim 2$ cm）混在 しまり強い
9	暗褐色土	小礫（ $\phi 1 \sim 3$ cm）若干混在 しまり強い
10	暗褐色土	小礫（ $\phi 1$ cmくらい）若干含む しまり強い
11	暗黄褐色土	炭化した木質・炭化物（ $\phi 2 \sim 5$ mm）多量 しまり強い
12	黒色土層	炭化材片（ $\phi 5 \sim 10$ mm）主体層
13	黄褐色粘土層	しまり強い 若干粘性あり
14-1	暗褐色土	小礫（ $\phi 1 \sim 2$ cm）混在 挖り込み
14-2	褐色土	焼土・炭化物が $2 \sim 3$ cmのブロック状に多量混在 挖り込み
15-1	暗褐色土	砂量多量 炭化物（ $\phi 3 \sim 8$ mm）多量混在 挖り込み
15-2	灰褐色土	焼土・炭化物がブロック状に混在 しまり強い 挖り込み
15-3	灰褐色砂層	焼土ブロック（ $\phi 2 \sim 3$ cm）若干混在 挖り込み
16	暗褐色土	しまり強い 砂混在 炭化物（ $\phi 5 \sim 8$ mm）多量 土壌
17	黄褐色土	小礫（ $\phi 1$ cm前後）少量 炭化物（ $\phi 3 \sim 8$ mm）含む しまり強い
18	暗黄褐色土	粘質土 固くしまる 全体に鉄分が縞状に混在
19	黄褐色粘質土層	鉄分縞状に混在 しまり強い 粘質土
20	暗褐色土	極めて固い層 かなり硬化している
21	灰褐色土	炭化物（ $\phi 5 \sim 8$ mm）少量 しまり強い
22	灰黒色土	炭化物（ $\phi 8 \sim 15$ mm）多量 しまり強い 粘性あり
23	黄褐色土	炭化物（ $\phi 8 \sim 10$ mm）多量 瓦礫少量 しまり強い
24	暗灰褐色土	鉄分多量 炭化物（ $\phi 3 \sim 5$ mm）少量 しまり強い
25	淡黄褐色土	粘質土 鉄分多量 しまり強い
26	褐色土	陶器の小片混在 しまり強い 粘性あり
27	黄褐色土	炭化物（ $\phi 5 \sim 10$ mm）多量混在 粘質土
28	灰褐色土	瓦礫多量混在 下部に鉄分が薄く堆積 しまり強い
29	暗灰褐色土	しまり強い やや粘性あり
30	褐色土	砂多量 しまり強い
31	褐色土	極めて固い層 焼土ブロック（ $\phi 2 \sim 3$ cm）少量混在
32	灰褐色砂層	炭化物粒子微量
33	明褐色砂層	鉄分少量
34	褐色砂層	炭化物（ $\phi 3 \sim 8$ mm）少量混在
35-1	灰褐色土	瓦礫（ $\phi 3 \sim 5$ cm）少量混在 しまり強い
35-2	暗褐色土	木片多量 瓦片多量混在
36-1	黄褐色土	固くしまった土 鉄分多量
36-2	灰黄色粘土層	砂質土少量混在
36-3	灰黄色砂層	シルトブロック（ $\phi 2 \sim 5$ cm）混在
36-4	灰褐色土	瓦片主体層
37	淡灰褐色土	下部に板状木質
38	暗褐色土	やわらかい土 小礫（ $\phi 1$ cm）少量混在 鉄分多量
39-1	灰褐色土	下部に木質（厚さ約4～6 cm） 土壌か
39-2	暗褐色土	小礫多量混在 全体に腐食木質混在 土壌か
39-3	暗黄褐色土	腐食木片混在 やや粘性あり 土壌か
39-4	灰褐色土	貝殻片多量 やや粘性あり 土壌か
39-5	暗褐色土	瓦片・腐食木質多量混在 しまり弱い 土壌か
40	灰褐色土	砂多量 しまり弱い
41	黒褐色土	瓦片主体層 土壌か
42	暗褐色土	ピット状の掘り込み

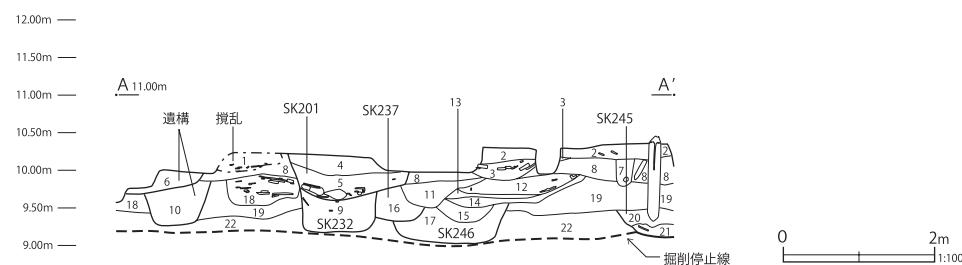
43-1	黒灰色土	数か所にみられる浅い凹み 土壌
43-2	茶褐色土	鉄分が付着し極めて固い層 土壌
43-3	暗黄褐色土	しまり強い 土壌
43-4	灰褐色土	下部及び側面に3～6cmの厚さで腐食木質残存 土壌
44	黒褐色土	柱状の掘り込み
45	暗褐色土	底部に粘土で固められた木質がみられる 建物跡か しまり強い
46-1	褐色砂層	シルトブロック（ $\phi 2 \sim 3$ cm）混在 小礫（ $\phi 2 \sim 3$ cm） 少量混在
46-2	黄褐色土	かなり良好固まつた土 やや粘性あり
46-3	黄褐色砂層	下部に腐食木片が薄く堆積
47	灰褐色土	しまり強い
48	黄褐色砂層	比較的やわらかい土 鉄分多量
49	灰褐色砂層	鉄分少量
50	淡黄褐色土	鉄分多量 固くしまった土
51	黄褐色砂層	100%砂
52	灰褐色土	焼土粒子（ $\phi 3 \sim 5$ mm）少量混在 固くしまった土
53	褐色土	焼土（ $\phi 3 \sim 5$ mm）少量混在 しまり強い
54	暗黄褐色土	鉄分僅かに混在 よく固められた土
55	灰褐色土	瓦片・小礫（ $\phi 2 \sim 3$ cm）少量混在 しまり強い
56	淡黄褐色土	砂多量 しまり強い
57	黄褐色粘土	しまり強い 粘性あり
58	灰褐色土	焼土・炭化物（ $\phi 5 \sim 5$ mm）少量 しまり強い 粘性あり
59	暗褐色土	焼土（ $\phi 6 \sim 10$ mm）・炭化物（ $\phi 3 \sim 8$ mm）多量混在 しまり強い
60	褐色土	砂やや混在 小礫（ $\phi 1 \sim 2$ cm）僅かに混在 しまり強い
61	暗褐色土	焼土・炭化物 しまり強い
62-1	暗黃褐色土	焼土・炭化物 焼土土壌
62-2	焼土・炭化物の層	竹炭等も混在 焼土土壌
63-1	灰黄色砂	暗黄褐色土（固い） 遺物なし 砂土壌
63-2	灰褐色砂層	100%砂 遺物なし 砂土壌
64	砂層	鉄分多量 整地層の凹地に堆積したものか
65	灰褐色土	比較的やわらかい 何らかの掘り込みか
66-1	黄褐色砂層	100%砂層 若干鉄分含む 整地層の凹み
66-2	暗灰色砂層	100%砂層
67	暗黄褐色土	炭化物（ $\phi 3 \sim 5$ mm）多量 しまり強い 粘性あり
68	灰褐色土	しまり強い やや粘性あり
69	暗褐色土	鉄分多量 かなり硬化している しまり強い やや粘性あり
70	灰褐色土	しまり強い やや粘性あり
71	灰褐色土層	炭化物（ $\phi 3 \sim 5$ mm）若干混在 しまり強い やや粘性あり
72	淡黄褐色土層	しまり強い 粘質土
73	灰色粘土層	炭化物（3から5 mm）少量 しまり強い
74	灰褐色砂層	縞状に鉄分堆積
75	黄褐色土	砂質土 かなり良好固められている
76	灰褐色土	炭化物（1～1.5 cm）多量混在 粘性あり
77	黄褐色砂層	鉄分多量
78	褐色土層	焼土（ $\phi 5 \sim 15$ mm）多量 炭化物（ $\phi 3 \sim 5$ mm）多量 良好に固められた土 粘性あり
79	暗黄褐色土	焼土（ $\phi 5 \sim 10$ mm）僅かに混在 しまり強い 粘性あり
80-1	灰褐色土	鉄分多量 やや粘性あり 土壌か
80-2	暗褐色土	腐食木片多量に混在 土壌か
81	灰褐色砂層	粘質土混在 74層に比べ粒子が粗い
82	暗褐色粘土層	炭化物（ $\phi 5 \sim 8$ mm）若干混在 しまり強い 粘性あり

第7図 基本土層東西壁



基本土層③ 道路部分調査区東壁 (トレンチ 201 東壁)

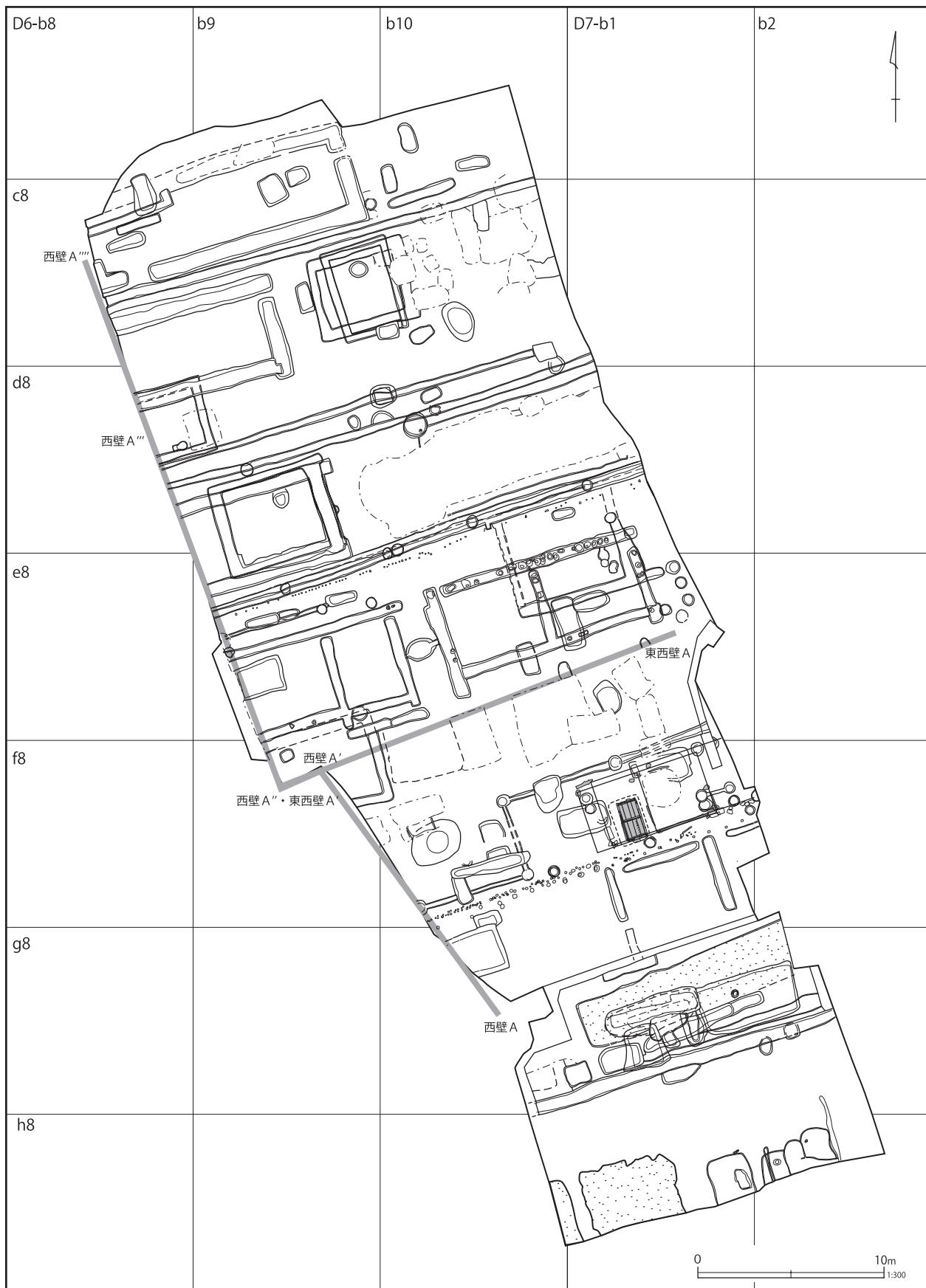
1 褐色砂混じりシルト	コンクリートの塊や瓦片・レンガ多量 磁器片少量 しまり非常に強い 粘性なし	27 暗灰色シルト	炭化物 ($\phi 1 \sim 2 \text{ mm}$) 微量含む しまり非常に強い 粘性なし
2 補装用アスファルト		28 暗灰色シルト	鉄分の沈着目立つ しまり非常に強い 粘性なし
3 褐色土	($\phi 1 \sim 3 \text{ cm}$) の礫や碎石多量 しまり弱い 粘性なし	29 灰色粘土	炭化物 ($\phi 5 \text{ mm}$ 程度) 微量 しまり非常に強い 粘性弱い
4 乳白色碎石層	純碎石層 しまり非常に強い 重機で突き固められたとみられる 粘性なし	30 暗灰色シルト	腐植土多く含む しまりやや弱い 粘性弱い
5 青灰色碎石層	100%碎石層 しまり非常に強い 重機で突き固められたとみられる 粘性なし	31 褐色シルト	炭化物 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$) 微量含む 鉄分の沈着目立つ しまり強い 粘性弱い
6 黄褐色砂混じりシルト	円礫 ($\phi 2 \text{ cm}$ 程度) 多量 しまり非常に強い 粘性なし	32 暗灰色シルト	鉄分の沈着目立つ しまり強い 粘性やや強い
7 青灰色碎石層	純碎石層 しまり非常に強い 粘性なし	33 褐色シルト	炭化物 ($\phi 1 \text{ mm}$ 程度) 微量含む 鉄分の沈着あり しまり弱い 粘性弱い
8 褐色シルト	しまり・粘性弱い	34 暗灰色シルト	炭化物 ($\phi 1 \text{ mm}$ 程度) 少量・砂を少量含む しまり非常に強い 粘性弱い
9 青灰色碎石層	純碎石層 しまり強い 粘性なし	35 暗褐色土	灰色粘土ブロック ($\phi 3 \text{ cm}$ 程度) 層中に多く・炭化物多く含む しまり弱い 粘性なし
10 褐色シルト	褐色粘土ブロック多量 しまり強い 粘性なし	36 暗黄灰色シルト	炭化物微量含む 鉄分の沈着あり しまり強い 粘性弱い
11 黄灰色粗砂層	碎石 ($\phi 1 \sim 3 \text{ cm}$) わずかに含む しまり強い 粘性なし	37 褐色砂混じりシルト	砂を多く・炭化物 ($\phi 1 \sim 2 \text{ mm}$) 微量含む しまり非常に強い 粘性なし
12 黒褐色シルト	旧表土の可能性有り しまり非常に強い 粘性なし	38 暗灰色シルト	炭化物 ($\phi 1 \text{ mm}$ 程度) 微量含む しまり弱い 粘性やや強い
13 黄灰色シルト	灰色粘土ブロック多量 しまり強い 粘性弱い	39 暗褐色シルト	粘性やや強い 瓦片や木屑 (桶の部材や板材) 多量に含む しまり弱い 粘性やや強い
14 暗灰色シルト	旧表土の可能性有り しまり非常に強い 粘性なし	40 暗褐色土	砂やや多く・炭化物 ($\phi 1 \sim 2 \text{ mm}$) 多く・瓦片少量含む しまり弱い 粘性やや強い
15 黄褐色シルト	灰白色粘土ブロック多量・炭化物 ($\phi 1 \sim 5 \text{ mm}$) 少量 しまり非常に強い 粘性なし	41 暗褐色シルト	40層はSK248の埋土である 灰色粘土ブロック状に多量に・炭化物 ($\phi 1 \sim 2 \text{ mm}$) やや多く含む しまりやや弱い 粘性強い
16 暗灰色シルト	砂多く・炭化物 ($\phi 1 \sim 5 \text{ mm}$) 下位に多量 鉄分の沈着有り しまり非常に強い 粘性なし	42 暗灰色砂混じりシルト	* (道路の杭列 201 の土層で使用) 炭化物 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$) 微量含む しまりやや弱い 粘性やや強い
17 黄灰色砂層	純砂層 しまり非常に弱い 粘性なし	43 暗灰色砂混じりシルト	しまり強い 粘性やや強い 砂多く・炭化物 ($\phi 1 \sim 5 \text{ mm}$) 多く含む
18 黄灰色砂層	純砂層 しまり非常に弱い 粘性なし	44 暗黄灰色シルト	しまり強い 粘性やや強い 純砂層 しまり弱い 粘性なし
19 杭の抜き取り跡	鉄分の沈着目立つ しまり強い 粘性なし	45 暗黄灰色砂	
20 黄灰色シルト	鉄分の沈着目立つ しまり強い 粘性なし		
21 暗灰色シルト	砂多量 鉄分沈着有り しまり非常に強い 粘性なし		
22 黄灰色シルト	しまり非常に強い 粘性なし		
23 灰色シルト	しまり非常に強い 粘性なし		
24 黄灰色砂層	しまり非常に弱い 粘性なし		
25 黄灰色土	しまり弱い 粘性やや強い		
26 灰色粘土	鉄分の沈着目立つ しまり非常に強い 粘性弱い		



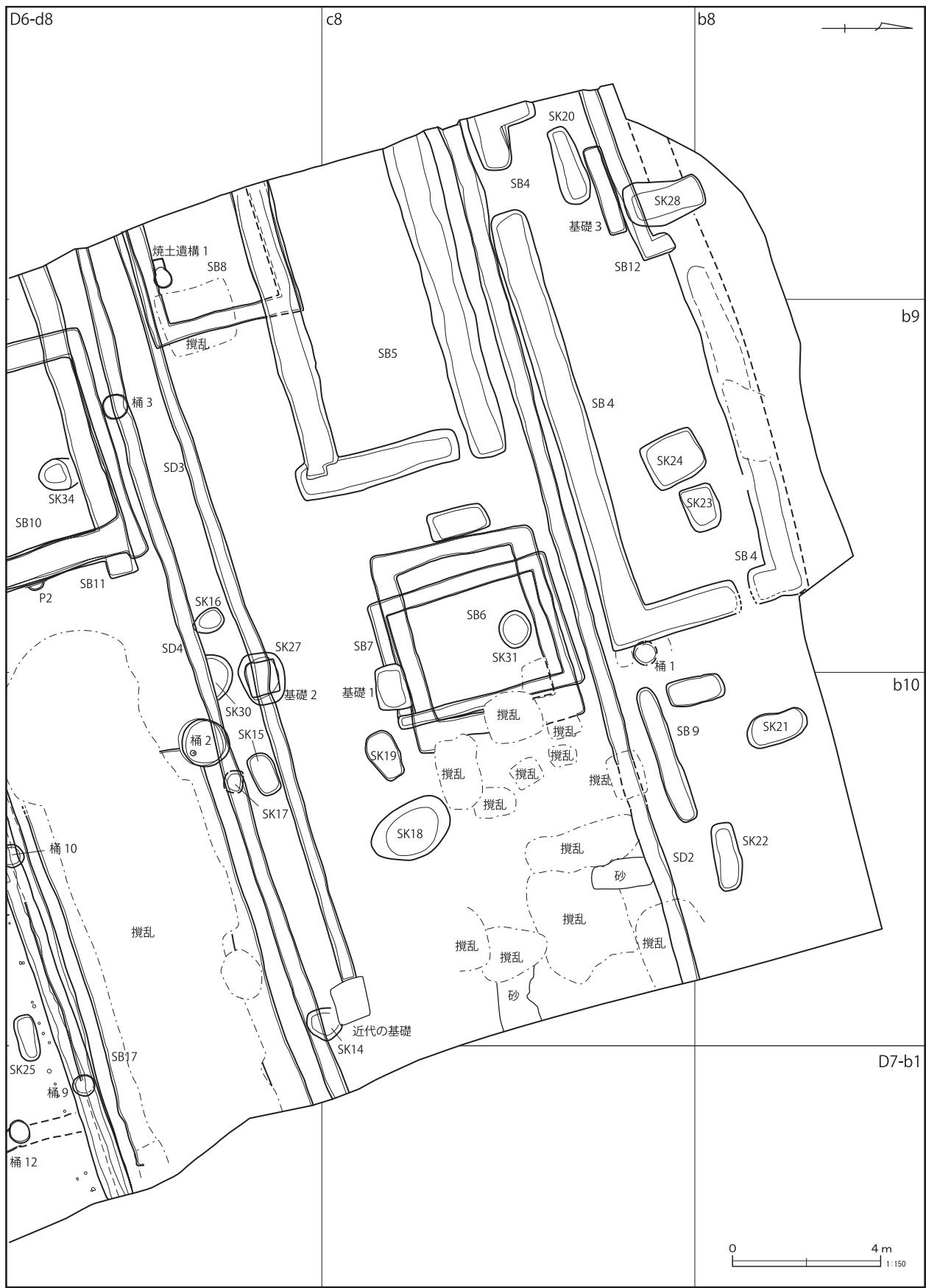
基本土層④ 道路部東壁下段断面

1 暗褐色土	空隙多い 瓦片や現代遺物 (プラスチック片) 含む しまり・粘性弱い 搅乱
2 灰褐色シルト	暗褐色粘土ブロック ($\phi 1 \text{ cm}$ 程度)・炭化物 ($\phi 5 \text{ mm}$ 程度) 多量・瓦片少量 整地層鉄分沈着 しまり強い 粘性弱い
3 灰褐色シルト	炭化物 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$) 少量・木屑・瓦片多量 しまり強い 粘性弱い 遺構
4 暗褐色シルト	しまり強い 粘性弱い 黄灰色シルトブロック多量・炭化物 ($\phi 5 \text{ mm}$ 程度) 少量 しまり強い 粘性弱い
5 暗褐色シルト	木屑 (板材や柱状材) 多量・瓦片少量 しまりやや弱い 粘性弱い SK201
6 暗褐色シルト	炭化物 ($\phi 1 \sim 3 \text{ cm}$) 多量・空隙多い しまり・粘性弱い 遺構
7 灰褐色砂質シルト	炭化物 ($\phi 5 \text{ mm}$ 程度)・瓦片・陶器片少量 鉄分沈着部分的に認められる しまりやや弱い 粘性弱い 遺構
8 灰褐色砂質シルト	しまりやや強い 粘性弱い 断面全体に認められ整地層と考えられる 有機物が腐った黒褐色土と暗褐色シルトが互層となっている 針金が含まれる しまり軟弱 粘性弱い SK232
9 暗褐色シルト	灰色シルトブロック状に多量 しまりやや弱い 粘性弱い 遺構
10 暗褐色シルト	灰色シルトブロック状に多量・炭化物 ($\phi 5 \text{ mm}$ 程度) わずかに・木屑少量 しまり・粘性弱い 遺構
11 暗褐色シルト	灰色シルトブロック状に多量・炭化物 ($\phi 5 \text{ mm}$ 程度) わずかに・木屑少量 しまりやや弱い 粘性弱い 遺構
12 暗褐色シルト	礫 ($\phi 2 \sim 3 \text{ cm}$) 少量・陶器片含む しまりやや弱い 粘性弱い 遺構
13 灰褐色シルト	しまりやや弱い 粘性やや強い
14 灰褐色シルト	炭化物 ($\phi 1 \text{ cm}$ 程度) 少量 しまり・粘性弱い
15 灰褐色シルト	木屑少量 しまり・粘性弱い
16 灰褐色シルト	木屑少量 しまり強い 粘性なし SK237
17 灰褐色砂混じりシルト	木屑 (皮?) 多量 しまり軟弱 粘性弱い SK246
18 黑褐色シルト	木屑 (桶の材など) や瓦片多量 しまり弱い 粘性なし
19 暗灰色砂質シルト	黄灰色粘土ブロック ($\phi 1 \text{ cm}$ 程度) やや多く含む しまり弱い 粘性やや強い
20 トレンチ 202 拡張部南壁 5層と同じ	SK245
21 トレンチ 202 拡張部南壁 6層と同じ	SK245
22 暗灰色砂	100%砂層 しまり弱い 粘性なし トレンチ 202 拡張部南壁 8層と同じ

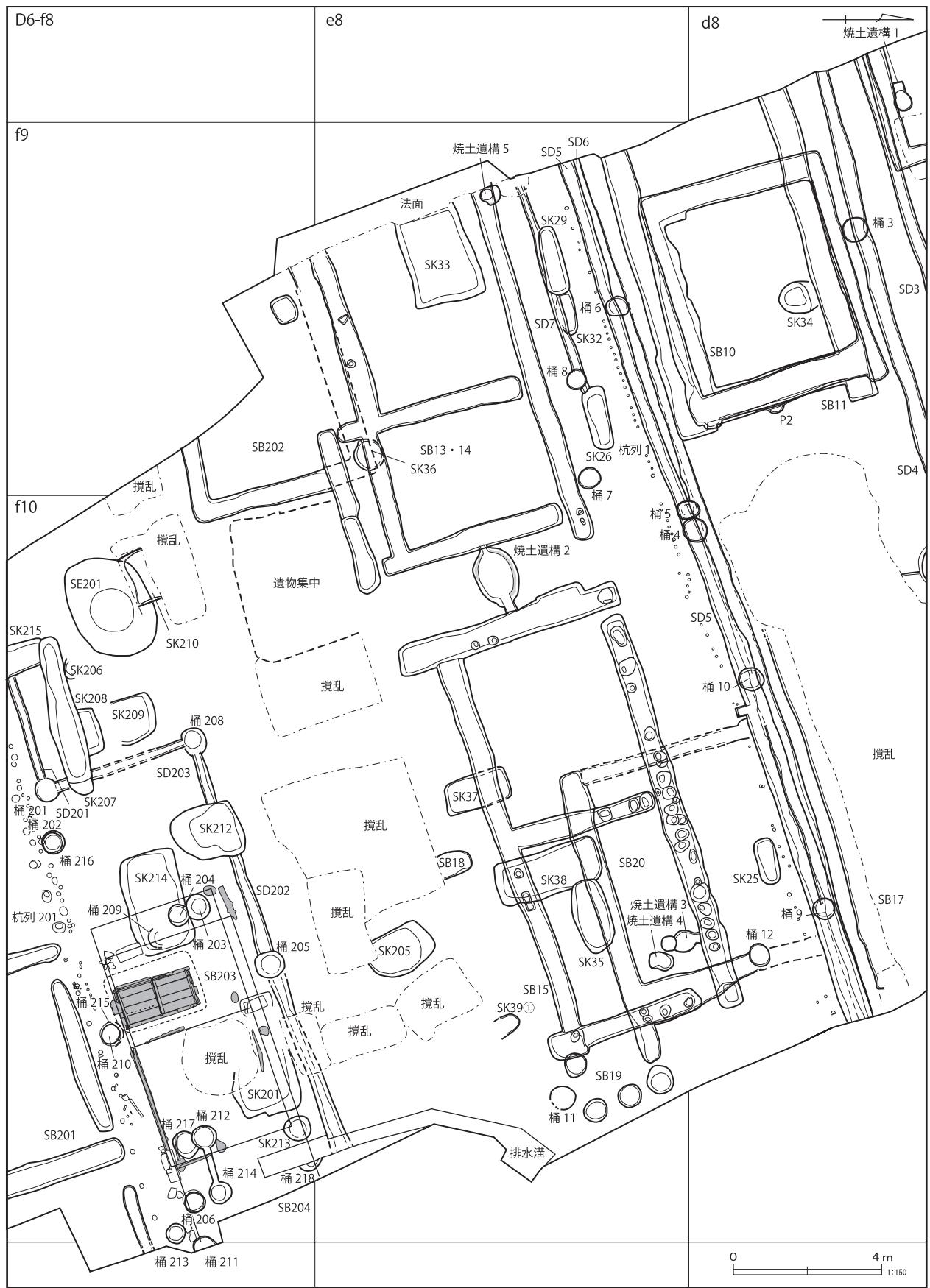
第8図 基本土層東壁



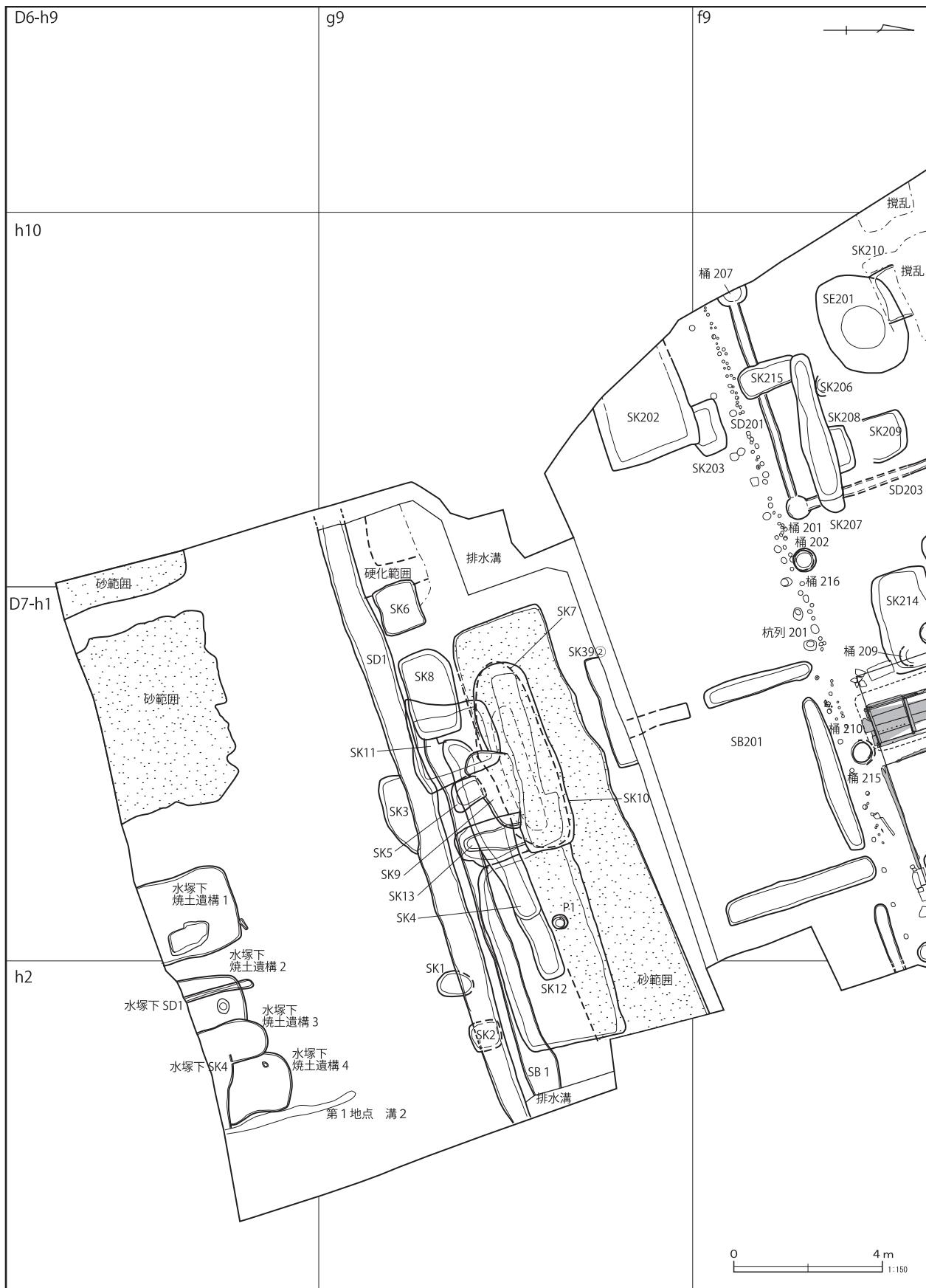
第9図 調査区第一面全体図



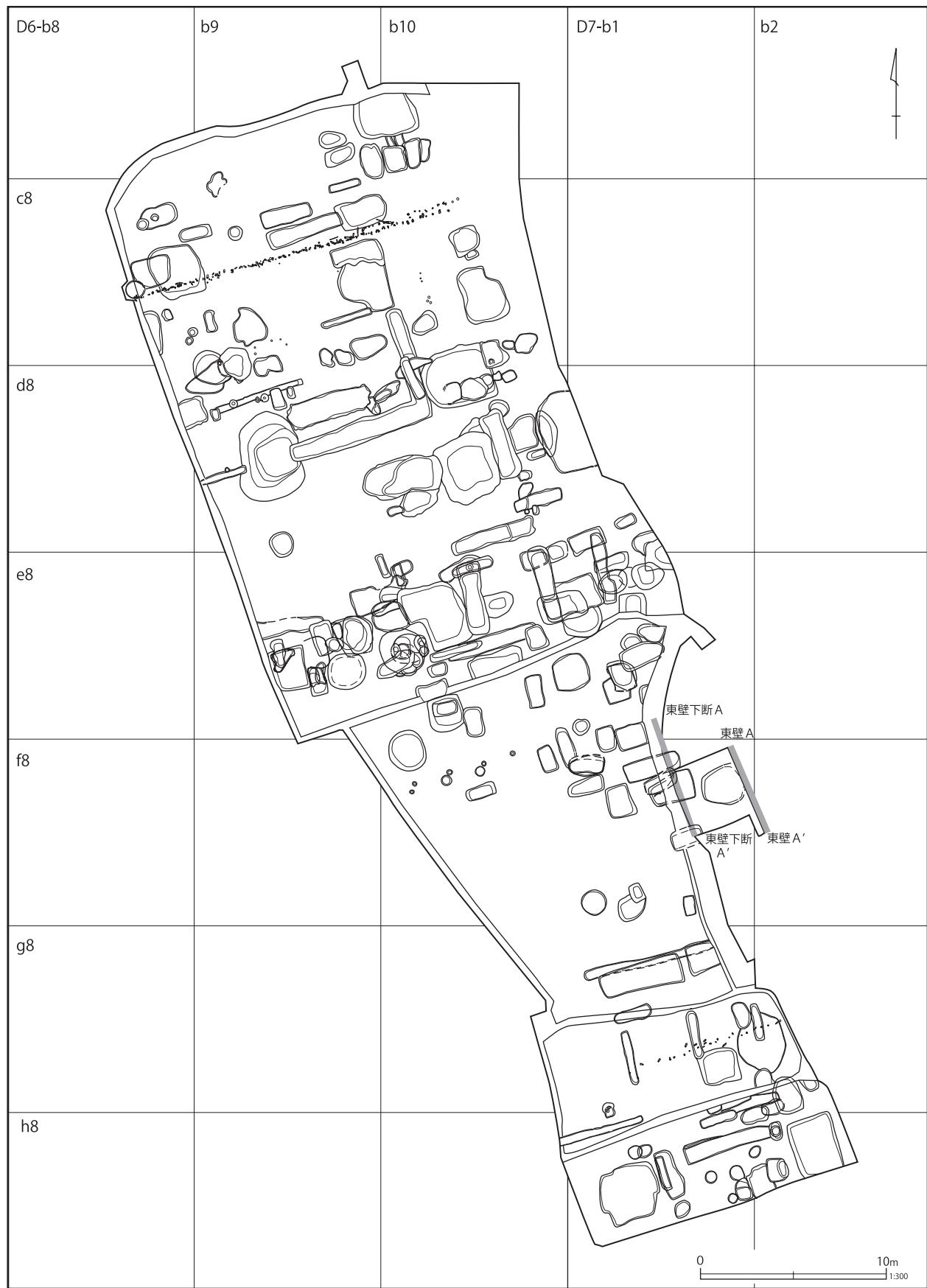
第10図 調査区第一面分割図 (1)



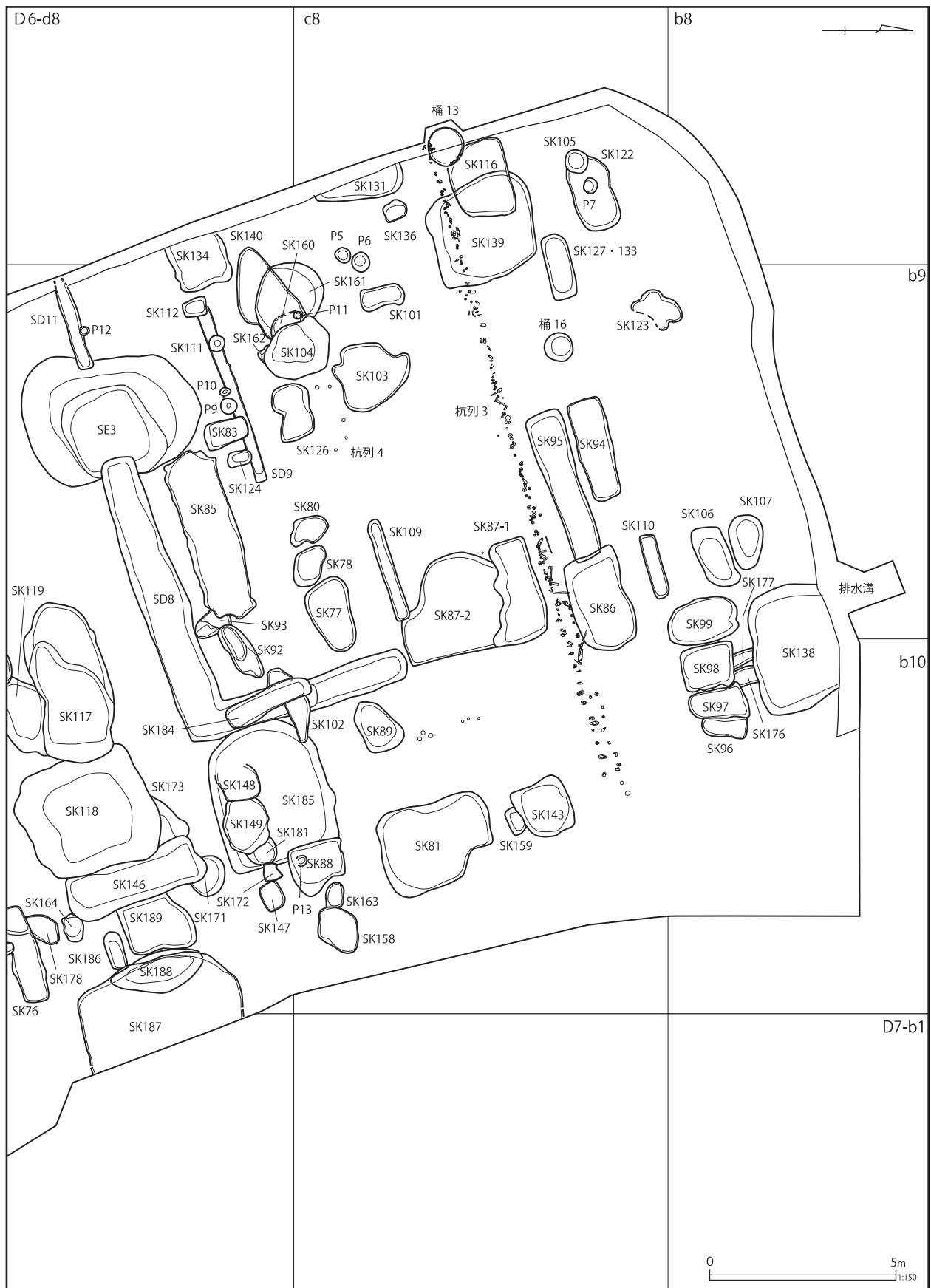
第11図 調査区第一面分割図 (2)



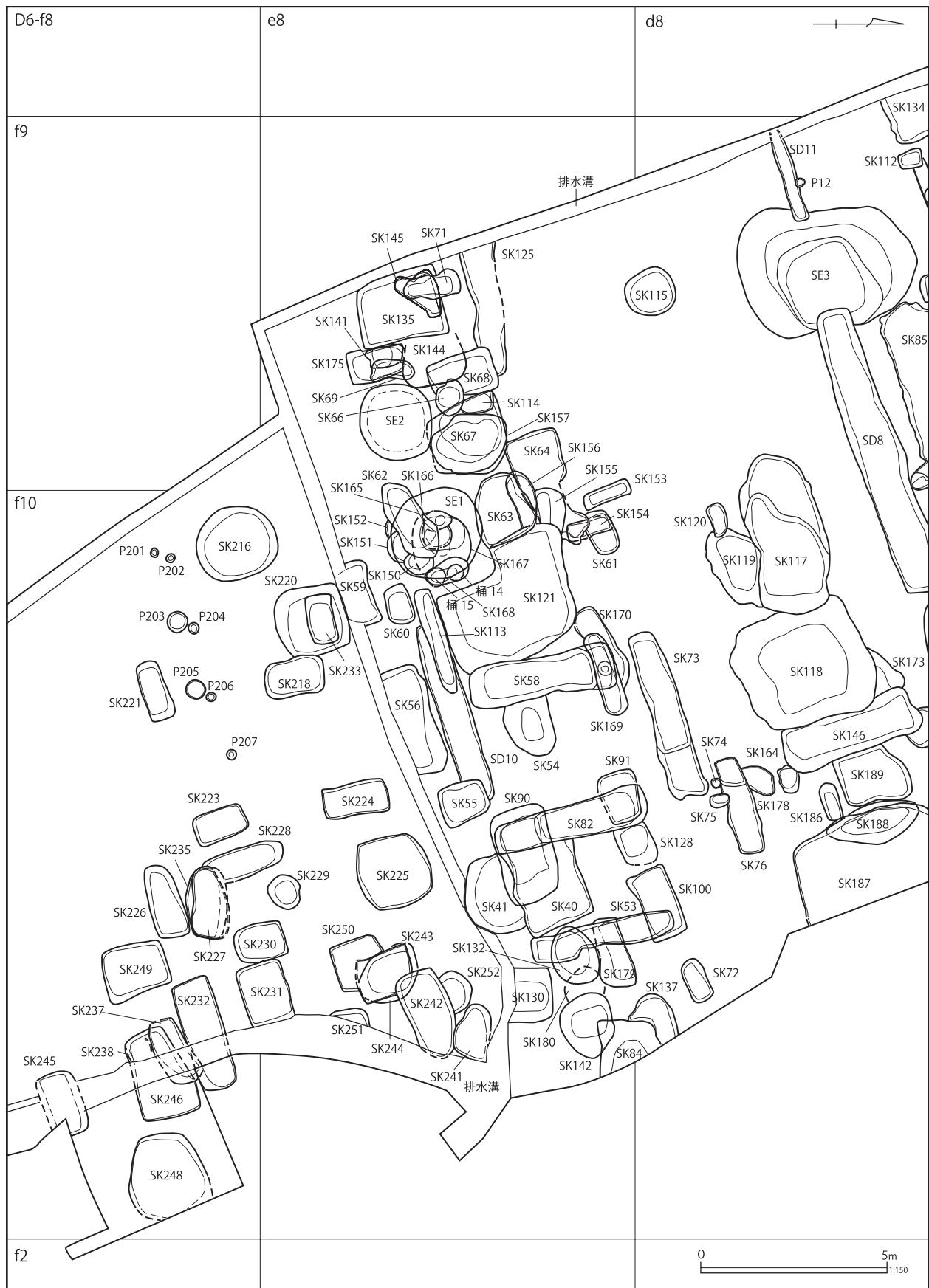
第12図 調査区第一面分割図 (3)



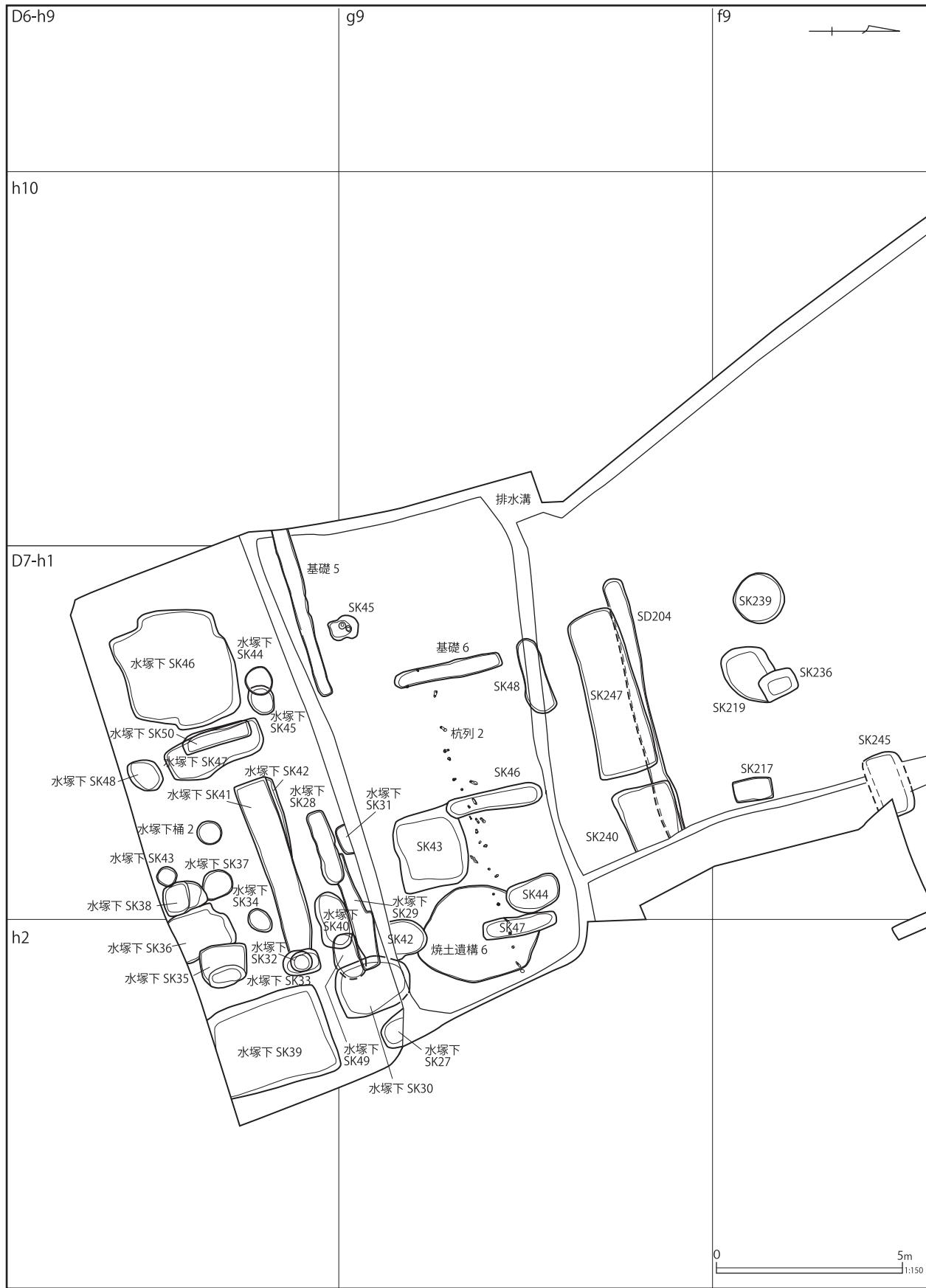
第13図 調査区第二面全体図



第14図 調査区第二面分割図 (1)



第15図 調査区第二面分割図 (2)



第16図 調査区第二面分割図 (3)

東壁は基本土層として設定した範囲が狭いが、西壁と同様に整地層と遺構が複雑に絡んでいる。

既に報告済みである栗橋宿本陣跡では火災層が確認されたが、栗橋宿跡第6地点ではいずれの基本土層でも火災層や洪水層は確認されなかった。また、天明3年（1783年）降灰の浅間A軽石も確認されていない。整地層や遺構が複雑に絡んでおり、その痕跡が不明瞭となっている可能性も考え得る。火災層や洪水層、浅間A軽石については年代の指標になるため、今後の栗橋宿跡の報告に期待する。

出土遺物は土壌を中心に陶磁器類や瓦が多量出土した。陶磁器類は、各遺構の最新期の陶磁器や特徴的な陶磁器を中心に挿図・観察表で示した。磁器では肥前系・瀬戸美濃系磁器の碗皿類が主体で、舶載磁器は極めて少ない。陶器では碗皿類が主体で瀬戸美濃系が多く、次いで肥前系・京都信楽系が多い。第一面では土瓶類をはじめとする産地不明の陶器が多い。大堀相馬系や松岡系陶器等の地方窯の製品は少なく、ヨーロッパ系陶器がわずかに見られる。17世紀代の陶磁器は少なく、各遺構から少量認められるが、一遺構からまとまって出土する例は第二面の土壌で1基確認されたのみである。第二面の遺構の時期は、既に報告済の栗橋宿第1・3地点、第2・4地点、栗橋宿本陣跡より古く、18世紀中葉から第3四半期頃が主体である。江戸時代中期の栗橋宿の実態を示す資料である。また、利根川周辺で生産されたと考えられる在地産土器類も多数出土しており、今後の編年等の基礎資料になると思われる。

土製品は、玩具・人形類が主体であり、土壁材が僅かに出土した。江戸在地系のものが多く見られるほか、京都系や在地産と考えられる製品も少なからず見られる。

瓦については、すべて収納することが難しいため、現地で水洗い、乾燥を行い、種別ごとに分類し、記録するように努めた。出土した瓦は第88・

89表の出土瓦一覧にまとめた。挿図では軒瓦・軒丸瓦・鬼瓦を中心に示した。第一面の瓦出土量が圧倒的に多く、この時期に瓦葺の建物が急増したことを示している。瓦の種別は桟瓦が中心である。軒瓦の瓦当文様は類型化が可能と考えられる。江戸式の瓦当紋様の変形が多く、東海式も一定量認められる。大阪式は僅かに認められた。

調査地点は地下水が高い環境であり、木製品も多量に残存していた。木製品は建築部材や桶材等から、各種生活用品まで多様である。特に漆椀や下駄の出土が目立つ。また、第一面で検出された穴蔵は船の部材を転用したものであった。

金属製品は、釘と考えられる棒状鉄製品が圧倒的に多く、針金状の銅製品も一定量認められ、熔烙に巻き付けた状態の製品も見られる。その他に蔵扉の窓と思われる金網状の銅製品や襖の引手など建物の内装に関わる製品も出土した。錢貨は寛永通宝が主体だが、渡来錢も僅かに出土した。

石製品は、砥石が主体であり、材質は流紋岩・粘板岩・ホルンフェルスが多い。流紋岩は所謂砥沢石の可能性が高い。次いで硯・火打石の出土が多い。火打石の材質は玉髓であり、被熱し白色化しているものも見られる。

また、第一面では滑石製の石筆、粘板岩製の石板等が多量に出土しており、明治6年に宿内に創設された栗橋學校関連の遺物と考えられる。また、第二面では多孔質の角閃石デイサイト転石製の磨石類が多く見つかっている。利根川沿いの中近世遺跡で出土する傾向にあり、利根川沿岸の調査事例の増加により、その資料数も急増している。

その他に笄等の硝子製品、ブラシや錘飾等の骨製品、貝製品、布製品が出土した。また、貝類や種子類、動物・魚骨等の自然遺物も一定量出土している。これらの遺物については、第90表の出土遺物一覧表に数量を示し、各遺構の出土遺物について触れる中で、その傾向について記述する。

IV 遺構と遺物

1 第一面の遺構と遺物

第一面から検出された遺構は、建物跡20棟、基礎状遺構3基、硬化面範囲1箇所、埋設桶30基、井戸跡1基、杭列2条、溝跡11条、焼土遺構9基、土壙54基、砂範囲3箇所、ピット2基、遺物集中地点1箇所である。

(1) 建物跡

建物跡は20棟が検出され、内1棟では穴蔵が1基検出された。位置、規模等の基本的な情報は第2表に、遺構図は第17～45図に示した。遺構の平面図は、原則、日光道中を上にして構成した。

建物の多くは布掘り状の基礎を伴う堅固なものであり、土蔵等の重厚な建物が想定される。大きくは、捨て杭を打つ建物（第10・11・201号建物跡）と打たない建物に分かれる。更に、捨て杭を打たない建物は、小礫を敷き詰めるもの（第4・5・8・202号建物跡）、砂や土を敷き固めたもの（第1・6・7・9・12号建物跡）、瓦敷のもの

（第20号建物跡）、樽地業（第19号建物跡）に細分され、多種多様な工法を用いている。また、第203号建物跡には地下室の一種である「穴蔵」が伴っている。「穴蔵」は「江戸型穴蔵」、「木製枠形穴蔵」とも呼ばれ、船大工系接合技術を用いることが特徴である。江戸の中心部で確認される施設であり、地方では極めて稀少な事例である。

建物の基礎内からの出土遺物は少ない傾向にある。遺物の多くは下層遺構や包含層からの混在が考えられ、建物跡に直接伴う遺物は少ない。掲載遺物の抽出は、最新期の陶磁器に留意した。

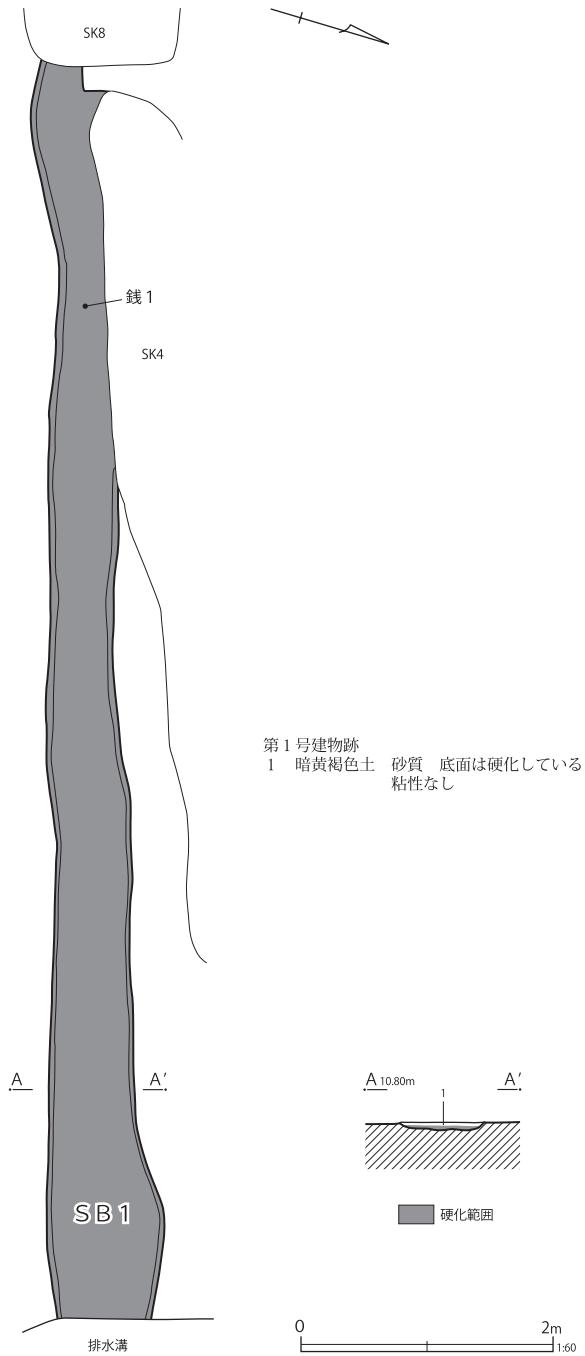
第1号建物跡（第17図）

D7-g1・2グリッドに位置する。第4・8号土壙と重複し、第1号建物跡が古い。規模は、長軸9.92m、深さが0.04mと極めて浅く、表土掘削の段階で上部構造は削平されている。平面形「ロ」字形の布掘り基礎が推定され、北側のみが

第2表 第一面建物跡一覧表

単位：m

番号	グリッド	桁行（長軸）	梁行（短軸）	備考		
1	D7-g1・2	(9.92)	—	基礎の深さ	0.04	SK4・8より古い
4	D6-b・c8・9	14.00	4.50	基礎の深さ	0.55	
5	D6-c・d8・9	(8.12)	4.50	基礎の深さ	0.69	SB8より新しい
6	D6-c9・10	4.72	3.89	基礎の深さ	0.16	(張出し口)桁行1.58×梁行0.75×深さ0.27
7	D6-c9・10	4.55	3.30	基礎の深さ	0.36	N-15°-W(他のSBと向きが90°違う)
8	D6-d8・9	(3.26)	3.52	基礎の深さ	0.45	
9	D6-b・c10	(3.42)	(2.11)	基礎の深さ	0.14	
10	D6-d・e9	(5.44)	(4.61)	基礎の深さ	0.41	杭に深さ2.55 SB11より新しい
11	D6-d8・9・e9	(7.40)	4.60	基礎の深さ	0.60	杭の深さ1.80 SB10より古い
12	D6-c8	(4.57)	(0.67)	基礎の深さ	0.27	基礎3より古い SK28より新しい
13・14	D6-e9・10・f9	(9.00)	5.85	基礎の深さ	0.40	
15	D7-d・e10・1	11.00	4.45	基礎の深さ	0.55	SB20より新しい SB19・SK37・38より新しい
17	D6・7-d10・1	(9.55)	4.10	基礎の深さ	0.05	埋設桶2より古い
18	D6・7-e10・1	—	(0.87)	基礎の深さ	0.42	
19	D7-e1	(1.35)	(2.00)	基礎の深さ	0.45	SB15より古い
20	D6・7-d・e10・1	(6.00)	(4.40)	基礎の深さ	0.20	埋設桶12・SD5・6より古い SB15・SK35・38より古い
201	D7-f・g1	(8.40)	(4.78)	基礎の深さ	0.24	杭の深さ1.40
202	D6-f9・10	(5.64)	(4.41)	基礎の深さ	0.20	SB13・14との新旧不明
203	D7-f1	(6.72)	(3.42)			
203穴蔵	D7-f1	(2.16)	(1.20)	深さ	0.90	
204	D7-f1	(7.98)	(3.60)	深さ	0.30	



第17図 第1号建物跡

残存している。布掘りの覆土は砂質土であり、底面は硬化している。

出土遺物は、第46図の1～4が陶磁器類である。2は瀬戸美濃系磁器の外面に瑠璃釉が施された湯呑碗である。3は酸化コバルト染付の急須である。いずれも重複する第4号土壙の陶磁器と接合関係にある。

第54図の1は右巻き8連珠三巴文の軒棧瓦、第61図の1は寛永通宝の四文銭、第62図の1は下部が欠損した滑石製石筆である。第65図の1は硝子製笄で、透明の中実である。被熱により白色化しており、先端部は変形している。遺構の重複関係と陶磁器から19世紀第3四半期の構築と推定される。

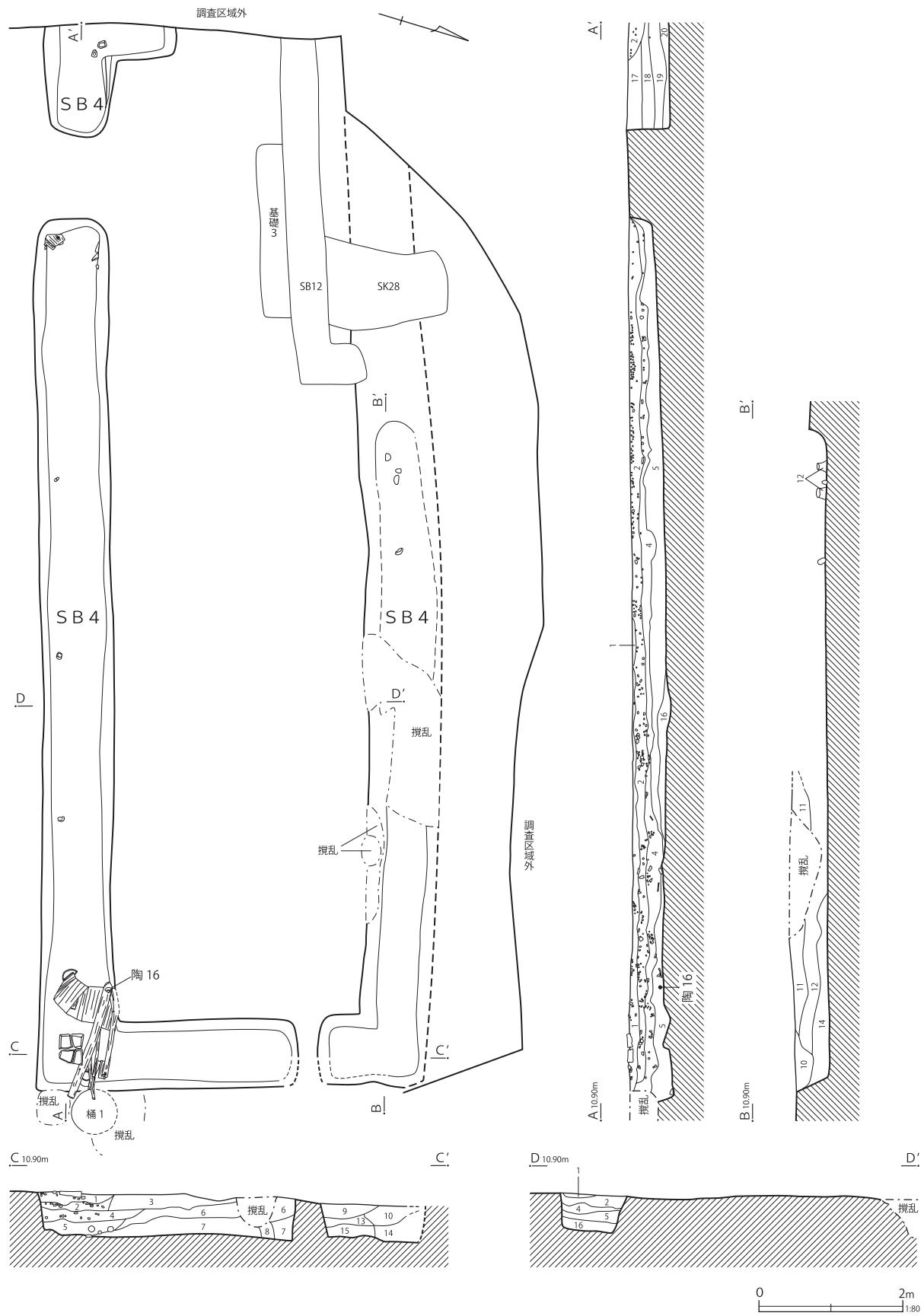
第4号建物跡 (第18・19図)

D 6-b・c 8・9グリッドに位置する。第12号建物跡、第3号基礎状遺構、第28号土壙と重複している。基礎状遺構との関係性は不明である。長軸14.00m、短軸4.50m、深さ0.55mの東西に長い平面形「ロ」字形の布掘り基礎である。北東、南西隅はブリッジ状に掘り残されている。基礎の北辺は調査区域外であるが、隣接する栗橋宿本陣跡③地区では確認されなかった。基礎の上層は小礫、下層は砂及び砂質土で固められている。南東隅の最上部には切石石材が残存している。

出土遺物は第46図の5～19に陶磁器類を示した。9は瀬戸美濃系磁器の卵殻手壺、10・11は湯呑碗、12は端反碗、13は端反碗蓋である。18は瀬戸美濃系陶器の油受皿である。19は瓦質土器の火鉢で外面にローラースタンプを施文している。

6～8に図示した肥前系磁器の粗製碗、広東碗、筒形碗、15～17の瀬戸美濃系陶器の腰錦碗、志野鉄絵皿、織部の鍔皿といった古い遺物は、下層遺構或いは整地層に含まれる遺物の巻き上げの可能性が考えられる。9～11が建物跡の時期を示す遺物であろう。

第57図の33～35に瓦を示した。33は道具瓦、34は丸瓦、35は軒丸瓦である。第60図の1にはL字に曲がった鉄製角釘を図示した。第62図の2は玉髓製火打石、3は流紋岩製砥石である。裏面にノコギリ状工具痕が残る。第65図の2～5は硝子製笄である。2は透明の中実で先端部が匙状、4は飴色で断面が渦巻き状に見える。5は螺



第18図 第4号建物跡（1）

第4号建物跡	
1	灰色土 丸石(φ1～2cm)微量 砂やや多量 酸化鉄が下部を中心に帶状に入る しまり極めて強
2	黄灰色砂 丸石(φ1～8cm)多量 部分的に中位～下位に酸化鉄が帶状に混入 しまり強
3	灰黄褐色土 黄褐色砂が横筋状に多量混入
4	黒褐色シルト 白色シルト粒(φ2cm)やや少量 全体酸化 しまり極めて強
5	黄褐色砂質土 下位に酸化鉄が厚さ1～2cm沈殿し硬化 炭化物(φ1cm)少量 しまり極めて強
6	暗灰黄色土 灰色シルトブロック(φ5～10cm)全体に微量 炭化物(φ1cm以下)帶状に少量 しまり強
7	黒褐色土 炭化物粒(φ1cm)少量 しまり強 粘性やや弱
8	灰色砂 暗灰黄色土ブロック(φ3～4cm)少量 しまり弱
9	灰黄褐色土 3層とほぼ同じだが黄褐色砂多量混入 しまり極めて強
10	灰黄色砂質土 丸石(φ5cm)少量 (φ2cm)前後の灰色シルト塊微量 しまり強
11	灰色砂 (φ5cm程度)の灰色シルトブロックをやや少量 (下位ほど多くなる) しまり強
12	黄灰色砂質土 (φ1～6cm程度)の灰色シルトブロック微量 1層に似ているが全体が酸化しており 砂の粒径がより大きく粗い しまり強
13	暗灰黄色土 6層とほぼ同じだが灰色シルトブロックがやや多量 しまり強
14	灰色砂質土 (φ1～6cm程度)の灰色シルトブロック微量 部分的に厚さ3cm程度で灰黄色粘質シルトが帶状に混入 しまりやや弱
15	灰色砂主体層 灰色シルトブロック(φ3～4cm)少量 しまり強
16	黄褐色砂 粒径の大きい粗い砂層 混入物はあまりない しまり強
17	黄褐色砂質土 灰色シルトブロック(φ5～10cm)を中心とし微量含む 炭化物(φ1～2cm)多量 しまり強(4層に似る)
18	暗褐色土 白色シルトブロック(φ3～5cm)少量 炭化物(φ1cm)微量 砂部分的に多量 しまりやや弱 粘性あり
19	暗灰色土 炭化物(φ3cm程度)微量 酸化鉄粒(φ2cm程度)・木材片少量 しまりやや弱 粘性あり
20	暗灰色土 炭化物(φ1～2cm)・木片多量 瓦片・陶磁片やや多量 しまり弱 粘性強
近現代の埋甕(便槽の跡か)	
I	黄褐色砂 暗灰色シルト粒(φ1cm)少量 常滑焼の破片(甕)多量 しまり強
II	暗灰色シルト 下位を中心に灰色シルトブロック(φ2～3cm)少量 しまり極めて強
III	灰色砂 部分的に酸化鉄分が沈着 しまり極めて強

第19図 第4号建物跡 (2)

旋状で金属色のような光沢が見られる。構築は19世紀第3四半期頃と考えられる。

第5号建物跡 (第20・21図)

D 6-c・d 8・9グリッドに位置する。第8号建物跡と重複し、第5号建物跡が新しい。規模は、長軸8.12m、短軸4.50m、深さ0.69mの平面形「ロ」字形の布掘り基礎である。北東隅はブリッジ状に掘り残され、南東隅は南へ0.36mほど突出している。また、西側は調査区域外に延びている。覆土は小礫主体層と砂層が互層となっており、極めて固く突き固められている。また、中層～上層の小礫層内におよそ1.8m(1間)の間隔で概ね3個で1単位の玉石が置かれ、南東隅には石が抜けた痕跡が確認される。

出土遺物は、第46・47図20～36に示した。20～24は肥前系磁器で、20は丸碗、21は粗製碗、22は丸碗形坏、23は端反碗、24は御神酒徳利である。いずれも染付が施されている。25は瀬戸美濃系磁器の酸化コバルト染付が施された急須であり、出土陶磁器の最新である。26は肥前系磁器で高台無釉の見込み蛇の目釉剥ぎ皿である。27は京都信楽系陶器の半球碗である。28～36は瀬戸美濃系陶器である。28は鉄・呉須絵が施されたせんじ碗、29は内面に輪状重ね焼き痕が見られる灰釉丸皿、30・34は片口鉢、31は外面菊花鎬文が推定される灰釉香炉、32・33は鉢、35は擂鉢、

36は柿釉甕である。いずれも18世紀代の遺物が主体であり、陶器は36が最新期遺物と考えられる。他の建物跡の出土遺物と比較すると、18世紀後半まで遡る古い陶磁器がほとんどである。基礎は深く掘り込まれているため、出土遺物の多くが下層遺構や包含層からの巻き上げと考えられる。最新期の出土陶磁器及び第8号建物跡との切り合い関係から19世紀後葉以降の構築と推定される。

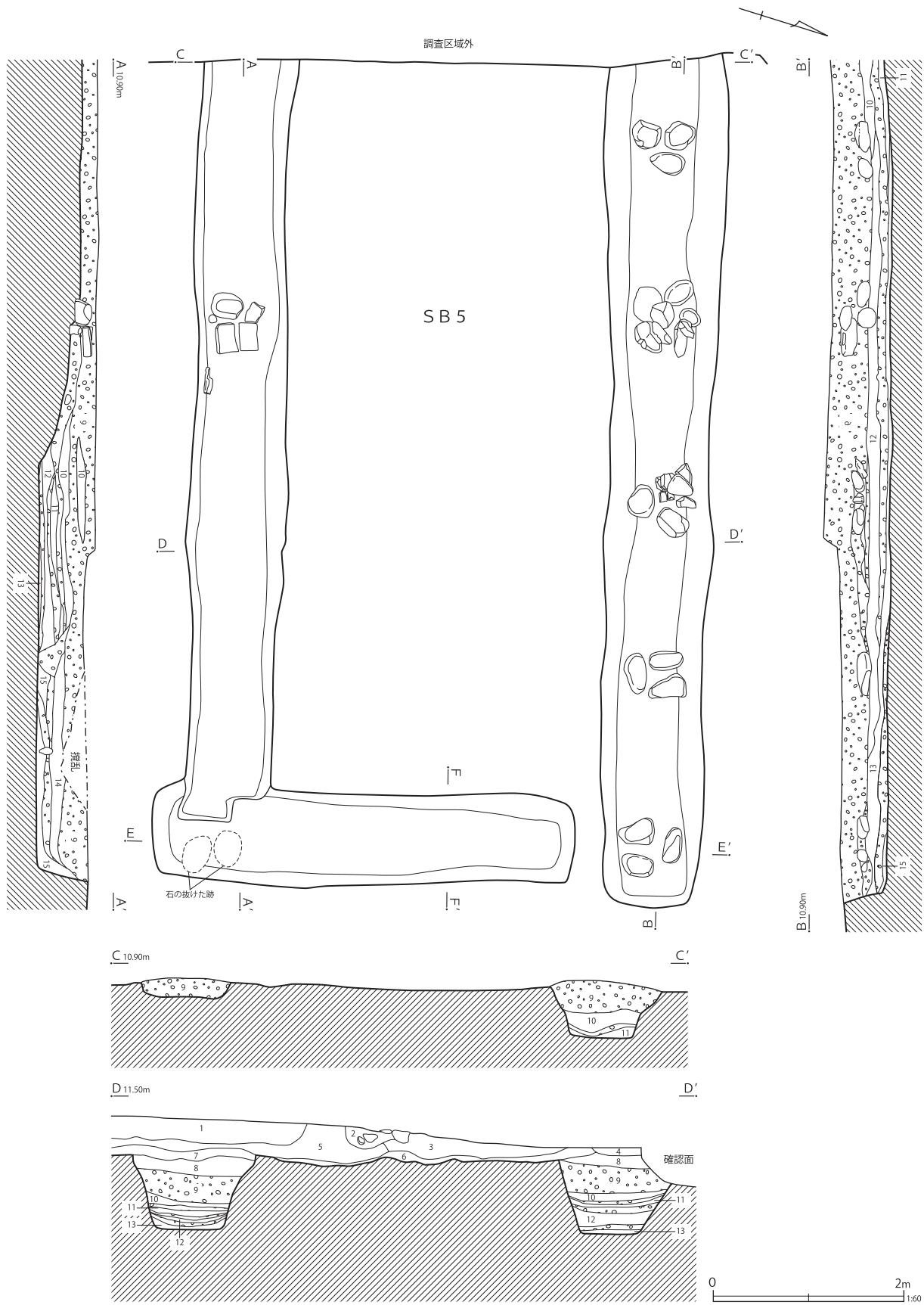
第6号建物跡 (第22図)

D 6-c 9・10グリッドに位置する。第7号建物跡、第1号基礎状遺構、第31号土壙が重複している。第7号建物跡より新しい。西側に隣接する張り出しが入口に関係する掘り込みと考えられる。規模は、長軸4.72m、短軸3.89m、深さ0.16m、張り出し口長軸1.58m、短軸0.75m、深さ0.27mである。「ロ」字形に布掘りをした後、砂と土を交互に入れ、版築している。

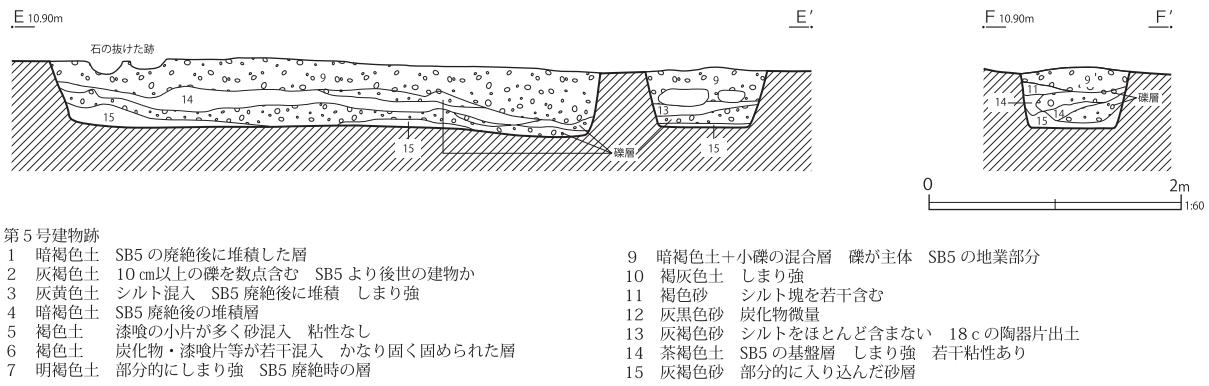
出土遺物は極めて少なく、陶磁器を第47図の38～40に示した。38・39は肥前系の粗製碗で、39には見込み蛇の目釉剥ぎが見られる。40は瀬戸美濃系磁器の外面鉄釉の坏であり、最新期の遺物である。構築は19世紀後半以降と推定される。

第7号建物跡 (第23図)

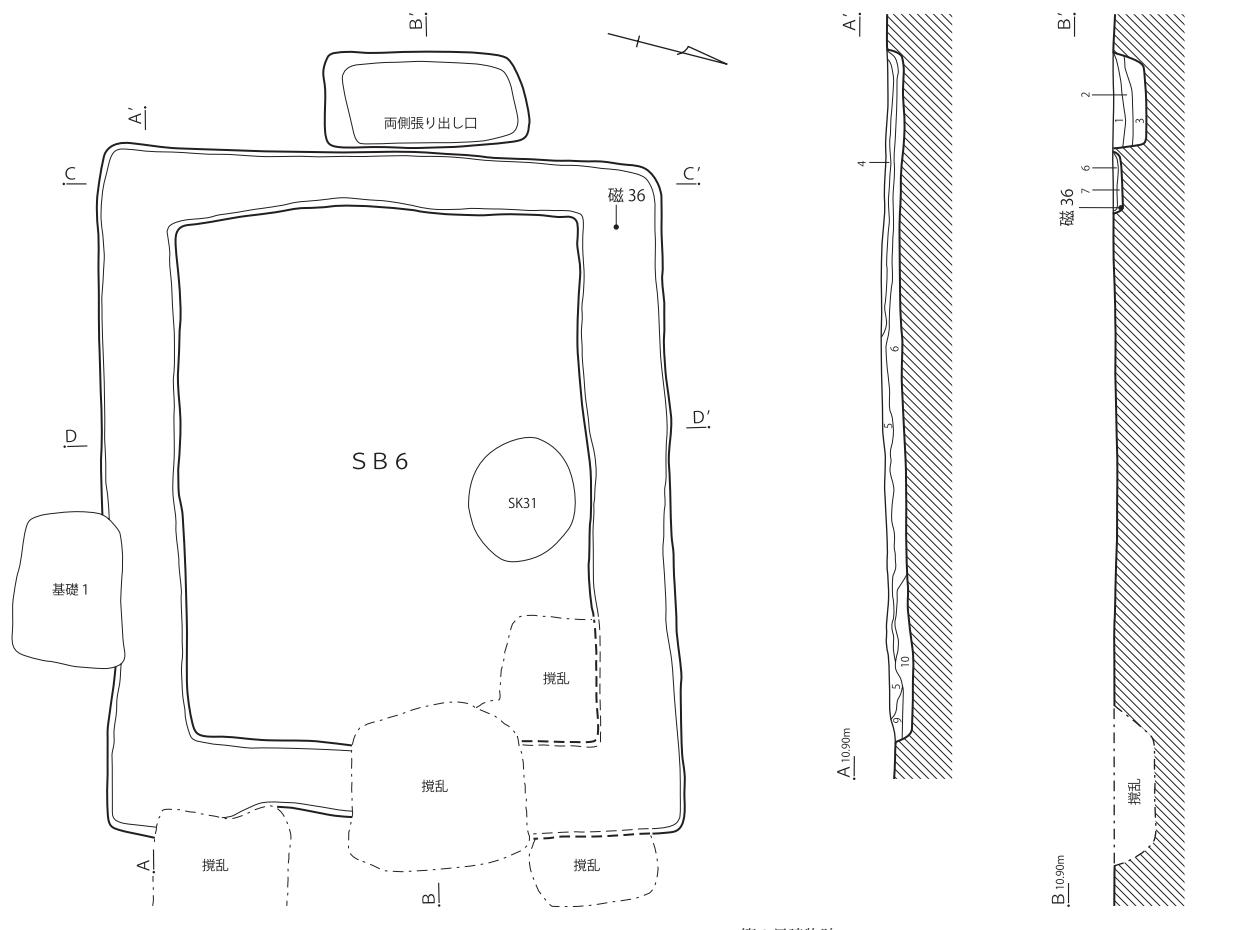
D 6-c 9・10グリッドに位置する。第6号建物跡と重複する。規模は長軸4.55m、短軸3.30m、深さ0.36m、長軸方位N-15°-Wであり、他



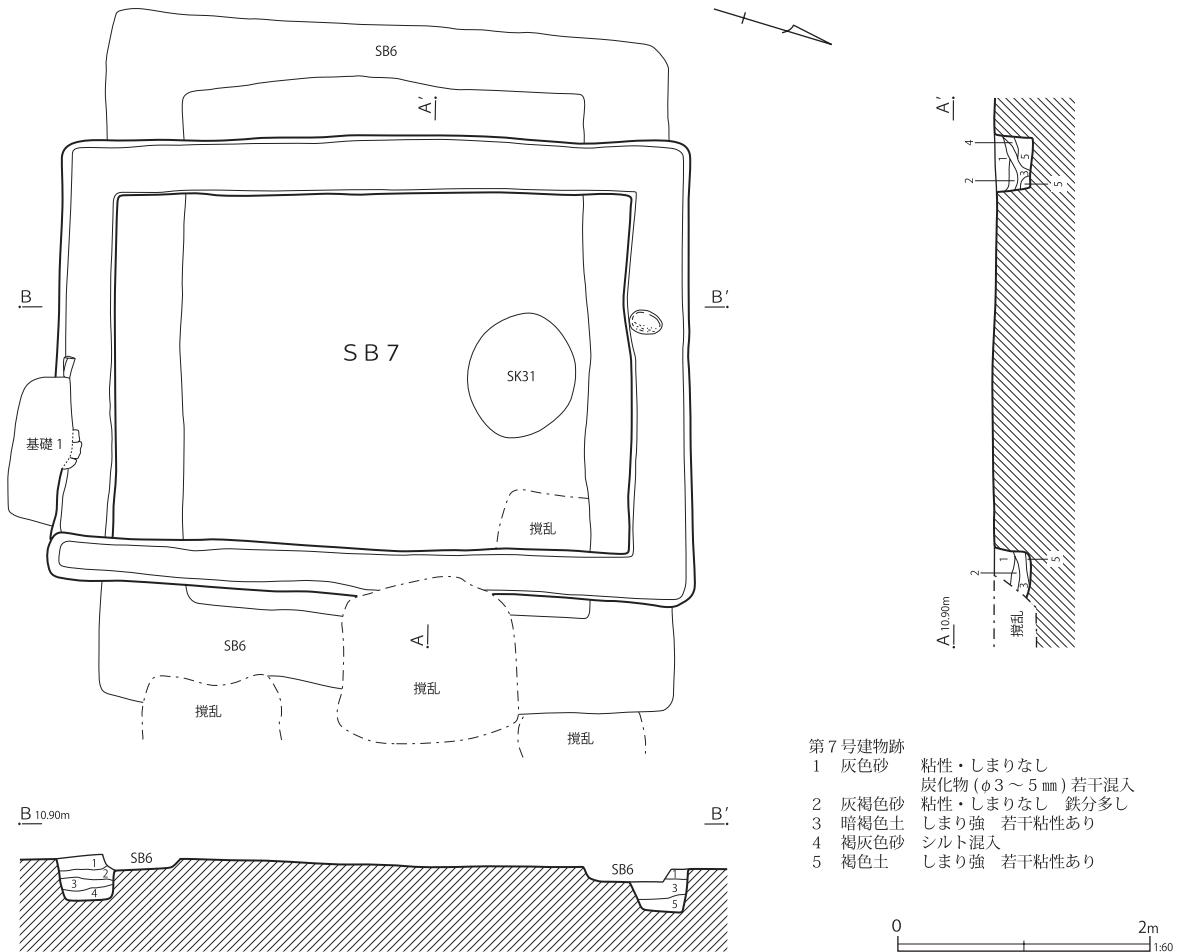
第20図 第5号建物跡 (1)



第21図 第5号建物跡 (2)



第22図 第6号建物跡



第23図 第7号建物跡

の建物跡とは主軸方向が90° 異なっている。「口」字形に布掘りをした後、砂としまりの強い土をほぼ互層に入れ、版築している。

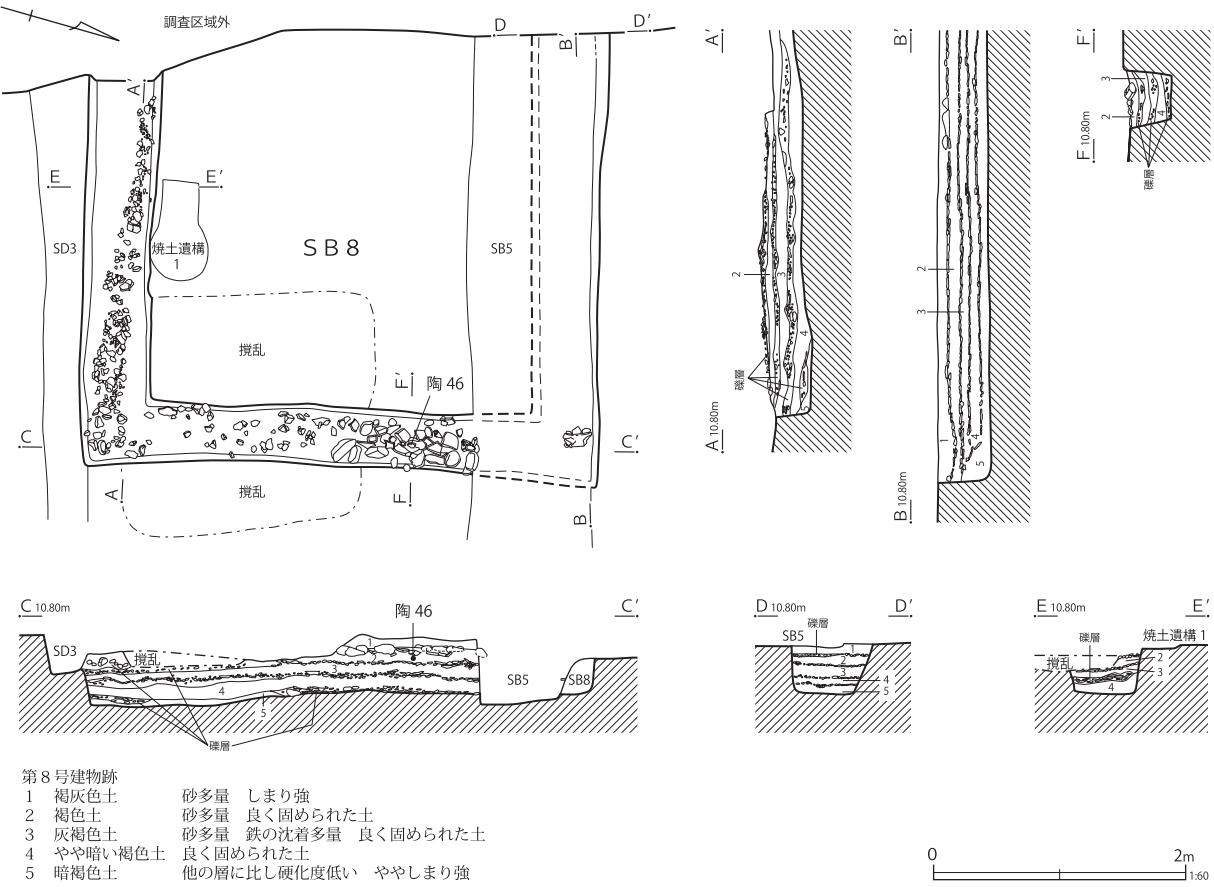
出土遺物は極めて少なく、陶磁器は第47図の41・42に示したが、いずれも巻き上げや混入が考えられ、遺構の時期を示す遺物ではなかった。41は肥前系磁器の見込み蛇の目釉剥ぎ皿である。高台は欠損しているが無釉と思われる。釉はやや青みがかっている。42は瀬戸美濃系陶器の二合半灰釉徳利である。栗橋宿跡では出土量の少ない器種である。構築は19世紀以降と推定される。

第8号建物跡 (第24図)

D 6-d 8・9 グリッドに位置する。第5号建物跡、第3号溝跡と重複し、第8号建物跡が古い。

規模は3.26m、短軸3.52m、深さ0.45mである。基礎の西辺は調査区域外へ延びている。「口」字形に布掘りした後、砂を多量に含む土と礫を交互に敷き、版築している。

出土遺物は、第47図の43~50に陶磁器を示した。43は肥前系の粗製碗、44は瀬戸美濃系陶器の皿、45は瀬戸美濃系柿釉燈明皿である。45は陶器の最新期遺物である。46・47は瀬戸美濃系の香炉で、47は灰釉鎬が推定される。48は丹波系の擂鉢である。栗橋宿では破片資料が目立ち、形になるものはほとんど見られない。49・50は瀬戸美濃系擂鉢である。第60図の2は鉄製角釘、第62図の4は粘板岩製の石板である。陶磁器は18世紀中葉の様相を示すが、下層遺構の巻き



第24図 第8号建物跡

上げによる混入と考えられる。石板が最新遺物であり、19世紀後葉以降の構築と推定される。

第9号建物跡（第25図）

D 6 - b・c 10グリッドに位置する。基礎の南辺と西辺のみ残存している。規模は、長軸3.42m、短軸2.11m、深さ0.14mである。南西隅はブリッジ状に掘り残され、布掘り東端には板が一部残存している。基礎は、布掘りをした後、砂を混ぜた土を敷き、版築している。上層の第1層、2層には白色軽石粒が含まれている。

出土遺物は極めて少なく、図示し得る遺物はなかった。

第10号建物跡（第26・27図）

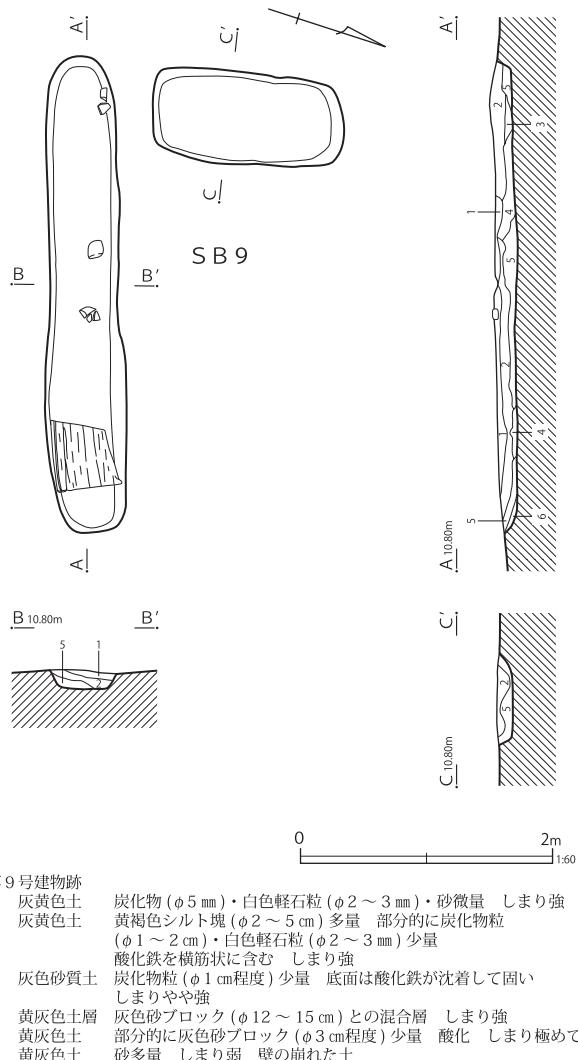
D 6 - d・e 9グリッドに位置する。規模は、長軸5.44m、短軸4.61m、深さ0.41mである。第11号建物跡と重複しており、第10号建物跡が

新しい。

基礎構造は、「ロ」字形に布掘りした後、およそ2.5mの基礎杭を2～3本束ねて、半間の間隔で底面に打ち込んでいる。更に、杭の上に長方形に切り出した胴木を5本設置し、その脇を鹿沼土で固めている。胴木は建物の梁などを転用している可能性がある。胴木の上には大谷石の切石材を乗せ、小礫と砂の混合土を充填し、版築している。切石材は1個体のみ残存している。

北西隅に使用されていた胴木は、放射性炭素年代測定（ウィグルマッチング法）を行ったが、良好な結果は得られなかった（自然科学分析1参照）。

出土遺物は、第47・48図の51～67に陶磁器類を示した。51～54は瀬戸美濃系磁器で、51・52は端反碗、53・54は同文の壺である。55は肥前系磁器の壺で、高台外周に面取りが見られ



第25図 第9号建物跡

る。56は肥前系磁器で幅広高台の湯呑碗である。57は瀬戸美濃系磁器の型押寿文皿である。内面に「寿」の陰刻が2箇所押されている。58は肥前系磁器の皿である。高台内に「大明成化年製」の染付、釘書き「山吉」が見られる。63は瀬戸美濃系陶器の灰釉二合半徳利である。栗橋宿では出土例の少ない製品である。64は陶器の白土染付土瓶、65は白土化粧が施された急須の蓋である。66は瓦質土器の竈鍔である。53~57が最新期の遺物と考えられる。

第53図の1、2は土製品人形・玩具類の兎、泥面である。いずれも江戸在地系である。1は振ると音が鳴り、土鈴と考えられる。第54図の2

~4に軒桟瓦、第61図の2に銭貨の寛永通宝を示した。構築は19世紀後半頃と推定される。

第11号建物跡 (第28・29図)

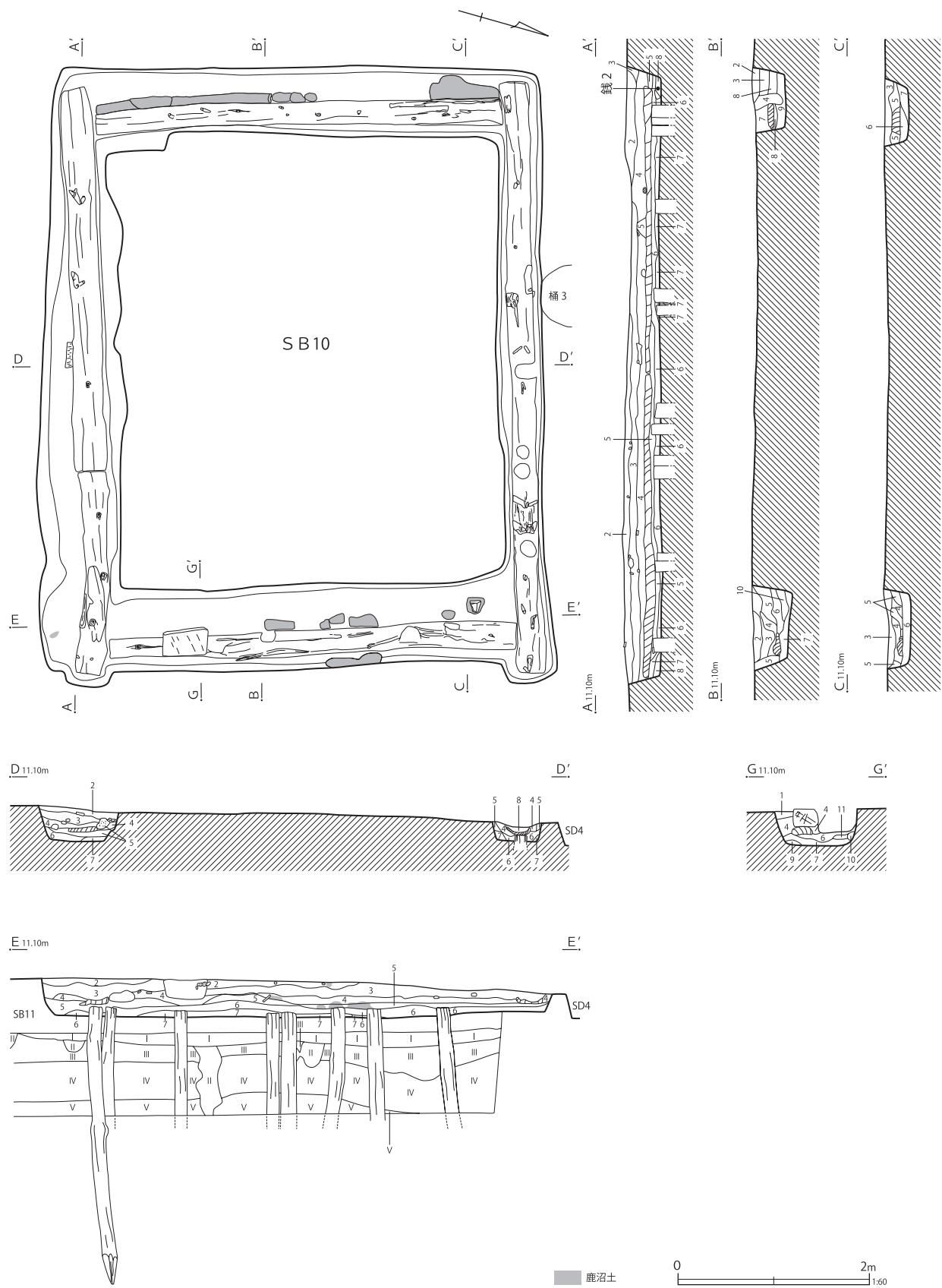
D 6-d 8・9・e 9グリッドに位置する。規模は、長軸7.40m、短軸4.60m、深さ0.60mである。重複する第10号建物跡より古い。基礎の西辺は調査区域外へ延びている。基礎構造は、第10号建物跡と同様に、「ロ」字形に布掘りした後、およそ1.8mの基礎杭を2~3本束ねて、半間の間隔で底面に打ち込んでいる。第10号建物跡と異なり、松杭の上に胴木などを乗せず、小礫や瓦片を混ぜた土や砂を交互に敷き、版築している。また、漆喰が多く出土しており、漆喰が付着した鉄製品や瓦も見られ、基礎の一部に漆喰が用いられていた可能性がある。

基礎に使用されていた杭は、放射性炭素年代測定(ウイグルマッチング法)を行ったが、良好な結果は得られなかった(自然科学分析1参照)。

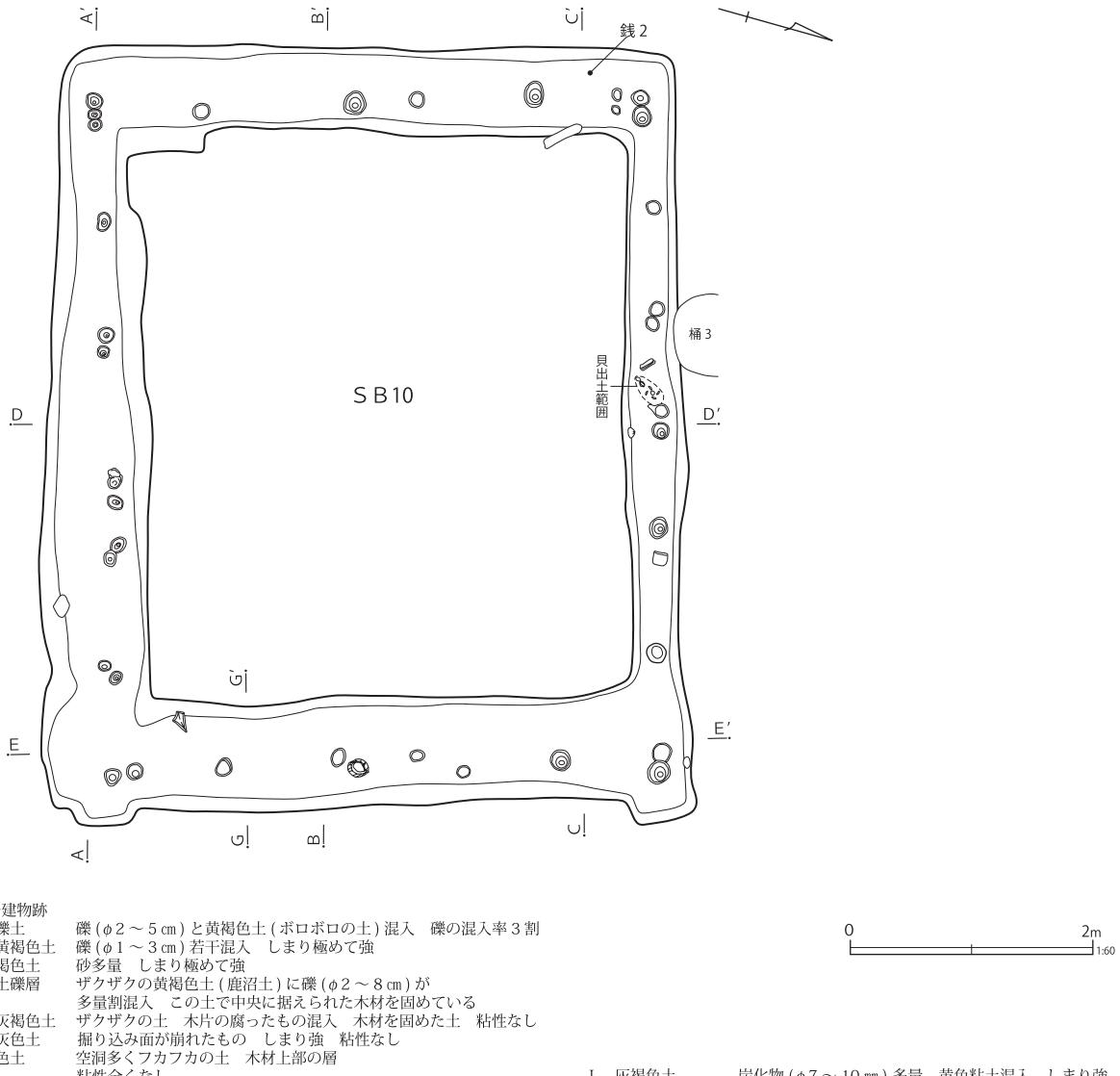
出土遺物は、第48図68~83に陶磁器類を示した。68~70は瀬戸美濃系磁器の湯呑碗である。72は瀬戸美濃系磁器の型成形坏である。73は瀬戸美濃系銅版転写染付の坏である。74は瀬戸美濃系磁器の型押寿文皿、75は植木鉢である。底部に墨書「…住弥」が判読できる。76は肥前系磁器、78はペコかんの爛徳利である。73の銅版転写染付坏が最新遺物であるが、混入の可能性が高い。そのため、72や74が建物跡の時期を示す遺物と考えられる。第53図の3は、土製品人形類で京都系の狐人形である。二枚型成形の中実で口内の玉は手捻りである。第57図の36は丸瓦、37は軒丸瓦、第60図の3~10は鉄製角釘、第62図の5は粘板岩製硯である。硯の裏面には「■倉源治郎」と刻書が見られる。構築は19世紀後半頃と推定される。

第12号建物跡 (第30図)

D 6-c 8グリッドに位置する。第4号建物跡、第3号基礎状遺構、第28号土壙と重複し、第12号建物跡が古い。基礎は南辺と東辺の一部のみ確



第26図 第10号建物跡 (1)



第27図 第10号建物跡 (2)

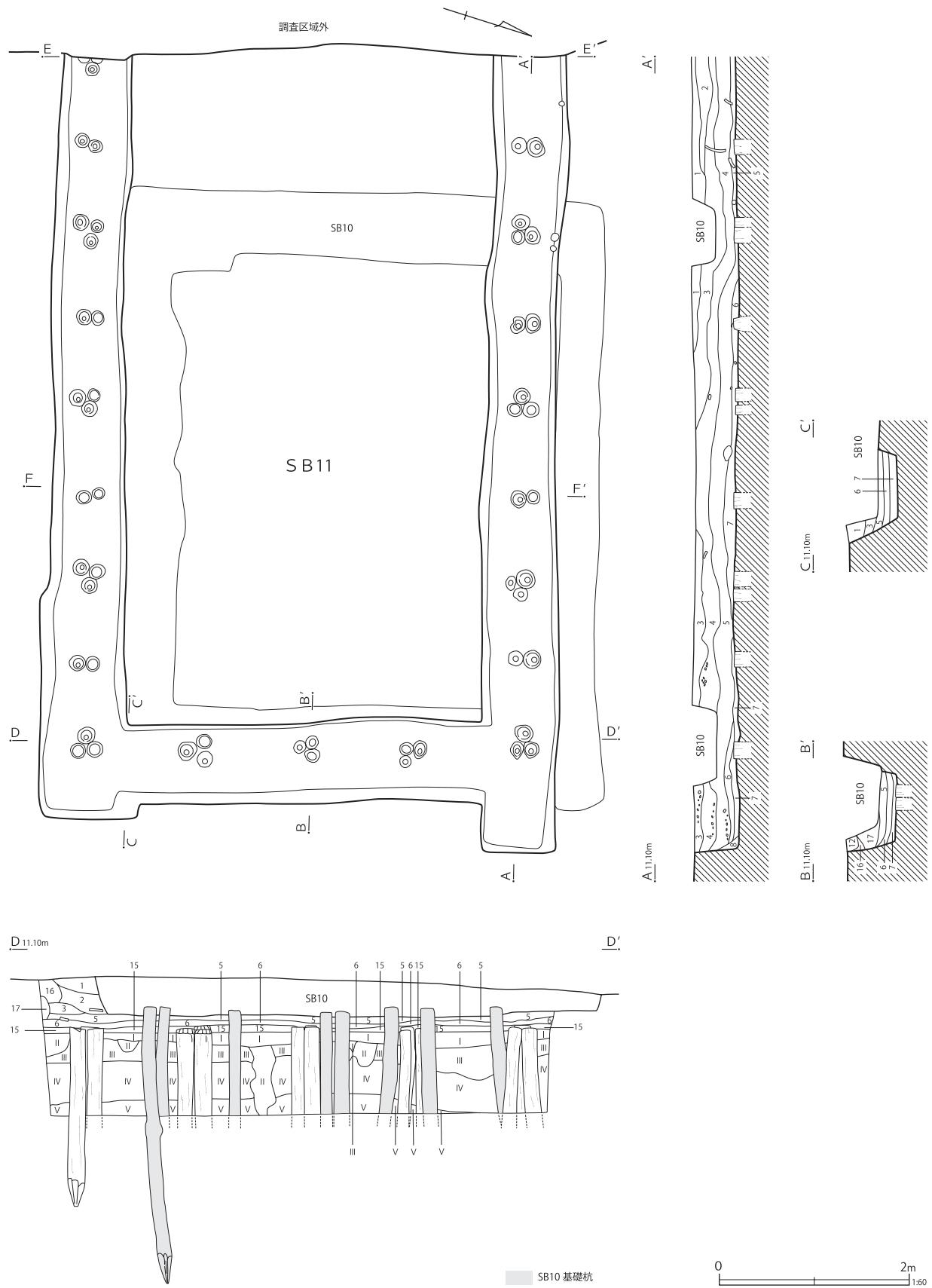
認められ、いずれも調査区域外へと延びている。東辺は、既に報告済の栗橋宿本陣跡③地区（事業団2019）へと続くが、削平により、続きとなり得る遺構は確認されなかった。規模は、長軸4.57m、短軸0.67m、深さ0.27mである。基礎は布掘りであり、「ロ」字形が推定される。シルトと砂を交互に敷き、版築している。

出土遺物は極めて少なく、第48図の84に瀬戸美濃系磁器の壊を示した。第61図の3は銭貨の

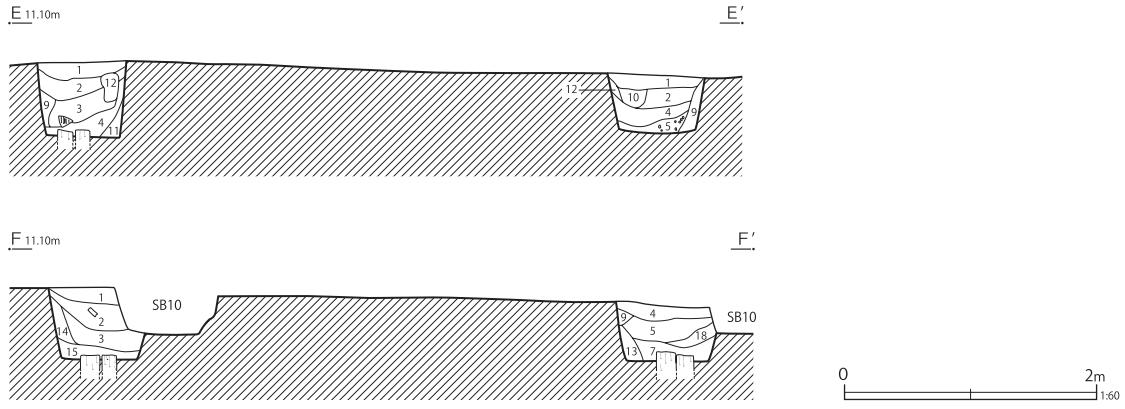
寛永通宝である。構築は19世紀後葉以降と推定される。

第13・14号建物跡（第31・32図）

D 6-e 9-f 10-g 9グリッドに位置する。当初は2棟の建物跡として調査されていたが、切り合の関係が不明であることから1棟の建物跡とした。基礎の西辺は調査区域外へと延びている。規模は、長軸9.00m、短軸5.85m、深さ0.40mである。基礎南辺の小穴は、表土掘削時に石が抜けた痕



第28図 第11号建物跡 (1)



- 第11号建物跡
- 1 暗褐色土 (φ2～3 cm) の礫・炭化物多量 南側掘り方内に漆喰片多量 しまり強
 - 2 灰黄褐色土 (φ1～2 cm) の礫少量 南側掘り方内に漆喰片多量 しまり極めて強 粘性なし
 - 3 灰褐色土 (φ1～2 cm) の小礫少量 鉄分多量 南側掘り方内に漆喰片多量 しまり極めて強 若干粘性あり
 - 4 暗黄褐色土 漆喰や瓦の破片多量 しまり強
 - 5 暗褐色土 炭化物 (φ8～15 mm) 多量 腐蝕した基礎杭あり しまり強 やや粘性あり
 - 6 褐色土 砂若干混入 しまり強 粘性なし
 - 7 黒灰色土 (φ2～3 cm) の小礫含む 杭が打ち込まれた直上の層 しまり弱
 - 8 黄褐色土 磨等をほとんど含まない しまり強 粘性なし
 - 9 褐灰色土 小礫等を全く含まないが壁際に細い杭 (φ3～4 cm) が打ち込まれている しまり強 若干粘性あり
 - 10 暗褐色土 砂多量 しまり強 粘性なくフカフカの土
 - 11 褐灰色砂 小礫若干混入 しまり強
 - 12 暗褐色土 炭化物 (φ2～6 mm) 混入 ブロック状に堆積している 固くしまった塊
 - 13 赤褐色砂 鉄分が沈着し赤褐色に変色 しまり弱
 - 14 暗褐色土 シルト・炭化物 (φ5～8 mm) 若干含む しまり強
 - 15 褐色土 小礫 (φ1～2 cm) 多量 しまり強 若干粘性あり
 - 16 暗灰褐色土 小礫 (φ1～3 cm) 多量 しまり強 ガチガチに固まっている
 - 17 黑褐色土 炭化物 (φ2～3 mm) 少量 壁面に腐蝕した薄い板あり 若干しまり強 粘性なし
 - 18 暗灰褐色土 炭化物 (φ3～5 mm) 若干含む 小礫を含まない しまり強 粘性あり

第29図 第11号建物跡（2）

跡である。「日」字形の布掘り基礎であり、南西隅に壺掘り状基礎が見られる。土のしまりは極めて強く、よく固められている。基礎北東隅、南東隅、中央南側に張り出し部が見られる。また、基礎北東隅、中央北側にわずかにブリッジ状の掘り残しが見られる。西側の壁面には石積みが確認され、石垣を持つ建物跡と考えられる。

基礎内には混入物として円礫、角礫を主体とし、瓦や煉瓦、コンクリート片が認められる。

また、建物跡の内側はアーモンド状に砂の堆積範囲が広がっている。

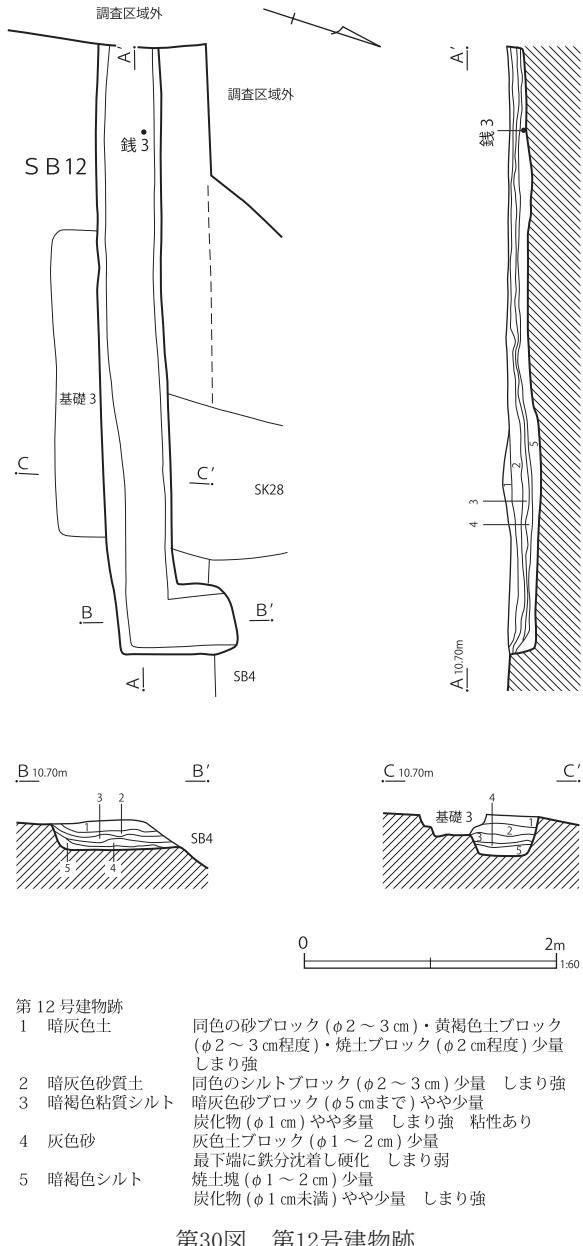
第6地点の調査区には、明治35年の『営業便覧』に栗橋學校の記載があり、第13・14・15・18・19・20号建物跡の位置する敷地内にあったことが想定される。史料を用いた区割りの照合については、第VI章で試みる。

出土遺物は第48・49図の85～107に陶磁器類を示した。88はクロム釉青磁丸腰湯呑である。99

は肥前系磁器の鉢で高台内に焼継印が見られる。104は陶器の柿釉豆甕である。第54図の6・7に軒桟瓦、第57図の38～41に道具瓦、丸瓦、軒丸瓦、第60図の11は鉄製品のハサミを示した。第62図の6～22は石製品で、6～15は滑石製石筆、16は片岩製垂飾と思われる。19～21は凝灰岩製の硯で、19には人名が刻書され、パテ状補修痕が見られる。20には刃物痕が見られる。22は粘板岩製の石板で、罫線が見られる。石筆、硯、石板といった教育関連遺物が目立ち、一部を図示した。後述する第15号建物跡や第33・35・37・38号土壙でも同様の遺物が多く出土している。第65図の6は硝子製品の笄である。

第15号建物跡（第33・34図）

D 7-d・e10・1 グリッドに位置する。第20号建物跡、第37・38号土壙と重複し、第13・14号建物跡の東側に並列する建物跡である。規模は、長軸11.00m、短軸4.45m、深さ0.55mであ



る。「日」字形の布掘り基礎であり、西辺と東辺の南側は張り出しが見られる。また、北東隅と北西隅にブリッジ状の掘り残しが見られる。基礎内には円礫・角礫・コンクリート瓦礫が多量に含まれ、土は極めて強くしまっている。

出土遺物は第49・50図の108~128に陶磁器類を示した。108・110は銅板転写染付の平碗、113はクロム練り込み手の湯呑碗である。

第53図の6~9は土製品の芥子面・泥面子である。7には青色の顔料が付着している。第54図

の8~14に軒棟瓦、棟瓦、平瓦を示した。11はいわゆる石持瓦である。15は元の形が不明な転用瓦で砥具に転用されていると思われる。第57図の42は軒丸瓦である。第61図4~11は寛永通宝をはじめとする銭貨類を示した。第62・63図23~44には石製品を示した。23~34は滑石製石筆、35は篆刻の印章、36~38は凝灰岩・粘板岩製の硯、39~44は粘板岩製石板である。第13・14号建物跡と同様に石製品は教育関連資料が目立ち、一部を図示している。

第17号建物跡（第35図）

D 6・7-d 10・1 グリッドに位置する。基礎の大部分が搅乱による破壊を受けている。第2号埋設桶と重複している。規模は、長軸9.55m、短軸4.10m、深さ0.05mである。「ロ」字形の布掘り基礎であり、基礎内はシルトを主体とし、極めて強く固められ、版築している。出土遺物は見られず、構築時期は不明である。

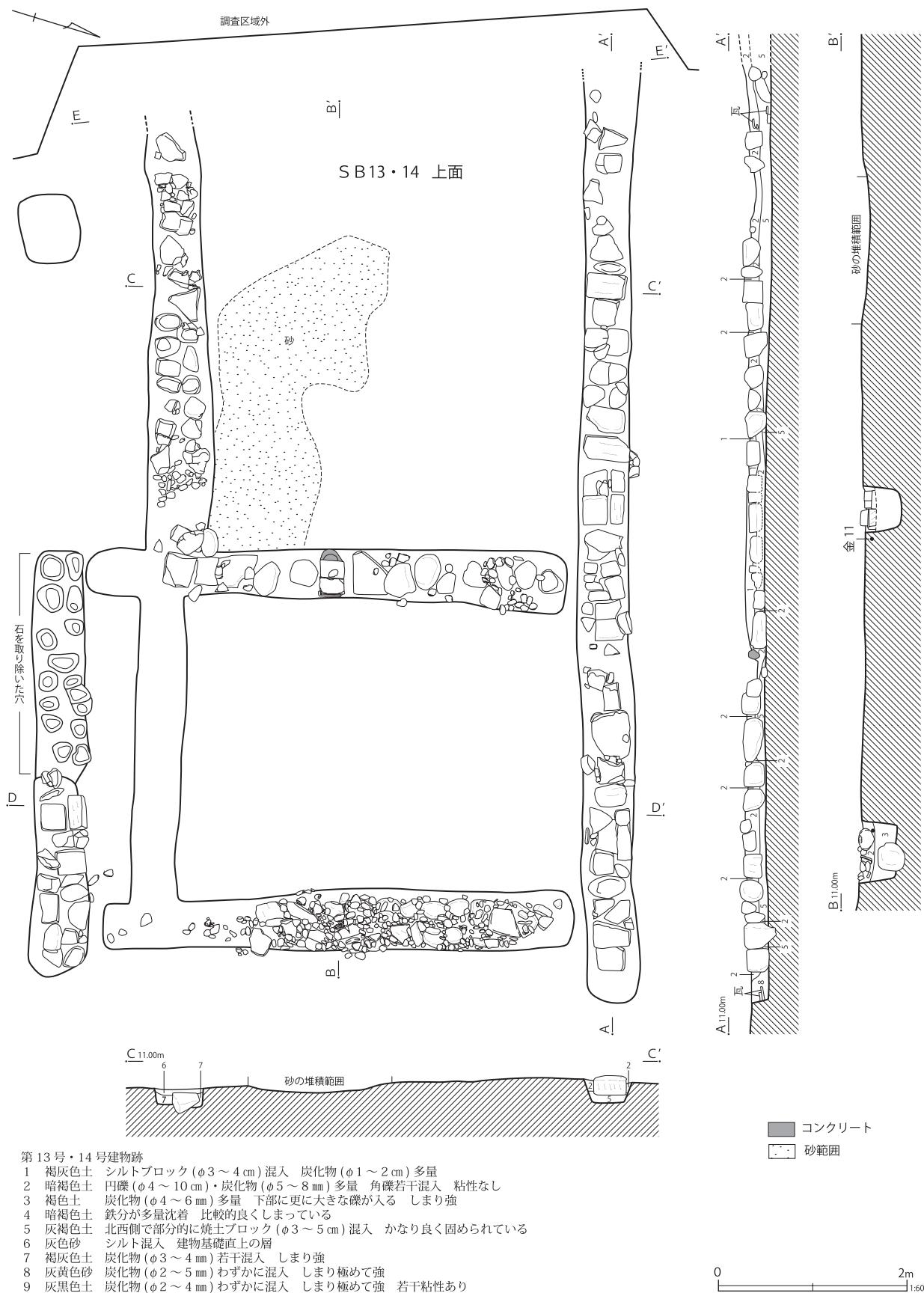
第18号建物跡（第36図）

D 6・7-e 10・1 グリッドに位置する。基礎の極一部のみ確認されている。南側は第二次調査区へと延びているが、第一次及び第二次調査時の遺構確認面の高低差により、検出されなかった可能性が考えられる。残存規模は、短軸0.87m、深さ0.42mである。基礎内には円礫が入れられている。

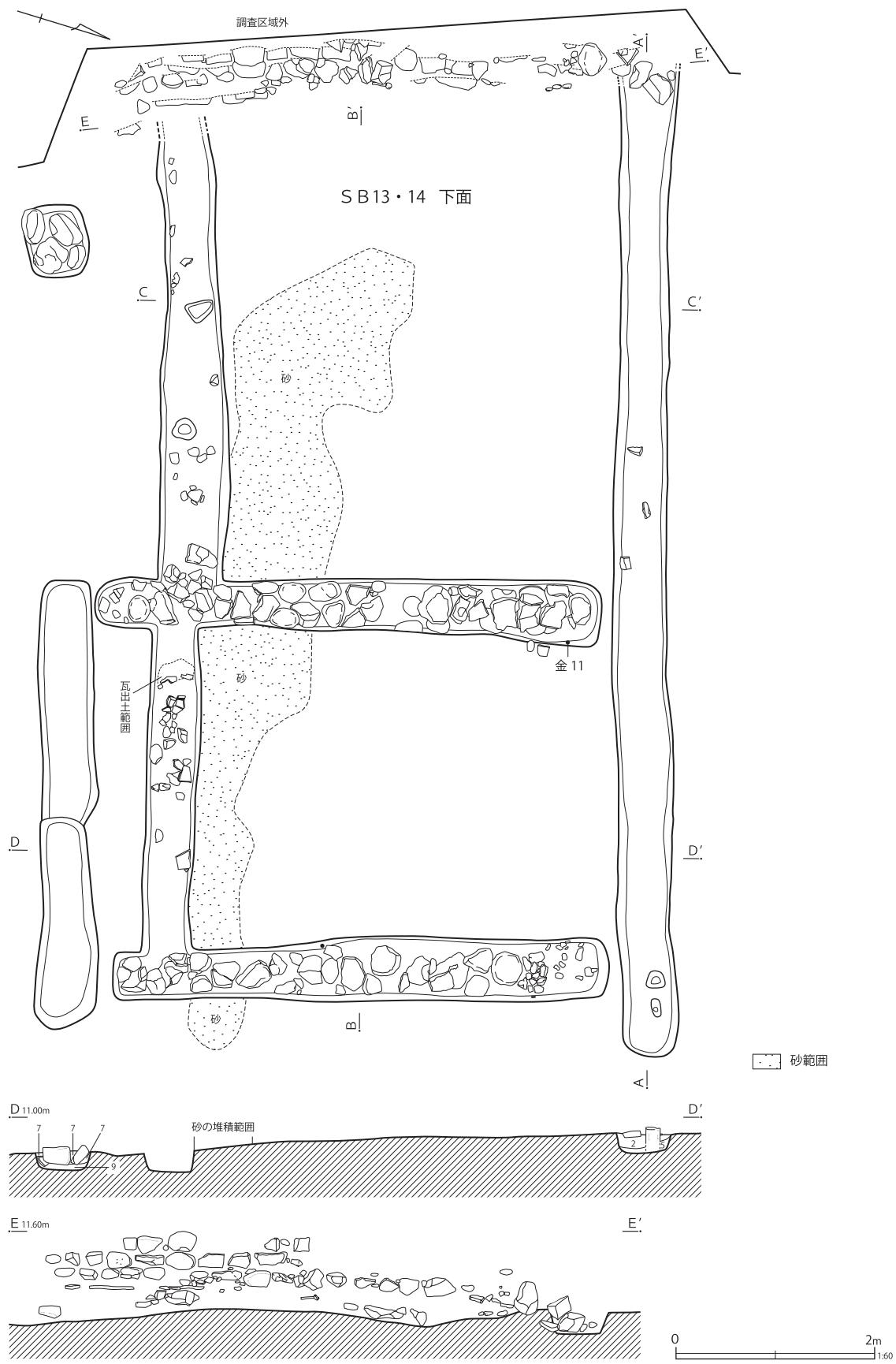
出土遺物は、第50図の129~132に陶磁器類を示した。129は瀬戸美濃系磁器の碗である。外面に赤色の上絵付を施している。130は瀬戸美濃系磁器の水滴である。時計形が推定され、外面には青・赤の色絵が施されている。131は瀬戸美濃系磁器の卵殻手環である。第63図の45~47は滑石製石筆、48は粘板岩製石板である。構築は19世紀後葉以降と推定される。

第19号建物跡（第37図）

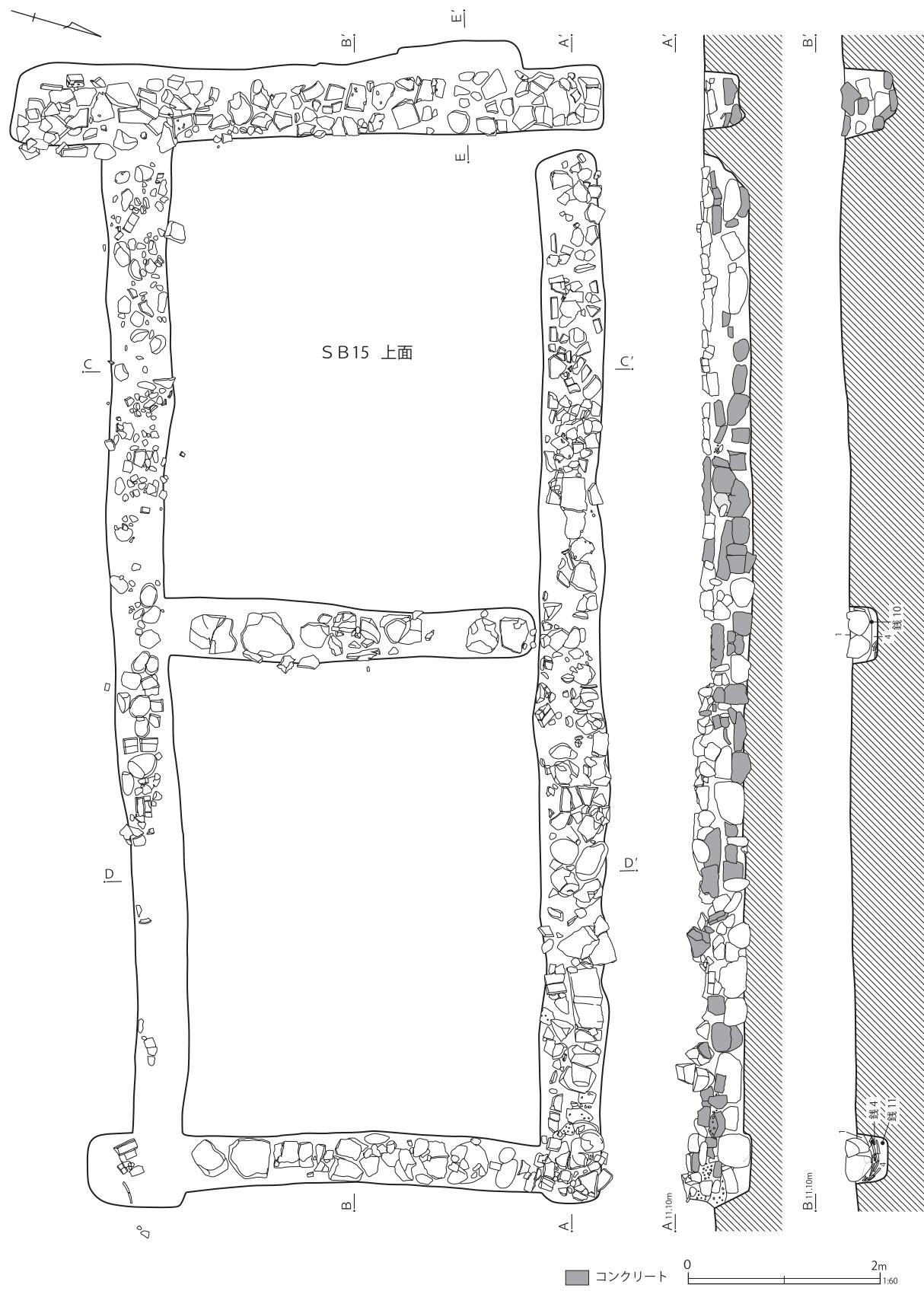
D 7-e 1 グリッドに位置する。残存規模は、長軸1.35m、短軸2.00m、深さ0.45mであ



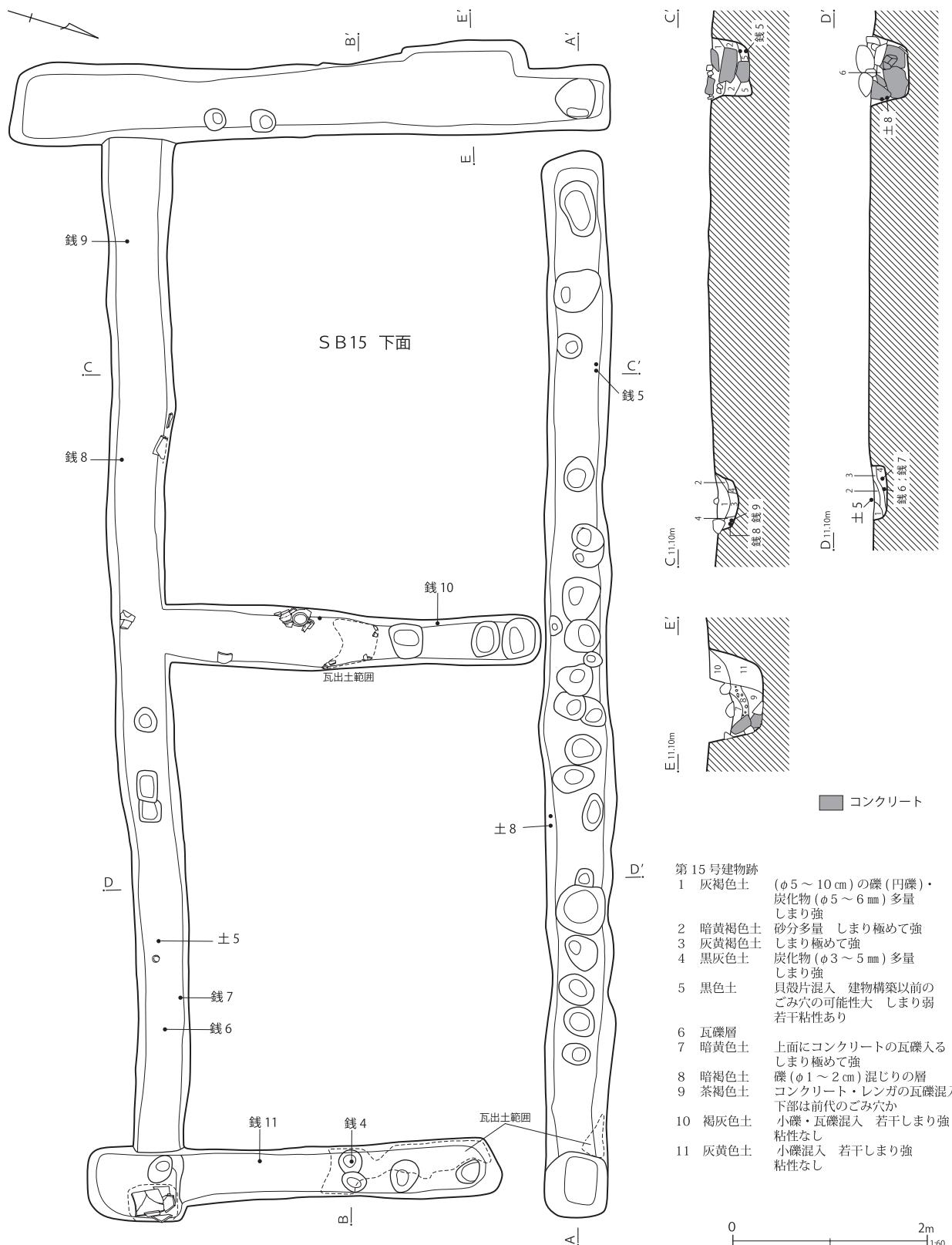
第31図 第13・14号建物跡 (1)

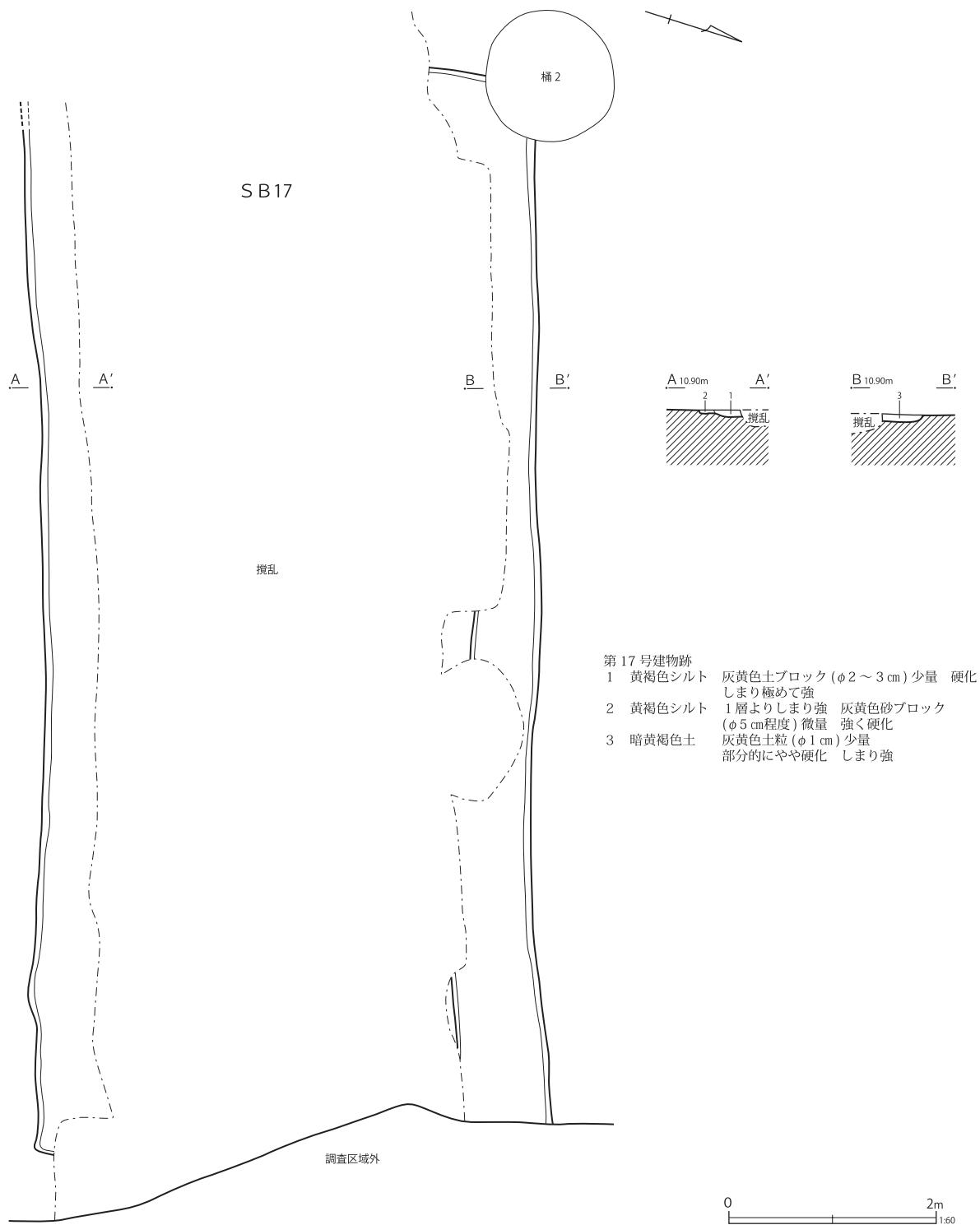


第32図 第13・14号建物跡 (2)



第33図 第15号建物跡（1）

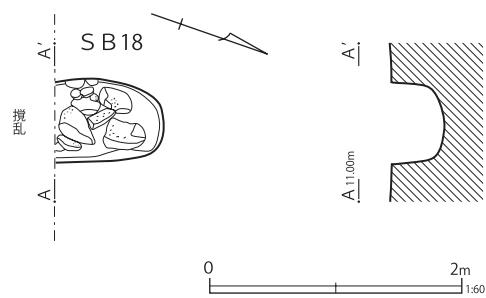




第35図 第17号建物跡

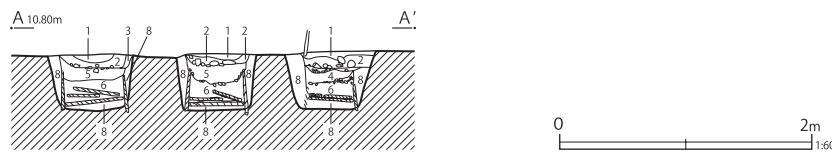
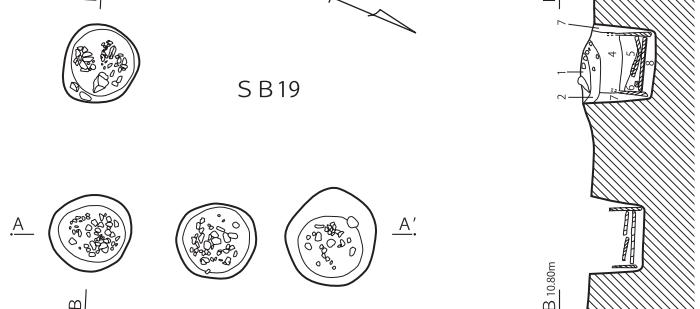
る。桶をおよそ半間（0.9m）間隔で並べたいわゆる樽地業であり、栗橋宿では類例が極めて少ない。基礎は4箇所のみ確認され、布掘りが見られないことから小規模な建物跡であった可能性が考えられる。桶内には砂と礫が敷かれ、上層は粘土で固められている。また、掘り方埋土には、砂が充填されている。桶内面にはタール状物質の付着が見られる。

出土遺物は極めて少なく、第50図の133・134

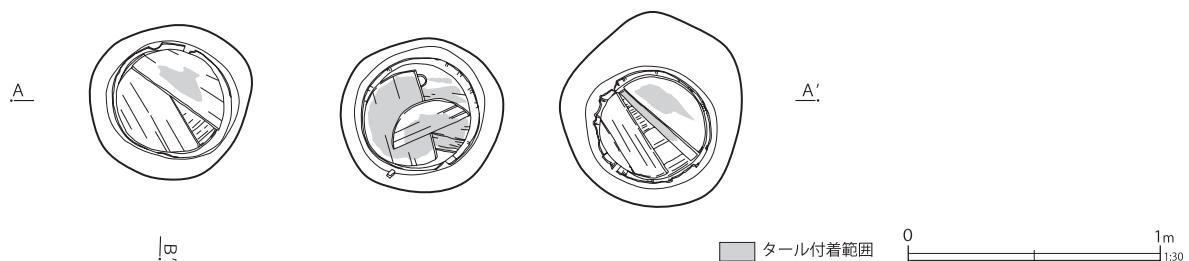


第36図 第18号建物跡

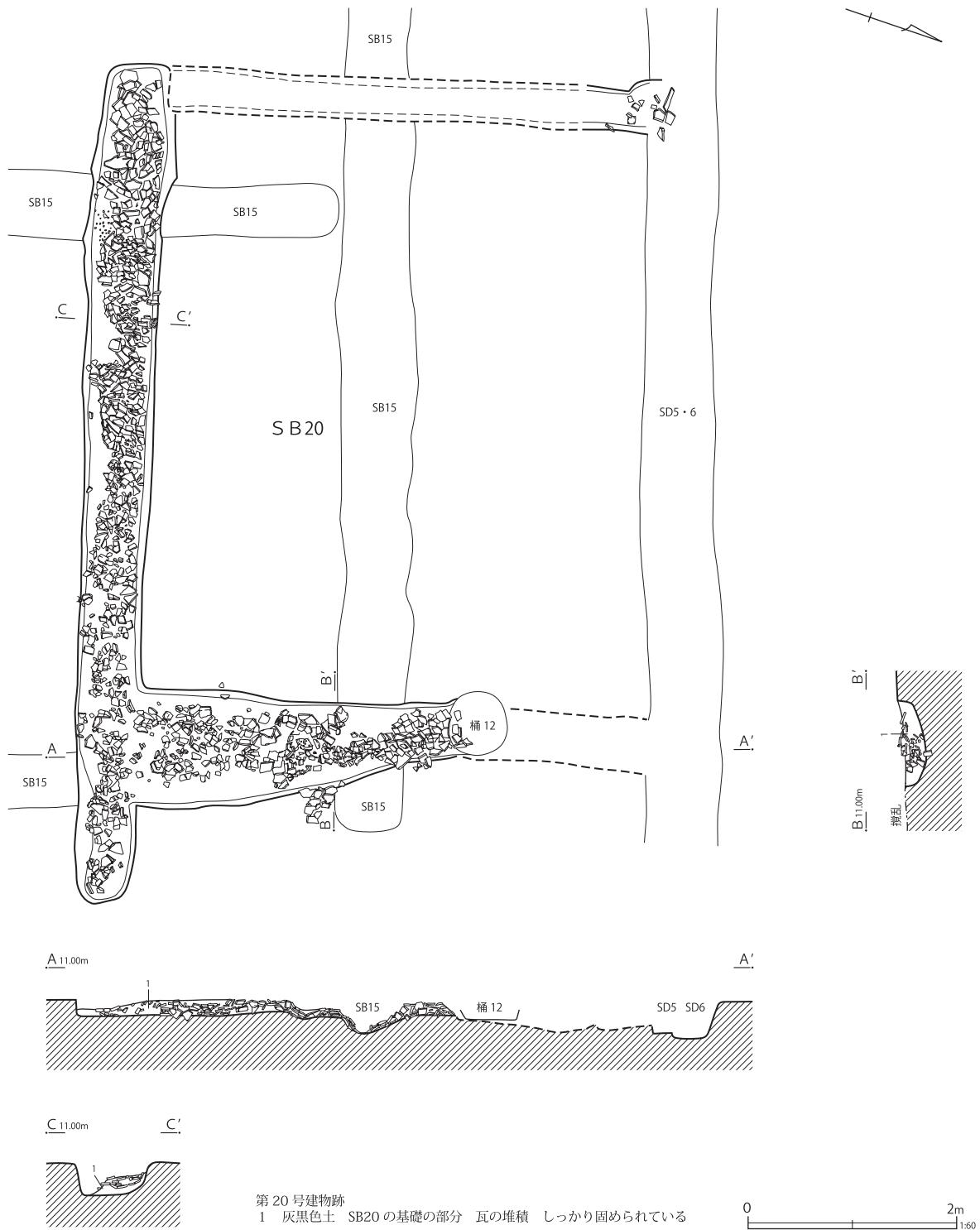
SB 19



第19号建物跡	
1	灰褐色土 粘土質 炭化物（ $\phi 3 \sim 8$ mm）混入 良く固められている
2	暗黄褐色土 粘土質 下部に（ $\phi 3$ cm～）の礫が敷かれている 良く固まっているが1層より軟らかい
3	灰褐色砂
4	灰黄色土 粘土+砂（7:3） しまり強 粘性あり
5	灰黒色砂 同色の粘土ブロック（ $\phi 2 \sim 3$ cm）10～20%含む
6	灰黒色砂 砂層 鉄分含む
7	暗黄褐色土 砂やや多量 しまり強 掘り方
8	黄褐色砂 砂層 鉄分多量 掘り方



第37図 第19号建物跡



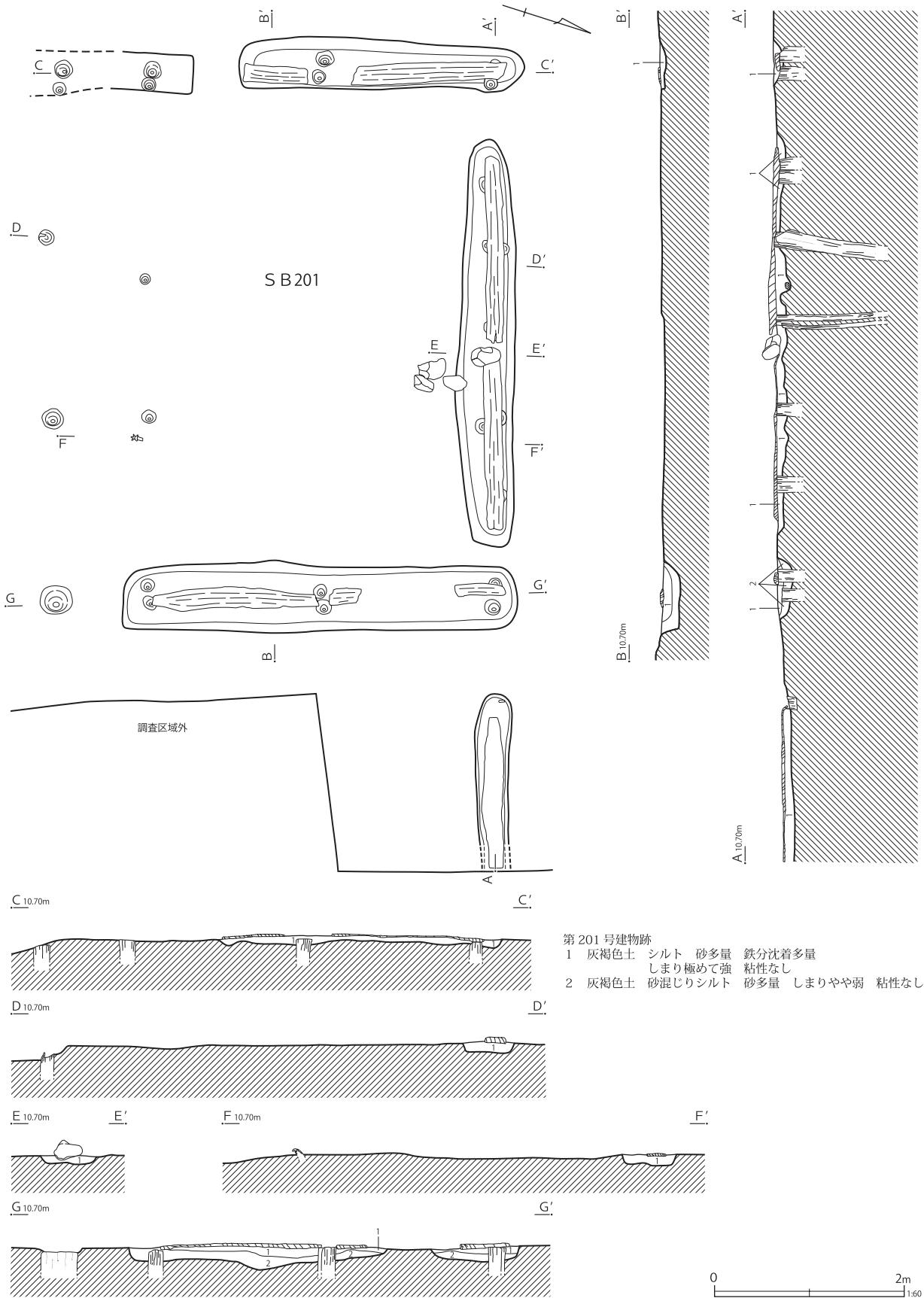
第38図 第20号建物跡

に陶磁器類を示した。133は肥前系磁器の粗製碗、

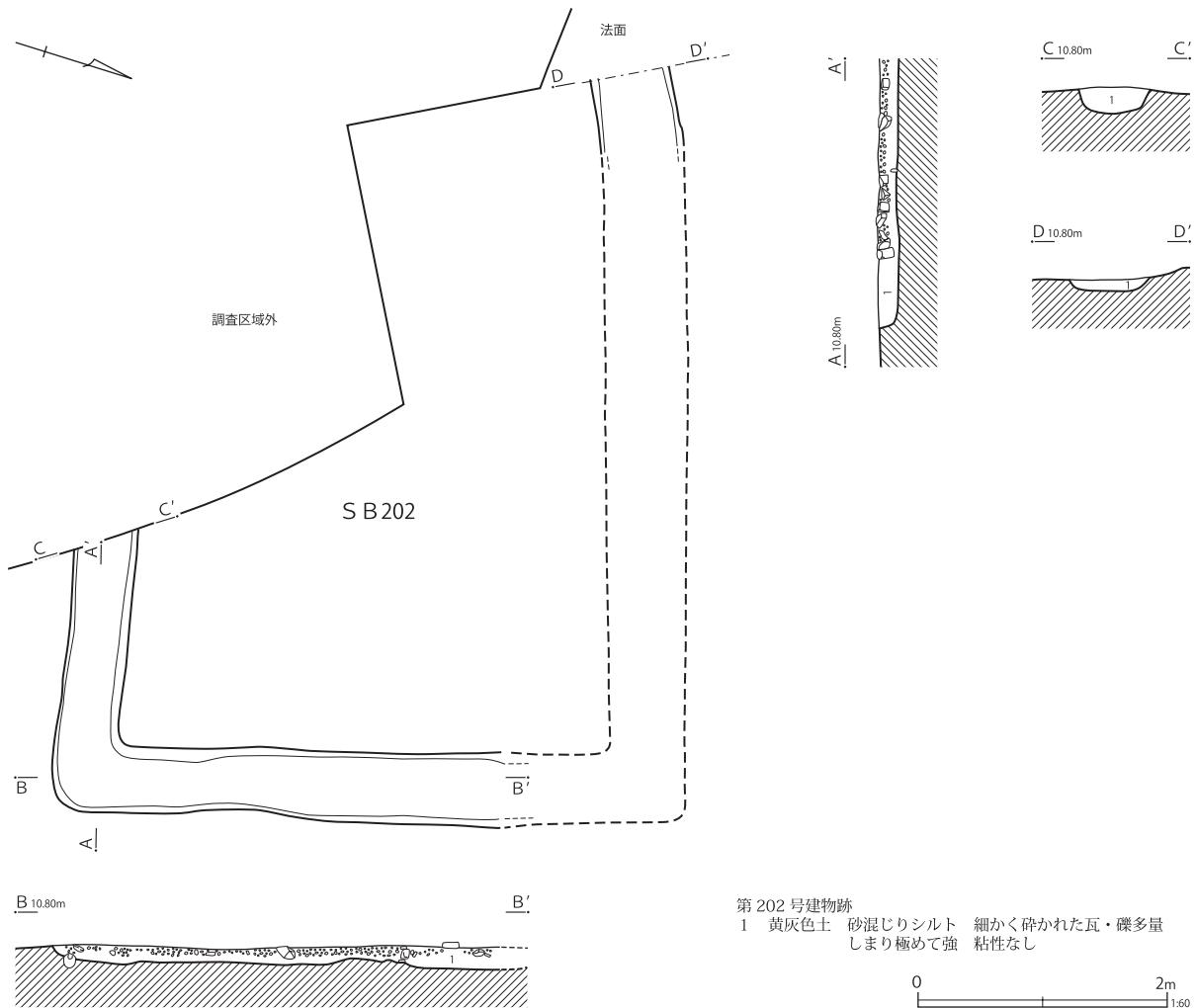
134は筒形碗である。第54図の16・17は江戸式の軒棟瓦である。

第20号建物跡 (第38図)

D 6・7-d・e 10・1 グリッドに位置する。第15号建物跡、第12号埋設桶、第5・6号溝跡、



第39図 第201号建物跡



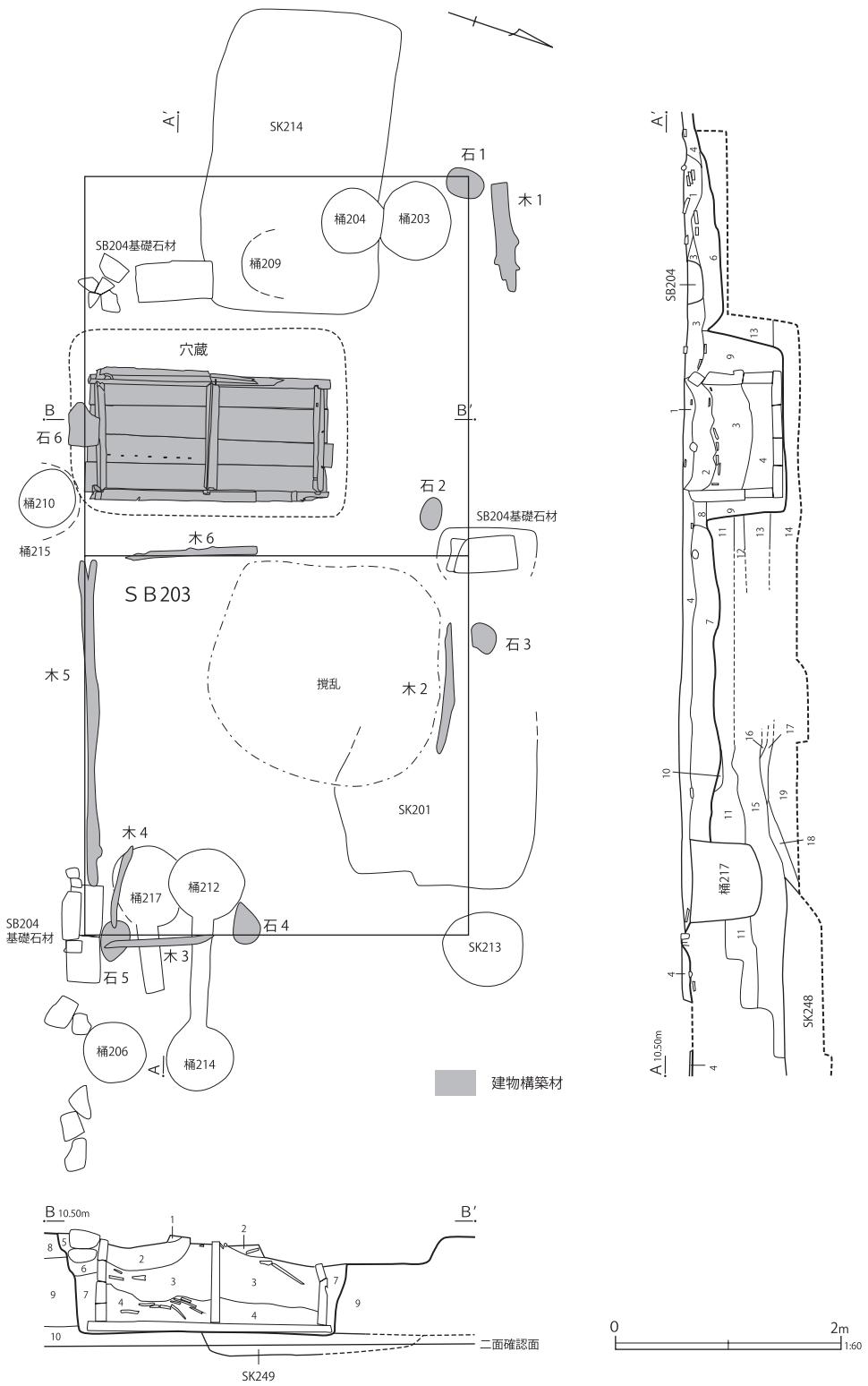
第40図 第202号建物跡

第35・38号土壙と重複している。第15号建物跡の調査中に、その下部より検出された建物跡である。第15号建物跡とは若干位置にズレが見られる。第5・6号溝跡との重複関係から、第20号建物跡から第15号建物跡への建て替え時に区画の変動が行われていると推定される。残存規模は、長軸6.00m、短軸4.40m、深さ0.20mである。南東隅には張り出し部が見られる。北辺は第5・6号溝跡との重複部にわずかに確認されるのみである。基礎内には、碎いた瓦片が極めて多量に敷かれており、覆土はしっかり固められている。

出土遺物は、第50・51図の135～159に陶磁器類を示した。145は瀬戸美濃系磁器の香炉と考えられる製品である。外面は鉄釉を掛け分けている。

底部に二次穿孔が見られ、植木鉢への転用が示唆される。148は常滑系の卸皿である。150は鮫肌釉の燭徳利である。152・153は松岡系陶器の土瓶蓋、土瓶注口部である。

第52図の1は、京都系の「つぼつぼ」に類似する土製小壺である。2は鍋のミニチュア、3は鉢のミニチュアである。第54・55図の18～25、第57図の43～47は瓦を示した。18・20・21・23は江戸式の軒桟瓦である。第60図の12・13は鉄製角釘である。第63図の49～61は石製品を示した。49～56は滑石製石筆、58は粘板岩製硯。59は砂岩製硯で裏面に刻書が見られる。60・61は粘板岩製石板である。第13・14・15号建物跡と同様に教育関連遺物の出土が目立つ。



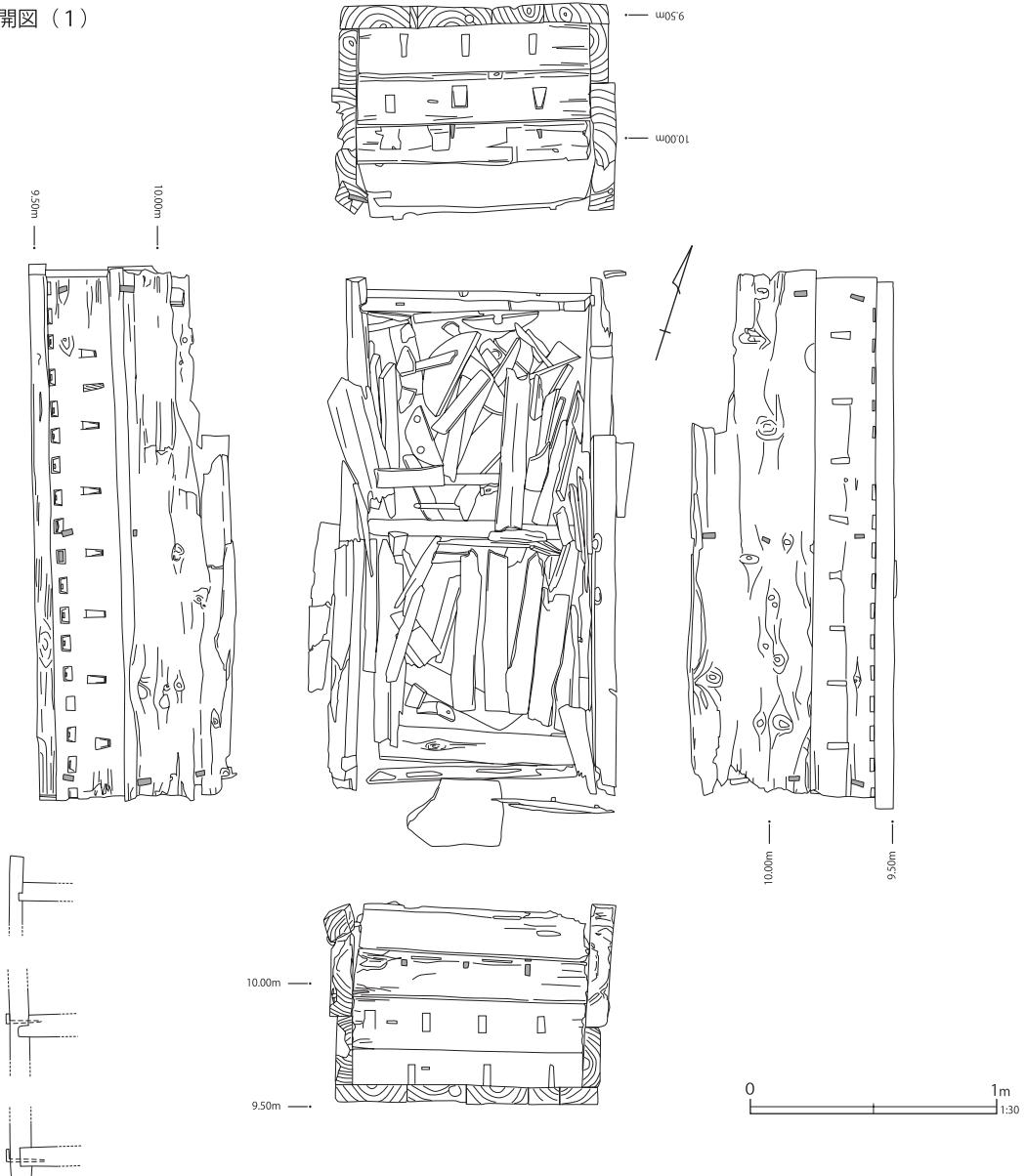
第41図 第203号建物跡 (1)

第203号建物跡 A-A'

1 暗褐色土	灰黄色粘土ブロック少量 炭化物(Φ1cm)多量 しまり弱 粘性なし	16 灰褐色シルト 17 灰褐色シルト	しまりやや弱い 粘性やや強い 炭化物(Φ10mm程度)少量 しまり・粘性弱い
2 黒褐色土	しまり強 粘性なし 石材の掘り方埋土	18 暗褐色シルト 19 暗灰色砂質シルト	炭化植物少量 しまり軟弱 粘性やや強い 遺構か 黄灰色粘土ブロック(Φ1cm)やや多量 しまり弱 粘性やや強い
3 黒褐色シルト	灰色砂がシマ状に入る しまり強 粘性なし		
4 黄灰色砂混じりシルト	一部赤褐色に変色 しまり強 粘性なし		
5 B-B' の3層・4層			
6 黄褐色シルト	炭化物(Φ1~2mm)微量 瓦片少量 しまり極めて強い 粘性やや強	1 B-B'	
7 暗黄褐色シルト	炭化物(Φ5mm)・瓦片少量 しまり極めて強い 粘性なし 人為堆積	1 暗灰色砂混じりシルト 2 黄灰色砂混じりシルト 3 明灰色砂混じりシルト 4 黑褐色土	炭化物少量 しまり強 粘性なし 部分的に鉄分の沈着 しまり強 粘性なし 木くず(板材や桶の部材)多量 しまり強 粘性なし 瓦片・魚骨多量 水分の多い土 しまりやや弱い 粘性やや強い
8 暗褐色シルト	しまり極めて強い 粘性なし	5 暗黄褐色シルト 6 暗褐色シルト 7 暗褐色シルト 8 黄褐色シルト	炭化物(Φ2mm)微量 しまり極めて強い やや粘性あり 同一層中で水平堆積が認められる 炭化物(Φ2~3mm)少量 木くず・瓦片多量 しまり強 粘性弱 円盤(Φ3~5cm)少量 炭化物(Φ5mm程度)やや多量 瓦片少量 しまり弱 粘性やや強 基本土層東壁下段断面の8層と同一 炭化物(Φ2~5mm)少量 しまり弱 粘性やや強
9 暗褐色シルト	炭化物(Φ2mm)微量 しまり極めて強い やや粘性あり	9 灰褐色砂混じりシルト 10 灰褐色シルト	炭化物(Φ2mm)微量 同一層中で水平堆積が認められる しまり極めて強い 粘性ややあり 炭化物(Φ1~2mm)微量 瓦片少量 しまり非常に強い 粘性やや強 炭化物(Φ1mm以下)微量 しまり強 粘性弱 炭化物(Φ1mm以下)微量 しまり弱 粘性強い
10 灰褐色シルト	炭化物(Φ2~3mm)少量 木くず・瓦片多量 しまり強 粘性弱		
11 暗褐色シルト	円盤(Φ3~5cm)少量 炭化物(Φ5mm程度)やや多量 瓦片少量 しまり弱 粘性やや強		
12 黑褐色シルト	炭化物(Φ2~5mm)少量 しまり弱 粘性やや強		
13 灰褐色砂混じりシルト	砂質 炭化物(Φ1mm以下)微量		
14 灰褐色シルト	炭化物(Φ1mm以下)微量		
15 暗褐色シルト	礫(Φ2~3cm)少量 磁器片含む ややしまり弱 粘性弱		

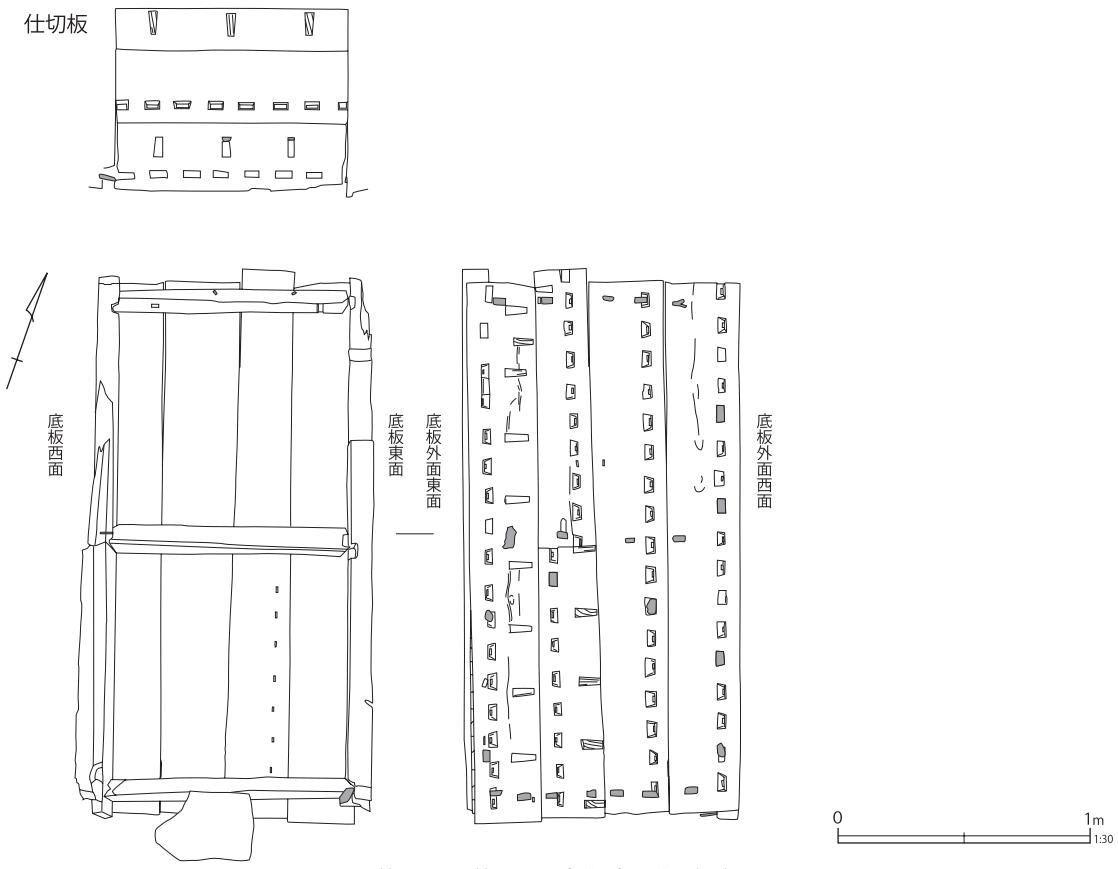
第42図 第203号建物跡 (2)

穴蔵展開図 (1)



第43図 第203号建物跡穴蔵 (1)

穴蔵展開図（2）



第44図 第203号建物跡穴蔵（2）

第201号建物跡（第39図）

D 7-f・g 1 グリッドに位置する。残存規模は、長軸8.40m、短軸4.78m、深さ0.24mである。「日」字形が推定される布掘り基礎であるが、南側の布掘りは見られず、松杭のみが残存している。また布掘り北東部は調査区域外へと延びている。基礎内は、底面におよそ1.4mの松杭が二本一組で布掘り西辺及び東辺は1間（1.8m）、北辺は半間（0.9m）間隔で打ち込まれている。また、南辺は1間間隔で一本ずつ打ち込まれている。布掘り内の松杭の上には胴木が敷かれ、その上に一部礫が据えられている。布掘り内は、砂を多量に含むシルトが充填され、版築されている。胴木に使用された木材の樹種はマツ属である（自然科学分析4参照）。

出土遺物は極めて少なく、第51図160に肥前系磁器の蓋物を図示した。

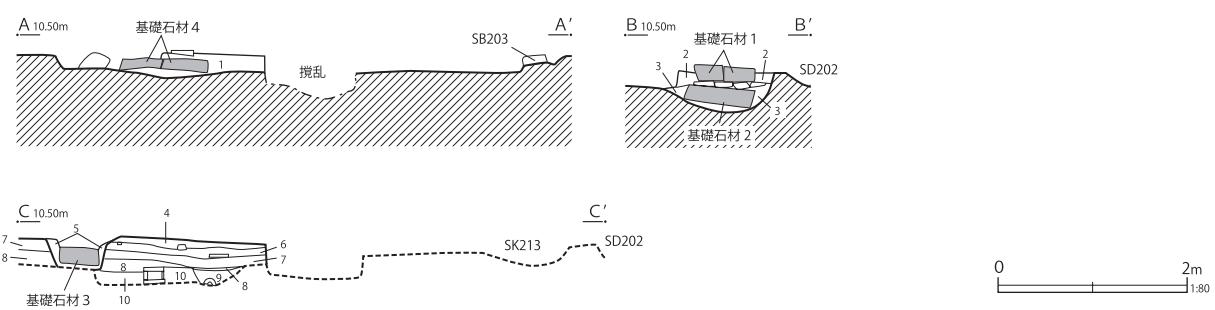
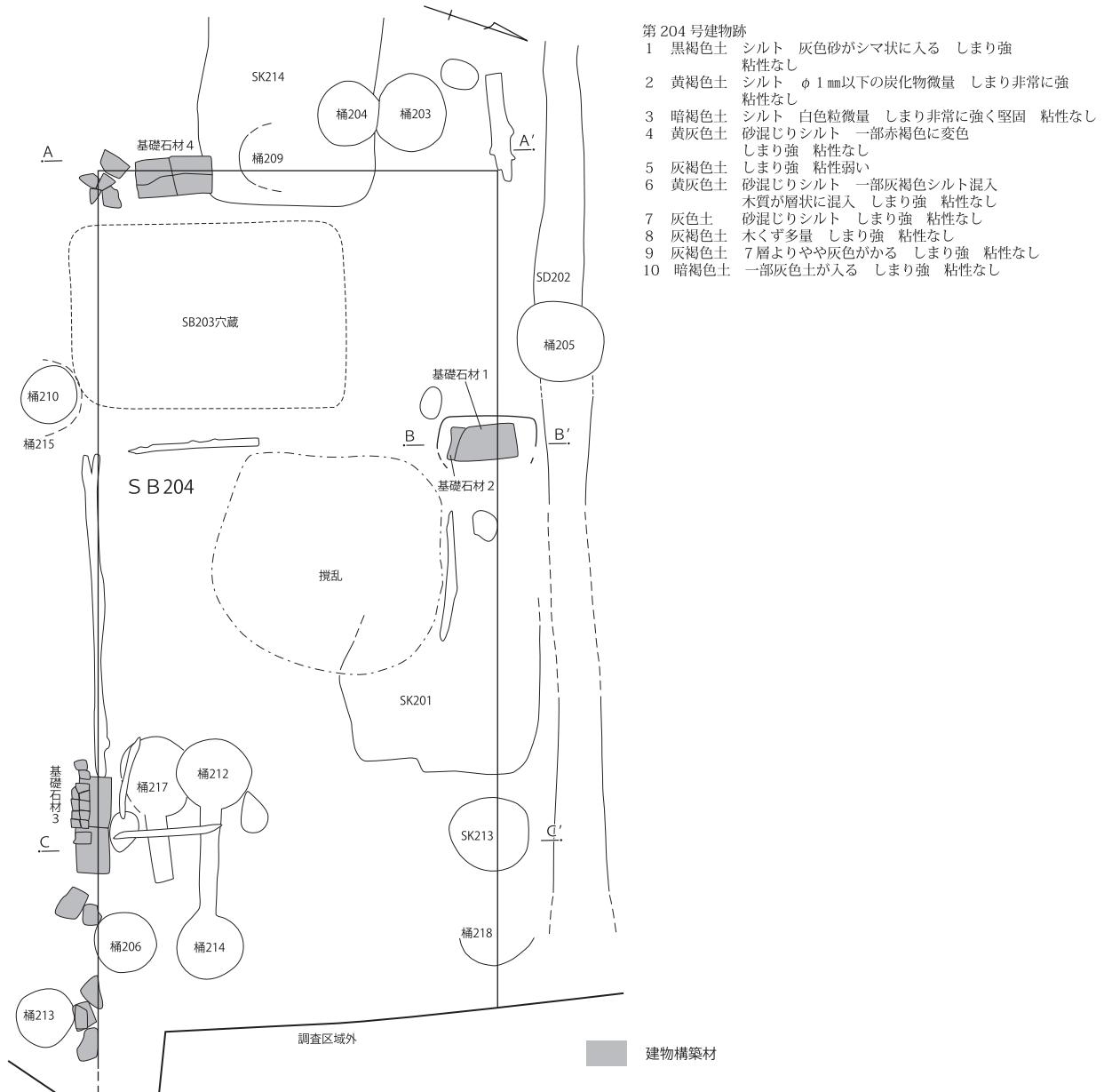
第202号建物跡（第40図）

D 6-f 9・10 グリッドに位置する。残存規模は、長軸5.64m、短軸4.41m、深さ0.20mである。基礎南辺及び北辺の西側は調査区域外へと延びている。「口」字形の布掘り基礎であり、基礎内にはしまりが極めて強いシルトに細かく碎かれた瓦と礫が多量に敷かれている。

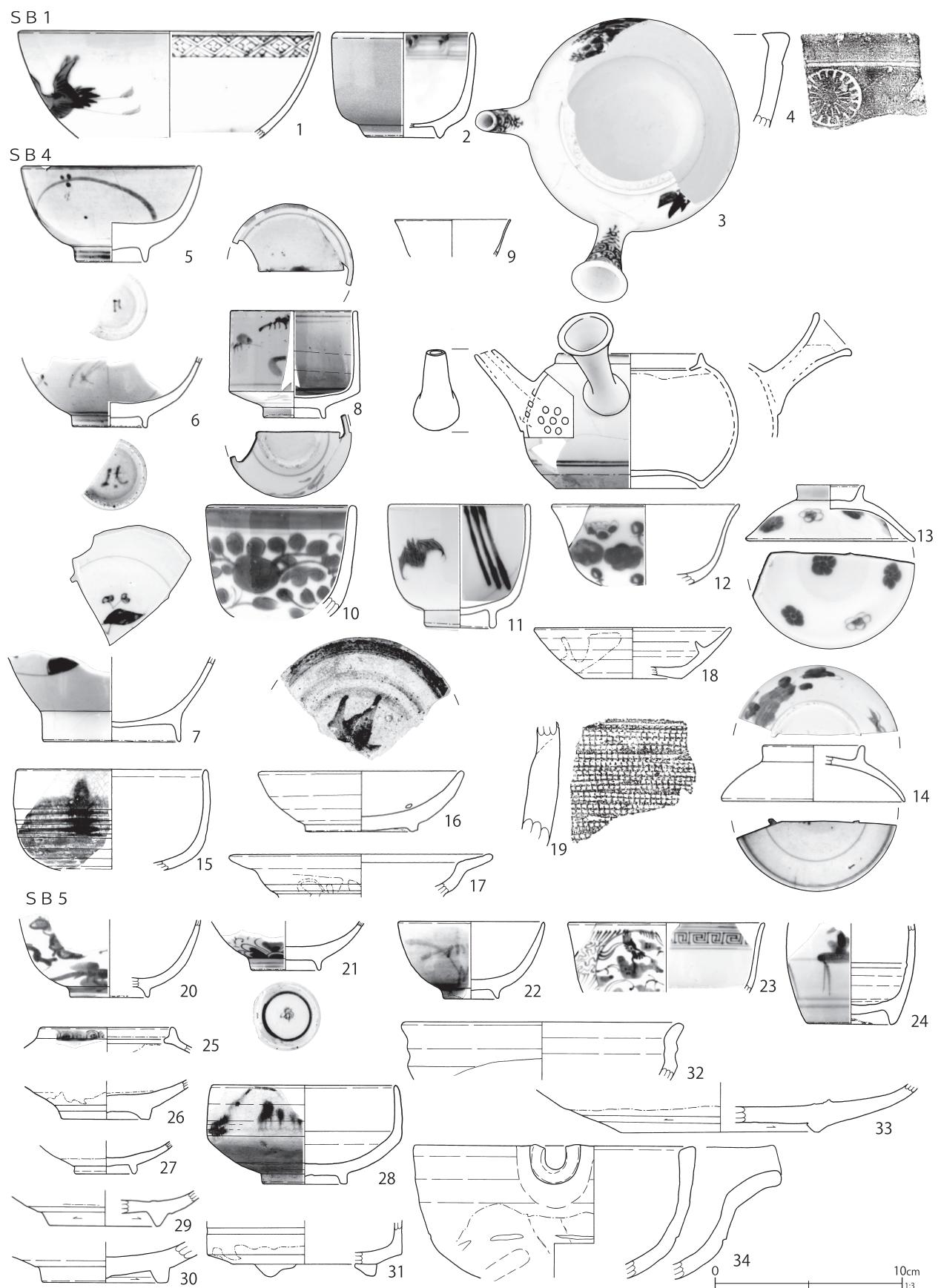
遺物は極めて少なく、第51図161にかわらけ小皿を図示した。

第203号建物跡・穴蔵（第41～44図）

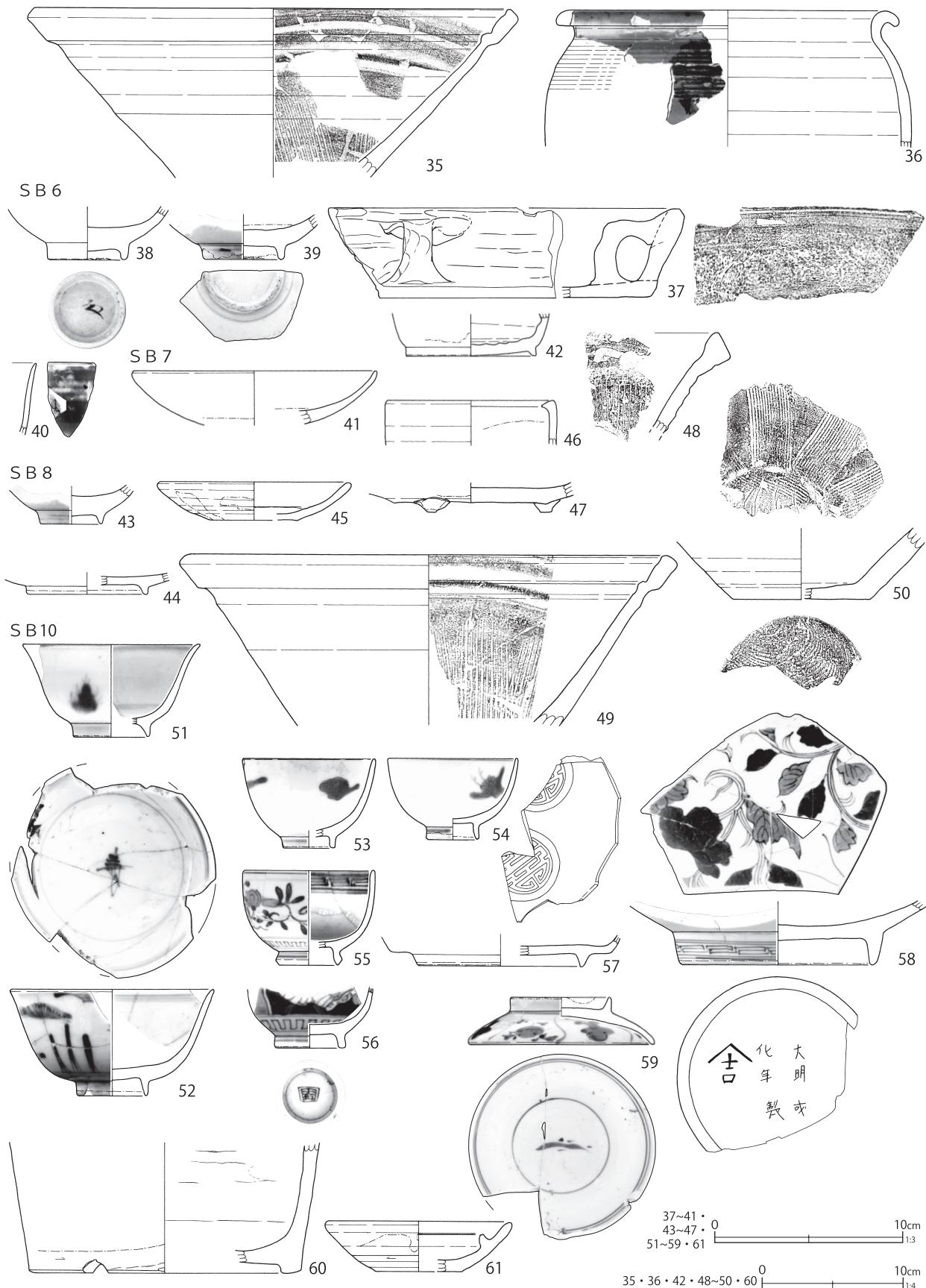
D 7-f 1 グリッドに位置する。栗橋宿跡唯一の事例である木製枠形穴蔵を伴う建物跡である。第204号建物跡と重複する。第3層の整地層が穴蔵内にまで達し、整地層を掘り込んで第204号建物跡が構築されている。建物跡の規模は、長軸6.72m、短軸3.42mである。穴蔵の規模は、長軸2.16m、短軸1.20m、深さ0.90mである。



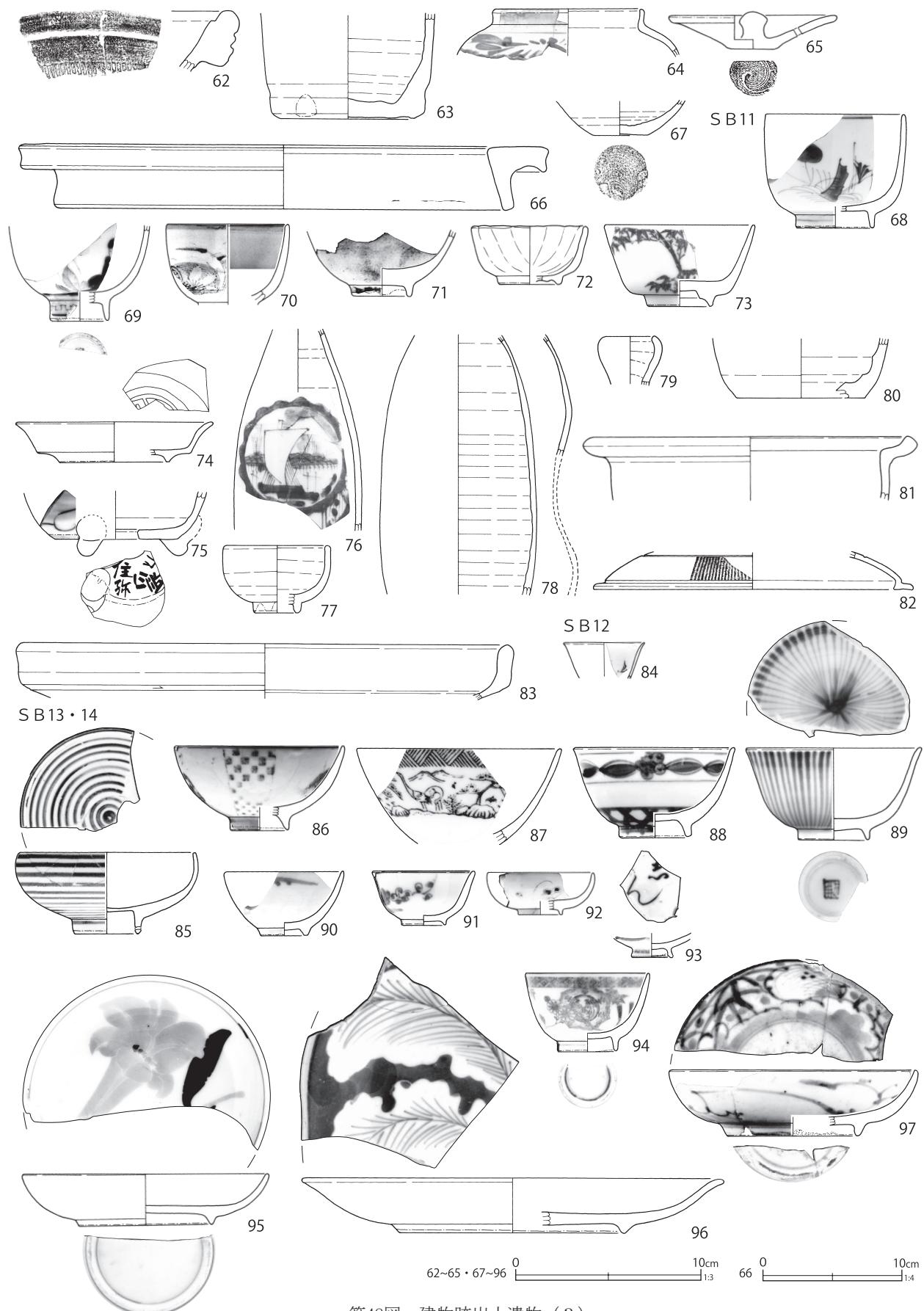
第45図 第204号建物跡



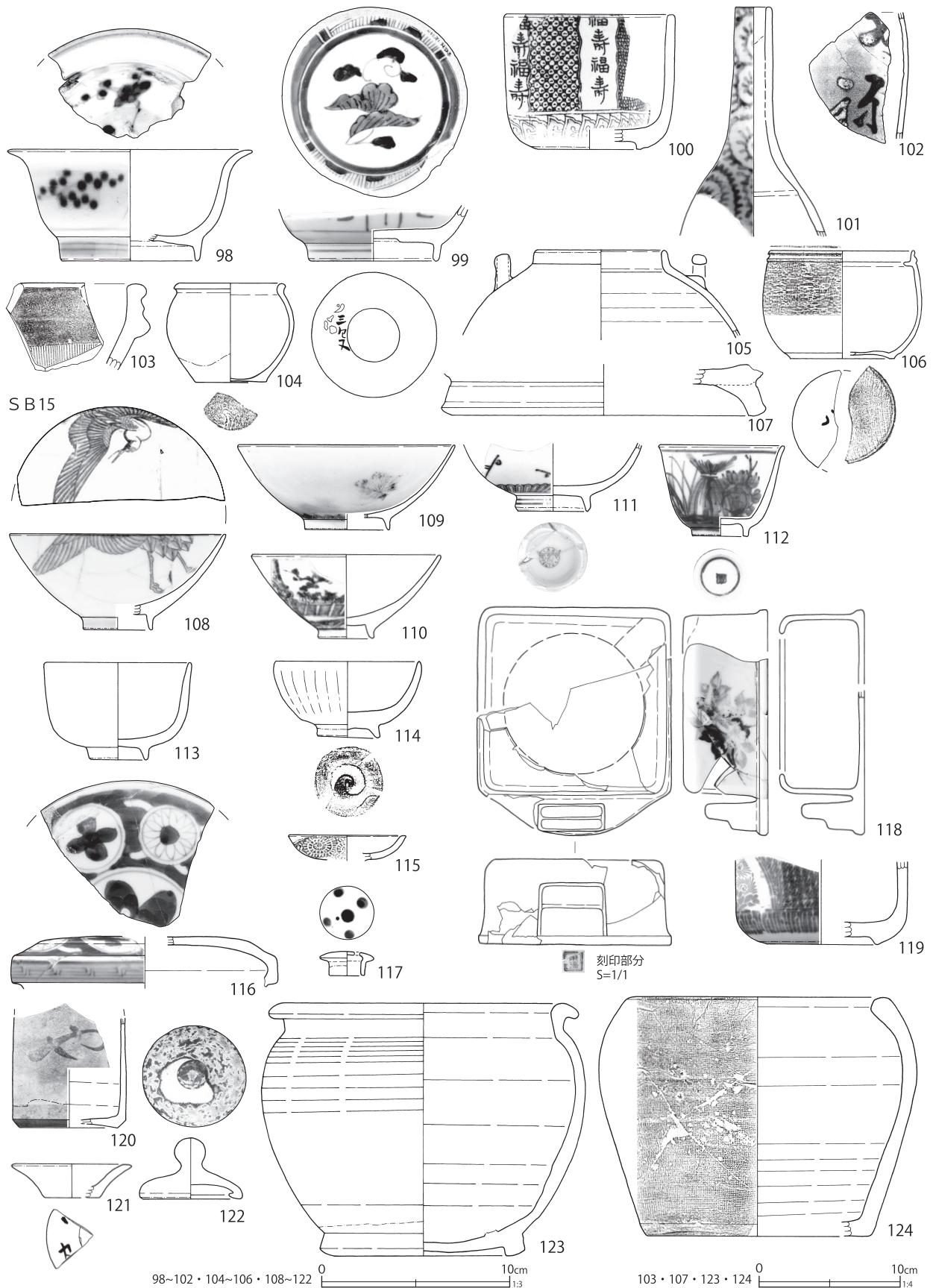
第46図 建物跡出土遺物 (1)



第47図 建物跡出土遺物 (2)



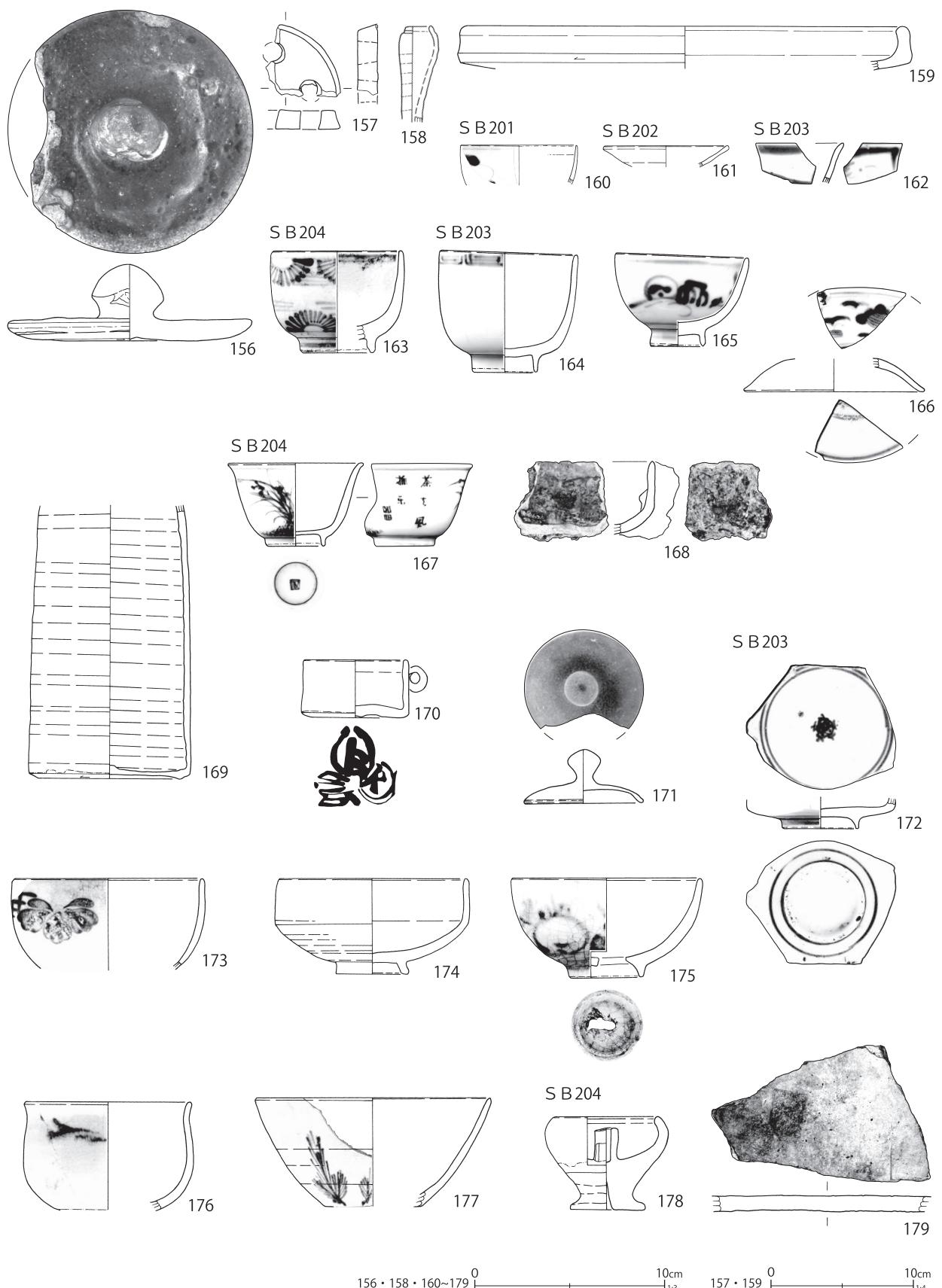
第48図 建物跡出土遺物 (3)



第49図 建物跡出土遺物 (4)



第50図 建物跡出土遺物 (5)



第51図 建物跡出土遺物 (6)

第3表 建物跡出土遺物観察表(1) (第46~51図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	(14.2)	[5.1]	—	K	15	普通	白	SB1	肥前系 大碗 施釉 染付	
2	磁器	碗	6.7	5.1	3.7	—	50	良好	白	SB1	瀬戸美濃系 内面施釉, 染付 外面瑠璃釉 SK4接合	41-1
3	磁器	急須	7.0	6.6	7.2	—	70	良好	白	SB1	瀬戸美濃系 施釉 外面酸化コバルト染付 SK4接合	41-2
4	瓦質土器	火鉢	—	[6.2]	—	CHIK	5	普通	浅黄橙	SB1	脚付火鉢 やや酸化炎焼成気味 刻印菊花	
5	磁器	碗	(9.2)	5.1	(3.6)	IK	50	良好	灰白	SB4	肥前系 施釉 外面染付	
6	磁器	碗	—	[3.7]	3.9	K	50	良好	灰白	SB4	肥前系 施釉 外面染付	
7	磁器	碗	—	[4.4]	7.2	K	30	良好	白	SB4	肥前系 施釉 染付	
8	磁器	碗	(6.6)	5.7	3.2	—	40	良好	白	SB4	肥前系 施釉 染付 釉ムラあり	41-3
9	磁器	壺	(6.1)	[2.0]	—	K	20	良好	白	SB4	瀬戸美濃系 施釉	
10	磁器	碗	(7.5)	[5.9]	—	K	30	良好	白	SB4	瀬戸美濃系 施釉 外面染付	
11	磁器	碗	7.4	6.6	3.4	K	50	良好	白	SB4	瀬戸美濃系 施釉 染付	41-4
12	磁器	碗	(9.8)	[4.3]	—	K	30	良好	白	SB4	瀬戸美濃系 施釉 外面染付	
13	磁器	蓋	(8.8)	3.0	(3.5)	K	50	良好	白	SB4	瀬戸美濃系 端反碗 施釉 染付	
14	磁器	蓋	(9.8)	3.0	(5.3)	K	40	良好	白	SB4	肥前系 広東碗 施釉 染付	
15	陶器	碗	(10.0)	[5.3]	—	IK	20	良好	灰白	SB4	瀬戸美濃系 内面灰釉 外面鉄釉灰釉掛け分け	
16	陶器	皿	(10.8)	3.3	(6.0)	K	30	良好	灰白	SB4	No.1 瀬戸美濃系 長石釉 内面鉄絵 被熱か	41-5
17	陶器	皿	(13.6)	[2.3]	—	EIK	10	良好	灰白	SB4	瀬戸美濃系 織部 銅緑釉	41-6
18	陶器	油受皿	10.4	2.7	5.2	EK	40	普通	にぶい赤褐	SB4	瀬戸美濃系 柿釉 外面拭き取り 重ね焼き痕	
19	瓦質土器	火鉢	—	[6.6]	—	CEHI	5	普通	黒	SB4	外面ローラースタンプ	
20	磁器	碗	—	[4.1]	—	K	20	良好	白	SB5	肥前系 施釉 外面染付	
21	磁器	碗	—	[2.6]	3.5	K	40	普通	灰白	SB5	肥前系 施釉 外面染付	
22	磁器	壺	(7.7)	4.1	(2.8)	K	30	普通	白	SB5	肥前系 施釉 外面染付	
23	磁器	碗	(10.4)	[3.7]	—	K	10	良好	白	SB5	肥前系 施釉 染付	
24	磁器	徳利	—	[5.3]	4.5	K	50	良好	白	SB5	肥前系 外面施釉, 染付	
25	磁器	急須	(7.0)	[1.3]	—	K	15	良好	白	SB5	瀬戸美濃系 施釉 外面酸化コバルト染付	41-7
26	磁器	皿	—	[2.1]	(4.7)	K	25	普通	白	SB5	肥前系 施釉 見込み蛇の目釉剥ぎ	
27	陶器	碗	—	[1.8]	3.2	H	30	普通	灰白	SB5	京都信楽系 灰釉	
28	陶器	碗	(9.6)	5.2	(4.4)	I	40	良好	白	SB5	瀬戸美濃系 灰釉 外面鉄・須絵	
29	陶器	皿	—	[1.9]	(6.0)	K	20	良好	灰白	SB5	瀬戸美濃系 灰釉 内面輪状重ね焼き痕	
30	陶器	片口鉢	—	[2.1]	(6.7)	IK	10	良好	灰白	SB5	瀬戸美濃系 灰釉 目跡2残存	
31	陶器	香炉	—	[3.0]	(7.7)	—	20	良好	灰黄	SB5	瀬戸美濃系 外面灰釉 煤付着 被熱か	
32	陶器	鉢	(14.6)	[3.1]	—	EK	10	良好	灰黄	SB5	瀬戸美濃系 灰釉 体部凹み	
33	陶器	鉢	—	[2.6]	10.4	EI	70	良好	灰白	SB5	瀬戸美濃系 灰釉 内面目跡2残存 桶5接合	
34	陶器	片口鉢	(14.7)	[7.0]	—	EIK	20	良好	灰白	SB5	瀬戸美濃系 灰釉	
35	陶器	播鉢	(33.7)	[11.9]	—	EHK	20	良好	灰白	SB5	瀬戸美濃系 鉄釉	41-8
36	陶器	甕	(22.4)	[9.7]	—	EK	20	良好	灰白	SB5	瀬戸美濃系 柿釉 外面鉄釉流し掛け	41-9
37	瓦質土器	焙烙	—	4.7	—	EHIK	5	普通	褐灰	SB5	砂目底 体部下半弱いケズリ シワ状痕残存	41-10
38	磁器	碗	—	[2.8]	3.9	K	80	良好	灰白	SB6	No.1 肥前系 施釉 外面染付	
39	磁器	碗	—	[2.3]	(4.0)	K	50	良好	白	SB6	肥前系 施釉 外面染付 見込み蛇の目釉剥ぎ	
40	磁器	壺	—	[3.7]	—	K	5	良好	白	SB6	瀬戸美濃系 施釉 外面下位鉄釉, 染付	41-11
41	磁器	皿	(12.8)	[2.8]	—	IK	20	良好	にぶい橙	SB7	肥前系 施釉 見込み蛇の目釉剥ぎ	
42	陶器	徳利	—	[3.0]	(9.2)	IK	15	良好	灰黄	SB7	瀬戸美濃系 外面灰釉 内面強いロクロナデ	
43	磁器	碗	—	[2.1]	(3.1)	K	40	良好	灰白	SB8	肥前系 施釉 外面染付	
44	陶器	皿	—	[1.1]	(6.2)	EIK	10	良好	灰白	SB8	瀬戸美濃系 灰釉	
45	陶器	灯明皿	(10.0)	2.0	(4.5)	K	30	良好	にぶい黄橙	SB8	瀬戸美濃系 柿釉 底部拭き取り 内面輪状重ね焼き痕	41-12
46	陶器	香炉	(8.8)	[2.4]	—	I	20	良好	灰白	SB8	No.4 瀬戸美濃系 灰釉	
47	陶器	香炉	—	[1.5]	(8.1)	IK	30	良好	灰黄	SB8	瀬戸美濃系 鉄釉	
48	陶器	播鉢	—	[5.3]	—	DEHIK	5	良好	にぶい黄橙	SB8	丹波系 外面強いナデ 内面降灰	
49	陶器	播鉢	(33.8)	[12.1]	—	EHIK	30	良好	灰白	SB8	瀬戸美濃系 鉄釉	41-13
50	陶器	播鉢	—	[5.0]	(9.8)	EHK	20	普通	暗赤灰	SB8	瀬戸美濃系 錫釉 回転糸切	
51	磁器	碗	(9.3)	4.9	(4.1)	—	30	普通	白	SB10	瀬戸美濃系 施釉 染付	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
52	磁器	碗	10.7	5.6	3.6	K	85	良好	白	SB10	瀬戸美濃系 施釉 染付	
53	磁器	坏	(6.9)	4.7	(2.7)	—	40	良好	白	SB10	瀬戸美濃系 施釉 外面染付	
54	磁器	坏	(6.8)	4.2	2.6	—	50	良好	白	SB10	瀬戸美濃系 施釉 外面染付	
55	磁器	坏	(6.8)	5.0	(3.1)	K	40	良好	白	SB10	肥前系 施釉 染付 高台面取り	41-14
56	磁器	碗	—	[3.2]	3.4	K	35	普通	白	SB10	肥前系 施釉 外面染付 幅広高台	
57	磁器	皿	—	[1.7]	(4.3)	—	35	良好	白	SB10	瀬戸美濃系 施釉 内面型押寿文2	41-15
58	磁器	皿	—	[3.3]	(10.0)	—	50	良好	白	SB10	肥前系 施釉 染付 高台内釘書き「舍」	58-7
59	磁器	蓋	9.7	2.5	5.2	—	90	良好	白	SB10	肥前系 施釉 染付	
60	陶器	植木鉢	—	[9.2]	(17.3)	HK	20	良好	灰白	SB10	瀬戸美濃系 外面灰釉	
61	陶器	油受皿	(9.6)	2.6	(4.6)	K	20	良好	灰	SB10	瀬戸美濃系 柿釉 底部拭き取り	
62	陶器	擂鉢	—	[3.2]	—	EIK	5	良好	灰赤	SB10	堺明石系	
63	陶器	徳利	—	[5.6]	7.3	IK	80	良好	灰白	SB10	瀬戸美濃系 灰釉 底部拭き取り	42-1
64	陶器	土瓶	(7.8)	[2.5]	—	—	5	良好	淡黄	SB10	外面白土染付	
65	陶器	蓋	(9.1)	2.0	(2.8)	—	30	良好	灰白	SB10	急須の蓋 外面白土化粧, 施釉, 鉄絵 回転糸切	
66	瓦質土器	竈鍔	(38.3)	4.6	(33.2)	CEIK	20	普通	にぶい黄橙	SB10	煤付着	42-2
67	かわらけ	小皿	—	[1.8]	3.9	HIK	80	普通	橙	SB10	内面強いロクロナデ 回転糸切(右)	
68	磁器	碗	(7.4)	6.1	(4.0)	K	35	普通	白	SB11	瀬戸美濃系 施釉 外面染付	
69	磁器	碗	—	[5.1]	(3.0)	K	20	普通	白	SB11	瀬戸美濃系 施釉 外面染付	
70	磁器	碗	(6.5)	[4.4]	—	K	20	良好	白	SB11	瀬戸美濃系 施釉 染付	
71	磁器	碗	—	[3.5]	(3.0)	—	60	普通	にぶい橙	SB11	肥前系 施釉 外面染付 被熱か	
72	磁器	坏	(5.9)	3.2	(3.2)	—	40	良好	白	SB11	瀬戸美濃系 施釉 型成形	42-3
73	磁器	坏	(4.0)	4.3	3.3	K	50	良好	白	SB11	瀬戸美濃系 施釉 外面銅版転写染付	
74	磁器	皿	(10.5)	2.2	(5.8)	K	15	普通	白	SB11	瀬戸美濃系 施釉 内面型押寿文	42-4
75	磁器	植木鉢	—	[3.5]	(6.6)	K	20	良好	白	SB11	瀬戸美濃系 外面施釉, 染付 底部墨書	
76	磁器	爛徳利	—	[10.7]	—	K	20	良好	白	SB11	肥前系 施釉 外面染付	
77	陶器	坏	(5.4)	3.6	(2.4)	IK	40	良好	灰白	SB11	瀬戸美濃系 灰釉	
78	陶器	徳利	—	[14.0]	—	I	20	良好	灰	SB11	外面鉄釉 体部凹み	42-5
79	陶器	爛徳利	(2.6)	(2.6)	—	—	30	良好	灰白	SB11	京都信楽系 灰釉 口縁銅緑釉流し掛け	
80	土師質土器	植木鉢	—	[3.2]	[7.0]	CHIK	15	良好	にぶい黄橙	SB11	内面強いロクロナデ	
81	陶器	鍋	(16.9)	[3.4]	—	I	20	良好	灰白	SB11	両手鍋 柿釉	
82	陶器	蓋	(17.2)	[2.0]	—	IK	10	良好	にぶい黄橙	SB11	行平鍋の蓋 内面柿釉 外面トビガンナ	
83	土師質土器	焰烙	(35.0)	[2.9]	—	CEHIK	15	普通	灰白	SB11	砂目底 底部外周ケズリ	
84	磁器	坏	[4.3]	[1.9]	—	—	5	良好	白	SB12	瀬戸美濃系 施釉 内面上絵付	
85	磁器	碗	(9.4)	4.3	(3.4)	—	30	良好	白	SB13	瀬戸美濃系 施釉 ゴム印版染付 • 14	
86	磁器	碗	(9.1)	4.6	(3.0)	K	45	普通	白	SB13	瀬戸美濃系 施釉 外面多彩 子供茶碗 • 14	
87	磁器	碗	(10.8)	[5.1]	—	K	20	良好	白	SB13	瀬戸美濃系 施釉 外面ゴム印版染付 • 14	
88	磁器	碗	8.6	4.8	3.6	K	95	良好	白	SB13	瀬戸美濃系 酸化クロム釉 外面染付 • 14	
89	磁器	碗	(9.3)	5.0	3.7	K	60	普通	白	SB13	瀬戸美濃系 施釉 染付 • 14	
90	磁器	坏	(6.2)	3.4	(2.6)	K	40	良好	白	SB13	肥前系 施釉 外面染付 • 14	
91	磁器	坏	(5.4)	2.9	(2.3)	K	45	良好	白	SB13	瀬戸美濃系 施釉 外面染付 • 14	
92	磁器	坏	(5.6)	2.3	(2.4)	K	30	良好	白	SB13	肥前系 施釉 外面色絵 • 14	
93	磁器	坏	—	[1.3]	(2.2)	K	80	良好	白	SB13	瀬戸美濃系 施釉 外面 • 14	
94	磁器	坏	(6.5)	4.2	3.0	—	60	良好	白	SB13	瀬戸美濃系 施釉 外面銅版転写染付 • 14	
95	磁器	皿	13.0	2.8	7.1	K	55	良好	白	SB13	瀬戸美濃系 施釉 多彩 染付 • 14	
96	磁器	皿	(22.2)	2.9	(12.2)	K	15	良好	白	SB13	肥前系 施釉 内面染付 • 14	
97	磁器	皿	(13.0)	3.5	(7.0)	K	40	良好	白	SB13	肥前系 施釉 染付 口紅 • 14	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
98	磁器	鉢	(12.4)	5.9	(7.1)	K	20	良好	白	SB13 ・14	肥前系 施釉 染付 蛇の目凹形高台	
99	磁器	鉢	—	(3.0)	6.5	K	25	良好	白	SB13 ・14	肥前系 施釉 染付 高台内焼継印,釉書	58-8
100	磁器	蓋物	(8.8)	7.1	(5.5)	K	30	良好	白	SB13 ・14	瀬戸美濃系 施釉 外面銅版転写染付	
101	磁器	徳利	1.7	[12.1]	—	K	70	良好	白	SB13 ・14	肥前系 外面施釉,染付	
102	陶器	燭徳利	—	[6.7]	—	—	5	良好	灰白	SB13 ・14	京都信楽系 外面灰釉,染付文字	42-6
103	陶器	擂鉢	—	[6.0]	—	IK	5	良好	灰	SB13 ・14	益子系 柿釉	
104	陶器	豆甕	(5.4)	5.2	(3.8)	EHIK	30	良好	にぶい黄橙	SB13 ・14	柿釉 回転糸切	42-7
105	陶器	土瓶	(6.7)	[4.7]	—	HIK	20	良好	にぶい黄橙	SB13 ・14	外面銅緑釉	
106	陶器	急須	(7.6)	5.7	(5.6)	—	40	良好	暗赤灰	SB13 ・14	萬古系 外面鱗文 底部布目痕 墨書	
107	瓦質土器	火鉢	—	[3.6]	(21.4)	CIK	20	普通	オリーブ黒	SB13 ・14	脚付火鉢脚部 ナデ 内面火箸痕 燻す	42-8
108	磁器	碗	(11.4)	5.1	3.7	HK	40	普通	白	SB15	瀬戸美濃系 施釉 銅版転写染付	
109	磁器	碗	(11.4)	4.5	(8.8)	K	45	普通	白	SB15	瀬戸美濃系 施釉 外面色絵,上絵付(白)	
110	磁器	碗	(13.9)	4.4	(2.8)	K	30	良好	白	SB15	瀬戸美濃系 施釉 外面銅版転写染付	
111	磁器	碗	—	[3.6]	(3.7)	K	60	良好	白	SB15	瀬戸美濃系 施釉 外面ゴム印版染付	
112	磁器	坏	6.5	4.3	2.9	—	95	良好	白	SB15	瀬戸美濃系 施釉 外面酸化コバルト染付	42-9
113	磁器	坏	7.7	5.1	2.9	—	95	良好	明緑灰	SB15	瀬戸美濃系 施釉 酸化クロム練り込み	
114	磁器	坏	6.7	4.0	3.0	—	100	良好	白	SB15	瀬戸美濃系 酸化クロム釉 外面鑄	
115	磁器	紅坏	(6.1)	[1.3]	—	—	30	良好	白	SB15	瀬戸美濃系 内面施釉 型成形 同品他1個体	
116	磁器	蓋	—	[2.7]	—	K	30	良好	白	SB15	肥前系 蓋物 施釉 外面染付 焼継痕	
117	磁器	蓋	1.9	1.3	—	—	100	良好	白	SB15	瀬戸美濃系 施釉 外面染付	
118	磁器	灰皿	長軸(12.0) 短軸10.3 高さ4.5			—	50	良好	白	SB15	瀬戸美濃系 施釉 外面上絵付(朱)	58-9
119	磁器	蓋物	—	[4.4]	5.9	K	30	良好	白	SB15	瀬戸美濃系 施釉 外面型紙摺絵染付	
120	陶器	燭徳利	—	[5.8]	(6.0)	K	30	良好	灰黄	SB15	京都信楽系 外面灰釉鉄絵「や」 被熱か	
121	陶器	蓋	(6.4)	1.8	(2.8)	K	20	良好	灰黄	SB15	急須の蓋 外面灰釉 内面墨痕	
122	陶器	蓋	—	3.2	5.4	HIK	100	良好	黄橙	SB15	水注の蓋か 外面鉄釉斑状	
123	陶器	甕	19.6	17.8	14.5	EIK	95	良好	灰黄	SB15	瀬戸美濃系 柿釉 外面鉄釉流し掛け 内面目跡5	42-10
124	瓦質土器	火消壺	(17.4)	16.9	(7.9)	CEIK	45	普通	灰白	SB15	ローラースタンプミガキ 燻す 煤付着	42-11
125	瓦質土器	竈鍔	(39.8)	3.3	(33.0)	CEIK	20	普通	灰	SB15	内面ナデ 煤付着	42-12
126	土師質土器	蓋	厚さ0.7			HIK	30	良好	にぶい橙	SB15	焼塩壺の蓋	
127	土師質土器	焜炉	厚さ1.1			ACEHI	5	普通	にぶい橙	SB15	三河産 箱形焜炉窓部 刻印	58-10
128	土師質土器	焜炉	厚さ1.3			ACEHI	5	普通	にぶい褐	SB15	三河産 簡形焜炉窓 刻印	58-11
129	磁器	碗	—	[3.9]	(1.6)	K	20	良好	白	SB18	瀬戸美濃系 施釉 外面色絵	
130	磁器	水滴	—	2.7	—	K	20	良好	白	SB18	瀬戸美濃系 外面施釉,色絵 煤付着	
131	磁器	坏	—	[1.1]	(2.4)	K	15	良好	白	SB18	瀬戸美濃系 施釉 外面染付 内面上絵付(青)	
132	陶器	行平鍋	(9.6)	[3.7]	—	K	30	良好	にぶい黄橙	SB18	柿釉 外面トビガンナ	
133	磁器	碗	—	[1.9]	(4.0)	K	40	良好	白	SB19	肥前系 施釉 外面染付	
134	磁器	碗	(7.0)	[4.5]	—	K	20	良好	白	SB19	肥前系 施釉 染付	
135	磁器	碗	—	[3.2]	(3.5)	K	20	普通	白	SB20	瀬戸美濃系 施釉 内面染付 幅広高台	42-13
136	磁器	坏	(7.4)	4.2	(3.4)	K	50	良好	白	SB20	瀬戸美濃系 施釉 外面色銅版転写染付	
137	磁器	坏	(8.2)	4.1	3.3	—	50	良好	白	SB20	瀬戸美濃系 施釉 外面色銅版転写染付	
138	磁器	坏	5.5	[2.9]	2.3	K	75	良好	白	SB20	瀬戸美濃系 施釉 外面染付	
139	磁器	坏	(6.5)	4.4	(2.9)	—	50	良好	白	SB20	瀬戸美濃系 施釉 外面色銅版転写染付 漢詩文	
140	磁器	坏	(6.6)	4.6	(3.1)	K	20	良好	白	SB20	瀬戸美濃系 施釉 外面酸化クロム釉,白盛	
141	磁器	皿	—	[2.5]	—	K	5	良好	白	SB20	瀬戸美濃系 施釉 型成形 内面陽刻	
142	磁器	蓋物	(10.2)	[6.0]	—	K	20	良好	灰白	SB20	瀬戸美濃系 施釉 外面型紙摺絵染付	
143	磁器	香炉	(10.6)	[6.9]	—	—	25	良好	白	SB20	瀬戸美濃系 外面施釉,染付	
144	磁器	香炉	—	[3.8]	(7.5)	K	15	良好	白	SB20	瀬戸美濃系 外面施釉,染付	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
145	磁器	香炉か	—	[5.9]	4.0	K	60	普通	白	SB20	瀬戸美濃系 施釉 外面鉄釉掛け分け, 染付 底部二次穿孔	42-15
146	陶器	擂鉢	—	[5.9]	—	EIK	5	普通	灰褐	SB20	堺明石系 片口部残存	
147	陶器	壺か	(5.4)	[5.2]	—	—	20	良好	灰白	SB20	施釉 多彩	
148	陶器	卸皿	縦15.2 横9.8 器高1.8			EK	90	良好	灰赤	SB20	常滑系 鉄釉 底部布目痕 口縁重ね焼き痕	42-14
149	陶器	爛徳利	—	[7.5]	(6.6)	—	30	良好	浅黄橙	SB20	京都信楽系 外面灰釉 底部墨書「平」か	43-1
150	陶器	爛徳利	—	[3.5]	(7.4)	K	10	良好	灰黄褐	SB20	外面鮫肌釉	
151	陶器	徳利	—	[6.7]	6.9	IK	40	良好	灰白	SB20	瀬戸美濃系 外面柿釉 底部重ね焼き痕	43-2
152	陶器	蓋	—	[1.5]	—	EHK	30	良好	浅黄橙	SB20	松岡系 土瓶 外面うのふ釉	43-3
153	陶器	土瓶	—	[4.2]	—	IK	5	良好	暗褐	SB20	松岡系 外面うのふ釉 内面鉄釉	43-4
154	陶器	急須	5.8	5.0	5.5	—	90	良好	灰白	SB20	施釉 多彩 高台挟り三か所 9と同系	
155	陶器	焼酎瓶	把手厚2.8			K	5	良好	褐灰	SB20	把手 鉄釉 刻印「○」	
156	陶器	蓋	12.8	4.0	—	EK	90	良好	にぶい赤褐	SB20	焼酎瓶か 外面鉄釉 底部輪状重ね焼き痕	43-5
157	土師質土器	目皿	器高1.4 穿孔径1.6			AIK	15	普通	にぶい橙	SB20	三河産	
158	土師質土器	鍋	長さ[6.8] 幅2.1			CHIK	95	普通	にぶい橙	SB20	把手 ロクロナデ	
159	土師質土器	焰烙	(30.7)	[3.0]	(31.6)	CHIK	10	普通	にぶい黄橙	SB20	砂目底 体部下位ケズリ	
160	磁器	蓋物	(9.0)	[3.1]	—	K	10	良好	白	SB201	肥前系 施釉 外面染付	
161	かわらけ	小皿	(9.6)	[1.6]	—	EHK	5	良好	にぶい橙	SB202	江戸在地系 胎土粉質	
162	磁器	碗	—	[2.1]	—	—	5	良好	白	SB203	穴藏内 瀬戸美濃系 施釉 染付	
163	磁器	碗	(6.7)	5.3	(3.7)	K	40	普通	白	SB204	瀬戸美濃系 施釉 染付	
164	磁器	碗	7.0	6.3	3.2	K	70	良好	白	SB203	穴藏内 瀬戸美濃系 施釉 外面染付	
165	磁器	壺	6.8	4.8	2.6	—	95	良好	白	SB203	穴藏内 瀬戸美濃系 施釉 外面染付	
166	磁器	蓋	(9.3)	[1.7]	—	—	10	良好	白	SB203	穴藏内 瀬戸美濃系 端反碗 施釉 染付	
167	磁器	壺	(6.9)	4.3	(2.9)	K	60	良好	白	SB204	瀬戸美濃系 施釉 外面染付	
168	陶器	碗	—	[3.8]	—	IK	5	—	灰白	SB204	瀬戸美濃系 鉄釉か 被熱融解 鉄釉丸碗か	
169	陶器	爛徳利	—	[14.3]	7.4	K	80	良好	淡黄	SB204	京都信楽系 灰釉	
170	陶器	餌猪口	5.2	3.0	4.8	K	100	良好	灰白	SB204	瀬戸美濃系 灰釉 回転糸切 底部墨書	43-6
171	陶器	蓋	6.0	2.8	—	IK	70	良好	淡黄	SB204	急須 外面鉄釉 内面全面煤付着	
172	陶器	碗	—	[1.6]	3.8	K	90	良好	白	SB203	穴藏掘方 肥前系 施釉 染付	
173	陶器	碗	(9.8)	[4.8]	—	K	20	良好	淡黄	SB203	穴藏掘方 京都信楽系 灰釉 外面色絵 被熱	
174	陶器	碗	(9.8)	5.0	3.8	K	70	良好	灰白	SB203	穴藏掘方 瀬戸美濃系 灰釉 外面吳須絵	
175	陶器	碗	9.8	5.2	3.9	IK	90	良好	灰黄	SB203	穴藏掘方 瀬戸美濃系 灰釉 外面吳須絵 底部二次穿孔	43-7
176	陶器	碗	(8.6)	[5.7]	—	K	30	良好	灰白	SB203	穴藏掘方 京都信楽系 灰釉 外面鉄絵	43-8
177	陶器	碗	(12.2)	[5.7]	(5.0)	K	20	良好	灰白	SB203	穴藏掘方 京都信楽系 灰釉 外面鉄・吳須絵	
178	陶器	秉燭	5.3	4.9	3.8	EL	100	良好	灰白	SB204	瀬戸美濃系 鉄釉	
179	瓦質土器	焰烙	厚さ0.8			CDHIK	5	普通	にぶい橙	SB204	底部シワ状痕 内面刻印菊花「大極上」か	

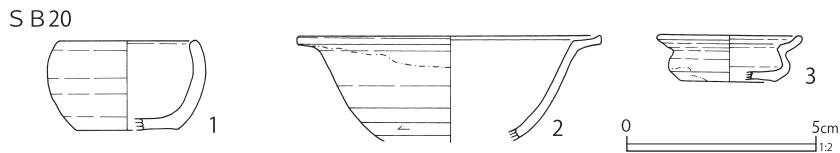
建物跡は掘り込みを持たず、玉石と胴木と考えられる木材が散布している状況で検出された。玉石及び木材の一部は軸から逸れているものがあり、建て直し時に原位置が動いたと想定される。穴藏南側の掘り方内に、二つの玉石が積まれるようにして据え付けられ、建物跡と穴藏は併存していたと考えられる。玉石は穴藏外壁面に接している。

重複する第212・214号埋設桶は、竹樋で接続し、建物外へと延びており、第203号建物跡に伴う施設と推定される。

穴藏は、船材を転用したものであるが、東面、西面の上部は舟材としての加工痕が見られず、船

板材とは異なる製品を転用していると考えられる。中央には仕切り板が据えられ、2室構造となっている。船材に使用されている樹種は耐水性のあるスギである（自然科学分析4参照）。穴藏内上層は多量の板材が積されたように堆積している。多くは同一方向に揃っており、穴藏の蓋であった可能性が高い。

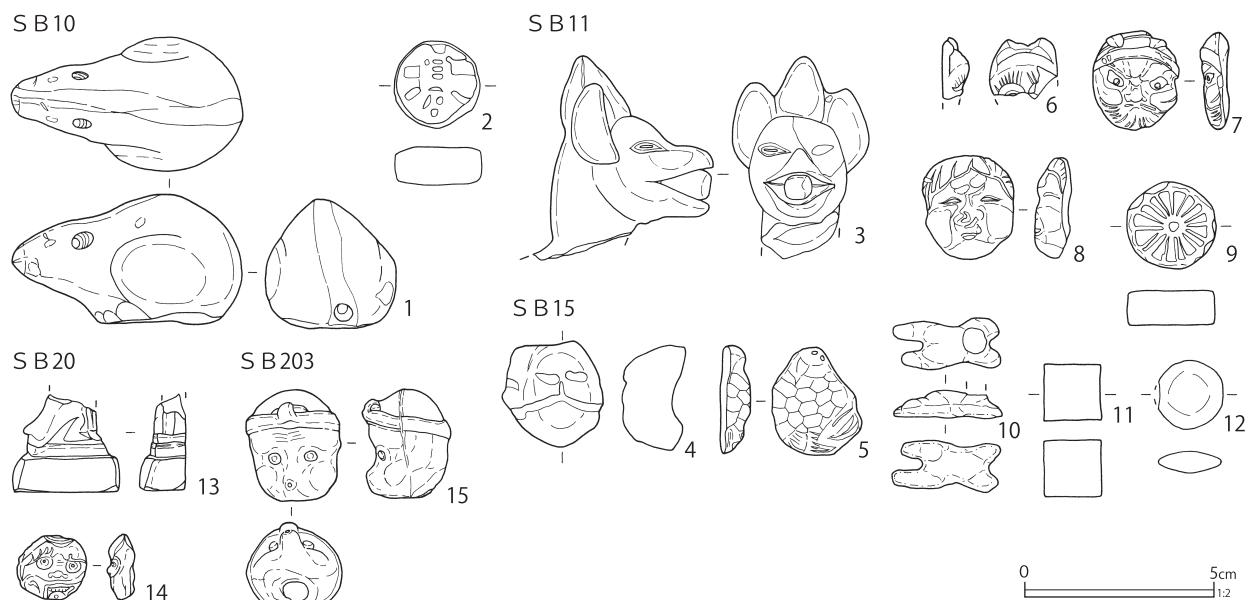
出土遺物は、第51図の162・164～166に穴藏内出土陶磁器、172～177に穴藏掘り方出土陶磁器を示した。164は瀬戸美濃系磁器の湯呑碗、165は瀬戸美濃系磁器の壺であり、穴藏廃絶時期を示す遺物と考えられる。掘り方出土遺物は、18



第52図 建物跡出土遺物 (7)

第4表 建物跡出土遺物観察表 (2) (第52図)

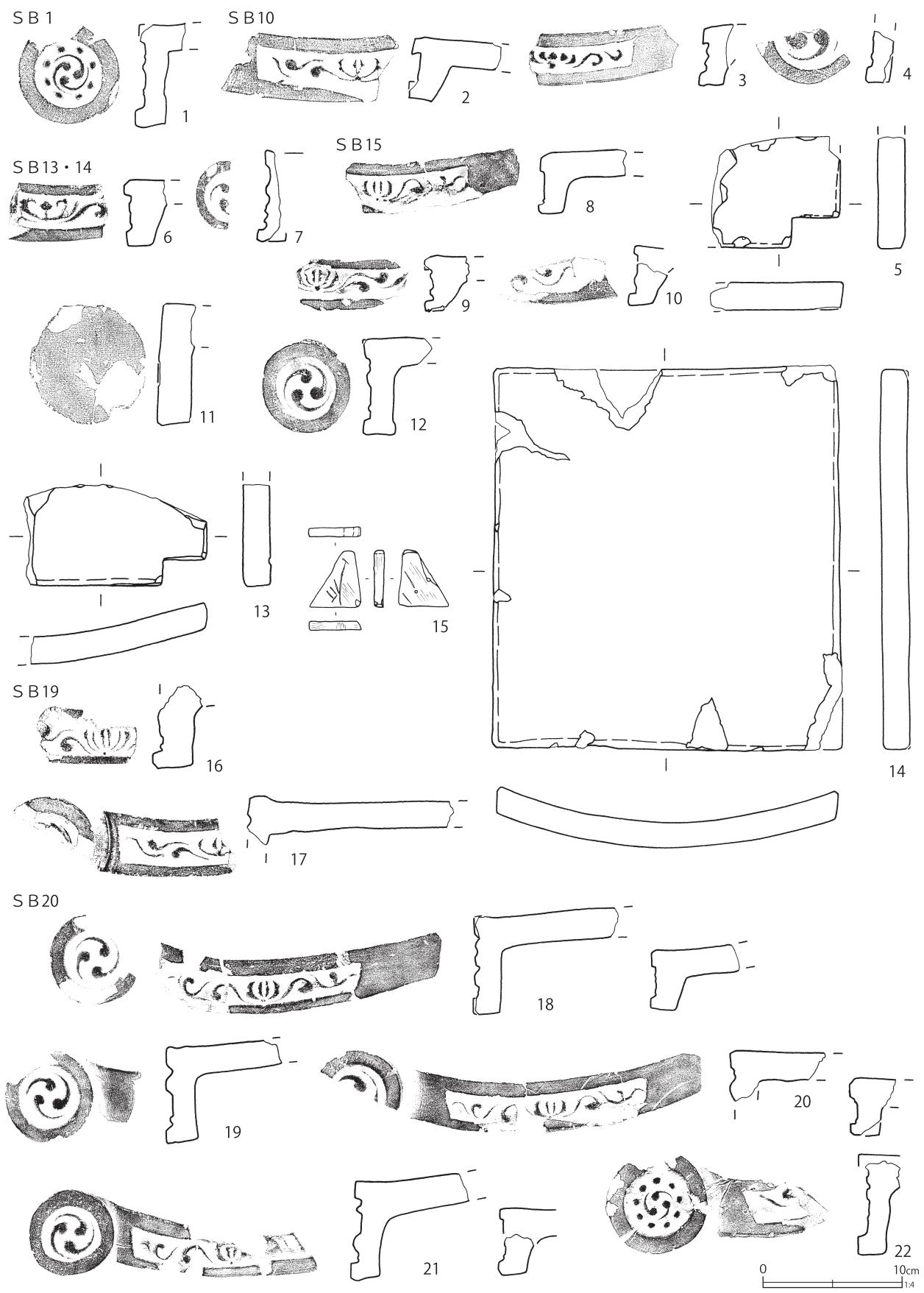
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	胎土	焼成	色調	遺構名	備考	図版
1	土製品	小壺	(3.6)	2.3	(2.7)	5.4	HIK	良好	橙	SB20	江戸在地系か 回転糸切 煙付着	94-1
2	陶器	ミニチュア	(8.0)	[2.7]	—	7.5	K	良好	灰白	SB20	鍋 柿釉	
3	土製品	ミニチュア	(3.8)	1.2	(2.5)	2.6	IK	良好	灰白	SB20	鉢 施釉(黄) 回転糸切	94-5



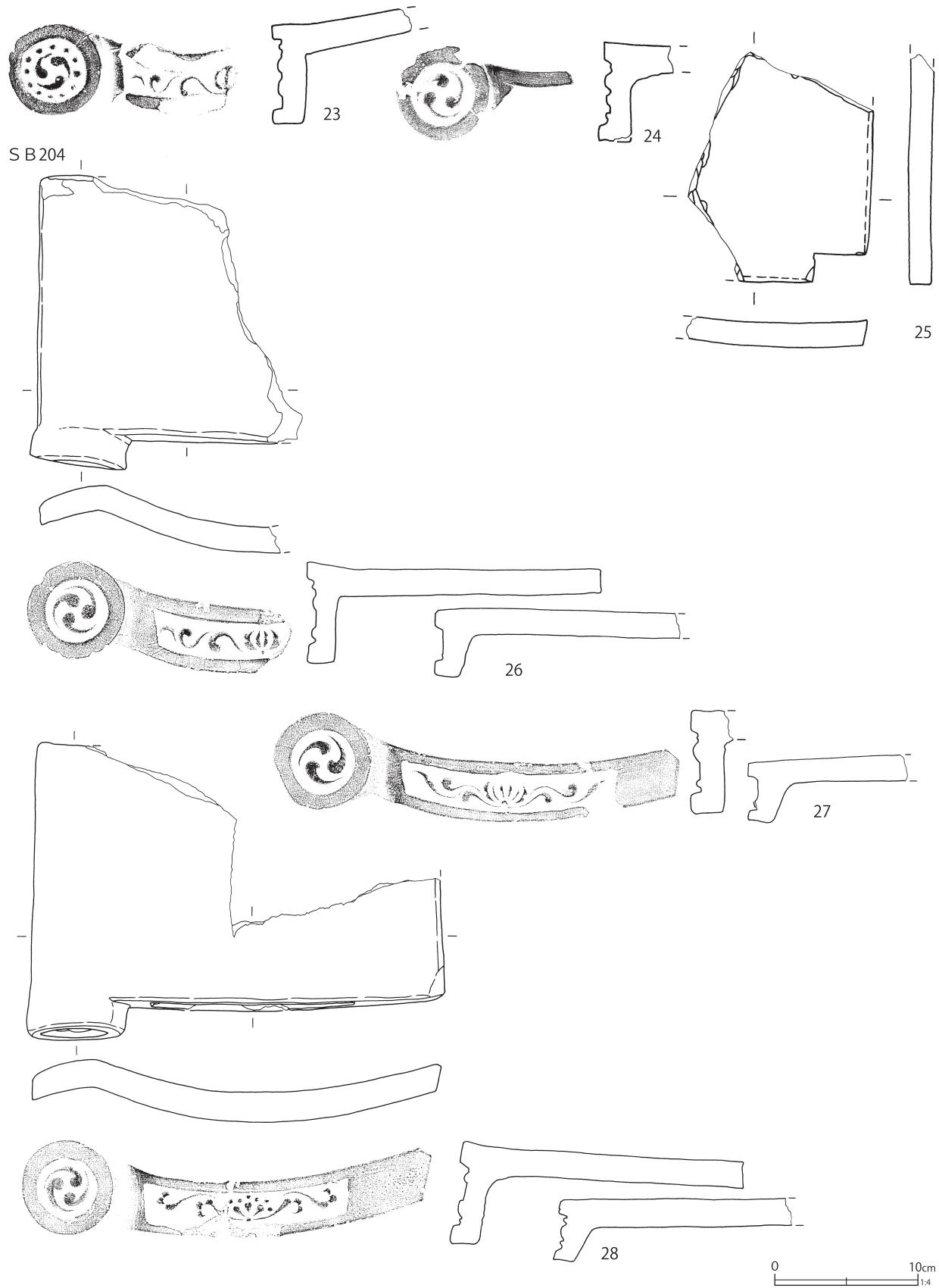
第53図 建物跡出土遺物 (8)

第5表 建物跡出土遺物観察表 (3) (第53図)

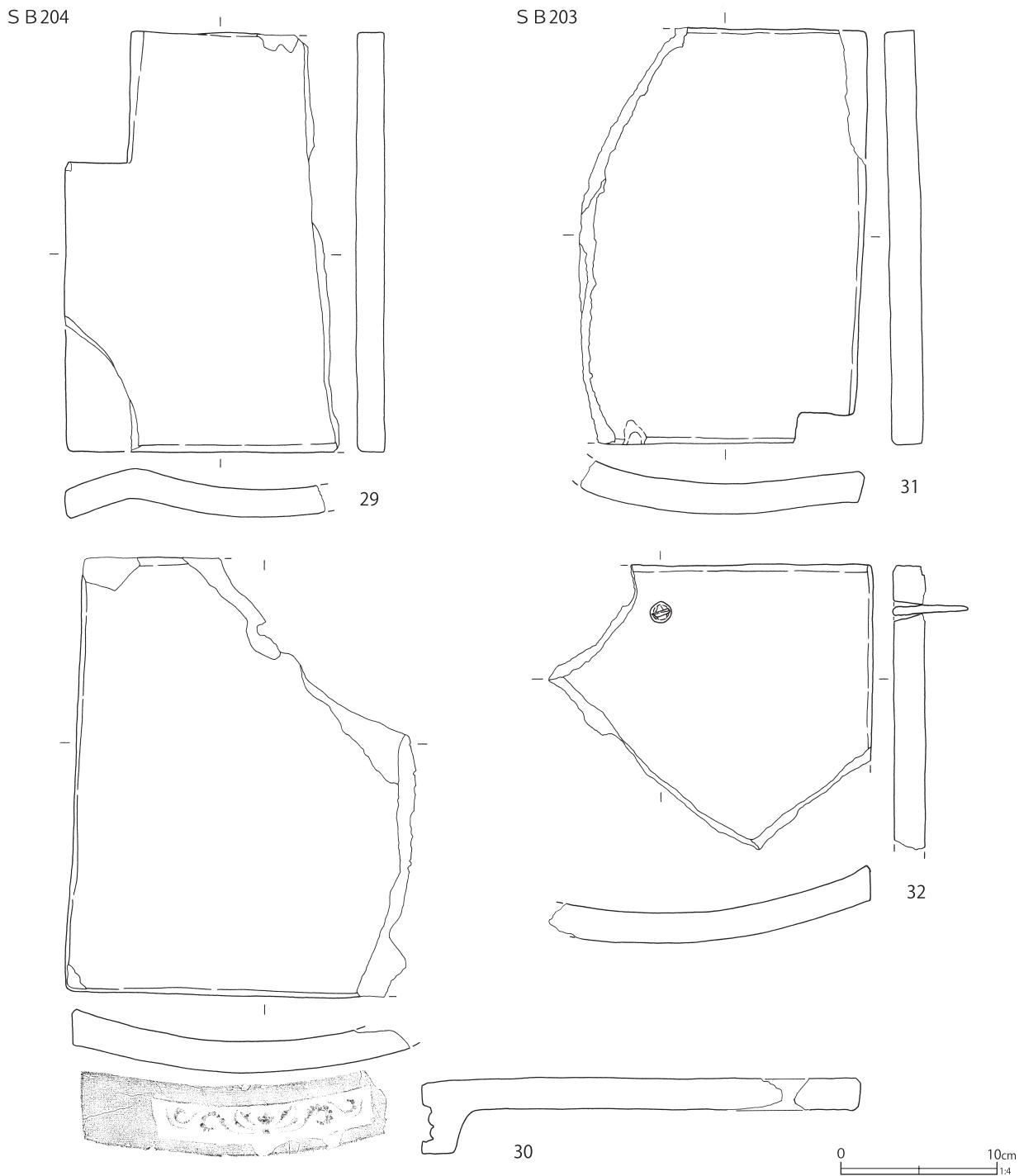
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	胎土	焼成	色調	遺構名	備考	図版
1	土製品	人形	6.1	3.4	3.4	31.7	IK	良好	橙	SB10	江戸在地系 土鈴 兎 左右合二枚型中空 雲母付着	95-3
2	土製品	泥面子	径2.3		1.0	5.7	HIK	良好	橙	SB10	江戸在地系 一枚型 中実 雲母付着	95-2
3	土製品	人形	[5.3]	[3.6]	[4.8]	32.2	EHK	良好	淡橙	SB11	京都系 狐 前後合二枚型 中空か 雲母付着	95-4
4	土製品	人形	[2.8]	[2.7]	[2.4]	9.8	IK	良好	橙	SB15	江戸在地系 狐 前後合二枚型か 中空 雲母付着	
5	土製品	人形	2.8	[2.3]	0.8	4.1	HIK	良好	橙	SB15	江戸在地系 一枚型 中実 雲母付着	95-5
6	土製品	芥子面	[1.6]	[1.8]	0.7	1.1	H	良好	橙	SB15	江戸在地系 一枚型 中実	
7	土製品	芥子面	2.6	2.3	0.8	3.6	H	良好	にぶい橙	SB15	一枚型 中実 顔料付着(青) 雲母付着	95-6
8	土製品	芥子面	2.7	2.4	1.0	4.4	EK	良好	にぶい橙	SB15	一枚型 中実	95-7
9	土製品	泥面子	径2.3		0.9	5.4	HIK	良好	橙	SB15	江戸在地系 一枚型 中実 雲母付着	95-2
10	磁器	人形	2.9	1.4	[0.7]	3.1	—	良好	白	SB15	瀬戸美濃系 這子 施釉 手捻り中実	95-8
11	土製品	サイコロか	1.5	1.5	1.5	5.4	—	良好	にぶい橙	SB15	江戸在地系 白土化粧 墨痕か 雲母付着	95-9
12	土製品	碁石	径1.8		0.6	1.4	H	良好	にぶい橙	SB15	江戸在地系 手捻り 中実 雲母付着	95-10
13	土製品	人形	[2.5]	2.8	[1.2]	6.9	—	良好	白	SB20	京都系 狐 二枚型か 中実	95-11
14	土製品	芥子面	1.7	1.8	0.6	1.4	CHK	良好	橙	SB20	一枚型 中実	95-12
15	土製品	首人形	2.9	2.5	2.4	8.4	EK	良好	橙	SB203	穴藏内 江戸在地系 前後合二枚型 中空 白土化粧 施釉	95-13



第54図 建物跡出土遺物 (9)



第55図 建物跡出土遺物 (10)

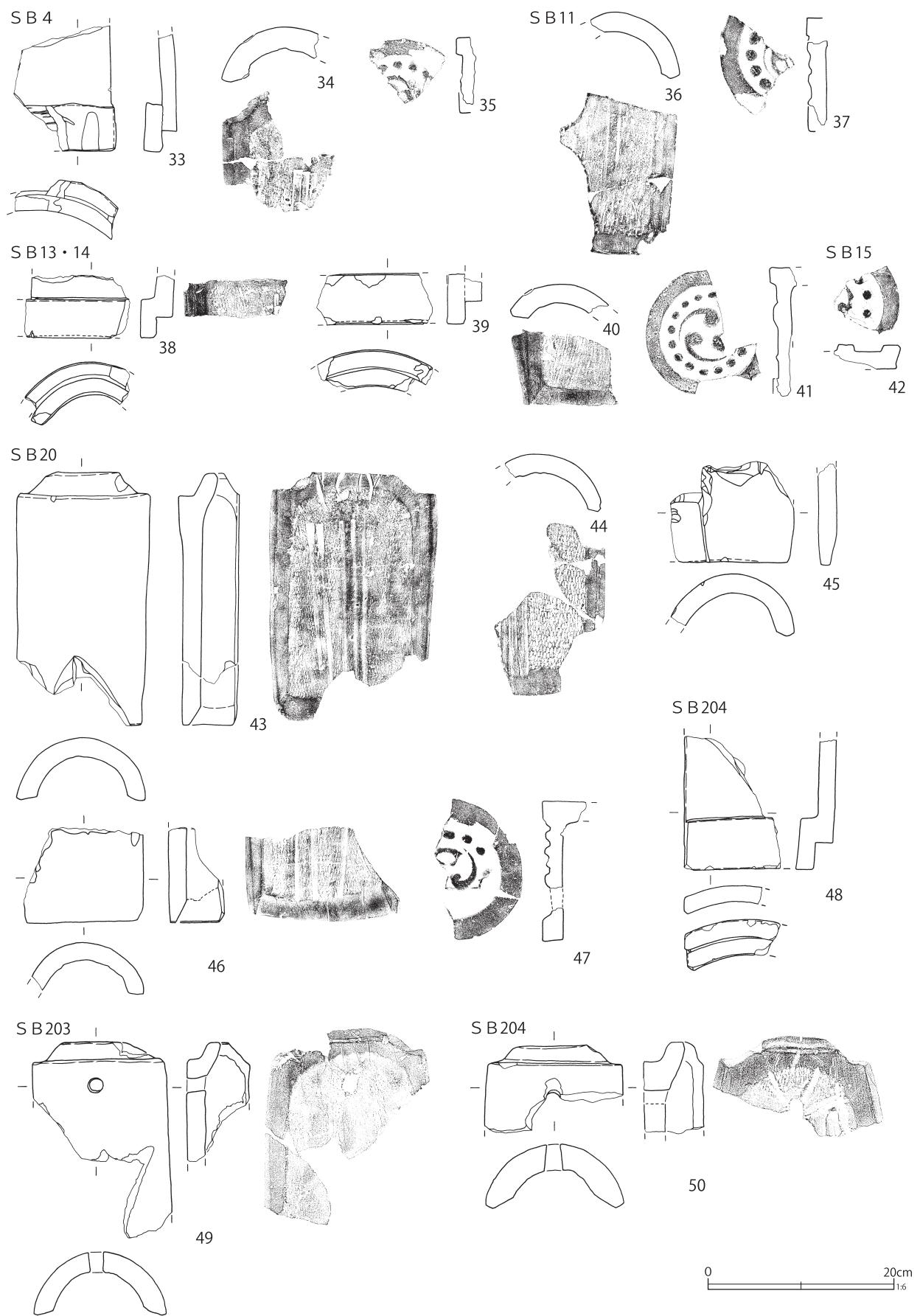


第56図 建物跡出土遺物 (11)

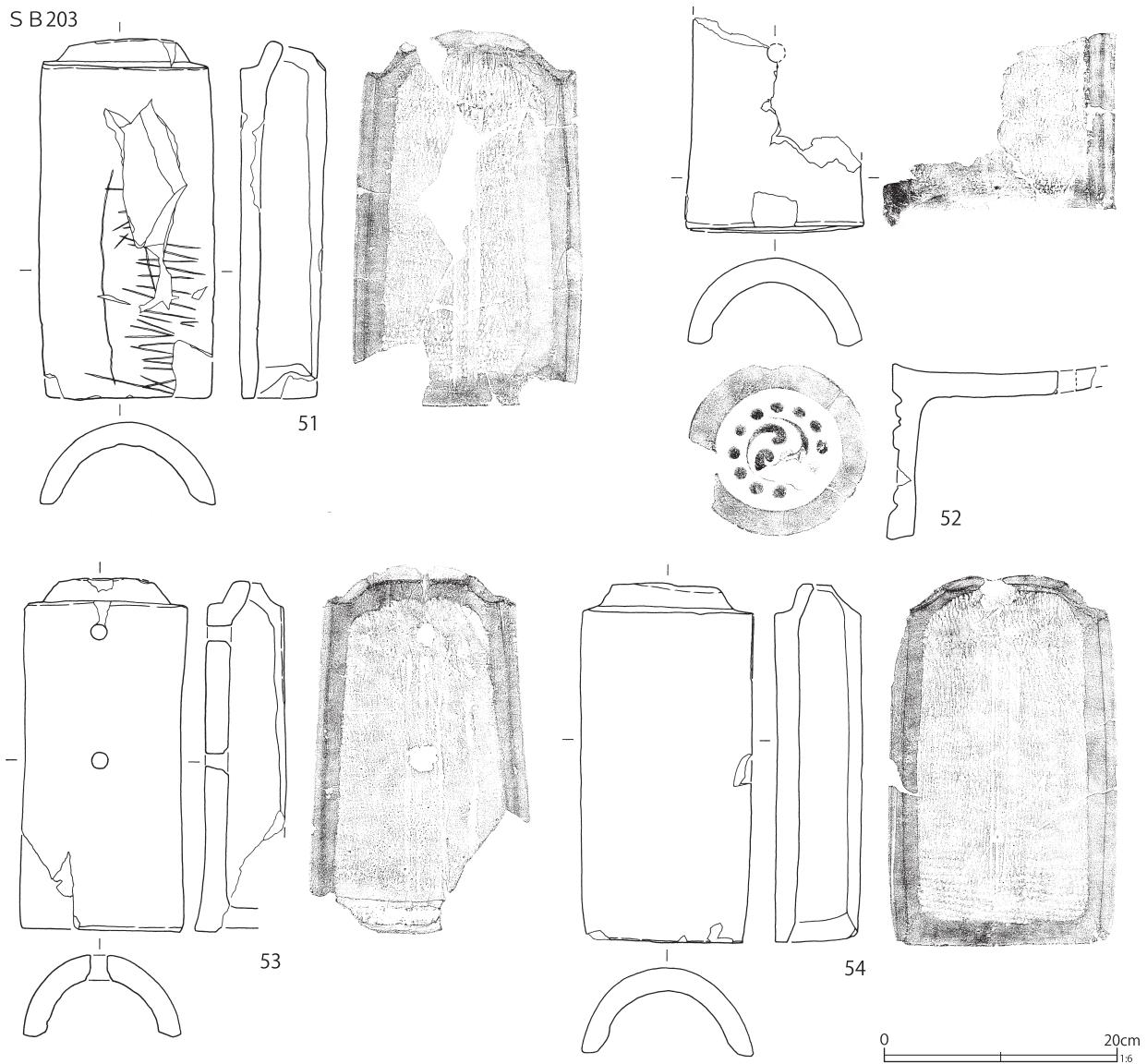
世紀後半の遺物が主体であるが、穴蔵は下層の第249号土壙を壊して構築されており、下層遺構の巻き上げと考えられる。

第53図の15は土製品人形の首人形である。第56～58図の31・32に棧瓦49・51～54には丸瓦・軒丸瓦を示した。32は鉄製角釘が残存している。

49は穿孔があり軒丸瓦の可能性も考え得る。51は外面に刃物痕が多数あり、砥具転用が推定される。53には2箇所穿孔が見られる。第59図の1は木製品のクルリボウ、2は掛花入れである。穴蔵の構築部材は現地で解体し、すべて持ち帰り、特徴的な構築材について図示した。3・4に穴蔵



第57図 建物跡出土遺物 (12)



第58図 建物跡出土遺物 (13)

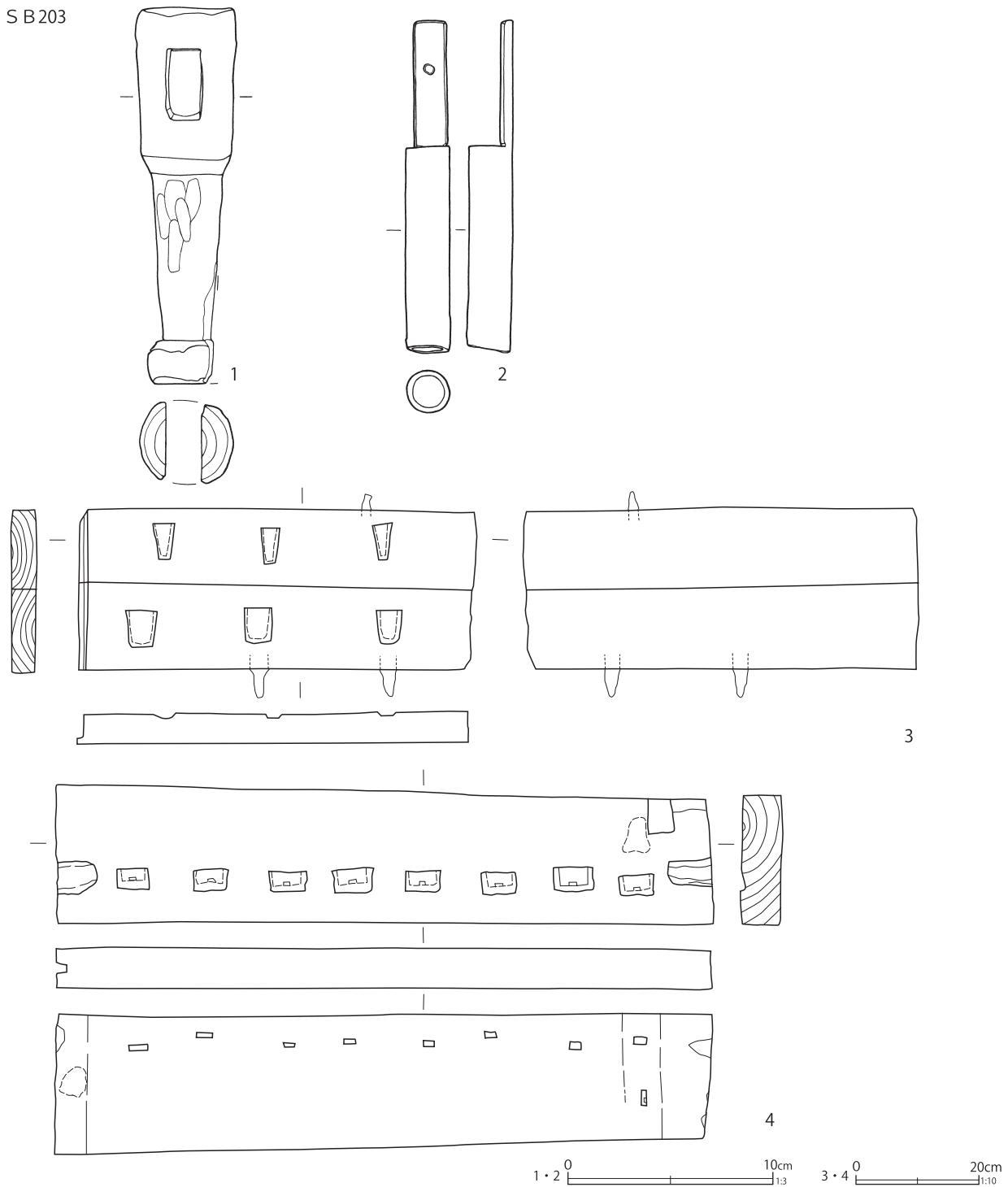
第6表 建物跡出土遺物観察表 (4) (第54～58図)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	径	胎土	焼成	色調	遺構名	備考	図版
1	瓦	軒棧瓦	[3.7]	[7.4]	2.2	7.2	7.4	KL	良好	灰白	SB1	右巻 8連珠三巴文 銀化	
2	瓦	軒棧瓦	[6.5]	[11.0]	2.3	4.4	—	CEK	良好	灰白	SB10	江戸式か 銀化	98-1
3	瓦	軒棧瓦	[2.0]	12.6	2.2	[4.4]	—	CK	良好	黄灰	SB10	銀化	98-2
4	瓦	軒棧瓦	—	—	1.7	—	—	IK	良好	灰白	SB10	左巻三巴文	
5	瓦	棧瓦	[8.1]	[9.4]	2.0	—	—	CK	良好	灰白	SB10		
6	瓦	軒棧瓦	[3.1]	[6.3]	2.8	4.6	—	CHK	良好	灰白	SB13 ・14		98-3
7	瓦	軒棧瓦	—	—	[1.5]	—	6.5	C	良好	灰	SB13 ・14	右巻三巴文	
8	瓦	軒棧瓦	[6.2]	[13.8]	1.8	[5.1]	—	K	良好	灰白	SB15	江戸式 銀化	
9	瓦	軒棧瓦	[3.3]	[8.7]	1.8	[4.0]	—	CEK	良好	灰白	SB15	江戸式 銀化	98-4
10	瓦	軒棧瓦	[2.3]	[8.8]	[3.0]	[2.3]	—	CK	良好	灰白	SB15	江戸式 銀化	
11	瓦	軒棧瓦	[2.3]	8.5	2.5	8.9	—	CK	良好	灰白	SB15	石持瓦 銀化	
12	瓦	軒棧瓦	[4.9]	[7.3]	1.7	[7.1]	6.6	CEK	良好	灰白	SB15	右巻三巴文 銀化	
13	瓦	棧瓦	[7.7]	[12.3]	2.0	—	—	CKL	良好	灰白	SB15		

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	径	胎土	焼成	色調	遺構名	備考	図版
14	瓦	平瓦	27.5	24.9	2.0	4.3	—	CEK	普通	灰白	SB15		98-5
15	瓦	軒用瓦	4.0	3.7	0.5	9.4	—	K	普通	灰白	SB15	砥具転用	
16	瓦	軒棟瓦	[2.1]	[7.3]	2.7	[3.9]	—	CK	不良	灰白	SB19	江戸式	
17	瓦	軒棟瓦	[14.8]	[13.9]	1.9	[4.3]	—	CK	良好	灰白	SB19	江戸式 銀化	98-6
18	瓦	軒棟瓦	[10.4]	29.0	2.1	[8.0]	6.7	CK	良好	灰白	SB20	江戸式 右巻三巴文	98-7
19	瓦	軒棟瓦	[8.4]	[9.8]	2.3	[7.4]	6.9	CK	良好	灰白	SB20	右巻三巴文 銀化	
20	瓦	軒棟瓦	[7.0]	[28.2]	2.2	—	[3.6]	CK	良好	灰白	SB20	江戸式 右巻三巴文	98-8
21	瓦	軒棟瓦	[8.3]	[22.9]	2.8	[8.1]	7.0	CK	良好	灰白	SB20	江戸式 右巻三巴文 銀化	
22	瓦	軒棟瓦	[6.0]	[15.0]	2.0	[7.3]	7.3	CK	良好	灰白	SB20	江戸式 左巻 9連珠三巴文 銀化	
23	瓦	軒棟瓦	[9.8]	[16.3]	2.2	[8.2]	6.8	K	良好	灰白	SB20	江戸式 左巻 12連珠三巴文 銀化	
24	瓦	軒棟瓦	[5.0]	[12.8]	1.9	[7.0]	6.6	CK	良好	灰白	SB20	右巻三巴文 銀化	
25	瓦	棟瓦	[16.1]	[12.8]	1.7	—	—	CK	良好	灰白	SB20	銀化	
26	瓦	軒棟瓦	[20.7]	[18.9]	1.8	7.0	—	K	良好	灰白	SB204	江戸式 右巻 三巴文 銀化 被熱	
27	瓦	軒棟瓦	[11.2]	28.3	1.8	8.2	—	CIK	良好	灰	SB204	江戸式 右巻 三巴文 銀化 被熱	
28	瓦	軒棟瓦	[20.5]	29.0	2.1	7.1	—	CK	良好	灰白	SB204	東海式 右巻 三巴文 銀化 被熱	98-9
29	瓦	棟瓦	26.7	[17.6]	1.9	—	—	CK	良好	灰白	SB204	銀化 被熱	
30	瓦	軒平瓦	27.7	[22.5]	2.1	4.6	—	CIK	良好	灰白	SB204	二次穿孔1 胎土芯部灰 被熱	98-10
31	瓦	棟瓦	26.5	[18.3]	2.0	[3.4]	—	CIK	良好	灰白	SB203	穴藏 銀化 被熱	
32	瓦	棟瓦	[18.3]	[20.8]	2.0	—	—	IK	良好	灰	SB203	角釘1 穿孔1 残存 被熱 銀化	98-11
33	瓦	道具瓦	[13.5]	[10.4]	2.2	—	—	IK	良好	灰白	SB4	銀化	
34	瓦	丸瓦	[11.3]	[10.8]	3.2	—	—	CEK	良好	灰白	SB4	穿孔1 残存	
35	瓦	軒丸瓦	[1.5]	[8.4]	[1.6]	[7.1]	[7.2]	K	良好	灰白	SB4	右巻	
36	瓦	丸瓦	[17.2]	[9.4]	2.1	(7.4)	—	K	良好	灰白	SB11		
37	瓦	軒丸瓦	[3.0]	7.2	2.2	[9.0]	—	K	良好	灰白	SB11	右巻 銀化	
38	瓦	道具瓦	[6.9]	[8.9]	2.1	(7.5)	—	IKL	良好	灰白	SB13	胎土砂利少量含	98-12
39	瓦	道具瓦	[5.4]	[12.4]	1.9	[4.4]	—	C	良好	灰白	SB13	• 14	
40	瓦	丸瓦	[8.0]	[10.2]	2.2	—	—	CK	良好	灰白	SB13	• 14	
41	瓦	軒丸瓦	[3.6]	[14.0]	2.0	[13.9]	—	CK	良好	灰白	SB13	右巻 16連珠三巴文 銀化	
42	瓦	軒丸瓦	—	[6.8]	2.5	[8.4]	—	CIK	良好	灰白	SB15	右巻 銀化	
43	瓦	丸瓦	27.4	14.4	2.1	6.8	—	K	良好	灰白	SB20	被熱	98-13
44	瓦	丸瓦	[18.6]	[10.5]	2.1	(6.2)	—	CK	良好	灰白	SB20		
45	瓦	丸瓦	[10.9]	[13.4]	2.2	(6.7)	—	K	良好	灰白	SB20		
46	瓦	丸瓦	[9.8]	13.1	2.1	(6.1)	—	CIK	良好	灰白	SB20		
47	瓦	軒丸瓦	[6.0]	[9.8]	2.3	15.1	—	CK	良好	灰白	SB20	右巻三巴文 連珠 銀化	
48	瓦	道具瓦	[14.4]	[8.2]	1.9	3.3	—	CIK	良好	灰白	SB204	被熱	
49	瓦	丸瓦	[21.2]	14.4	2.0	6.8	—	IK	良好	灰白	SB203	穴藏 穿孔1 残存 銀化 軒丸瓦か	
50	瓦	丸瓦	[9.4]	14.9	2.8	6.9	—	CIK	普通	灰	SB204	穿孔1 残存 被熱 軒丸瓦か	
51	瓦	丸瓦	31.2	15.2	2.0	7.2	—	CIK	良好	灰白	SB203	穴藏 刃物痕 胎土芯部灰	98-14
52	瓦	軒丸瓦	[18.5]	15.0	2.4	15.3	15.4	CK	良好	灰	SB203	穴藏 右巻 12連珠三巴文 銀化 被熱	98-15
53	瓦	軒丸瓦	30.6	14.3	2.1	[7.8]	—	CK	良好	灰白	SB203	穴藏 穿孔2 銀化	98-16
54	瓦	丸瓦	31.0	14.8	2.0	7.4	—	CIK	良好	灰白	SB203	穴藏 被熱	

第7表 建物跡出土遺物観察表(5)(第59図)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径/径	高さ	底径	木取り	遺構	備考	図版
1	木製品	クルリボウ	18.2	4.8	4.3	—	—	—	芯持材	SB203	板 方形孔 3.5×1.8cm	
2	木製品	掛け入れ	16.1	2.2	0.3	—	—	—	—	SB203	上部に径 0.4cm の孔 底部に孔 竹製	
3	木製品	舟板材	96.0	39.0	7.0	—	—	—	—	SB203	穴藏 西側側壁上段 2枚接続 舟釘3残存 表ホゾ穴6 穴藏構築材転用	
4	木製品	舟板材	109.0	20.6	6.8	—	—	—	—	SB203	穴藏 底板 ホゾ・舟釘穴8 穴藏構築材転用	



第59図 建物跡出土遺物 (14)

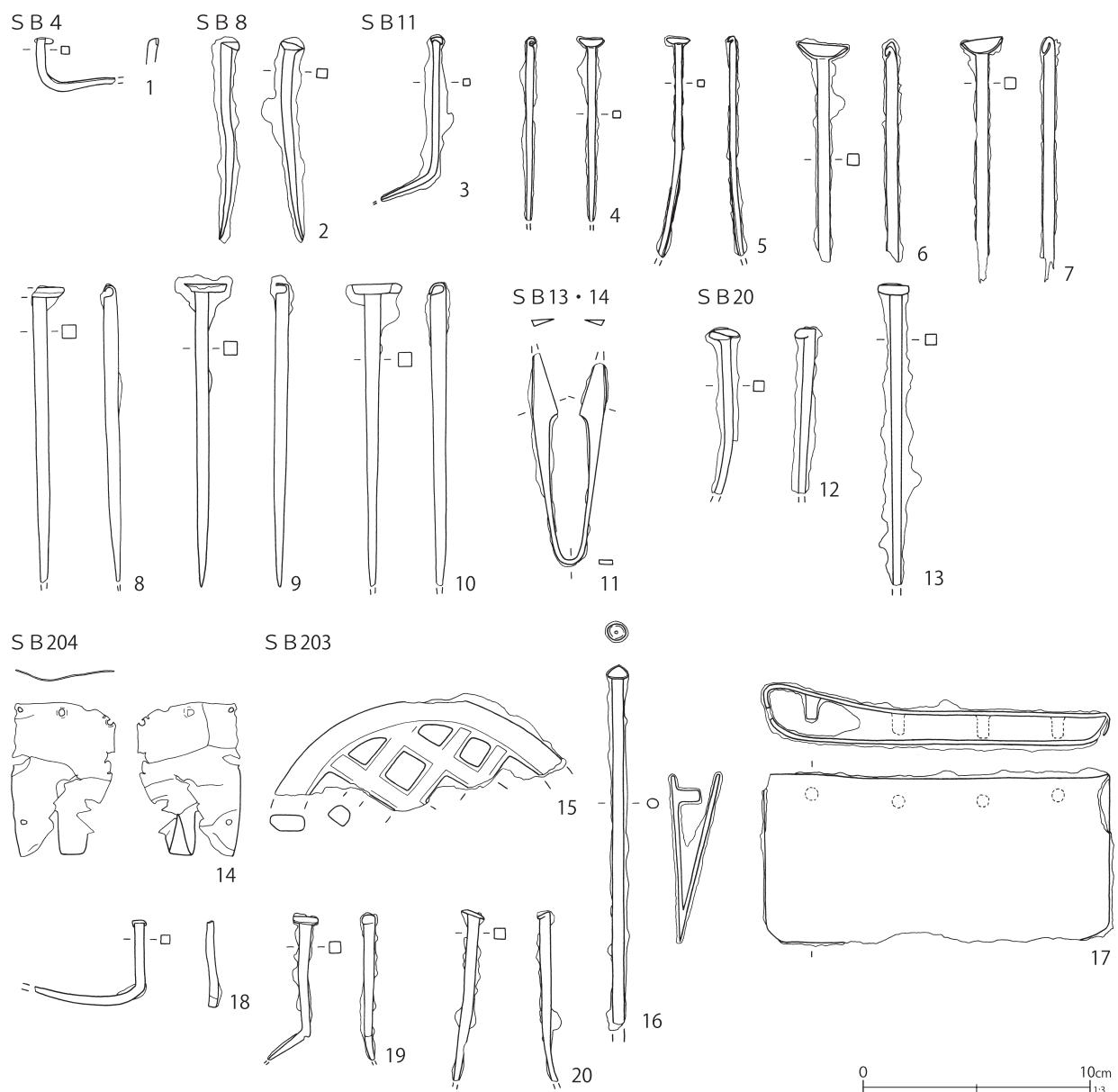
を構築する舟板材の一部を図示した。いずれも穴蔵の構築に必要ではないところに加工痕や釘穴があり、舟板材の転用であることがわかる。また、左右の端で幅が異なり、幅が狭い方は舟の船首へ向かう部材であることが考えられる。

第60図の15は鉄製品の火格子、16は火箸、17

は鋤先、18～20は角釘である。穴蔵内には、これらその他に鮒等に類似する大型魚類の骨が多量に出土している（写真図版117-1）。

第204号建物跡（第45図）

D 7-f 1 グリッドに位置する。調査当初は、穴蔵に伴う建物跡と判断されていたが、土層断面



第60図 建物跡出土遺物 (15)

の精査の結果、穴蔵より後世の建物跡であると判断に至った。建物跡の東辺は確認されていない。残存規模は、長軸7.98m、短軸3.60m、深さ0.30mである。基礎の掘り込みは部分的に確認されている。掘り込み内に大谷石の切石材と瓦を交互に敷き、非常に強くしまったシルトで版築している。

出土遺物は、第51図の163・167～171・178・179に陶磁器類を図示した。163は瀬戸美濃系磁器の湯呑碗、167は壊、169は京都信楽系陶器の

燭台、170は瀬戸美濃系陶器の餌猪口である。170の底部には墨書が描かれている。171は急須の蓋である。第55～58図の26～30・48・50に瓦を示した。26～28は軒棧瓦で、26・27は江戸式、28は東海式である。30は大阪・東海折衷の軒平瓦である。第60図の14は銅製飾金具である。第64図の62～64は石製品で、62は滑石製石筆、63は石英製火打石、64流紋岩製砥石である。構築は19世紀後葉頃と考えられる。

第8表 建物跡出土遺物観察表（6）（第60図）

番号	種別	器種	法量	遺構名	備考	図版
1	鉄製品	釘	長さ [3.5]cm 幅 0.4cm 厚さ 0.4cm 重さ 3.4g	SB4		
2	鉄製品	釘	長さ 8.8cm 幅 0.45cm 厚さ 0.45cm 重さ 13.5g	SB8		
3	鉄製品	釘	長さ [7.2]cm 幅 0.3cm 厚さ 0.3cm 重さ 8.2g	SB11		
4	鉄製品	釘	長さ [8.1]cm 幅 0.4cm 厚さ 0.3cm 重さ 5.9g	SB11		
5	鉄製品	釘	長さ [9.7]cm 幅 0.3cm 厚さ 0.3cm 重さ 5.1g	SB11		
6	鉄製品	釘	長さ [9.7]cm 幅 0.5cm 厚さ 0.5g 重さ 18.0g	SB11		
7	鉄製品	釘	長さ [10.8]cm 幅 0.5cm 厚さ 0.5cm 重さ 17.9g	SB11		
8	鉄製品	釘	長さ [12.9]cm 幅 0.6cm 厚さ 0.6cm 重さ 19.3g	SB11		
9	鉄製品	釘	長さ [13.2]cm 幅 0.6cm 厚さ 0.6cm 重さ 21.5g	SB11		
10	鉄製品	釘	長さ [13.2]cm 幅 0.6cm 厚さ 0.6cm 重さ 22.7g	SB11		
11	鉄製品	握鉄	長さ [9.2]cm 刃幅 1.0cm 背幅 0.3cm 重さ 14.5g	SB13・14		109-1
12	鉄製品	釘	長さ [7.2]cm 幅 0.5cm 厚さ 0.5cm 重さ 9.8g	SB20		
13	鉄製品	釘	長さ [13.1]cm 幅 0.6cm 厚さ 0.6cm 重さ 24.3g	SB20		
14	銅製品	飾金具	縦 [6.7]cm × 横 [4.5]cm 厚さ 0.05cm 重さ 5.8g	SB204		
15	鉄製品	火格子	縦 [4.8]cm 横 [12.6]cm 厚さ 0.7cm 重さ 146.9g	SB203	穴蔵	109-1
16	鉄製品	火箸	長さ [15.8] 幅 0.5cm 重さ 28.3g	SB203	穴蔵	109-1
17	鉄製品	鋤先	縦 [7.3]cm × 横 [15.2]cm 厚さ 0.2cm 重さ 213.1g	SB203	穴蔵	109-1
18	鉄製品	釘	長さ [4.8]cm 幅 0.4cm 厚さ 0.4cm 重さ 4.5g	SB203	穴蔵	109-1
19	鉄製品	釘	長さ [6.4]cm 幅 0.5cm 厚さ 0.5cm 重さ 5.0g	SB203	穴蔵	109-1
20	鉄製品	釘	長さ [7.5]cm 幅 0.5cm 厚さ 0.5cm 重さ 6.4g	SB203	穴蔵	109-1

SB 1



SB 10



SB 12



SB 15



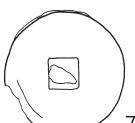
4



5



6



7



8



9



10



11

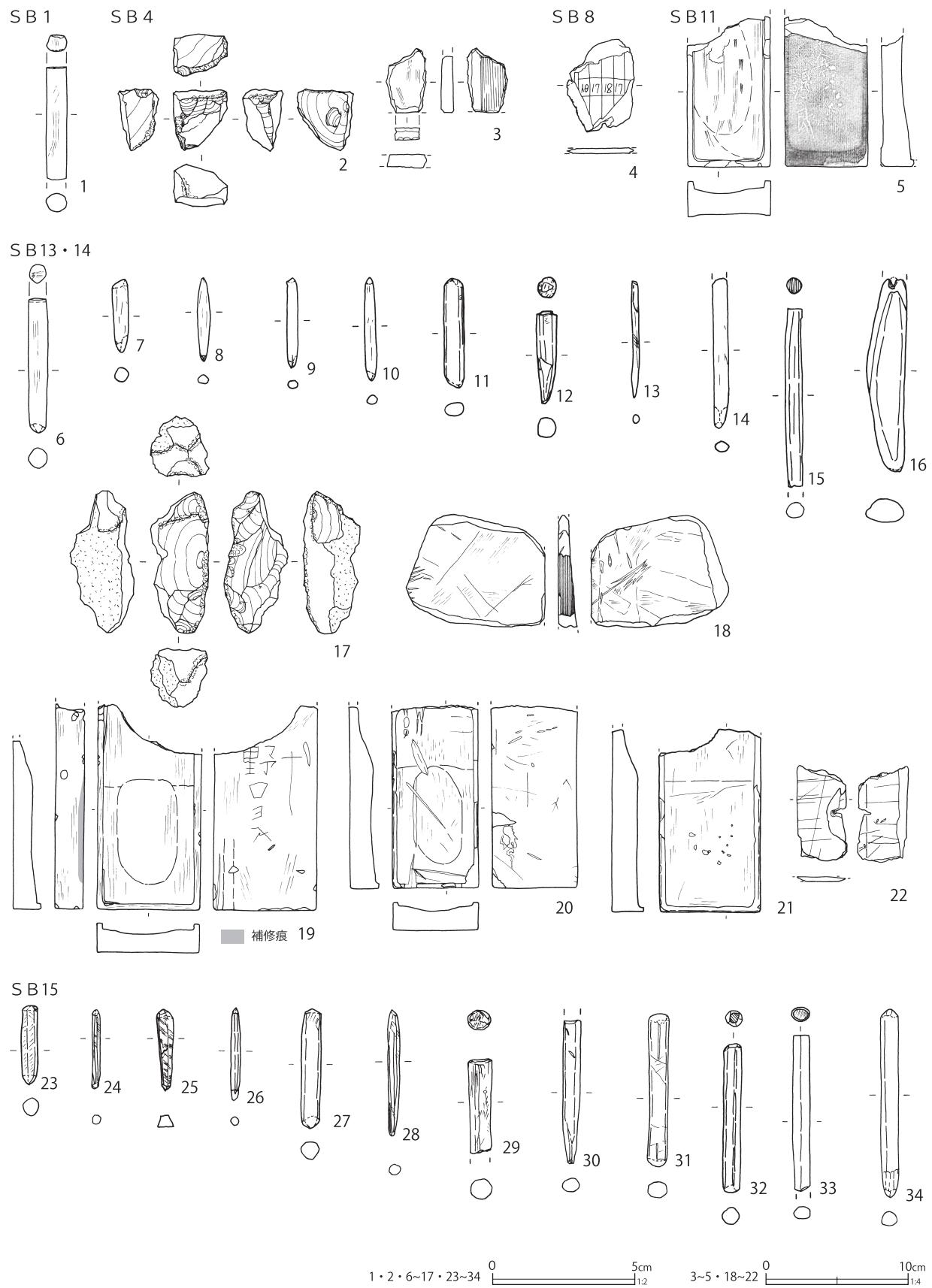
0

5cm

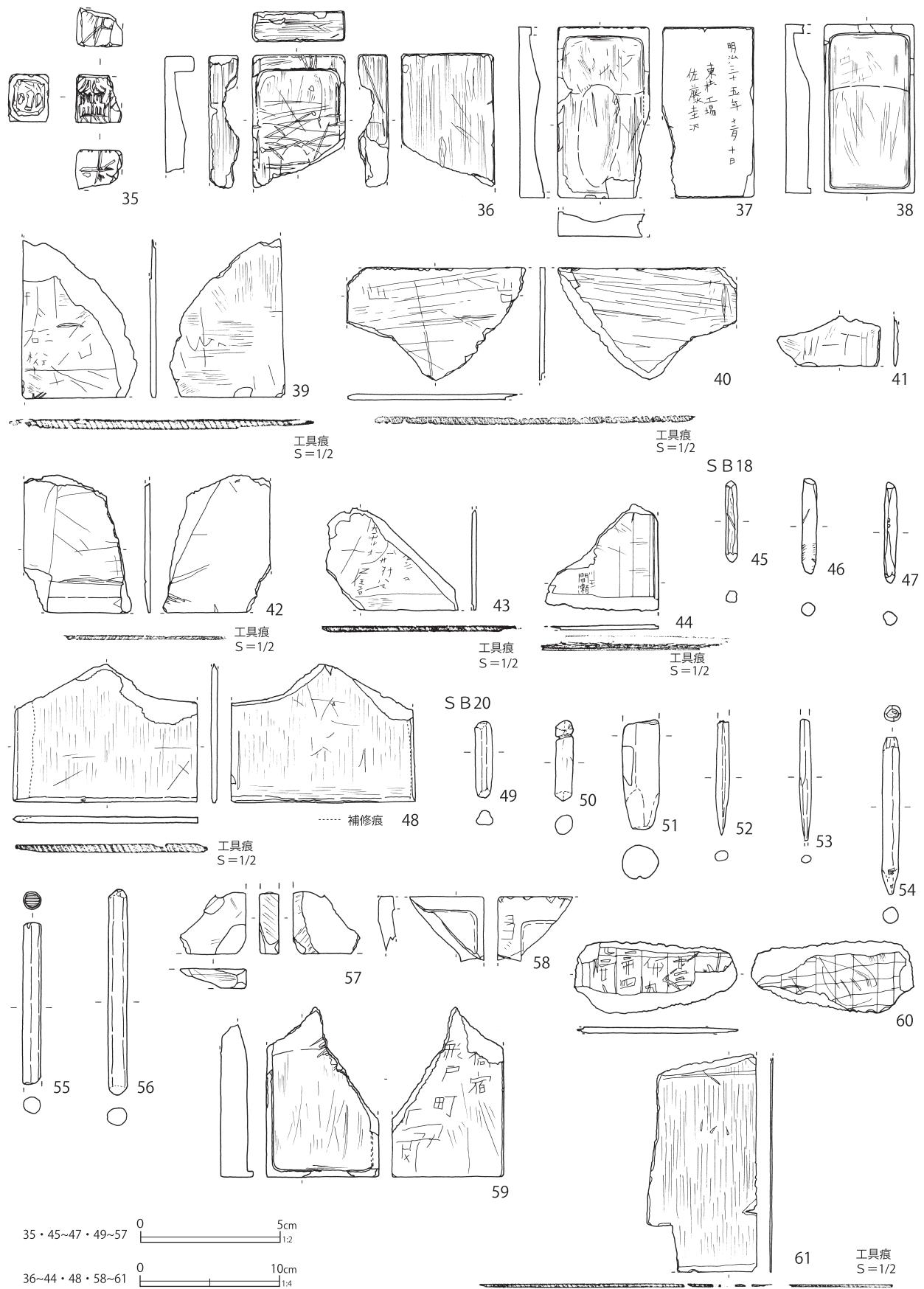
第61図 建物跡出土遺物（16）

第9表 建物跡出土遺物観察表（7）（第61図）

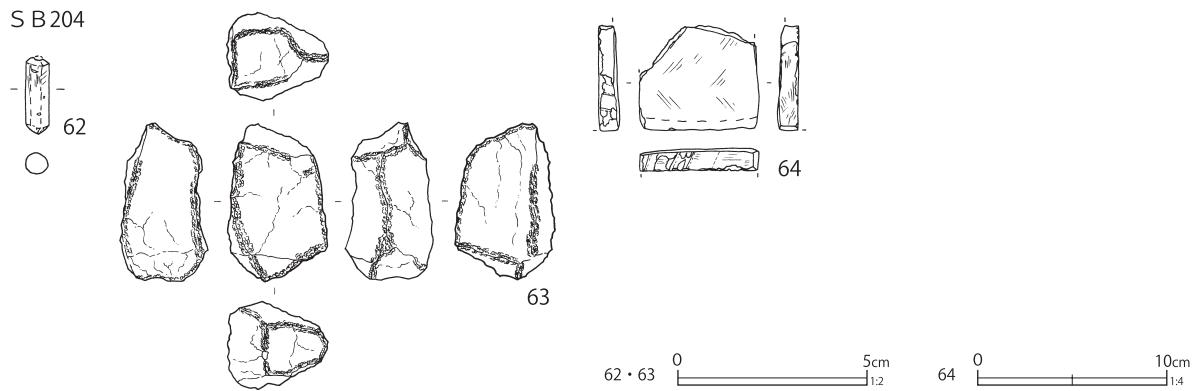
番号	種別	器種	法量	遺構	備考	図版
1	銅製品	銭貨	径 28.0 mm 厚さ 1.5 mm 重さ 4.1g	SB1	寛永通寶（新）四文銭	
2	銅製品	銭貨	径 24.0 mm 厚さ 1.5 mm 重さ 2.8g	SB10	寛永通寶（新）	
3	銅製品	銭貨	径 22.5 mm 厚さ 1.1 mm 重さ 2.3g	SB12	寛永通寶（新）背文字不明	
4	銅製品	銭貨	径 27.0 mm 厚さ 1.2 mm 重さ 4.3g	SB15	文久永寶 王寶	
5	銅製品	銭貨	径 22.0 mm 厚さ 1.3 mm 重さ 3.2g	SB15	半錢銅貨 明治十九年	
6	銅製品	銭貨	径 23.0 mm 厚さ 1.0 mm 重さ 1.7g	SB15	寛永通寶（新）	
7	鉄製品	銭貨	径 23.8 mm 厚さ 1.4 mm 重さ 2.9g	SB15		
8	銅製品	銭貨	径 23.0 mm 厚さ 1.2 mm 重さ 3.7g	SB15	一錢銅貨	
9	銅製品	銭貨	径 24.0 mm 厚さ 1.0 mm 重さ 1.8g	SB15	寛永通寶（新）	
10	銅製品	銭貨	径 23.0 mm 厚さ 1.0 mm 重さ 2.3g	SB15	寛永通寶（新）	
11	銅製品	銭貨	径 22.0 mm 厚さ 1.3 mm 重さ 3.3g	SB15	半錢銅貨 明治十五年	



第62図 建物跡出土遺物 (17)



第63図 建物跡出土遺物 (18)

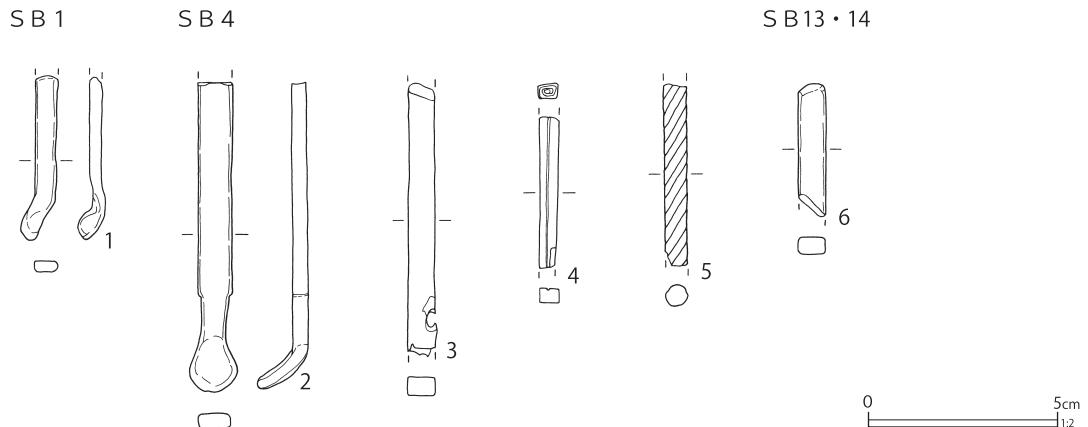


第64図 建物跡出土遺物 (19)

第10表 建物跡出土遺物観察表 (8) (第62～64図)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	遺構名	備考	図版
1	石製品	石筆	[3.9]	0.7	—	3.2	滑石	SB1		
2	石製品	火打石	2.1	1.9	1.3	6.4	玉髓	SB4		
3	石製品	砥石	[4.4]	[2.8]	0.9	15.3	流紋岩	SB4	砥面1 ノコギリ痕	
4	石製品	石板	[6.1]	[4.6]	0.4	15.3	粘板岩	SB8	黒線 数字	
5	石製品	硯	[10.5]	5.9	—	221.8	粘板岩	SB11	器高2.5cm 刻書「■倉源治郎」	
6	石製品	石筆	4.7	0.6	—	3.6	滑石	SB13・14		112-1
7	石製品	石筆	2.6	0.6	—	2.1	滑石	SB13・14	両端使用	112-1
8	石製品	石筆	2.9	0.4	—	0.7	滑石	SB13・14	両端使用	112-1
9	石製品	石筆	3.2	0.4	—	0.7	滑石	SB13・14	両端使用	112-1
10	石製品	石筆	3.6	0.4	—	1.2	滑石	SB13・14	両端使用	112-1
11	石製品	石筆	3.8	0.7	—	3.0	滑石	SB13・14	両端使用	112-1
12	石製品	石筆	3.2	0.7	—	2.9	滑石	SB13・14		112-1
13	石製品	石筆	4.1	0.3	—	0.7	滑石	SB13・14	両端使用	112-1
14	石製品	石筆	5.2	0.5	—	3.3	滑石	SB13・14		112-1
15	石製品	石筆	[6.2]	0.6	—	4.9	滑石	SB13・14		112-1
16	石製品	垂飾か	[6.7]	1.3	—	13.0	片岩	SB13・14	穿孔残存	112-3
17	石製品	火打石	4.9	1.9	2.0	21.8	玉髓	SB13・14		
18	石製品	砥石	[7.8]	[9.7]	1.3	128.3	粘板岩	SB13・14	砥面2 ノコギリ痕か	
19	石製品	硯	[14.3]	7.2	—	260.4	凝灰岩	SB13・14	器高2.0cm 刻書「野口ヨ■」 側面バテ状補修痕	112-6
20	石製品	硯	[12.8]	6.0	—	209.0	凝灰岩	SB13・14	器高2.0cm 刃物痕	112-6
21	石製品	硯	[12.8]	7.1	—	299.2	凝灰岩	SB13・14	器高2.2cm	112-6
22	石製品	石板	[7.2]	[3.4]	—	14.5	粘板岩	SB13・14	両面黒線	112-2
23	石製品	石筆	2.7	0.5	—	1.8	滑石	SB15	両端使用	112-1
24	石製品	石筆	[2.8]	0.3	—	0.6	滑石	SB15	両端使用	112-1
25	石製品	石筆	2.8	0.6	—	1.1	滑石	SB15	両端使用	112-1
26	石製品	石筆	3.2	0.3	—	0.6	滑石	SB15	両端使用	112-1
27	石製品	石筆	4.1	0.6	—	3.5	滑石	SB15	両端使用	112-1
28	石製品	石筆	4.4	0.4	—	1.5	滑石	SB15	両端使用	112-1
29	石製品	石筆	[3.3]	0.8	—	3.9	滑石	SB15		112-1
30	石製品	石筆	[5.0]	0.6	—	3.4	滑石	SB15		112-1
31	石製品	石筆	5.4	0.8	—	4.6	滑石	SB15	両端使用	112-1
32	石製品	石筆	5.2	0.6	—	4.2	滑石	SB15	両端使用	112-1
33	石製品	石筆	[5.4]	0.6	—	3.3	滑石	SB15		112-1
34	石製品	石筆	6.6	0.6	—	4.7	滑石	SB15	両端使用	112-1
35	石製品	印章	1.7	1.7	1.4	7.4	滑石	SB15	篆刻「小林」	112-1
36	石製品	硯	[9.4]	6.6	—	126.1	凝灰岩	SB15	器高2.1cm 砥具転用 刃物痕	112-6
37	石製品	硯	12.2	6.5	—	243.1	粘板岩	SB15	器高1.8cm 刻書「明治三十五年十二月十日東 ■工場佐藤圭次」	112-6

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	遺構名	備考	図版
38	石製品	硯	12.0	6.4	—	289.5	粘板岩	SB15	器高 1.8 cm	112-6
39	石製品	石板	[11.3]	[8.2]	0.4	72.5	粘板岩	SB15	刻書 側面工具痕	112-2
40	石製品	石板	[8.0]	[12.8]	3.5	57.5	粘板岩	SB15	刻書「山口」側面工具痕	
41	石製品	石板	[3.5]	[7.3]	0.3	11.3	粘板岩	SB15		
42	石製品	石板	[9.8]	[7.7]	0.4	51.3	粘板岩	SB15	側面工具痕	
43	石製品	石板	[7.2]	[8.2]	0.3	31.3	粘板岩	SB15	刻書 側面工具痕残存	112-2
44	石製品	石板	[7.6]	[8.1]	0.3	26.3	粘板岩	SB15	刻書「間瀬」側面工具痕	112-2
45	石製品	石筆	2.9	0.4	—	0.9	滑石	SB18	両端使用	
46	石製品	石筆	3.4	0.5	—	1.9	滑石	SB18	両端使用	
47	石製品	石筆	3.6	0.5	—	1.1	滑石	SB18	両端使用	
48	石製品	石板	[9.9]	13.2	0.4	95.2	粘板岩	SB18	刻書か 側面工具痕 補修痕	
49	石製品	石筆	2.7	0.6	—	1.6	滑石	SB20	両端使用	112-1
50	石製品	石筆	2.9	0.6	—	2.9	滑石	SB20	陽物 上端加工	112-1
51	石製品	石筆	[3.9]	1.3	—	12.1	滑石	SB20		112-1
52	石製品	石筆	[4.1]	0.5	—	1.3	滑石	SB20		112-1
53	石製品	石筆	[4.3]	0.4	—	1.1	滑石	SB20		112-1
54	石製品	石筆	5.6	0.6	—	4.1	滑石	SB20	両端使用	112-1
55	石製品	石筆	[5.7]	0.6	—	5.5	滑石	SB20		112-1
56	石製品	石筆	7.3	0.7	—	7.5	滑石	SB20	両端使用	112-1
57	石製品	石材	[2.2]	[2.4]	0.7	5.0	滑石	SB20	篆刻用か	
58	石製品	硯	[4.6]	[5.3]	—	38.9	粘板岩	SB20	器高 [1.2] cm 刻書	
59	石製品	硯	[12.1]	8.0	—	239.1	砂岩	SB20	器高 2.3 cm 刻書「■橋宿舟？戸町」	112-6
60	石製品	石板	[5.1]	[11.5]	0.4	38.3	粘板岩	SB20	野線 刻書	112-2
61	石製品	石板	[15.6]	[7.8]	0.3	61.4	粘板岩	SB20	側面工具痕	
62	石製品	石筆	[2.0]	0.6	—	1.3	滑石	SB204	両端使用	
63	石製品	火打石	4.2	2.7	2.3	30.8	石英	SB204		
64	石製品	砥石	[5.5]	6.3	1.1	61.4	流紋岩	SB204	砥面 2 幅広工具痕	112-4



第65図 建物跡出土遺物 (20)

第11表 建物跡出土遺物観察表 (9) (第65図)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	遺構名	備考	図版
1	硝子製品	笄	[4.3]	[1.0]	0.7	2.7	SB1	透明 中実 被熱 (白色)	116-1
2	硝子製品	笄	[8.1]	1.2	1.3	9.5	SB4	透明 中実 先端部匙状 被熱	116-1
3	硝子製品	笄	[7.1]	0.7	0.5	6.3	SB4	透明 中実 被熱発泡	116-1
4	硝子製品	笄	[4.0]	0.5	0.4	2.8	SB4	飴色 中実 断面渦巻き	116-1
5	硝子製品	笄	[4.8]	0.6	0.6	4.6	SB4	中実 螺旋状	116-1
6	硝子製品	笄	[3.5]	0.7	0.4	3.3	SB13・14	透明か 中実 被熱 (黄褐色)	116-1

(2) 基礎状遺構

建物の基礎の一部を構成する地業跡と考えられるが、周囲の遺構との関連が把握し難かった遺構が3基検出された。これらを基礎状遺構として第12表に規模等をまとめた。

第1号基礎状遺構 (第66図)

D 6-c 9・10グリッドから検出された隅丸方形の基礎状遺構で、第6号建物跡を壊して構築されている。割石や瓦が入れられ、覆土のしまりは強く、固められている。出土遺物は第67図の1～3に陶磁器を図示した。1は肥前系、2は瀬戸美濃系磁器の端反碗である。

第2号基礎状遺構 (第66図)

D 6-d 9・10グリッドから検出された方形

の基礎状遺構で、第3号溝跡、第27号土壙を壊す形で構築されている。上層のしまりは強く、下層には瓦片と凝灰岩等の割石が充填されている。およそ15m東に近代以降の同規模の基礎があり、関連性が伺える。出土遺物は第67図の4に陶磁器、6に瓦を図示した。4は瀬戸美濃系磁器の壊である。6は棟瓦で「上」の刻印が施されている。

第3号基礎状遺構 (第66図)

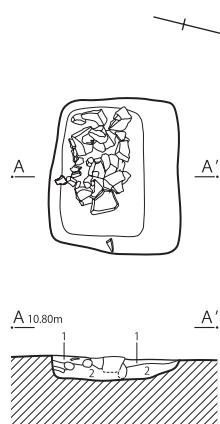
D 6-c 8グリッドから検出された隅丸長方形の基礎状遺構で第4・12号建物跡と重複し、第3号基礎状遺構が最も新しい。覆土は円礫・砂利を主体とし、砂と混ぜて充填している。出土遺物は第67図の5に肥前系磁器の壊を示した。

第12表 第一面基礎状遺構一覧表

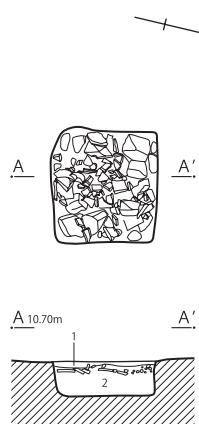
単位: m

番号	グリッド	形	長さ	幅	深さ	方位	備考
1	D6-c9・10	隅丸方形	1.24	1.04	1.90	N-8°-W	
2	D6-d9・10	方形	0.93	0.84	0.27	N-75°-E	
3	D6-c8	隅丸長方形	2.42	0.50	0.15	N-71°-E	

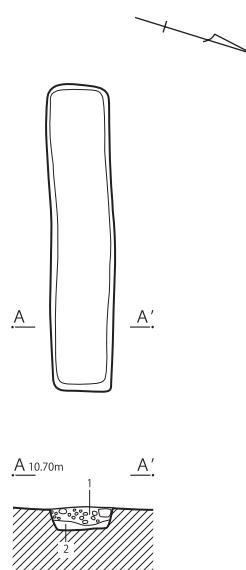
基礎1



基礎2



基礎3



基礎1

- 1 暗褐色土 炭化物微小粒微量 しまり強 粘性やや弱
2 暗褐色土 灰色砂ブロック (φ5～8cm)・黄褐色シルトブロック (φ2～3cm) 少量 しまり強

基礎2 コンクリート基礎

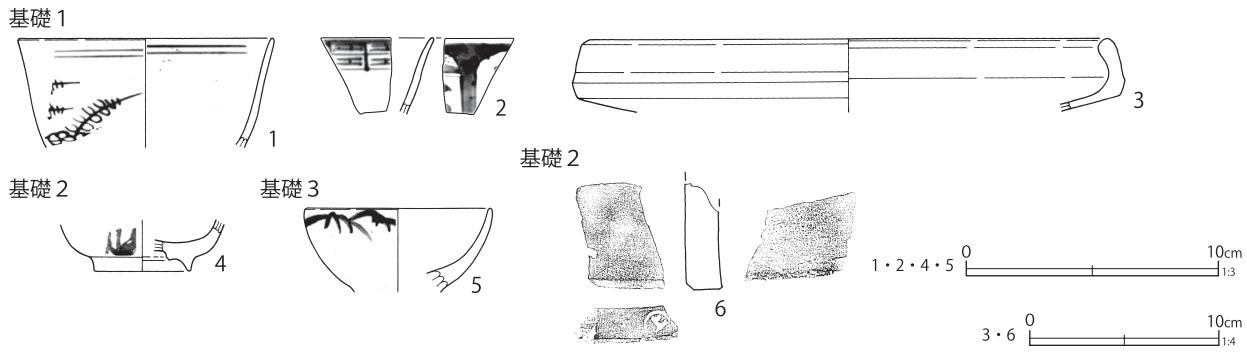
- 1 暗灰黄色土 暗灰黄色土ブロック (φ3～4cm)・炭化物 (φ1cm) 少量 しまり強
2 灰色砂 瓦多量混入 砂利 (φ1～3cm) 多量 凝灰岩などの大きな石を含む しまり弱

基礎3

- 1 灰白色砂 円礫主体層 (φ0.5～6cm) の円礫 (砂利) を多量含みで間を埋める (φ1～2cm) の円礫が中心
2 暗灰色土 灰白色砂ブロック (φ3～5cm) 少量 焼土塊 (φ3～5cm) を底面中心に含む しまり強

0 2m 1:60

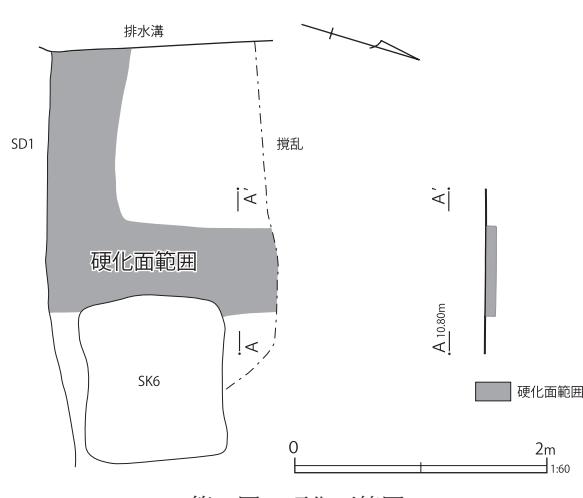
第66図 第1～3号基礎状遺構



第67図 基礎状遺構出土遺物

第13表 基礎状遺構出土遺物観察表（第67図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	(10.0)	[4.3]	—	K	15	普通	白	基礎1	肥前系 施釉 染付	
2	磁器	碗	—	[3.0]	—	K	10	普通	白	基礎1	瀬戸美濃系 施釉 染付	
3	土師質土器	焰焰	(27.4)	[3.8]	—	CIK	10	普通	にぶい橙	基礎1	砂目底 体部下位ケズリ 底部補修痕1	
4	磁器	壺	—	[2.0]	3.8	K	15	普通	白	基礎2	瀬戸美濃系 施釉 外面銅版転写染付	
5	磁器	壺	(7.2)	[3.3]	—	K	25	普通	灰白	基礎3	肥前系 施釉 外面染付	
6	瓦	棟瓦	長さ [5.5] 幅 [3.5] 厚さ 1.8			CLK	—	普通	灰白	基礎2	刻印「①」砂利 No.1	98-17



第68図 硬化面範囲

(3) 硬化面範囲 (第68図)

D 6 - g 10グリッドに位置する。発掘調査時は、第2号建物跡として調査されたが、掘り込みが認められず、建物跡や基礎状遺構として判断し難いため、硬化面範囲として扱った。硬化範囲は長軸1.76m、短軸1.57m、幅0.72mの「L」字状で、南・東側の一部は第1号溝跡、第6号土壤に壊されている。西側は調査区域外へと延びている。また、北側は搅乱を受けている。

(4) 埋設桶 (第69～73図)

埋設桶は30基が検出された。第201・205・207・208号埋設桶は第201～203号溝跡との接続状況から同時期に機能していた一連の施設と考えられる。位置、規模等の基本情報は第14表にまとめた。以下に特徴的な埋設桶について記す。

第1号埋設桶 (第69図)

D 6 - c 9グリッドに位置する。第12号建物跡と隣接するが、関連性は不明である。北側は搅乱を受けている。桶内の覆土は砂を主体としている。埋設桶はトイレ遺構の可能性の指摘があるため、底板直上の覆土の自然科学分析を行なったが、土層に含まれている寄生虫卵は極めて少なく、トイレ遺構とは考え難い(自然科学分析2(1)参照)。

第2号埋設桶 (第69図)

D 6 - d 10グリッドに位置する。第7号建物跡、第4号溝跡と重複する。径1.23mの大きな掘り方に径0.33mの桶を埋設している。

桶の底板はなく、当初から除去されていた可能性がある。また、底面に接するように桶の中心を通り、第4号溝跡と並行する板状の木製品が検出

されている。木樋の一部と考えられ、第2号埋設桶は排水升の可能性がある。第1号埋設桶と同様に自然科学分析を行ったが、寄生虫卵の検出は極めて少なく、その性格を示している（自然科学分析2（1）参照）。

出土遺物は、第74図の1に行平鍋の蓋、第77図の1に瓦樋、第80図の1・2に木質が残存した鉄製角釘を示した。

第3号埋設桶（第69図）

D6-d9グリッドに位置する。桶上層部にはほぼ中心を通るように第4号溝跡が重複している。第1層は溝跡の覆土であり、第3号埋設桶は第4

号溝跡に壊されているため溝跡に付属する施設とは考え難い。

出土遺物は、第74図の2に肥前系磁器の湯呑碗を示した。

第4号埋設桶（第69図）

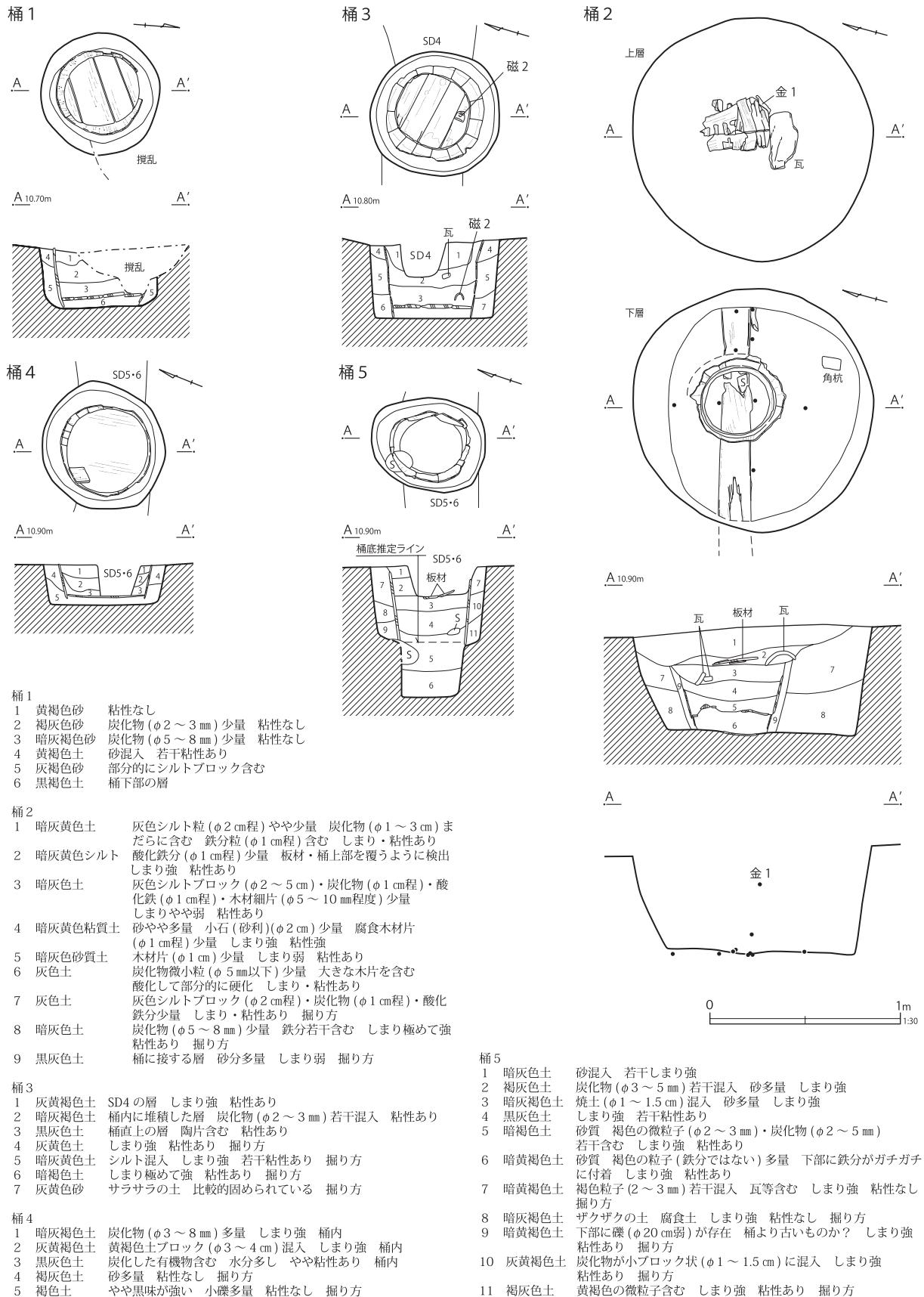
D6-d10・e10グリッドに位置する。第3号埋設桶と同様にほぼ中心を通る位置に、第5・6号溝跡が重複しており、関連性が伺える。

出土遺物は第74図の3・4に掘り方出土の陶磁器類を示した。3は瀬戸美濃系磁器で外面に銅版転写染付を施した壺である。4は瓦質土器の火鉢全体が焼され、口縁にミガキが施されている。

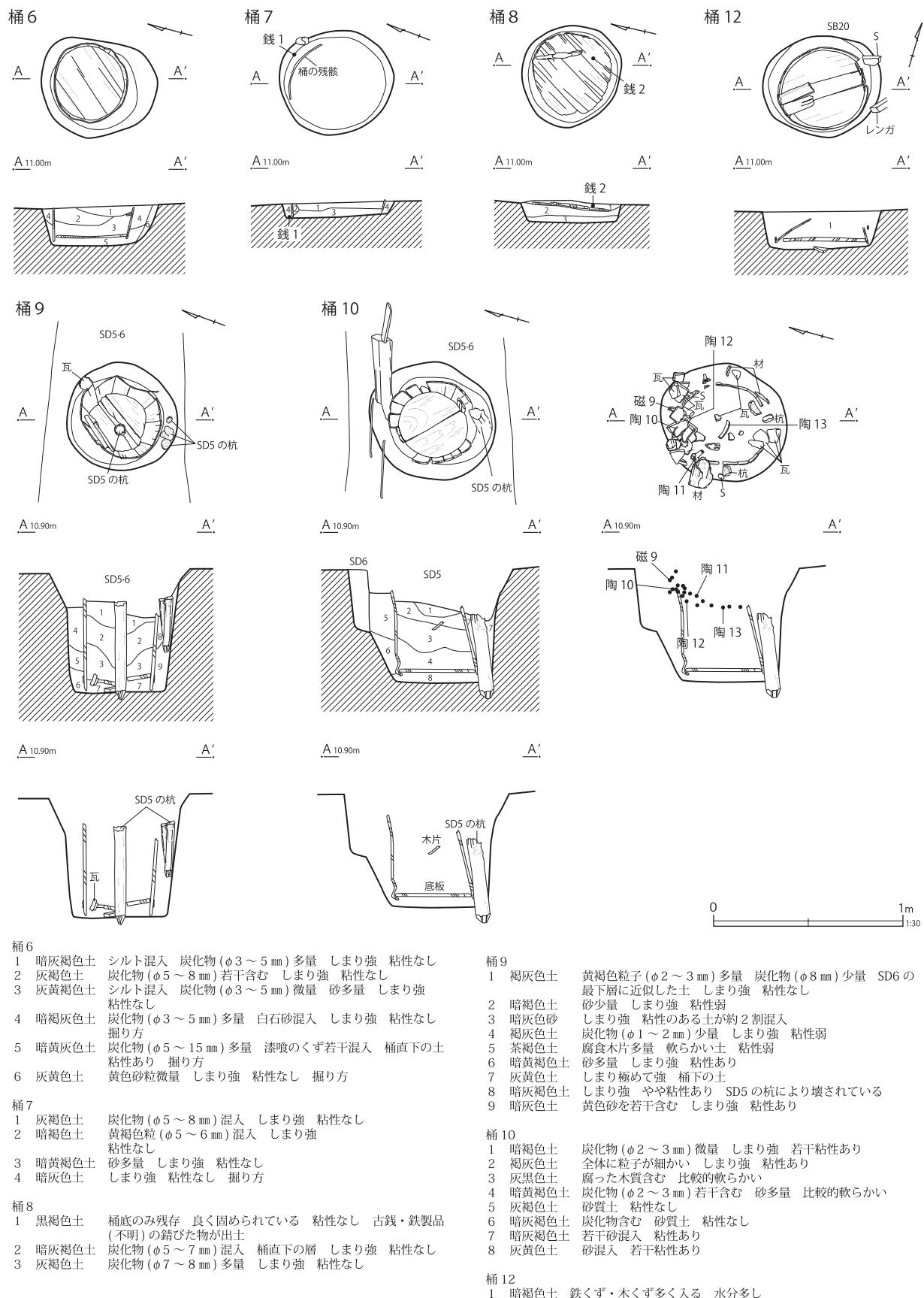
第14表 第一面埋設桶一覧表

単位：m

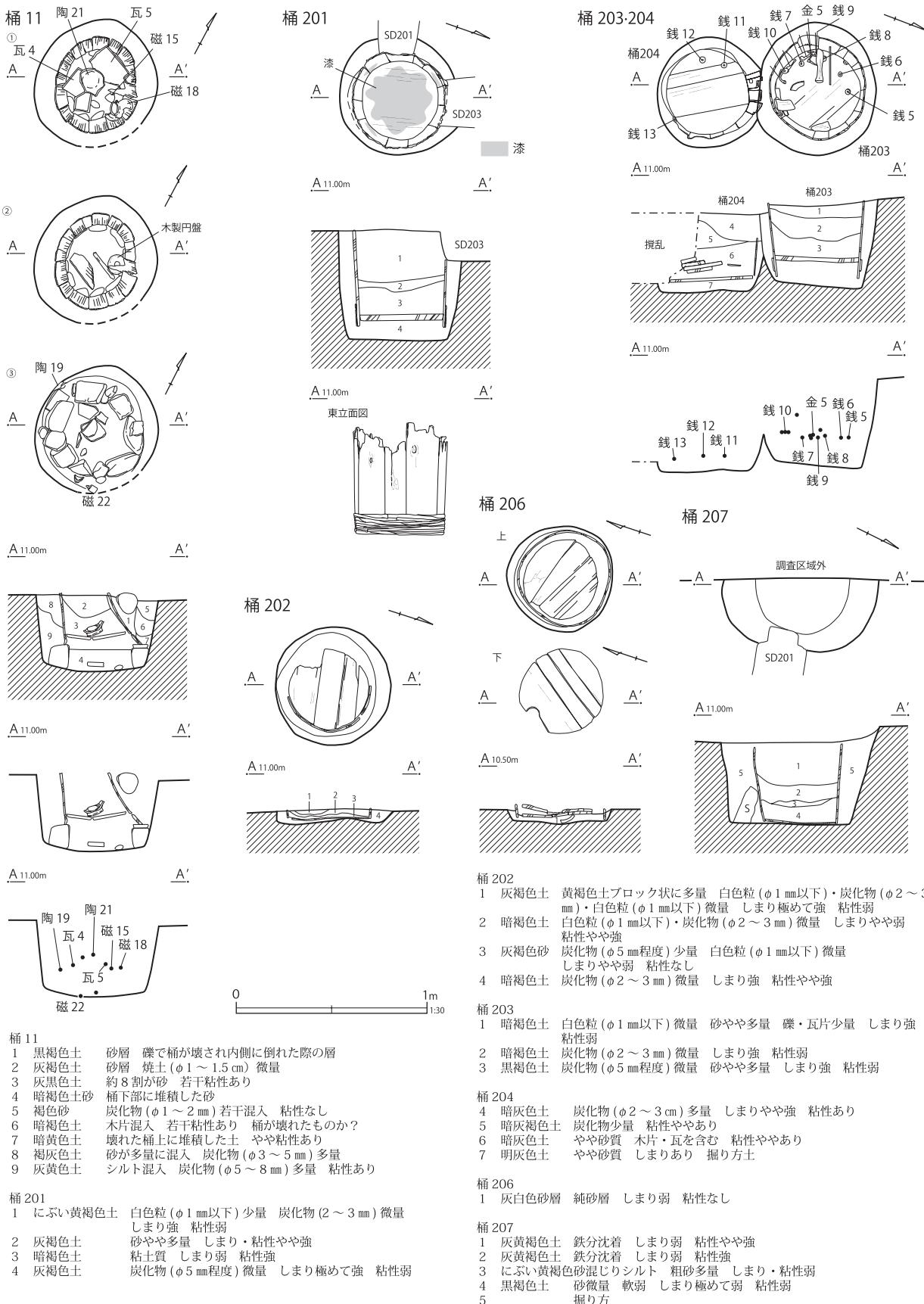
番号	グリッド	外径	深さ	内法		掘り方径	備考
				径	深さ		
1	D6-c9	0.46	0.39	0.39	0.24	[0.62]	
2	D6-d10	0.49	—	0.33	—	1.23	
3	D6-d9	0.51	0.40	0.38	0.33	0.68	SD4より古い
4	D6-d10-e10	0.47	0.18	0.43	0.16	0.64	SD5・6より古い
5	D6-d10-e10	0.42	0.37	—	—	0.60	SD5・6より古い
6	D6-e9	0.39	0.17	0.36	0.15	0.61	
7	D6-e9	—	—	—	—	0.59	
8	D6-e9	—	—	0.41	—	0.54	SD7より新しい
9	D7-d1	0.46	0.48	0.30	0.44	0.58	SD5・6より古い
10	D6-d10	0.48	0.45	0.37	0.35	0.66	SD5より古い SD6より新しい
11	D7-e1	0.48	0.29	—	—	0.67	
12	D7-d1	0.48	0.13	0.43	0.10	0.61	
201	D6-f10	0.50	0.50	0.41	0.44	0.61	SD203より古い
202	D6-f10	0.44	0.05	0.42	0.05	0.60	埋設桶216より新しい
203	D7-f1	0.54	0.38	0.42	0.28	0.70	
204	D7-f1	(0.51)	(0.20)	0.44	(0.21)	0.58	
205	D7-f1	0.48	0.61	0.39	0.52	0.78	
206	D6-e9	0.50	0.07	0.39	0.04	0.55	
				0.43	0.06		
207	D6-f10	0.46	0.43	0.37	0.42	0.81	
208	D6-f10	0.49	0.47	0.47	0.38	0.74	SD202、203より古い
209	D7-f1	0.48	0.25	0.43	0.21	—	
210	D7-f1	0.45	0.10	0.41	0.07	0.50	埋設桶215より新しい
211	D7-f1・2	0.46	0.17	0.42	0.12	0.62	
212	D7-f1	内桶0.55	0.48	0.41	0.47	0.67	
		外桶0.54	0.46	0.44	0.40		
213	D7-f1	0.47	0.14	0.41	0.10	0.52	
				0.39	0.13		
214	D7-f1	0.51	0.48	0.43	0.42	0.58	
215	D7-f1	—	—	0.44	—	—	埋設桶210より古い
216	D6-f10	—	—	0.41	—	—	埋設桶202より古い
217	D7-f1	0.51	0.49	0.41	0.37	0.72	埋設桶212より古い
218	D6-e-f1	—	0.22	—	—	0.66	



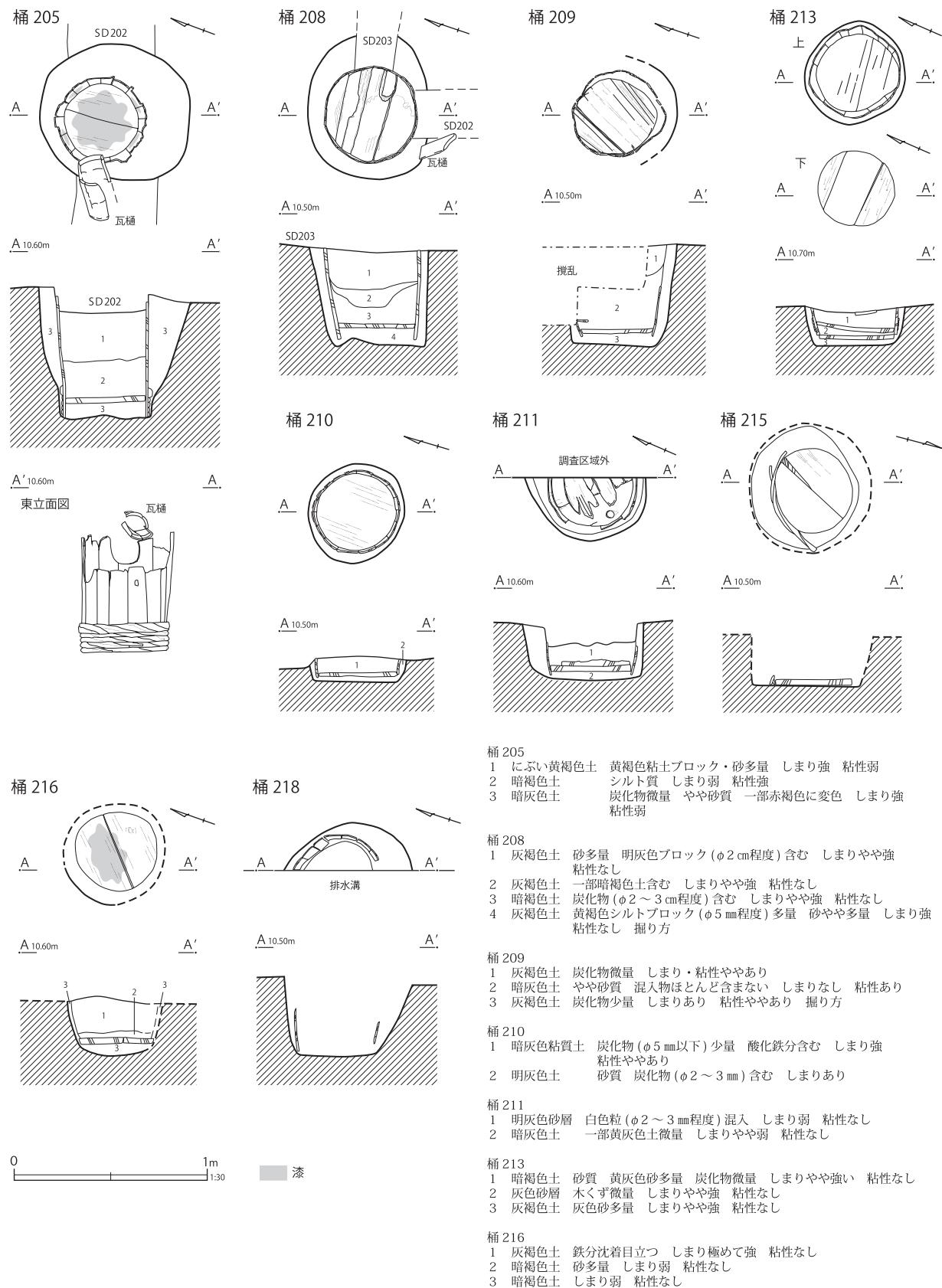
第69図 埋設桶 (1)



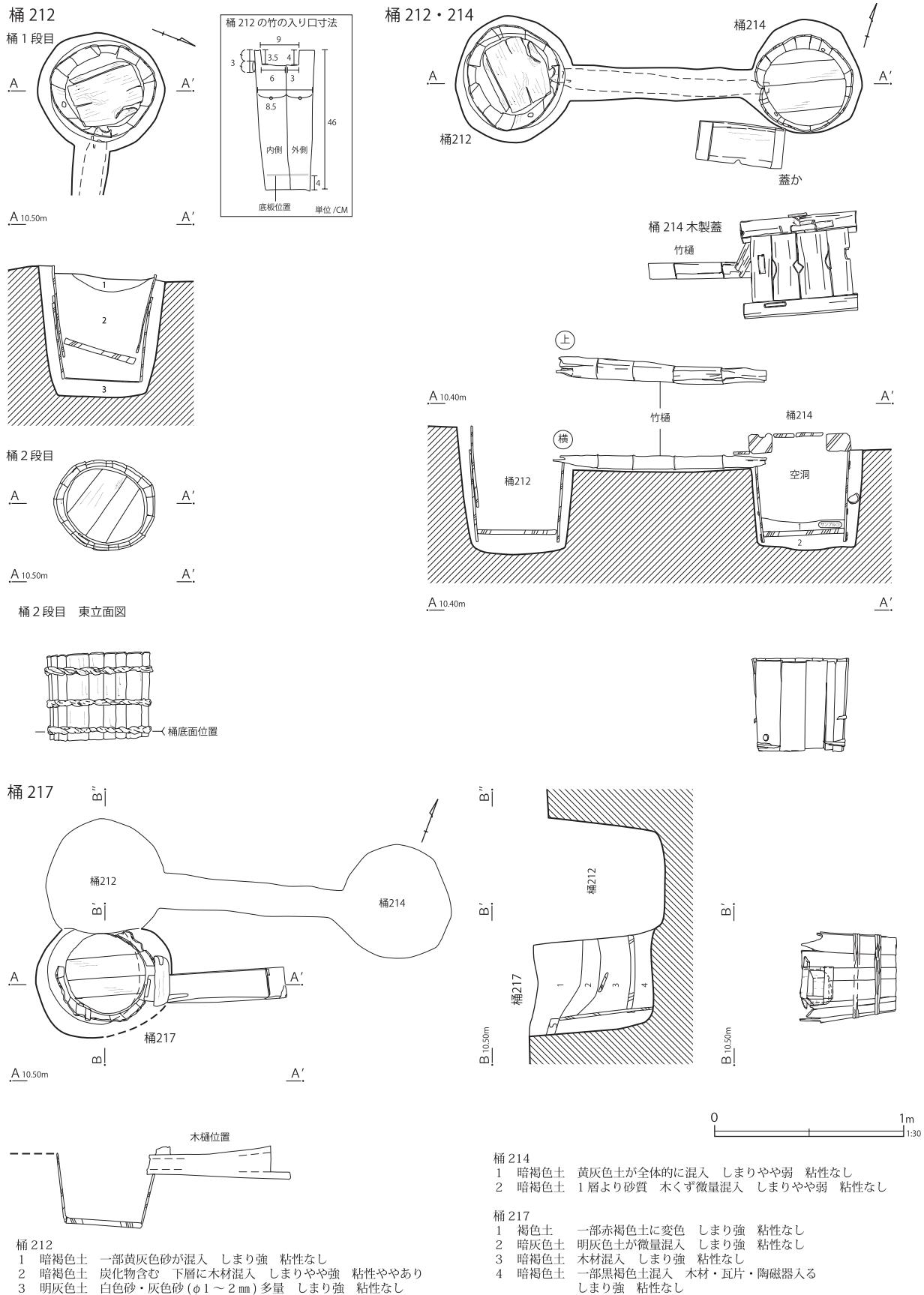
第70図 埋設桶 (2)



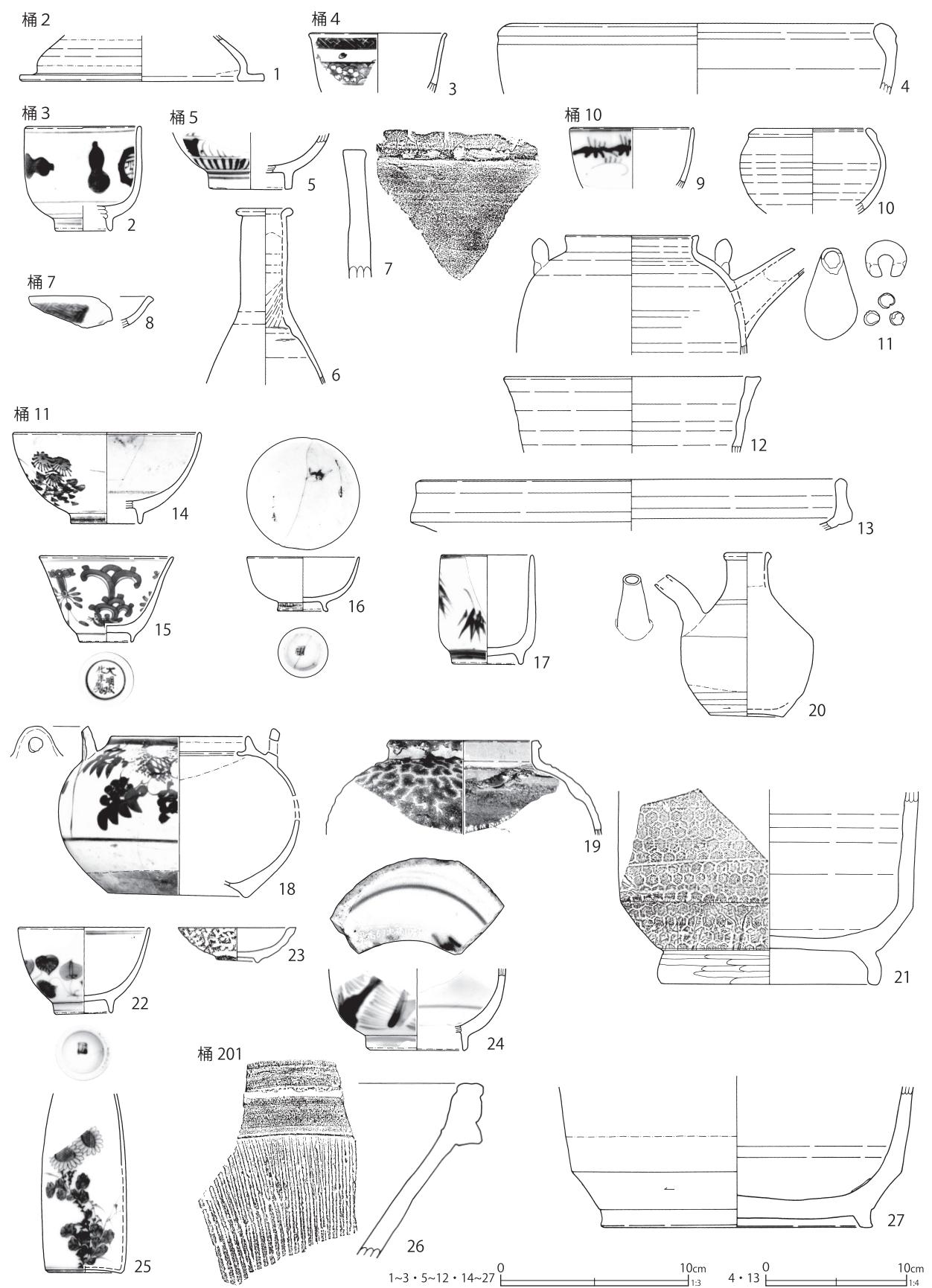
第71図 埋設桶 (3)



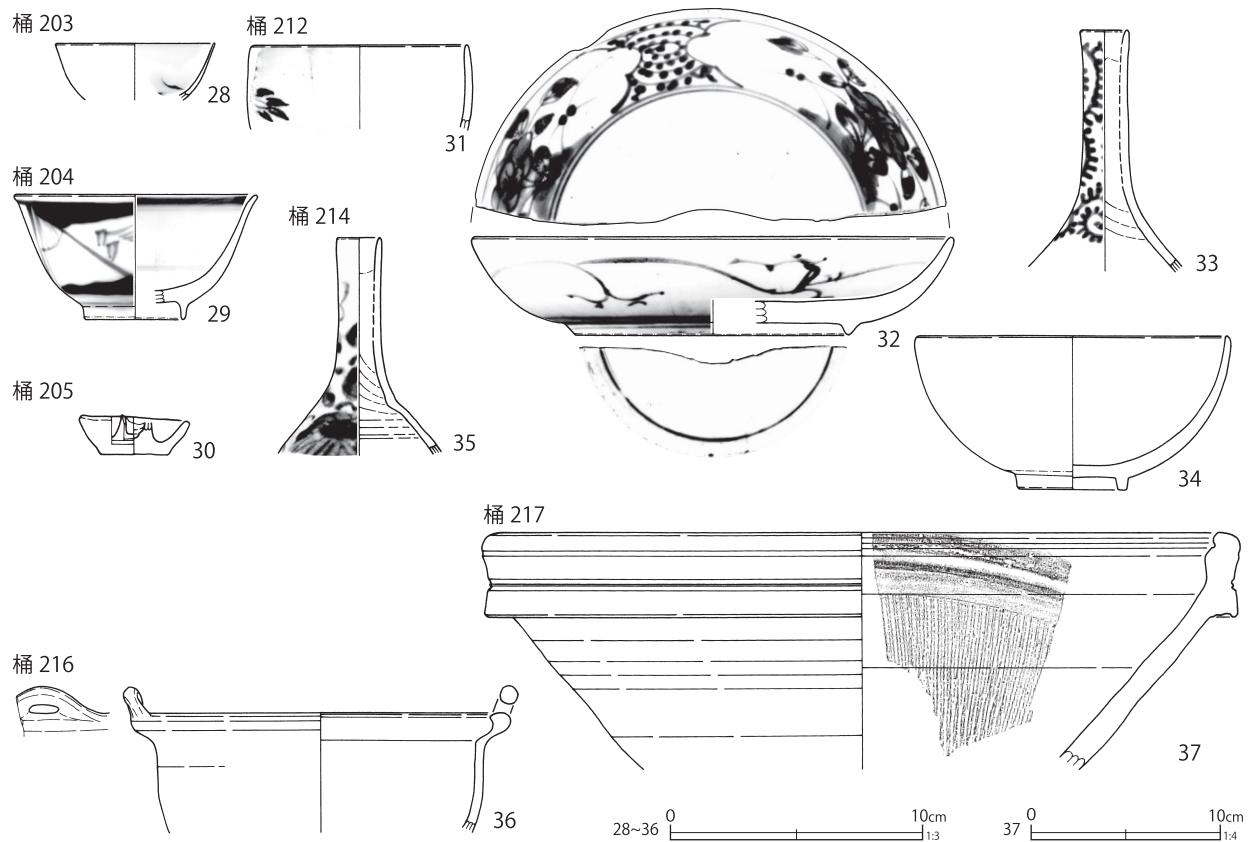
第72図 埋設桶 (4)



第73図 埋設桶 (5)



第74図 埋設桶出土遺物 (1)



第75図 埋設桶出土遺物（2）

第5号埋設桶（第69図）

D 6 – d 10 • e 10 グリッドに位置する。第5号溝跡より古い。掘り方は下層で段が付く逆凸形を呈している。底板は見られず、当初から抜き取られていた可能性がある。第5層の壁面から玉石が突出しているが、埋設桶との関係性はないと思われる。

出土遺物は、第74図の5～7に陶磁器類を示した。5は肥前系磁器の幅広高台湯呑碗である。6は掘り方出土の陶器で、鶴頸状の鉄釉徳利である。7は土師質土器の土管である。

第82図の1・2は石製品で、1は凝灰岩製の硯である。2は粘板岩製の石板で、両面に刻書が見られる。

第6号埋設桶（第70図）

D 6 – e 9 グリッドに位置し、第5・6号溝跡と重複する。溝跡と同時併存の可能性もあり得る。

底板と側板の下半部が残存しており、比較的残りは良い。桶内の覆土は砂を多く含んでいる。

出土遺物は極めて少なく陶磁器は図示し得るもののがなかった。第80図には金属製品を図示した。3は重量があり、鉛製品と考えられる。器種は不明である。

第8号埋設桶（第70図）

D 6 – e 9 グリッドに位置する。第7号溝跡と重複しており、新しい。掘り方底面から浮いた状態で、底板のみが残存している。上部は削平により失われている。

出土遺物は極めて少なく、陶磁器類では図示し得るもののがなかった。

第76図に土製品を図示した。2は瀬戸美濃系磁器の土玉である。手捻りで無釉である。外面には十字状に青色の着色が施されている。

第80図には金属製品を図示した。4は銅製品

の指ぬきである。外面は格子状に模様が付く。

桶底板直上で銭貨1枚が出土しており、第81図の2に図示した。銭種は寛永通宝の四文銭である。

第9号埋設桶（第70図）

D 7-d 1グリッドに位置する。第5・6号溝跡より古い。桶の底板は第5号溝跡の杭が打ち込まれ、壊されている。第1層は第6号溝跡の最下層に近似した土であるが、溝跡が機能していた時の流れ込みと考えられる。

出土遺物は極めて少なく、図示し得る遺物はなかった。

第10号埋設桶（第70図）

D 6-d 10グリッドに位置する。第6号溝跡より新しく、第5号溝跡より古い。桶の掘り方に第5号溝跡の杭が打ち込まれ、桶側板が内側へ傾いている。後述する第6号溝跡から第5号溝跡への移行期間は短く、第10号埋設桶は極めて短期間に設置・廃絶された遺構と考えられる。

出土遺物は第74図の9～13に陶磁器を示した。9は瀬戸美濃系磁器の小碗である。10は陶器の豆甕、11は土瓶で灰釉の上に白土化粧と染付を施している。9が最新期の遺物である。19世紀後葉の設置・廃絶と考えられる。

第11号埋設桶（第71図）

D 7-e 1グリッドに位置する。南側に一部は第二次調査では検出されなかった。上部は桶の外側から円礫による破壊を受けている。下部は円周状に切石材や礫が並べられ、桶の側板を支えている。桶内部には陶磁器や瓦、小礫が見られる。小規模な井戸跡の可能性が想定される。

出土遺物は第74図の14～25に陶磁器を示した。14～18は瀬戸美濃系磁器で、14は酸化コバルト染付の碗である。表面は釉薬が白色化している。15は酸化コバルト染付の壺で、高台内に「大明成化年製」と書かれている。16は卵殻手壺で内面に青色の上絵付、口縁に金彩が施されている。18は

土瓶で、外面に酸化コバルト染付が施され、体部に凹みが見られる。底部は二次穿孔の可能性がある。19は掘り方出土で、陶器の鮫肌釉土瓶である。20は陶器の鉄釉水注で被熱している。21は瓦質土器の脚付火鉢である。外面はローラースタンプを施文しており、脚部はミガキ後赤彩を施している。22・25は掘り方出土で、瀬戸美濃磁器である。22は壺、25は小法量の燭徳利である。

第76図の1は土製品の小壺である。第77図の3は江戸式の軒桟瓦、4・5は桟瓦である。4は内面に櫛歯状工具と思われる沈線が見られる。第81図の3は鉄錢である。第82図の3は滑石製の石筆である。

桶内出土遺物は1・2・17・18が最新、掘り方出土遺物は22・25が最新である。19世紀後葉に設置・廃絶と考えられる。

第201号埋設桶（第71図）

D 6-f 10グリッドに位置する。第201・203号溝跡と接続している。底板には水漏れを防ぐために漆が塗られている。集水枡としての機能が考えられる。第1層には白色粒子が見られる。

出土遺物は、第74図の26・27に陶磁器を示した。26は堺明石系陶器の擂鉢である。27は瀬戸美濃系陶器の半胴甕で、第203号埋設桶の出土遺物と接合関係にある。

第78図の1～11は設置されていた桶の側板である。4には焼印が押されている。第82図の4は石製品の簪の玉である。外面に彩色を施している。

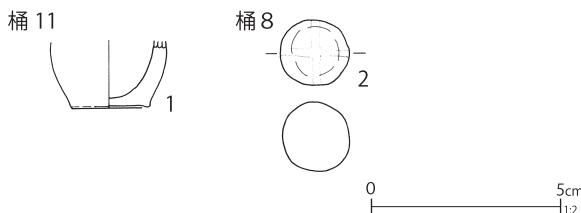
第203・204号埋設桶（第71図）

D 7-f 1グリッドに位置する。第203号埋設桶が第204号埋設桶を僅かに掘り込んで並んでいるが同時期併存の可能性もある。第204号埋設桶の南側は搅乱に壊されている。第203号建物跡の範囲内に収まるが、建物跡に伴うかは不明である。

出土遺物は第75図の28・29に陶磁器を示した。28は瀬戸美濃磁器の卵殻手壺、29は瀬戸美濃磁

第15表 埋設桶出土遺物観察表（1）（第74・75図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	陶器	蓋	(12.8)	[2.4]	—	HK	15	普通	にぶい橙	桶2	行平鍋 鉄釉	
2	磁器	碗	(6.0)	5.5	(2.8)	K	45	良好	白	桶3	No.1 肥前系 施釉 外面染付	
3	磁器	坏	(7.0)	[3.1]	—	K	15	普通	白	桶4	掘方 濑戸美濃系 施釉 外面銅版転写染付	
4	瓦質土器	火鉢	(26.2)	[5.0]	—	CHI	10	普通	暗灰	桶4	掘方 口縁ミガキ 燻す	
5	磁器	碗	—	[3.0]	(4.0)	K	15	普通	白	桶5	肥前系 施釉 外面染付 幅広高台	
6	陶器	徳利	2.7	[9.3]	—	I	20	良好	黄灰	桶5	掘方 外面鉄釉	43-9
7	瓦質土器	土管	—	[6.8]	—	CEHIK	5	普通	橙	桶5	やや酸化炎焼成ぎみ	
8	磁器	皿	—	[1.6]	—	K	5	良好	白	桶7	瀬戸美濃系 施釉 内面染付，陰刻	
9	磁器	碗	(6.4)	[3.2]	—	K	20	普通	白	桶10	No.16 濑戸美濃系 施釉 外面染付	
10	陶器	豆甕	(5.8)	[4.5]	—	IK	30	普通	灰白	桶10	No.20 灰釉	
11	陶器	土瓶	(7.0)	[6.3]	—	I	20	普通	灰白	桶10	No.13 外面灰釉，白土化粧，染付	
12	瓦質土器	植木鉢	(13.4)	[4.0]	—	CIK	10	普通	黄灰	桶10	No.21 強いロクロナデ	
13	土師質土器	焰烙	(29.8)	[3.6]	—	CHI	10	普通	明褐灰	桶10	No.3 砂目底 体部ナデ	
14	磁器	碗	(9.8)	4.8	(3.6)	K	40	良好	白	桶11	瀬戸美濃系 施釉 酸化コバルト染付	
15	磁器	坏	7.0	4.5	2.7	K	80	良好	白	桶11	No.5 濑戸美濃系 施釉 外面酸化コバルト染付	43-10
16	磁器	坏	6.0	2.9	2.6	—	95	普通	白	桶11	瀬戸美濃系 施釉 外面染付 内面上絵付（青）口縁金彩	58-12
17	磁器	坏	(4.8)	5.8	(3.6)	K	25	普通	白	桶11	瀬戸美濃系 施釉 外面酸化コバルト染付	
18	磁器	土瓶	7.2	8.4	7.4	K	90	良好	白	桶11	No.6 濑戸美濃系 施釉 外面酸化コバルト染付 体部凹み2 底部2次穿孔か	
19	陶器	土瓶	(7.8)	[5.0]	—	K	20	良好	にぶい赤褐	桶11	掘方 No.9 鮫肌釉	43-11
20	陶器	水注	2.2	8.6	3.9	E	100	良好	にぶい褐	桶11	鉄釉 被熱	43-12
21	瓦質土器	火鉢	—	[10.2]	11.5	CEI	75	普通	灰黄褐	桶11	No.1 外面ローラースタンプ 脚部ミガキ 赤彩	
22	磁器	坏	6.8	4.6	3.0	K	90	良好	白	桶11	掘方 No.7 濑戸美濃系 施釉 染付	
23	磁器	紅皿	6.3	1.8	2.1	K	100	良好	浅黄橙	桶11	掘方 濑戸美濃系 型成形 施釉	
24	磁器	碗	—	[4.3]	5.0	K	15	良好	白	桶11	掘方 濑戸美濃系 施釉 染付	
25	磁器	爛徳利	—	[9.5]	3.9	K	90	良好	白	桶11	掘方 濑戸美濃系 施釉 外面染付	
26	陶器	擂鉢	—	[9.3]	—	DEHIKL	5	良好	赤褐	桶201	堺明石系	
27	陶器	甕	—	[7.5]	(14.0)	EHIK	20	良好	浅黄橙	桶201	瀬戸美濃系 鉄釉 内面目跡1	
28	磁器	坏	(6.2)	[2.2]	—	K	10	良好	白	桶203	瀬戸美濃系 施釉 内面上絵付（青）	
29	磁器	碗	(9.4)	[4.9]	(3.8)	K	35	良好	白	桶204	瀬戸美濃系 施釉 染付	
30	土師質土器	秉燭	4.0	[1.5]	2.6	CEHIKL	95	良好	にぶい橙	桶205	雲母付着	43-13
31	磁器	碗	(8.4)	[3.3]	—	K	15	良好	白	桶212	掘方 肥前系 施釉 外面染付 割口縁辺二次利用（敲打）	
32	磁器	皿	(18.8)	3.9	(10.6)	K	45	良好	白	桶212	掘方 肥前系 施釉 染付 漆継	43-14
33	磁器	徳利	1.8	[9.5]	—	K	90	良好	白	桶212	掘方 肥前系 外面施釉，染付	
34	陶器	碗	12.2	6.1	4.2	HIK	85	普通	にぶい橙	桶212	掘方 灰釉 桶217 掘方と接合	43-15
35	磁器	徳利	1.6	[8.6]	—	K	80	良好	白	桶214	掘方 肥前系 外面施釉，染付	
36	陶器	鍋	(14.1)	[5.7]	—	K	5	良好	灰白	桶216	柿釉	
37	陶器	擂鉢	(28.2)	[9.3]	—	EIK	10	普通	赤褐	桶217	掘方 堀明石系	



第76図 埋設桶出土遺物（3）

器の端反碗である。

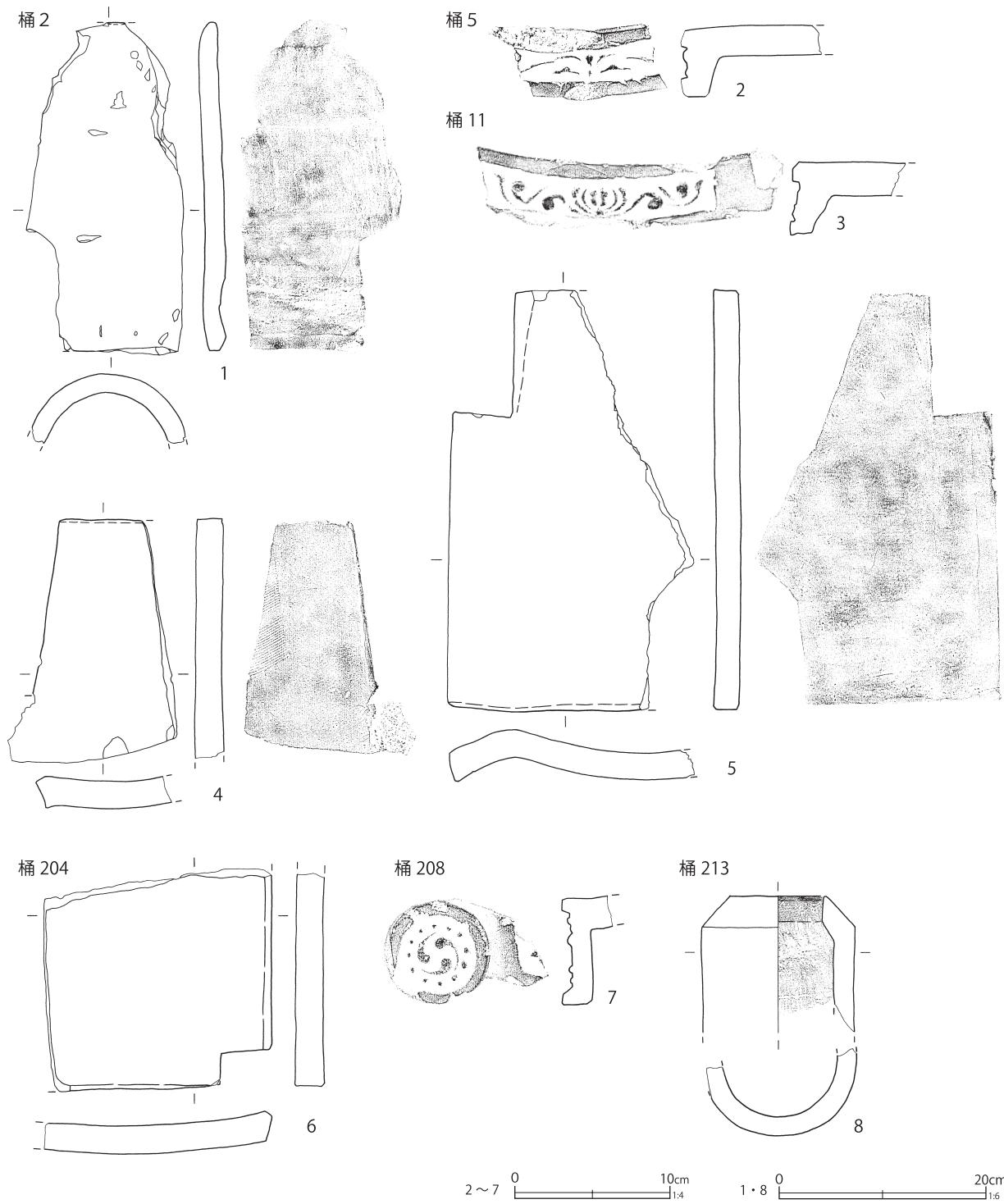
第77図の6は棟瓦、第79図の12～14は箸である。12・13には赤漆が塗られている。

第80図の5～8に鉄製角釘を示した。

第203号埋設桶の下層では銭貨の出土が目立つており、第81図の4～13に示した。寛永通宝9枚（四文銭5、鉄銭1枚含む）、銭種不明鉄銭1

第16表 埋設桶出土遺物観察表（2）（第76図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	胎土	焼成	色調	遺構名	備考	図版
1	土製品	小壺	—	[1.2]	2.0	8.2	I	普通	橙	桶11	江戸在地系か 回転糸切 煙付着	94-1
2	磁器	土玉	径1.8			6.1	—	良好	白	桶8	瀬戸美濃系 手捻り 着色（青）	95-14



第77図 埋設桶出土遺物（4）

枚が出土している。また、第204号埋設桶の下層も錢種不明錢貨2枚が出土している。

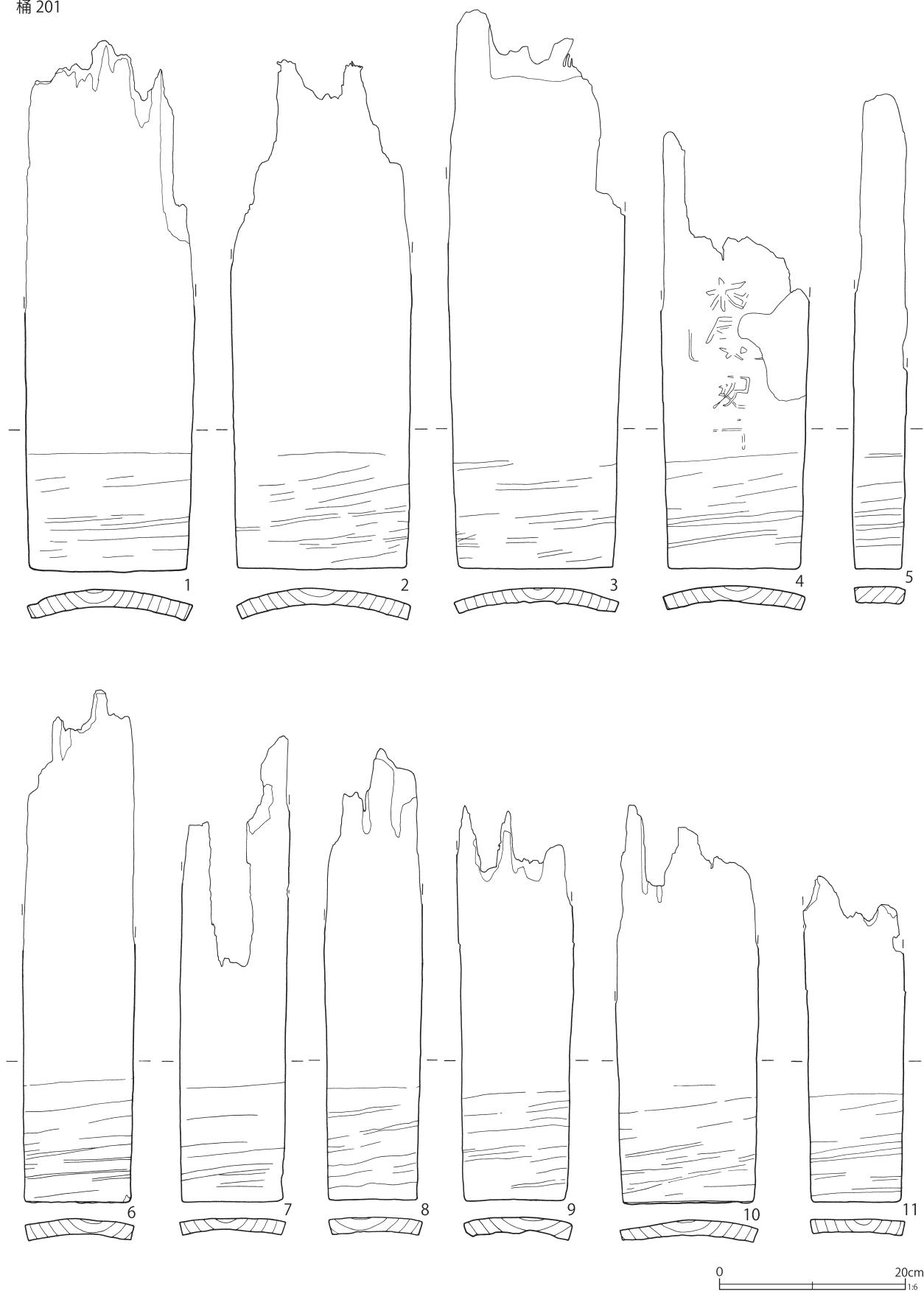
第205号埋設桶（第72図）

D 7-f 1 グリッドに位置する。第202号溝跡と接続し、瓦樋が一部残存している。底板には漆

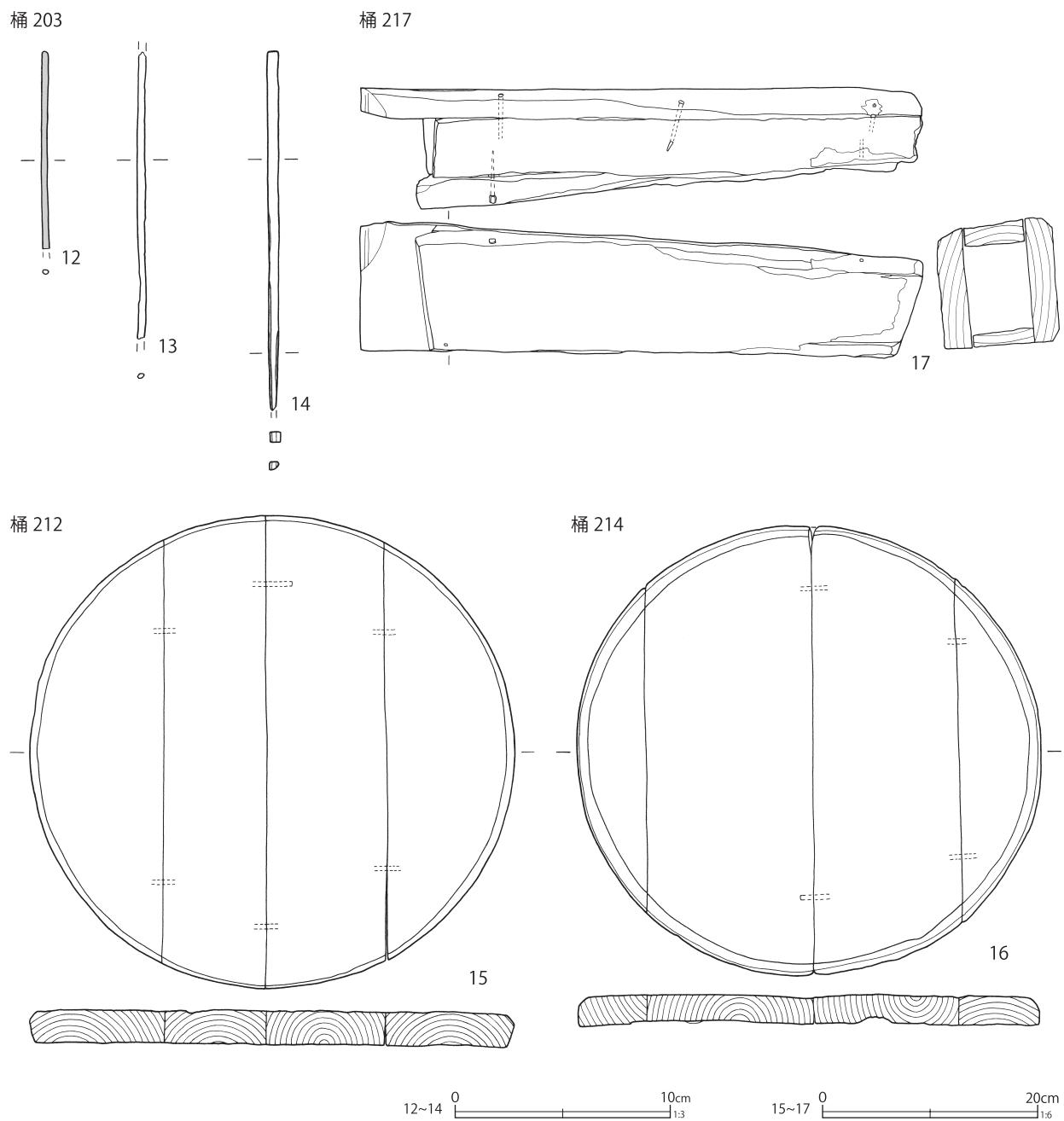
が塗られており、第201号埋設桶と同様の機能が考えられる。

出土遺物は第75図の30に土師質土器の秉燭を示した。第82図の5は流紋岩製の砥石である。側面に幅広工具痕が見られる。

桶 201



第78図 埋設桶出土遺物 (5)



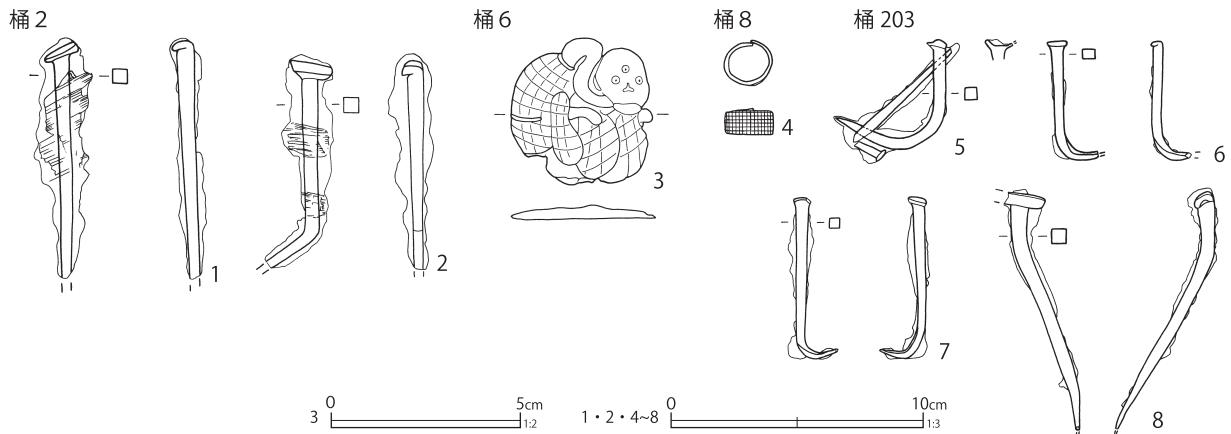
第79図 埋設桶出土遺物（6）

第17表 埋設桶出土遺物観察表（3）（第77図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	径	胎土	焼成	色調	遺構名	備考	図版
1	瓦	瓦桶	32.1	[14.9]	1.9	[6.7]	—	CIK	普通	灰白	桶2		99-1
2	瓦	軒棧瓦	[9.2]	[9.4]	1.9	[4.4]	—	K	普通	灰白	桶5	桶内 銀化	99-3
3	瓦	軒棧瓦	[8.4]	[19.3]	2.2	[4.5]	—	CK	普通	灰	桶11	掘方 江戸式 銀化	
4	瓦	棧瓦か	[15.7]	[10.6]	1.8	—	—	K	良好	灰白	桶11	No.3 内面櫛歯状沈線	99-2
5	瓦	棧瓦	27.0	[15.7]	1.7	[3.4]	—	C	良好	灰白	桶11	銀化 No.4	
6	瓦	棧瓦	[13.7]	[14.7]	1.8	—	—	HK	良好	暗灰	桶204	被熱	
7	瓦	軒棧瓦	[3.3]	[10.7]	2.0	[7.0]	6.8	HIK	良好	灰白	桶208	掘方 左巻 12連珠三巴文 銀化 被熱	
8	瓦	瓦桶	[13.2]	15.0	2.0	—	—	CK	良好	灰白	桶213	銀化 被熱	

第18表 埋設桶出土遺物観察表(4)(第78・79図)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径/径	高さ	底径	木取り	遺構	備考	図版
1	木製品	桶	[56.8]	18.2	1.8	—	—	—	板目	桶 201	側板	
2	木製品	桶	[54.4]	19.4	1.7	—	—	—	板目	桶 201	側板	
3	木製品	桶	[59.6]	18.8	1.7	—	—	—	板目	桶 201	側板	
4	木製品	桶	[46.6]	15.8	1.6	—	—	—	板目	桶 201	側板 焼印	
5	木製品	桶	[50.8]	5.6	1.7	—	—	—	板目	桶 201	側板	
6	木製品	桶	[54.8]	12.0	1.8	—	—	—	板目	桶 201	側板	
7	木製品	桶	[49.8]	11.4	1.5	—	—	—	板目	桶 201	側板	
8	木製品	桶	[48.0]	10.4	1.6	—	—	—	板目	桶 201	側板	
9	木製品	桶	[42.4]	12.2	1.7	—	—	—	板目	桶 201	側板	
10	木製品	桶	[42.4]	14.9	1.6	—	—	—	板目	桶 201	側板	
11	木製品	桶	[34.6]	10.6	1.5	—	—	—	板目	桶 201	側板	
12	木製品	箸	[9.0]	0.3	0.2	—	—	—	削出	桶 203	赤漆	
13	木製品	箸	[13.3]	0.4	0.2	—	—	—	削出	桶 203	赤漆	
14	木製品	箸	[16.6]	0.5	0.5	—	—	—	削出	桶 203		
15	木製品	桶	—	—	3.0	44.0	—	—	板目	桶 212	蓋ないし底板 墨書	
16	木製品	桶	—	—	2.6	42.2	—	—	板目	桶 214	蓋ないし底板 墨書	
17	木製品	木樋	76.2	18.4	16.0	—	—	—	板目	桶 217	鉄釘固定	102-1



第80図 埋設桶出土遺物(7)

第19表 埋設桶出土遺物観察表(5)(第80図)

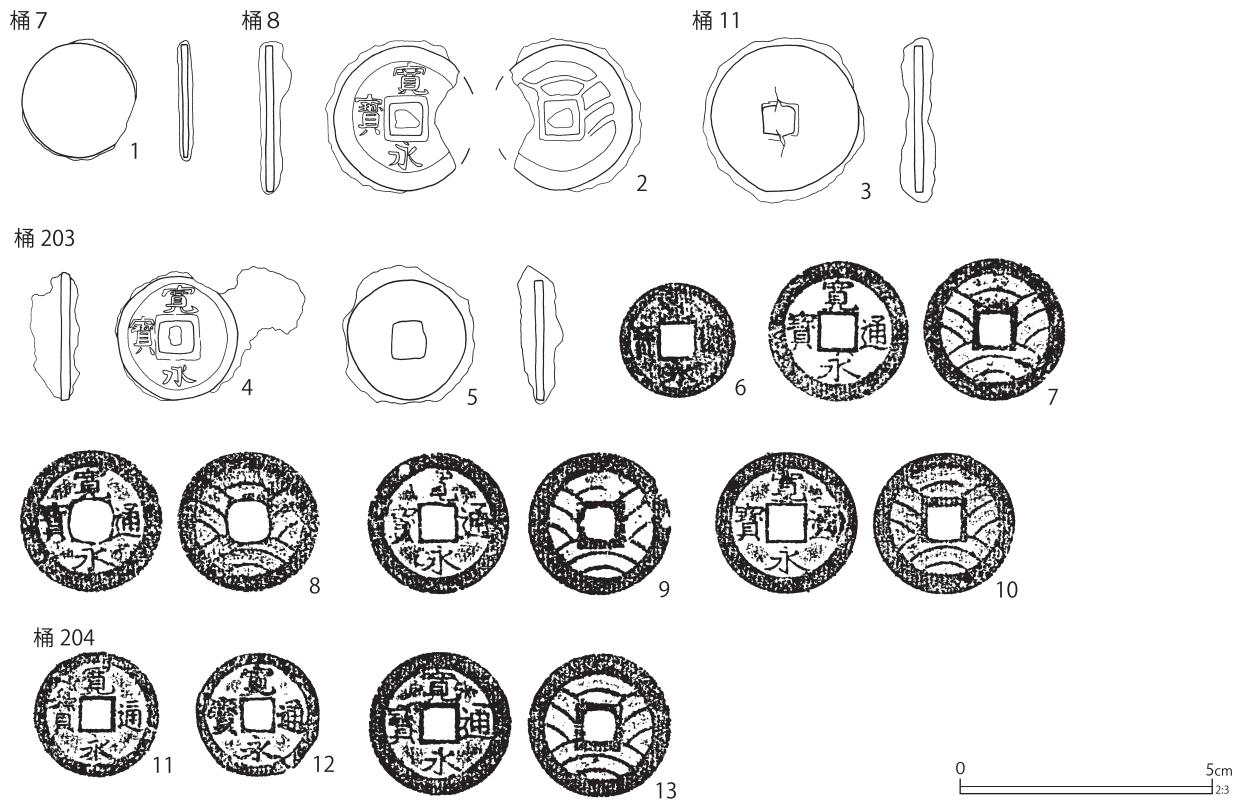
番号	種別	器種	法量	遺構名	備考	図版
1	鉄製品	釘	長さ[9.3]cm 幅0.6cm 厚さ0.6cm 重さ18.5g	桶 2	木片付着 No.1	
2	鉄製品	釘	長さ[8.2]cm 幅0.6cm 厚さ0.6cm 重さ18.6g	桶 2	木片付着	
3	鉛製品か	不明	長さ1.9cm 幅1.9cm 重さ3.2g	桶 6		
4	銅製品	指貫き	径1.8cm 高さ1.0cm 厚さ0.2cm 重さ2.5g	桶 8		
5	鉄製品	釘	長さ[4.3]cm 幅0.5cm 厚さ0.5cm 重さ12.8g	桶 203	No.7	
6	鉄製品	釘	長さ[4.7]cm 幅0.5cm 厚さ0.4cm 重さ3.3g	桶 203		
7	鉄製品	釘	長さ6.4cm 幅0.4cm 厚さ0.4g 重さ5.9g	桶 203		
8	鉄製品	釘	長さ[9.5]cm 幅0.6cm 厚さ0.6cm 重さ14.8g	桶 203		

第207号埋設桶(第71図)

D 6-f 10グリッドに位置する。西側は調査区域外へと続いている。第201号溝跡の瓦樋と接続している。出土遺物は認められなかった。

第208号埋設桶(第72図)

D 6-f 10グリッドに位置する。第202・203号溝跡と接続し、付近に瓦樋が一部残存している。第77図の7は軒桟瓦である。陶磁器の出土は認



第81図 埋設桶出土遺物 (8)

第20表 埋設桶出土遺物観察表 (6) (第81図)

番号	種別	器種	法量	遺構	備考	図版
1	銅製品	銭貨	径 22.1mm 厚さ 1.1mm 重さ 3.3g	桶 7	一錢銅貨か No. 1	
2	銅製品	銭貨	径 27.8mm 厚さ 1.4mm 重さ 5.8g	桶 8	寛永通寶 (新) 四文銭 赤味を帯びる No. 1	
3	鉄製品	銭貨	径 29.0mm 厚さ 1.4mm 重さ 6.7g	桶 11		
4	鉄製品	銭貨	径 24.0mm 厚さ 1.4mm 重さ 7.1g	桶 203	寛永通寶 (新)	
5	鉄製品	銭貨	径 23.6mm 厚さ 1.3mm 重さ 5.1g	桶 203	No. 1	
6	銅製品	銭貨	径 23.0mm 厚さ 0.8mm 重さ 2.2g	桶 203	No. 2	
7	銅製品	銭貨	径 28.0mm 厚さ 1.2mm 重さ 4.1g	桶 203	寛永通寶 (新) 四文銭 No. 3	
8	銅製品	銭貨	径 28.0mm 厚さ 1.0mm 重さ 4.5g	桶 203	寛永通寶 (新) 四文銭 No. 6	
9	銅製品	銭貨	径 28.0mm 厚さ 1.0mm 重さ 3.9g	桶 203	No. 9	
10	銅製品	銭貨	径 28.0mm 厚さ 1.2mm 重さ 4.6g	桶 203	No. 12	
11	銅製品	銭貨	径 24.5mm 厚さ 1.0mm 重さ 2.6g	桶 204	寛永通寶 (新) No. 1	
12	銅製品	銭貨	径 24.5mm 厚さ 1.0mm 重さ 2.8g	桶 204	寛永通寶 (古) No. 2	
13	銅製品	銭貨	径 28.0mm 厚さ 1.0mm 重さ 4.0g	桶 204	寛永通寶 (新) 四文銭 No. 3	

められなかった。

第213号埋設桶 (第72図)

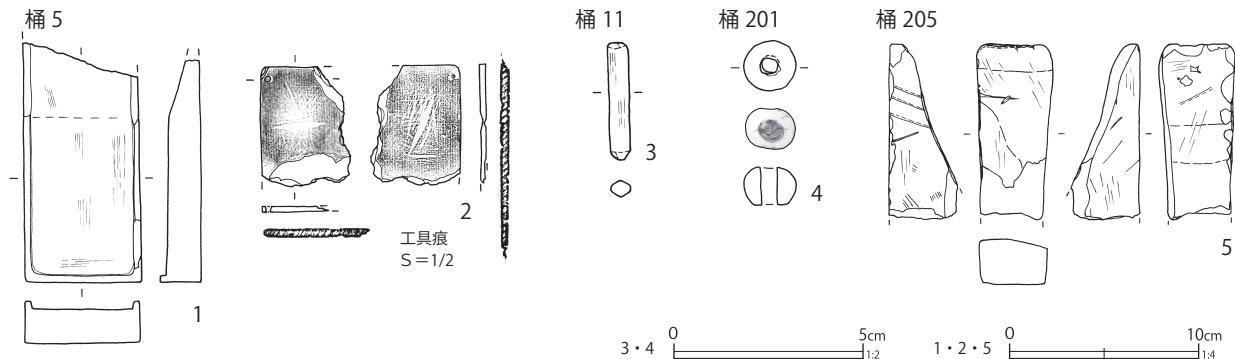
D 7-f 1 グリッドに位置する。底板と側板下半部が残存しており、底板は2枚重なって検出されている。1枚は蓋の可能性がある。

出土遺物は極めて少なく、陶磁器は図示し得るもののがなかった。第77図の8に、瓦桶を図示した。瓦桶が出土していることから、集水枠の一種であ

る可能性が想定される。

第212・214号埋設桶 (第73図)

D 7-f 1 グリッドに位置する。竹桶で接続され、同時期に機能していたと考えられる。第212号埋設桶は、径54cmの外桶の中に径55cmの内桶を収める入れ子状の埋設桶である。第214号埋設桶には方形に組まれた蓋が伴っており、内部は土層の堆積がほとんどなく、空洞となっていた。



第82図 埋設桶出土遺物 (9)

第21表 埋設桶出土遺物観察表 (7) (第82図)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	遺構名	備考	図版
1	石製品	硯	[12.5]	6.2	—	224.4	凝灰岩	桶 5	器高 2.2 cm	
2	石製品	石板	[6.2]	[4.7]	0.3	17.6	粘板岩	桶 5	刻書か 穿孔 1 側面工具痕	
3	石製品	石筆	3.0	0.5	—	1.3	滑石	桶 11	両端使用	
4	石製品	簪の玉	高さ 1.0 径 1.4		—	3.1	石灰岩か	桶 201	外面彩色	112-5
5	石製品	砥石	[9.2]	4.0	3.6	158.8	流紋岩	桶 205	砥面 4 幅広工具痕 被熱	

第203号建物跡の想定範囲内部に第212号埋設桶があり、外部にある第214号埋設桶と竹桶で接続されているため、建物跡に伴う排水施設と考えられる。

出土遺物は第75図の31～34に第212号埋設桶出土陶磁器、35に第214号埋設桶出土陶磁器を示した。何れも掘り方出土である。

31～33は肥前系磁器で、31は小丸碗、32は大振りの粗製皿、33は御神酒徳利である。32の粗製皿は漆継による補修痕が見られる。34は地方窯系陶器の碗である。暗緑色の灰釉で高台は削り出しだである。

35は肥前磁器の御神酒徳利である。

第79図の15・16は埋設桶の底板である。共に墨痕が見られる。

第217号埋設桶 (第73図)

D 7-f 1 グリッドに位置する。第212号埋設桶に壊されている。木桶が接続されているが、接続先の埋設桶は検出されなかった。

出土遺物は第75図の37に堺明石系陶器の擂鉢、第79図の17に木桶を図示した。

(5) 井戸跡

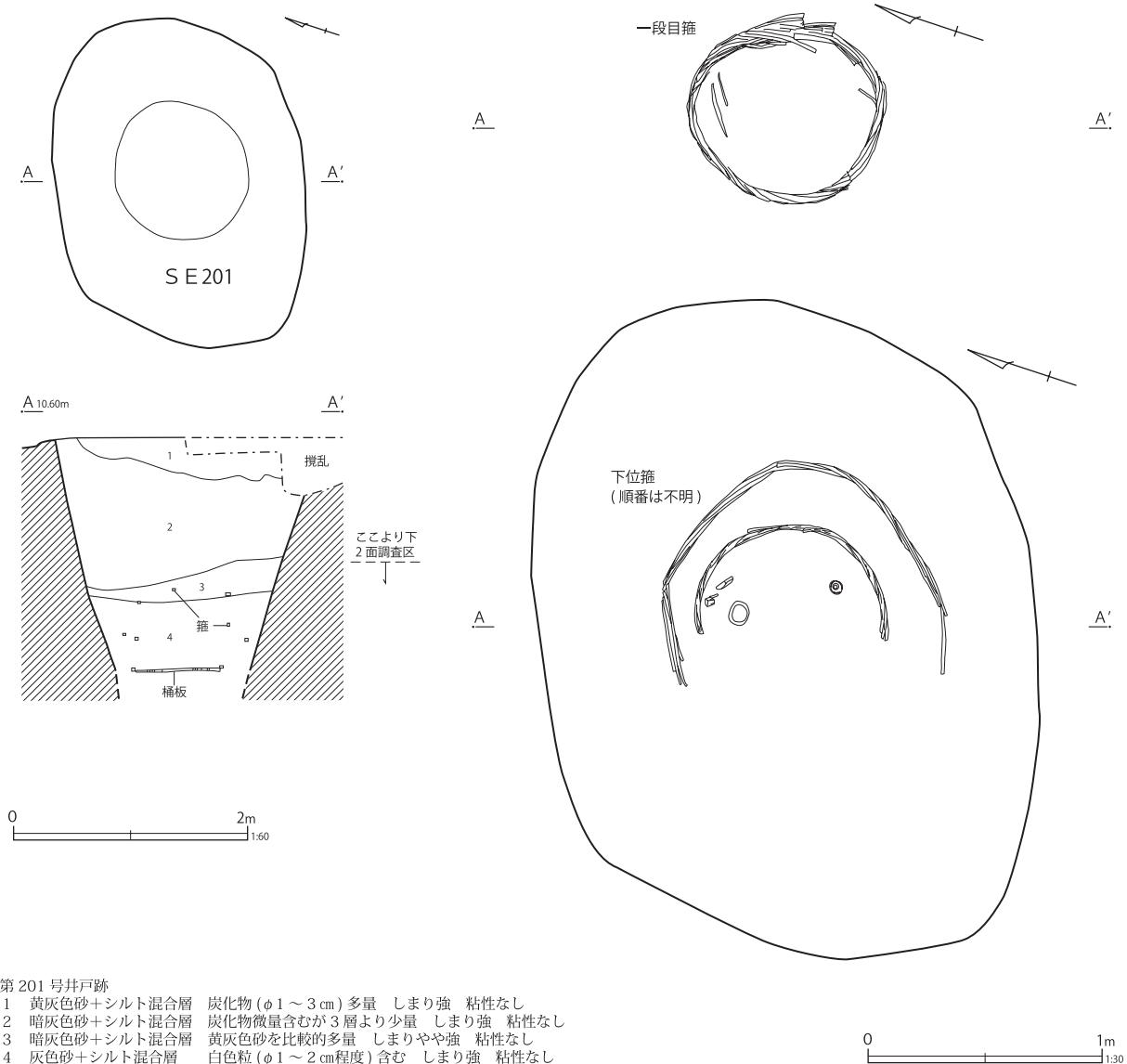
井戸跡は1基が検出された。発掘調査時は、第211号土壙とされていたが、遺構の断面が井戸跡の掘り方に類似していること、遺構内部に複数の籠と桶の底板が確認されていることから井戸跡と判断した。

第201号井戸跡 (第83図)

D 6-f 10 グリッドに位置する。第210号土壙を壊している。規模は籠の径1.21m、掘り方の径2.10m、深さ2.25m以上である。安全性の制約により底面は検出されておらず、更に下層へと続いている。井筒はなく、籠のみが残存しており、廃絶時に抜き取りを行った可能性がある。覆土は砂混じりのシルトが主体であり、最下層である第4層には白色粒が含まれている。

出土遺物は第84図の1～13に示した。1～12は陶磁器である。

1は瀬戸美濃系磁器の端反碗である。高台内が外面より内側に凹んでいる。2は瀬戸美濃系磁器の卵殻手杯で、内面に青色の上絵付が施されている。3は瀬戸美濃系磁器の型押寿文杯、4は酸化



第201号井戸跡
 1 黄灰色砂+シルト混合層 炭化物 ($\phi 1 \sim 3$ cm) 多量 しまり強 粘性なし
 2 暗灰色砂+シルト混合層 炭化物微量含むが3層より少量 しまり強 粘性なし
 3 暗灰色砂+シルト混合層 黄灰色砂を比較的多量 しまりやや強 粘性なし
 4 灰色砂+シルト混合層 白色粒 ($\phi 1 \sim 2$ cm程度) 含む しまり強 粘性なし

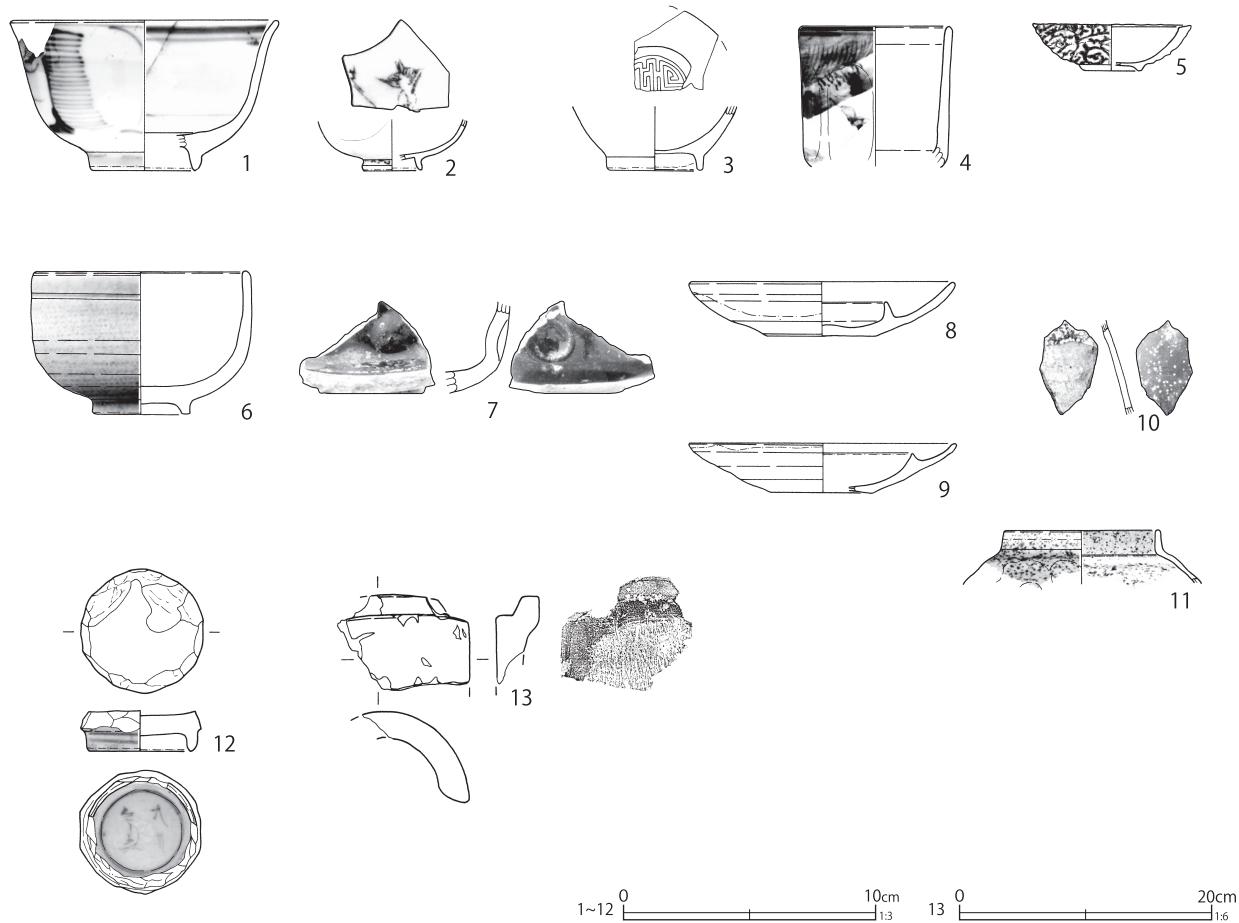
第83図 第201号井戸跡

コバルト染付が施された筒形坏である。4の体部は面取りが施されている。5は瀬戸美濃系磁器の紅坏である。型成形で外面に蛸唐草文様が見られる。6は瀬戸美濃系陶器の鎧茶碗である。外面上位は銅緑釉、下位は灰釉で掛け分けている。外面にはトビカンナが見られる。7は瀬戸美濃系陶器の拳骨茶碗である。栗橋宿では出土が極めて少ない器種である。8は瀬戸美濃系陶器の柿釉油受皿、9は京都信楽系陶器の油受皿である。京都信楽系の灯火具は、19世紀中葉頃に増加する傾向にあ

る。10は大堀相馬系の可能性がある銅緑釉燭徳利である。表面に白色の斑状模様が見られる。11は大堀相馬系の土瓶である。胎土に砂鉄を含み、器面に褐色の斑状模様が見られる。12は肥前系磁器の粗製碗であり、底部周囲・高台を打ち欠き円盤状製品に転用している。用途は不明で、第一面での出土例は極めて少ない。

13は丸瓦である。

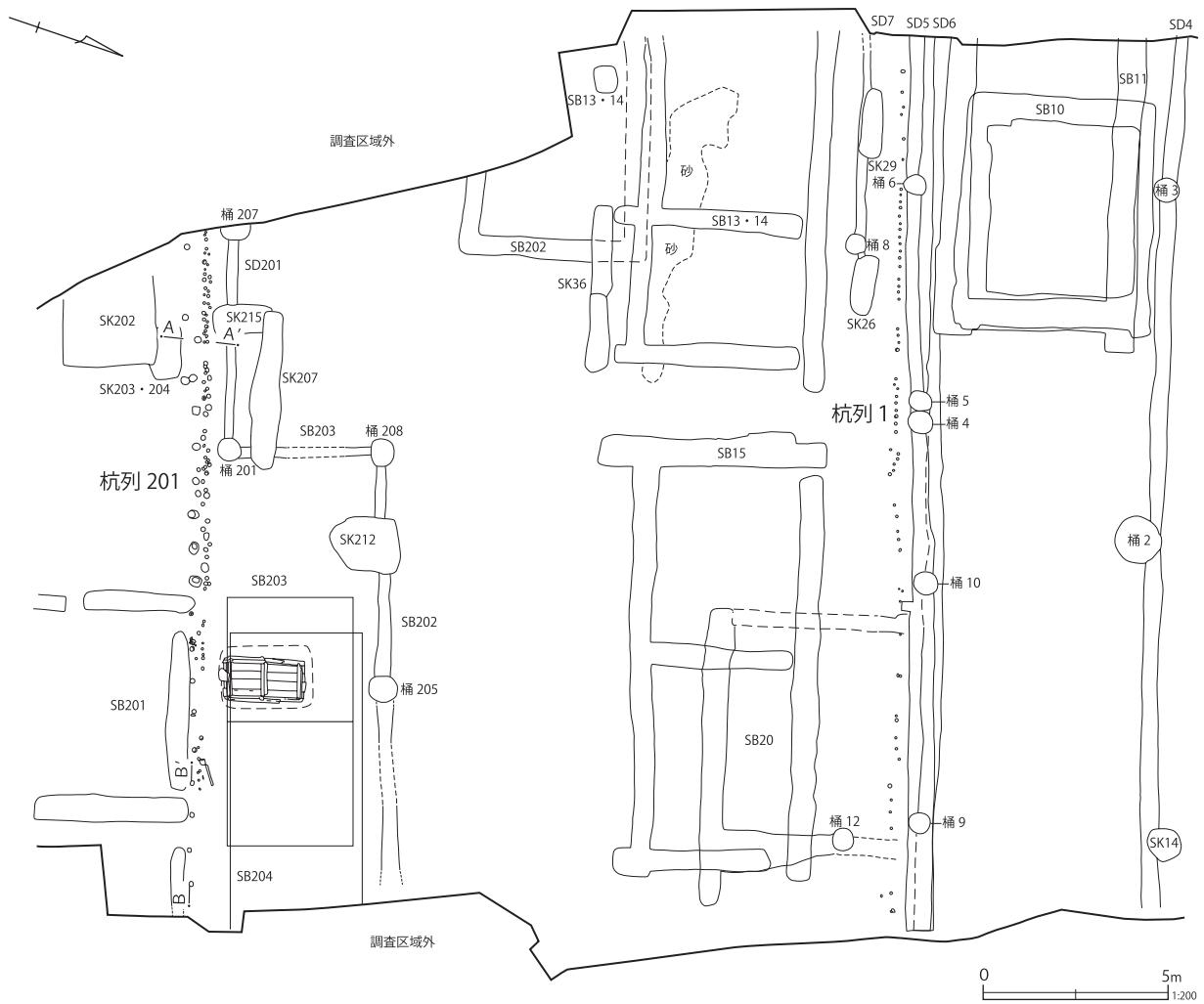
1・3・4の磁器から19世紀後葉の廃絶と考えられる。



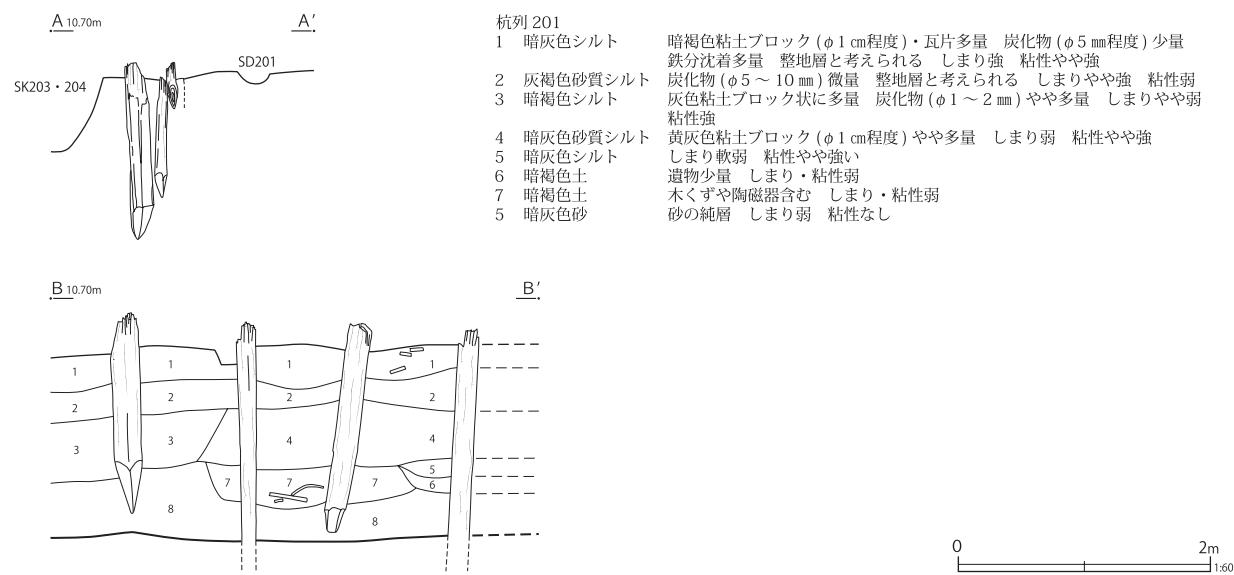
第84図 井戸跡出土遺物

第22表 井戸跡出土遺物観察表（第84図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	(10.4)	[5.9]	(4.0)	—	40	良好	白	SE201	瀬戸美濃系 施釉 染付	
2	磁器	坏	—	[2.0]	(2.2)	—	25	良好	白	SE201	瀬戸美濃系 施釉 外面上絵付（青）	
3	磁器	坏	—	[2.5]	(3.6)	K	30	良好	白	SE201	瀬戸美濃系 施釉 内面型押	
4	磁器	坏	(5.8)	[5.5]	—	K	15	良好	白	SE201	瀬戸美濃系 施釉 外面酸化コバルト染付	
5	磁器	紅坏	(6.2)	[1.8]	(2.2)	K	35	良好	白	SE201	瀬戸美濃系 施釉 型成形	
6	陶器	碗	(8.2)	5.6	3.5	DIK	50	良好	灰白	SE201	瀬戸美濃系 銅緑釉 外面下位灰釉 トビカンナ	44-1
7	陶器	碗	—	[3.6]	—	EIK	5	良好	灰白	SE201	瀬戸美濃系 鉄釉 外面長石釉散し 体部凹み	
8	陶器	油受皿	(10.2)	[2.1]	4.2	IK	45	良好	灰白	SE201	瀬戸美濃系 柿釉 底部拭き取り	
9	陶器	油受皿	(10.4)	[1.9]	(4.0)	—	20	良好	灰白	SE201	京都信楽系 灰釉	
10	陶器	燭徳利	—	[3.8]	—	K	5	普通	灰白	SE201	大堀相馬系か 銅緑釉	44-2
11	陶器	土瓶	(6.0)	[2.1]	—	IK	5	普通	灰白	SE201	大堀相馬系 灰釉 胎土砂鉄含	44-3
12	磁器	碗	径4.8	1.6	4.0	—	—	良好	灰白	SE201	肥前系 施釉 外面染付 円盤状製品転用 35.6g 被熱	
13	瓦	丸瓦	長さ[7.6]	幅[10.6]	厚さ2.2	ACK	—	良好	灰	SE201		



杭列 201



第85図 第1・201号杭列

(6) 杭列

杭列は2条検出された。栗橋宿で見られる杭列の多くは、溝の側板を支える杭のみが遺存して検出されたものと考えられる（第86・90図参照）。以下に検出状況について記す。

第1杭列（第85図）

D 6 – e 9 • 10 • d 10、D 7 – d 1 グリッドに位置する。第5・6号溝跡の南に並行して隣接し、日光道中に直交するように東西方向に杭が打たれている。掘り込みは検出されていない。第20号建物跡とは重複しており、同時併存は認められない。規模は東西23.00m以上であり調査区外へ続いている。第5・6・7号溝跡とは位置関係から、区画の変遷を示していると考えられる。

201号杭列（第85図）

D 6 – f 10、D 7 – f 1 グリッドに位置する。日光道中に直交するように東西方向に杭が打たれている。掘り込みは検出されていない。規模は東西に17.70m以上であり、調査区外へ続いている。第201～203号溝跡と隣接しており、区画の変遷を示していると考えられる。

遺物の出土がなく、重複遺構もないため時期は不明である。

杭列・溝跡の区画構成については第VI章で文献との対比を試みる。

(7) 溝跡

溝跡は11条が検出された。内1・2・5号溝跡は杭列及び側板を伴っており、先述した杭列の本来の姿であると考えられる。また、第201～203号溝跡は埋設桶を起点に方向が変わっており、一連の溝跡と考えられる。位置・規模等の基本情報は第23表に、遺構図は第86～95図にまとめた。

第1号溝跡（第86図）

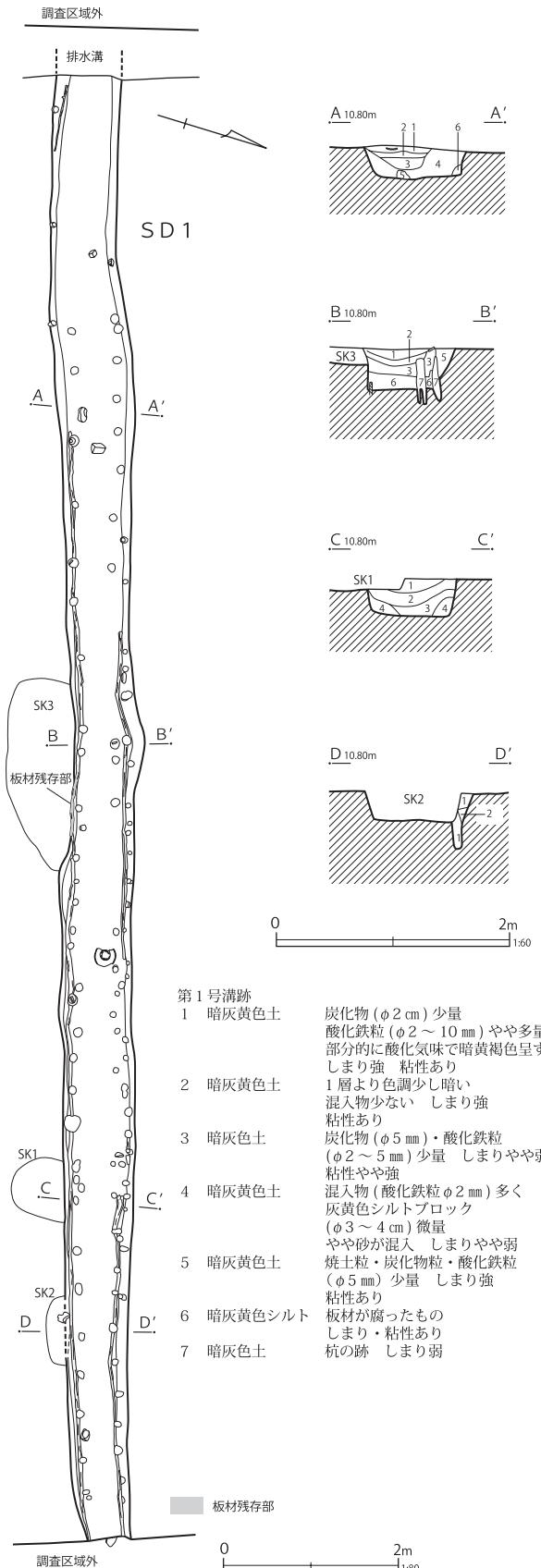
D 6 – g 10、D 7 – g 1 • 2 グリッドに位置する。第1・2号土壙より古く、第3号土壙より新しい。総延長は16.60m以上で調査区域外へと延びている。掘り込み内の両脇は板材が見られ、更に内側に杭が打ち込まれている。杭は側板を支えるために打ち込まれたものであり、先述した杭列は溝と側板が削平された姿である。杭列は側版の外側にも確認でき、造り直しが想定される。

出土した陶磁器は第96・97図の1～35に示した。1～3は肥前系磁器である。1は広東碗で内面に重ね焼き時のピン痕が3箇所確認される。2は丸碗で焼き継ぎによる補修がされ、高台内に焼き継ぎ印が二箇所見られる。3は小丸碗で第12号土壙と接合関係にある。9・10は瀬戸美濃磁器の卵殻手坏であり、最新期遺物と考えられる。9は内面に赤・青を用いた上絵付を施している。10は内面に染付を施している。15～17は肥前系磁

第23表 第一面溝跡一覧表

単位：m

番号	グリッド	長さ	幅	深さ	備考
1	D6-g10 • D7-g1 • 2	(16.60)	0.90	0.35	SK1・2より古く、SK3より新しい
2	D6-c8 ~ 10	24.21	0.65	0.42	
3	D6-c10 • d8 ~ 10	(20.70)	0.50	0.35	
4	D6-d8 ~ 10 • D7-c • d1	(23.60)	0.50	0.35	SK14・埋設桶2・3より古い
4 (木組み1)	D6-d10	0.52	0.27	(0.06)	掘り方長 60.60 × 短 0.30 × 深 (0.07)
4 (木組み2)	D6-d10 • D7-d1	0.51	0.26	(0.05)	掘り方長 0.64 × 短 0.36 × 深 0.06
4 (木組み3)	D6-d9	0.48	0.21	(0.23)	
5	D6-d • e9 • 10 D7-d1	24.50	0.72	0.30	SD6・埋設桶4・5・9・10より新しい
6	D6-d8 ~ 10 • e9 • 10 D7-d1	24.20	0.58	0.35	SD5・埋設桶10より古い、埋設桶9より新しい
7	D6-e9	(5.55)	0.28	0.12	SK26・29・埋設桶8より古い、SK32より新しい
201	D6-f10	(5.45)	0.30	0.10	SK215より古い 暗渠あり
202	D6-f10 D7-e • f1	(11.25)	0.50	0.45	SK212より古い
203	D6-f10	3.50	0.27	0.06	SK207より古い
水塚下1	D7-h2	(1.90)	0.25	0.07	焼土遺構2と重複



第86図 第1号溝跡

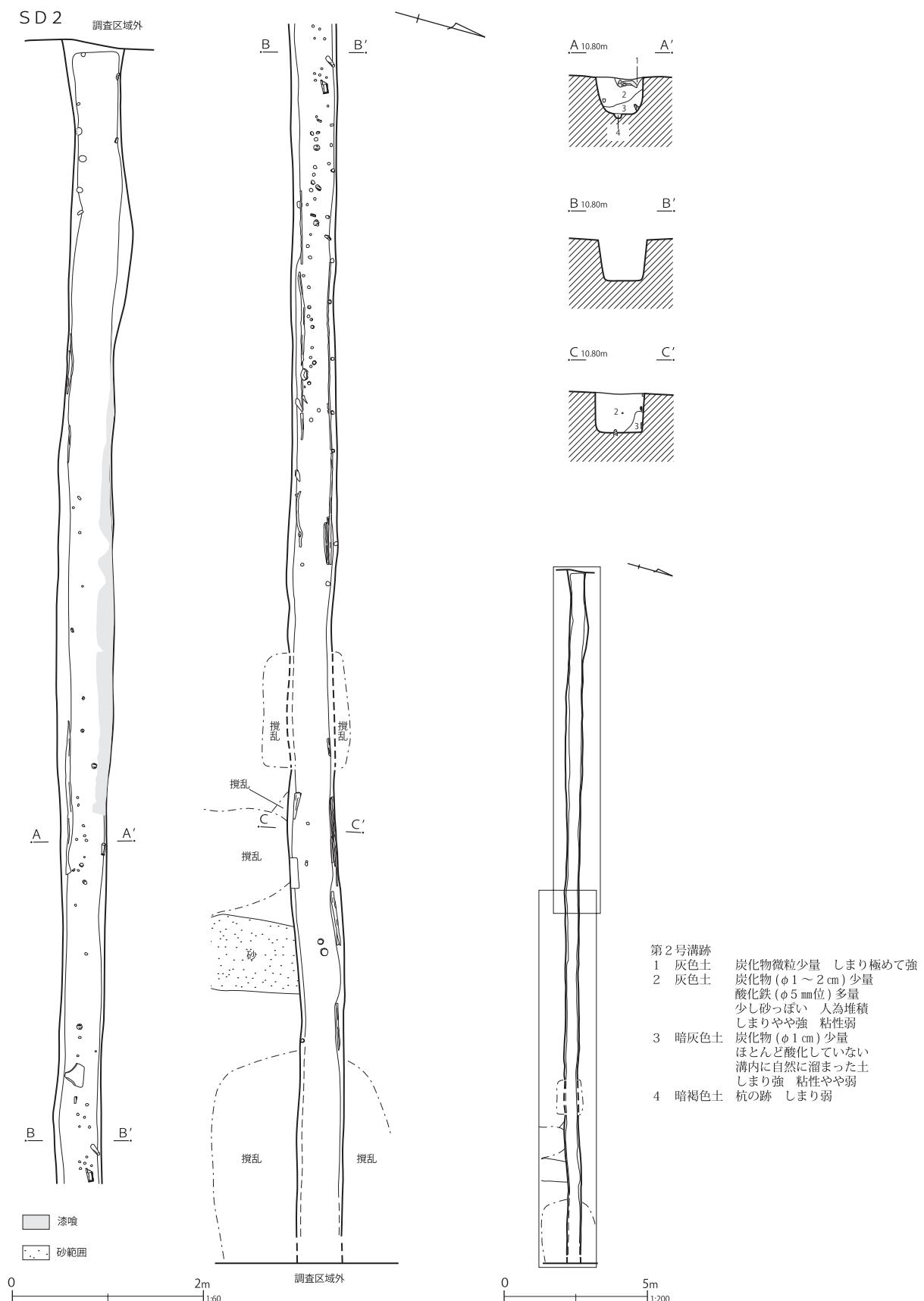
器であり、15は高台が高い蛇の目凹形高台皿である。底部にかすかに墨痕が見られる。16は小振りな皿で所謂手塩皿である。17は蛇の目凹形高台の八角鉢で高台内に焼き継ぎ印が見られる。第3・8号土壙の出土陶磁器とは接合関係にある。

20~22は瀬戸美濃系陶器で20は柿釉燈明皿である。口縁にタールが付着している。21は油受皿である。22は鉢で灰釉に銅緑釉と糠白釉を流し掛けしている。23・24は陶器の爛徳利である。23は灰釉で外面にイッチン描きを施している。イッチン描きを施す陶器として知られているのが飯能焼であるが、飯能焼とは異なり、イッチン描きが太い。25は瀬戸美濃系陶器の二合半灰釉徳利であり、所謂貧乏徳利という器種である。栗橋宿では極めて少ない。26は陶器の柿釉漏斗である。外面下位に蛇の目状の釉薬拭き取りが見られ、輪状重ね焼き痕が確認される。27~30は陶器の土瓶で、31~33は土瓶の蓋である。28は青土瓶であり、外面下位に墨痕が見られる。29は鉄釉土瓶で、31はその蓋の可能性がある。つまみは葺の意匠である。30は外面に斑状模様が浮かび、32はその蓋の可能性がある。33は松岡系であり、胎土がザラメ状に粗く、外面はうのふ釉である。

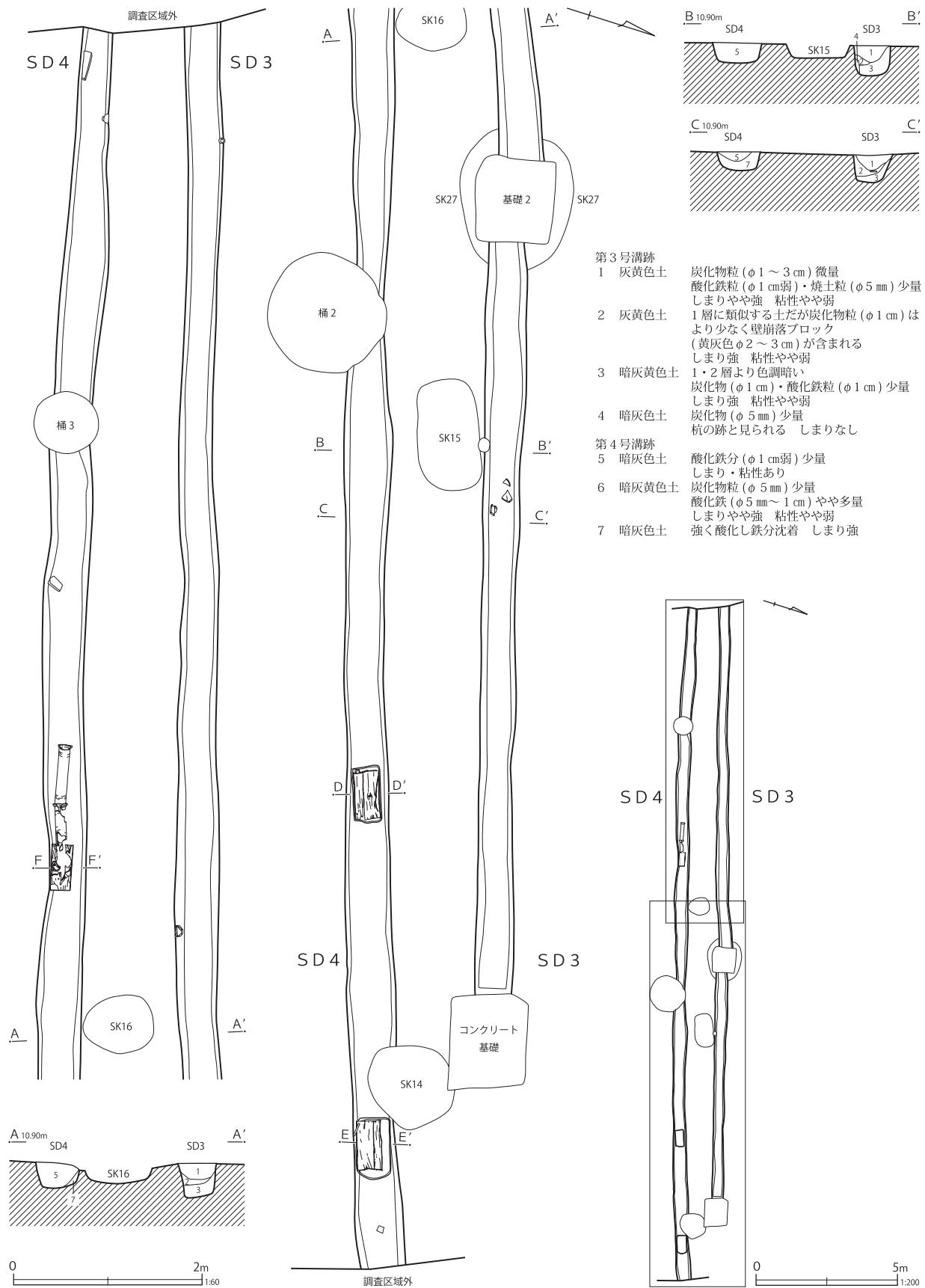
34は土師質土器の灰落としてある。口縁に敲打痕が見られる。35は瓦質土器の火消壺である。外面下端部と底部にケズリが施される。

第101図の2~5は土製品で鍋のミニチュアを図示した。第102図の1~4に土製品の人形・玩具類を図示した。1・2は姉様である。1は前後合わせの二枚型成形で中実である。外面に型離れをよくする雲母が付着する。2は江戸在地系で中空の前後合わせ二枚型成形である。3・4は泥面子で表面に雲母が付着している。江戸在地系である。

第103図の1に軒桟瓦、2に桟瓦を図示した。1は中心飾りが大阪式、唐草は江戸式の瓦当紋様である。第104図の11・12は道具瓦、13は丸瓦で

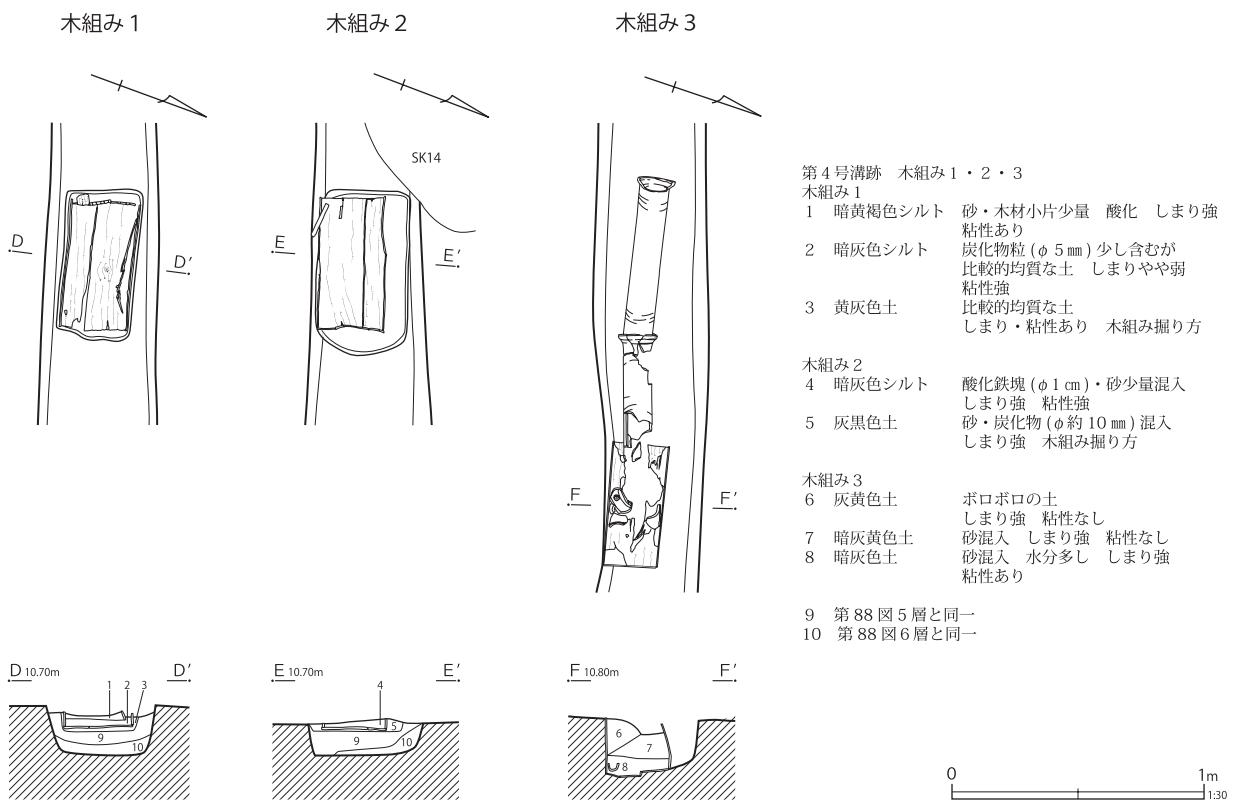


第87図 第2号溝跡



第88図 第3・4号溝跡

SD 4



第89図 第4号溝跡木組み

ある。第105図の1に銅製品、10に銭貨、第106図の1に石製品、16に骨製品を示した。出土陶磁器から19世紀中葉の遺構と考えられる。

第2号溝跡 (第87図)

D 6-c 8～10グリッドに位置する。総延長は24.21m以上で調査区域外へと延びている。掘り込み内の両脇に部分的に側板が残存している。杭跡が列状に見られるが、凡そ溝跡の中央に位置しており、作り直しが想定される。漆喰が遺存している箇所があり、漆喰を用いて側板を固めていた可能性がある。廃絶は人為的な埋め戻しによって行われている。

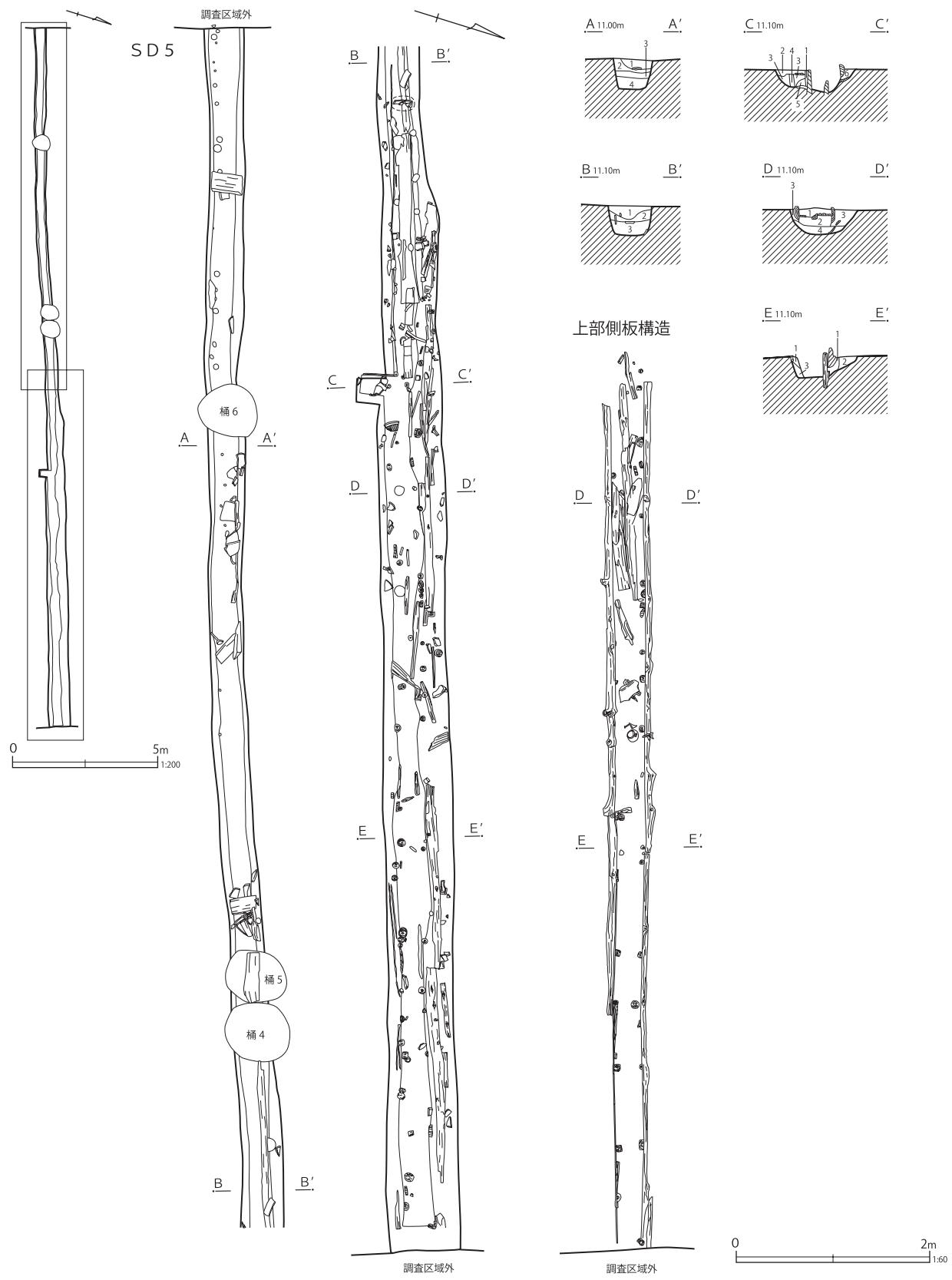
出土した陶磁器は第98図の36～43に図示した。36・37は肥前系磁器で36は筒形碗、37は小丸碗である。38は瀬戸美濃系磁器の端反碗であり、最新期の遺物である。39・40は肥前系磁器で、39は広東碗の蓋、40は粗製皿である。41は瀬戸美濃系磁器の鉢である。内外面に赤色の上絵付を施

している。42は古瀬戸の反り皿である。43は京都信楽系の香炉で糠白釉が施されている。

第103図の3は軒桟瓦、第104図の14は道具瓦である。第105図の2～5は鉄製の角釘である。第106図の2・15に石製品・硝子製品を示した。2は凝灰岩製の硯でパテ状の補修痕が見られる。15は飴色を呈する硝子製笄である。出土陶磁器から19世紀中葉の遺構と考えられる。

第3号溝跡 (第88図)

D 6-c 10・d 8～10グリッドに位置する。第2号基礎状遺構、第27号土壙と重複する。総延長は20.70m以上で西側は調査区域外へと延びている。東側はコンクリート基礎に壊され、その更に東側は検出されなかった。およそ1m南側には第4号溝跡が並走しており、区画の変遷が窺える。平面状は杭の痕跡を確認できなかったが、土層断面の第4層は杭の跡と考えられる。本来は杭と側板を伴う区画溝であったのだろう。



第90図 第5号溝跡 (1)

第5号溝跡

A-A'

- 1 暗灰色土 黄褐色シルト多量 下部に土管の破片あり 最終共用時のものか しまり強 粘性なし
炭化物(φ5~10mm)若干混入 しまり強 粘性なし
- 2 暗黄灰色土 炭化物(φ3~10mm)・黄褐色粒子(φ3~5mm)混入 しまり強 粘性なし
- 3 灰黄褐色土 炭化物(φ8~10mm)微量 しまり強 若干粘性あり

B-B'

- 1 暗灰黄色土 酸化 炭化物(φ1cm)・白色物質(漆喰)(φ1cm)多量 黄褐色シルトブロック(φ3cm程)微量 しまり強 粘性やや強
- 2 暗灰黄色土 木材片(φ5mm)少量 しまり強
- 3 暗灰黄色土 酸化物(5mm)多量 しまり強

C-C'

- 1 暗灰黄色土 木材片少量 ポソボソしている しまりなし
- 2 灰色土 酸化鉄をやや多量 やや黄色味を帯びる しまり強
- 3 暗褐色土 炭化物粒(φ5mm)少量 しまりやや弱
- 4 暗褐色土 杭が腐った跡 ポソボソしている
- 5 暗灰黄色土 酸化鉄粒(φ1~2cm)・瓦片含む しまりやや弱
- 6 暗褐色土 木材少量 しまり弱

D-D'

- 1 暗灰黄色土 酸化 炭化物(φ1cm)・白色物質(漆喰?)(φ1cm)多量 黄褐色シルトブロック(φ3cm程)微量 木材を多量 しまり強 粘性やや強
- 2 黒褐色土 木材片(φ1cm程)やや多量 しまり強
- 3 暗褐色土 木材片少量 しまり弱
- 4 灰黄色土 酸化鉄(φ1~5mm)少量 しまりやや強

E-E'

- 1 暗褐色土 木材少量 しまり弱
- 2 暗灰黄色土 炭化物(φ5mm)・酸化鉄(φ1cm弱)少量 しまりやや強
- 3 灰黄色土 酸化鉄(φ1cm)少量 しまり強

第91図 第5号溝跡 (2)

出土陶磁器は第98図の44~48に示した。44・45は染付が施された瀬戸美濃系磁器の端反碗である。45は幅広高台であり、最新期の遺物と考えられる。46は肥前系磁器の壺である。47は京都信楽系陶器の油受皿である。19世紀中葉頃に出土量が増加する器種である。48はかわらけ大皿である。胎土が粉質であり、底部に糸切痕が見られる。大皿の出土は極めて少ない。第103図の6は軒桟瓦である。瓦当紋様は中心飾りが大阪式、唐草が江戸式である。出土陶磁器から19世紀後葉の遺構と考えられる。

第4号溝跡・木組み遺構1~3 (第88・89図)

D 6-d 8~10、D 7-c・d 1グリッドに位置する。第2・3号埋設桶、第14号土壙と重複する。総延長は23.60m以上で調査区域外へと延びている。木組み遺構が3箇所検出されている。木組み遺構は溝跡埋土の上層から検出されており、木組み遺構1で土管と接続している。

出土陶磁器は第98図の49~54に示した。49は瀬戸美濃系磁器の端反碗、50は壺である。51は丸腰湯呑で外面にゴム印版染付を施す。52は淡路珉平系の皿で黄色の釉を施釉する。53は瀬戸美濃系磁器の型押寿文皿である。54は萬古系陶器の急須で「萬古」の刻印が見られる。外面に上

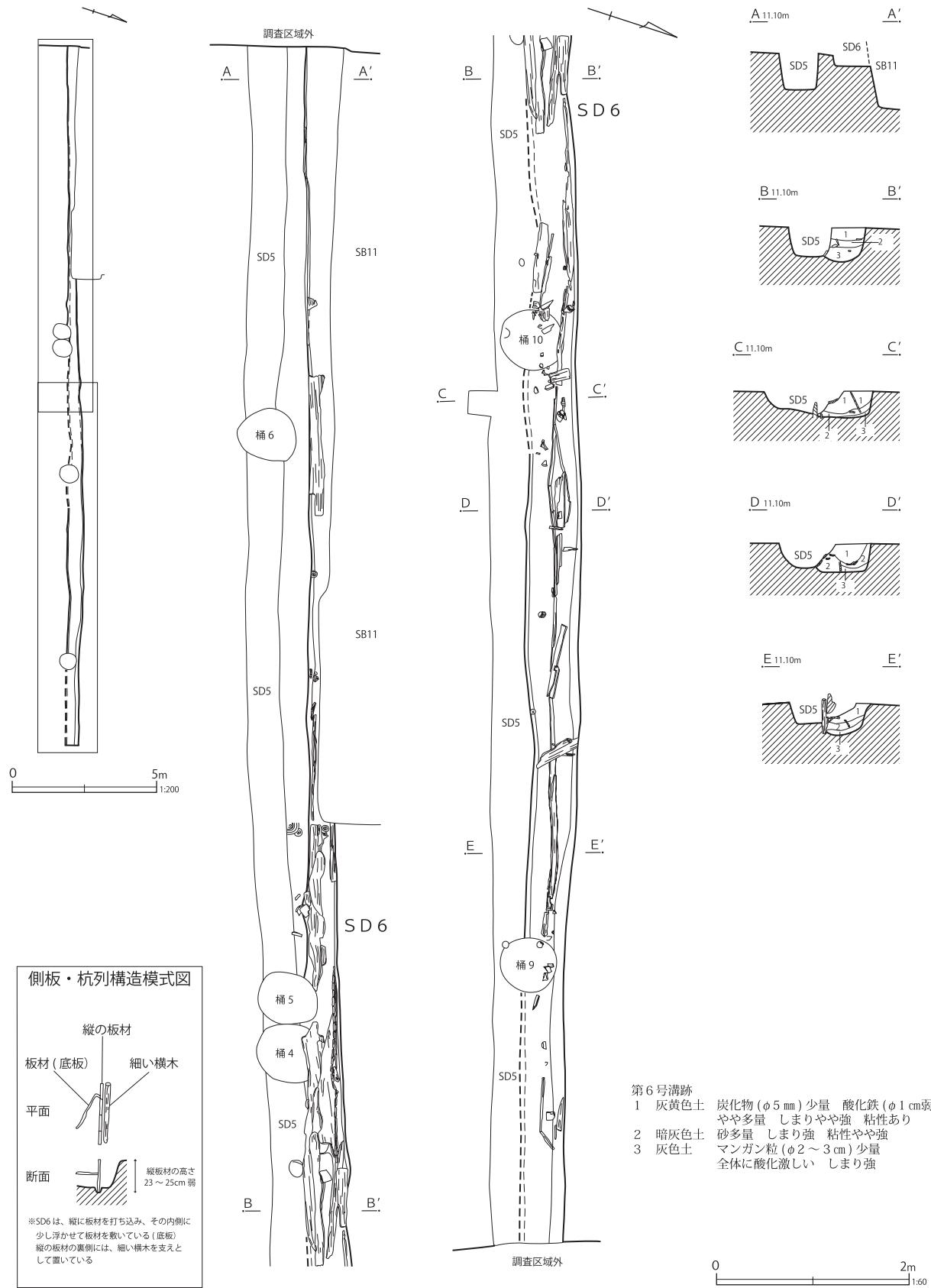
絵付及び金彩が施され底部・中注口には型成形による布目痕が残る。51・54が最新期の遺物である。第104図の15~17に瓦、第105図の6は銅製品、7は銅製品の火箸を示した。第106図の3は滑石製石筆、4は粘板岩製の石板である。

出土陶磁器から19世紀後葉には区画溝として機能しており、溝跡の最終使用段階には土管が設置されていたと考えられる。

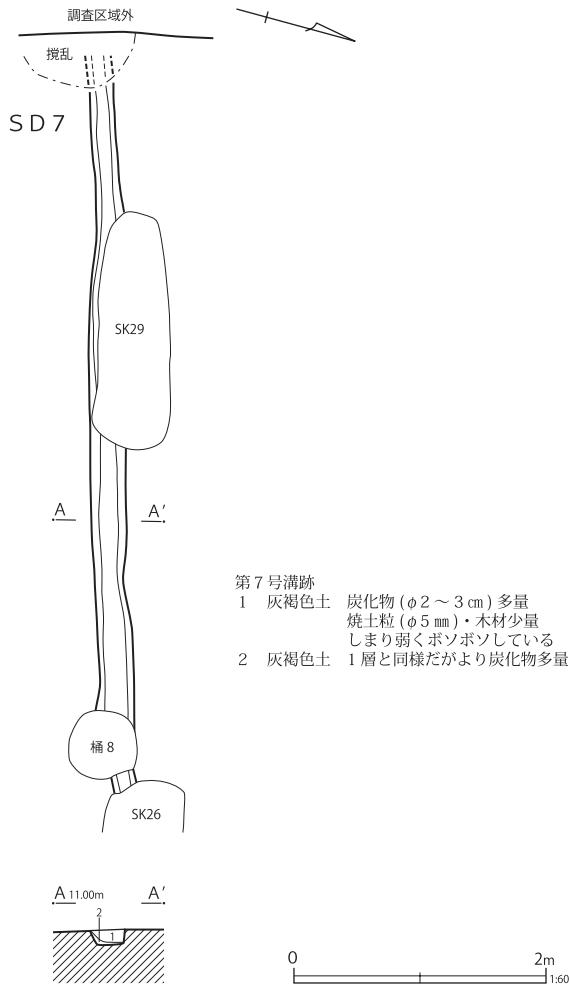
第5号溝跡 (第90・91図)

D 6-d 9~10、D 7-d 1グリッドに位置する。第4・5・9・10号埋設桶、第6号溝跡より新しい。総延長は24.50mで調査区域外へと延びている。掘り込みの両脇に側板が残存しており、側板を支えるように杭が打ち込まれている。杭の配列から複数回の作り直しが想定される。上層部には漆喰と考えられる白色物質が残存しており、第2号溝跡と同様に木樋状の構築物の一部と考えられる。また断面A-A' 第1層の下部には土管の破片が出土しており、最終使用段階には土管が埋設されていた可能性が高い。中央部には南へ向かっておよそ0.24mの張り出し部があり、何らかの施設と考えられる。

出土遺物は重複する第6号溝跡の遺物が相当数混在している。接合関係にある遺物に関しては下



第92図 第6号溝跡



第93図 第7号溝跡

層遺構の巻き上げを考慮し、基本的には第6号溝跡に帰属させた。第98・99図の55～74に出土した陶磁器を図示した。55～58は瀬戸美濃系磁器で、56湯呑碗である。焼継による補修痕が確認される。57は酸化コバルト染付の壺、58は銅版転写染付の壺である。型紙摺絵染付は見られないが、58が最新期の遺物であろう。64～68は陶器で、64は地方窯系の灰釉油受皿である。67は柿釉甕で、内面にピン痕が5箇所見られ、底部は墨書と輪状重ね焼き痕が確認できる。69～71は土師質土器の焼塩壺の蓋である。栗橋宿では江戸と比べて焼塩壺の出土例が少ない一方で、焼塩壺の蓋の出土例が多い傾向にある。73・74は瓦質土器で、73は竈鍔である。74は火消壺で、外面はローラースタンプにより施文されている。

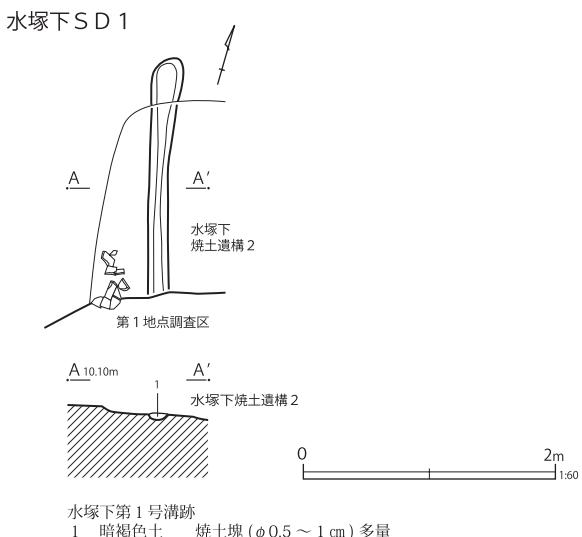
第101図に土製品のミニチュアを示した。6は陶器で行平鍋のミニチュアである。ロクロ成形で把手は手捻りである。7は土製品で行平鍋のミニチュアである。把手は欠損し注口部が残存している。白土化粧後に透明釉を施釉している。

第102図の5～7に人形・玩具類を示した。5は江戸在地系の鳩笛である。部分的な白土化粧に透明釉・銅緑釉を施釉している。6・7は箱庭道具である。6は京都系の建造物、7は江戸在地系の橋である。

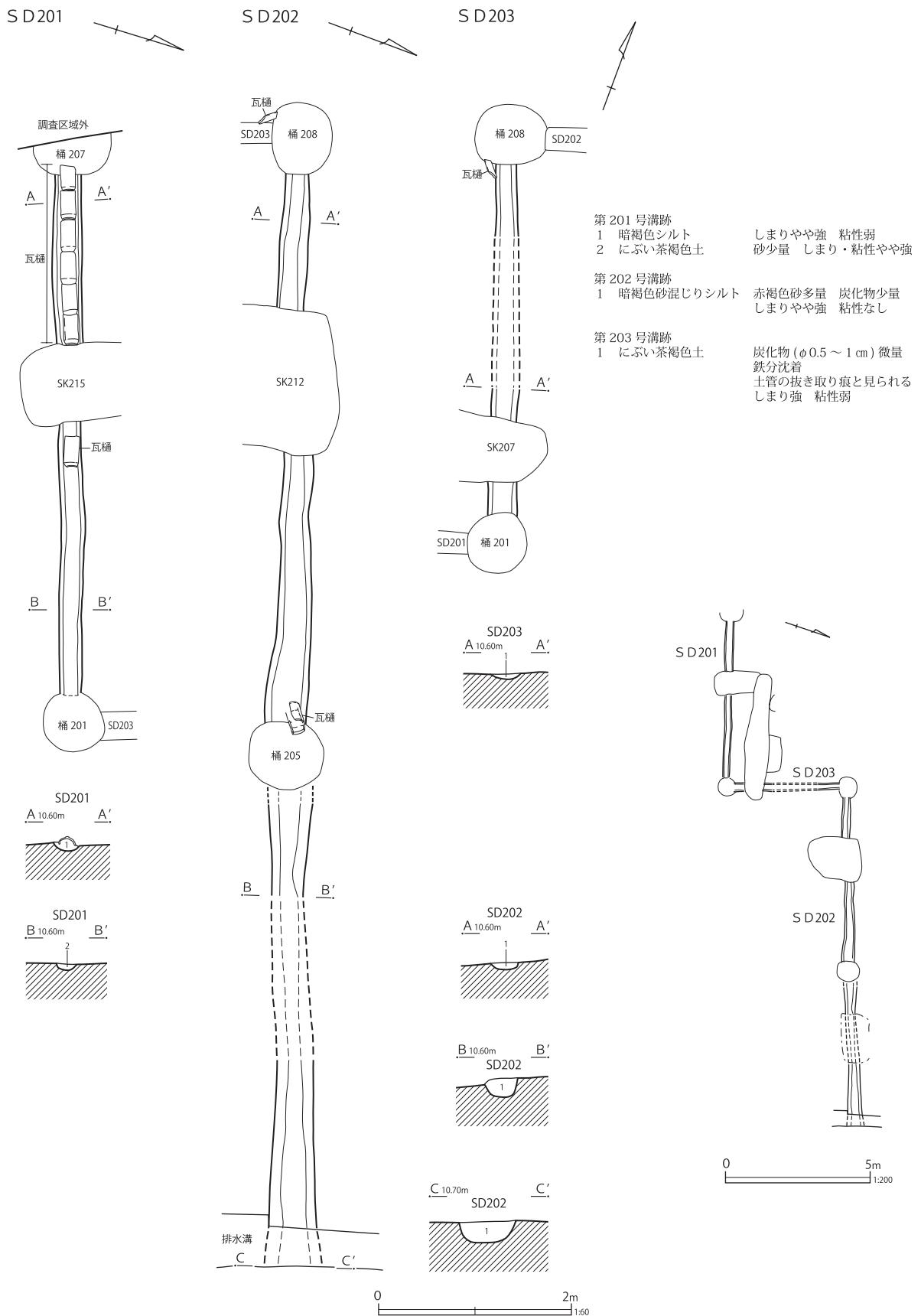
第103図の7は東海式、8は江戸式の軒桟瓦である。第104図の18・19は丸瓦、20は軒丸瓦である。第105図の8・9に鉄製品を示した。第106図の5～9に石製品を示した。5～7は滑石製石筆、8は粘板岩製、9は凝灰岩製の硯である。出土陶磁器から19世紀末頃の遺構と考えられる。

第6号溝跡（第92図）

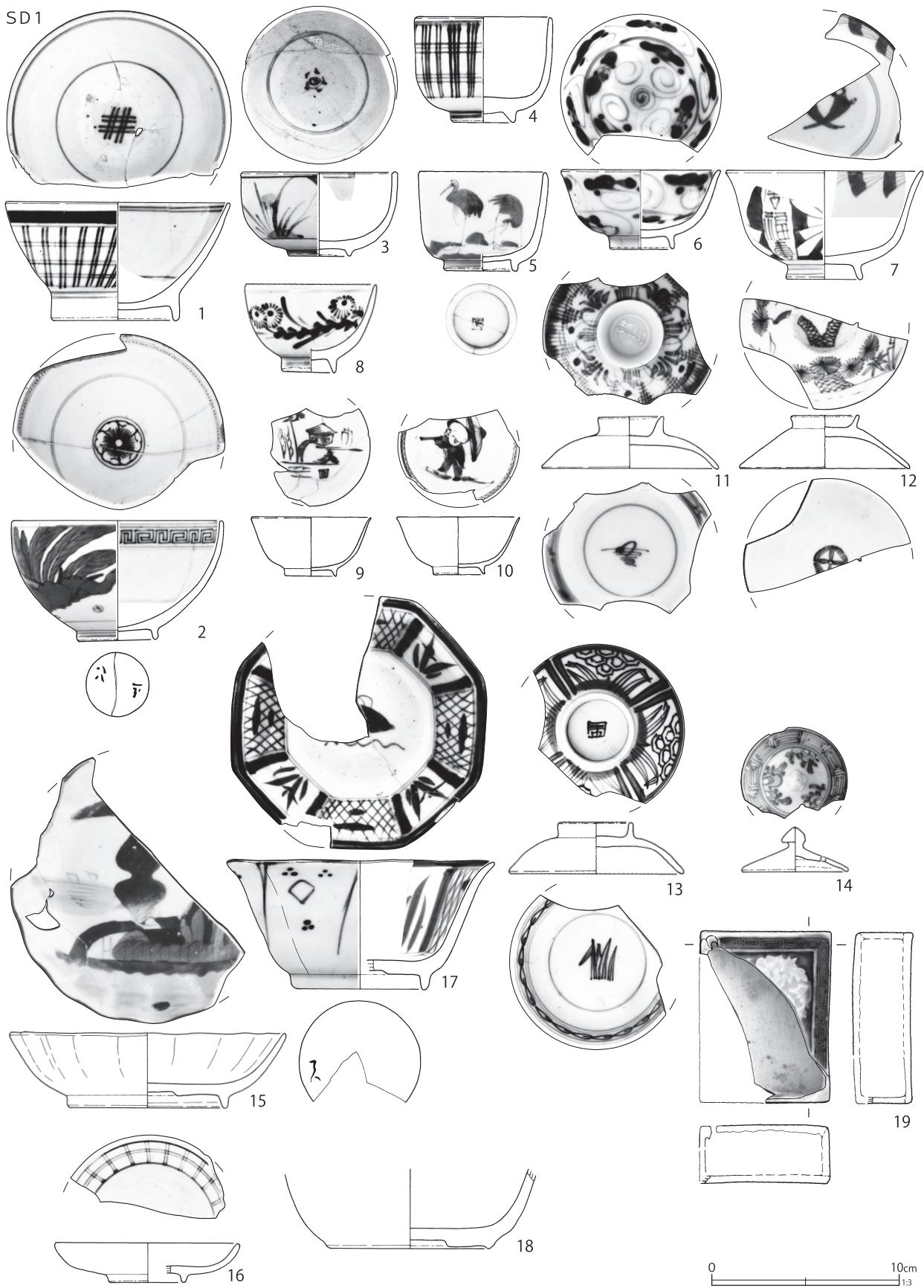
D 6-d 8～10・e 9・10、D 7-d 1グリッドに位置する。第10号埋設桶、第5号溝跡より古く、第9号埋設桶より新しい。総延長は24.20mで調査区域外へと延びている。第5号溝跡と同様に掘り込み内の両脇に側板を設置し、杭を打ち



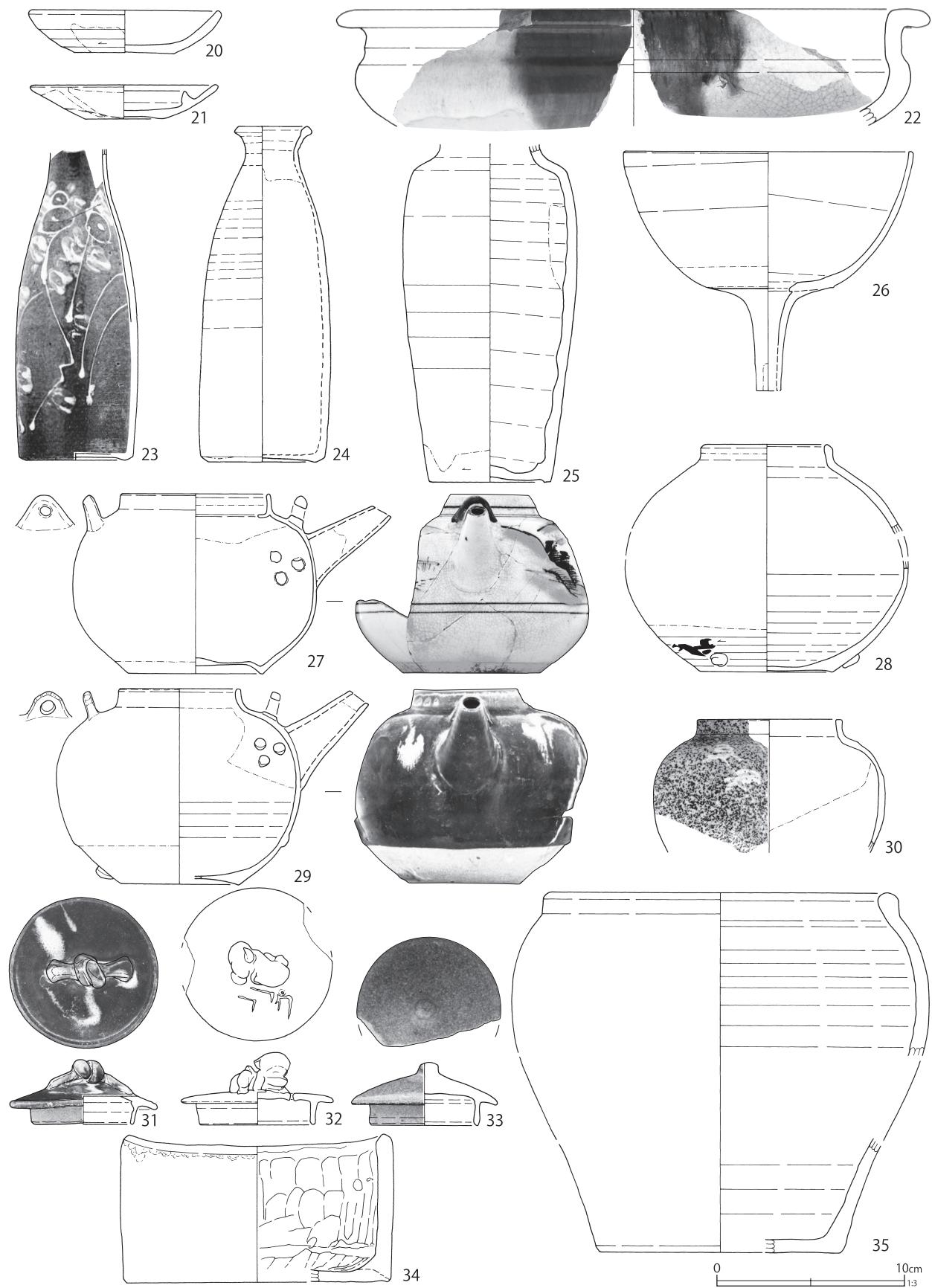
第94図 水塚下第1号溝跡



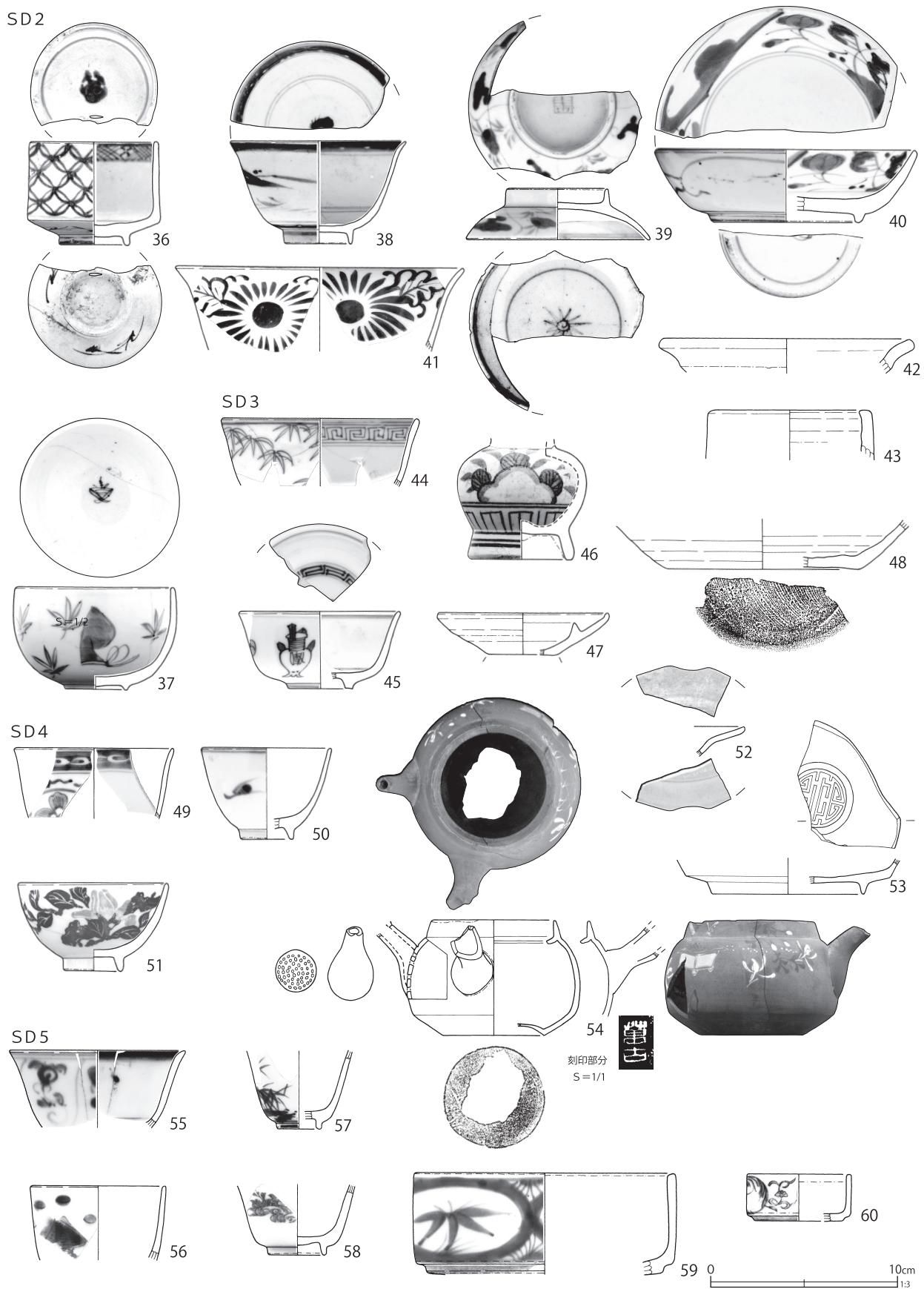
第95図 第201～203号溝跡



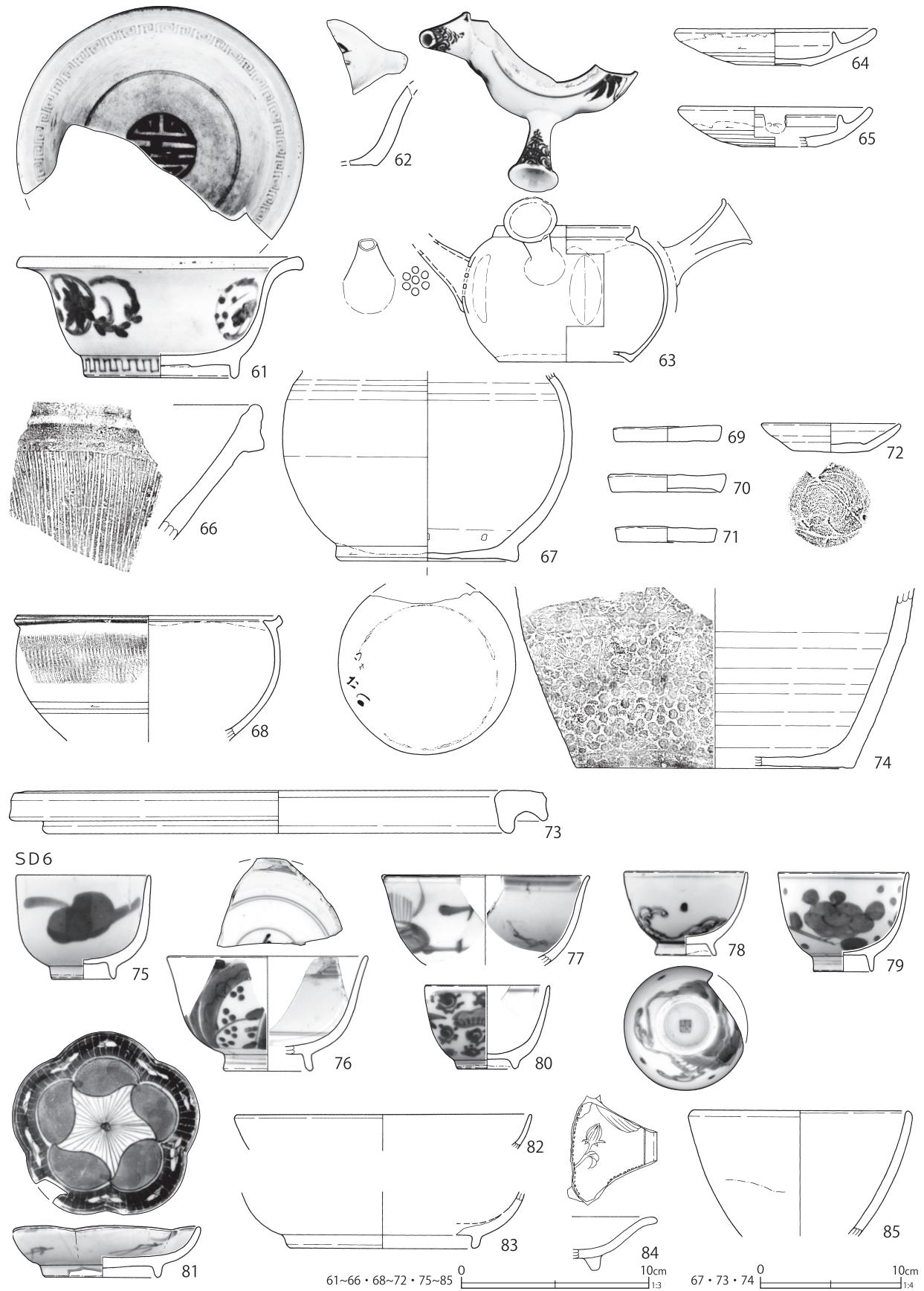
第96図 溝跡出土遺物 (1)



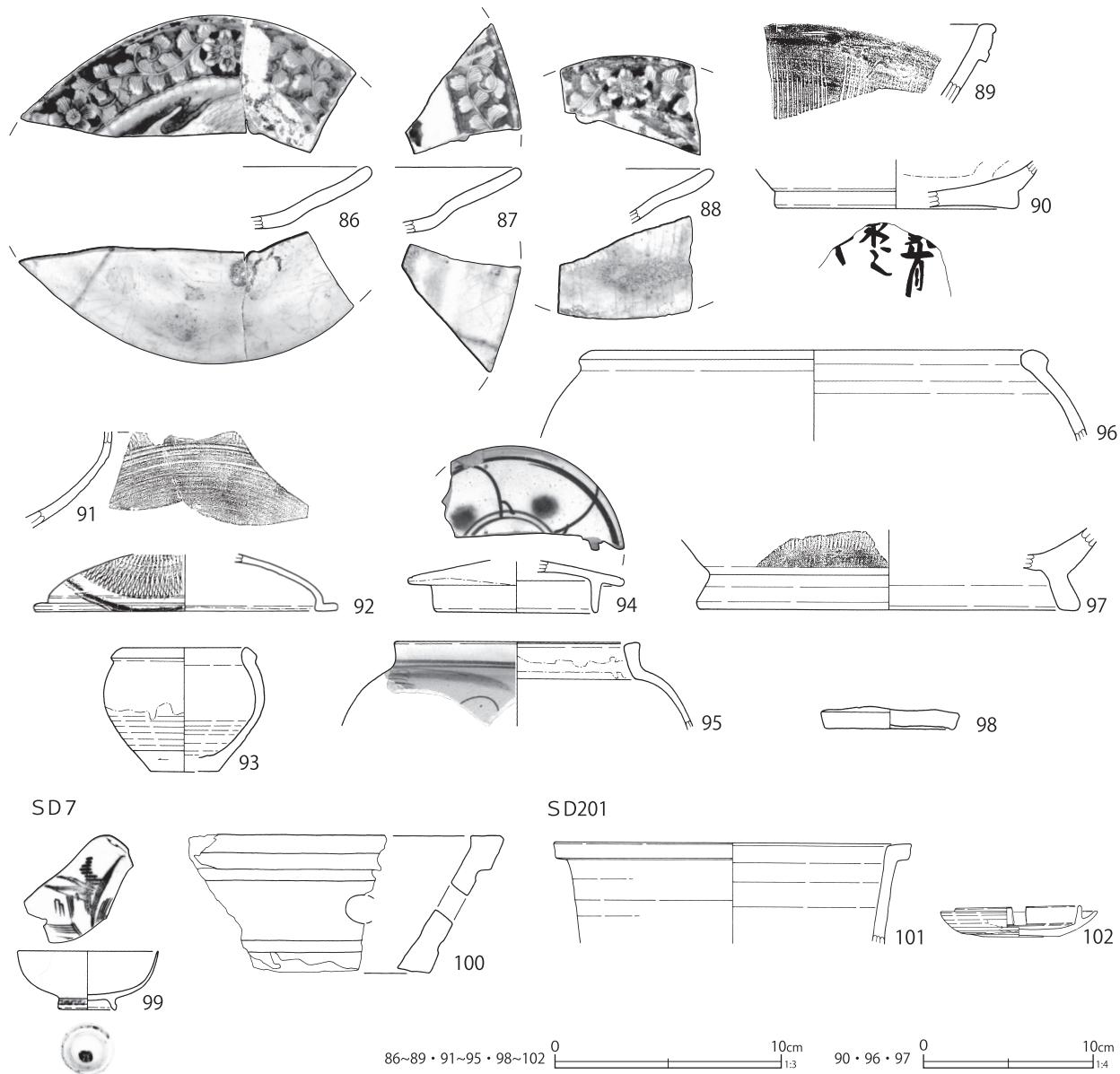
第97図 溝跡出土遺物 (2)



第98図 溝跡出土遺物 (3)



第99図 溝跡出土遺物 (4)



第100図 溝跡出土遺物 (5)

込むことで側板を支えている。底板が残存しており、溝の掘り込み底面よりやや浮いた状態で敷かれている。

出土遺物は第99・100図の75～98に陶磁器を図示した。75は瀬戸美濃系磁器の湯呑碗である。81は肥前系磁器の皿で、絵付けは酸化コバルト染付の可能性がある。82・83は同一個体と考えられる淡路珉平系の皿である。内面に陰刻がわずかに残り、表面は橙色に施釉されている。84は三田青磁の型皿である。型成形で内面に陽刻が施されている。割口の内面側縁辺に敲き潰れた痕跡が

残り、二次利用が行われたと考えられる。85は陶器の碗である。白色の釉がかかり、胎土は極めて粗い砂質である。

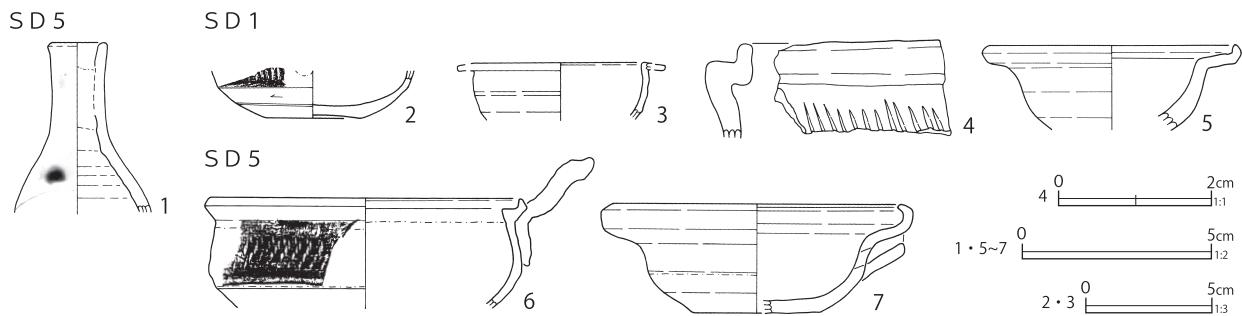
86～88は同一個体のヨーロッパ系陶器の皿である。白土化粧後に酸化コバルトを用いた絵付けを施し、透明釉を施釉している。オランダ製のデルフト焼の可能性が考えられる。90は瀬戸美濃系陶器のこね鉢で底部に墨書が見られる。93は陶器の豆甕、98は土師質土器の焼塩壺の蓋である。

第103図の10、第104図の21は瓦である。第106図の10～14に石製品を示した。11は流紋岩製の

第24表 溝跡出土遺物観察表(1)(第96~100図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	12.8	6.2	6.4	K	60	良好	白	SD1	肥前系 施釉 染付 見込みピン痕3	
2	磁器	碗	(11.1)	6.4	4.2	K	50	良好	白	SD1	肥前系 施釉 染付 焼継印	44-4 58-13
3	磁器	碗	8.1	4.5	3.2	K	80	普通	白	SD1	肥前系 施釉 染付 SK12接合	
4	磁器	碗	7.0	5.6	3.2	K	75	普通	白	SD1	瀬戸美濃系 施釉 外面染付	
5	磁器	碗	6.6	5.2	3.7	—	98	良好	白	SD1	瀬戸美濃系 施釉 外面染付	44-5
6	磁器	碗	8.4	4.2	3.3	K	70	普通	白	SD1	瀬戸美濃系 施釉 染付	44-6
7	磁器	碗	(10.4)	5.7	(4.0)	—	25	良好	白	SD1	肥前系 施釉 染付	
8	磁器	坏	6.9	4.7	2.7	—	97	良好	白	SD1	瀬戸美濃系 施釉 染付	
9	磁器	坏	(6.3)	3.1	2.7	—	40	良好	白	SD1	瀬戸美濃系 施釉 内面上絵付(青,赤)	44-9
10	磁器	坏	6.4	3.0	2.7	—	60	良好	白	SD1	瀬戸美濃系 施釉 内面染付	
11	磁器	蓋	9.3	2.7	3.3	—	60	良好	白	SD1	瀬戸美濃系 端反碗 施釉 染付	
12	磁器	蓋	9.0	2.8	3.5	K	40	良好	白	SD1	肥前系 端反碗 施釉 染付	
13	磁器	蓋	9.0	2.8	3.7	—	75	良好	白	SD1	肥前系 端反碗 施釉 染付	
14	磁器	蓋	5.5	2.4	—	—	70	良好	白	SD1	瀬戸美濃系 急須 施釉 外面染付	
15	磁器	皿	(14.6)	4	8.3	—	50	良好	白	SD1	肥前系 施釉 内面染付 口紅 底部墨痕	
16	磁器	皿	(9.7)	2.1	4.0	—	40	良好	白	SD1	肥前系 施釉 内面染付	
17	磁器	鉢	14.1	6.8	6.8	—	80	良好	白	SD1	肥前系 施釉 染付 焼継印 SK3・8と接合	
18	磁器	鉢	—	[4.3]	(8.3)	—	30	良好	白	SD1	肥前系 青磁釉	
19	磁器	水滴	縦9.1cm 横7.0cm 器高3.1cm			K	50	良好	白	SD1	瀬戸美濃系 型成形 外面施釉, 染付, 陽刻 底部内外面布目痕	
20	陶器	灯明皿	(9.8)	2.2	(5.2)	EI	45	良好	灰	SD1	瀬戸美濃系 柿釉 外面拭き取り 口縁タール付着	
21	陶器	油受皿	(9.6)	1.8	4.0	I	50	良好	灰	SD1	瀬戸美濃系 柿釉 外面拭き取り, 輪状重ね 焼き痕	
22	陶器	鉢	(28.9)	[6.2]	—	EIK	20	普通	灰黄	SD1	瀬戸美濃系 灰釉 銅緑釉, 糜白釉流し掛け	
23	陶器	燭台	—	[16.4]	5.3	—	95	良好	にぶい黄橙	SD1	外面灰釉, イッチン描き	44-7
24	陶器	燭台	(3.4)	17.8	5.7	IK	95	良好	にぶい黄橙	SD1	外面灰釉	
25	陶器	德利	—	[17.9]	6.5	DEK	50	良好	灰白	SD1	瀬戸美濃系 灰釉 二合半	44-8
26	陶器	漏斗	(14.8)	12.4	注口 (1.3)	I	70	良好	橙	SD1	柿釉 外面下位蛇の目状釉拭き取り 輪状重ね焼き痕	44-10
27	陶器	土瓶	(7.8)	9.5	(7.2)	IK	45	良好	淡黄	SD1	外面白土化粧, 施釉, 三彩	44-11
28	陶器	土瓶	(7.0)	[12.1]	(7.0)	K	30	良好	灰白	SD1	外面銅緑釉 体部下位墨痕	
29	陶器	土瓶	6.3	10.3	6.3	IK	85	良好	にぶい黄橙	SD1	鉄釉	44-12
30	陶器	土瓶	(7.5)	[7.0]	—	IK	30	良好	灰黄	SD1	施釉 外面鉄釉斑状, イッチン描き	
31	陶器	蓋	5.2	3.4	7.8	CHIK	100	良好	にぶい黄橙	SD1	土瓶 外面鉄釉 29の蓋か	44-13
32	陶器	蓋	5.9	3.9	—	IK	95	良好	灰黄	SD1	土瓶 外面施釉, 鉄釉斑状, イッチン描き 30の蓋か	
33	陶器	蓋	(5.5)	3.3	—	EIK	60	良好	にぶい黄	SD1	松岡系 土瓶 外面うのふ釉	44-14
34	土師質土器	灰落とし	(13.2)	[7.7]	(13.5)	CEHIK	30	普通	橙	SD1	口縁敲打痕 内面ナデ 雲母付着	45-1
35	瓦質土器	火消壺	(23.3)	(25.0)	(16.7)	CIK	20	普通	黄灰	SD1	外面下端部, 底部ケズリ	
36	磁器	碗	(6.8)	5.5	3.7	K	50	良好	白	SD2	肥前系 施釉 染付	
37	磁器	碗	8.4	5.4	3.3	K	95	良好	白	SD2	肥前系 施釉 染付	
38	磁器	碗	(9.4)	5.5	(3.5)	K	40	良好	白	SD2	瀬戸美濃系 施釉 染付 種ムラあり	45-2
39	磁器	蓋	(9.7)	2.7	5.3	HK	40	普通	白	SD2	肥前系 広東碗 施釉 染付	
40	磁器	皿	(13.7)	3.9	(7.7)	K	50	良好	灰白	SD2	肥前系 施釉 染付	
41	磁器	鉢	(15.4)	[4.5]	—	—	20	良好	白	SD2	瀬戸美濃系 施釉 色絵	45-3
42	陶器	皿	(13.2)	[1.8]	—	—	5	良好	明褐灰	SD2	古瀬戸 灰釉	
43	陶器	香炉	(8.0)	[2.6]	—	EK	5	普通	灰白	SD2	京都信楽系 糜白釉	
44	磁器	碗	(10.4)	[3.5]	—	K	20	良好	白	SD3	瀬戸美濃系 施釉 染付	
45	磁器	碗	(8.5)	4.1	(3.8)	K	20	良好	白	SD3	瀬戸美濃系 施釉 染付 幅広高台	45-4
46	磁器	壺	—	[6.0]	5.4	—	95	普通	白	SD3	肥前系 外面施釉, 染付	45-5
47	陶器	油受皿	(9.1)	2.2	(3.8)	EIK	30	良好	灰	SD3	京都信楽系 灰釉	
48	かわらけ	大皿	—	[2.7]	(10.2)	EHK	30	普通	にぶい橙	SD3	回転糸切 胎土粉質	45-6
49	磁器	碗	(8.4)	[3.7]	—	K	5	普通	白	SD4	瀬戸美濃系 施釉 染付	
50	磁器	壺	(6.8)	4.9	(2.7)	IK	30	普通	白	SD4	瀬戸美濃系 施釉 外面染付	
51	磁器	碗	7.9	4.7	3.0	K	100	良好	白	SD4	瀬戸美濃系 施釉 外面ゴム印版染付	
52	磁器	皿	—	[1.6]	—	—	5	良好	にぶい黄橙	SD4	淡路平系 施釉(黄)	45-7

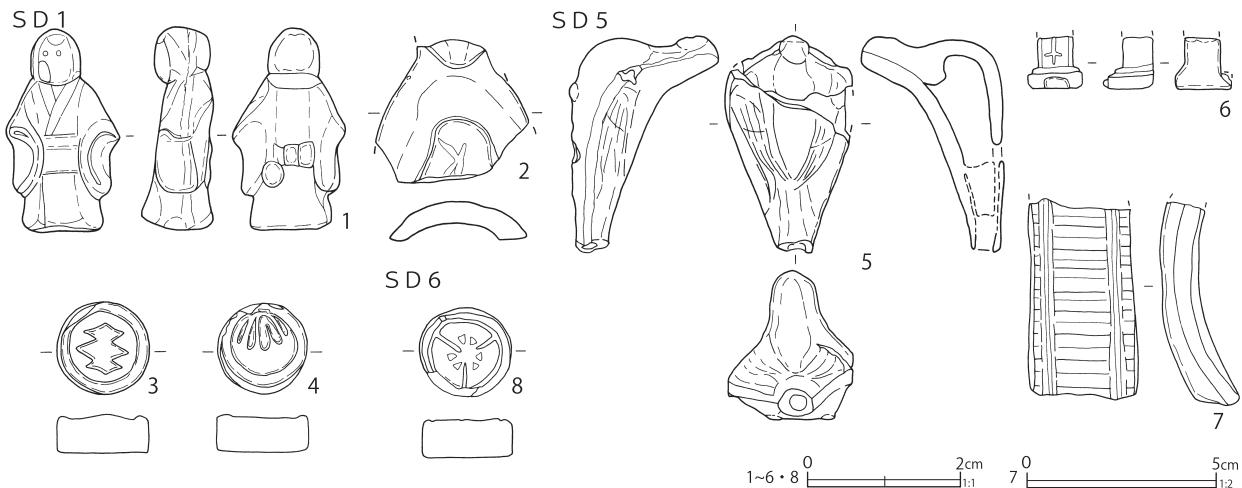
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
53	磁器	皿	—	[1.9]	(8.0)	—	25	良好	白	SD4	瀬戸美濃系 施釉 内面陰刻	
54	陶器	急須	6.7	6.1	5.4	K	80	普通	灰赤	SD4	萬古系 底部、注口部布目痕 外面上絵付、金彩 底部二次穿孔か	45-8
55	磁器	碗	(9.3)	[4.1]	—	—	25	良好	白	SD5	瀬戸美濃系 施釉 染付	
56	磁器	碗	(7.0)	[3.9]	—	—	15	良好	白	SD5	瀬戸美濃系 施釉 外面染付 焼継	
57	磁器	杯	—	[4.2]	(2.2)	—	35	良好	白	SD5	瀬戸美濃系 施釉 外面酸化コバルト染付	
58	磁器	杯	—	[3.7]	2.9	—	35	良好	白	SD5	瀬戸美濃系 施釉 外面銅版転写染付	
59	磁器	段重	(13.6)	[5.4]	—	K	20	良好	白	SD5	肥前系 施釉 外面染付	
60	磁器	段重	(5.4)	2.5	(4.6)	K	20	良好	白	SD5	肥前系 施釉 外面染付、色絵、金彩 焼継	45-10
61	磁器	鉢	14.6	6.4	7.9	K	60	良好	白	SD5	肥前系 施釉 染付	45-9
62	磁器	蓮華	—	[5.2]	—	—	50	良好	白	SD5	肥前系 施釉 内面染付	
63	磁器	急須	(7.4)	7.2	(7.0)	K	40	良好	白	SD5	肥前系 施釉 外面酸化コバルト染付	
64	陶器	油受皿	10.5	1.9	4.0	I	80	良好	にぶい橙	SD5	灰釉 外面煤付着	45-12
65	陶器	油受皿	10.0	2.1	3.9	—	60	良好	灰白	SD5	瀬戸美濃系 柿釉 底部拭き取り	45-13
66	陶器	擂鉢	—	[9.6]	—	EHI	5	良好	褐灰	SD5	堺明石系	
67	陶器	甕	—	(13.5)	12.5	HIK	30	良好	にぶい黄橙	SD5	柿釉 外面鉄釉流し掛け 内面ピン痕5 底部輪状重ね焼き痕、墨書	45-11
68	陶器	行平鍋	(13.8)	[6.6]	—	—	30	良好	浅黄	SD5	内面鉄釉 外面柿釉、トビガンナ	
69	土師質土器	蓋	5.7	0.8	—	EIK	95	普通	にぶい橙	SD5	焼塩壺	46-1
70	土師質土器	蓋	6.2	0.9	—	EHIK	100	普通	にぶい橙	SD5	焼塩壺	46-2
71	土師質土器	蓋	5.4	0.8	—	EIJK	100	普通	橙	SD5	焼塩壺	46-3
72	かわらけ	小皿	7.2	1.5	4.0	EI	60	普通	にぶい橙	SD5	江戸在地系 回転糸切(左) 胎土粉質	46-4
73	瓦質土器	竈鍔	(37.6)	3.0	(33.0)	CIK	10	普通	にぶい赤褐	SD5	煤付着	46-5
74	瓦質土器	火消壺	—	[12.8]	(19.6)	CDHK	40	普通	黒	SD5	砂目底 外面ローラースタンプ 外面下端部弱いミガキ	46-6
75	磁器	碗	7.0	5.5	3.3	—	95	良好	白	SD6	瀬戸美濃系 施釉 外面染付 SD5 と接合	
76	磁器	碗	(10.5)	6.1	(4.5)	—	20	良好	白	SD6	肥前系 施釉 染付 焼継	
77	磁器	碗	(11.0)	[4.7]	—	—	20	普通	白	SD6	瀬戸美濃系 施釉 染付 被熱か	
78	磁器	杯	6.4	4.5	3.1	K	85	普通	白	SD6	瀬戸美濃系 施釉 外面染付 幅広高台	
79	磁器	杯	(6.8)	5.2	(3.0)	K	45	普通	白	SD6	瀬戸美濃系 施釉 外面染付 被熱か	
80	磁器	杯	6.5	4.4	3.1	K	70	普通	白	SD6	瀬戸美濃系 施釉 染付	
81	磁器	皿	9.8	2.7	5.9	K	95	良好	白	SD6	肥前系 施釉 酸化コバルト染付か	
82	磁器	皿	(15.6)	[1.8]	—	—	15	良好	にぶい橙	SD6	淡路琅平系 施釉(橙) 内面陰刻 焼継 と同一個体	46-8
83	磁器	皿	—	[3.0]	(9.7)	—	15	良好	にぶい橙	SD6	淡路琅平系 施釉(橙) 内面陰刻 焼継 と同一個体	82
84	磁器	皿	—	2.9	—	—	5	良好	白	SD6	三田青磁 型成形 内面陽刻 内面割口縁辺二次利用(敲き潰れ)	46-7
85	陶器	碗	(11.3)	[6.7]	—	EGI	15	良好	にぶい橙	SD6	施釉 外面ヘラケズリ 胎土砂質	46-9
86	陶器	皿	—	[2.7]	—	K	20	良好	灰白	SD6	ヨーロッパ系 白土化粧 施釉 コバルト 焼継 被熱 87・88 と同一個体	46-10
87	陶器	皿	—	[2.9]	—	K	5	良好	灰白	SD6	ヨーロッパ系 白土化粧 施釉 コバルト 焼継 被熱 86・88 と同一個体	46-10
88	陶器	皿	—	[2.4]	—	K	5	良好	灰白	SD6	ヨーロッパ系 白土化粧 施釉 コバルト 焼継 被熱 86・87 と同一個体	46-10
89	陶器	擂鉢	—	[4.5]	—	IK	5	良好	黄灰	SD6	益子系 鉄釉	
90	陶器	こね鉢	—	[2.4]	(13.8)	EIK	20	普通	灰白	SD6	瀬戸美濃系 灰釉 内面目跡2 底部墨書	
91	陶器	行平鍋	—	[4.1]	—	—	5	良好	浅黄橙	SD6	柿釉 外面トビガンナ	
92	陶器	蓋	(13.2)	[2.5]	—	IK	25	良好	にぶい黄	SD6	行平鍋 内面灰釉 外面柿釉、トビガンナ	
93	陶器	豆甕	(5.4)	5.4	(3.0)	IK	15	良好	灰褐	SD6	鉄釉	
94	陶器	蓋	(7.0)	[2.2]	—	I	30	良好	灰黄	SD6	土瓶 外面白土化粧、施釉、三彩	
95	陶器	土瓶	(10.5)	[3.7]	—	K	25	普通	にぶい黄橙	SD6	白土化粧 外面施釉、三彩	
96	瓦質土器	火消壺	(25.6)	[5.3]	—	CHK	10	普通	黒	SD6		
97	瓦質土器	火鉢	—	[4.7]	(22.2)	CHI	10	普通	黒	SD6	燻す	
98	土師質土器	蓋	6.0	0.9	5.6	HIK	50	普通	橙	SD6	焼塩壺	
99	磁器	杯	(6.2)	2.6	2.4	—	40	普通	白	SD7	瀬戸美濃系 施釉 外面染付 内面上絵付	
100	土師質土器	敷き輪	—	6.0	—	CEHIK	5	普通	灰褐	SD7	煤付着	47-2
101	陶器	植木鉢	(23.4)	[6.6]	—	DHK	10	良好	灰白	SD201	瀬戸美濃系 鉄釉	
102	陶器	油受皿	(10.2)	2.0	4.9	IK	80	良好	灰白	SD201	瀬戸美濃系 柿釉 底部拭き取り 外面輪状重ね焼き痕	



第101図 溝跡出土遺物 (6)

第25表 溝跡出土遺物観察表 (2) (第101図)

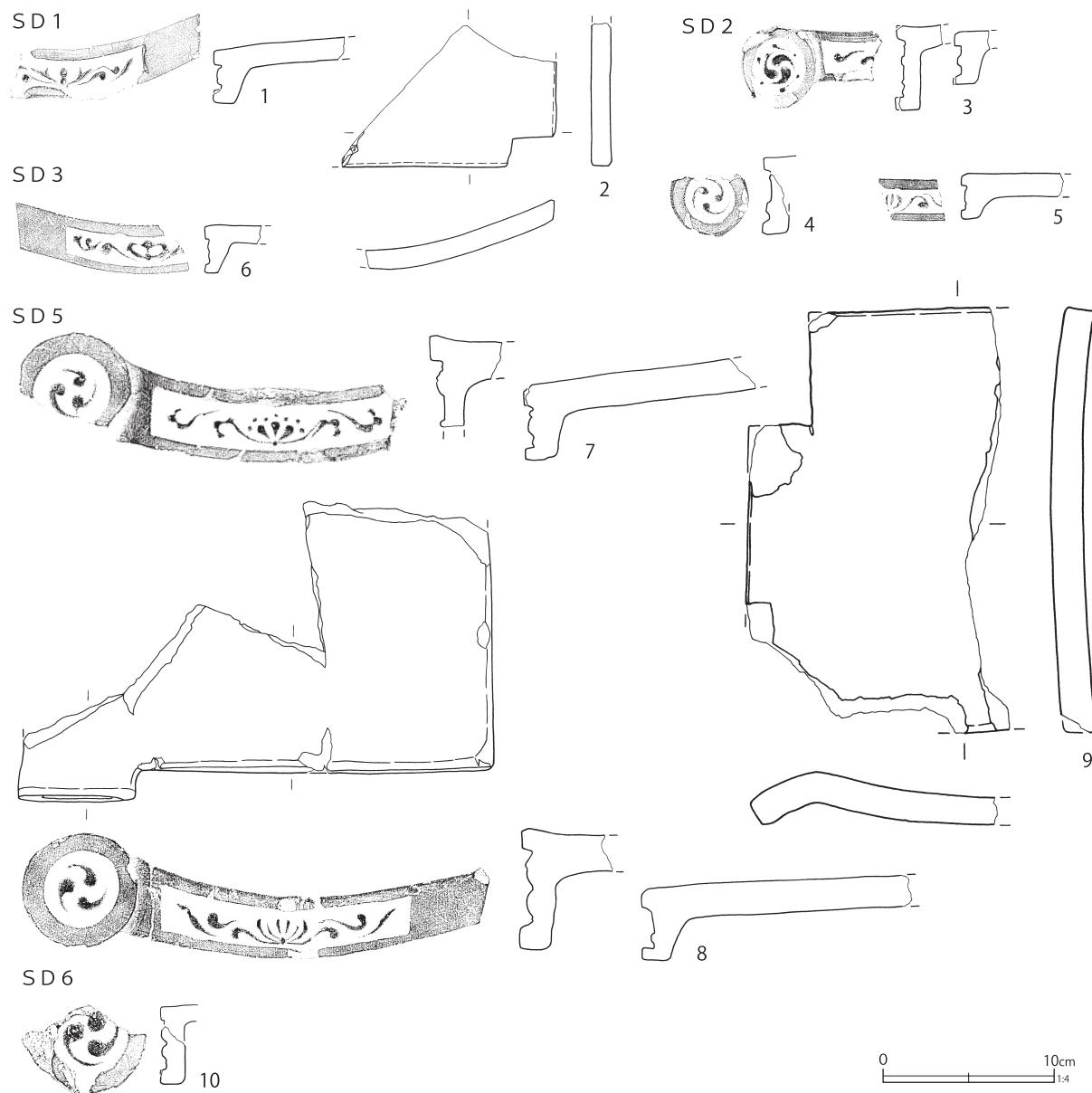
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	胎土	焼成	色調	遺構名	備考	図版
1	磁器	徳利	1.1	[4.5]	—	11.2	K	良好	白	SD5	肥前系 外面施釉, 染付	
2	施釉土器	ミニチュア	—	[1.8]	3.6	21.4	IK	良好	橙	SD1	江戸在地系 行平鍋 透明釉 外面鉄化粧, トビガンナ	
3	土製品	ミニチュア	(6.6)	[2.2]	—	4.0	HIK	良好	橙	SD1		
4	土製品	ミニチュア	—	[1.2]	—	1.4	HIK	良好	橙	SD1	江戸在地系 行平鍋 透明釉 外面トビガンナ	
5	土製品	ミニチュア	(6.5)	[2.2]	—	5.5	HIK	良好	橙	SD1	江戸在地系 鍋 透明釉	
6	陶器	ミニチュア	(8.2)	[2.9]	—	8.3	IK	良好	褐灰	SD5	行平鍋 鉄釉 外面トビガンナ 把手手捻り	94-6
7	土製品	ミニチュア	(7.7)	2.8	(3.4)	17.3	HIK	普通	橙	SD5	江戸在地系 行平鍋 透明釉 外面銅緑釉, 白 土化粧	



第102図 溝跡出土遺物 (7)

第26表 溝跡出土遺物観察表 (3) (第102図)

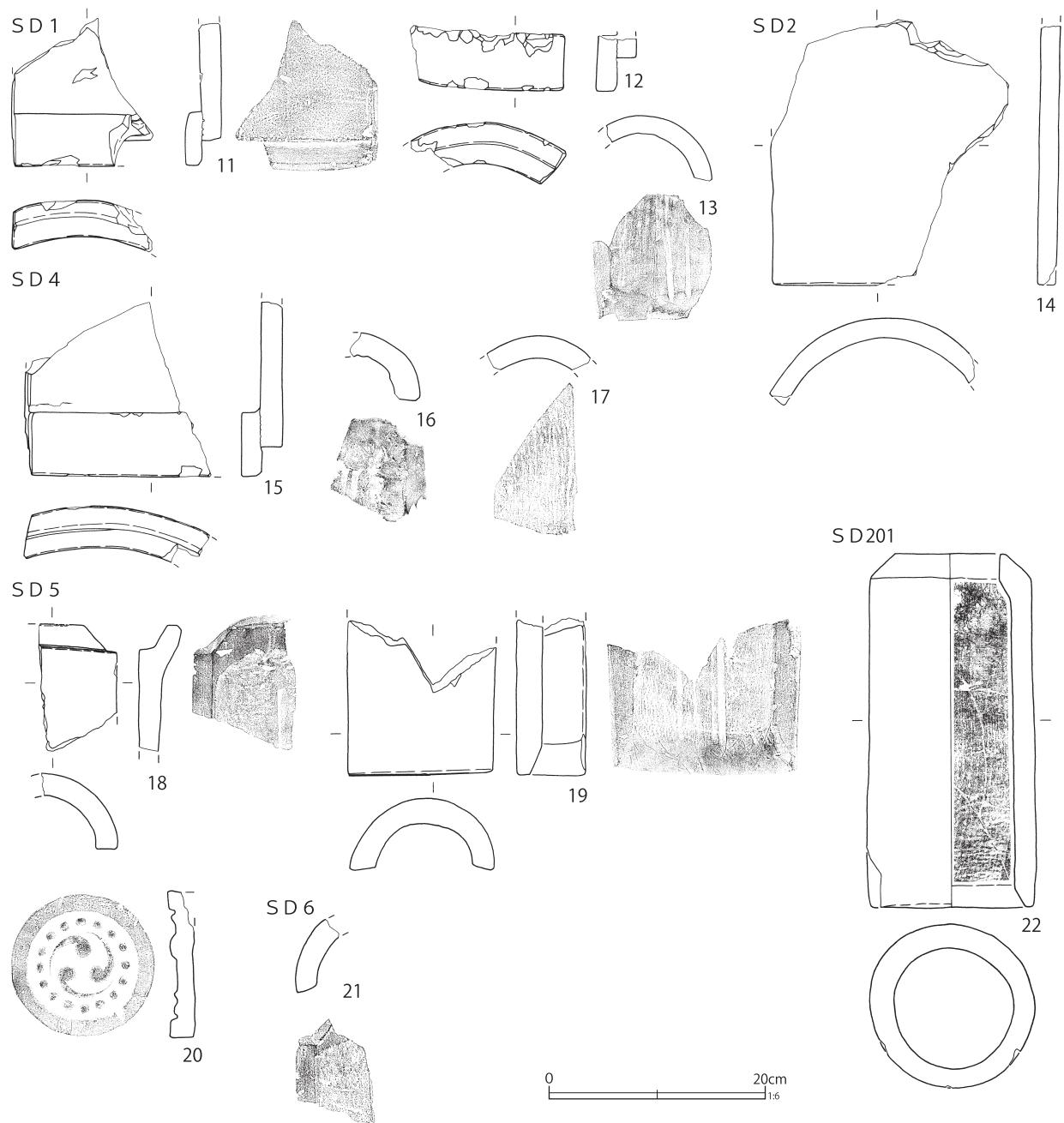
番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	色調	遺構名	備考	図版
1	土製品	人形	5.3	3.0	1.9	15.6	CHK	良好	橙	SD1	姉様 前後合二枚型 中実 雲母付着	95-15
2	土製品	人形	[3.7]	[4.1]	1.0	10.9	HK	良好	橙	SD1	江戸在地系 姉様 前後合二枚型 中空 雲母付着	
3	土製品	泥面子	径 2.5	—	1.1	7.7	—	良好	橙	SD1	江戸在地系 一枚型 中実 雲母付着	95-2
4	土製品	泥面子	径 2.4	—	1.1	6.8	HK	良好	橙	SD1	江戸在地系 一枚型 中実 雲母付着	95-2
5	土製品	鳩笛	5.7	3.4	3.9	17.4	HK	良好	橙	SD5	江戸在地系 上下合二枚型 中空 透明釉 白土化粧 緑釉	95-16
6	土製品	箱庭道具	[1.4]	1.5	1.4	2.2	—	良好	白	SD5	京都系 建造物 透明釉 緑釉 鉄釉	
7	土製品	箱庭道具	[2.6]	1.4	—	1.9	IK	良好	淡橙	SD5	江戸在地系 橋 一枚型 中実 透明釉	95-17
8	土製品	泥面子	径 2.4	—	1.0	5.9	K	良好	橙	SD6	江戸在地系 一枚型 中実 雲母付着	95-2



第103図 溝跡出土遺物 (8)

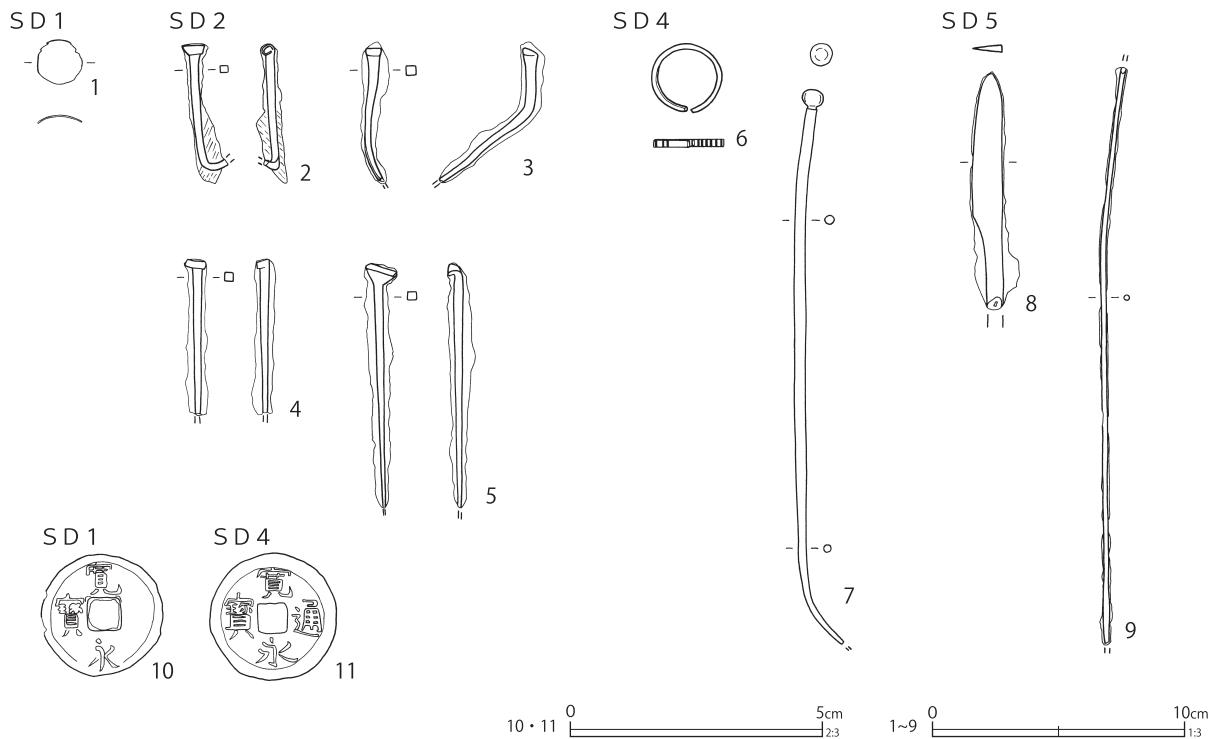
第27表 溝跡出土遺物観察表 (4) (第103・104図)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	径	胎土	焼成	色調	遺構名	備考	図版
1	瓦	軒棧瓦	[11.5]	[16.9]	1.9	[5.9]	—	CK	普通	灰白	SD1	銀化	99-4
2	瓦	棧瓦	[12.5]	[18.9]	1.7	—	—	K	良好	灰白	SD1	銀化	
3	瓦	軒棧瓦	[4.0]	[13.2]	2.0	7.4	7.4	K	良好	灰白	SD2	江戸式 左巻 6連珠三巴文 銀化	
4	瓦	軒棧瓦	[5.2]	—	2.3	[5.3]	7.0	K	良好	灰白	SD2	右巻三巴文	
5	瓦	軒棧瓦	[8.9]	[5.8]	2.0	[4.2]	—	K	良好	灰白	SD2	江戸式 銀化	
6	瓦	軒棧瓦	[5.3]	[14.2]	1.7	[4.7]	—	K	良好	灰白	SD3	銀化	
7	瓦	軒棧瓦	[4.2]	[22.5]	2.1	6.5	[5.1]	IK	普通	灰白	SD5	東海式 右巻 三巴文 銀化	99-5
8	瓦	軒棧瓦	[17.8]	28.0	1.9	6.6	6.7	K	良好	灰白	SD5	江戸式 右巻 三巴文 銀化	99-6
9	瓦	棧瓦	25.0	[15.5]	1.8	[3.0]	—	IK	良好	灰白	SD5	銀化	
10	瓦	軒棧瓦	[5.0]	[6.9]	2.1	[5.1]	—	K	良好	灰白	SD6	右巻 三巴文	
11	瓦	道具瓦	[13.3]	[11.6]	2.0	(4.9)	—	K	良好	灰白	SD1	銀化	



第104図 溝跡出土遺物 (9)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	径	胎土	焼成	色調	遺構名	備考	図版
12	瓦	道具瓦	[5.1]	[14.2]	1.9	3.8	—	IK	良好	灰	SD1	銀化	
13	瓦	丸瓦	[12.1]	[9.8]	1.7	6.0	—	K	良好	灰	SD1	被熱	
14	瓦	道具瓦	[24.1]	[18.6]	1.8	(8.3)	—	K	普通	灰白	SD2	銀化	99-7
15	瓦	道具瓦	[16.4]	[13.7]	2.1	[6.9]	—	IK	良好	灰	SD4		99-8
16	瓦	丸瓦	[8.2]	[6.8]	2.5	(6.7)	—	CK	良好	灰白	SD4	銀化	
17	瓦	丸瓦	[15.2]	[10.1]	2.1	[3.2]	—	CK	普通	灰白	SD4		
18	瓦	丸瓦	[11.7]	[7.2]	2.0	7.1	—	IK	良好	灰白	SD5		
19	瓦	丸瓦	[14.4]	13.9	2.5	6.4	—	K	良好	灰白	SD5		
20	瓦	軒丸瓦	[4.7]	14.0	1.8	3.0	13.6	K	普通	灰白	SD5	右巻 16連珠三巴文	99-9
21	瓦	丸瓦	[10.6]	[4.2]	2.0	[6.7]	—	K	普通	灰白	SD6	銀化	
22	瓦	瓦樋	32.8	15.7	2.3	15.7	—	CIK	普通	灰白	SD201	口径 10.3cm	99-10



第105図 溝跡出土遺物 (10)

第28表 溝跡出土遺物観察表 (5) (第105図)

番号	種別	器種	法量	遺構名	備考	図版
1	銅製品	飾金具	縦 [1.7]cm × 横 1.7cm 厚さ 0.025cm 重さ 0.9g	SD1		
2	鉄製品	釘	長さ [5.0]cm 幅 0.3cm 厚さ 0.3cm 重さ 4.0g	SD2		
3	鉄製品	釘	長さ [5.2]cm 幅 0.4cm 厚さ 0.4cm 重さ 8.2g	SD2		
4	鉄製品	釘	長さ [6.1]cm 幅 0.3cm 厚さ 0.4cm 重さ 6.8g	SD2		
5	鉄製品	釘	長さ [9.7]cm 幅 0.3cm 厚さ 0.3cm 重さ 9.8g	SD2		
6	銅製品	環金具	長さ 2.7cm 幅 0.3cm 厚さ 0.2cm 重さ 2.8g	SD4		
7	銅製品	火箸	長さ [22.1]cm 幅 0.4cm 厚さ 0.4cm 重さ 24.8g	SD4		
8	鉄製品	握鉄か	長さ [9.2]cm 刃幅 1.2cm 背幅 0.3cm 重さ 15.9g	SD5		
9	鉄製品	不明	長さ [22.8]cm 厚さ 0.2cm 重さ 5.7g	SD5		
10	銅製品	錢貨	径 23.6 mm 厚さ 1.1 mm 重さ 2.0g	SD1	寛永通寶	
11	銅製品	錢貨	径 25.2 mm 厚さ 1.3 mm 重さ 3.3g	SD4	寛永通寶 (古)	

砥石でノコギリ状工具痕・幅広工具痕が見られる。先ノミ状と推定される工具で分割し、再加工を行っている可能性がある。13は凝灰岩製の硯である。刃物痕が多数見られ砥具として転用している。14は砂岩製の温石である。出土陶磁器から19世紀第4四半期頃の遺構と考えられる。

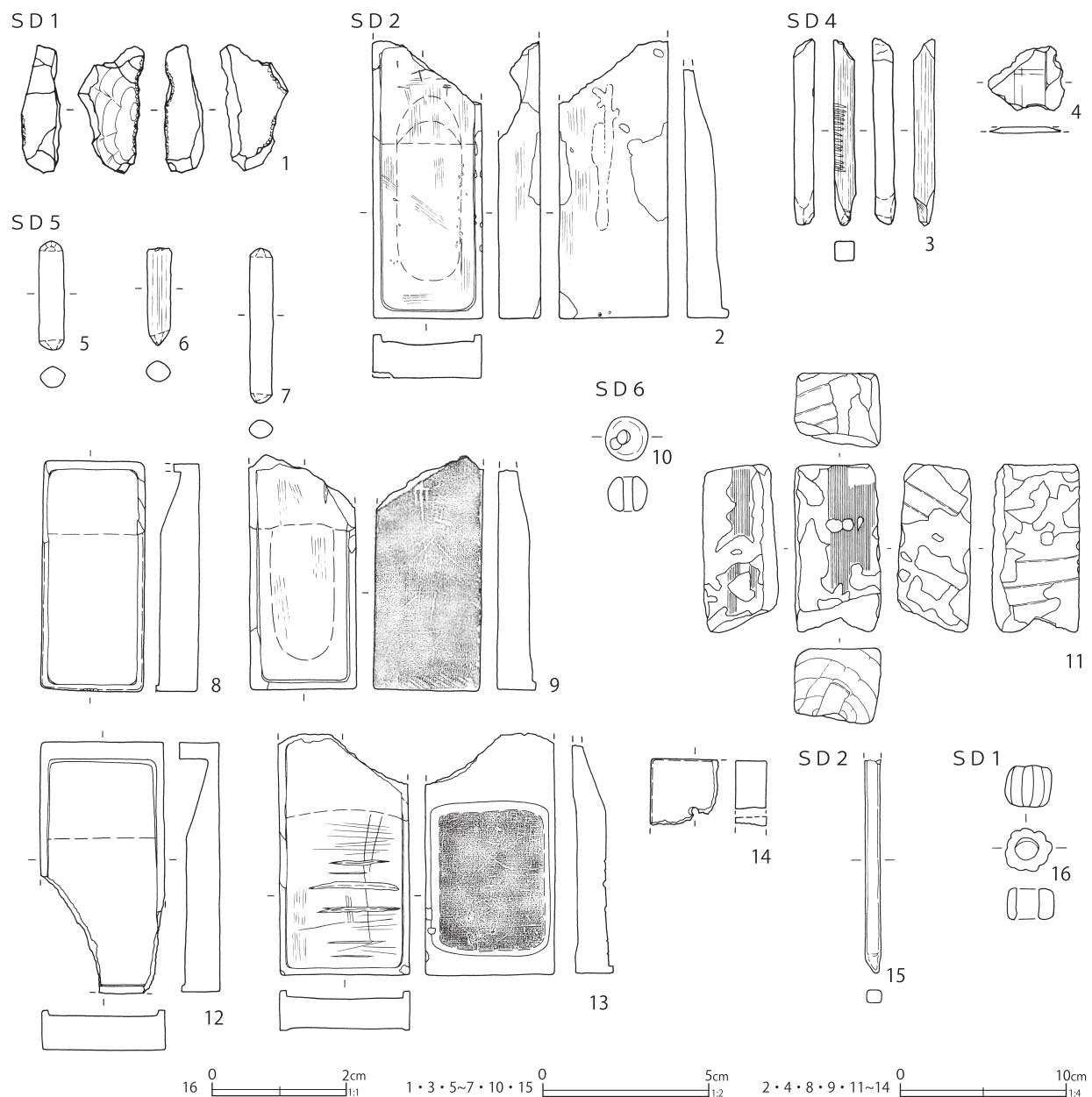
第7号溝跡 (第93図)

D 6 - e 9 グリッドに位置する。第8号埋設桶、第26・29号土壙より古く、第32号土壙より新しい。総延長は5.55mで、東側は第26号土壙に壊

されており、更に東側は検出されなかった。西側は搅乱を受けており、調査区域外へと続いていると考えられる。第1号杭列、第5・6号溝跡と隣接しているが、短いため区画溝の一部としては把握し難い。

出土遺物は極めて少なく、第100図の99・100に陶磁器を図示した。

99は瀬戸美濃系磁器の卵殻手杯で、内面に青色の上絵付が施されている。100は土師質土器の敷き輪である。



第106図 溝跡出土遺物 (11)

水塚下第1号溝跡（第94図）

D 7 - h 2 グリッドに位置する。総延長は1.90mである。水塚下第2号焼土遺構によって上部は削平されている。覆土には焼土塊が多量に含まれている。周辺遺構との関連性の把握がし難く、溝跡の性格は不明である。

第201～203号溝跡（第95図）

第201号溝跡はD 6 - f 10、第202号溝跡はD 6 - f 10、D 7 - e 1・f 1 グリッド、第203号

溝跡はD 6 - f 10 グリッドに位置する。第207・212・215号土壙より古い。第201・205・207・208号埋設桶と共に区画を伴う一連の排水施設と考えられる。総延長は第201号溝跡が5.45m以上、第202号溝跡が11.25m以上、第203号溝跡が3.50mである。

第201号溝跡では瓦桶が連なった状態で7個体検出された。また、第202・203号溝跡でも瓦桶の破片が出土しており、瓦桶が設置されていたこ

第29表 溝跡出土遺物観察表（6）（第106図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	遺構名	備考	図版
1	石製品	火打石	3.7	1.8	1.1	8.2	石英	SD1		
2	石製品	硯	[16.6]	6.5	—	329.6	凝灰岩	SD2	器高2.5cm パテ状補修痕2	
3	石製品	石筆	5.5	0.6	—	4.3	滑石	SD4	工具痕か	
4	石製品	石板	[3.8]	[4.3]	0.3	7.8	粘板岩	SD4	野線	
5	石製品	石筆	3.2	0.7	—	2.6	滑石	SD5	両端使用	
6	石製品	石筆	2.9	0.7	—	2.0	滑石	SD5		
7	石製品	石筆	4.6	0.7	—	3.3	滑石	SD5	両端使用	
8	石製品	硯	13.7	6.1	—	447.3	粘板岩	SD5	器高2.5cm	
9	石製品	硯	[14.0]	6.4	—	285.2	凝灰岩	SD5	器高2.3cm 刻書「幡谷■子」	
10	石製品	簪の玉	1.0	1.2	—	2.9	石灰岩か	SD6		
11	石製品	砥石	[10.1]	5.2	[4.5]	374.7	流紋岩	SD6	ノコギリ・幅広工具痕 分割痕	113-3
12	石製品	硯	15.1	7.4	—	311.8	凝灰岩（中粒）	SD6	器高2.4cm	
13	石製品	硯	[14.5]	7.8	—	312.2	凝灰岩	SD6	器高2.3cm 砥具転用 刃物痕 刻書「明治十六■谷■…」	
14	石製品	温石	[3.9]	[4.0]	1.9	33.6	砂質凝灰岩か	SD6	穿孔残存	
15	硝子製品	笄	[6.4]	0.5	0.4	3.9	—	SD2	飴色 中実	116-1
16	骨製品か	簪の玉	径0.7	—	—	0.4	—	SD1		116-5

とが考えられる。掘り込みは概ね東に傾斜しており、利根川方面へと排水されていたと思われる。

出土遺物は極めて少なく、第100図の101・102に陶磁器を示した。101は瀬戸美濃系陶器の植木鉢、102は油受皿である。第104図の22は瓦桶である。

（8）焼土遺構

遺構内の壁面が顕著に被熱した遺構を焼土遺構とした。焼土遺構は9基検出された。位置・規模等の基本情報は第30表に、遺構図は第107・108図にまとめた。

第1号焼土遺構（第107図）

D 6-d 8グリッドに位置する。平面形態の前方部が方形に張り出し、鍵穴形を呈する。側壁が被熱し、底面は焼けていない。最下層は炭化物層

である。栗橋宿跡第1地点の第1・2号焼土遺構、栗橋宿本陣跡の第301・302号焼土遺構に類似する。カマド状の施設もしくは、生産に関わる施設と考えられる。第3～5号焼土遺構も同様の遺構の一部と思われる。

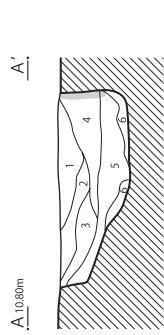
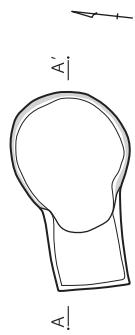
第2号焼土遺構（第107図）

D 6-e 10グリッドに位置する。楕円形の平面形態の両端に方形の張り出し部を備えた焼土遺構である。両端は第13・14号建物跡、第15号建物跡に壊されている。張り出し部の両脇には袖石が置かれている。遺構内の側壁は被熱し、覆土は焼土ブロックを主体としている。遺構の最下層には碎石が敷き詰められ、その直上に薄く焼土層が広がっている。また、西側の張り出し部は底面に粘土を張り付けて構築している。被熱の範囲から東

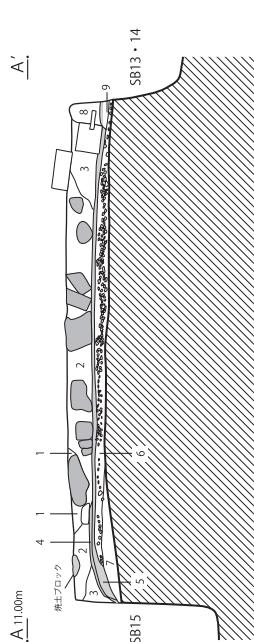
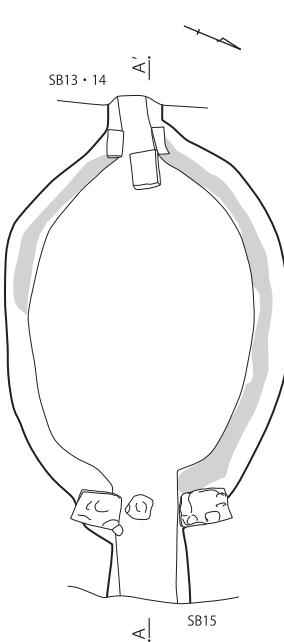
第30表 第一面焼土遺構一覧表

番号	グリッド	長軸	短軸	深さ	方位	備考	単位：m
1	D6-d8	0.78	0.47	0.27	N-107°-W		
2	D6-e10	2.01	1.12	0.16	N-67°-E		
3	D7-d・e1	1.09	0.58	0.11	N-10°-W		
4	D7-e1	0.67	0.47	0.13	N-4°-E	オーバーハング 2cm	
5	D6-e9	0.54	0.48	0.23	N-18°-W		
水塚下1	D 7-h1・2	(2.45)	2.25	0.10	N-18°-W		
水塚下2	D 7-h2	(1.50)	(1.30)	0.10	N-10°-W	水塚下SD1より新しい 水塚下3より古い	
水塚下3	D 7-h2	(1.75)	1.10	0.12	N-14°-W	水塚下SK4・水塚下2・4より新しい	
水塚下4	D 7-h2	(1.70)	1.60	0.07	N-13°-W	水塚下SK4より新しい 水塚下3より古い	

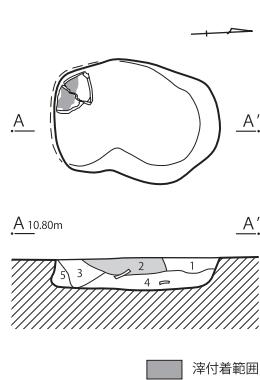
焼土遺構 1



焼土遺構 2

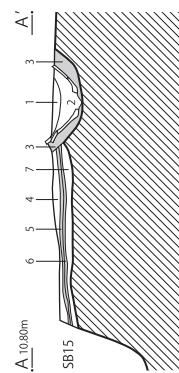
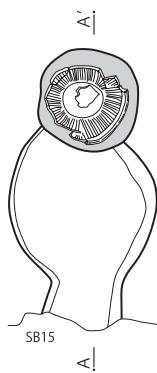


焼土遺構 4

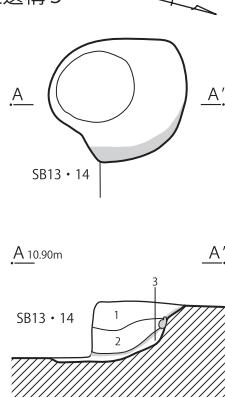


添付範囲

焼土遺構 3



焼土遺構 5



焼土遺構 1

- 1 黄灰色土 炭化物(Φ2~3mm)微量 しまり強 粘性なし
 2 灰黄褐色土 しまり強 粘性なし
 3 暗褐色土 しまり強 粘性なし
 4 褐灰色土 シルト・炭化物(Φ3~5mm)若干混入 しまり強 粘性なし
 5 暗褐色土 炭化物(Φ5~15mm)多量 砂混入 硬化 粘性なし
 6 黒色土 焼土若干混入 炭化した層

焼土遺構 2

- 1 黄褐色土 ブロック主体層 しまり強
 2 黒褐色土 壁土材と思われる粘土ブロック(Φ3~16mm)少量 炭多量
 3 黒褐色土 粘性・しまりなし
 4 炭化物の層 褐色粘土粒(Φ2cm程)・焼土粒(Φ1cm)少量
 上面に焼土が散っている
 5 赤褐色土 火を受けて赤変している 固く均質な土
 6 褐灰色土 (Φ1~2cm)の角礫(碎石か)が敷き詰められている
 粘性なし
 7 褐灰色土 黄灰色シルトブロック(Φ3~5cm)微量 炭化物(Φ5mm)少量
 しまり強
 8 暗黄褐色土 灰色土微量
 黄褐色粘土質(Φ1cm程度)が主体の層 煙道の崩れたものか
 しまり強
 9 明褐色ローム 下に貼った土 5層と似る 上面一部に被熱 しまり強
 粘性あり

焼土遺構 3

- 1 暗褐色土 焼土・炭化物が混ざり合った層
 2 灰色土 ガチャチに固まつた灰層 炭化物混入
 3 暗赤褐色土 フカフカの土 捣鉢の周囲は焼けているで捣鉢に近いほど
 焼けている 粘性なし 捣鉢の外側の層
 4 褐灰色土 焼土(Φ2~3cm)・炭化物(Φ1~3cm)の小ブロック少量混入
 5, 6 層に比べ軟らかい
 5 赤褐色土 焼土 しまり極めて強
 6 黒褐色土 ガチャチに固められた土
 7 褐灰色土 焼土・炭化物の微粒子混入 固くしまっているが6層よりは
 軟らかい

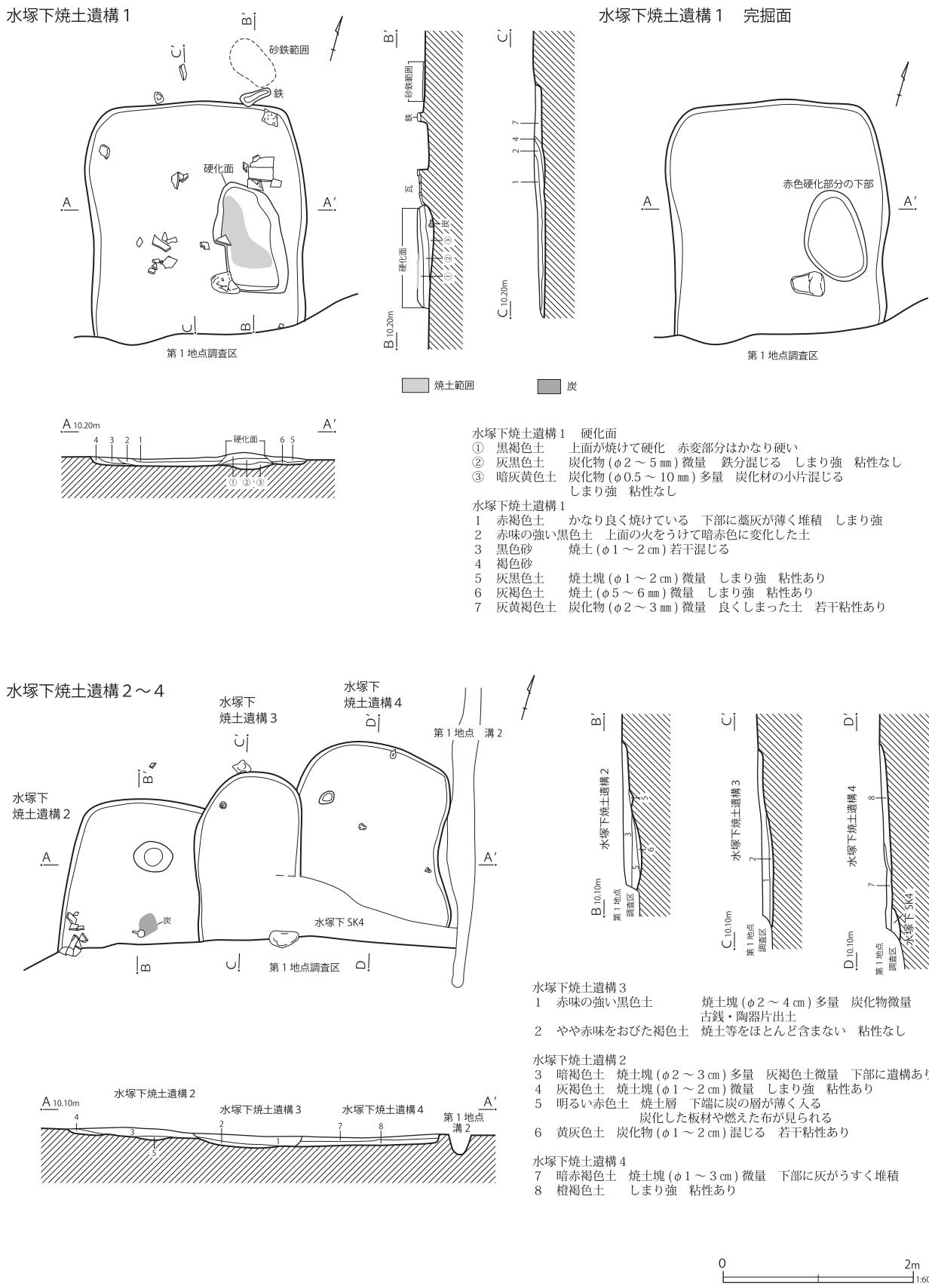
焼土遺構 4

- 1 褐灰色土 炭化物(Φ5~6mm)若干混入 しまり強
 2 暗赤褐色土 焼土・炭化物(Φ7~9mm)多量 上面は硬化
 3 褐灰色砂 炭化物(Φ2~3mm)・焼土(Φ1~3mm)多量
 4 暗黄褐色土 炭化物(Φ3~5mm)多量 若干粘性あり
 5 黒褐色土 灰・滓が混じる

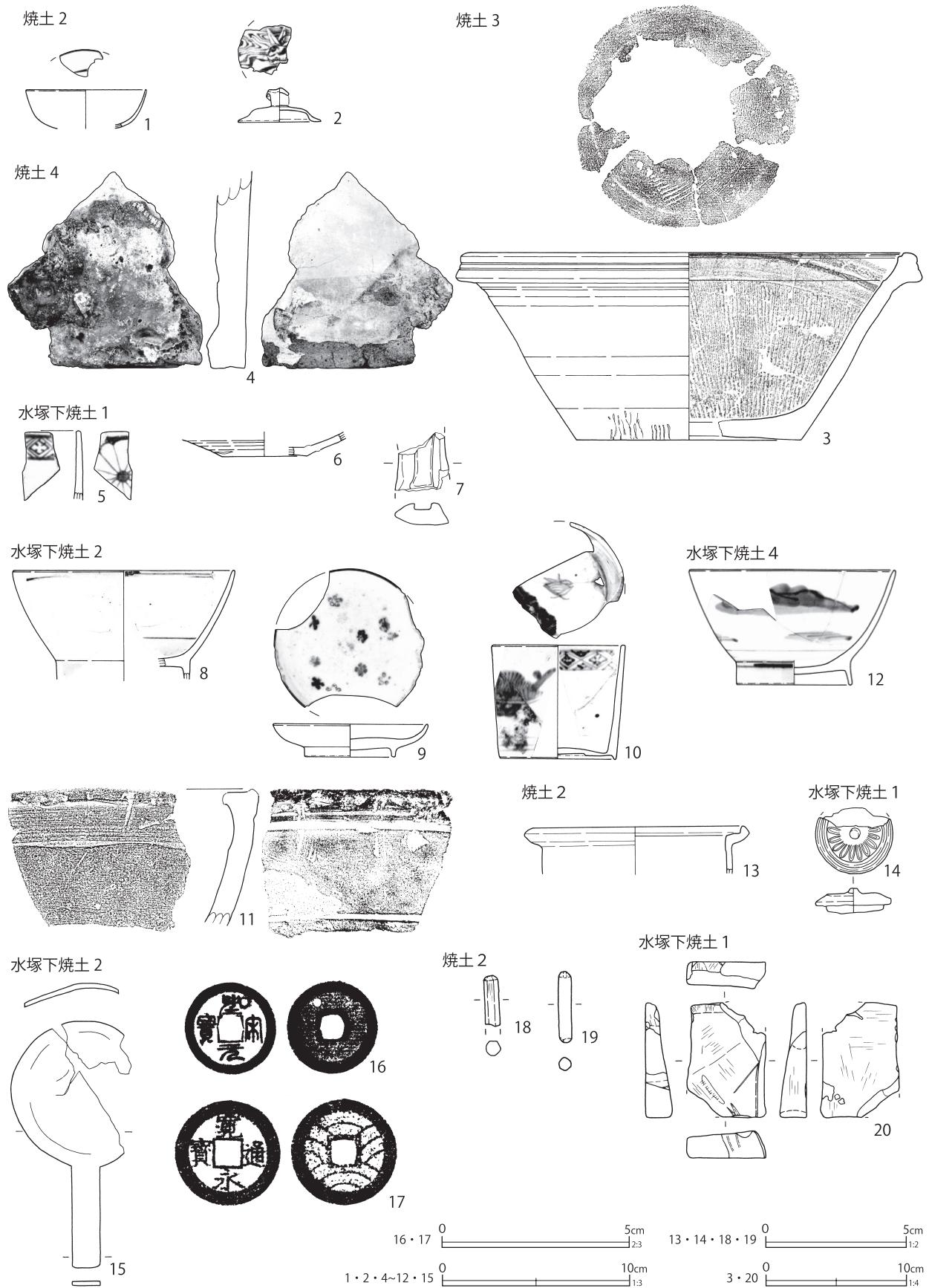
焼土遺構 5

- 1 灰黄褐色土 炭化物(Φ5~30mm)ブロック状に混入 しまり強 粘性なし
 2 黒色土 炭化物層 焼土(Φ5~10mm)所々混入
 3 黄褐色土 砂質 炭化物層との境目に焼土堆積

第107図 第1~5号焼土遺構



第108図 水塚下第1～4号焼土遺構



第109図 焼土遺構出土遺物

第31表 焼土遺構出土遺物観察表（第109図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	壺	(6.4)	[2.0]	—	K	20	普通	白	焼土2	瀬戸美濃系 施釉 内面上絵付（青）	
2	陶器	蓋	(4.4)	1.8	—	—	30	普通	灰白	焼土2	練り込み手（灰・茶）施釉	47-3
3	陶器	擂鉢	(31.0)	13.3	16.0	EIKL	65	普通	橙	焼土3	堺明石系 底部二次穿孔 炉体転用 内面被熱（黒化）	47-5
4	土師質土器	土管	—	[10.4]	—	HIK	5	普通	橙	焼土4	底部 被熱融解（内面ガラス化）	47-4
5	磁器	碗	—	[3.6]	—	K	5	普通	白	水塚下 焼土1	肥前系 施釉 染付	
6	陶器	灯明皿	—	[1.3]	(4.4)	K	10	良好	灰白	水塚下 焼土1	瀬戸美濃系 柿釉 底部釉ふきとり 重ね 焼き痕	
7	土製品	不明	縦 [3.1]	横 2.9		CHIK	—	普通	にぶい橙	水塚下 焼土1		47-6
8	磁器	碗	(11.8)	[5.4]	—	—	20	良好	白	水塚下 焼土2	肥前系 施釉 染付	
9	磁器	皿	8.2	1.7	4.8	—	100	良好	白	水塚下 焼土2	肥前系 施釉 内面色絵 口紅 被熱	47-7
10	磁器	猪口	(7.0)	6.0	(6.1)	—	30	良好	白	水塚下 焼土2	肥前系 施釉 染付 被熱	
11	瓦質土器	火鉢	—	[7.1]	—	CHIK	5	普通	橙	水塚下 焼土2	ほぼ酸化炎焼成 口縁受口状，敲打痕	
12	磁器	碗	11.0	6.1	6.1	K	80	良好	白	水塚下 焼土4	肥前系 施釉 外面染付 見込みビン痕3	47-8
13	土製品	ミニチュア	(7.1)	[1.7]	—	K	—	良好	橙	焼土2	江戸在地系 鍋 透明釉 重さ 1.9 g	
14	土製品	ミニチュア	2.7	0.9	—	—	—	良好	灰白	水塚下 焼土1	京都系 蓋 一枚型 受口別造り 外面銅緑釉 重さ 3.9 g	94-3
15	銅製品	手鏡	長さ 13.2	縦 7.7	横 [6.3]	厚さ 0.2	重さ 59.9			水塚下 焼土2		
16	銅製品	銭貨	径 24.0 mm	厚さ 1.2mm	重さ 3.2g					水塚下 焼土2	聖宗元寶 篆書 穿孔	111-6
17	銅製品	銭貨	径 28.0 mm	厚さ 1.3mm	重さ 4.3g					水塚下 焼土2	寛永通寶（新） 四文銭	
18	石製品	石筆	長さ [1.8]	幅 0.5	重さ 0.7	滑石				焼土2		
19	石製品	石筆	長さ 2.5	幅 0.4	重さ 0.9	滑石				焼土2	両端使用	
20	石製品	砥石	長さ 8.1	幅 5.6	厚さ 1.9	重さ 105.1	流紋岩			水塚下 焼土1	砥面6 幅広工具痕	

側が焚口と考えられる。類似する遺構は栗橋宿では確認されず、その性格は不明である。

出土遺物は極めて少なかった。第109図の1・2に陶磁器、13に土製品、18・19に石製品を示した。

1は瀬戸美濃系磁器の卵殻手壺である。2は灰・茶色のマーブル状を呈する練り込み手で急須の蓋と考えられる。13は江戸在地系の鍋のミニチュア、18・19は滑石製石筆である。

第3号焼土遺構（第107図）

D 7-d 1・e 1 グリッドに位置する。平面形態は第1号焼土遺構に類似するが、南側には円形の掘り込み内に擂鉢が設置されている。擂鉢は強く被熱しており炉体部と考えられる。底部に二次穿孔が施されており、擂鉢及び遺構内底面が被熱している。

出土遺物は、第109図の3に炉体部として転用されていた堺明石系陶器の擂鉢を示した。全体が被熱し、底部に二次穿孔が見られる。

第4号焼土遺構（第107図）

D 7-e 1 グリッドに位置する。第1号焼土遺構と同様の施設と思われるが、平面形態は不整形で遺構壁面がややオーバーハングする。上層部に津状物質が見られる。出土遺物は第109図4に土師質土器の土管を示した。土管は被熱が著しく、内面がガラス化している。生産に関わる構造物の一部であったと考えられる。

第5号焼土遺構（第107図）

D 6-e 9 グリッドに位置する。第13・14号建物跡に壊されているが、平面形態は第1号焼土遺構と同様の可能性が想定される。東側に被熱範囲が見られる。

水塚下第1号焼土遺構（第108図）

D 7-h 1・2 グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形で南側が第1地点の調査区へと続いているが、第1地点では検出されていない。掘り込みは浅く、上層は被熱により赤変し、下部に藁灰が薄く堆積している。東側に極めて硬い硬化面があり、一部赤変している。硬化面の下は僅かに掘り窪められている。また、硬化面の南側に隣接して自然礫が置かれ、北側には瓦が敷かれている。遺構の北側に鉄塊と砂鉄の散布が見られ、鉄製品の生産に関わる施設の可能性が想定される。

出土遺物は第109図の5～7に陶磁器、14に土製品、20に石製品を示した。5は肥前系磁器の筒形碗、6は瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿である。7は用途不明の土製品である。両端が欠損しており、中央に溝状の凹みが見られる。14は京都系の蓋のミニチュアである。20は幅広工具痕が僅かに残る流紋岩製砥石である。

水塚下第2号焼土遺構（第108図）

D 7-h 2 グリッドに位置する。水塚下第1号溝跡より新しく、水塚下第3号焼土遺構より古い。平面形態は隅丸長方形が推定され、南側は第1地点の調査区へ続いている。中央にはピット状の浅い凹みが見られる。内部には焼土が充填されており、炭化した板材や布片が見られる。南側には炭化物集中が確認される。

出土遺物は第109図の8～11に陶磁器、15に銅製品、16・17に銭貨を示した。8～9は肥前系磁器で、8は広東碗、9は内面に色絵が施された小皿、10は被熱した猪口である。11は瓦質土器の脚付火鉢である。15は手鏡である。栗橋宿では出土例が少ない。16は北宋銭で篆書の聖宗元

寶である。二次穿孔が施されている。17は寛永通宝の四文銭である。

水塚下第3号焼土遺構（第108図）

D 7-h 2 グリッドに位置する。水塚下第4号土壙、水塚下第2・4号土壙より新しい。平面形態は橢円形に近い。北側に角礫が見られるが関連性は不明である。遺物は極めて少なく、図示し得るもののがなかった。

水塚下第4号焼土遺構（第108図）

D 7-h 2 グリッドに位置する。水塚下第4号土壙より新しく、水塚下第3号焼土遺構より古い。平面形態は不整形である。下部に灰が薄く堆積する。ピット状の小さな凹みが見られる。出土遺物は第109図の12に肥前系磁器の広東碗を図示した。

（9）土壙

土壙は54基が検出された。位置・規模等は第32表に、遺構図は第110～116図に示した。第1～13号土壙が位置する区画は、第1号溝跡を挟んで南側に吉田家水塚があり、絵図面との対比はかなり実態に即していると考えられる。第4・5号土壙など、職種の特定に至る遺構も見つかっている。以下に多量の遺物が出土した第4・5・12号土壙、第一面最古期の第30号土壙について記す。

第4号土壙（第110図）

D 7-g 1・2 グリッドに位置する。第4～12号土壙は極めて激しく重複しており、第4号土壙が最も新しい。長軸方向N-67°-Eを示す隅丸長方形の土壙であり、遺構の深さは浅い。小壺類を中心とした多量の陶磁器が出土し、揃いの品が多く見られる。

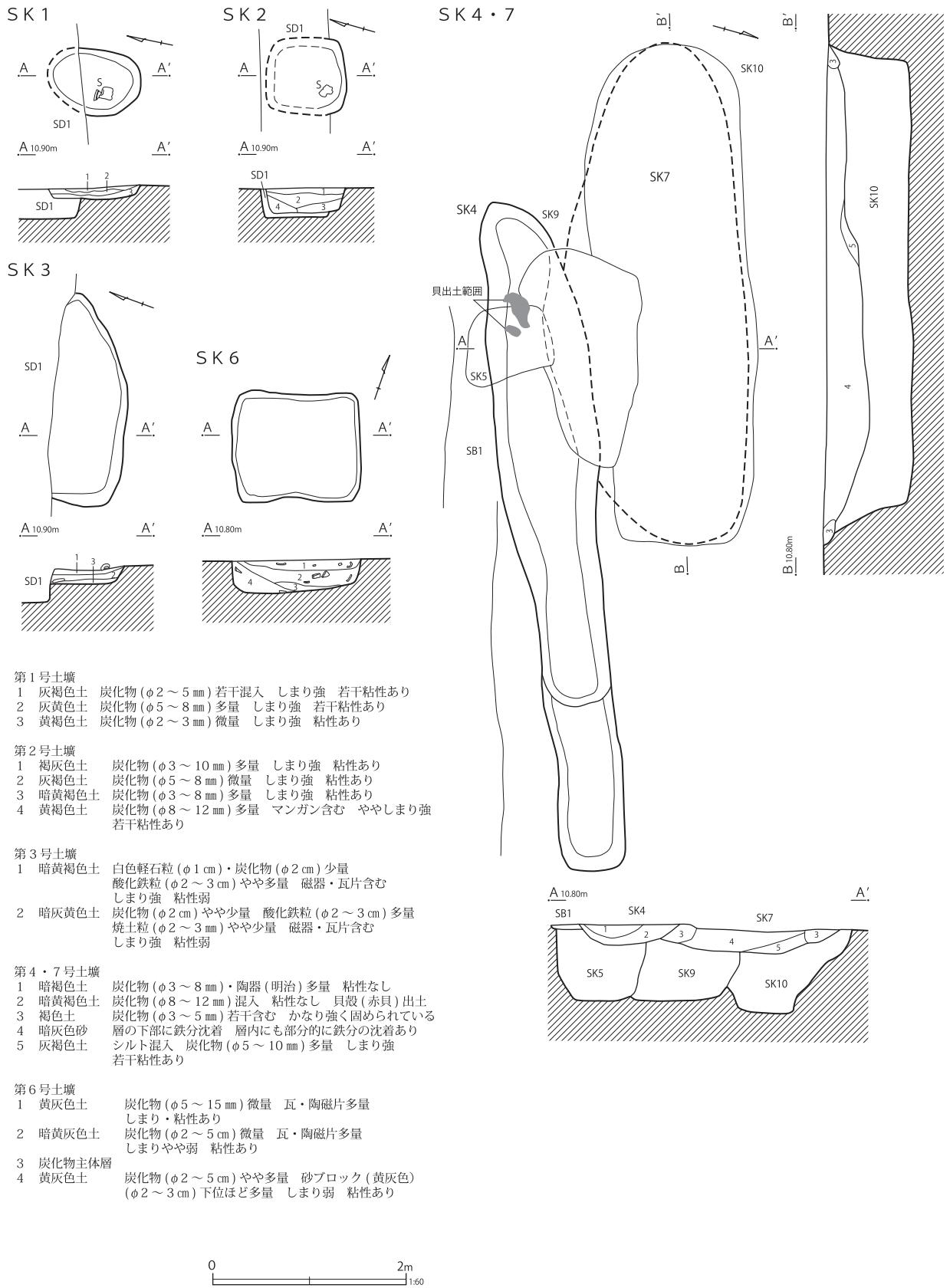
出土遺物は第117～119図の11～56に陶磁器を示した。11は瀬戸美濃系磁器の端反碗で外面

第32表 第一面土壙一覧表

単位：m

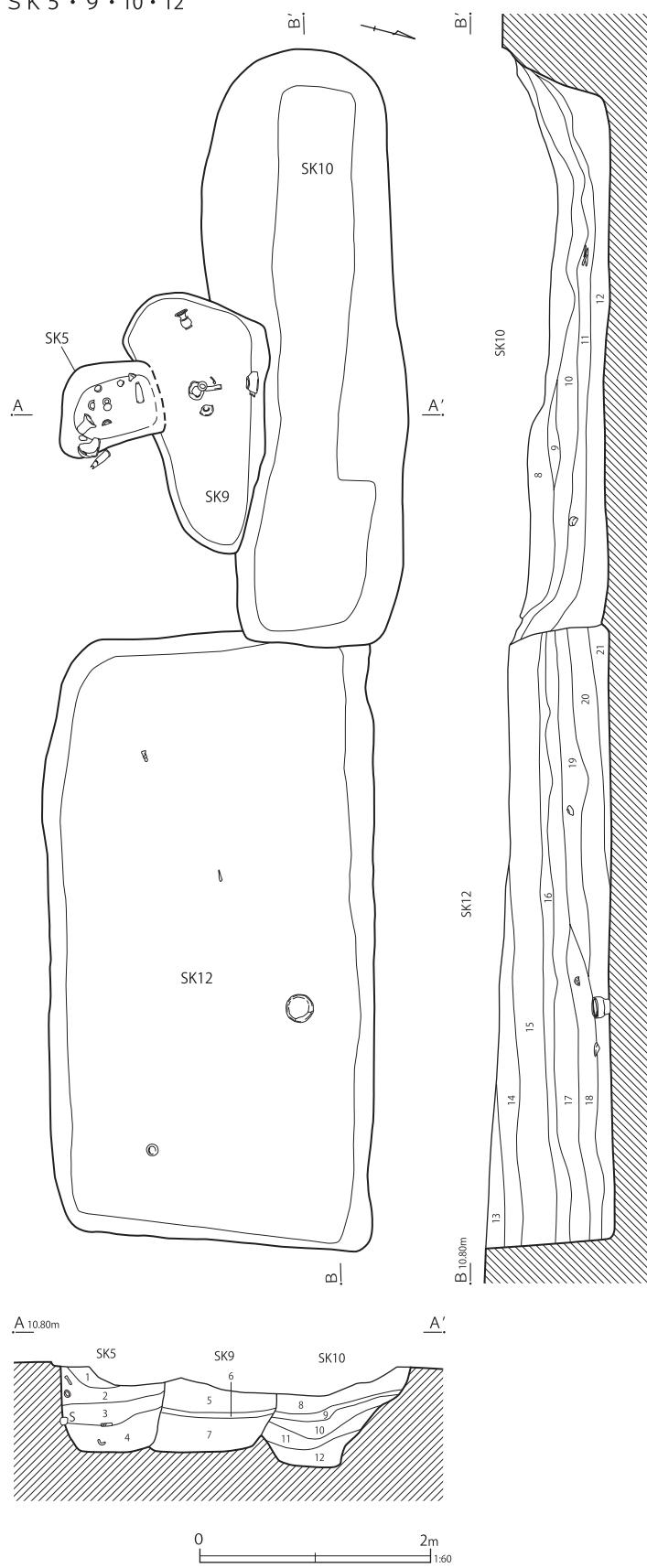
番号	グリッド	形態	長軸	短軸	深さ	方位	備考
1	D7-g2	橢円形	[0.98]	0.68	0.13	N-3°-E	SD1より新しい
2	D7-g2	隅丸方形	[0.84]	0.79	0.26	N-17°-W	SD1より新しい
3	D7-g1	不明	2.19	(0.77)	0.16	N-71°-E	SD1より古い
4	D7-g1・2	隅丸長方形	6.96	[1.07]	0.11	N-67°-E	SB1・SK7より新しい

番号	グリッド	形態	長軸	短軸	深さ	方位	備考
5	D7-g1	不整形	0.94	0.75	(0.74)	N - 31° - W	SB1・SK4より古い、SK9より新しい
6	D6-g10・D7-g1	長方形	1.33	1.16	0.33	N - 69° - E	硬化範囲
7	D7-g1	長楕円形	[5.17]	[1.84]	0.26	N - 73° - E	SK4より古い
8	D7-g1	隅丸長方形	2.34	1.32	0.54	N - 72° - E	SB1・SK39③より新しい
9	D7-g1	不整形	2.32	1.20	(0.63)	N - 61° - E	SK4・5・7より古い、SK10より新しい
10	D7-g1	隅丸長方形	5.18	1.57	0.87	N - 72° - E	SK7・9より古い、SK12より新しい
11	D7-g1	不整形	2.53	2.40	0.63	N - 68° - E	SK9・10より古い
12	D7-g1・2	長方形	5.30	2.87	1.10	N - 71° - E	SK4・7・10より古い
13	D7-g1	不明	(1.95)	(1.19)	0.92	N - 16° - W	SK9・10・12より古い
14	D6-c・d10	楕円形	0.94	0.87	0.42	N - 10° - E	コンクリート基礎上有り
15	D6-d10	隅丸長方形	1.18	0.66	0.13	N - 67° - E	杭跡上有り
16	D6-d9	楕円形	(0.79)	0.61	0.21	N - 34° - W	SD4より古い
17	D6-d10	隅丸方形	0.60	0.52	0.29	N - 19° - W	SD4より古い
18	D6-c10	楕円形	2.24	1.45	0.17	N - 29° - W	
19	D6-c10	隅丸長方形	1.33	0.83	0.14	N - 64° - E	
20	D6-c8	隅丸長方形	2.13	0.82	0.36	N - 70° - E	
21	D6-b10	長楕円形	1.67	0.87	0.25	N - 20° - W	
22	D6-b10	隅丸長方形	1.82	0.72	0.29	N - 75° - E	
23	D6-b・c9	隅丸長方形	1.23	0.91	0.22	N - 67° - E	
24	D6-b・c9	長方形	1.54	1.31	0.24	N - 27° - W	
25	D6-d10・D7-d1	隅丸長方形	1.25	0.54	0.09	N - 77° - E	
26	D6-e9	隅丸長方形	1.71	0.62	0.34	N - 79° - E	
27	D6-d9・10	隅丸方形	1.38	1.19	0.35	N - 77° - E	基礎2より古い
28	D6-b・c8	不整形	2.12	1.20	0.79	N - 14° - W	SB12より古い
29	D6-e9	長楕円形	1.87	0.61	0.17	N - 75° - E	
30	D6-d9・10	不明	1.25	0.57	0.12	N - 76° - E	SD4より古い
31	D6-c9	楕円形	1.00	0.85	0.14	N - 87° - E	
32	D6-e9	長楕円形	(1.11)	(0.33)	0.18	N - 72° - E	SD7・SK29より古い
33	D6-e9	長方形	(2.54)	1.88	0.60	N - 71° - E	
34	D6-d9	楕円形	(0.94)	0.84	0.28	N - 9° - W	SB11より古い
35	D7-e1	隅丸長方形	1.94	0.98	0.30	N - 75° - E	SK38より新しい
36	D6-e9	楕円形	[0.87]	[0.77]	0.14	N - 55° - E	SB13より新しい
37	D6-e10	隅丸長方形	1.79	0.92	0.15	N - 20° - W	SB15より古い
38	D6-e10・D7-e1	隅丸長方形	2.88	1.22	0.42	N - 16° - W	SB1・SK35より古い
39-①	D7-e1	不明	(0.45)	0.52	0.21	N - 17° - W	
39-②	D7-g1	隅丸長方形	3.04	0.54	0.17	N - 73° - E	(旧SB3)
201	D7-f1	不整形	1.78	(1.39)	0.59	N - 20° - W	
202	D6-f・g10	長方形	(2.75)	2.53	0.51	N - 69° - E	
203	D6-f10	隅丸長方形	1.39	0.86	0.50	N - 71° - E	SK203・204統合 SK202より古い
205	D7-e1	隅丸長方形	1.84	1.22	0.23	N - 71° - E	
206	D6-f10	不明	0.57	0.22	0.30	N - 69° - E	
207	D6-f10	隅丸長方形	4.32	0.85	0.24	N - 77° - E	SK208・209より新しい
208	D6-f10	正方形	1.28	1.27	0.88	N - 72° - E	SK207・209より古い
209	D6-f10	隅丸長方形	2.83	1.24	0.50	N - 18° - W	SK207より古い、SK208より新しい
210	D6-f10	不明	1.43	(0.70)	0.23	N - 72° - E	
212	D6-f10	不整形	1.97	1.47	0.75	N - 3° - E	
213	D7-f1	楕円形	0.72	0.65	0.13	N - 13° - W	
214	D6-f10・D7-1	隅丸長方形	2.66	1.55	0.22	N - 77° - E	
215	D6-f10	隅丸長方形	(1.40)	0.83	0.18	N - 21° - W	SK207より古い
水塚下1	D7-h2	不明	[2.50]	(0.60)	(0.07)	N - 80° - E	焼土遺構3・4より古い



第110図 土壌 (1)

SK 5・9・10・12



第5号土壤

- 1 暗褐色土 下部に1~2cmの厚さで炭化物堆積 焼土混入 陶器多量
 2 暗黄褐色土 炭化物(Φ5~8mm)多量混入 焼土混入 瓦片多量
 3 暗褐色土 炭化物(Φ2~3mm)若干混入 陶器多量 水分多量
 4 灰黑色砂 炭化物(Φ10~20mm)・水分多量

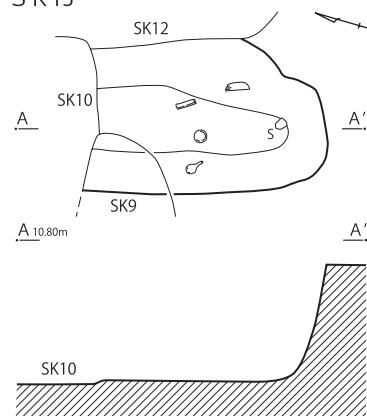
第9号土壤

- 5 灰褐色土 炭化物(Φ8~10mm)若干混入
 6 暗褐色土 木片腐食層
 7 灰黄褐色土 焼土ブロック(Φ3~5mm)多量混入 粘性あり

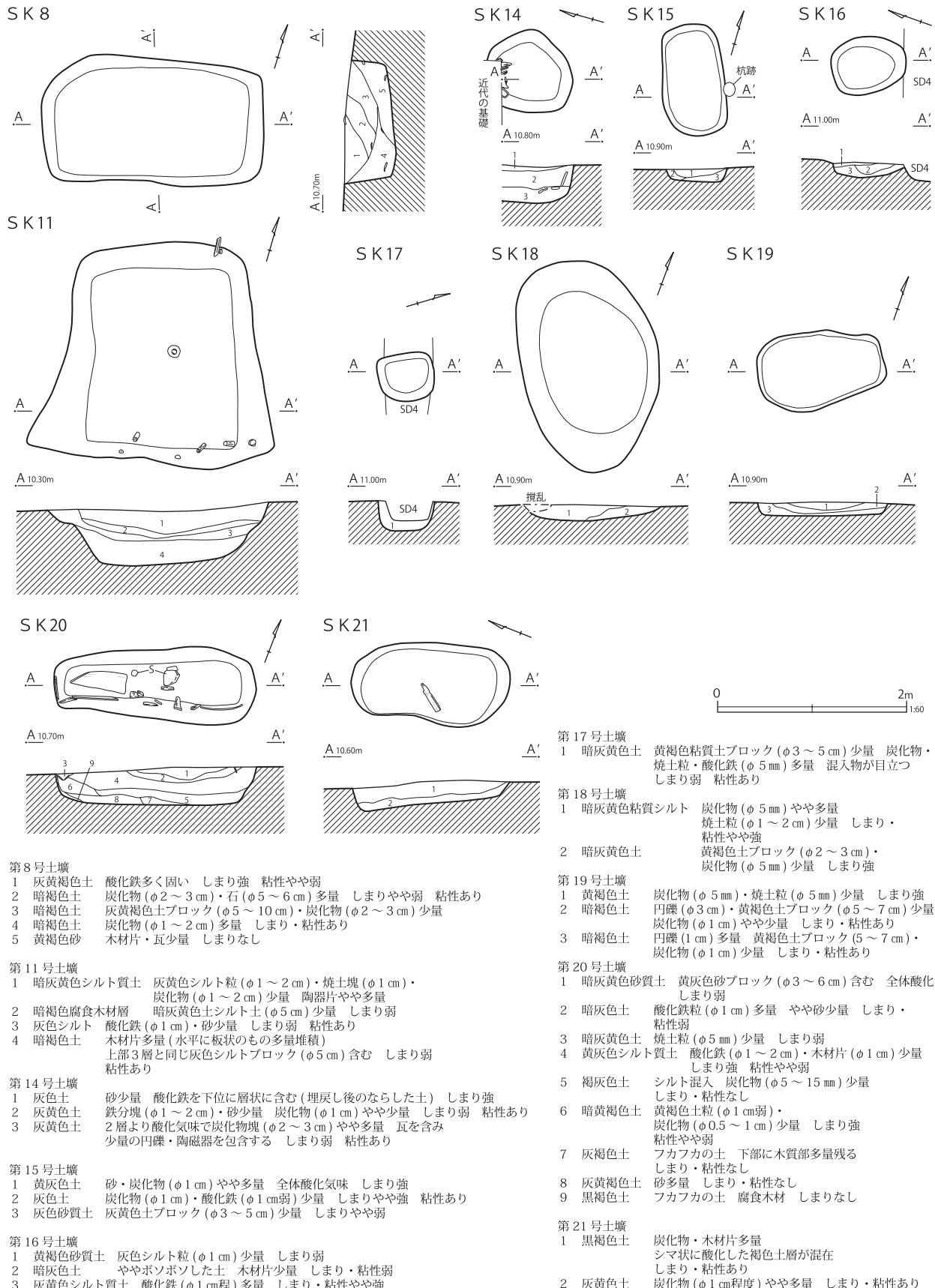
第10号土壤

- 8 褐色土 砂質土 炭化物(Φ3~5mm)少量 鉄分付着多量 しまり強
 9 暗灰色粘土 炭化物(Φ3~5mm)微量 砂が若干混入 しまり強
 10 暗褐色土+炭化物層の混合層 炭化物の混入4割
 11 茶褐色土 木片及び木皮が腐食した層
 12 灰褐色土 木片に混じり数種類下駄が出土
 13 灰褐色砂 木片・水分多量 粘性あり
 14 褐色土 遺構検出面の上部に堆積した層
 15 褐灰色砂 炭化物(Φ3~5mm)・焼土(Φ5~8mm)少量
 16 灰褐色土 砂分多量 整地後に堆積した層 しまり極めて強
 17 褐灰色砂 粘性なし
 18 黒色土 中・下部に鉄分1~2cm沈着 整地後の堆積層
 19 灰黑色土 シルト・炭化物(Φ5~8mm)少量
 20 黑褐色土 第一面より若干古い時期の
 整地層と思われる 若干粘性あり
 21 青褐色土 ほぼ水平に堆積した層
 下部に鉄分(1~2cm厚)沈着
 SK12の直上に堆積した層
 木片多量 焼土の小ブロック(Φ1~2cm)若干混入
 水分多量 陶器・瓦器・土鍋等が多く出土
 陶磁器等の出土多量 しまり強 粘性あり
 木片・木皮多量 陶磁器片・内耳土鍋・
 陶製人形等出土
 木片若干含む 焼土塊等若干出土 しまり強
 粘性あり

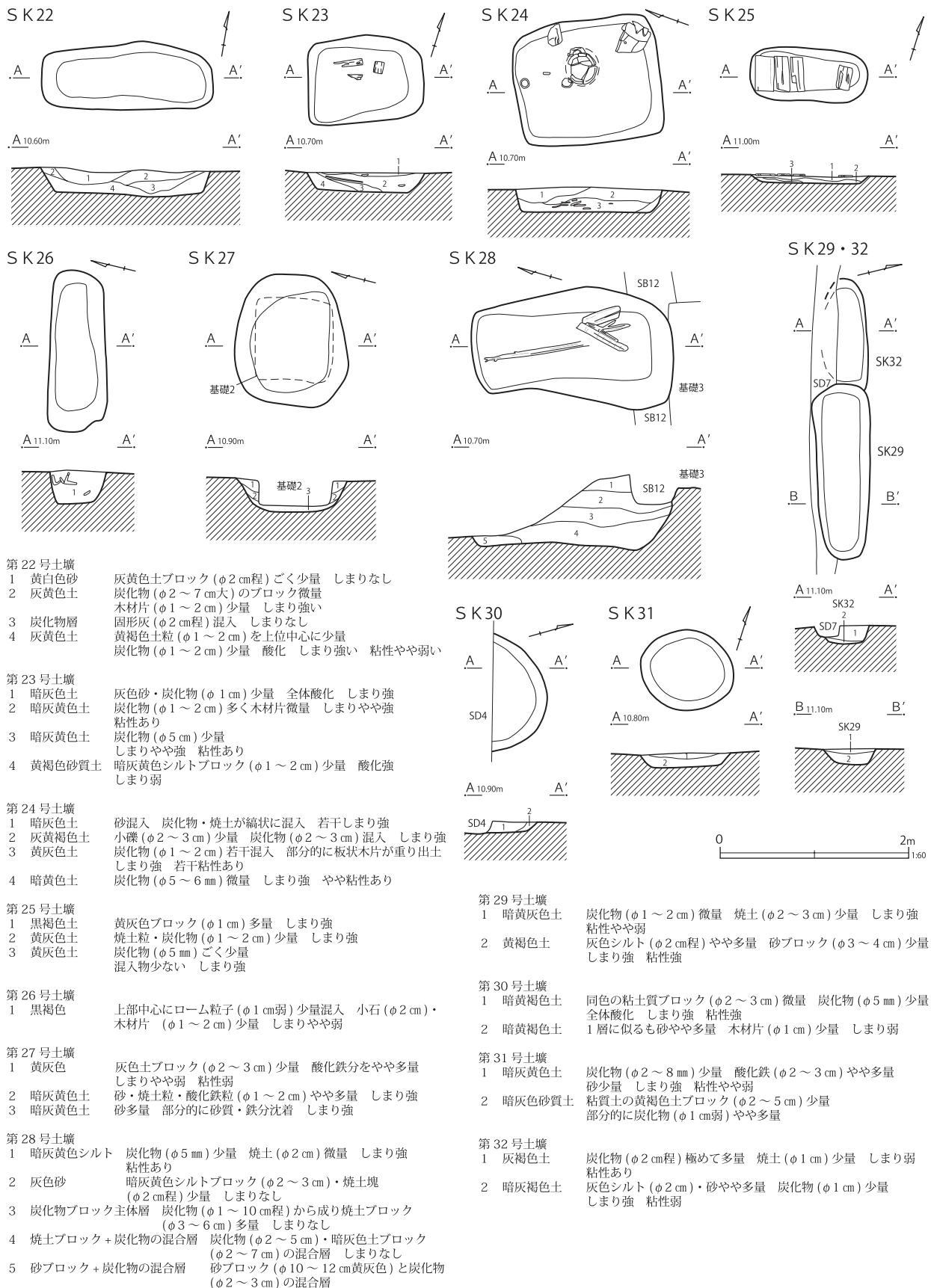
SK 13



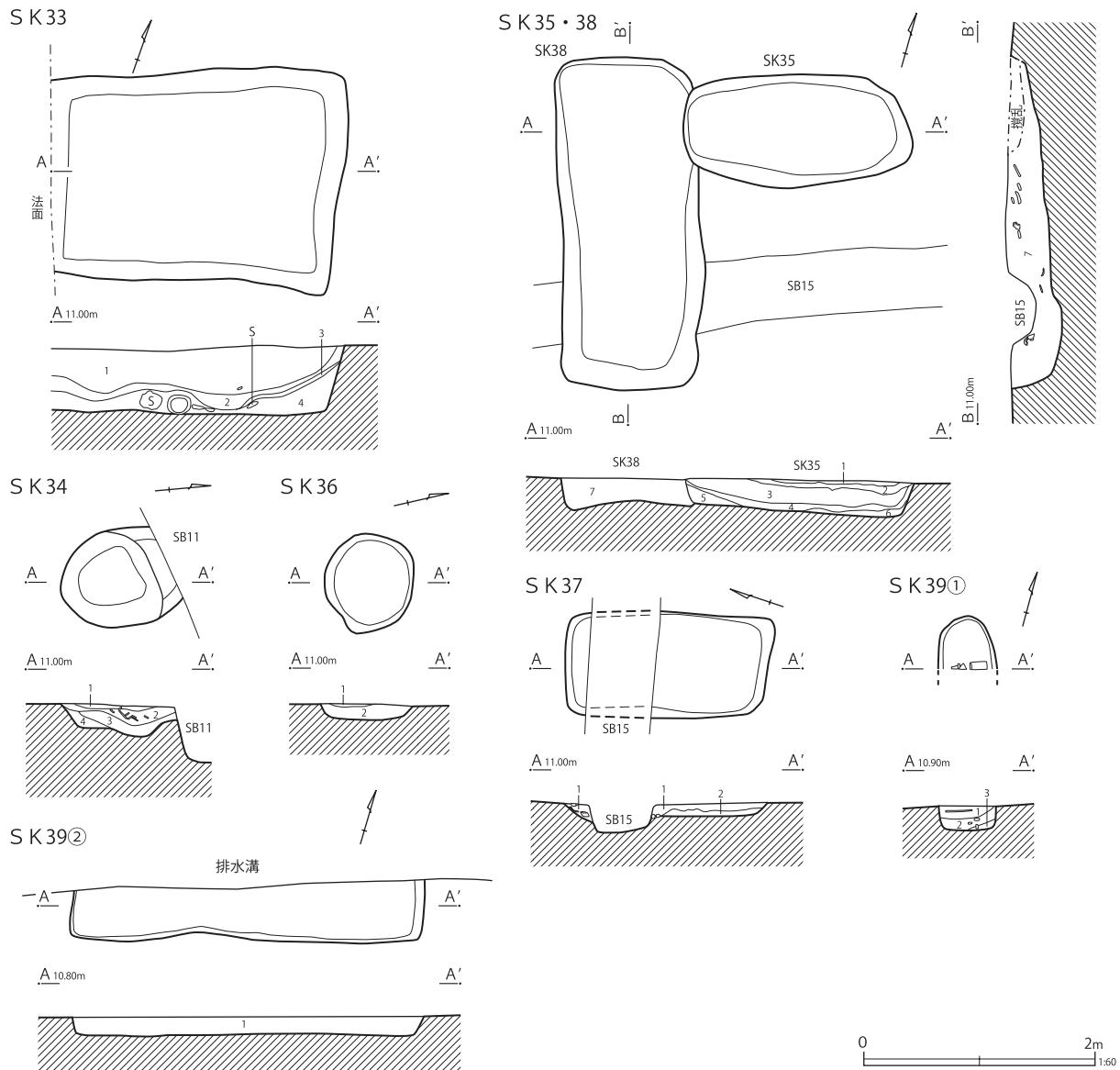
第111図 土壌 (2)



第112図 土壌 (3)



第113図 土壤 (4)



第33号土壤

1 暗褐色土 黄褐色土ブロック ($\phi 3 \sim 5$ cm)・炭化物 ($\phi 1 \sim 2$ cm) 少量
燒土粒 ($\phi 1$ cm) ごく少量 全体酸化 しまりやや弱 粘性あり
2 黒褐色土 炭化物極めて多量 腐食木材堆積 しまり弱
3 炭化物層 若干の腐食木材片を含む
4 暗灰色土 腐食木材・炭化物・コーカス ($\phi 2$ cm程) の小片等が多量混入
上位に鉄分の塊 ($\phi 10$ cm程) 多量 しまり強

第34号土壤

1 暗黄褐色土 炭化物 ($\phi 1 \sim 2$ cm) 多量 燃土が微量混入 しまりやや強
2 褐色土 炭化物 ($\phi 2 \sim 3$ cm) 多量 土器片・陶器片多量出土 しまり弱
3 黄褐色土 砂多量 貝の小片が少量(シジミ)
4 褐灰色土 貝の小片少量(シジミ) しまり強 若干粘性あり

第35号土壤

1 暗褐色土 SB15 を建てる際の整地層か しまり強
2 暗褐色土 しまり弱 粘性あり
3 灰黄色土 ガチガチに固まつた層 層内に鉄分がかなり沈殿している
4 茶褐色土 ゲズゲズの土 木片等が腐った層
5 灰褐色土 鉄分の沈着多量 しまり強 粘性あり
6 褐灰色土 炭化物 ($\phi 5 \sim 10$ mm) 多量 しまり強 粘性あり

第38号土壤

7 暗褐色土 炭化物 ($\phi 2 \sim 4$ cm) やや多量 鉄分塊 ($\phi 5 \sim 10$ cm) 少量
瓦・陶器・ガラス・木材多量 全体酸化 しまり強 粘性弱

第36号土壤 覆土

1 燃土層(赤褐色) 下端に炭化物層 ($\phi 2 \sim 3$ mm) あり しまり強
2 灰褐色土 炭化物 ($\phi 1 \sim 4$ cm) 微量 黄灰色土ブロック ($\phi 3$ cm程)・
貝殻片 ($\phi 1$ cm弱) 少量 しまり強 粘性弱

第37号土壤

1 暗灰色土 酸化鉄の塊 ($\phi 2 \sim 3$ cm) 多量 炭化物 ($\phi 1$ cm)・
砂利 ($\phi 1$ cm程) 少量 全体酸化 しまり強 粘性やや弱
2 灰色土 黄灰色シルトブロック ($\phi 2 \sim 3$ cm) 少量
炭化物 ($\phi 1 \sim 2$ cm) やや多量 部分的に酸化
しまりやや強 粘性あり

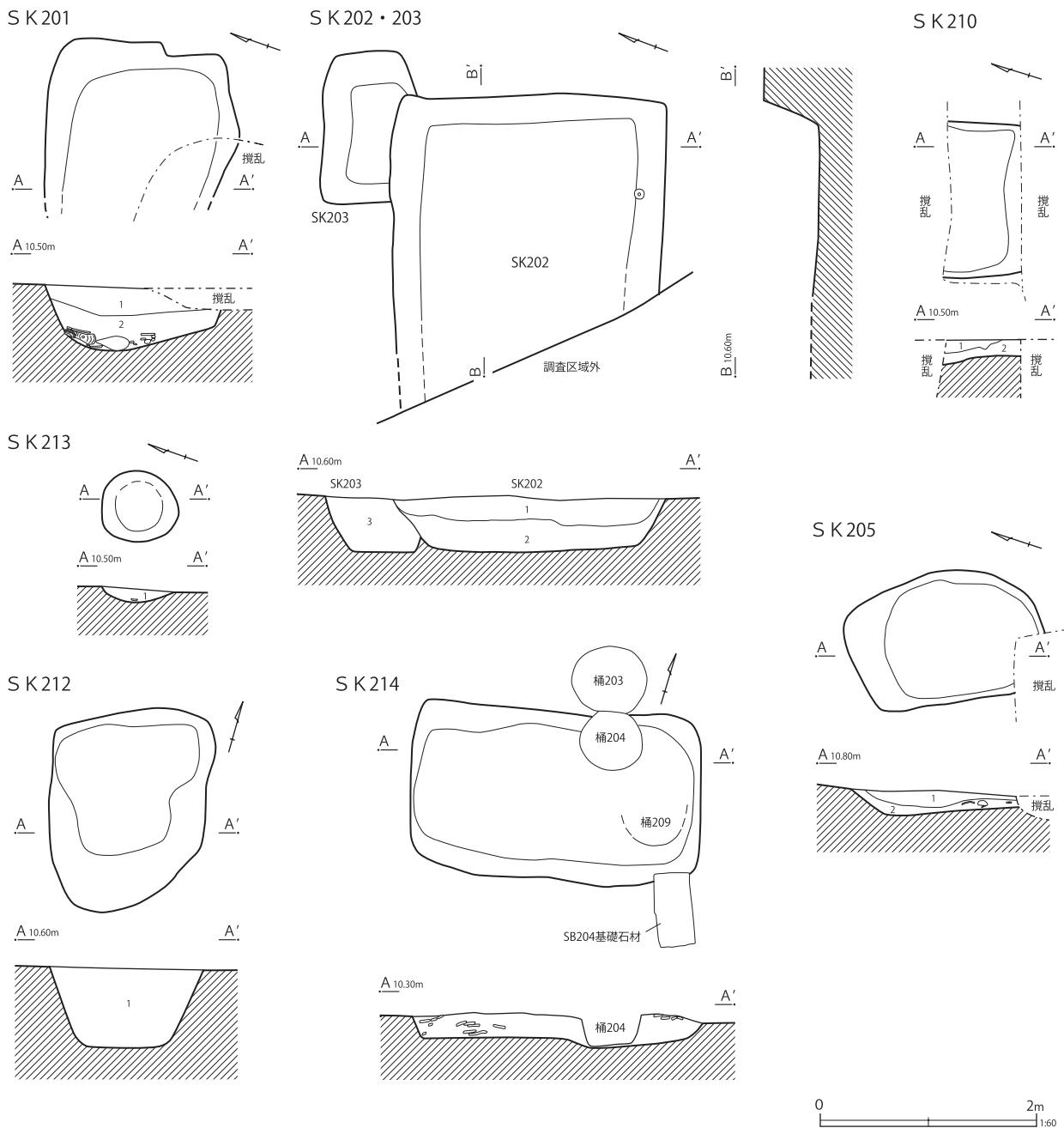
第39-①号土壤

1 暗灰色土 黄灰色シルトブロック ($\phi 2 \sim 3$ cm)・炭化物 ($\phi 1$ cm)・
鉄分粒 ($\phi 1 \sim 2$ cm) 少量 しまり弱
2 暗黄灰色土 炭化物 ($\phi 2 \sim 3$ cm)・瓦多量 しまり弱
3 暗黄灰色土 ブロック状 ($\phi 2 \sim 4$ cm)・炭化物 ($\phi 2 \sim 3$ cm) 多量
しまりやや強

第39-②号土壤

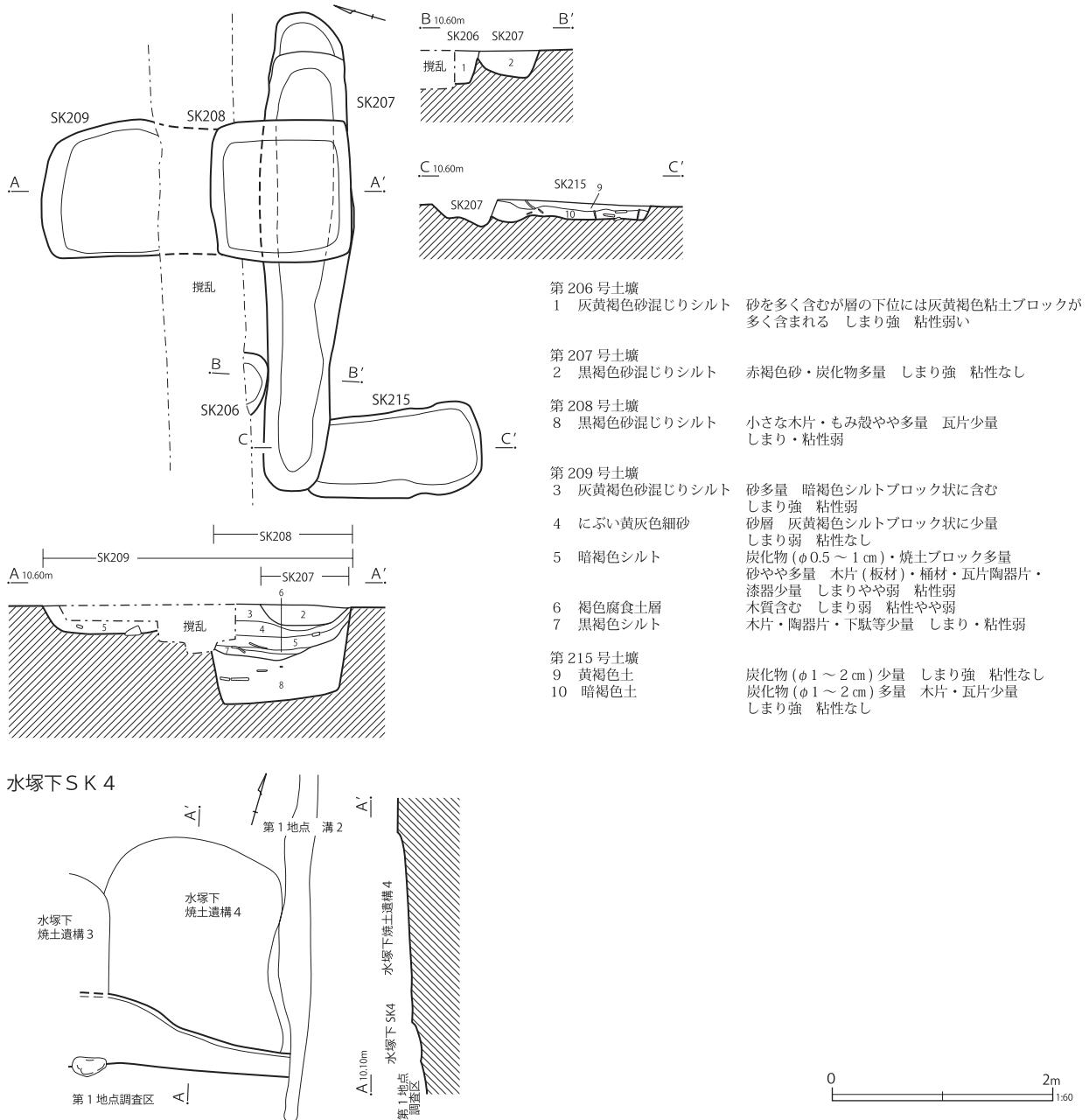
1 暗褐色土 磨 ($\phi 1 \sim 5$ mm) 微量 炭化物多量
空隙目立つ しまり弱 粘性ややあり

第114図 土壌 (5)



第115図 土壤 (6)

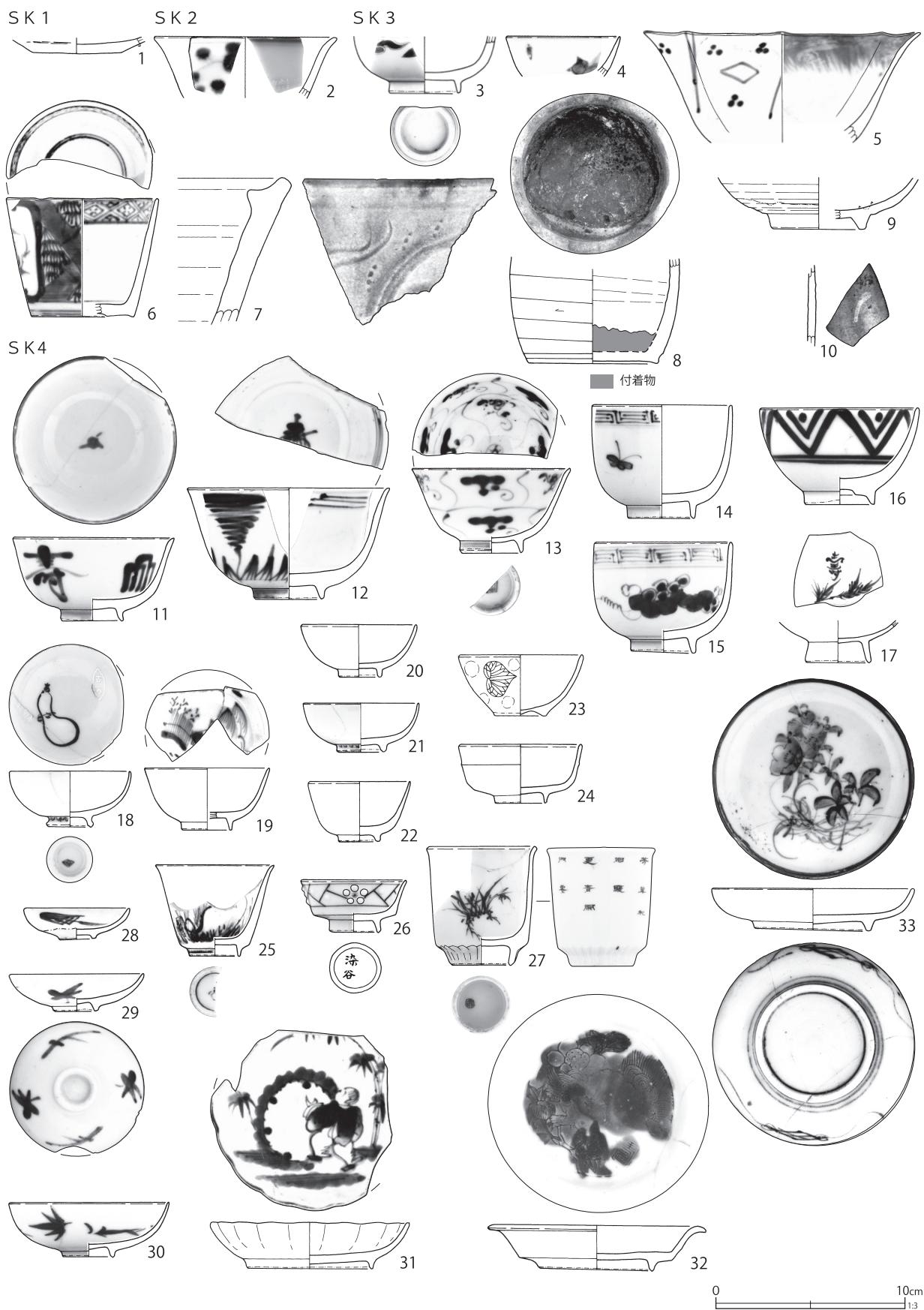
SK 206・207・208・209・215



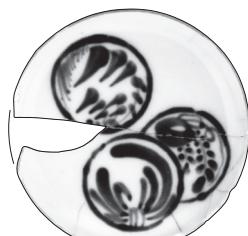
第116図 土壌 (7)

に染付、口縁に口紅が施されている。16～30は壺である。16は瀬戸美濃系磁器のクロム釉青磁丸腰湯呑で、外面は酸化コバルト染付である。17は肥前系磁器で高台が高く盃状を呈している。18～27は瀬戸美濃系磁器で、18は卵殻手壺である。内面に青色の上絵付を施し、金彩で「古河」と書かれている。21は卵殻手壺で、同品が他に1個体ある。23は型成形で外面に陰刻が施されてい

る。24は1条の突帯を有し、同品が他に14個体見られる。26は外面に白盛り、黒・黄で絵付けを施している。高台内には染谷の文字が見られる。27は高台外周に削り痕の残る筒形壺で、外面に漢詩文が見られる。28～30は扁平形の壺で、紅壺の可能性がある。外面は酸化コバルト染付である。31～36は皿類である。33は酸化コバルト染付が施された瀬戸美濃系磁器の輪高台丸皿である。同



第117図 土壌出土遺物 (1)



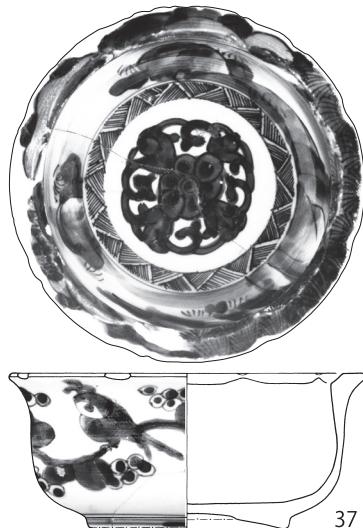
34



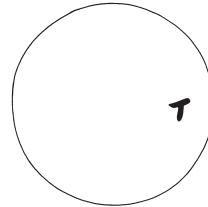
35



36



37

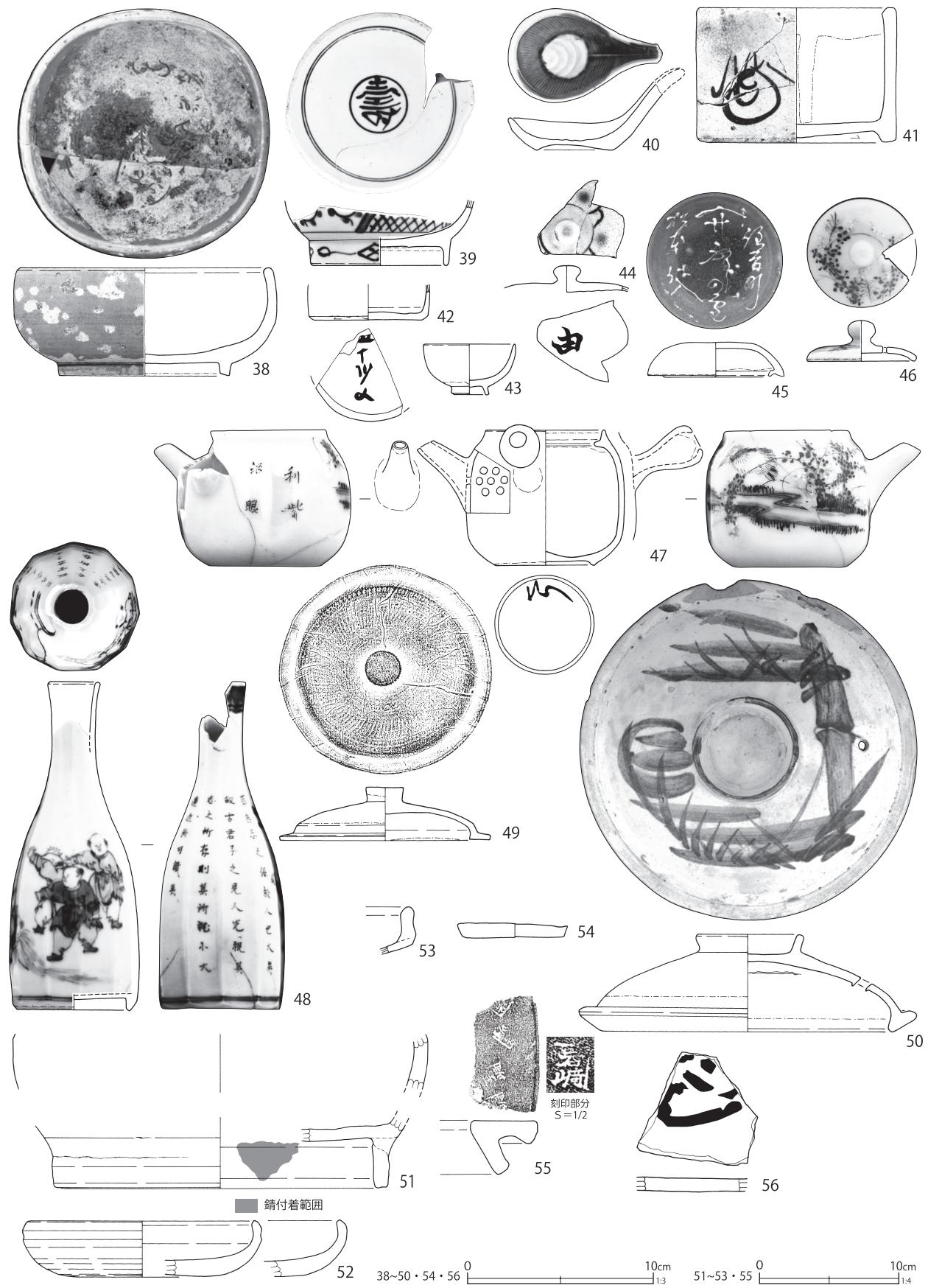


38



0 10cm 1:3

第118図 土壙出土遺物 (2)

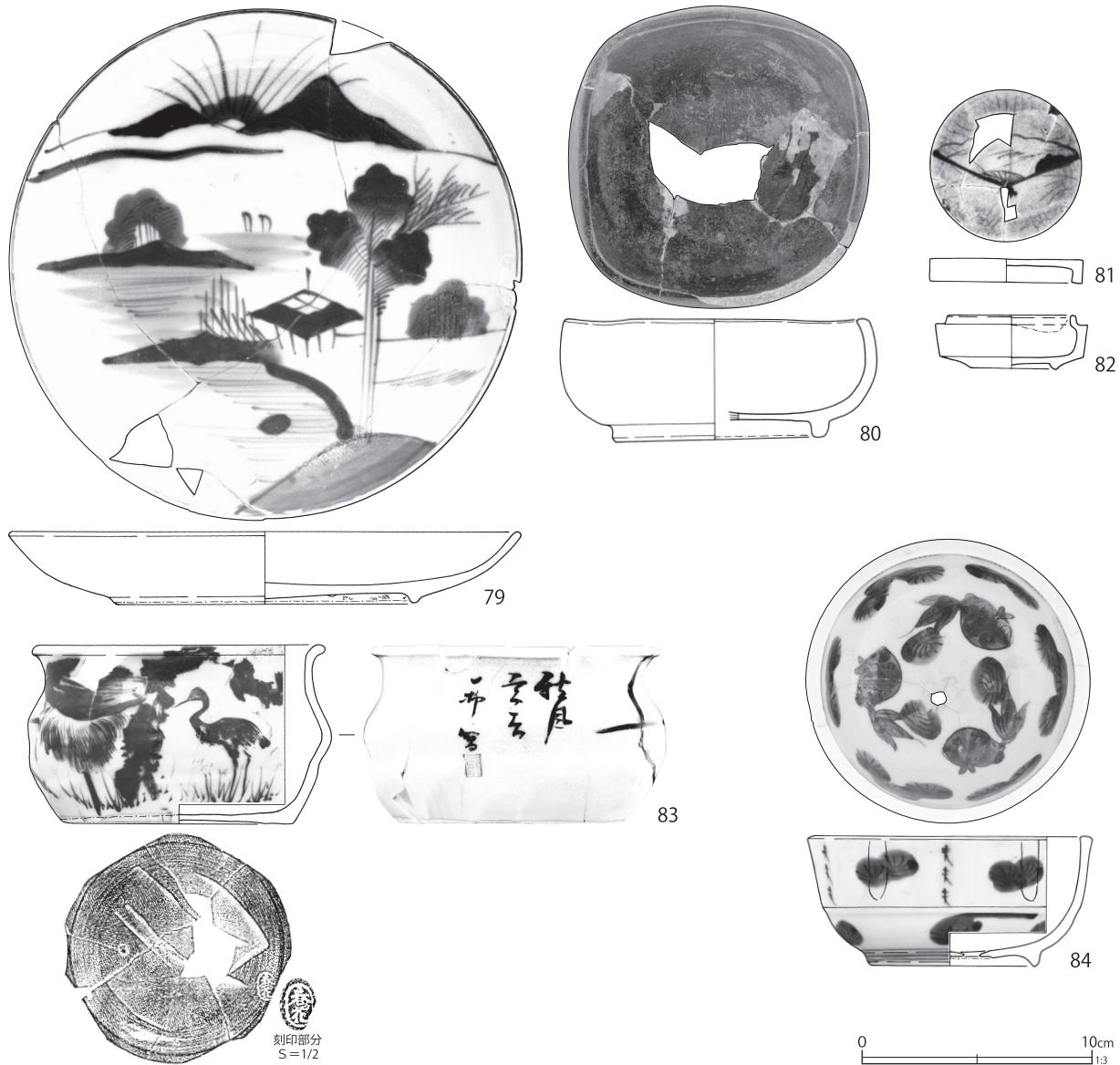


第119図 土壌出土遺物 (3)

SK 5



第120図 土壌出土遺物 (4)

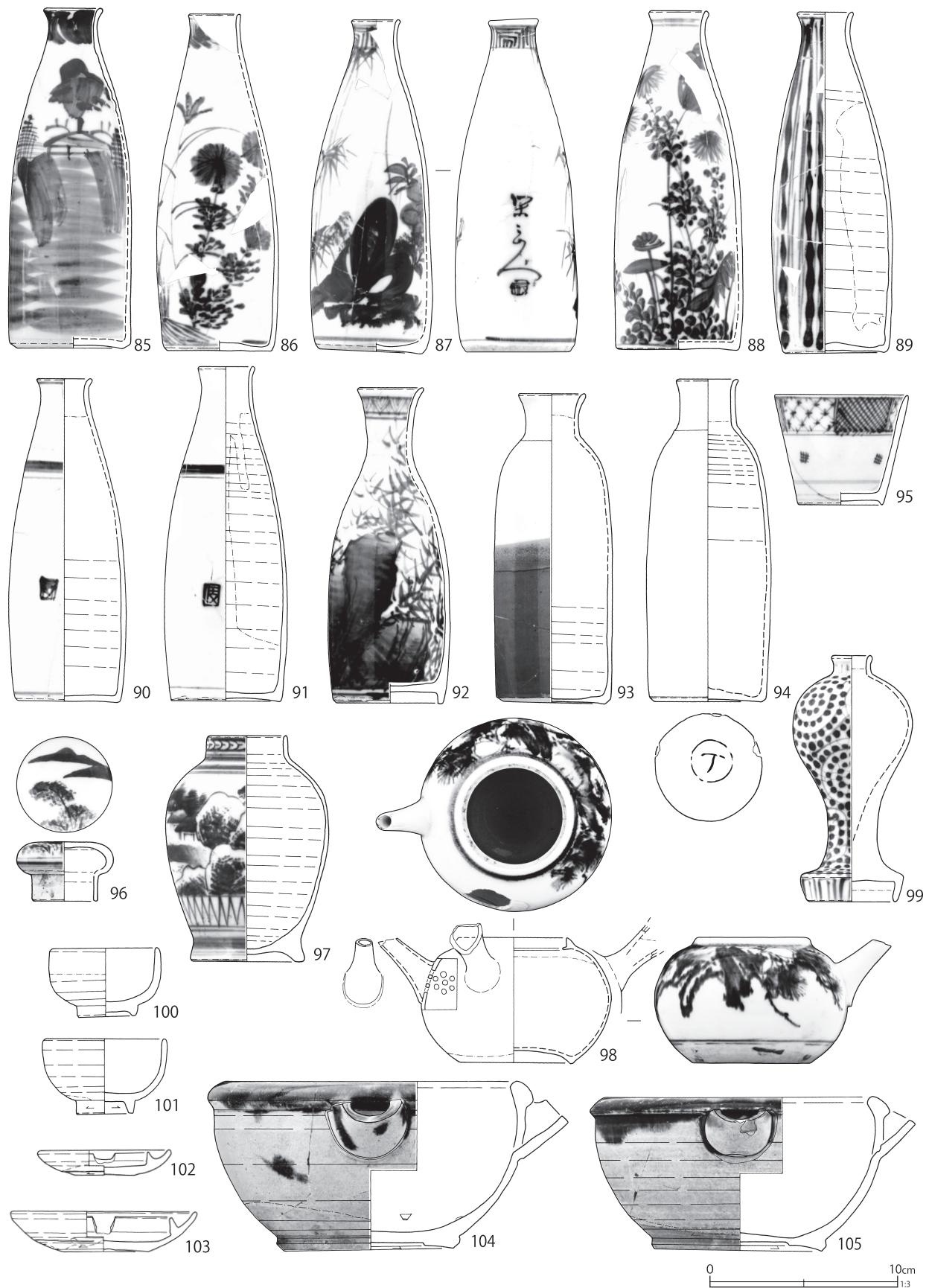


第121図 土壙出土遺物（5）

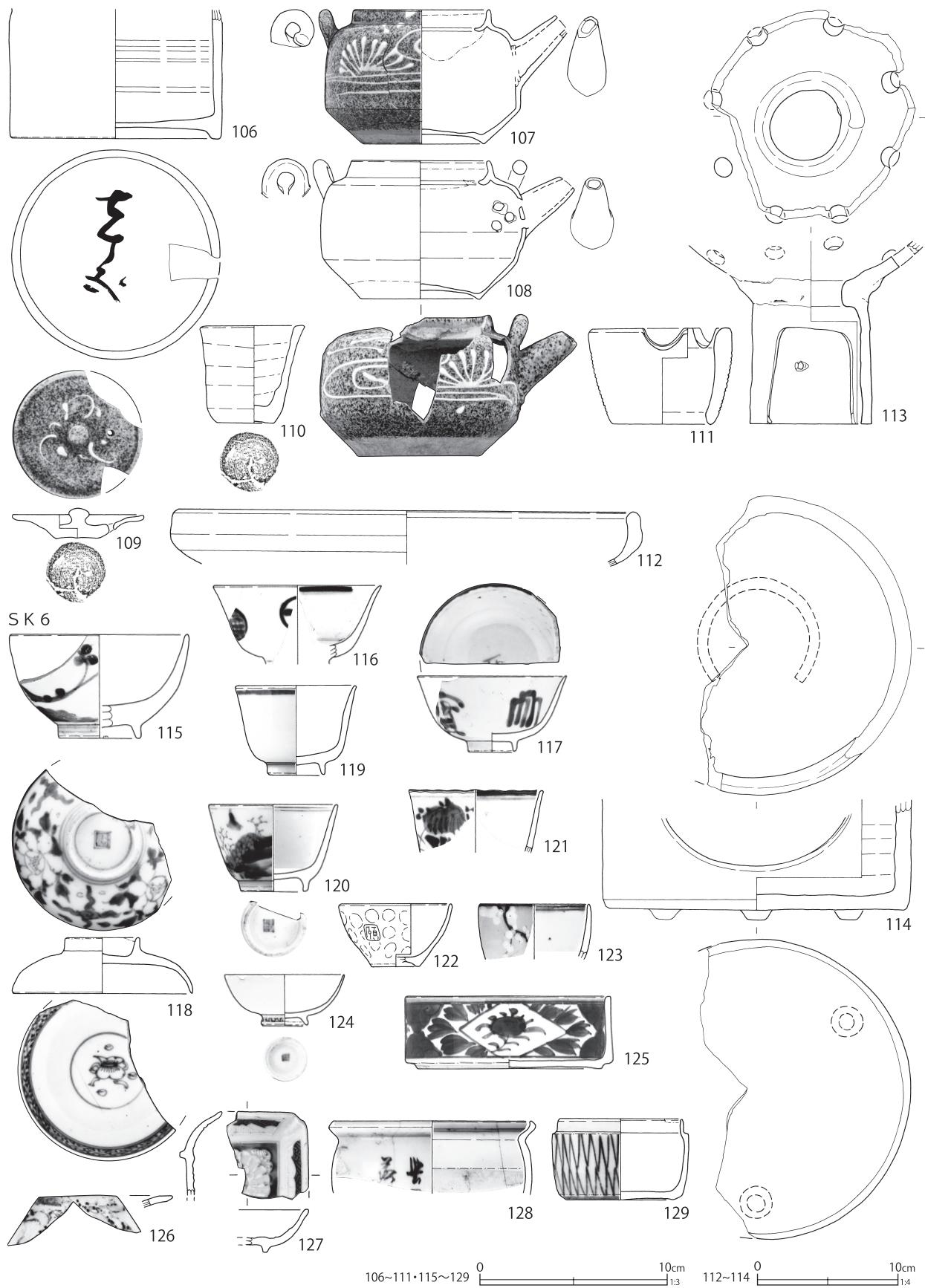
品が他に8個体分あり、第5号土壙にも同品がある。36は肥前系磁器の輪高台型皿である。高台内には「キ七二」の焼き継ぎ印、「ヤマ」に「吉」の釘書きが書かれている。38は淡路珉平系の鉢で全面に黄色の釉薬が施釉されるが、表面の剥離が著しく、内面に陰刻が部分的に残る。

42は京都信楽系の爛徳利、44は急須の蓋である。いずれも底部に墨書が見られ、44は「由」と判読できる。45は飯能系陶器で、合子の蓋である。栗橋宿跡では、既に報告済みの栗橋宿跡第2・4地点（埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2019）で

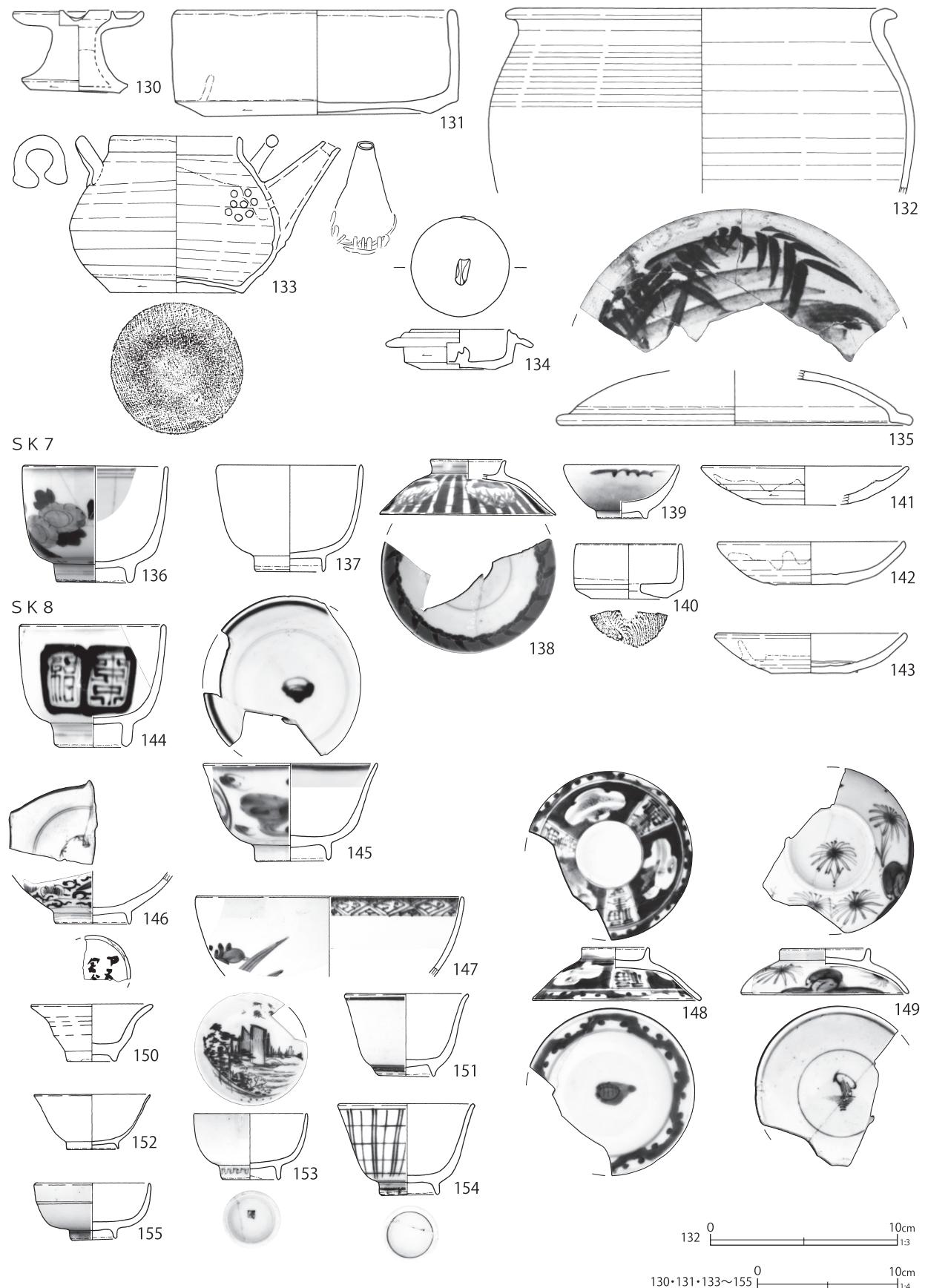
飯能系土瓶の底部が出土しており、2例目となるが完形品且つ飯能系陶器の特徴であるイッチン描きが見られる製品は初事例である。飯能焼原窯跡第6次調査（飯能市 2007）に同様の製品が見られる。飯能系陶器は江戸や川越地域では比較的流通が活発であるが、日光街道沿いでは出土例が見られない。飯能系陶器の流通の北限を示す資料の可能性がある。外面は暗緑色の灰釉であり、イッチン描きは「住吉町 ヤマサ ふじの雪 松本仕入れ」と判読できる。対応する身は見つかっていない。48は瀬戸美濃系磁器の爛徳利である。体



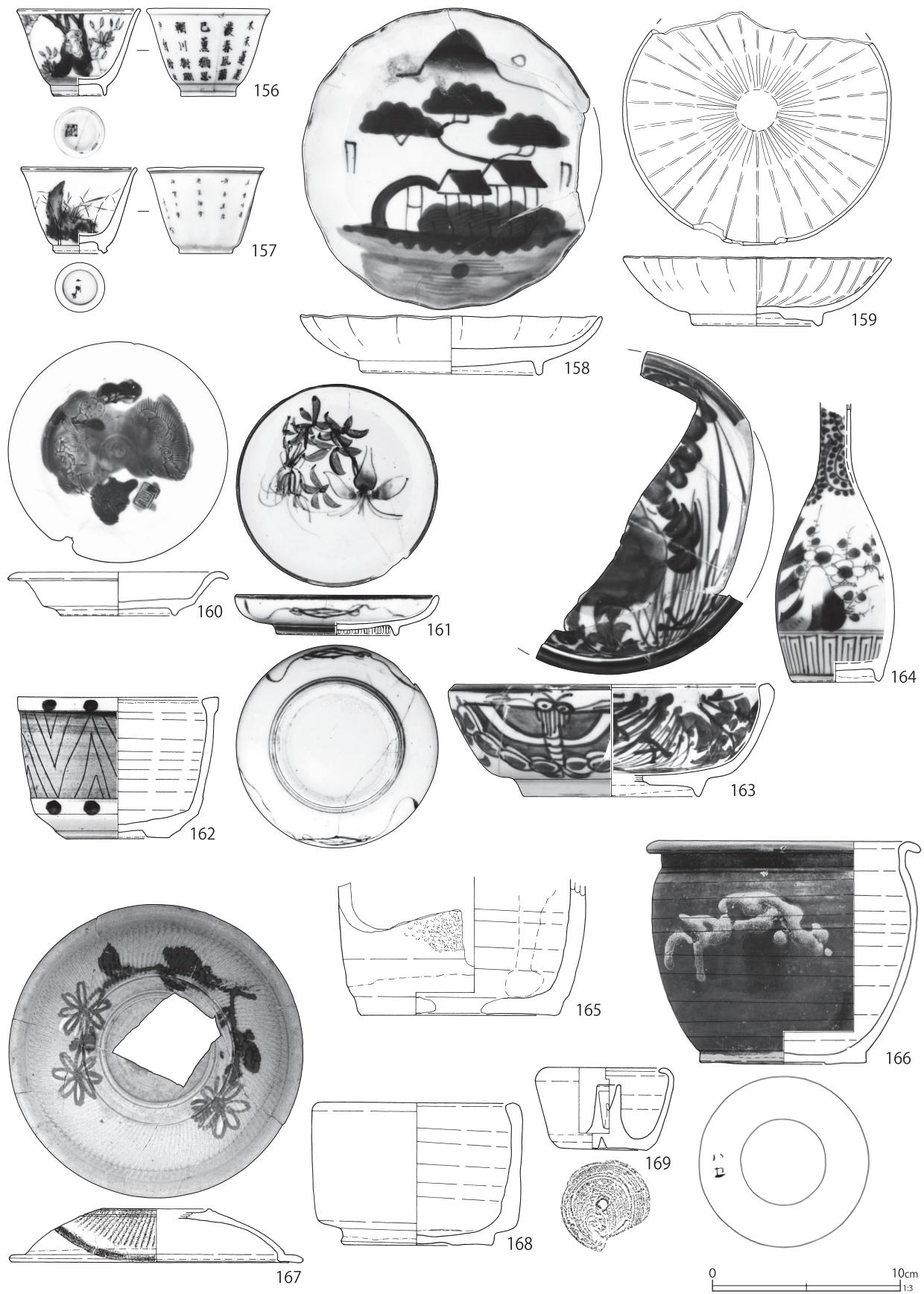
第122図 土壙出土遺物（6）



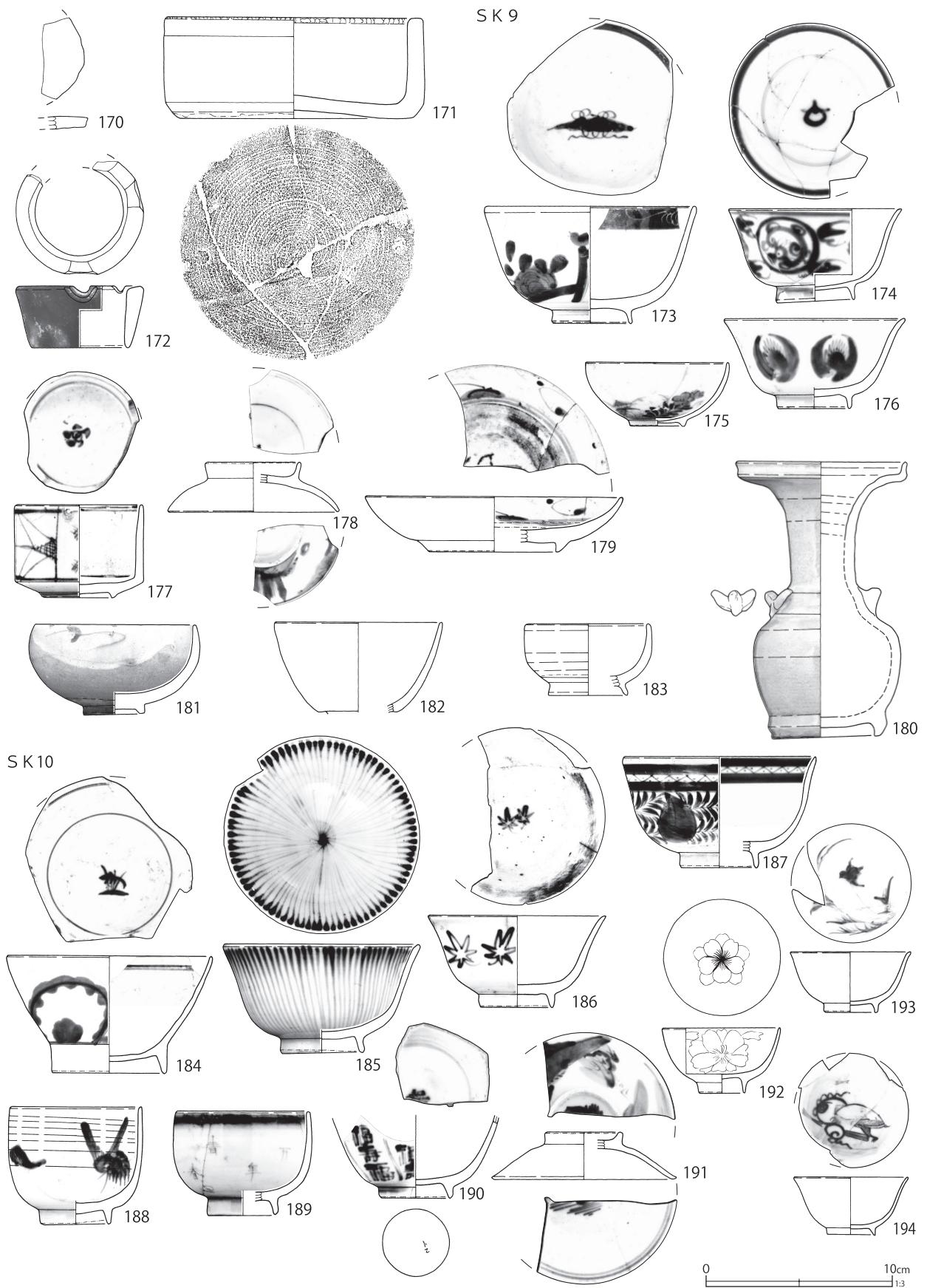
第123図 土壌出土遺物 (7)



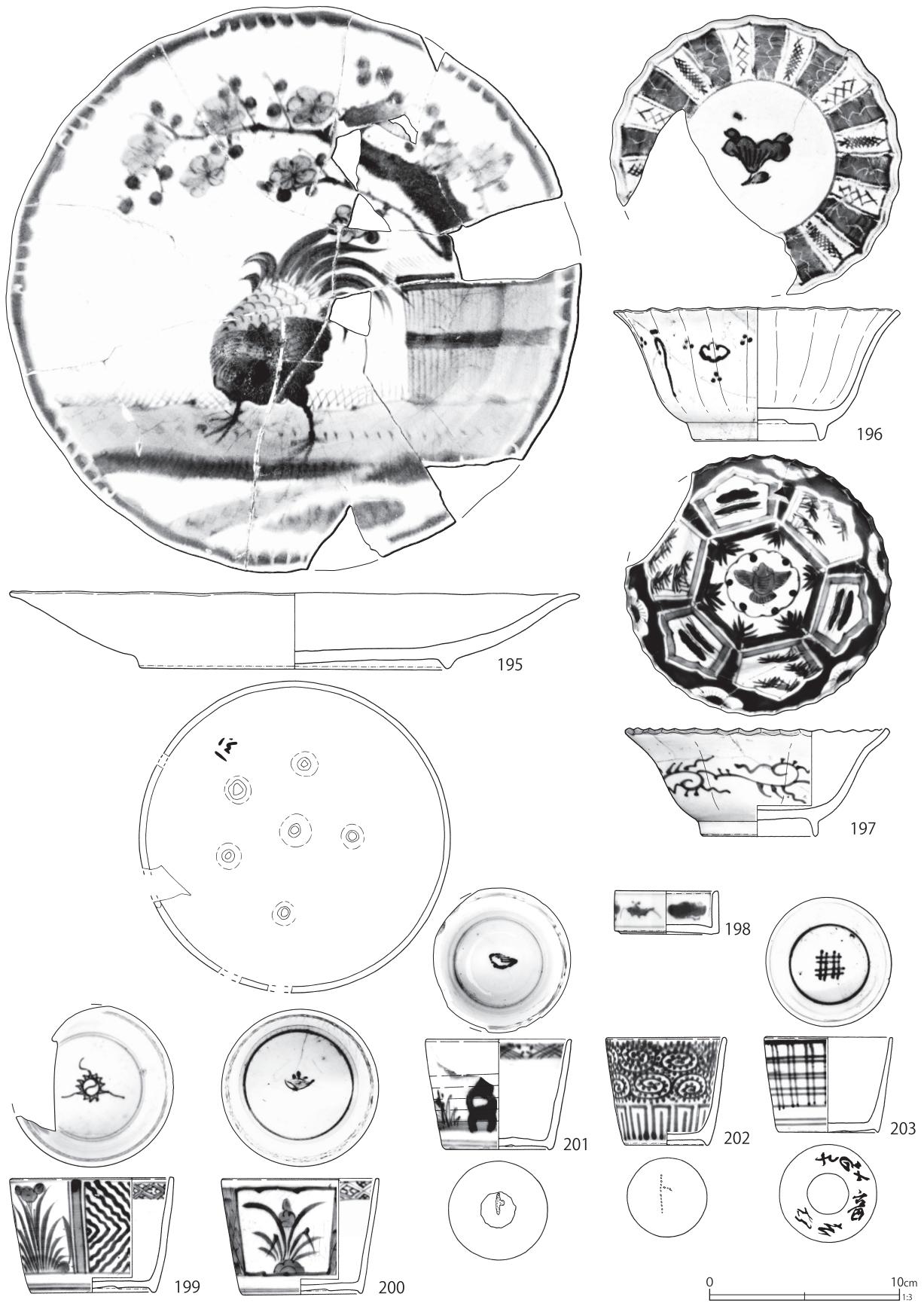
第124図 土壌出土遺物 (8)



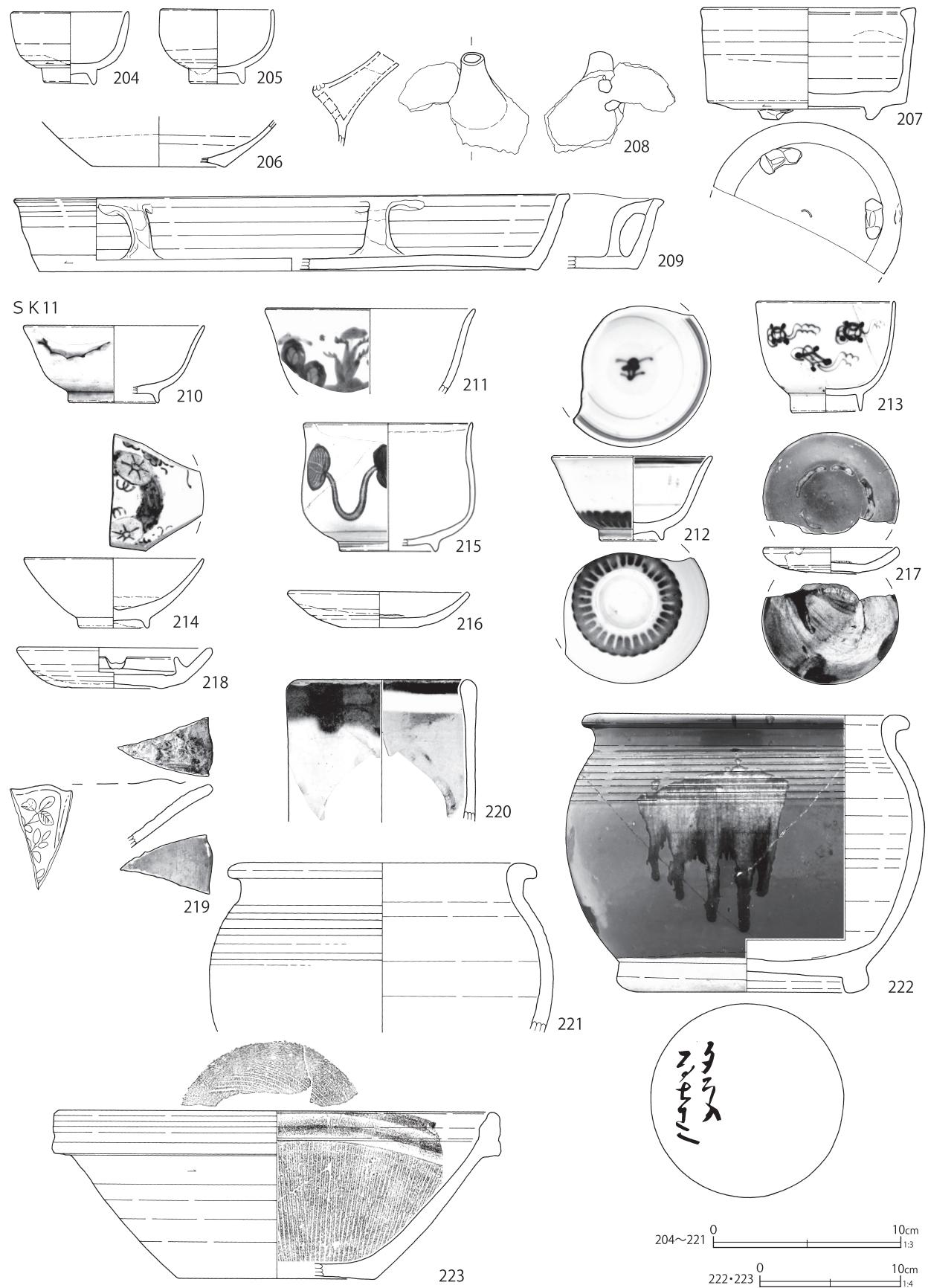
第125図 土壌出土遺物 (9)



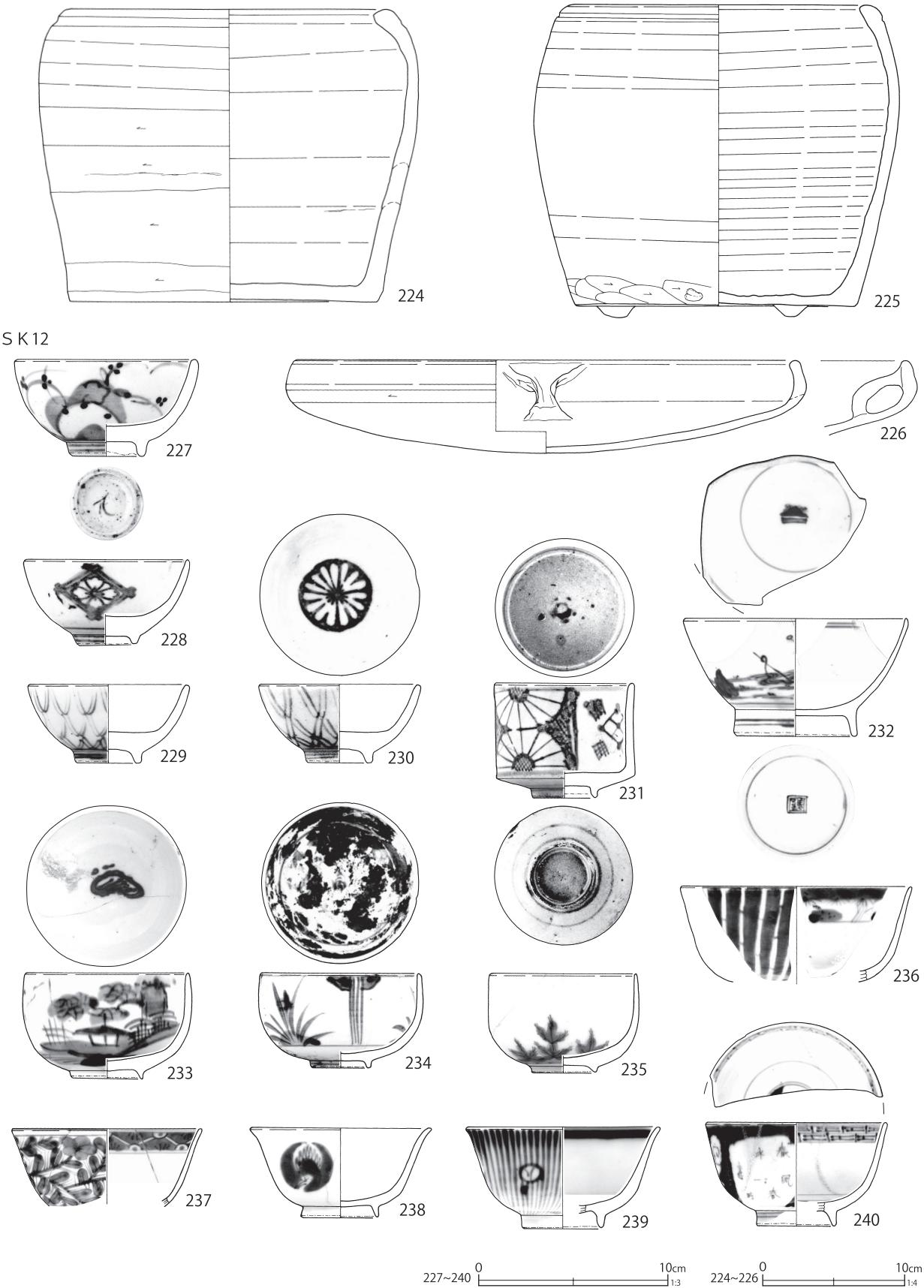
第126図 土壌出土遺物 (10)



第127図 土壤出土遺物 (11)



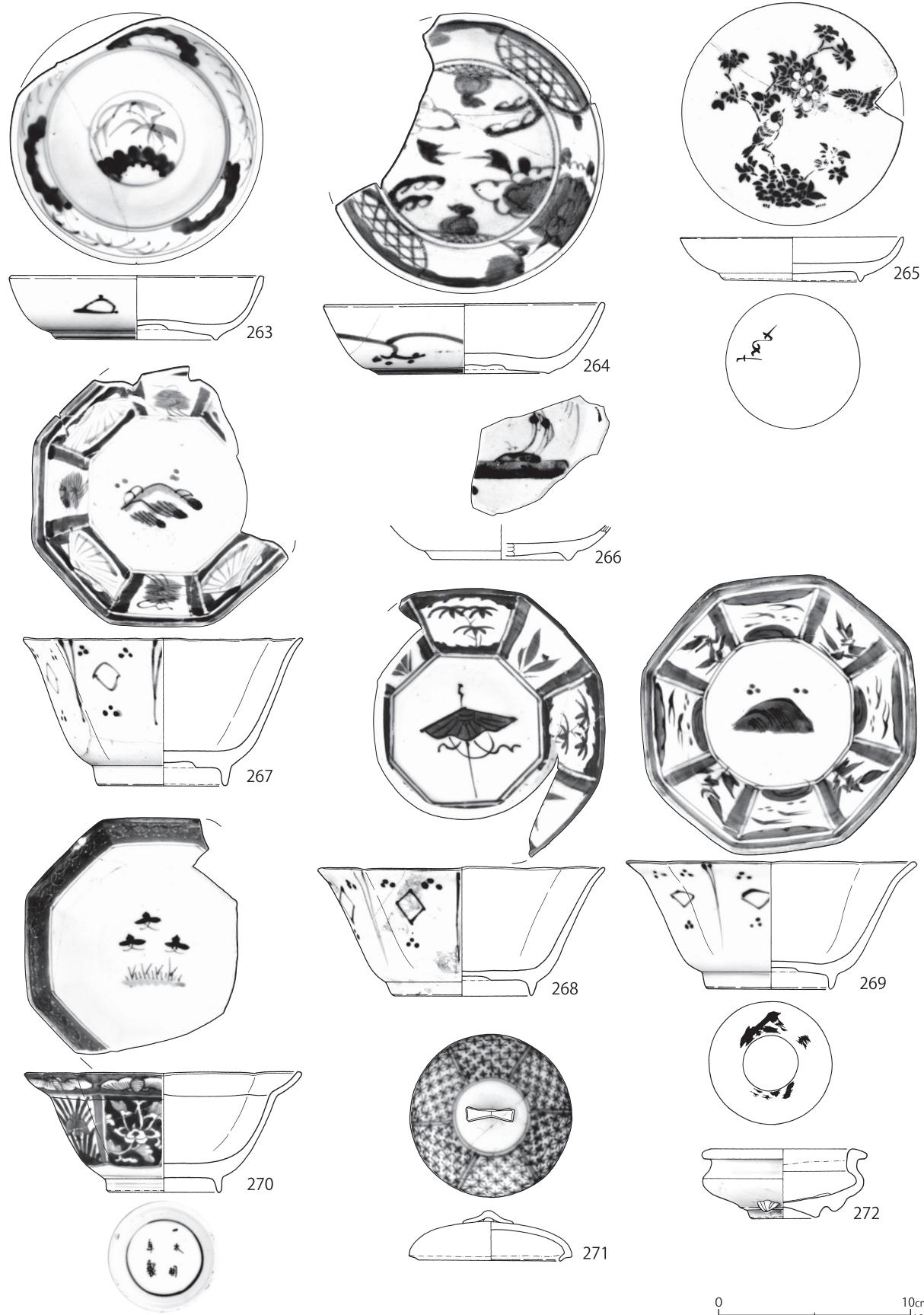
第128図 土壌出土遺物 (12)



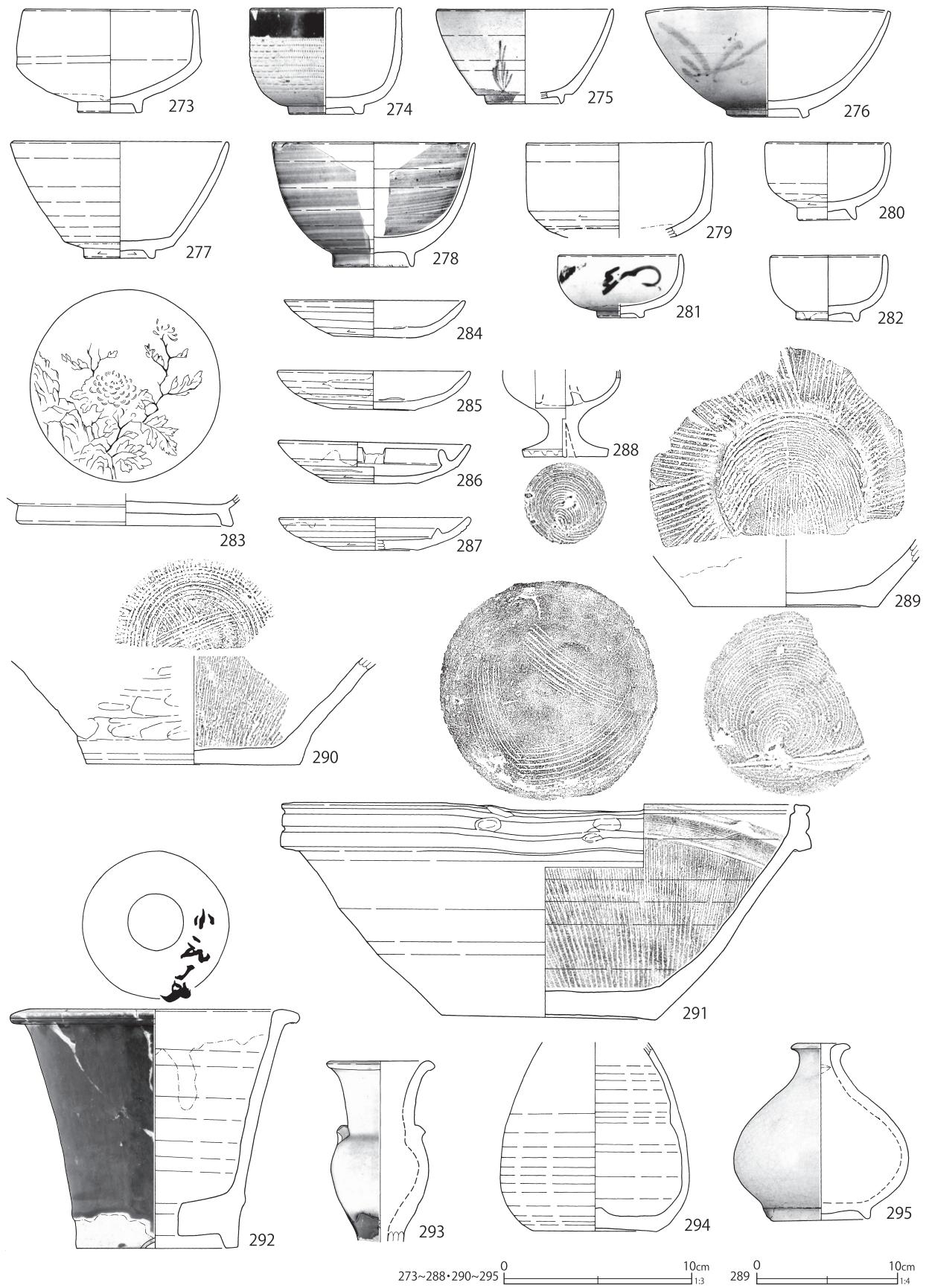
第129図 土壌出土遺物 (13)



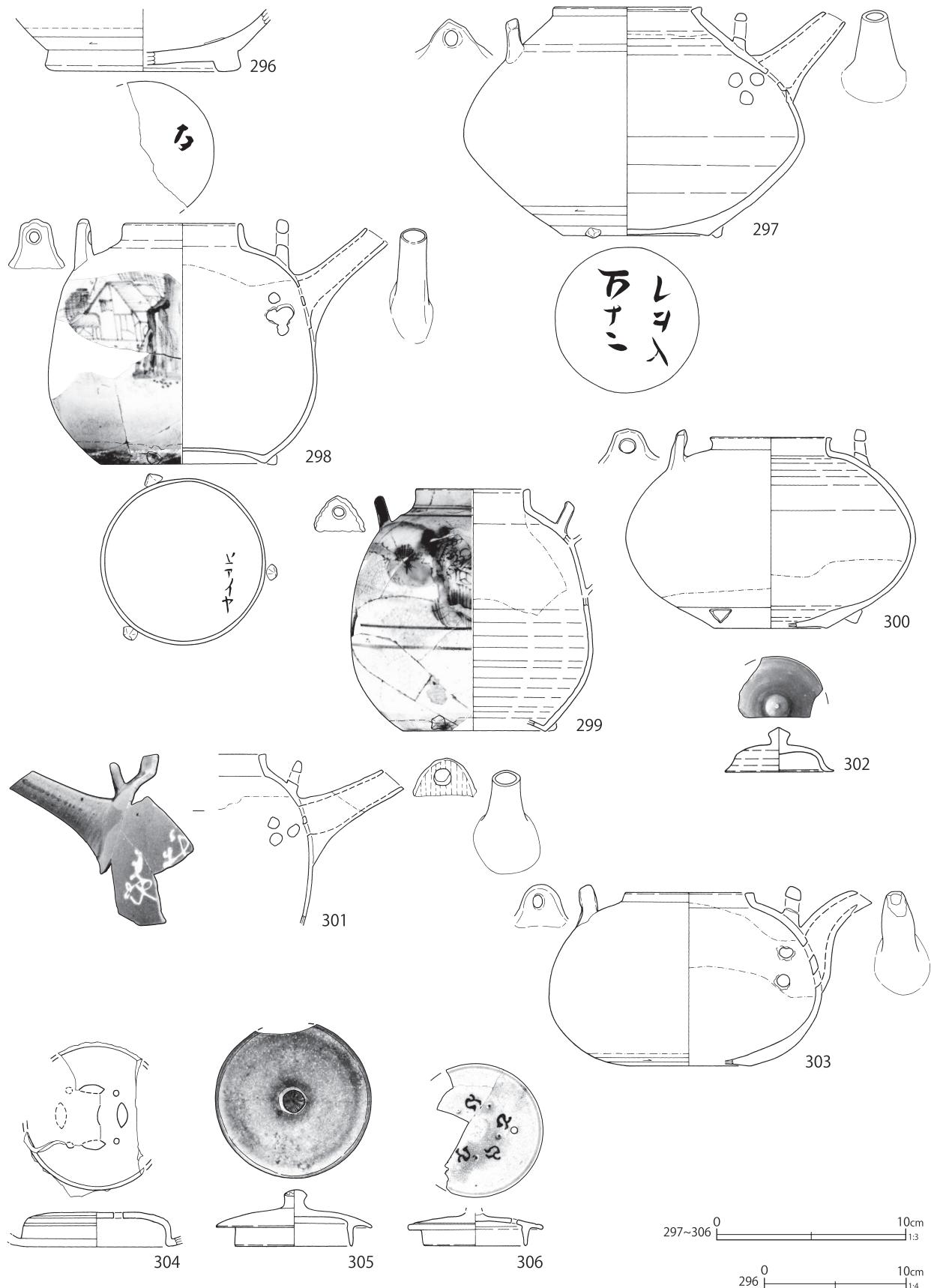
第130図 土壌出土遺物 (14)



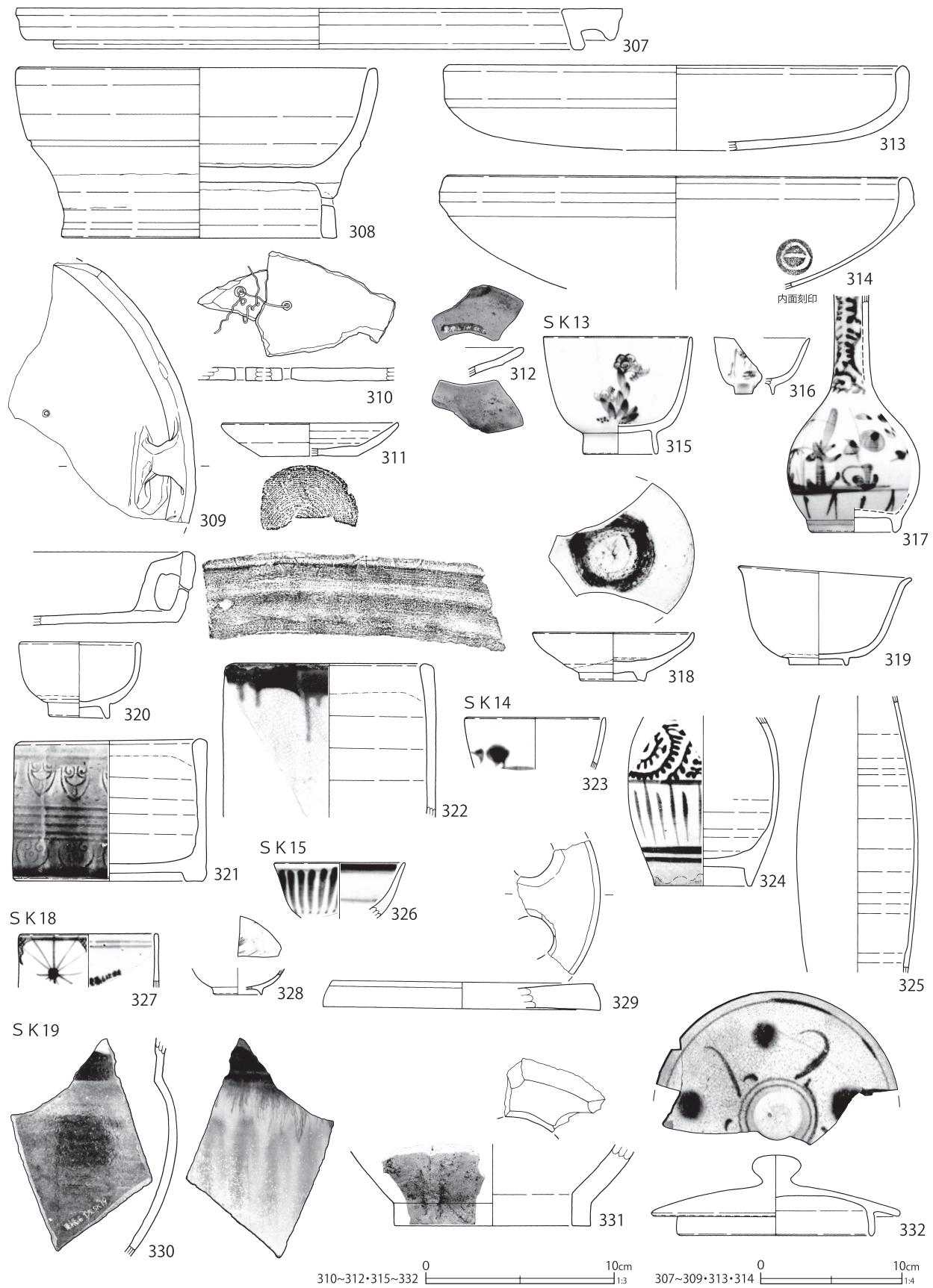
第131図 土壌出土遺物 (15)



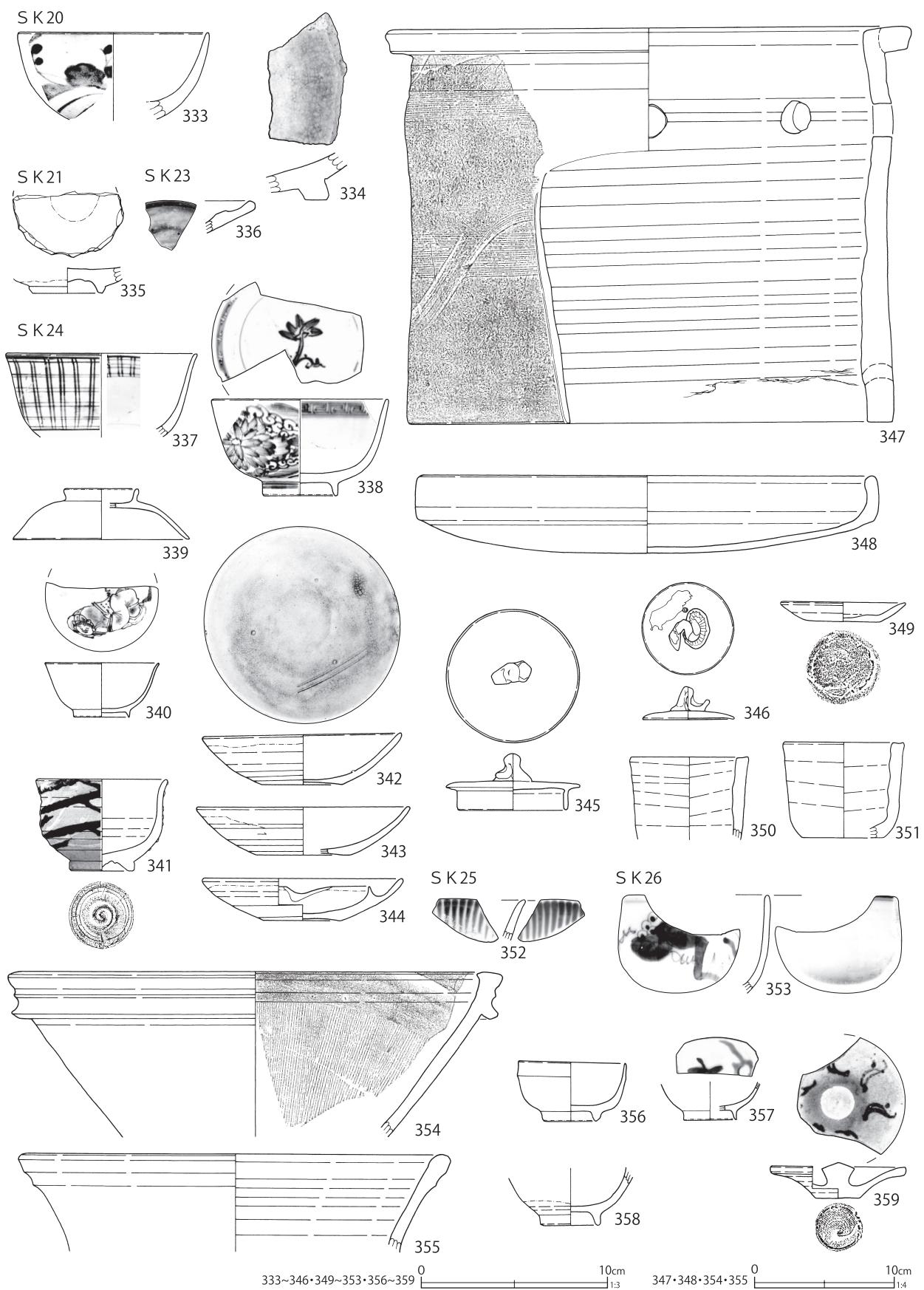
第132図 土壌出土遺物 (16)



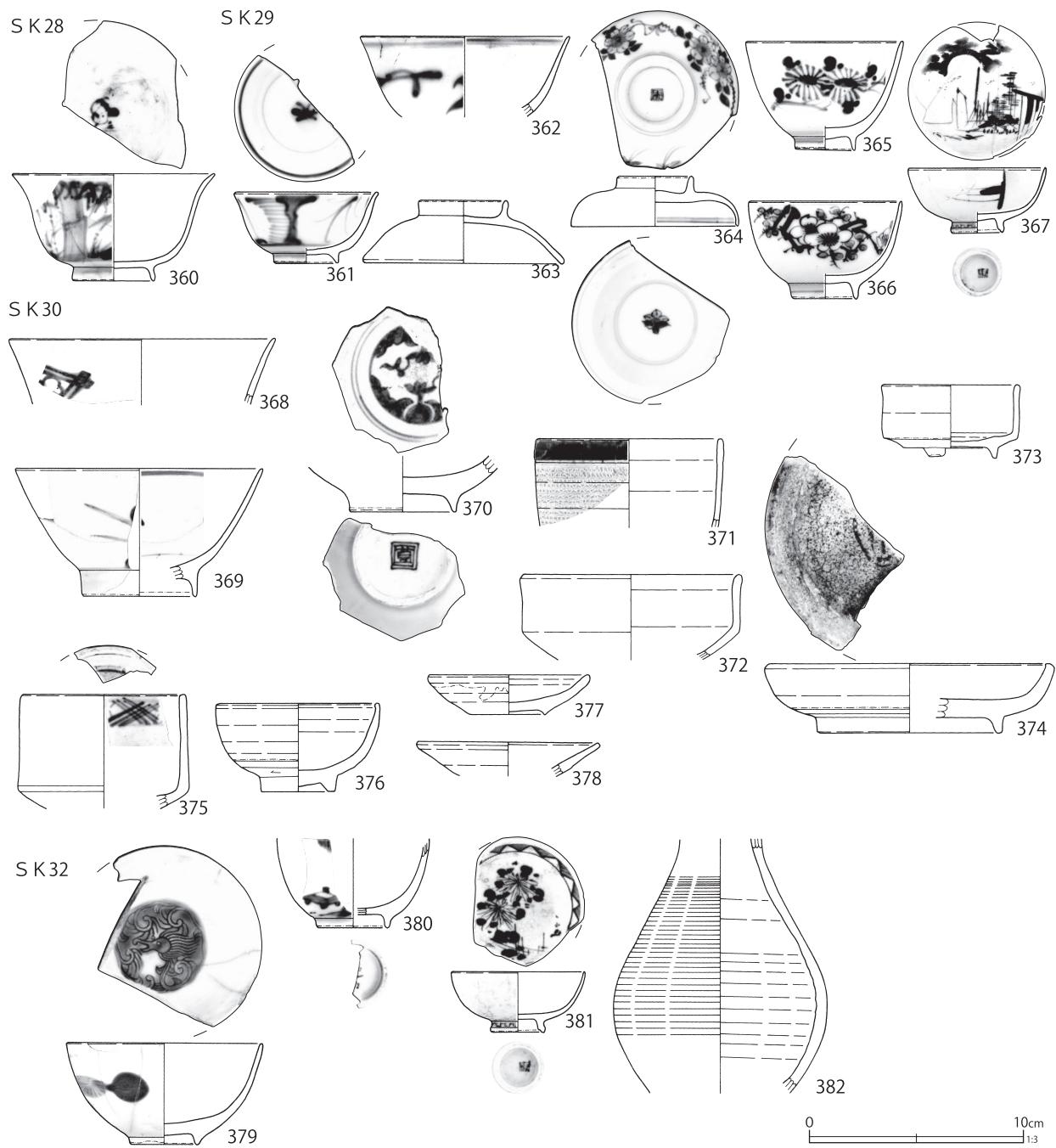
第133図 土壌出土遺物 (17)



第134図 土壌出土遺物 (18)



第135図 土壌出土遺物 (19)



第136図 土壤出土遺物 (20)

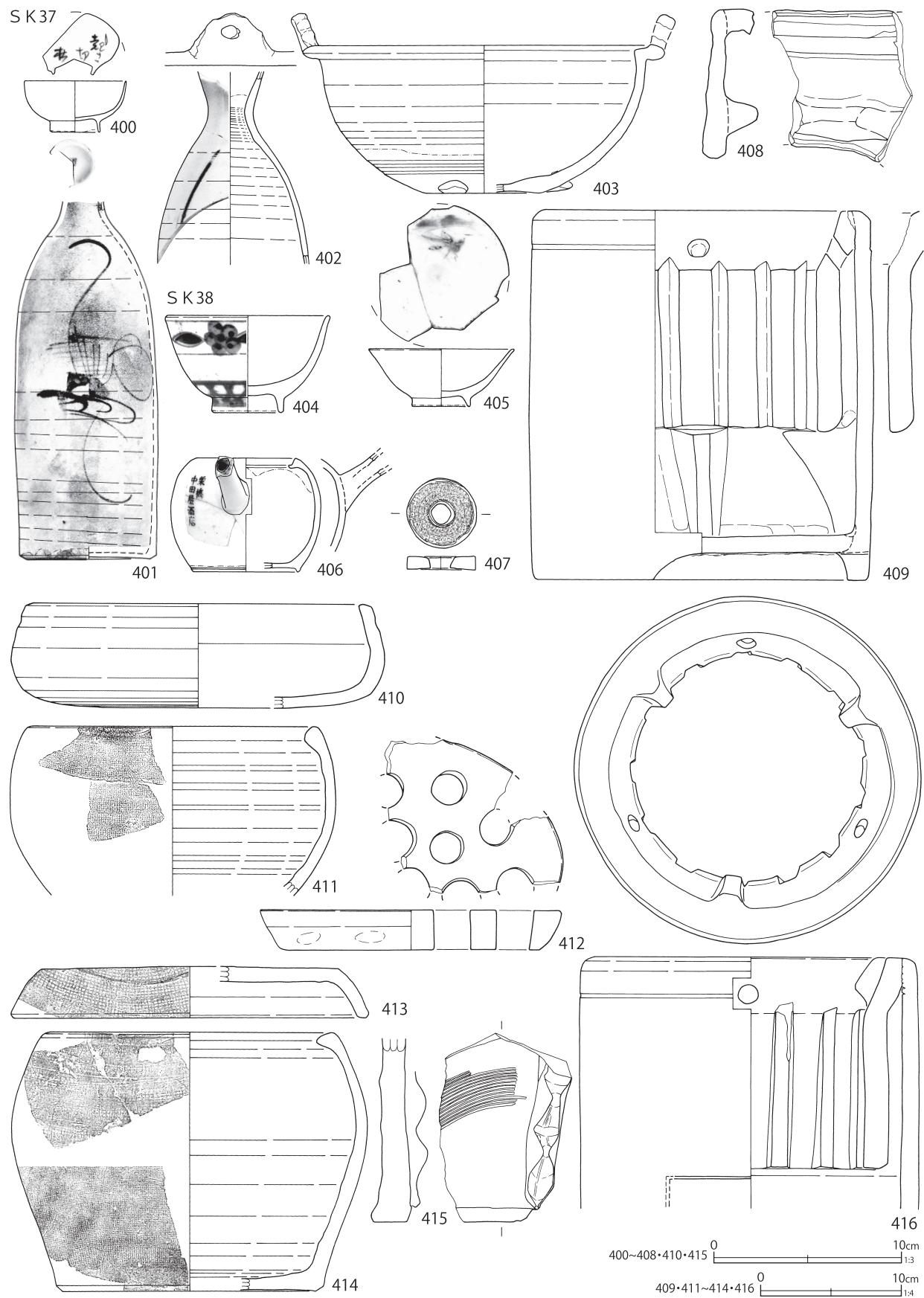
部が面取りされ、十角形を呈する。外面には漢詩文が見られる。50は陶器の土鍋蓋である。内面に灰釉、外面に白土染付が施されている。55は瓦質土器の竈鍔である。「岩崎」の刻印が押されており、在地系土器類の産地特定の可能性がある資料である。

第143・145図に土製品を示した。第143図の1・2は土師質土器の小壺である。いわゆる「つ

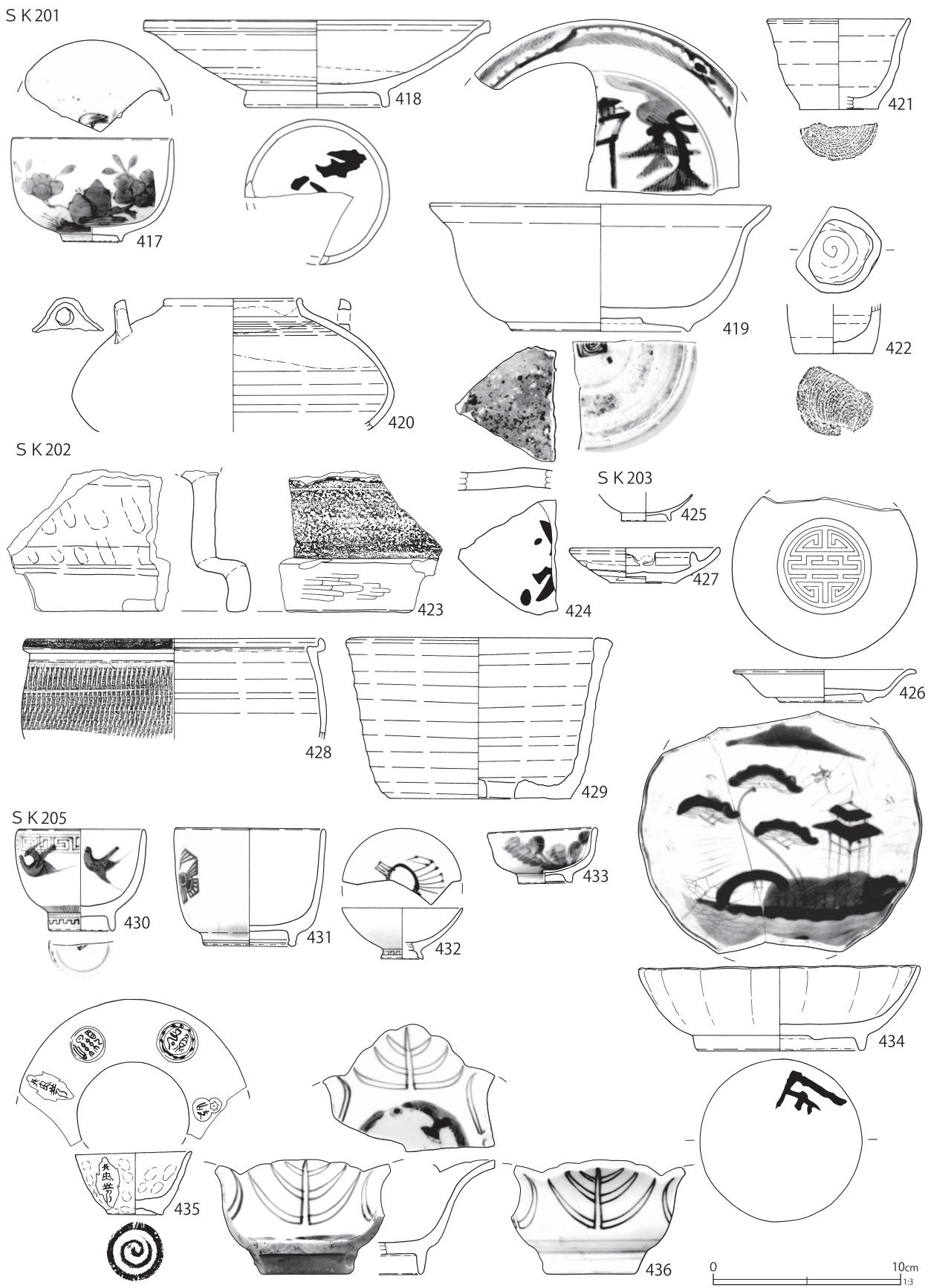
ぼつぼ」と呼ばれる京都産土器に形態が類似するが、胎土は橙色味が強く、在地産と考えられる。主に19世紀後半以降の遺構に見られる傾向にある。第146・149図の1～3・34に瓦を示した。1・2は江戸式の軒桟瓦で1は中心弁が三重である。2は中心弁が四重である。34は丸瓦で玉縁部に1条の沈線が見られる。第156図の34は錢貨で3枚重ねになっている。錢種は不明である。



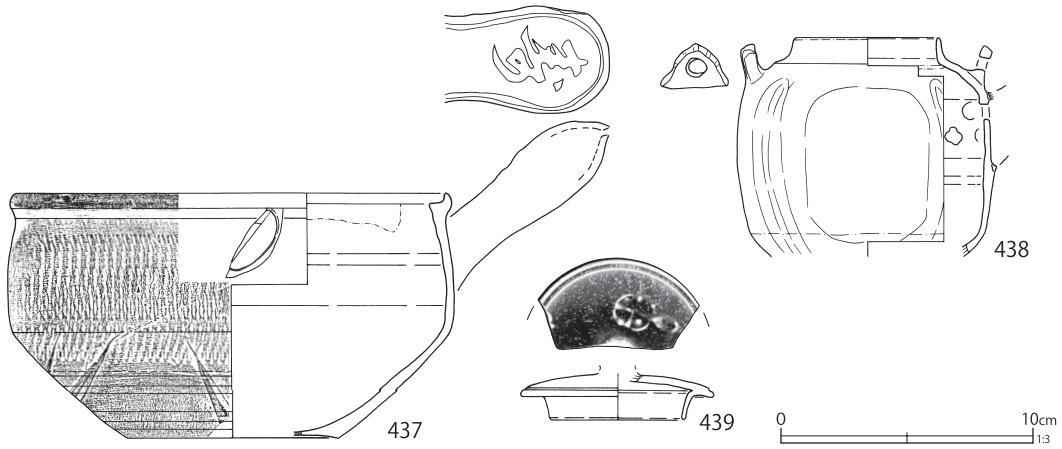
第137図 土壌出土遺物 (21)



第138図 土壌出土遺物 (22)



第139図 土壌出土遺物 (23)



第140図 土壌出土遺物 (24)

第157図の1～4に石製品を示した。1・2は滑石製石筆、3は凝灰岩製の砥石で上部に穿孔が施されており、携帯砥石と考えられる。第159図の15・16に骨製品のブラシを図示した。同一個体と考えられる。2方向から穿孔されている。

銅版転写染付、型紙摺絵染付磁器は少量確認されるが、酸化コバルト染付磁器が主体であることから、19世紀第4四半期頃の遺構と考えられる。

第5号土壌 (第111図)

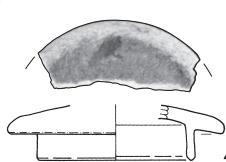
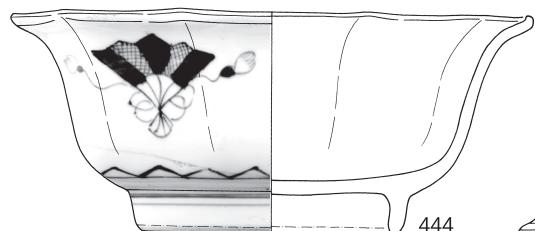
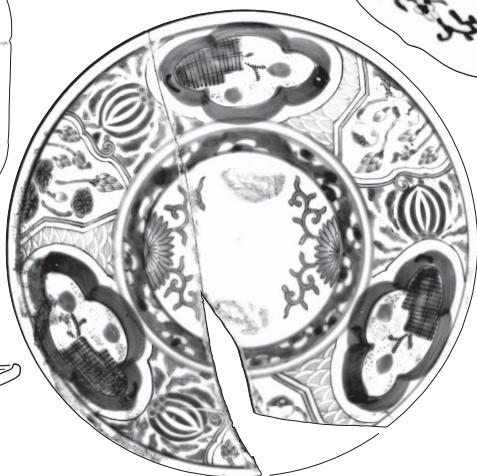
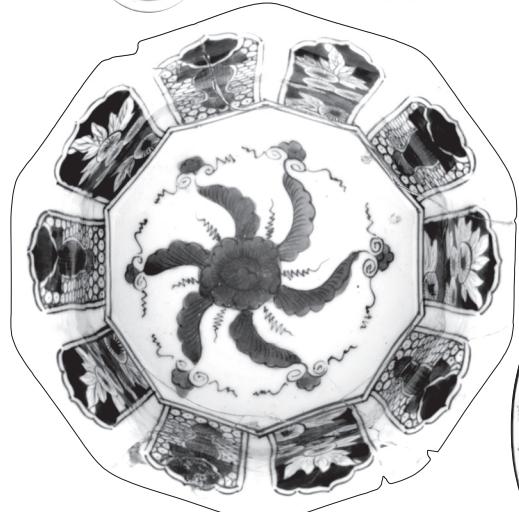
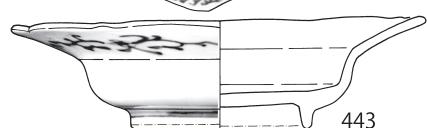
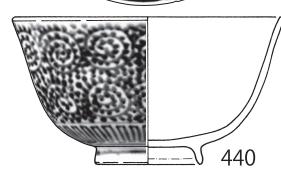
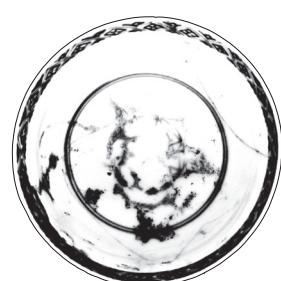
D 7-g 1 グリッドに位置し、長軸方位N-31°-Wを示す不整形の土壌である。深く掘り込まれている。第4号土壌に上層部が壊され、第9号土壌を掘り込んでいる。遺物は、第4号土壌と同様の組成を示し、爛徳利、小壺類が極めて多く出土している。

出土遺物は第120～123図の57～114に陶磁器類を示した。57は瀬戸美濃系磁器の平碗で酸化コバルト染付が施されている。焼き継ぎによる補修痕が見られ、高台内には「千峰園製」の文字染付が確認される。63は肥前系磁器の湯呑碗である。同品が他に3個体見られ、揃いである。64～76は磁器の壺類である。64～67は肥前系磁器で外面に笠文の染付が施され、丸碗形から扁平形まで多様の形態を呈している。68は瀬戸美濃系磁器の卵殻手壺である。内面に青色の上絵付を施し、「イセ 岩井田」の文字が見られる。69は瀬戸美

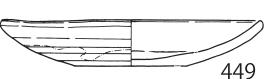
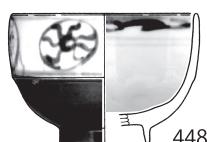
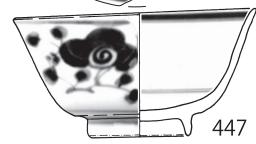
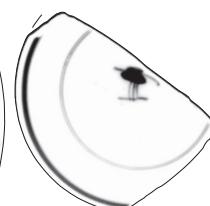
濃系磁器の卵殻手壺に酷似するが体部は平碗状に立ち上がる。内面に青色の上絵付で「酒場支店クリハシ」の文字が見られる。70・71は酸化コバルト染付の筒形壺、73・74は酸化コバルト染付の端反形壺で外面に漢詩文が見られる。77～79は皿類である。77・78は揃いの皿で、瀬戸美濃系磁器である。酸化コバルト染付が施され、高台は蛇の目凹形高台である。高台内にカンナによる削り痕が見られる。79は瀬戸美濃系磁器で一枚絵染付の皿である。口縁に口紅が施されている。80は淡路珉平系の鉢である。緑色釉が施釉され、内面に陰刻が見られる。表面は剥離が著しい。38に色違いの同系品が見られる。83は瀬戸美濃系磁器のクロム釉青磁の鉢である。底部に刻印「春花」が見られる。84は肥前系の鉢である。体部に鎬が見られ、底部には二次穿孔が施され、植木鉢に転用されている。85～94は瀬戸美濃系磁器の爛徳利である。85～92は酸化コバルト染付、93は鉄釉掛け分けである。揃いのものが複数あり、85は9個体、89は2個体、90・91は12個体、93は5個体、94は1個体の同品が他に確認された。94は頸部に1条の凸帯、底部に墨書が見られる。97は瀬戸美濃系磁器の壺で、96はその蓋である。

106は京都信楽系陶器の香炉で底部に墨書が見られる。110はロクロ成形の焼塩壺である。栗橋宿では焼塩壺の出土例が少ない。111は硬瓦質土

S K 207

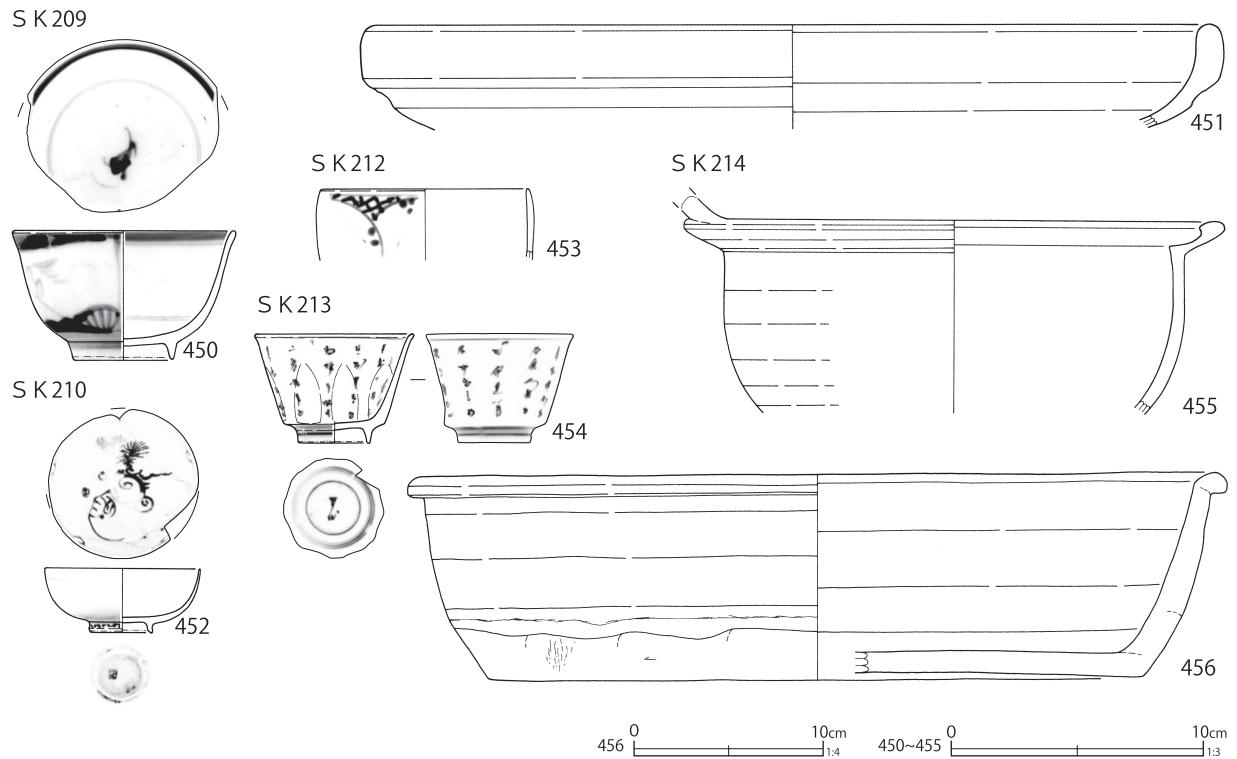


S K 208



0 10cm 1:3

第141図 土壌出土遺物 (25)



第142図 土壌出土遺物 (26)

器の器台である。全面が黒色に燻され、ミガキの調整が見られる。

第145図の5に土製品人形類の達磨を示した。前後合わせの二枚型成形で中空である。底には焼成前穿孔が施されている。外面には型離れをよくする雲母が付着している。江戸在地系である。第149図の35に丸瓦、第152図の1に木製品を示した。木製品は陰卯下駄で黒漆が残存している。

第156図の1・2に金属製品、第157図の5に石製品、第159図の1に硝子製品を図示した。金属製品の1は銅製品で煙管の雁首である鱗状の模様が施されている。2は鉄製品のハサミである。石製品の5は滑石製石筆である。硝子製品の1は笄で青色の中実である。被熱により白色化している。

先述した第4号土壌と遺物組成は極めて酷似しており、時期差は僅かであると考えられる。第4・5号土壌が位置する区画は、絵図面から旅籠屋に相当する敷地と考えられるが、明治35年の『當

業便覧』(久喜市 2015) には、吉田安右衛門の名のみが書かれ、具体的な職種は書かれていない。出土遺物は爛徳利及び小壺類を主体としており、旅籠屋の様相を示していると考えられる。

出土遺物から第4号土壌と同様に、19世紀第4四半期の遺構であり、第4号土壌と共に旅籠屋の廃業に伴う一括廃棄に関わる遺構と推定される。

第12号土壌 (第111図)

D 7-g 1・2グリッドに位置し、長軸方位N-71°-Eを示す長方形の土壌である。第13～15層は整地後に堆積した土層である。第16層は第一面の推定年代より古い時期の施整地層であり、その直下の第17層も第12号土壌の直上の堆積層である。第18層～21層は第12号土壌の覆土である。陶磁器が多量に出土している。

出土遺物は、第129～134図の227～314に陶磁器を図示した。227～230は肥前系磁器の粗製碗である。228は外面にコンニヤク印版染付が施されている。231は肥前系磁器の筒形碗、232は

第33表 土壌出土遺物観察表（1）（第117～142図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	陶器	油受皿	—	0.9	4.6	—	90	良好	にぶい黄橙	SK1	瀬戸美濃系 柿釉 外面輪状重ね焼き痕	
2	磁器	碗	(9.4)	[3.2]	—	K	10	良好	白	SK2	瀬戸美濃系 施釉 染付	
3	磁器	碗	—	[3.0]	(3.0)	K	50	良好	白	SK3	瀬戸美濃系 施釉 外面染付	
4	磁器	坏	(5.9)	[2.1]	—	K	30	良好	白	SK3	肥前系 施釉 外面染付	
5	磁器	鉢	(14.4)	[5.8]	—	K	65	普通	白	SK3	肥前系 施釉 染付 SK8接合	
6	磁器	猪口	7.9	6.2	(5.3)	K	40	普通	白	SK3	肥前系 施釉 染付	
7	陶器	甕	—	[7.8]	—	EK	5	良好	灰白	SK3	瀬戸美濃系 灰釉 外面銅緑釉流し掛け	
8	陶器	油徳利	—	[5.5]	6.7	IK	80	良好	にぶい褐	SK3	瀬戸美濃系 外面柿釉 底部拭き取り 内部タール状物質残存	48-1
9	陶器	片口鉢	—	[2.7]	5.0	IK	40	良好	灰黄	SK3	瀬戸美濃系 灰釉 目跡3	
10	施釉土器	爛徳利	—	[4.3]	—	HK	5	良好	橙	SK3	江戸在地系 外面透明釉	
11	磁器	碗	8.4	4.4	3.1	—	90	良好	白	SK4	瀬戸美濃系 施釉 染付 口紅 同品他1個体	
12	磁器	碗	(10.5)	5.8	3.4	K	30	良好	白	SK4	瀬戸美濃系 施釉 染付	
13	磁器	碗	8.2	4.4	3.0	K	45	良好	白	SK4	瀬戸美濃系 施釉 染付	
14	磁器	碗	(7.2)	5.9	3.4	—	50	良好	白	SK4	瀬戸美濃系 施釉 外面染付	
15	磁器	碗	7.1	5.8	3.1	K	85	良好	白	SK4	瀬戸美濃系 施釉 外面染付	
16	磁器	坏	8.2	5.0	3.5	—	100	良好	白	SK4	瀬戸美濃系 酸化クロム釉 外面酸化コバルト染付	
17	磁器	坏	—	[2.2]	3.3	K	90	良好	白	SK4	肥前系 施釉 内面染付	48-2
18	磁器	坏	6.3	2.9	2.2	—	95	良好	白	SK4	瀬戸美濃系 施釉 外面染付 内面上絵付 (青) 金彩「古河」口縁金彩 SK9接合	48-3
19	磁器	坏	(6.5)	3.2	(2.5)	K	45	普通	白	SK4	瀬戸美濃系 施釉 内面染付	
20	磁器	坏	6.0	2.7	2.2	—	95	良好	白	SK4	瀬戸美濃系 施釉 口縁酸化コバルト染付	
21	磁器	坏	6.0	2.6	2.4	—	95	普通	白	SK4	瀬戸美濃系 施釉 外面染付 同品他1個体	
22	磁器	坏	5.3	3.1	2.1	—	95	良好	白	SK4	瀬戸美濃系 施釉 外面金彩	
23	磁器	坏	(6.4)	3.2	2.5	—	40	良好	白	SK4	瀬戸美濃系 型成形 施釉 外面陰刻	
24	磁器	坏	6.3	3.1	2.6	—	100	良好	白	SK4	瀬戸美濃系 施釉 突帶1条 同品他14個体	
25	磁器	坏	(6.2)	4.8	(2.6)	K	30	良好	白	SK4	瀬戸美濃系 施釉 外面酸化コバルト染付	
26	磁器	坏	5.4	2.7	2.4	—	95	良好	白	SK4	瀬戸美濃系 施釉 内面金彩 外面多彩，白 盛 高台内上絵付痕「染谷」	
27	磁器	坏	5.5	6.2	3.1	—	90	良好	白	SK4	瀬戸美濃系 施釉 外面多彩，漢詩文 高台 外周削り痕	
28	磁器	坏	5.4	1.7	1.9	—	70	良好	白	SK4	瀬戸美濃系 施釉 外面酸化コバルト染付	
29	磁器	坏	7.0	1.9	2.0	—	95	良好	白	SK4	瀬戸美濃系 施釉 外面酸化コバルト染付	
30	磁器	坏	8.3	2.8	2.6	—	95	普通	白	SK4	瀬戸美濃系 施釉 外面酸化コバルト染付	
31	磁器	皿	(10.3)	2.4	6.5	—	80	良好	白	SK4	肥前系 施釉 内面染付 口紅	
32	磁器	皿	10.7	2.3	5.9	—	100	良好	白	SK4	瀬戸美濃系 施釉 内面陰刻 酸化コバルト染付	
33	磁器	皿	10.5	2.2	6.0	—	95	良好	白	SK4	瀬戸美濃系 施釉 酸化コバルト染付 SK5 に同品あり 同品他8個体	
34	磁器	皿	9.4	2.0	5.3	—	90	良好	白	SK4	瀬戸美濃系 施釉 内面染付 口紅 幅広高台	
35	磁器	皿	14.5	4.1	7.7	—	95	良好	白	SK4	瀬戸美濃系 施釉 内面陰刻，染付 口紅	
36	磁器	大皿	29.4	5.3	16.3	—	100	良好	白	SK4	肥前系 施釉 染付 焼継印 釘書き「舍」	48-5 59-1
37	磁器	鉢	13.9	6.1	7.5	—	100	良好	白	SK4	肥前系 施釉 酸化コバルト染付 底部輪状 重ね焼き痕，釘書き「ト」か	
38	磁器	鉢	13.2	5.7	9.0	K	95	良好	淡橙	SK4	淡路珉平系 施釉（黄）内面型押	48-4
39	磁器	鉢	—	[3.4]	7.2	K	90	良好	白	SK4	肥前系 施釉 染付 高台内釘書き後墨書	
40	磁器	蓮華	—	[3.6]	—	—	90	良好	白	SK4	瀬戸美濃系 施釉 内面染付，陽刻	
41	陶器	香炉	(10.4)	7.2	(9.4)	EIK	50	良好	灰白	SK4	瀬戸美濃系 灰釉 外面鉄絵	
42	陶器	爛徳利	—	[1.9]	(5.8)	K	50	良好	灰白	SK4	京都信楽系 外面灰釉 底部墨書	59-2
43	陶器	坏	4.8	2.7	1.7	K	100	普通	灰オリーブ	SK4	灰釉	
44	陶器	蓋	—	[1.4]	—	IK	30	良好	灰黄	SK4	外面白土化粧，施釉，三彩 内面墨書 急須 飯能系 合子 灰釉 外面イッヂ描き「住吉町 丹 ふじの雪 松本仕入れ」	48-6
45	陶器	蓋	7.2	1.8	—	—	100	良好	灰黄褐	SK4	瀬戸美濃系 急須 内面施釉 外面酸化クロム釉，多彩 47の蓋	
46	磁器	蓋	5.7	2.2	—	—	90	良好	白	SK4		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
47	磁器	急須	6.3	7.2	5.3	—	90	良好	白	SK4	瀬戸美濃系 内面施釉 外面酸化クロム釉, 多彩 高台内墨書	
48	磁器	爛徳利	(2.5)	17.5	5.9	K	95	良好	白	SK4	瀬戸美濃系 施釉 外面染付, 漢詩文	
49	陶器	蓋	11.2	2.8	—	—	100	良好	灰黄	SK4	行平鍋 鉄釉 外面トビガシナ	
50	陶器	蓋	15.5	5.2	5.4	HK	95	普通	灰オリーブ	SK4	土鍋 内面灰釉, 輪状重ね焼き痕 外面白 土染付, ピン痕 5	
51	瓦質土器	火鉢	—	[5.0]	(23.8)	CHIK	20	普通	灰白	SK4	砂目底 やや酸化炎焼成ぎみ 鉄付着	
52	土師質土器	鍋	(8.0)	4.0	(9.4)	CEHIK	40	普通	にぶい橙	SK4	把手残存	
53	土師質土器	焙烙	—	[3.4]	—	CIK	5	普通	灰白	SK4	砂目底 体部下位ケズリ	
54	土師質土器	蓋	5.8	0.7	5.4	EIK	100	普通	にぶい橙	SK4	焼塩壺	48-7
55	瓦質土器	竈鍔	—	3.8	—	CHIK	5	普通	灰	SK4	刻印「岩崎」焼寸	59-3
56	瓦質土器	火鉢	—	[0.7]	—	CHIK	5	普通	橙	SK4	底部シワ状痕 酸化炎焼成ぎみ 内面墨痕	
57	磁器	碗	10.5	4.3	3.5	—	90	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 施釉 酸化コバルト染付 焼継 印 高台内染付「千峰園製」か SK4 接合	
58	磁器	碗	11.0	4.7	3.8	—	95	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 施釉 染付 SK4 接合	
59	磁器	碗	7.3	3.7	2.6	K	50	良好	白	SK5	肥前系 施釉 染付	
60	磁器	碗	10.4	5.5	3.4	—	100	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 施釉 染付	
61	磁器	碗	10.4	6.1	3.6	—	75	良好	白	SK5	肥前系 施釉 染付	
62	磁器	碗	8.4	4.4	3.1	—	95	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 施釉 外面染付 口紅	48-8
63	磁器	碗	(7.9)	5.8	4.8	K	60	良好	白	SK5	肥前系 施釉 染付 同品他3個体	
64	磁器	坏	6.8	3.5	2.9	—	100	普通	灰白	SK5	肥前系 施釉 外面染付	
65	磁器	坏	6.3	3.0	2.2	K	70	普通	白	SK5	肥前系 施釉 外面染付	
66	磁器	坏	6.3	2.6	2.2	—	95	普通	白	SK5	肥前系 施釉 外面染付	
67	磁器	坏	5.9	2.2	2.4	K	80	普通	灰白	SK5	肥前系 施釉 外面染付	
68	磁器	坏	6.1	2.8	2.4	—	90	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 施釉 外面染付 内面上絵付 (青)「イセ 岩井田」	49-1 59-4
69	磁器	坏	6.5	2.6	2.2	—	100	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 施釉 外面染付 内面上絵付 (青) SK4 接合「酒場支店 クリハシ」	49-2 59-5
70	磁器	坏	4.9	6.0	3.5	IK	85	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 施釉 外面酸化コバルト染付 SK4 接合	
71	磁器	坏	5.3	6.8	3.5	K	100	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 施釉 酸化コバルト染付 SK4 接合	
72	磁器	坏	6.5	3.5	3.1	K	90	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 施釉 外面染付 SK13 接合	
73	磁器	坏	6.3	4.5	2.8	K	85	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 施釉 外面染付, 漢詩文 SK4 接合	
74	磁器	坏	5.9	4.5	2.6	—	100	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 施釉 外面酸化コバルト染付, 漢詩文 体部面取り	
75	磁器	坏	6.5	4.4	2.5	K	95	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 施釉 外面酸化コバルト染付 SK4 接合 同品他3個体	
76	磁器	坏	6.9	4.6	3.0	K	100	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 施釉 外面酸化コバルト 染付 SK4 接合	
77	磁器	皿	14.6	3.4	7.8	K	90	普通	白	SK5	瀬戸美濃系 施釉 染付 高台内削り痕	49-4
78	磁器	皿	14.6	3.1	7.1	—	95	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 施釉 染付 高台内削り痕	49-5
79	磁器	皿	21.9	3.1	12.8	—	95	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 施釉 内面染付 口紅 高台内 ピン痕 3 SK4 接合	48-9
80	磁器	鉢	12.7	5.2	9.0	I	90	良好	灰白	SK5	淡路畠平系 脊緑釉 内面型押 SK4 接合	49-3
81	磁器	蓋	6.6	1.0	6.6	—	95	不良	にぶい黄橙	SK5	肥前系 合子 施釉 外面染付 被熱 SK4 接 合 82の蓋	
82	磁器	合子	5.4	2.3	3.8	—	100	不良	にぶい黄橙	SK5	肥前系 施釉 被熱	
83	磁器	鉢	12.1	5.7	9.9	K	95	良好	灰白	SK5	瀬戸美濃系 青磁釉 外面染付か 体部下位 面取り 底部ヘラケズリ 刻印 SK4 接合	
84	磁器	鉢	11.7	6.7	6.9	K	100	良好	白	SK5	肥前系 施釉 染付 底部二次穿孔 SK4 接合	
85	磁器	爛徳利	2.9	18.0	5.5	K	95	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 外面施釉, 酸化コバルト染付 同品他9個体	
86	磁器	爛徳利	(2.7)	17.9	5.5	K	85	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 外面施釉, 酸化コバルト染付	
87	磁器	爛徳利	2.4	17.7	5.5	—	95	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 外面施釉, 酸化コバルト染付 SK4 接合	
88	磁器	爛徳利	3.0	18.0	6.6	K	80	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 施釉 外面コバルト染付	
89	磁器	爛徳利	2.8	18.1	5.3	K	85	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 施釉 外面コバルト染付 SK4 接合 同品他2個体	
90	磁器	爛徳利	2.8	17.1	5.2	K	85	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 外面施釉, 酸化コバルト染付 SK4 接合 91 同品 同品他12個体	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
91	磁器	壺徳利	2.8	15.7	5.6	K	90	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 施釉 外面酸化コバルト染付 SK4接合 90 同品 同品他 12 個体	
92	磁器	壺徳利	3.4	16.7	5.5	—	95	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 施釉 外面酸化コバルト, 酸化クロム染付 SK4 と接合	
93	磁器	壺徳利	3.4	16.4	5.4	—	95	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 外面鉄釉掛け分け 頸部突帯 SK4接合 同品他 5 個体	
94	磁器	壺徳利	3.1	17.1	5.7	K	95	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 外面施釉 底部墨書「丁」か SK4接合 同品他 1 個体	
95	磁器	猪口	5.9	5.8	4.4	—	100	良好	白	SK5	肥前系 施釉 外面染付	
96	磁器	蓋	3.3	3.1	—	K	95	良好	白	SK5	壺 外面施釉, 染付 97 の蓋	49-7
97	磁器	壺	4.0	11.9	5.8	K	95	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 外面施釉, 染付	49-6
98	磁器	急須	5.7	6.6	6.0	K	95	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 施釉 外面酸化コバルト染付 同品他 3 個体	
99	磁器	徳利	1.9	13.0	4.6	K	95	良好	白	SK5	瀬戸美濃系 外面施釉, 染付	
100	陶器	壺	5.5	3.6	2.8	I	90	良好	明紫灰	SK5	瀬戸美濃系 灰釉 内面目跡 4	
101	陶器	壺	6.2	4.0	2.5	H	100	良好	灰白	SK5	瀬戸美濃系 灰釉	
102	陶器	油受皿	6.9	1.3	3.2	IK	100	良好	灰白	SK5	瀬戸美濃系 柿釉 底部釉拭き取り 輪状重ね焼き痕	
103	陶器	油受皿	9.8	2.1	4.5	IK	100	良好	浅黄	SK5	瀬戸美濃系 柿釉 底部釉拭き取り 輪状重ね焼き痕	
104	陶器	片口鉢	15.4	9.0	9.0	IK	95	普通	灰黄	SK5	灰釉 口縁鉄釉 内面目跡 5 SK4接合	49-9
105	陶器	片口鉢	14.2	8.2	8.9	K	95	良好	灰黄	SK5	灰釉 口縁鉄釉 底部輪状重ね焼き痕 SK4接合	49-10
106	陶器	香炉	—	[6.9]	10.9	I	20	良好	黄灰	SK5	京都信楽系 外面白土化粧, 施釉 墨書	59-6
107	陶器	土瓶	7.2	7.1	6.3	HK	75	普通	灰白	SK5	外面灰釉, 鉄釉斑状, イッチン描き 内面施釉	
108	陶器	土瓶	(7.2)	7.3	6.1	I	70	良好	灰白	SK5	外面灰釉, 鉄釉斑状, イッチン描き 内面施釉 SK4接合	
109	陶器	蓋	(7.0)	2.3	2.3	HIK	85	良好	灰白	SK5	急須 外面灰釉, 鉄釉斑状, イッチン描き 回転糸切	
110	土師質土器	焼塩壺	5.0	5.1	3.0	CEHK	100	良好	橙	SK5	ロクロ成形 回転糸切 (左)	49-8
111	瓦質土器	器台	7.3	5.1	5.2	I	95	良好	暗灰	SK5	硬質瓦質 全面ミガキ 燻す	49-11
112	土師質土器	焰烙	(32.4)	[3.8]	—	CHIK	5	普通	灰黄	SK5	底部シワ状痕 体部下位ケズリ	
113	瓦質土器	焜炉	—	13.0	8.7	CHI	95	良好	浅黄橙	SK5	中筒 114 と同一個体	
114	瓦質土器	焜炉	—	[9.5]	(20.6)	CHIK	45	良好	黒	SK5	砂目底 内面中筒痕 外面ミガキ, ローラースタンド 113 と同一個体	
115	磁器	碗	(9.3)	5.5	(4.3)	—	20	良好	灰白	SK6	肥前系 施釉 外面染付	
116	磁器	碗	(8.9)	[4.2]	—	K	15	良好	白	SK6	瀬戸美濃系 施釉 染付	
117	磁器	碗	(7.9)	4.1	(2.4)	K	45	普通	白	SK6	瀬戸美濃系 施釉 染付	
118	磁器	蓋	9.5	2.9	3.8	K	65	良好	白	SK6	瀬戸美濃系 丸碗 施釉 染付	
119	磁器	壺	6.3	4.7	2.9	—	95	良好	白	SK6	瀬戸美濃系 施釉 外面酸化コバルト染付	
120	磁器	壺	(6.8)	4.6	(3.4)	K	60	良好	白	SK6	瀬戸美濃系 施釉 染付	
121	磁器	壺	(7.2)	[3.3]	—	K	15	良好	白	SK6	瀬戸美濃系 施釉 酸化コバルト染付	
122	磁器	壺	(5.8)	3.3	(2.5)	K	30	良好	白	SK6	瀬戸美濃系 型成形 施釉 外面陰刻	
123	磁器	壺	(5.8)	[2.9]	—	K	25	良好	白	SK6	瀬戸美濃系 施釉 染付 外面白盛	
124	磁器	壺	(6.3)	2.7	2.4	—	30	良好	白	SK6	瀬戸美濃系 施釉 外面染付 同品他 1 個体	
125	磁器	段重	10.9	3.9	9.9	K	95	良好	白	SK6	瀬戸美濃系 施釉 外面酸化コバルト染付 口紅焼継	
126	磁器	皿	—	[0.6]	—	—	5	良好	白	SK6	肥前系 施釉 内面色絵	
127	磁器	皿	—	2.7	—	—	5	良好	白	SK6	瀬戸美濃系 施釉 内面染付, 陽刻	
128	磁器	香炉	(10.6)	[3.9]	—	K	25	良好	白	SK6	瀬戸美濃系 施釉 外面染付	
129	磁器	合子	(6.5)	4.3	5.6	K	90	良好	白	SK6	瀬戸美濃系 施釉 外面酸化コバルト染付 底部重ね焼き痕 4 残存	
130	陶器	油受皿	6.8	4.4	4.8	HI	95	良好	浅黄	SK6	京都信楽系 灰釉	
131	陶器	蓋物	14.5	5.6	12.0	EK	100	良好	にぶい褐	SK6	灰釉 底部外周指跡 4	50-1
132	陶器	甕	(26.4)	[13.2]	—	IK	20	良好	灰白	SK6	瀬戸美濃系 柿釉 外面鉄釉流し掛け	
133	陶器	土瓶	6.8	8.3	7.1	HIK	95	良好	灰白	SK6	灰釉 外面長石釉流し掛け 底部布目痕 注 口接続部櫛歯痕	50-2
134	陶器	蓋	7.8	2.1	3.9	HI	95	良好	灰黄褐	SK6	外面柿釉	
135	陶器	蓋	(18.4)	(2.9)	—	E	30	良好	灰白	SK6	土鍋 外面白土染付 内面灰釉	
136	磁器	碗	7.5	6.2	3.8	—	95	普通	白	SK7	瀬戸美濃系 施釉 染付 SK10接合	
137	磁器	碗	(7.6)	5.6	(3.6)	K	15	良好	白	SK7	瀬戸美濃系 施釉 SK10接合	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
138	磁器	蓋	(9.3)	2.9	(4.0)	K	55	普通	白	SK7	肥前系 端反碗 施釉 染付 SK12 接合	
139	磁器	坏	6.0	2.8	2.6	K	100	良好	白	SK7	肥前系 施釉 外面染付	
140	陶器	餅猪口	(6.5)	2.9	(4.0)	EIK	45	良好	灰白	SK7	瀬戸美濃系 灰釉 回転糸切(右) 底部二次穿孔	
141	陶器	油受皿	(10.8)	2.0	(4.3)	EIK	25	良好	にぶい橙	SK7	志戸呂系 鋸釉 口縁タール付着	
142	陶器	灯明皿	9.8	2.3	3.9	H	90	普通	暗赤褐	SK7	瀬戸美濃系 柿釉 底部拭き取り SK5・9 接合	
143	陶器	灯明皿	10.0	2.1	4.2	H	75	普通	にぶ赤褐	SK7	瀬戸美濃系 柿釉 輪状重ね焼き痕 SK10 接合	
144	磁器	碗	(7.6)	6.5	3.6	—	65	良好	白	SK8	瀬戸美濃系 施釉 外面染付	
145	磁器	碗	9.1	5.2	3.9	—	70	良好	白	SK8	瀬戸美濃系 施釉 染付 SK10・11 接合	
146	磁器	碗	—	[2.2]	(3.9)	K	25	良好	白	SK8	肥前系 施釉 染付 焼継印	
147	磁器	碗	(14.1)	[4.2]	—	K	20	良好	白	SK8	肥前系 大碗 施釉 染付	
148	磁器	蓋	8.9	2.8	(3.5)	—	75	良好	白	SK8	肥前系 端反碗 施釉 染付	
149	磁器	蓋	(8.8)	2.4	6.0	K	—	良好	白	SK8	肥前系 広東碗 施釉 染付	
150	磁器	坏	(6.4)	3.0	(2.6)	K	70	良好	灰白	SK8	肥前系 施釉 外面染付	
151	磁器	坏	6.4	4.3	2.9	K	90	良好	白	SK8	瀬戸美濃系 施釉 外面酸化コバルト染付 同品他に1個体あり	
152	磁器	坏	6.2	2.9	2.7	—	70	良好	白	SK8	肥前系 施釉	
153	磁器	坏	6.0	3.5	3.0	K	80	良好	白	SK8	瀬戸美濃系 施釉 外面染付 内面上絵付 (青) 金彩	
154	磁器	坏	7.1	4.9	2.9	—	95	良好	白	SK8	瀬戸美濃系 施釉 外面酸化コバルト染付 同品他1個体	
155	磁器	坏	6.0	3.0	2.3	—	100	良好	白	SK8	瀬戸美濃系 施釉 体部中位突帯1条 同品他1個体	50-3
156	磁器	坏	6.3	4.6	2.7	—	100	良好	白	SK8	瀬戸美濃系 施釉 外面染付, 漢詩文	
157	磁器	坏	6.0	4.5	2.6	—	100	良好	白	SK8	瀬戸美濃系 施釉 外面多彩 酸化コバルト 染付	
158	磁器	皿	15.9	3.0	9.3	K	90	良好	白	SK8	瀬戸美濃系 施釉 内面染付 口紅 高台全周連続微細剥離痕 SK4・5 接合	
159	磁器	皿	13.9	3.6	6.5	K	75	良好	白	SK8	瀬戸美濃系 施釉 内面型押 口紅	
160	磁器	皿	10.4	2.3	6.0	K	95	良好	白	SK8	瀬戸美濃系 施釉 内面陰刻, 酸化コバル ト染付 同品他2個体	
161	磁器	皿	10.2	2.1	6.3	K	95	良好	白	SK8	瀬戸美濃系 施釉 酸化コバルト染付 高台内カンナ痕	
162	磁器	香炉	(10.6)	5.5	5.5	K	70	良好	白	SK8	肥前系 外面施釉, 染付 体部中位鉄釉, 沈線 内面灰状付着物	50-4
163	磁器	鉢	(16.6)	5.9	(9.4)	—	40	良好	白	SK8	瀬戸美濃系 駄知井 施釉 酸化コバルト染 付 焼継	50-5
164	磁器	徳利	—	[14.8]	4.6	K	90	良好	白	SK8	瀬戸美濃系 外面施釉, 染付	
165	陶器	徳利	—	[7.2]	10.2	IK	85	良好	浅黄	SK8	瀬戸美濃系 一升 外面灰釉 底部釉拭き取 り輪状重ね焼き痕, 二次穿孔 外面敲打痕	50-6
166	陶器	甕	17.5	15.9	11.9	EIK	95	良好	浅黄橙	SK8	鉄釉 外面灰釉流し掛け 内面方形ピン痕 4 底部墨書「ハセ」	50-7
167	陶器	蓋	15.4	2.8	—	IK	95	良好	灰黄	SK8	灰釉 外面鉄絵, 染付, トビガンナ 内面 被熱	50-8
168	陶器	香炉	(10.2)	7.5	7.9	EIK	60	良好	褐灰	SK8	外面灰釉 内面輪状重ね焼き痕	50-9
169	陶器	秉燭	5.3	5.3	4.7	IK	80	良好	灰白	SK8	鉄釉 回転糸切(右)	50-10
170	土師質土器	蓋	—	[0.7]	—	HK	15	普通	橙	SK8	焼塙壺	
171	施釉土器	灰落とし	13.5	5.3	12.5	—	95	良好	にぶい橙	SK8	透明釉 口縁敲打痕 回転糸切	50-11
172	瓦質土器	器台	6.6	3.3	5.0	K	80	良好	灰白	SK8	硬質瓦質 全面ミガキ	51-1
173	磁器	碗	(11.1)	6.2	4.1	K	50	良好	白	SK9	肥前系 施釉 染付	
174	磁器	碗	9.0	4.9	4.0	K	80	良好	白	SK9	瀬戸美濃系 施釉 染付 SK11 接合	
175	磁器	坏	7.5	3.4	2.8	K	95	良好	白	SK9	肥前系 施釉 外面染付	51-2
176	磁器	碗	9.5	4.8	3.8	K	95	良好	白	SK9	瀬戸美濃系 施釉 外面染付 SK5 接合	51-3
177	磁器	碗	(6.7)	4.9	3.9	K	50	良好	白	SK9	肥前系 施釉 染付	
178	磁器	蓋	(9.1)	2.6	(5.0)	K	20	良好	白	SK9	肥前系 広東碗 施釉 染付	
179	磁器	皿	(13.8)	2.9	(6.8)	K	15	良好	灰白	SK9	肥前系 施釉 内面染付, 釘書き SK11 接合	
180	磁器	花生	8.9	14.7	5.7	K	100	良好	白	SK9	肥前系 外面青磁釉	51-4
181	陶器	碗	8.5	4.7	3.3	IK	95	良好	黄灰	SK9	瀬戸美濃系 灰釉 外面鉄絵	
182	磁器	碗	(8.9)	[4.8]	—	K	40	普通	灰白	SK9	京都信楽系 灰釉	
183	磁器	坏	(6.5)	3.8	(4.2)	K	35	普通	淡黄	SK9	瀬戸美濃系 灰釉	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
184	磁器	碗	(10.9)	6.2	(6.0)	K	40	良好	白	SK10	肥前系 施釉 染付	
185	磁器	碗	10.4	5.8	4.3	K	95	良好	白	SK10	瀬戸美濃系 施釉 染付 同品他1個体	
186	磁器	碗	9.3	4.9	3.8	K	60	良好	白	SK10	瀬戸美濃系 施釉 染付 被熱	
187	磁器	碗	(10.2)	[5.9]	(4.0)	K	35	良好	白	SK10	肥前系 施釉 染付 焼継	
188	磁器	碗	6.9	6.3	3.5	K	90	良好	白	SK10	瀬戸美濃系 施釉 外面染付 同品他2個体	
189	磁器	碗	(7.0)	5.6	(3.4)	K	60	良好	白	SK10	肥前系 施釉 外面染付 同品他2個体	
190	磁器	碗	—	[4.4]	(3.6)	K	45	良好	白	SK10	瀬戸美濃系 施釉 染付 焼継印	
191	磁器	蓋	(9.6)	2.5	(4.0)	—	45	良好	白	SK10	肥前系 端反碗 施釉 染付	
192	磁器	坏	6.2	3.5	2.4	K	80	良好	白	SK10	瀬戸美濃系 施釉 内面色絵痕	
193	磁器	坏	6.3	3.2	2.7	K	85	良好	白	SK10	瀬戸美濃系 施釉 内面染付	
194	磁器	坏	6.0	3.0	2.5	K	80	良好	白	SK10	肥前系 施釉 内面色絵	
195	磁器	大皿	29.6	4.0	16.0	K	85	良好	白	SK10	肥前系 施釉 内面染付 高台内ピン痕 6 焼継印 被熱	51-7
196	磁器	鉢	14.6	7.0	6.5	K	75	良好	白	SK10	肥前系 施釉 染付 焼継 SK7と接合	
197	磁器	鉢	13.4	5.6	5.9	—	90	良好	白	SK10	肥前系 施釉 染付 六角	51-5
198	磁器	合子	5.3	2.2	5.3	K	100	良好	白	SK10	肥前系 施釉 外面染付	
199	磁器	猪口	8.3	6.0	6.3	K	80	良好	白	SK10	肥前系 施釉 染付	
200	磁器	猪口	7.9	6.1	6.1	—	100	良好	白	SK10	肥前系 施釉 染付	
201	磁器	猪口	7.4	5.8	5.3	K	70	良好	白	SK10	肥前系 施釉 染付 高台内釘書き「ト」	51-6 59-7
202	磁器	猪口	6.1	5.6	4.3	K	100	良好	白	SK10	肥前系 施釉 染付 高台内釘書き「ト」	
203	磁器	猪口	6.6	5.0	5.2	K	100	良好	白	SK10	肥前系 施釉 染付 高台内墨書	51-9
204	陶器	坏	6.0	3.8	2.7	H	80	良好	灰黄	SK10	瀬戸美濃系 灰釉	
205	陶器	坏	5.9	3.9	2.8	H	95	良好	黄灰	SK10	瀬戸美濃系 灰釉 外面煤付着	
206	陶器	土瓶	—	[2.5]	(7.0)	EGIK	50	良好	浅黄橙	SK10	松岡系 外面うのふ釉	51-8
207	陶器	香炉	(11.2)	5.9	7.9	IK	40	良好	灰白	SK10	瀬戸美濃系 灰釉	
208	陶器	土瓶	—	[5.0]	—	EGIK	15	良好	浅黄橙	SK10	松岡系 外面うのふ釉 SK7接合	51-10
209	瓦質土器	焰烙	39.2	5.3	35.4	CHI	60	普通	橙	SK10	底部シワ状痕 外面下位ケズリ ほぼ酸化炎焼成 赤色粒子多量	51-11
210	磁器	碗	(9.5)	4.1	(4.7)	K	30	良好	白	SK11	肥前系 施釉 外面染付 焼継 煤付着	
211	磁器	碗	(11.0)	[4.5]	—	—	25	良好	白	SK11	肥前系 施釉 外面染付	
212	磁器	碗	8.4	4.5	3.2	K	75	良好	白	SK11	瀬戸美濃系 施釉 染付	
213	磁器	碗	7.2	5.9	3.6	—	100	良好	白	SK11	瀬戸美濃系 施釉 外面染付	
214	磁器	碗	(9.4)	3.7	(3.6)	K	30	良好	白	SK11	肥前系 施釉 内面色絵	52-1
215	磁器	蓋物	(8.8)	6.8	[5.0]	K	40	良好	白	SK11	肥前系 施釉 外面染付	
216	陶器	灯明皿	9.3	1.9	4.0	IK	90	良好	浅黄	SK11	瀬戸美濃系 柿釉 底部拭き取り 内面輪 状重ね焼き痕	
217	陶器	灯明皿	7.0	1.3	3.0	IK	75	普通	紫灰	SK11	瀬戸美濃系 柿釉 底部拭き取り 輪状重ね 焼き痕	
218	陶器	油受皿	10.2	2.1	5.0	—	100	良好	灰白	SK11	瀬戸美濃系 柿釉 底部拭き取り 重ね焼き痕	
219	陶器	皿か	—	[3.3]	—	—	5	良好	灰白	SK11	源内焼風軒質施釉陶器 銅緑釉 内面型押	51-12
220	陶器	香炉	(9.0)	(7.5)	—	HIK	10	良好	灰黄	SK11	京都信楽系 白土化粧 施釉 口縁銅緑釉	
221	陶器	甕	(19.0)	[12.0]	—	DI	15	普通	赤褐	SK11	瀬戸美濃系 柿釉	
222	陶器	甕	21.2	19.7	15.0	EIK	95	良好	灰白	SK11	瀬戸美濃系 柿釉 外面鉄釉流し掛け 内面 目跡4 高台内墨書	52-3
223	陶器	擂鉢	(30.5)	11.9	(14.0)	EIK	25	良好	にぶい赤褐	SK11	堺明石系 被熱 SK13接合	
224	瓦質土器	火消壺	22.2	20.5	21.5	HIK	70	普通	黒	SK11	底部ヘラナデ 体部下半ケズリ 体部下端 部ミガキ	52-4
225	瓦質土器	火消壺	20.5	22.0	19.5	CEIK	75	普通	黒	SK11	底部ケズリ 体部下端ケズリ，弱いミガキ 脚3 SK9接合	
226	土師質土器	焰烙	(35.0)	6.5	(35.7)	CIK	55	普通	灰黄	SK11	底部シワ状痕 体部下位ケズリ 煤付着 SK9-10接合	52-2
227	磁器	碗	9.6	5.1	3.8	—	100	良好	灰白	SK12	肥前系 施釉 外面染付	
228	磁器	碗	(8.4)	4.5	2.8	K	60	普通	灰白	SK12	肥前系 施釉 外面コンニャク印版染付	
229	磁器	碗	(8.8)	5.6	(3.4)	—	55	普通	灰白	SK12	肥前系 施釉 外面染付	
230	磁器	碗	8.2	4.1	3.2	—	100	良好	灰白	SK12	肥前系 施釉 外面染付 内面コンニャク印 版染付	
231	磁器	碗	7.0	6.0	3.2	K	100	普通	白	SK12	肥前系 施釉 染付 釉ムラ激しい 粗雑	52-5
232	磁器	碗	(11.5)	6.2	6.2	K	30	普通	白	SK12	肥前系 施釉 染付	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
233	磁器	碗	8.5	5.6	3.7	—	100	良好	白	SK12	肥前系 施釉 染付 同品他3個体あり	
234	磁器	碗	8.2	5.0	2.9	—	100	良好	白	SK12	肥前系 施釉 染付 内面紅付着 同品他1個体	52-6
235	磁器	碗	7.6	5.2	3.3	—	100	良好	白	SK12	肥前系 施釉 外面染付 同品他2個体	
236	磁器	碗	(12.0)	[5.0]	—	K	15	良好	白	SK12	肥前系 施釉 染付	
237	磁器	碗	(9.8)	[4.1]	—	K	30	良好	白	SK12	肥前系 施釉 染付	
238	磁器	碗	9.3	4.7	3.9	K	65	良好	白	SK12	瀬戸美濃系 施釉 外面染付	
239	磁器	碗	(10.0)	[5.1]	(4.0)	K	25	良好	白	SK12	瀬戸美濃系 施釉 染付	
240	磁器	碗	(9.4)	5.4	(4.0)	K	45	良好	白	SK12	肥前系 施釉 染付 焼継印	
241	磁器	碗	10.1	5.9	4.1	K	70	良好	白	SK12	肥前系 施釉 染付 焼継印 SK7, 10接合	52-9
242	磁器	碗	9.3	4.9	3.8	K	95	良好	白	SK12	瀬戸美濃系 施釉 染付	
243	磁器	碗	(9.8)	5.1	(4.0)	K	45	良好	白	SK12	瀬戸美濃系 施釉 染付	
244	磁器	碗	9.5	5.3	3.9	—	100	良好	白	SK12	瀬戸美濃系 施釉 染付	
245	磁器	碗	9.2	4.9	3.8	—	95	良好	白	SK12	瀬戸美濃系 施釉 染付 同品他2個体 SK9接合	
246	磁器	碗	9.6	5.3	4.0	—	90	良好	白	SK12	瀬戸美濃系 施釉 染付 同品他4個体 SK5接合	
247	磁器	蓋	(9.8)	2.9	3.8	K	50	良好	白	SK12	肥前系 端反碗 施釉 染付 焼継印 煤付着	
248	磁器	蓋	(9.6)	2.7	4.0	K	40	良好	白	SK12	肥前系 端反碗 施釉 染付	
249	磁器	蓋	8.2	2.7	3.2	K	80	良好	白	SK12	肥前系 端反碗 施釉 染付	
250	磁器	碗	7.5	5.5	3.7	—	95	良好	白	SK12	瀬戸美濃系 施釉 外面染付	
251	磁器	碗	7.3	5.6	3.6	K	90	良好	白	SK12	肥前系 施釉 外面染付 同品他1個体あり SK10接合	
252	磁器	碗	7.7	5.8	3.7	—	95	普通	白	SK12	瀬戸美濃系 施釉 外面染付 同品他2個体 SK9, 11接合	
253	磁器	碗	7.4	5.3	3.6	K	70	良好	白	SK12	瀬戸美濃系 施釉 外面染付 同品他5個体 SK11接合	
254	磁器	坏	(6.0)	2.8	(2.9)	—	70	普通	白	SK12	瀬戸美濃系 施釉 染付	
255	磁器	坏	(6.4)	2.8	2.5	K	55	良好	白	SK12	肥前系 施釉	
256	磁器	坏	(5.5)	[2.9]	2.2	K	60	普通	白	SK12	瀬戸美濃系 施釉 内面染付	
257	磁器	坏	6.4	3.1	2.4	—	100	普通	白	SK12	肥前系 施釉 外面染付	
258	磁器	坏	(7.6)	3.5	2.7	K	良好	白	SK12	肥前系 施釉 外面染付		
259	磁器	坏	7.6	3.4	3.2	K	75	良好	白	SK12	肥前系 施釉 内面染付	52-7
260	磁器	坏	6.4	3.3	2.8	—	90	良好	白	SK12	肥前系 施釉 外面染付	52-8
261	磁器	皿	(13.1)	3.2	(6.7)	K	50	普通	白	SK12	肥前系 施釉 内面染付	
262	磁器	皿	(14.8)	3.7	(8.6)	K	45	普通	白	SK12	肥前系 施釉 染付	
263	磁器	皿	13.0	3.3	8.2	K	90	良好	白	SK12	肥前系 施釉 染付	
264	磁器	皿	14.3	3.6	8.7	K	80	良好	白	SK12	肥前系 施釉 染付 SK5, 7, 10接合	
265	磁器	皿	11.4	2.3	7.0	—	95	普通	白	SK12	瀬戸美濃系 クロム釉青磁 焼継印	
266	磁器	皿	—	1.8	(7.0)	K	20	良好	灰白	SK12	肥前系 施釉 内面染付	
267	磁器	鉢	(14.3)	7.6	6.5	K	80	良好	白	SK12	肥前系 施釉 染付	
268	磁器	鉢	(14.7)	6.6	7.2	K	45	普通	白	SK12	肥前系 施釉 染付 同品他1個体 被熱	
269	磁器	鉢	14.8	6.6	6.3	—	100	良好	白	SK12	肥前系 施釉 染付 底部墨痕 SK13接合	
270	磁器	鉢	(14.2)	6.2	[5.7]	—	50	良好	白	SK12	肥前系 施釉 染付 SK8接合	
271	磁器	蓋	7.3	2.6	—	—	95	普通	白	SK12	肥前系 蓋物 施釉 外面染付	
272	磁器	香炉	7.2	3.6	3.2	K	90	良好	白	SK12	肥前系 外面青磁釉 内面円盤状目跡 被熱 SK5, 9, 11接合	
273	陶器	碗	(9.0)	5.5	2.8	EH	65	普通	灰白	SK12	瀬戸美濃系 灰釉 外面鉄絵	
274	陶器	碗	(7.8)	5.6	3.8	EK	60	普通	褐灰	SK12	瀬戸美濃系 漆黒釉 鉄釉 外面トビガンナ	52-10
275	陶器	碗	(9.2)	5.0	(3.8)	EK	30	普通	灰白	SK12	京都信楽系 灰釉 外面鉄絵	
276	陶器	碗	12.8	5.6	3.7	IL	80	普通	褐灰	SK12	瀬戸美濃系 灰釉 外面鉄絵	
277	陶器	碗	11.4	6.2	3.6	EIK	35	普通	赤灰	SK12	瀬戸美濃系 灰釉	52-11
278	陶器	碗	(10.6)	6.6	(4.1)	IK	30	良好	黄灰	SK12	肥前系 刷毛目釉	
279	陶器	蓋物	(9.8)	(5.0)	—	—	25	普通	灰黄	SK12	瀬戸美濃系 柿釉	
280	陶器	坏	6.4	4.1	3.0	—	95	良好	灰白	SK12	瀬戸美濃系 灰釉 被熱か	
281	陶器	坏	6.5	3.3	2.4	IK	70	普通	灰白	SK12	京都信楽系 灰釉 外面色絵「紅浅」胎土 磁器質	52-12
282	陶器	坏	5.9	3.5	3.2	—	90	普通	灰黄	SK12	瀬戸美濃系 灰釉 高台煤付着	
283	陶器	皿	—	[1.7]	11.2	K	95	良好	灰白	SK12	源内燒風軟質施釉陶器 銅緑釉 内面型押 底部目跡3 SK11同系品あり	53-1

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
284	陶器	灯明皿	9.5	2.0	4.1	HK	70	普通	灰黄褐	SK12	瀬戸美濃系 柿釉 外面拭き取り 輪状重ね 焼き痕	
285	陶器	灯明皿	11.0	2.1	4.3	K	50	普通	灰白	SK12	瀬戸美濃系 柿釉 外面拭き取り 輪状重ね 焼き痕	
286	陶器	油受皿	10.1	2.2	4.6	K	100	良好	灰黄	SK12	瀬戸美濃系 柿釉 底部拭き取り 輪状重ね 焼き痕	
287	陶器	油受皿	10.1	1.7	4.4	IK	35	普通	灰白	SK12	瀬戸美濃系 柿釉 外面拭き取り	
288	陶器	秉燭	—	4.7	4.4	IK	80	良好	灰	SK12	鉄釉 回転糸切(右)被熱	
289	陶器	擂鉢	—	[4.7]	13.1	EHIK	50	良好	にぶい赤褐	SK12	瀬戸美濃系 鉄釉 回転糸切(左)底部重ね焼き痕	
290	陶器	擂鉢	—	[7.6]	(15.2)	EIK	30	良好	灰白	SK12	丹波系 降灰 外面ナデ	
291	陶器	擂鉢	35.6	15.3	15.3	IKL	85	普通	赤褐	SK12	堺明石系	
292	陶器	植木鉢	13.3	12.7	7.1	HIK	95	普通	黒褐	SK12	鉄釉 高台抉り1 内面墨書	53-2
293	陶器	花生	5.1	[9.6]	—	IK	75	普通	オリーブ灰	SK12	瀬戸美濃系 鉄釉灰釉掛け分け 内面灰釉	
294	陶器	徳利	—	[10.0]	6.5	IK	55	普通	暗赤褐	SK12	瀬戸美濃系 かぶら形 柿釉 底部拭き取り	53-3
295	陶器	油壺	2.5	9.4	5.0	K	100	普通	黄灰	SK12	瀬戸美濃系 外面灰釉 被熱	53-4
296	陶器	甕	—	[4.4]	(13.8)	EHIK	30	良好	灰白	SK12	瀬戸美濃系 柿釉 内面目跡 底部墨書「な」	53-5 59-8
297	陶器	土瓶	(7.6)	12.1	7.7	—	70	良好	にぶい黄橙	SK12	鉄釉 底部墨書	53-7
298	陶器	土瓶	(6.0)	12.7	8.7	—	70	良好	灰黄	SK12	施釉 外面白土染付 底部墨書	
299	陶器	土瓶	6.0	12.7	(7.4)	HK	65	普通	にぶい黄橙	SK12	施釉 外面白土化粧, 三彩	
300	陶器	土瓶	(6.1)	[10.0]	(5.8)	—	60	良好	灰白	SK12	外面銅緑釉	
301	陶器	土瓶	—	[9.0]	—	IK	5	良好	にぶい黄橙	SK12	施釉 外面イッチン 注口部強いロクロ目	
302	陶器	蓋	(5.6)	2.3	—	—	60	普通	明赤褐	SK12	朱泥	53-8
303	陶器	土瓶	(6.7)	9.1	(6.6)	—	70	良好	浅黄橙	SK12	鉄釉 底部二次穿孔 被熱 SK9・10接合	53-6
304	陶器	蓋	—	(1.8)	—	—	40	普通	明赤褐	SK12	朱泥	53-9
305	陶器	蓋	6.1	3.0	—	IK	90	普通	灰白	SK12	土瓶 外面銅緑釉	
306	陶器	蓋	5.4	[1.7]	—	K	75	良好	浅黄	SK12	土瓶 外面灰釉, 鉄絵	
307	瓦質土器	竈鍔	(34.3)	2.9	(36.0)	CEHIK	10	普通	灰	SK12	燻す	53-10
308	瓦質土器	火鉢	(25.0)	[12.0]	19.0	CHIK	90	普通	灰黄	SK12	底部シワ状痕 外面中位ケズリ 脚穿孔2 内面火箸痕 口縁敲打痕 煙付着	53-11
309	瓦質土器	焙烙	—	[5.2]	—	CIK	10	普通	にぶい褐	SK12	底部シワ状痕 体部下半ケズリ 補修痕2	
310	瓦質土器	焙烙	厚さ0.6			CIK	5	普通	にぶい橙	SK12	底部シワ状痕 補修痕2(銅線付)	
311	かわらけ	小皿	9.2	1.7	5.0	AK	35	普通	橙	SK12	江戸在地系か 回転糸切 外面煤付着	
312	かわらけ	小皿	—	[1.5]	—	CHK	10	普通	にぶい褐	SK12	江戸在地系 胎土粉質	
313	土師質土器	焙烙	(32.2)	6.0	(32.1)	CHI	65	普通	橙	SK12	底部シワ状痕, 灰状付着物 体部下位ケズリ, 内面ランダムなナデ	
314	土師質土器	焙烙	(32.4)	[7.9]	—	ACEHIK	20	普通	にぶい黄橙	SK12	江戸在地系 刻印「一」	53-12
315	磁器	碗	7.7	6.2	3.8	K	90	良好	白	SK13	瀬戸美濃系 施釉 外面染付 SK5と接合	
316	磁器	坏	—	2.9	—	K	10	良好	白	SK13	瀬戸美濃系 施釉 内面染付	
317	磁器	徳利	—	[12.6]	4.4	—	90	良好	白	SK13	肥前系 外面施釉, 染付	
318	磁器	皿	(8.4)	2.6	3.4	K	50	良好	灰白	SK13	肥前系 施釉	
319	陶器	碗	9.0	5.0	3.1	K	80	普通	灰白	SK13	京都信楽系 灰釉	54-1
320	陶器	坏	6.2	5.0	3.0	HK	80	普通	灰白	SK13	瀬戸美濃系 灰釉 SK24と接合	
321	陶器	香炉	9.5	7.5	9.9	EHIK	100	良好	灰白	SK13	瀬戸美濃系 銅緑釉 外面型押し紋様 被熱	54-2
322	陶器	香炉	(10.1)	[8.1]	—	IK	50	良好	灰黄	SK13	肥前系 白土化粧 施釉 外面銅緑釉流し SK5接合	54-3
323	磁器	碗	(7.3)	[2.7]	—	K	25	良好	白	SK14	瀬戸美濃系 施釉 外面染付	
324	磁器	徳利	—	9.0	5.1	K	50	普通	灰白	SK14	肥前系 外面施釉, 染付	
325	磁器	爛徳利	—	[14.6]	—	K	40	普通	白	SK14	瀬戸美濃系 施釉 上絵付(赤)	54-4
326	磁器	坏	(6.8)	[2.9]	—	K	15	普通	白	SK15	瀬戸美濃系 施釉 染付	
327	磁器	碗	7.2	[2.8]	—	K	20	普通	白	SK18	肥前系 施釉 染付	
328	磁器	坏	—	[1.4]	2.5	—	20	普通	白	SK18	瀬戸美濃系 施釉 内面色絵, 金彩	
329	土師質土器	目皿	(13.7)	[1.4]	(14.6)	CHIK	10	普通	橙	SK18	砂目底	
330	陶器	甕	—	(11.5)	—	IK	10	普通	褐灰	SK19	笠間系か 内面鉄釉 外面鉄釉・銅緑釉流し掛け	54-5
331	土師質土器	焜炉	—	(4.3)	(10.4)	AEHI	10	普通	橙	SK19	三河産 中筒	
332	陶器	蓋	10.1	4.2	—	HIK	60	普通	にぶい黄橙	SK19	土瓶 外面白土化粧, 施釉, 三彩	
333	磁器	碗	(10.1)	[4.6]	—	K	5	良好	灰白	SK20	肥前系 施釉 外面染付	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
334	陶器	皿	—	[2.5]	—	EHIK	5	普通	灰白	SK20	瀬戸美濃系 内面灰釉	
335	磁器	皿	—	[1.4]	(3.8)	K	—	普通	白	SK21	肥前系 施釉 円盤状製品転用 26.4g	54-6
336	施釉土器	油受皿	—	[1.7]	—	HI	5	普通	橙	SK23	透明釉	
337	磁器	碗	10.1	[4.4]	—	K	20	良好	白	SK24	肥前系 施釉 染付 被熱	
338	磁器	碗	(9.3)	5.1	3.8	K	20	良好	白	SK24	肥前系 施釉 染付	
339	磁器	蓋	9.2	2.7	(3.8)	K	45	普通	白	SK24	肥前系 端反碗 施釉 染付	
340	磁器	坏	6.1	2.9	3.0	K	60	普通	白	SK24	瀬戸美濃系 施釉 内面色絵	54-7
341	陶器	碗	6.8	4.9	3.3	IK	95	良好	灰白	SK24	萩系 内面糠白釉 外面ピラ掛け	54-8
342	陶器	灯明皿	10.5	2.7	4.3	K	100	良好	浅黄	SK24	京都信楽系 灰釉 見込みビン痕 3, 櫛目 3 条	
343	陶器	灯明皿	(11.3)	2.5	5.0	K	30	良好	灰白	SK24	京都信楽系 灰釉 胎土磁器質	
344	陶器	油受皿	(10.6)	2.2	4.1	K	85	良好	浅黄	SK24	京都信楽系 灰釉	
345	陶器	蓋	5.6	3.0	—	IK	90	普通	にぶい褐	SK24	土瓶 外面鉄釉	54-9
346	陶器	蓋	4.9	[1.8]	—	IK	95	普通	灰黄	SK24	急須 外面鉄釉	
347	瓦質土器	焜炉	(36.1)	28.4	(34.5)	CIK	50	良好	暗灰	SK24	外面櫛描き 内面強いナデ	54-10
348	土師質土器	焙烙	32.0	5.5	32.5	CHIK	90	普通	にぶい橙	SK24	砂目底 内面円周状のナデ	
349	かわらけ	小皿	6.5	1.0	3.7	CIK	95	普通	橙	SK24	胎土粉質 回転糸切 (左)	54-11
350	土師質土器	焼塙壺	(6.3)	[4.4]	—	ACHI	20	普通	赤橙	SK24	江戸在地系	54-12
351	土師質土器	焼塙壺	(6.4)	5.1	(4.4)	ACEIK	30	普通	橙	SK24	江戸在地系	54-13
352	磁器	碗	—	[2.1]	—	K	5	良好	白	SK25	瀬戸美濃系 施釉 染付	
353	磁器	碗	—	(5.2)	—	K	25	良好	白	SK26	瀬戸美濃系 施釉 染付	
354	陶器	擂鉢	(32.6)	[11.7]	—	IK	30	普通	灰白	SK26	益子系 柿釉	
355	陶器	甕	(29.6)	[7.7]	—	EIK	10	普通	淡黄	SK26	灰釉 外面銅緑釉, 長石釉流し掛け	
356	磁器	坏	5.6	3.2	2.7	K	60	普通	白	SK26	瀬戸美濃系 施釉 体部中位突帶	
357	磁器	坏	—	(2.0)	(2.7)	K	30	普通	白	SK26	瀬戸美濃系 施釉 内面染付	
358	陶器	坏	—	(3.0)	2.9	—	30	普通	灰白	SK26	瀬戸美濃系 灰釉	
359	陶器	蓋	(7.2)	1.9	2.4	IK	50	良好	灰白	SK26	急須 外面灰釉, 鉄絵	
360	磁器	碗	(9.3)	5.0	(3.7)	K	40	良好	白	SK28	瀬戸美濃系 施釉 染付 被熱	
361	磁器	坏	(6.6)	3.3	[2.8]	K	55	良好	白	SK29	瀬戸美濃系 施釉 染付	
362	磁器	碗	(9.6)	[3.7]	—	K	30	普通	白	SK29	瀬戸美濃系 施釉 染付	
363	磁器	蓋	9.2	2.9	(4.0)	K	80	良好	白	SK29	肥前系 施釉 染付	
364	磁器	蓋	(7.6)	2.3	3.4	K	75	良好	白	SK29	瀬戸美濃系 施釉 染付	
365	磁器	坏	7.2	5.1	2.7	K	75	普通	白	SK29	瀬戸美濃系 施釉 外面染付	
366	磁器	坏	7.0	4.5	2.9	K	75	普通	白	SK29	瀬戸美濃系 施釉 外面染付	
367	磁器	坏	6.3	3.0	2.3	—	85	良好	白	SK29	肥前系 施釉 外面染付 内面上絵付 (青)	
368	磁器	碗	(12.2)	[3.0]	—	K	10	普通	白	SK30	肥前系 施釉 外面染付	55-1
369	磁器	碗	(11.4)	5.9	(5.2)	K	20	普通	白	SK30	肥前系 施釉 染付 漆継	55-1
370	磁器	碗	—	[2.6]	4.8	K	30	普通	白	SK30	肥前系 施釉 染付 外面青磁釉	55-1
371	陶器	碗	8.4	[4.1]	—	IK	30	普通	黄灰	SK30	瀬戸美濃系 漆黒釉 鉄釉 外面トビガンナ	55-1
372	陶器	碗	(10.0)	[3.9]	—	EK	20	普通	灰白	SK30	瀬戸美濃系 灰釉 外面鉄絵	55-1
373	陶器	香炉	(6.2)	3.4	(4.4)	I	45	普通	赤灰	SK30	瀬戸美濃系 灰釉	55-1
374	陶器	皿	(13.0)	3.2	(8.3)	I	20	普通	灰白	SK30	瀬戸美濃系 灰釉 内面摺絵 被熱	55-1
375	磁器	碗	(7.4)	[5.2]	—	K	10	良好	灰白	SK30	肥前系 外面青磁釉 内面染付	55-1
376	陶器	坏	(7.3)	4.1	3.4	HIK	30	普通	浅黄	SK30	瀬戸美濃系 灰釉 被熱	55-1
377	陶器	灯明皿	7.4	1.8	3.5	IK	80	普通	灰	SK30	瀬戸美濃系 灰釉 被熱	55-1
378	かわらけ	小皿	(8.4)	[1.5]	—	HK	30	普通	橙	SK30	胎土粉質	55-1
379	磁器	碗	(9.0)	4.7	3.0	—	60	良好	灰白	SK32	瀬戸美濃系 施釉 染付 内面陰刻 被熱	
380	磁器	坏	—	[4.2]	(3.2)	K	20	良好	白	SK32	瀬戸美濃系 施釉 染付	
381	磁器	坏	(6.1)	2.8	2.4	—	60	良好	白	SK32	肥前系 施釉 外面染付 内面上絵付 (青)	
382	陶器	徳利	—	[11.8]	—	CHIK	35	普通	明褐灰	SK32	備前系か 体部凹み残存	55-2
383	磁器	碗	11.3	4.8	4.1	K	80	良好	白	SK33	瀬戸美濃系 施釉 型紙摺絵染付 見込み蛇の目釉剥ぎ	55-4
384	磁器	皿	—	[1.7]	(8.8)	K	25	良好	白	SK33	瀬戸美濃系 施釉 内面陰刻	
385	磁器	猪口	(4.5)	3.3	3.0	K	60	良好	白	SK33	瀬戸美濃系 施釉	
386	陶器	坏	—	[2.5]	3.1	K	40	普通	灰	SK33	大堀相馬系 灰釉 内面陽刻 刻印「相馬」	55-3 59-9
387	陶器	鉢	16.4	8.6	8.2	HK	80	普通	灰白	SK33	灰釉 見込みビン痕 6 植木鉢転用 (穿孔2)	
388	陶器	徳利	—	(18.1)	10.2	K	90	普通	灰白	SK33	灰釉 高台内鉄釉 外面鉄絵	55-5

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
389	陶器	甕	—	[2.3]	—	EHI	15	普通	灰白	SK33	瀬戸美濃系 柿釉 高台底具転用	
390	陶器	湯たんぽ	2.3	8.9	21.9	H	100	普通	灰白	SK33	笠間系 鉄釉 コルク栓残存	55-6
391	瓦質土器	火鉢	(27.0)	13.3	23.3	CDIK	50	普通	浅黄橙	SK33	砂目底 外面菊花スタンプ 口縁煤付着	55-7
392	磁器	碗	(8.5)	[2.9]	—	K	5	良好	白	SK34	瀬戸美濃系 施釉 染付	
393	磁器	碗	6.9	5.2	3.1	K	75	良好	白	SK34	瀬戸美濃系 施釉 外面染付	
394	陶器	爛徳利	—	6.4	7.4	—	40	普通	灰白	SK34	京都信楽系 外面灰釉 底部墨書「舍住吉屋…」	55-8 59-10
395	土師質土器	焙烙	33.0	5.5	34.1	CHIK	80	普通	淡赤橙	SK34	砂目底 内面円周状のナデ 煙付着	
396	土師質土器	鍋	長さ 6.3 幅 3.6			AHIK	100	普通	にぶい橙	SK35	把手	
397	土師質土器	焜炉	—	[10.8]	—	ADEHIK	5	普通	にぶい黄橙	SK35	三河産 外面ミガキ 口縁煤付着	
398	磁器	鉢	—	4.8	—	—	20	普通	白	SK36	肥前系 施釉 染付	
399	陶器	香炉	10.6	8.2	10.3	IK	60	普通	灰白	SK36	瀬戸美濃系 外面長石釉 高台抉り 3	56-1
400	磁器	坏	(5.4)	2.7	2.6	—	25	普通	白	SK37	瀬戸美濃系 施釉 外面染付 内面色絵	
401	陶器	爛徳利	—	[19.0]	6.5	HIK	90	良好	淡黄	SK37	京都信楽系 外面灰釉, 鉄絵	
402	陶器	爛徳利	—	[10.2]	—	K	20	良好	灰白	SK37	京都信楽系 外面灰釉, 鉄絵 磁器質	
403	陶器	鍋	(17.5)	[7.8]	(6.0)	—	30	普通	褐灰	SK37	柿釉 内面目跡 1 残存	
404	磁器	坏	8.5	5.1	3.5	K	95	普通	白	SK38	瀬戸美濃系 クロム青磁釉 外面染付	
405	磁器	坏	7.6	3.0	3.0	K	60	普通	白	SK38	瀬戸美濃系 施釉 内面多彩, 金彩	
406	磁器	急須	(5.3)	6.0	(5.5)	—	40	良好	白	SK38	瀬戸美濃系 施釉 外面ゴム印版染付	
407	磁器	戸車	3.6	0.7	3.6	—	100	良好	白	SK38	肥前系 側面, 内面施釉	56-2
408	瓦質土器	焜炉	—	[7.9]	—	CIK	5	普通	黄灰	SK38	内面強いナデ 煙す	
409	土師質土器	焜炉	(22.6)	26.2	(23.8)	AEHIK	50	良好	橙	SK38	三河産 外面ミガキ 輪高台抉り 刻印	
410	土師質土器	鍋	(17.4)	[5.5]	(9.0)	HIK	20	普通	にぶい橙	SK38	底部回転ヘラケズリ	
411	瓦質土器	火鉢	(20.0)	[12.0]	—	K	15	普通	黒	SK38	外面ミガキ, ローラースタンプ 煙す	
412	土師質土器	皿	(16.0)	2.1	(13.5)	CHK	35	良好	橙	SK38		56-3
413	瓦質土器	蓋	(25.0)	[3.6]	—	CIK	30	普通	黒	SK38	外面ミガキ, ローラースタンプ 煙す	
414	瓦質土器	火消壺	(20.0)	[18.3]	(18.0)	CHI	20	普通	黒	SK38	外面ミガキ, ローラースタンプ 煙す	
415	瓦質土器	焜炉	—	[9.8]	—	AI	5	普通	黒	SK38	外面櫛描き	
416	土師質土器	焜炉	19.7	[15.9]	—	AEHIKL	80	普通	橙	SK38	三河産 外面ミガキ 刻印	56-4
417	磁器	碗	(8.4)	5.5	(3.0)	K	40	良好	白	SK201	肥前系 施釉 染付	
418	陶器	鉢	(18.2)	4.6	7.3	EIK	55	普通	灰白	SK201	瀬戸美濃系 灰釉 底部墨書「タ■」	56-5 59-11
419	磁器	鉢	18.0	6.8	9.3	K	40	良好	白	SK201	肥前系 施釉 染付 外面青磁釉	
420	陶器	土瓶	7.1	[7.0]	—	IK	25	良好	灰白	SK201	灰釉	
421	瓦質土器	植木鉢	(7.4)	4.8	(4.2)	CHIK	30	普通	にぶい黄橙	SK201	回転糸切 雲母付着	
422	土師質土器	焼塩壺	—	[2.7]	4.2	CHIK	40	良好	赤橙	SK201	江戸在地系 回転糸切(左) 強いクロナデ	
423	瓦質土器	火鉢	—	[7.4]	—	CHIK	5	普通	黒	SK202	脚部ミガキ 煙す	
424	陶器	葉茶壺	—	厚さ 1.0	—	EHK	5	良好	淡黄	SK202	信楽系 内面柿釉 外面無釉, 墨痕	
425	磁器	坏	—	[1.5]	2.5	—	50	良好	白	SK203	瀬戸美濃系 施釉	
426	磁器	皿	9.4	1.8	4.7	K	90	良好	白	SK203	瀬戸美濃系 施釉 内面型押	
427	陶器	油受皿	7.7	1.8	3.5	—	100	良好	淡黄	SK203	瀬戸美濃系 柿釉 底部拭き取り 輪状重ね焼き痕	
428	陶器	行平鍋	(15.6)	[5.3]	—	K	15	良好	淡黄	SK203	鉄釉 外面トビガンナ	
429	瓦質土器	植木鉢	(12.6)	8.5	9.6	CEIK	75	良好	灰	SK203	強いクロナデ 底部ヘラケズリ	56-6
430	磁器	碗	6.6	5.4	3.3	K	55	普通	白	SK205	瀬戸美濃系 施釉 染付	
431	磁器	碗	(7.8)	6.2	(4.4)	K	35	良好	白	SK205	瀬戸美濃系 施釉外面上絵付(青)	56-7
432	磁器	坏	(6.4)	2.7	(2.2)	K	40	良好	白	SK205	瀬戸美濃系 施釉 外面染付 内面上絵付(青)	
433	磁器	坏	5.6	2.8	2.8	K	70	良好	白	SK205	瀬戸美濃系 施釉 外面染付 幅広高台	
434	磁器	皿	(14.7)	4.5	8.6	K	75	良好	白	SK205	肥前系 施釉 内面染付 口紅 底部墨書「キ」	
435	磁器	坏	6.1	3.3	2.8	K	75	良好	白	SK205	瀬戸美濃系 型成形 外面陰刻 口紅	56-8
436	磁器	鉢	—	6.0	(6.2)	K	30	良好	白	SK205	肥前系 施釉 染付 五弁花か	56-9
437	陶器	行平鍋	(17.0)	9.6	(8.4)	K	20	普通	灰黄	SK205	鉄釉 外面トビガンナ 把手型成形「寿」	
438	陶器	土瓶	(5.6)	[8.6]	—	IK	40	良好	灰白	SK205	瓜形 外面銅緑釉	56-10
439	陶器	蓋	(5.2)	[1.8]	—	K	30	良好	灰白	SK205	大堀相馬系 外面銅緑釉 土瓶	56-11
440	磁器	碗	10.5	5.8	4.1	K	100	良好	白	SK207	肥前系 施釉 染付 被熱 同品他2個体	
441	磁器	碗	7.2	6.1	3.2	K	100	良好	白	SK207	瀬戸美濃系 施釉 染付 被熱	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
442	磁器	皿	11.9	2.8	4.6	K	90	良好	白	SK207	肥前系 施釉 染付 被熱	56-12
443	磁器	皿	16.3	4.2	6.8	K	90	良好	白	SK207	瀬戸美濃系 施釉 染付 被熱 SD6 非掲載 に焼継同品あり	57-1
444	磁器	鉢	20.3	8.7	9.9	K	95	良好	白	SK207	肥前系 施釉 染付 焼継印「二」被熱	57-2 59-12
445	磁器	蓋	18.5	3.9	—	K	90	良好	白	SK207	肥前系 蓋物 施釉 外面染付, 色絵 焼継 印3被熱	57-3 59-13
446	陶器	蓋	(6.0)	[2.1]	—	EIK	25	良好	灰白	SK207	松岡系 土瓶 外面うのふ釉	
447	磁器	碗	(9.5)	4.9	3.8	K	55	良好	白	SK208	瀬戸美濃系 施釉 染付	
448	磁器	壺	(7.3)	5.2	(3.4)	K	40	普通	白	SK208	瀬戸美濃系 施釉 染付 外面下位鉄釉	57-4
449	陶器	灯明皿	10.2	1.8	4.3	IK	75	良好	明褐灰	SK208	瀬戸美濃系 柿釉 底部拭き取り 輪状重ね 焼き痕	
450	磁器	碗	(8.7)	5.1	3.8	K	50	良好	白	SK209	瀬戸美濃系 施釉 染付	
451	土師質土器	焙烙	(32.9)	[4.0]	—	CEHIK	30	良好	暗灰黃	SK209	砂目底 煙付着 SK203 接合	
452	磁器	壺	6.0	2.5	2.4	—	90	良好	白	SK210	瀬戸美濃系 施釉 外面染付 内面上絵付 (青)	
453	磁器	碗	(8.2)	[2.8]	—	K	5	良好	白	SK212	肥前系 施釉 外面染付	
454	磁器	壺	6.2	4.2	2.7	K	90	良好	白	SK213	瀬戸美濃系 施釉 外面酸化コバルト染付, 漢詩文 体部面取り	
455	陶器	鍋	(20.7)	[8.4]	—	I	20	良好	褐灰	SK214	鉄釉	
456	瓦質土器	水盤	(41.9)	10.8	34.5	CEI	70	良好	暗灰	SK214	底部シワ状痕 口縁ミガキ 外面下端ケズ リ SK54, SK63 (非) に同品あり	

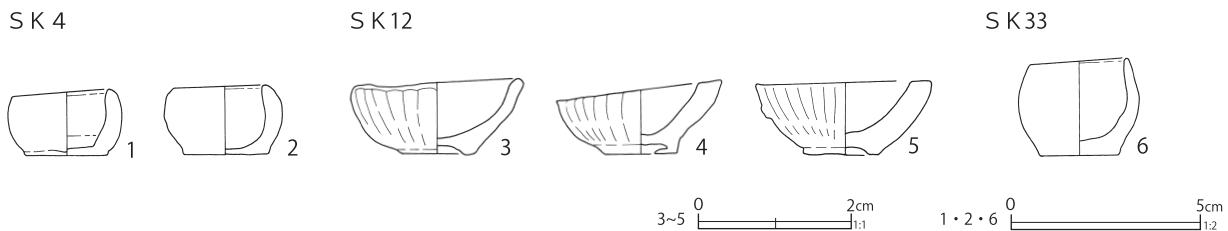
広東碗、233～235は小丸碗である。233は揃いの同品が他に3個体見られる。234の内面には紅が付着している。238・239・242～246は瀬戸美濃系磁器の端反碗である。245は揃いの同品が他に2個体、246は4個体見られる。250～253は磁器の湯呑碗である。251～253は同紋様の染付であるが、251は肥前系、252・253は瀬戸美濃系である。異なる産地で同文様を施す例である。254～260は磁器の壺である。259は肥前系で高台が高く、盃状である。261～266は磁器の皿である。265は焼き継ぎ印が見られるクロム釉青磁の皿であり、混入と考えられる。267～270は肥前系磁器の八角鉢である。269は高台内に墨痕が見られる。270は輪高台である。

273～306は陶器で、274は瀬戸美濃系の鎧茶碗である。外面は漆黒釉と錆釉を掛け分けており、トビカンナを施文している。275は京都信楽系の小杉碗、276は瀬戸美濃系の柳茶碗である。277は瀬戸美濃系の小杉碗であるが、灰色の灰釉が施釉され、外面に鉄絵は見られない。278は肥前系の刷毛目丸碗である。281は京都信楽系の壺で、外面に紅浅鉢が上絵付されている。胎土は緻密で光沢のある磁器質である。同様の壺が栗橋宿本陣

跡、栗橋宿跡第3地点からも複数出土している。紅猪口として使用されていたものと考えられる。283は源内焼風軟質施釉陶器の皿である。銅緑釉が施釉され、内面は型押しの陽刻である。第11号土壙や栗橋宿第1点に同系品が見られる。292は陶器の植木鉢で鉄釉が厚くかけられている。内面には墨書が見られる。294は瀬戸美濃系の徳利である。器形はかぶら形で、柿釉が施釉されている。柿釉徳利の中では珍しい器形である。295は瀬戸美濃系の油壺である。栗橋宿では油壺の出土が少ない印象である。296～298には底部に墨書が見られる。302・304は朱泥製品の蓋である。302は急須の蓋と思われる。

307～314は瓦質・土師質土器である。307は瓦質土器の竈鍔、308は脚付火鉢である。310は瓦質土器の平底焙烙で、補修痕1対が銅線で接合されている。栗橋宿ではこのように銅線で補修された土器が少なからず見られる。金属製品に銅線がしばしば見られるが、このような使い方が一般的であったと考えられる。314は土師質土器の丸底焙烙である。胎土は粉質で内面に「〇」に「一」の刻印が押される。江戸在地系である。

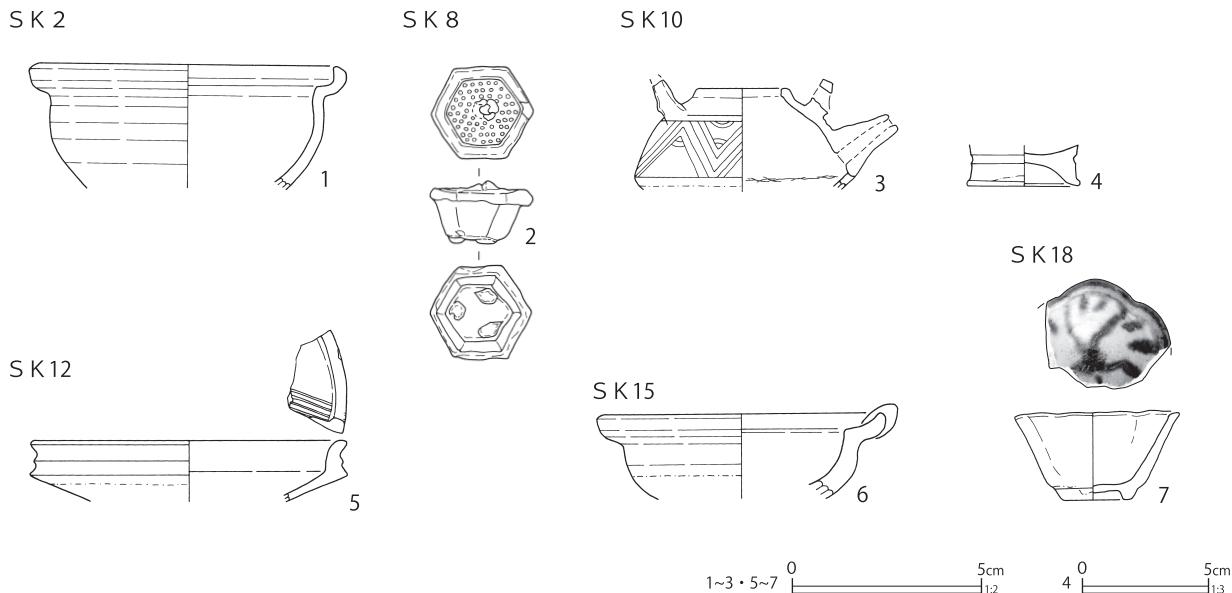
第143図の3～5に土製品の小型器種を図示し



第143図 土壌出土遺物 (27)

第34表 土壌出土遺物観察表 (2) (第143図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	胎土	焼成	色調	遺構名	備考	図版
1	土製品	小壺	2.5	1.7	2.2	9.1	EHIK	普通	にぶい橙	SK4	江戸在地系か 回転糸切 (左) 煤付着	94-1
2	土製品	小壺	2.4	1.8	2.2	9.6	K	普通	にぶい橙	SK4	江戸在地系か 回転糸切 (左) 煤付着	94-1
3	磁器	紅坏	2.3	1.0	1.0	3.4	K	良好	白	SK12	瀬戸美濃系 型成形 施釉	94-2
4	磁器	紅坏	2.2	1.0	1.0	2.9	K	良好	白	SK12	瀬戸美濃系 型成形 施釉	94-2
5	磁器	紅坏	2.3	1.0	1.0	3.4	K	良好	白	SK12	瀬戸美濃系 型成形 施釉	94-2
6	土製品	小壺	2.5	2.5	2.0	10.6	DHIK	良好	橙	SK33	江戸在地系か 回転糸切 内面煤付着	94-1



第144図 土壌出土遺物 (28)

第35表 土壌出土遺物観察表 (3) (第144図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	胎土	焼成	色調	遺構名	備考	図版
1	土製品	ミニチュア	(7.8)	[3.2]	—	9.4	HIK	普通	橙	SK2	江戸在地系 鍋 内面透明釉 外面飴釉	
2	土製品	ミニチュア	2.7	1.7	2.5	6.8	—	普通	橙	SK8	江戸在地系 七輪 白土化粧 透明釉 上絵付 (青)	94-7
3	土製品	ミニチュア	(2.5)	[2.7]	—	8.4	—	良好	灰白	SK10	京都系 土瓶 上下合二枚型 外面透明釉, 銅緑釉	94-8
4	土製品	ミニチュア	—	[1.6]	4.4	9.2	I	普通	灰白	SK10	京都系 火鉢 外面透明施釉 被熱か	94-9
5	土製品	ミニチュア	(8.4)	[1.6]	—	2.9	—	良好	淡橙	SK12	京都系 撃鉢 施釉 (黄)	94-10
6	土製品	ミニチュア	(7.3)	[2.2]	—	8.5	HIK	良好	橙	SK15	江戸在地系 行平鍋 透明釉 把手手捻り	94-11
7	土製品	ミニチュア	(4.3)	2.3	1.7	7.2	—	良好	灰白	SK18	京都系 鉢 型成形 内面施釉 外面銅緑釉	94-12



第145図 土壌出土遺物 (29)

第36表 土壙出土遺物観察表（4）（第145図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	色調	遺構名	備考	図版
1	土製品	鳩笛	[2.3]	1.6	—	3.2	HIK	良好	橙	SK2	江戸在地系 上下合二枚型 中空 透明釉	
2	土製品	人形	[2.2]	2.0	0.7	2.6	H	良好	橙	SK4	江戸在地系 相撲 一枚型 中実	95-18
3	土製品	人形	2.9	2.1	0.7	3.6	H	良好	橙	SK4	江戸在地系 相撲 一枚型 中実	95-18
4	土製品	人形	2.7	2.1	1.9	4.0	—	良好	灰白	SK4	京都系 猿 前後合二枚型 中空 顔料付着（赤）	
5	土製品	人形	7.1	5.3	4.7	43.4	—	良好	橙	SK5	江戸在地系 達磨 前後合二枚型 中空 雲母付着	95-19
6	土製品	人形	[1.9]	[3.1]	[1.5]	4.0	HK	良好	白	SK8	京都系 金魚か 左右合二枚型 中空	
7	土製品	人形	6.1	3.7	2.5	30.3	—	普通	灰白	SK9	京都系 狐 左右合二枚型 中実 台座別造 り（一枚型 中実）透明釉 緑釉 被熱	96-1
8	土製品	人形	7.4	2.8	2.3	27.9	—	良好	白	SK10	京都系 独抱き童子 前後合二枚型 中実 透明釉 緑釉	96-2
9	土製品	人形	7.9	3.3	2.4	37.6	—	良好	白	SK10	京都系 独抱き童子 前後合二枚型 中実 透明釉 緑釉	96-2
10	土製品	人形	7.9	3.2	2.3	38.3	—	良好	白	SK12	京都系 独抱き童子 前後合二枚型 中実 透明釉 緑釉	96-2
11	土製品	鳩笛	2.5	3.4	1.7	5.4	HK	良好	橙	SK18	江戸在地系 上下合二枚型 中空 雲母付着	96-3
12	土製品	ミニチュア	3.2	3.2	[2.2]	11.4	HK	普通	橙	SK34	江戸在地系 建造物 前後合二枚型 開口 透明釉 白土化粧	
13	土製品	碁石	径 2.1		0.5	2.5	HIK	良好	にぶい橙	SK202	江戸在地系 手捻り 中実 雲母付着	96-4
14	土製品	人形	[1.8]	[2.2]	1.8	4.2	HIK	良好	橙	SK208	大黒 手捻り 中実 胎土砂質	96-5
15	土製品	泥面子	径 2.3	—	0.9	6.2	CHK	良好	橙	SK214	一枚型 中実 雲母付着	95-2

た。3～5はいずれも瀬戸美濃系磁器で型成形の紅坯である。第144図の5は土製品ミニチュアで播鉢、第145図の10は土製品人形類で京都系の独抱き童子人形である。

第146図の7は江戸式の軒棧瓦で房が3つ付く変形タイプの唐草文様である。二次利用が見られる。第149図の40・41は丸瓦である。第153図の15～22に木製品を図示した。第156図の7は銅製品の煙管吸口である。

第157図の12～15に石製品を図示した。13・14は流紋岩製砥石で、ノコギリ状工具痕が見られる。15は携帯硯である。第159図の10は硝子製笄である。

第12号土壙は旅籠屋の区画内に掘られた土壙で、遺物組成は碗・壺・皿・鉢類が多い。組物も複数見られ、旅籠屋の持ち物であったことを示唆する内容である。また、第129図234の紅が付着した碗や281の「紅浅」銘の壺、第143図3～5の紅壺といった他の遺構には見られない女性に関する製品が多く出土しているのが特徴である。

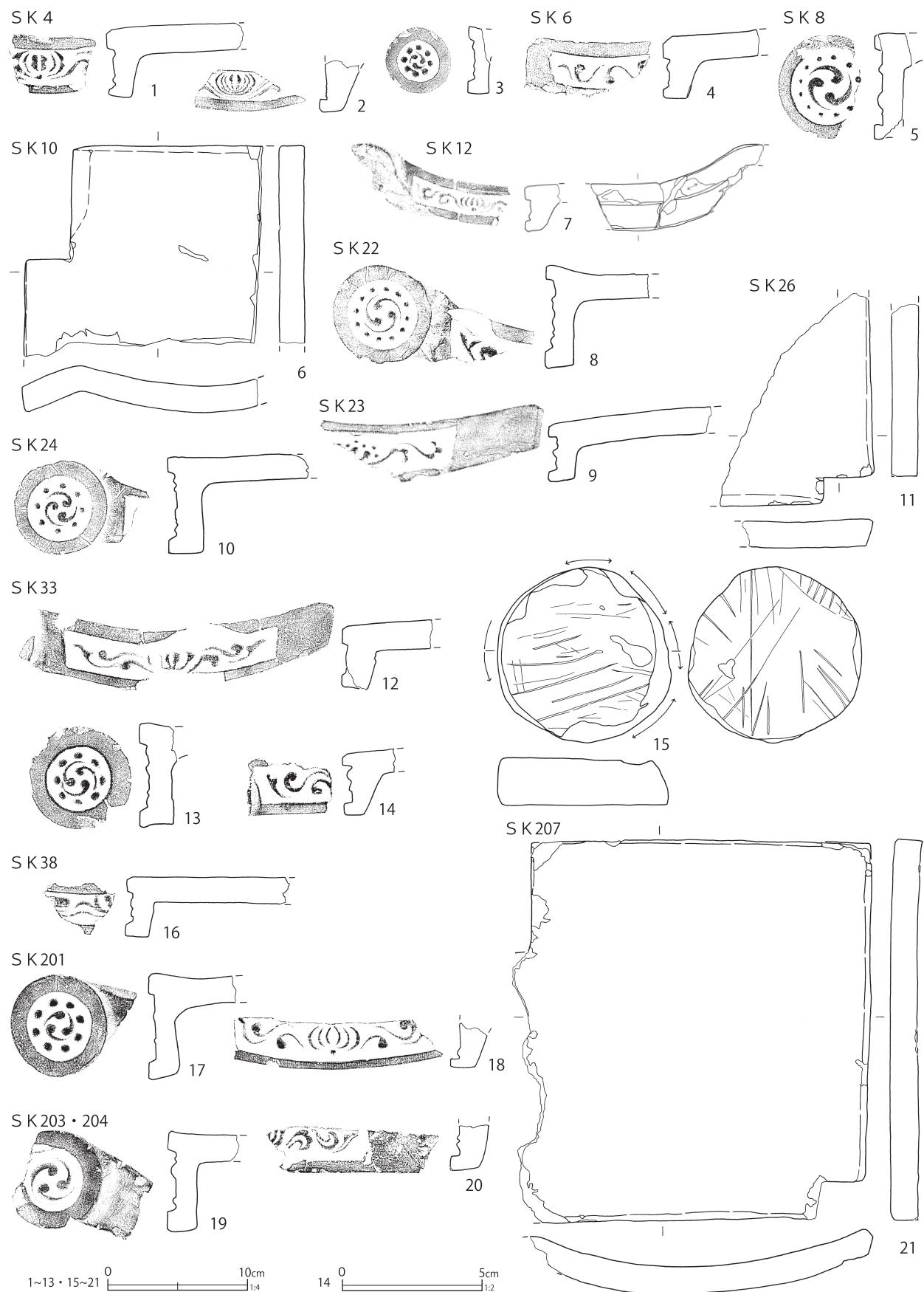
第12号土壙では多量の陶磁器類が出土してい

るが、調査時に整地層などの堆積層ごと掘り込んでいるため、混入品がいくつか見られる。第130図254～256の遺物が最新期の遺物であり、その遺物組成から19世紀第3四半期の遺構と考えられる。

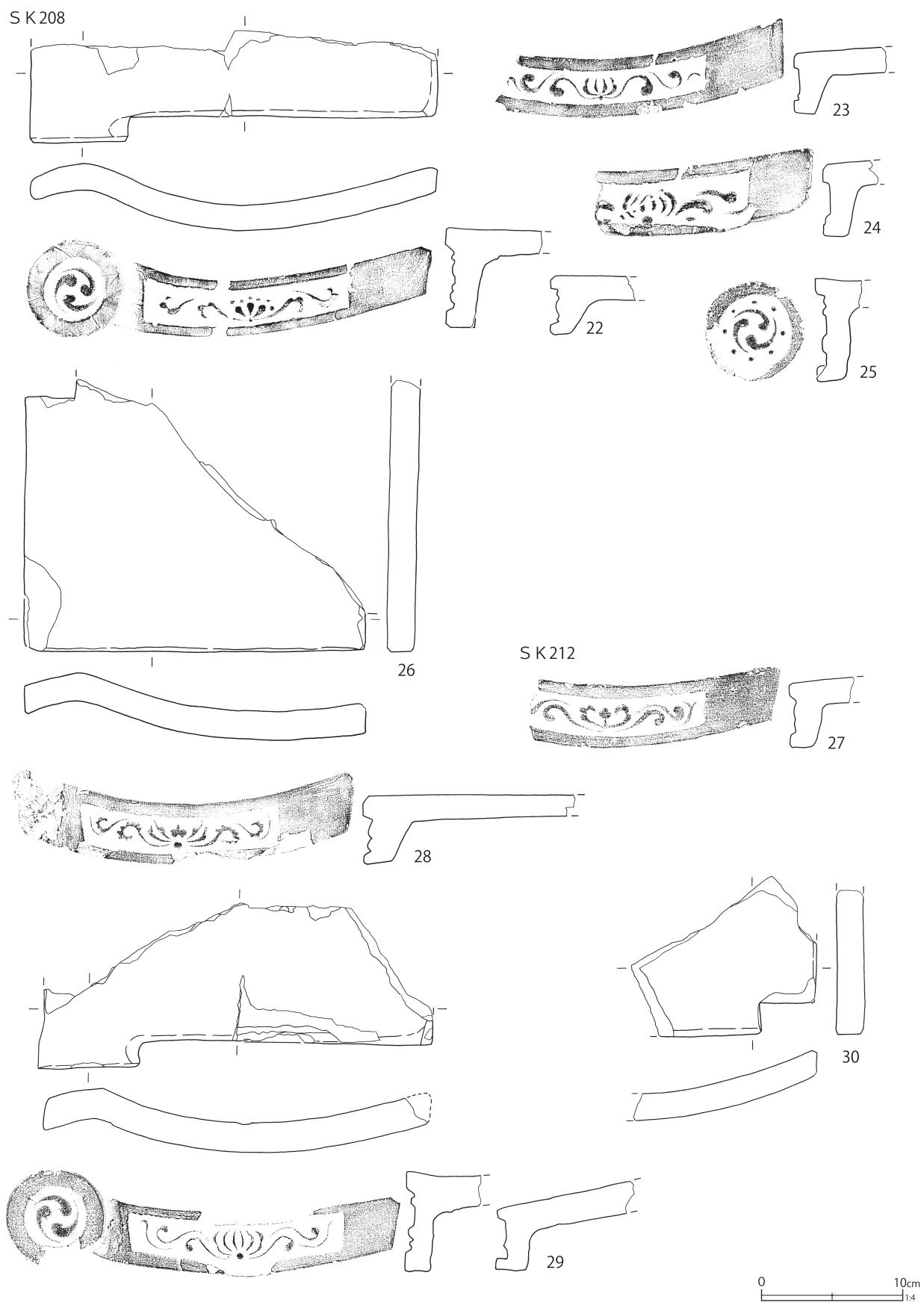
第30号土壙（第113図）

D 6-d 9・10グリッドに位置する。長軸方向 N-76°-Eを示す。第4号溝跡に壊され、平面系が半円状を呈している。第一面遺構の中では最古の遺構である。

出土遺物は第136図の368～378に陶磁器を示した。368～370・375は肥前系磁器である。368は外面にコンニャク印版染付を施した朝顔形碗、369は広東碗、370は外面青磁で内面に染付を施した丸碗、375は筒形碗である。371～374・376・377は瀬戸美濃系陶器である。371は鎧茶碗で、外面が漆黒釉・錆釉を掛け分け、トビカンナを施文する。372はせんじ碗、373は小型の灰釉香炉である。374は御深井の摺絵皿である。376は壺、377は削り込み高台の灰釉灯明皿である。378は胎土が粉質のかわらけ小皿である。

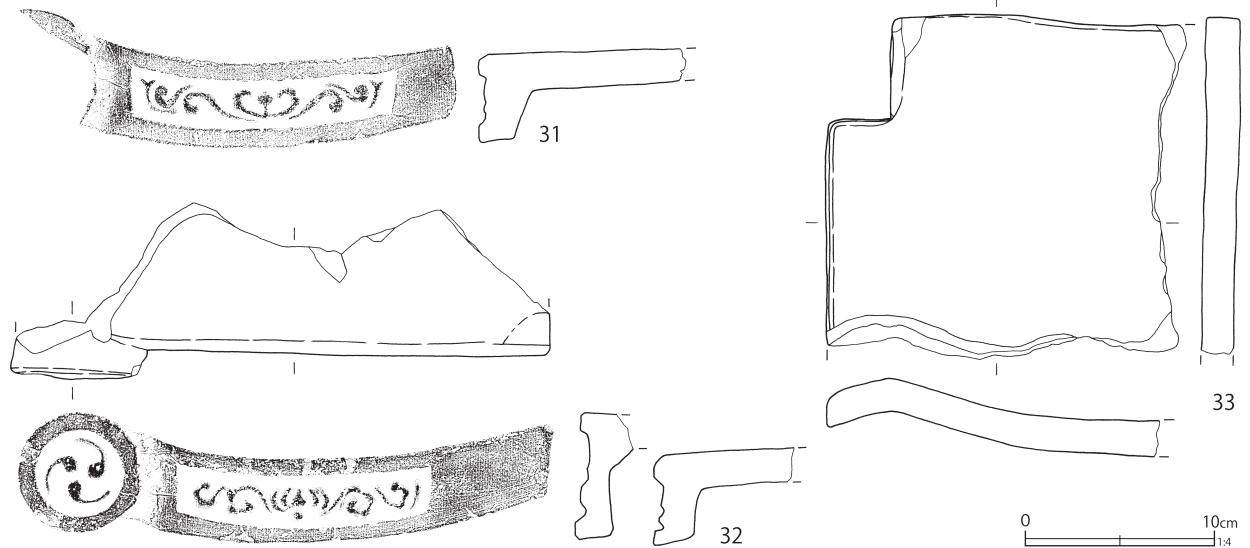


第146図 土壌出土遺物 (30)



第147図 土壤出土遺物 (31)

SK214



第148図 土壙出土遺物 (32)

遺物数は少ないが、369～371が最新期遺物であり、18世紀末の遺物組成を示している。

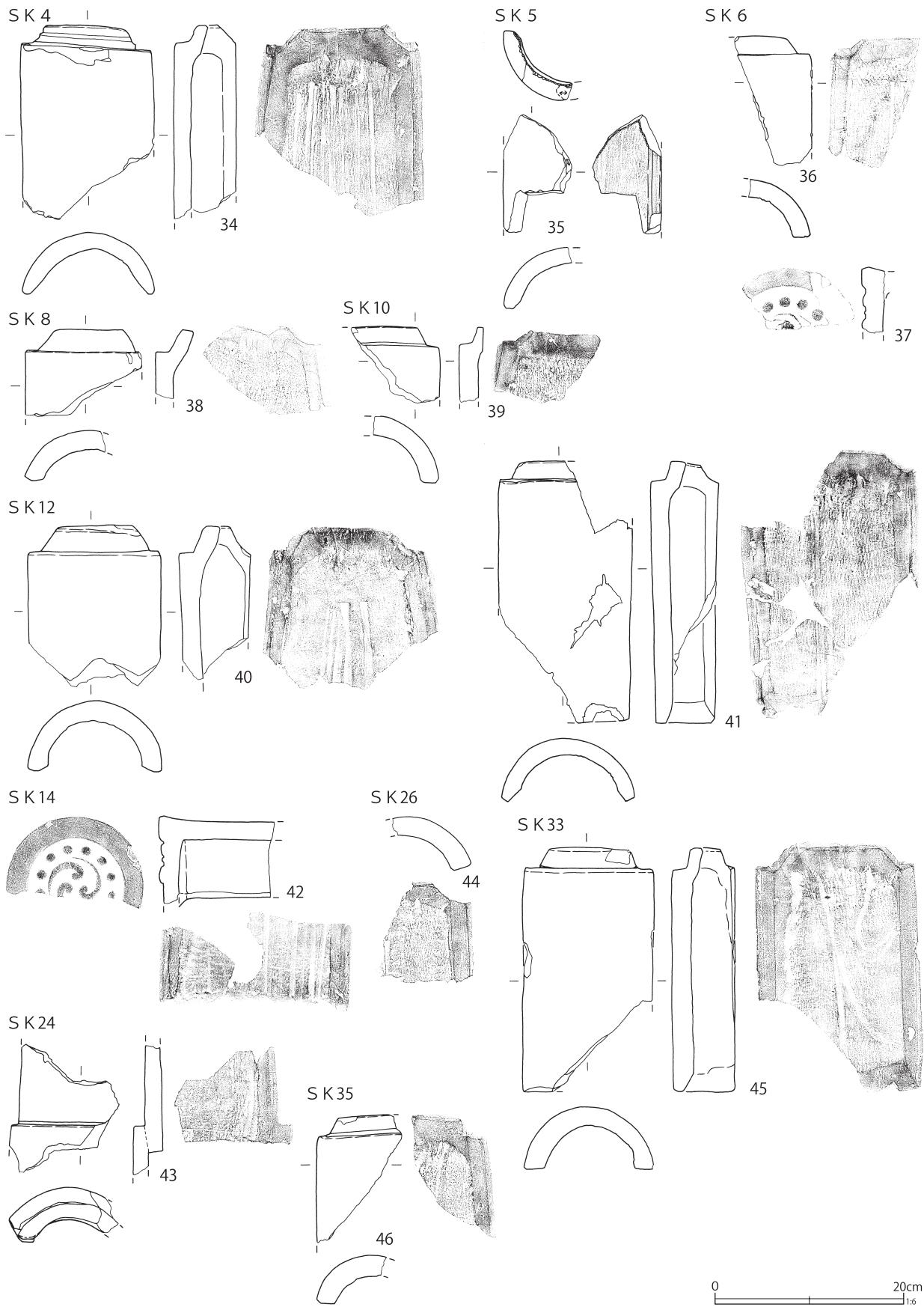
栗橋宿第一面の年代は19世紀以降、特に19世紀前葉～中葉を主体とするが、稀に18世紀末にまで遡る遺構が確認されている。第30号土壙は天明3年（1783）の浅間山噴火以後の18世紀末以降を第一面の年代の上限とする基準資料となり得る可能性がある。しかし、第6地点では天明3年に比定される浅間A降下軽石が確認されていないため、他地点の調査で確認された、降下軽石の層位と比較していく必要がある。

以上に取り上げた土壙の他からも特徴的な遺物が出土している。

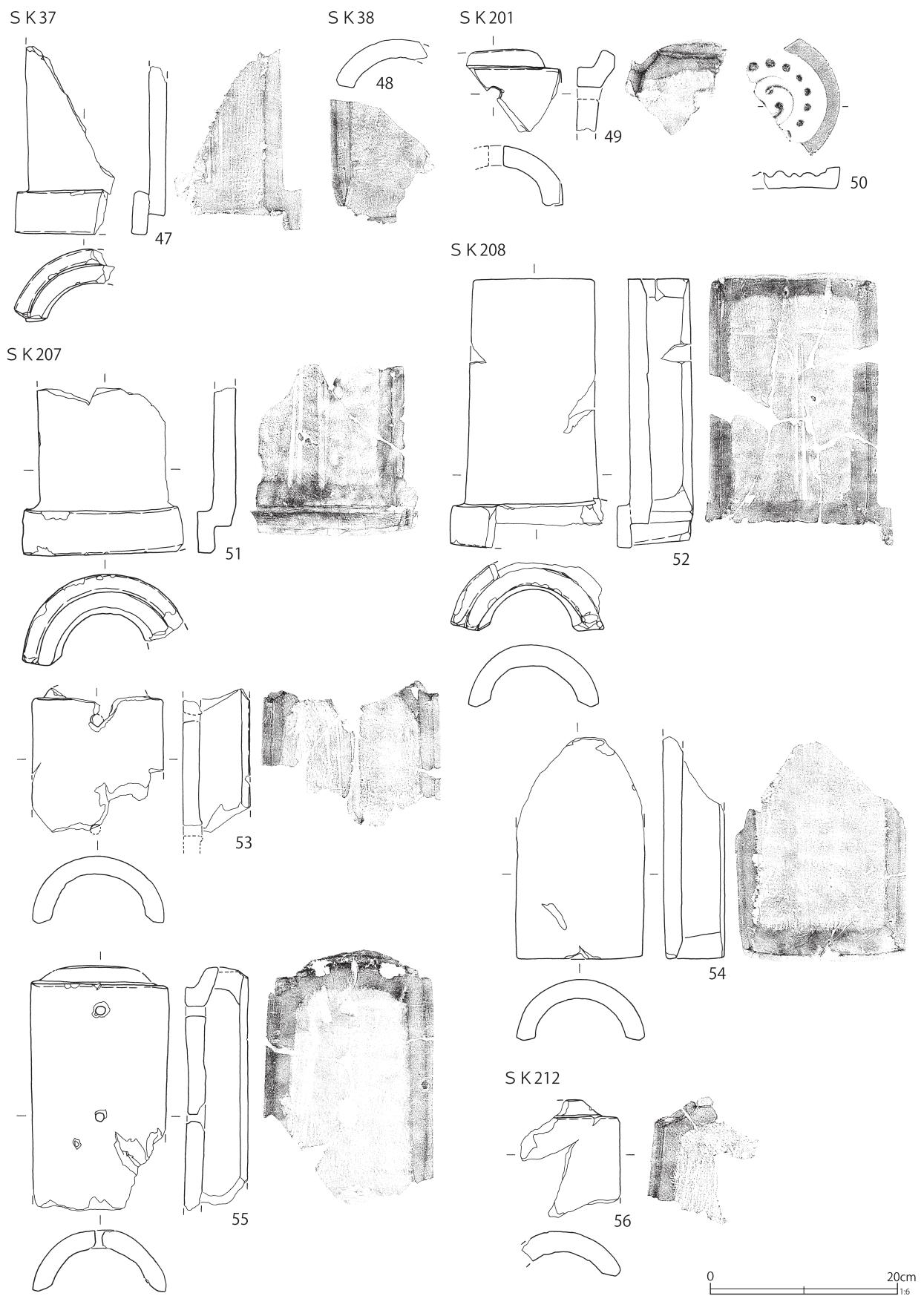
第117～142図の陶磁器類では、各土壙の時期を表す遺物と特徴的な遺物を優先して抽出した。なお、墨書・釘書き・刻印・焼継印のある資料は、細片を除き原則掲載した。このほかに、栗橋宿跡の在地土器の様相を示すため、全体像が見える土器類は共伴陶磁器と共に図示するように努めた。かわらけ、土器秉燭、焼塩壺・蓋、施釉土器については、細片を除き、原則図示した。また、陶器の「通い徳利」の量が江戸遺跡と大きく異なることから、掲載に耐え得る資料は全点図示した（燭

徳利は除く）。以下に、先述した土壙の出土遺物以外の特徴的な遺物について記す。

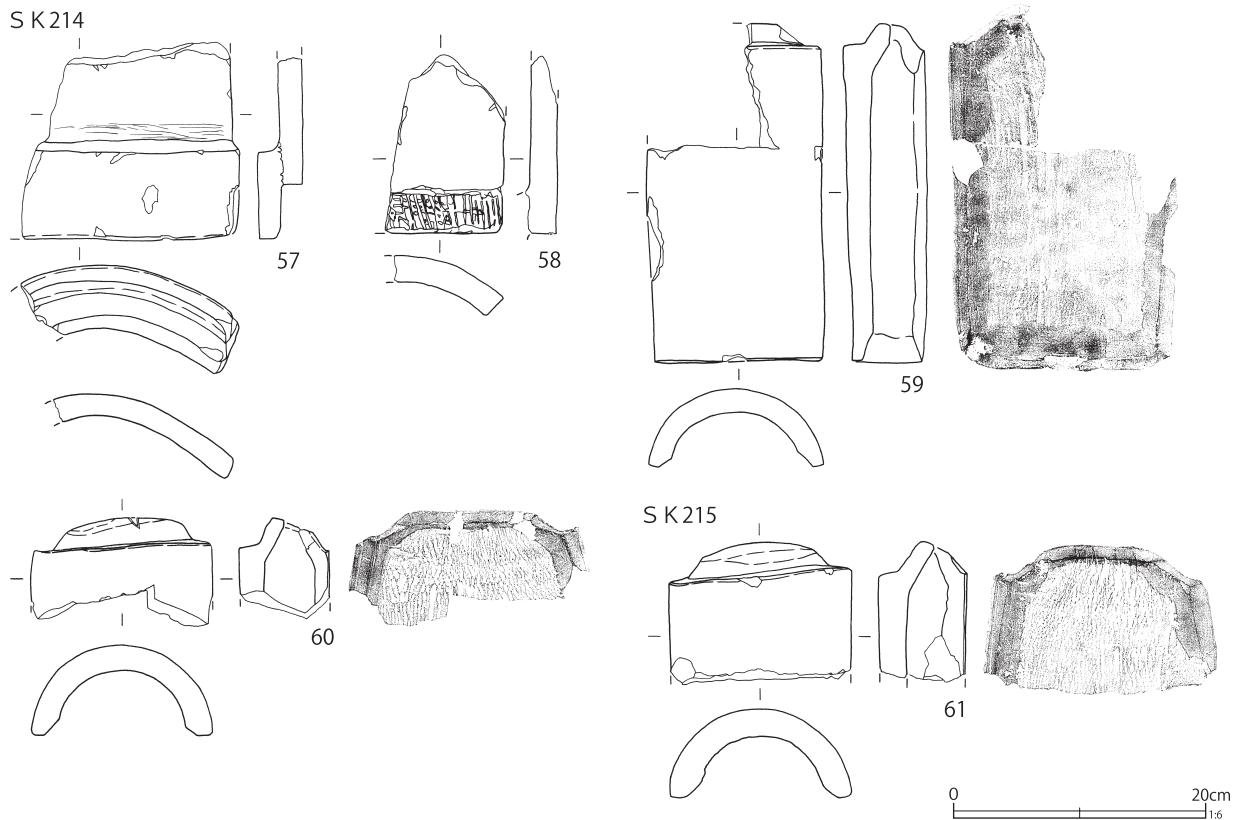
第117図の8は第3号土壙から出土した瀬戸美濃系陶器の油徳利である。内面にタール状の黒色付着物が厚く沈殿している。第123図の122は第6号土壙から出土した瀬戸美濃系磁器の壊である。型成形で体部に円形の凹みが多く見られ、陰刻で「願」の文字が見える。第124図の146は第8号土壙から出土した肥前系磁器の碗で、高台内に焼継印が見られる。第125図の165は瀬戸美濃系陶器の一升徳利である。底部に二次穿孔が見られ、植木鉢に転用されている。外面に先の尖った工具と考えられる細かな敲打痕が2箇所に見られ、植木鉢として使用する際に打ち欠いたものと思われる。166は鉄釉の甕で、外面に灰釉を流し掛けている。高台内に墨書「ハセ」が判読できる。第126図の171は施釉土器の灰落として、口縁に敲打痕が見られる。底部は糸切離し痕が残る。190は第10号土壙から出土した高台内に焼継印が見られる瀬戸美濃系磁器の端反碗である。第127図の195は肥前系磁器で、一枚絵の大皿である。高台内に焼継印があり、ピン痕が6箇所見られる。196・197は肥前系磁器の鉢で、口縁が輪花である。196は



第149図 土壌出土遺物 (33)



第150図 土壌出土遺物 (34)



第151図 土壌出土遺物 (35)

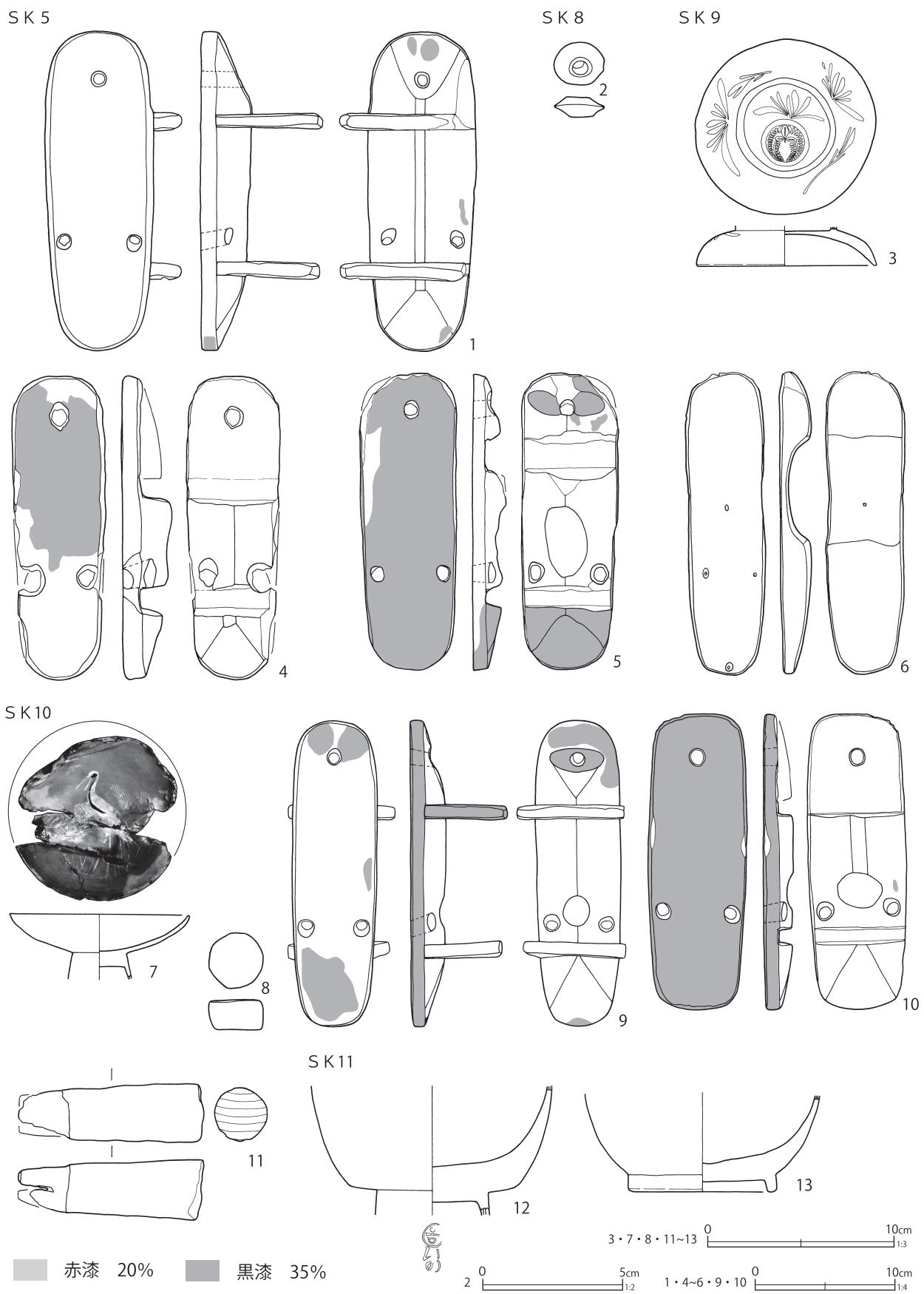
第37表 土壌出土遺物観察表 (5) (第146～151図)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	径	胎土	焼成	色調	遺構名	備考	図版
1	瓦	軒棧瓦	[9.8]	[12.5]	2.0	[5.1]	—	AK	良好	灰	SK4	江戸式 銀化	
2	瓦	軒棧瓦	—	[8.4]	2.4	[3.7]	—	K	良好	灰	SK4	江戸式 銀化	99-11
3	瓦	軒棧瓦	[1.3]	—	2.3	—	7.0	IK	良好	灰	SK4	右巻 8連珠三巴文 銀化	99-12
4	瓦	軒棧瓦	[7.0]	[11.6]	1.8	[5.2]	—	K	良好	灰	SK6	江戸式 銀化	
5	瓦	軒棧瓦	[3.4]	[5.9]	1.5	7.5	7.5	K	良好	灰	SK8	右巻 12連珠三巴文 銀化	
6	瓦	棧瓦	[14.2]	[16.9]	1.9	3.2	—	K	良好	灰	SK10	銀化	
7	瓦	軒棧瓦	[3.7]	[17.6]	2.3	[5.1]	—	K	普通	灰白	SK12	江戸式 被熱 砥具転用	
8	瓦	軒棧瓦	[8.1]	[14.6]	2.0	[7.2]	—	KL	良好	灰白	SK22	江戸・大阪折衷か 左巻 12連珠三巴文 砂利 銀化	99-13
9	瓦	軒棧瓦	[11.4]	[16.0]	1.9	[4.0]	—	AK	普通	灰白	SK23	東海式 銀化	99-14
10	瓦	軒棧瓦	[10.3]	[9.1]	1.9	7.1	7.2	K	普通	灰白	SK24	右巻 8連珠三巴文 銀化	
11	瓦	棧瓦	[15.0]	[11.0]	2.0	—	—	K	普通	灰白	SK26		
12	瓦	軒棧瓦	[8.2]	[23.3]	2.0	[4.6]	—	K	良好	灰	SK33	江戸式 銀化	
13	瓦	軒棧瓦	[2.8]	[7.7]	2.3	—	7.4	K	良好	灰	SK33	左巻 8連珠三巴文 銀化	
14	瓦	軒棧瓦	4.5	[8.5]	2.4	[5.3]	—	CKL	普通	灰白	SK33	江戸式 銀化	
15	瓦	円盤状製品	—	—	1.7	—	6.2	CK	普通	灰白	SK33	刃物痕多数 砥具転用	99-15
16	瓦	軒棧瓦	[12.5]	[13.7]	1.9	4.2	—	K	良好	灰	SK38	江戸・大阪折衷 銀化	
17	瓦	軒棧瓦	[8.5]	[9.8]	1.9	7.6	9.8	AIK	良好	灰	SK201	右巻 8連珠三巴文 銀化	
18	瓦	軒棧瓦	[2.0]	[15.7]	1.9	[3.1]	—	AIK	良好	灰	SK201	江戸式 瓦当面シャープ 銀化	
19	瓦	軒棧瓦	[5.5]	[10.3]	2.0	[7.1]	—	ACEIK	良好	灰	SK203	右巻 三巴文 銀化	
20	瓦	軒棧瓦	[2.0]	[11.9]	2.0	[3.2]	—	ACIK	普通	灰	SK203	江戸式	
21	瓦	棧瓦	27.2	[25.7]	2.0	4.4	—	ACIK	良好	灰白	SK207	銀化 被熱	
22	瓦	軒棧瓦	[7.9]	28.8	1.8	7.0	7.0	AK	良好	灰白	SK208	東海式 右巻 三巴文 銀化	99-16
23	瓦	軒棧瓦	[6.5]	[20.7]	1.8	4.7	—	AK	普通	灰白	SK208	江戸式 銀化	
24	瓦	軒棧瓦	[3.5]	[15.4]	1.9	5.2	—	AK	普通	灰白	SK208	江戸式 版深く幅広 粗雑 銀化	99-17

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	径	胎土	焼成	色調	遺構名	備考	図版
25	瓦	軒棟瓦	[3.2]	7.2	2.1	7.2	7.2	ACK	良好	灰白	SK208	8連珠三巴文	
26	瓦	棟瓦	[19.1]	24.1	2.0	4.7	—	A	良好	灰白	SK208	銀化	
27	瓦	軒棟瓦	[4.6]	[17.8]	1.7	4.9	—	AHIKL	良好	灰	SK212	江戸・大阪・東海折衷か 砂利 被熱	100-1
28	瓦	軒棟瓦	[15.0]	[24.9]	1.5	4.7	—	ACIK	良好	灰白	SK212	大阪・東海折衷 銀化	100-2
29	瓦	軒棟瓦	[11.8]	27.9	2.3	7.3	7.1	AIK	良好	灰白	SK212	江戸式 右巻 三巴文 版深い、シャープ 銀化	100-3
30	瓦	棟瓦	[10.0]	[12.9]	2.0	4.9	—	AIK	良好	灰白	SK212	銀化	
31	瓦	軒棟瓦	[10.9]	[26.2]	1.3	4.8	—	AHIK	良好	灰白	SK214	江戸・大阪・東海折衷か 銀化	100-4
32	瓦	軒棟瓦	[7.7]	28.4	1.9	6.7	—	ACK	普通	灰白	SK214	江戸・東海折衷 右巻 三巴文	100-5
33	瓦	棟瓦	[17.8]	[17.6]	1.8	4.0	—	ACIK	不良	灰	SK214	被熱	
34	瓦	丸瓦	[20.7]	14.3	1.9	6.6	—	CK	普通	灰	SK4		100-6
35	瓦	丸瓦	[12.5]	[8.4]	1.8	[5.9]	—	K	普通	灰	SK5	内面緑辺 2次加工 (敲打・擦り)	
36	瓦	丸瓦	[13.8]	[8.2]	2.0	[6.2]	—	CK	良好	灰白	SK6	銀化	
37	瓦	軒丸瓦	—	[9.8]	2.4	7.0	[6.3]	CIK	良好	灰	SK6	右巻 連珠三巴文 銀化	
38	瓦	丸瓦	[9.2]	[8.7]	2.0	(5.4)	—	K	普通	灰	SK8		
39	瓦	丸瓦	[8.0]	[7.0]	2.0	7.0	—	IK	良好	灰	SK10		
40	瓦	丸瓦	[17.1]	[14.2]	2.1	7.5	—	K	普通	灰	SK12		
41	瓦	丸瓦	27.9	14.3	2.0	7.3	—	KL	良好	灰	SK12	砂利 小礫 被熱	100-7
42	瓦	軒丸	[12.3]	[14.8]	2.0	[9.1]	—	IK	良好	灰	SK14	右巻 12連珠三巴文 銀化	100-8
43	瓦	道具瓦	[13.5]	[11.6]	1.9	5.8	—	CK	良好	灰	SK24	銀化	
44	瓦	丸瓦	[11.0]	[8.4]	2.3	[5.7]	—	K	良好	灰	SK26	銀化	
45	瓦	丸瓦	26.1	14.2	2.3	6.6	—	K	良好	灰	SK33	銀化	
46	瓦	丸瓦	[13.6]	[9.2]	2.3	5.2	—	CIK	良好	灰	SK35		
47	瓦	道具瓦	[20.2]	[10.7]	1.9	7.9	—	IK	良好	灰	SK37	銀化	
48	瓦	丸瓦	[13.2]	[9.8]	2.0	(5.2)	—	CK	良好	灰	SK38	銀化	
49	瓦	丸瓦	[8.8]	[9.9]	2.3	6.3	—	ACIK	良好	灰	SK201	穿孔1 銀化	
50	瓦	軒丸瓦	[9.1]	[10.5]	2.2	[13.2]	[11.5]	ACIK	良好	灰	SK201	左巻 連珠三巴文 銀化	
51	瓦	道具瓦	[18.0]	[17.3]	2.3	9.7	—	ACIK	良好	灰	SK207	被熱	
52	瓦	道具瓦	28.9	[16.5]	2.3	6.7	—	AIK	良好	灰白	SK208		
53	瓦	丸瓦	[15.5]	14.2	2.1	7.2	—	AIK	普通	灰白	SK208	穿孔2 軒丸瓦か	
54	瓦	丸瓦	[23.8]	13.8	1.9	6.5	—	AIK	普通	灰白	SK208		
55	瓦	丸瓦	[26.3]	14.8	2.3	6.5	—	AIK	良好	灰白	SK208	穿孔2 軒丸瓦か 銀化	100-9
56	瓦	丸瓦	[12.6]	[10.6]	2.2	4.9	—	ACIK	普通	灰白	SK212		
57	瓦	道具瓦	[15.2]	[17.5]	18.5	6.8	—	AIK	普通	灰白	SK214	内面被熱	
58	瓦	道具瓦	[13.9]	[9.6]	2.1	4.2	—	ACIK	普通	灰	SK214		
59	瓦	丸瓦	27.0	14.3	1.8	6.6	—	ACIK	良好	灰	SK214		
60	瓦	丸瓦	[8.7]	14.5	2.0	7.2	—	ACIK	良好	灰	SK214	銀化	100-10
61	瓦	丸瓦	[10.9]	14.5	2.1	7.0	—	ACIK	良好	灰	SK215		

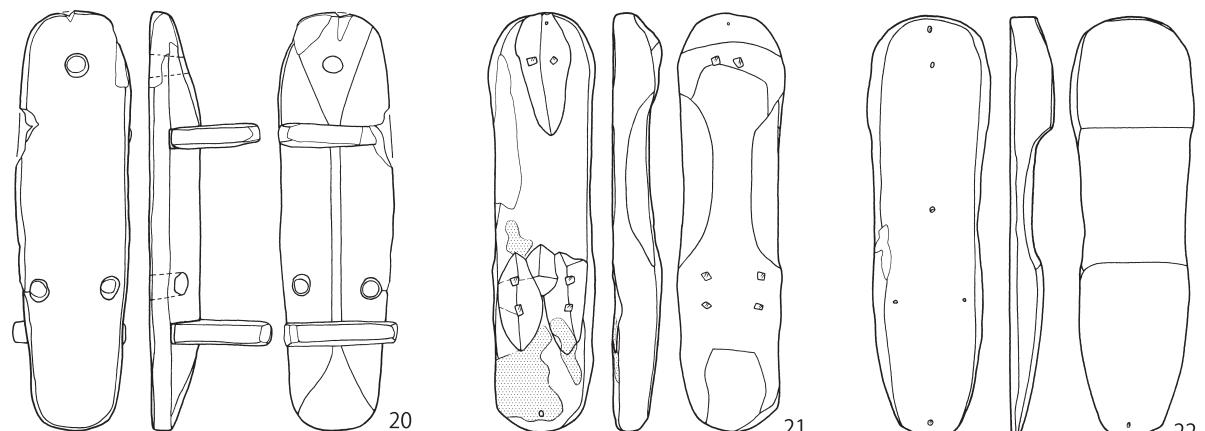
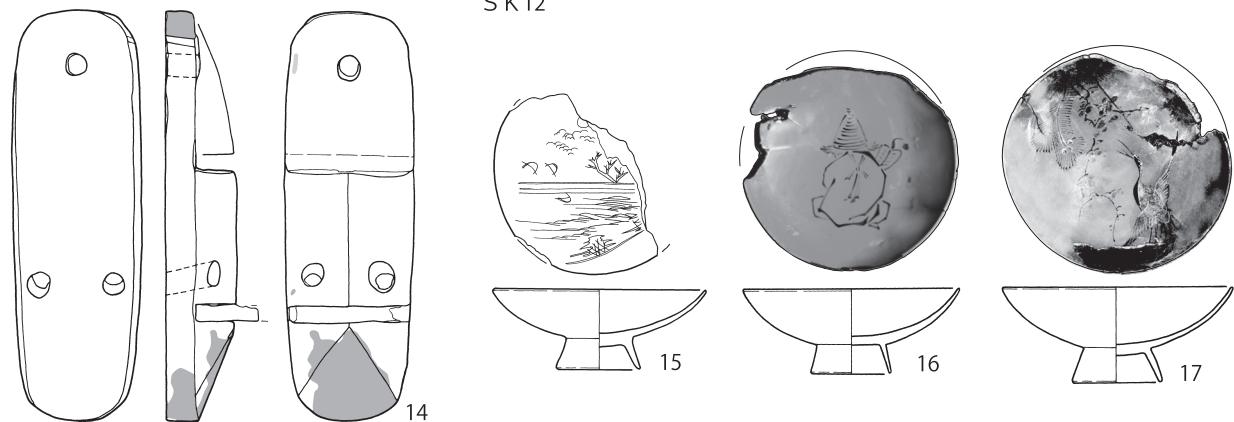
第38表 土壌出土遺物観察表(6)(第152~155図)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径/径	高さ	底径	木取り	遺構	備考		図版
1	木製品	下駄	22.7	7.7	—	—	8.7	—	板目	SK5	陰卯下駄 黒漆		
2	木製品	算盤玉	1.5	1.8	0.7	—	—	—	—	SK8			
3	木製品	漆椀蓋	—	—	—	9.4	[2.1]	—	横木取り	SK9	内面赤漆 外面黒漆 外面に赤漆で文様 つまみ内赤漆で家紋と文様		
4	木製品	下駄	21.6	6.6	—	—	3.5	—	柾目	SK9	連齒下駄 表面黒漆 裏面剥離		
5	木製品	下駄	21.1	6.8	—	—	[2.4]	—	板目	SK9	陰卯下駄 黒漆		
6	木製品	下駄	(21.5)	5.6	—	—	2.3	—	板目	SK9	無眼下駄 木釘残存 釘穴		
7	木製品	杯	—	—	—	(9.5)	[3.4]	—	横木取り	SK10	内外面赤漆 内面に金で文様		
8	木製品	栓	—	—	1.6	2.9	—	—	板目	SK10			
9	木製品	下駄	21.8	6.1	—	—	6.9	—	柾目	SK10	陰卯下駄 黒漆		
10	木製品	下駄	20.9	7.0	—	—	[2.2]	—	板目	SK10	陰卯下駄 黒漆 裏面剥離		
11	木製品	柄	9.8	—	—	3.1	—	—	板目	SK10	端部切り込み		



第152図 土壌出土遺物 (36)

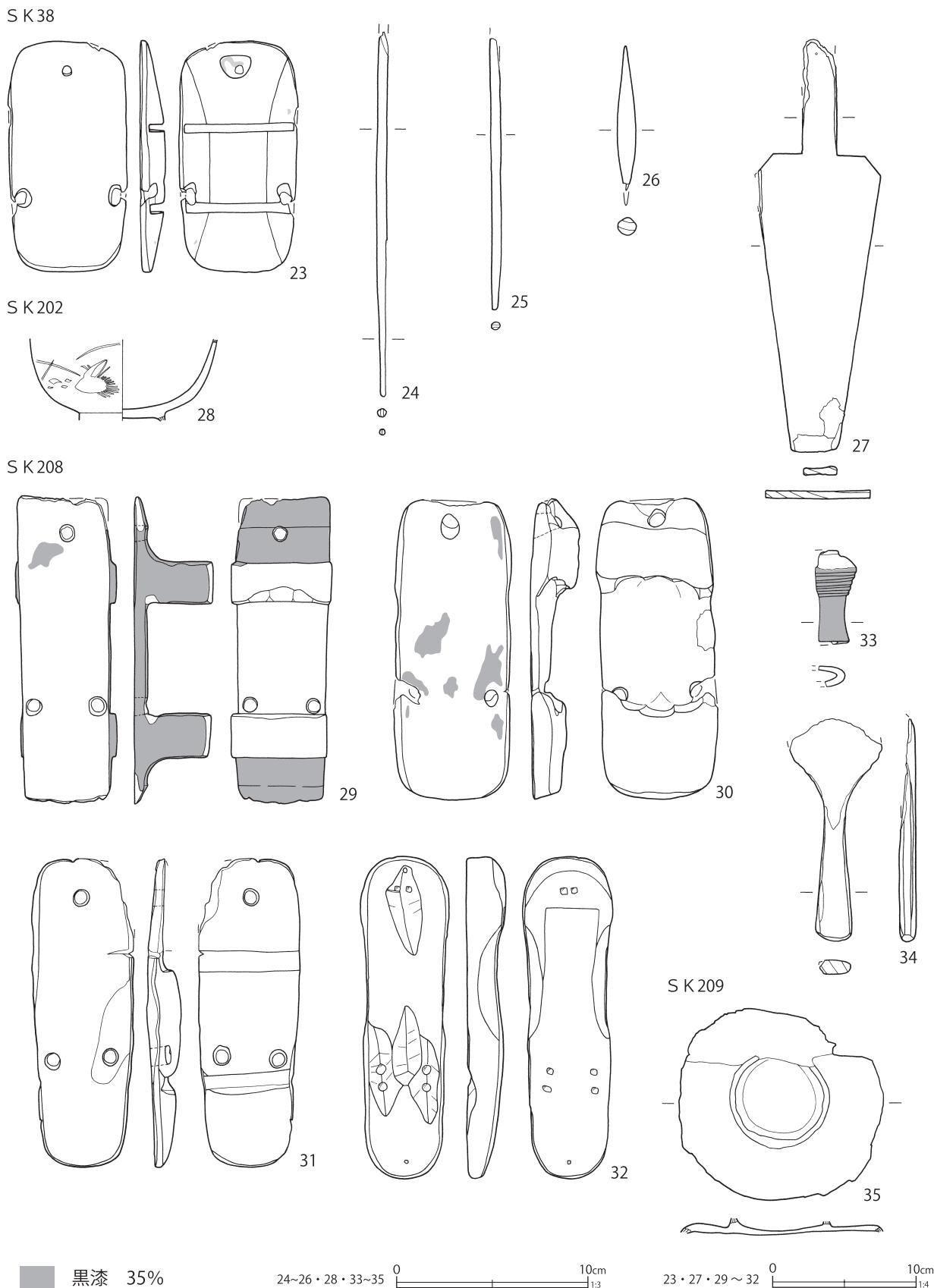
SK 12



表

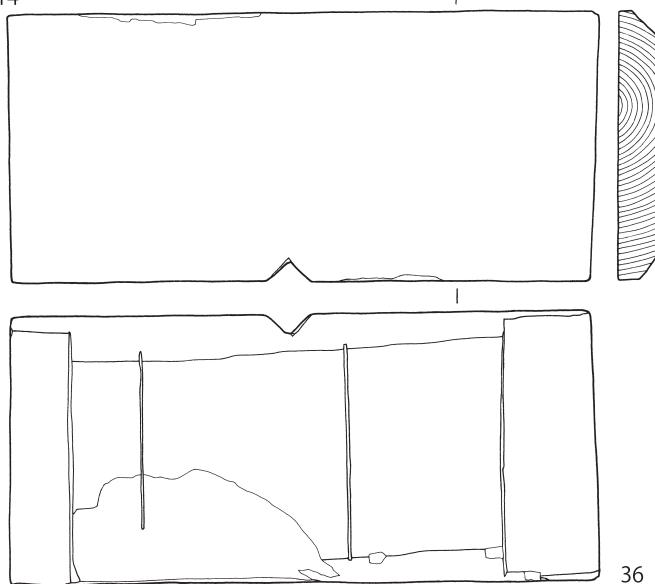
15~17 0 10cm 1:3 14・18~22 0 10cm 1:4

第153図 土壌出土遺物 (37)



第154図 土壌出土遺物 (38)

SK214

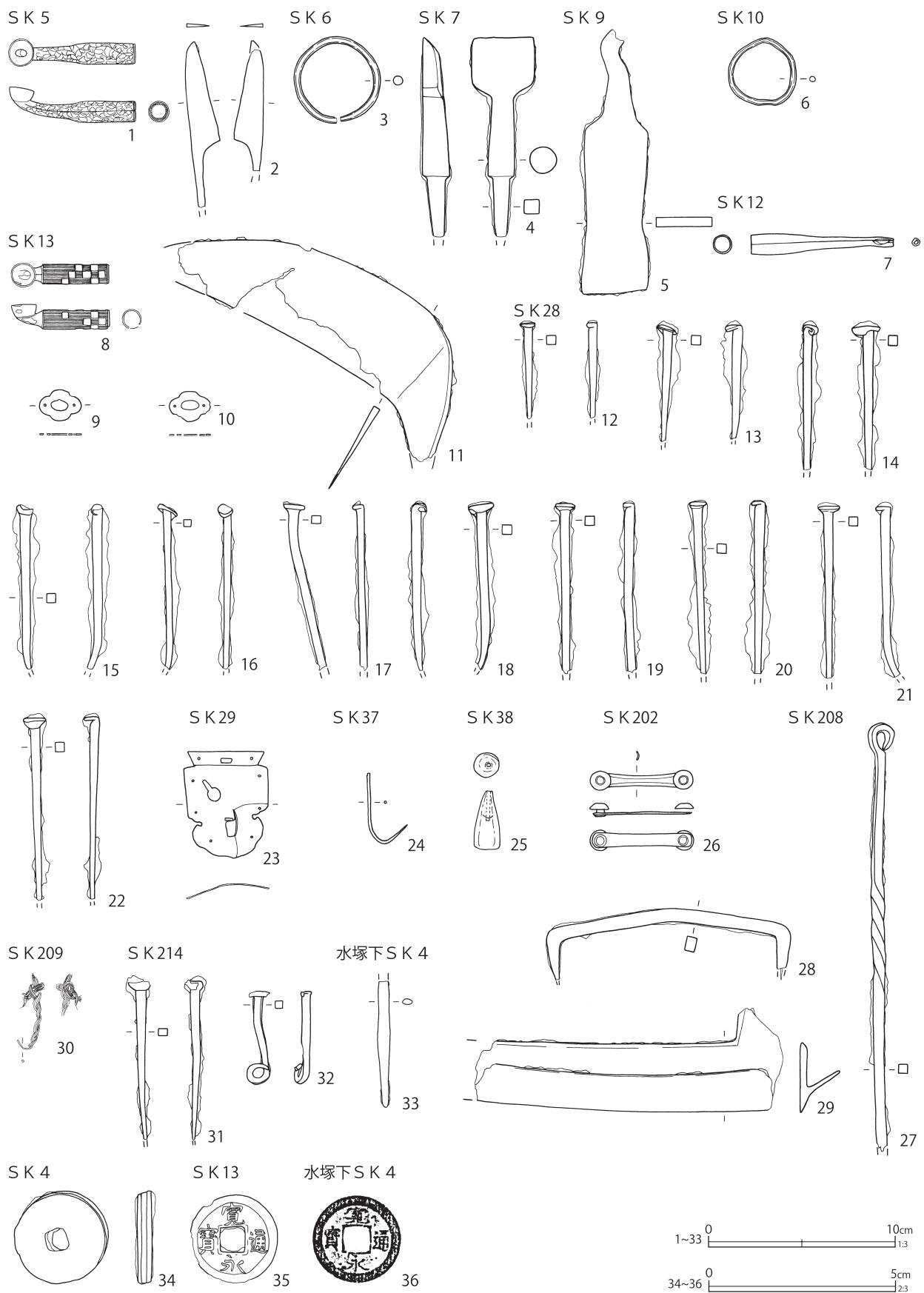


第155図 土壌出土遺物 (39)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径	木取り	遺構	備考	図版
12	木製品	漆椀	—	—	—	—	[6.9]	—	横木取り	SK11	内外面赤漆 高台内黒で「吉 いの」	
13	木製品	漆椀	—	—	—	—	[5.1]	(7.6)	横木取り	SK11	内面赤漆 外面黒漆	
14	木製品	下駄	21.6	6.8	—	—	[4.9]	—	台柱目 歯板目	SK11	陰卯下駄 黒漆 裏面一部に茶漆	
15	木製品	杯	—	—	—	8.5	3.3	3.1	横木取り	SK12	内外面朱漆 内面に黒で文様	
16	木製品	杯	—	—	—	(8.3)	3.1	3.2	横木取り	SK12	内外面赤漆 内面に金で文様	102-2
17	木製品	杯	—	—	—	9.0	3.7	3.5	横木取り	SK12	内外面赤漆 内面に金と黒で文様	102-3
18	木製品	下駄	22.1	8.2	—	—	6.7	—	板目	SK12	連歯下駄 表・鼻緒残存	
19	木製品	下駄	21.0	5.9	—	—	6.4	—	板目	SK12	陰卯下駄 黒漆	102-4
20	木製品	下駄	22.1	6.0	—	—	6.4	—	板目	SK12	陰卯下駄	
21	木製品	下駄	22.0	5.7	—	—	2.6	—	板目	SK12	無眼下駄 表残存 木釘残存 釘穴	102-5
22	木製品	下駄	22.3	6.5	—	—	2.4	—	柾目	SK12	無眼下駄 木釘残存 釘穴	102-6
23	木製品	下駄	16.0	8.2	—	—	[1.7]	—	板目	SK38	陰卯下駄 裏面赤漆	
24	木製品	箸	[18.9]	0.5	0.4	—	—	—	削出	SK38	赤漆	
25	木製品	箸	[14.1]	0.5	0.4	—	—	—	削出	SK38	赤漆	
26	木製品	浮子	(8.2)	—	—	0.9	—	—	板目	SK38		102-7
27	木製品	農具か	[28.7]	身幅 8.7 厚さ 0.6 柄幅 2.3 厚さ 0.6				—	板目	SK38	端部鉄付着 釘穴	102-8
28	木製品	漆椀	—	—	—	[4.2]	—	—	横木取り	SK202	内面赤漆 外面黒漆 外面に赤と金で文様	
29	木製品	下駄	21.3	6.4	—	—	5.5	—	板目	SK208	連歯下駄 黒漆	
30	木製品	下駄	(20.8)	8.0	—	—	2.0	—	柾目	SK208	割り下駄 表面黒漆 歪み大	102-9
31	木製品	下駄	21.3	7.0	—	—	[2.4]	—	柾目	SK208	陰卯下駄	
32	木製品	下駄	22.3	6.2	—	—	2.8	—	板目	SK208	無眼下駄 木釘残存 釘穴	
33	木製品	傘	4.8	[2.1]	1.1	—	—	—	削出	SK208	ろくろ 黒漆	
34	木製品	団扇	[11.6]	[4.7]	0.7	—	—	—	板目	SK208		
35	木製品	漆椀蓋	[9.8]	[10.6]	—	—	[0.8]	—	横木取り	SK209	内外面黒漆	
36	木製品	まな板	20.9	46.0	3.2	—	—	—	板目	SK214	裏面に切り込み 4 条	

蛇の目凹形高台、197は輪高台である。201・202は高台内に釘書き「ト」が見られる肥前系磁器の猪口である。「ト」は「トラヤ」の屋号を意味するものと考えられる。203は高台内に墨書がある

肥前系磁器の猪口である。第128図の206・208は松岡系陶器の土瓶であり、同一個体の可能性が考えられる。209は瓦質土器の焙烙である。全体が橙色を呈し、ほぼ酸化炎焼成である。胎土に粒径



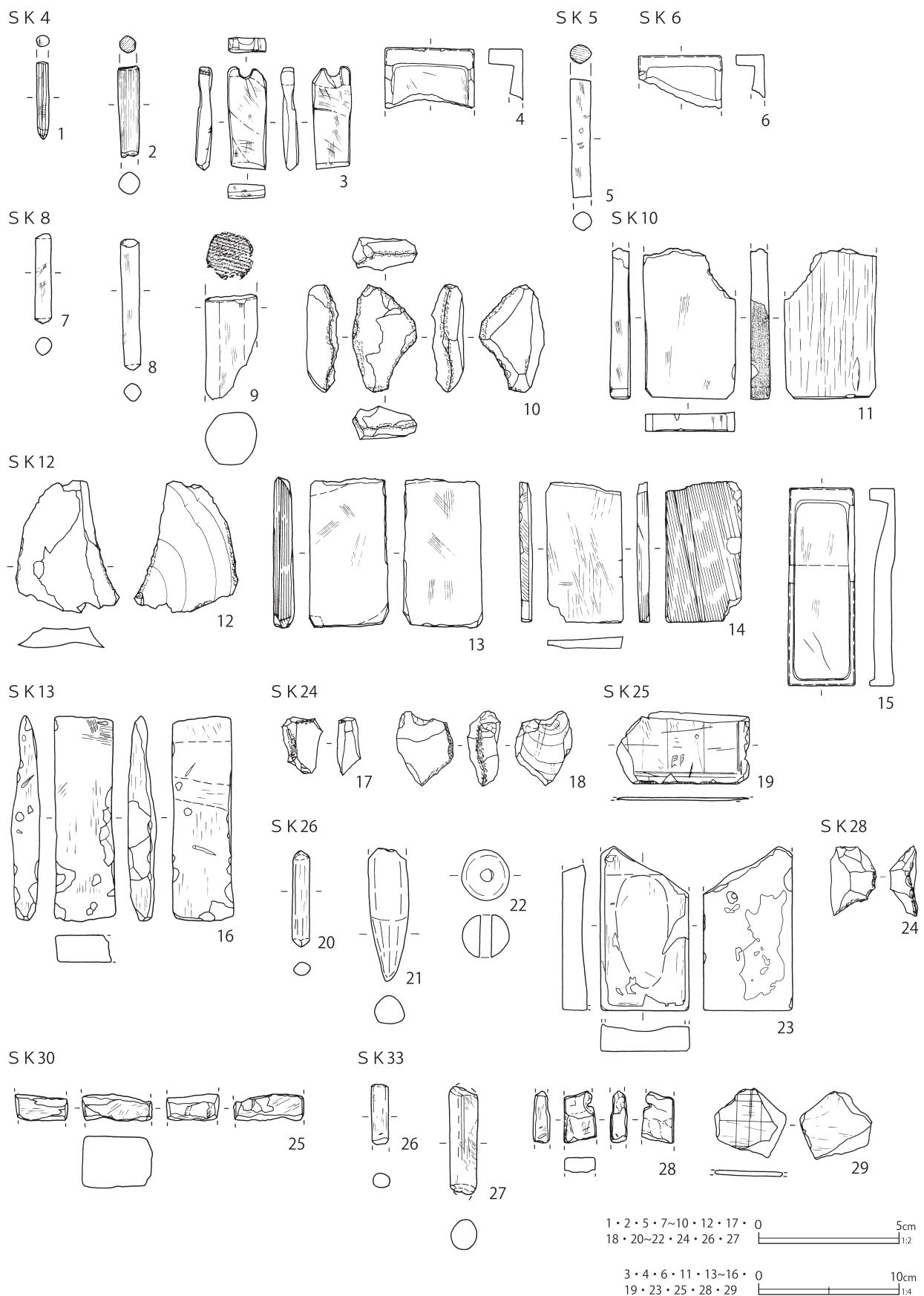
第156図 土塙出土遺物 (40)

第39表 土壌出土遺物観察表(7)(第156図)

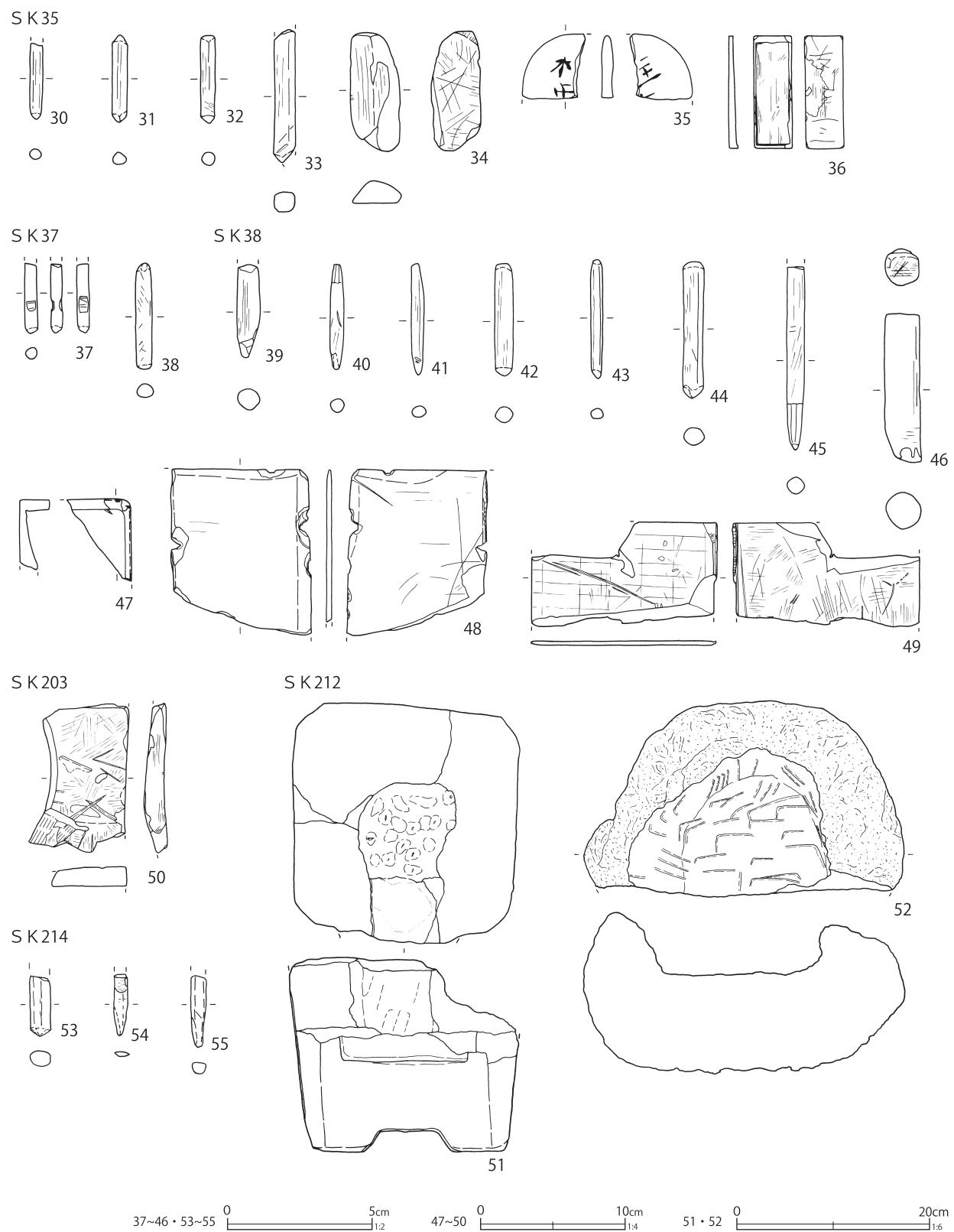
番号	種別	器種	法量	遺構名	備考	図版
1	銅製品	煙管	長さ 6.7cm 火皿径 1.4 × 1.3cm 小口径 1.1cm 重さ 12.8g	SK5	雁首	111-1
2	鉄製品	握鉄	長さ [8.9]cm 刃幅 1.2cm 背幅 0.2cm 重さ 10.0g	SK5		
3	銅製品	環金具	径 4.5cm 厚さ 0.5cm 重さ 7.9g	SK6		109-2
4	鉄製品	鑿	長さ [10.6]cm 刃幅 3.2cm 重さ 104.4g	SK7		109-2
5	鉄製品	不明	長さ [14.2]cm 幅 3.0cm 厚さ 0.5cm 重さ 125.2g	SK9	板状	109-2
6	銅製品	環金具	縦 3.65 × 横 3.5cm 厚さ 0.3cm 重さ 5.2g	SK10		109-2
7	銅製品	煙管	長さ 7.6cm 小口径 1.0cm 口付径 0.4cm 重さ 7.1g	SK12	吸口	
8	銅製品	煙管	長さ 5.2cm 火皿径 1.3cm 小口径 1.0cm 重さ 7.3g	SK13	雁首	111-1
9	銅製品	前金具	縦 1.6cm 横 2.2cm 厚さ 0.05cm 重さ 1.2g	SK13	煙草入れ	109-2
10	銅製品	前金具	縦 1.6cm 横 2.2cm 厚さ 0.05cm 重さ 0.8g	SK13	煙草入れ	109-2
11	鉄製品	鎌	長さ [14.6]cm 刃幅 5.0cm 背幅 0.4cm 重さ 61.6g	SK13		109-2
12	鉄製品	釘	長さ [5.1]cm 幅 0.5cm 厚さ 0.5cm 重さ 3.0g	SK28		
13	鉄製品	釘	長さ [6.2]cm 幅 0.5cm 厚さ 0.5cm 重さ 8.3g	SK28		
14	鉄製品	釘	長さ [7.6]cm 幅 0.5cm 厚さ 0.5cm 重さ 8.5g	SK28		
15	鉄製品	釘	長さ [8.8]cm 幅 0.5cm 厚さ 0.5cm 重さ 10.2g	SK28		
16	鉄製品	釘	長さ [8.8]cm 幅 0.4cm 厚さ 0.4cm 重さ 6.5g	SK28		
17	鉄製品	釘	長さ [8.9]cm 幅 0.5cm 厚さ 0.4cm 重さ 7.6g	SK28		
18	鉄製品	釘	長さ [9.0]cm 幅 0.5cm 厚さ 0.5cm 重さ 9.0g	SK28		
19	鉄製品	釘	長さ [9.1]cm 幅 0.5cm 厚さ 0.5cm 重さ 9.0g	SK28		
20	鉄製品	釘	長さ [9.2]cm 幅 0.5cm 厚さ 0.5cm 重さ 11.1g	SK28		
21	鉄製品	釘	長さ [9.2]cm 幅 0.5cm 厚さ 0.5cm 重さ 7.7g	SK28		
22	鉄製品	釘	長さ [9.7]cm 幅 0.5cm 厚さ 0.5cm 重さ 8.2g	SK28		
23	銅製品	錠前	長さ 5.7cm 幅 4.5cm 厚さ 0.04cm 重さ 9.3g	SK29	引出	109-2
24	銅製品	鉤金具	長さ 3.8cm 厚さ 0.2cm 重さ 0.9g	SK37		109-2
25	鉄製品	錘か	長さ 3.1cm 径 1.3cm 重さ 26.9g	SK38		109-2
26	銅製品か	不明	縦 1.0cm 横 5.5cm 重さ 1.3g	SK202		109-2
27	鉄製品	火箸	長さ [23.0]cm 幅 0.5cm 厚さ 0.5cm 重さ 28.4g	SK208	中央螺旋 角形	109-2
28	鉄製品	鎌	長さ 13.1cm 幅 0.8cm 厚さ 0.5cm 重さ 32.6g	SK208		109-2
29	鉄製品	不明	縦 [5.5]cm 横 [16.6]cm 厚さ 0.4cm 重さ 138.0g	SK208		109-2
30	鉄製品	針金	長さ [3.4]cm 厚さ 0.1cm 重さ 1.1g	SK209		
31	鉄製品	釘	長さ [8.4]cm 幅 0.5cm 厚さ 0.4cm 重さ 6.9g	SK214		
32	鉄製品	釘	長さ 4.9cm 幅 0.4cm 厚さ 0.4cm 重さ 4.1g	SK214		
33	銅製品	簪か	長さ [6.8]cm 幅 0.6cm 厚さ 0.3cm 重さ 5.1g	水塚下 SK4		
34	銅製品	錢貨	縦 24.3mm 横 25.0mm 厚さ 3.9mm 重さ 9.8g	SK4	3枚重ね	
35	銅製品	錢貨	径 23.0mm 厚さ 1.1mm 重さ 2.3g	SK13	寛永通寶(新)	
36	銅製品	錢貨	径 23.5mm 厚さ 0.8mm 重さ 1.8g	水塚下 SK4	寛永通寶	

第40表 土壌出土遺物観察表(8)(第157・158図)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	遺構名	備考	図版
1	石製品	石筆	2.7	0.4	—	0.8	滑石	SK4		
2	石製品	石筆	[3.2]	0.8	—	3.0	滑石	SK4		
3	石製品	砥石	7.1	2.8	1.0	31.7	凝灰岩	SK4	提げ砥 穿孔残存 砥面4	113-1
4	石製品	硯	[3.6]	6.3	—	56.3	凝灰岩	SK4	器高 2.4 cm	112-7
5	石製品	石筆	[4.1]	0.7	—	3.3	滑石	SK5		
6	石製品	硯	[3.7]	5.8	—	34.6	凝灰岩	SK6	器高 2.0 cm	112-7
7	石製品	石筆	3.2	0.6	—	2.0	滑石	SK8	両端使用	
8	石製品	石筆	4.6	0.6	—	3.3	滑石	SK8	両端使用	
9	石製品	石筆	[3.6]	1.8	—	15.7	滑石	SK8	端部ノコギリ状工具痕	
10	石製品	火打石	3.8	2.8	1.1	9.8	玉髓	SK8		113-2
11	石製品	砥石	[10.5]	6.5	1.4	171.4	流紋岩	SK10	側面ノコギリ痕か	113-1
12	石製品	火打石	4.7	3.7	0.7	13.7	玉髓	SK12	被熱	



第157図 土壌出土遺物 (41)

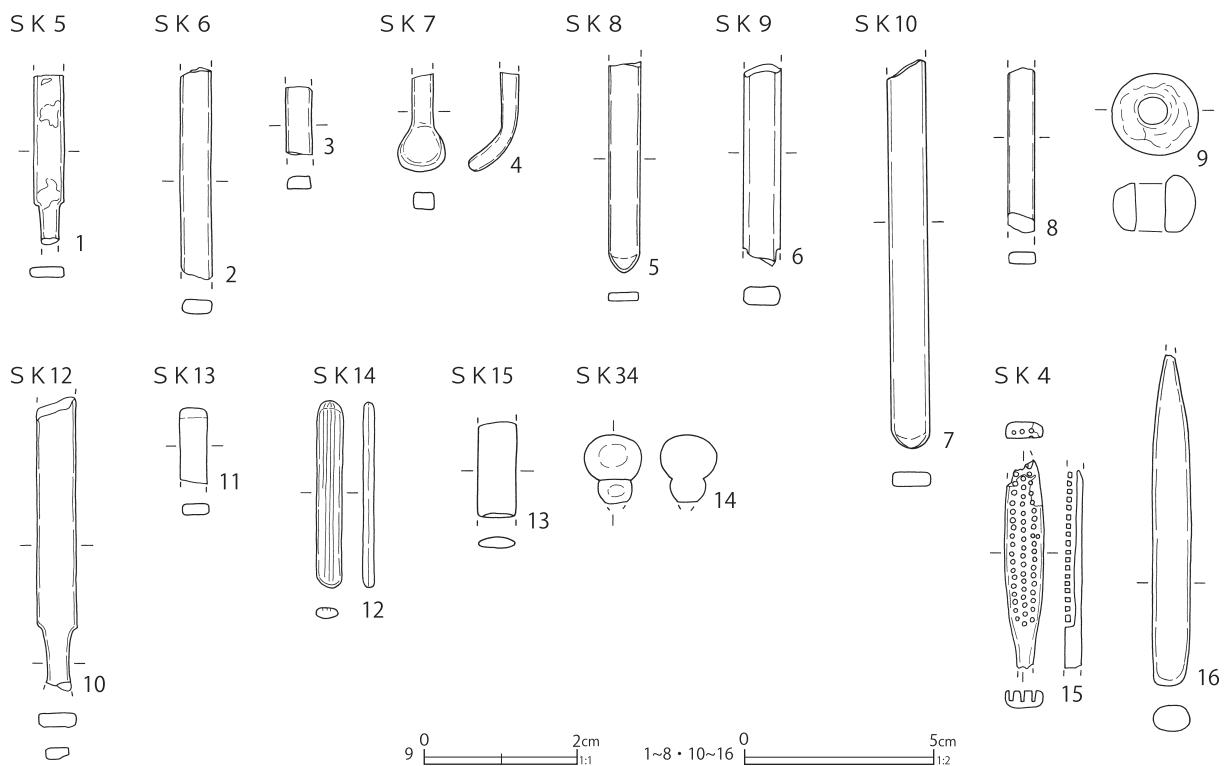


第158図 土壌出土遺物 (42)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	遺構名	備考	図版
13	石製品	砥石	[10.4]	5.5	1.4	159.2	流紋岩	SK12	砥面2 ノコギリ痕か	113-1
14	石製品	砥石	[9.9]	5.4	0.8	70.7	流紋岩	SK12	砥面2 ノコギリ痕か	113-1
15	石製品	硯	13.9	4.7	1.3	197.8	粘板岩	SK12		112-7
16	石製品	砥石	14.5	4.4	2.0	157.3	流紋岩	SK13	砥面4	113-1
17	石製品	火打石	2.0	1.4	0.8	2.9	玉髓	SK24		113-2
18	石製品	火打石	2.6	2.0	0.8	5.7	玉髓	SK24		113-2
19	石製品	石板	[5.1]	[9.4]	0.2	25.5	粘板岩	SK25	罫線 刻書「三郎」側面工具痕	
20	石製品	石筆	3.5	0.6	—	2.9	滑石	SK26	両端使用	
21	石製品	石筆	[4.6]	[1.4]	—	9.8	滑石	SK26		
22	石製品	簪の玉	1.7	1.5	—	7.4	石灰岩か	SK26		
23	石製品	硯	[11.6]	[6.3]	—	252.2	粘板岩	SK26	器高 [1.9] cm	112-7
24	石製品	火打石	2.4	1.6	0.9	0.4	玉髓	SK28		113-2
25	石製品	砥石	[1.9]	5.0	3.8	49.5	流紋岩	SK30	砥面4 残存	113-1
26	石製品	石筆	[2.1]	0.6	—	1.4	滑石	SK33		
27	石製品	石筆	[3.8]	1.0	—	7.3	滑石	SK33	両端使用	
28	石製品	砥石	[3.6]	2.3	1.2	12.8	粘板岩	SK33	砥面3 残存	113-1
29	石製品	石板	[4.8]	[5.1]	0.3	11.8	粘板岩	SK33	罫線	
30	石製品	石筆	[2.6]	0.4	—	0.7	滑石	SK35	両端使用	
31	石製品	石筆	4.0	0.5	—	1.2	滑石	SK35	両端使用	
32	石製品	石筆	3.0	0.5	—	1.6	滑石	SK35	両端使用	
33	石製品	石筆	[4.6]	0.7	—	3.9	滑石	SK35		
34	石製品	石筆	4.1	1.7	0.8	7.6	滑石	SK35	両端使用	
35	石製品	不明品	[2.2]	[2.2]	0.4	3.0	砂岩	SK35	扁平礫 墨書 磨石経か	113-5
36	石製品	硯	7.7	2.6	—	20.1	粘板岩	SK35	器高 0.6 cm 刻書	112-7
37	石製品	石筆	[2.4]	0.4	—	0.7	滑石	SK37		
38	石製品	石筆	3.6	0.6	—	2.4	滑石	SK37	両端使用	
39	石製品	石筆	[3.2]	0.8	—	2.4	滑石	SK38		
40	石製品	石筆	3.6	0.5	—	1.1	滑石	SK38	両端使用	
41	石製品	石筆	3.9	0.4	—	0.9	滑石	SK38	両端使用	
42	石製品	石筆	3.9	0.6	—	2.6	滑石	SK38	両端使用	
43	石製品	石筆	4.1	0.4	—	1.1	滑石	SK38	両端使用	
44	石製品	石筆	4.6	0.7	—	3.9	滑石	SK38	両端使用	
45	石製品	石筆	[6.3]	0.6	—	4.2	滑石	SK38		
46	石製品	石筆	[5.1]	1.3	—	15.9	滑石	SK38	下端使用	
47	石製品	硯	[5.6]	[4.3]	—	27.4	砂岩	SK38	器高 2.1 cm	112-7
48	石製品	石板	[11.4]	9.7	0.4	95.3	粘板岩	SK38	側面工具痕, 敲打痕, 研磨痕	
49	石製品	石板	[6.9]	12.9	0.3	55.0	粘板岩	SK38	罫線 刃物痕 側面工具痕, 敲打痕	
50	石製品	砥石	[10.2]	[7.0]	[1.6]	112.3	ホルンフェルス	SK203	砥面2 刃物痕 表割口櫛歯状工具	113-1
51	石製品	焜炉	高さ [20.4] 幅 23.6			4318.6	砂岩	SK212	粒度粗く極めて軟質 窓部煤付着 内面底ツルハシ状工具痕 幅広工具痕か	113-6
52	石製品	焜炉か	[20.3]	33.6	9.8	10300.0	安山岩	SK212	極めて多孔質 黒色 外面自然面 内面幅広工具痕	113-7
53	石製品	石筆	[2.1]	0.7	—	1.6	滑石	SK214		
54	石製品	石筆	[2.1]	0.5	—	0.4	滑石	SK214		
55	石製品	石筆	[2.5]	0.5	—	0.9	滑石	SK214		

の大きい赤色粒子が多量に含まれる特徴がある。214は第11号土壙から出土した肥前系磁器の碗である。内面は蛇の目釉剥ぎで、色絵が施されている。219は源内焼風軟質施釉陶器の鉢もしくは皿と思われる。第12号土壙に同系品、第1地点で

酷似した製品が見られる。222は高台内に墨書が見られる瀬戸美濃系陶器の柿釉甕である。「タラ入」が判読できる。第134図の330は第19号土壙から出土した笠間系陶器と思われる甕である。鉄釉に外面二彩流し掛けである。第135図の335は



第159図 土壌出土遺物 (43)

第41表 土壌出土遺物観察表 (9) (第159図)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	遺構名	備考	図版
1	硝子製品	笄	[4.5]	0.8	0.3	2.6	SK5	青色 中実 被熱(白色)	116-1
2	硝子製品	笄	[5.6]	0.8	0.4	5.1	SK6	透明 中実 被熱(白色)	116-1
3	硝子製品	笄	[1.8]	0.7	0.4	1.1	SK6	透明 中実 被熱(白色)	116-1
4	硝子製品	笄	[2.6]	1.2	1.3	2.6	SK7	青色 中実 先端部匙状	116-1
5	硝子製品	笄	[5.6]	0.8	0.2	5.3	SK8	透明 中実 被熱	116-1
6	硝子製品	笄	[5.8]	1.0	0.5	7.3	SK9	透明 中実 被熱	116-1
7	硝子製品	笄	[10.2]	1.0	0.4	13.1	SK10	透明 中実 被熱	116-1
8	硝子製品	笄	[4.3]	0.7	0.3	3.3	SK10	透明 中実 被熱か(黄褐色)	116-1
9	硝子製品	簪の玉	径 1.1	—	[0.8]	1.4	SK10	透明 被熱(白色)	116-3
10	硝子製品	笄	[7.7]	1.0	0.4	9.1	SK12	透明 中実 被熱	116-1
11	硝子製品	笄	[2.0]	0.7	0.3	1.4	SK13	透明 中実 被熱	116-1
12	硝子製品	笄	[4.9]	0.7	0.3	2.8	SK14	飴色 付着物あり 被熱	116-1
13	硝子製品	笄	[2.5]	1.0	0.3	2.6	SK15	青色か 被熱(白色)	116-1
14	硝子製品	蓋か	1.8	1.5	—	6.7	SK34	透明 ツマミか 被熱	116-4
15	骨製品	ブラシ	[8.7]	[1.0]	[0.8]	9.2	SK4	16と同一個体か	116-1
16	骨製品	ブラシ	[5.5]	1.0	0.5	2.4	SK4	15と同一個体か	116-1

第21号土壌から出土した肥前系磁器の底部無釉で見込み蛇の目釉剥ぎの皿である。高台周囲を円形に打ち欠き、いわゆる円盤状製品に転用している。第一面での出土例はほとんど見られず、第二面での出土量が多い。胴部転用と底部転用の二種類が確認されるが用途は不明である。341は第24号土壌から出土した萩系陶器のピラ掛け碗で

ある。栗橋宿での出土例は少ない。350・351は江戸在地系の焼塩壺である。いずれもロクロ成形である。第136図の382は第32号土壌から出土した体部に凹みがある徳利である。備前系の可能性がある。第137図の383は第33号土壌から出土した瀬戸美濃系磁器の型紙摺絵染付碗である。見込み蛇の目釉剥ぎが見られる。384は型押の反皿で、

内面に龍の陰刻が押されている。386は大堀相馬系陶器の壺で高台内に「相馬」の刻印が見られる。内面に走り馬の陽刻、体部は多数の凹みが見られる。388は徳利で外面に鉄絵で屋号が記されている。389は瀬戸美濃系陶器の柿釉甕で高台を砥具として転用している。390は笠間系の湯たんぽである。コルク栓が僅かに残存した状態で出土した。394は第34号土壙から出土した京都信楽系の爛徳利である。底部に「ヤマ」に「吉」、「住吉屋」の墨書が判読できる。「住吉屋」は、『営業便覧』にみえる「菓子商 鳥海彌市」の屋号であり、第34号土壙はその敷地内に位置する(VI 調査のまとめ参照)。また、『絵図』では「餅菓子屋 彌市」に相当し、「菓子商 鳥海彌市」と同一と考えられる。「住吉屋」の墨書は、第167図4にも確認される。第139図431は第205号土壙から出土した瀬戸美濃系磁器の湯呑碗である。外面に青の上絵付が施されている珍しいタイプである。434は肥前系磁器の皿で、高台内に「カネ」に「キ」の墨書が見られる。435は型成形の瀬戸美濃系磁器の壺である。外面に一周陰刻文字が押されている。第140図438は、瓜形の青緑釉土瓶である。439は大堀相馬系陶器の青緑釉土瓶蓋である。438の蓋の可能性がある。外面に文字が浮かび上がっている。第141図442・444・445は肥前系磁器で、422は輪高台型皿、444は質の良い大振りの鉢である。445は大振りの蓋物の蓋である。対応する身は見られない。外面に染付・色絵が施されており、質の良い印象である。内面に焼継印が3箇所見られ、繰り返し補修して使用していたことが窺える。443は瀬戸美濃系磁器の餈皿である。第207号土壙出土陶磁器は、いずれも質が良く、他の土壙から出土している陶磁器とは異なる様相である。446は松岡系陶器の土瓶蓋である。胎土は粗く、外面にうのふ釉が施釉される。448は瀬戸美濃系磁器の壺である。体部中位の凸帯を境に鉄釉を上下に掛け分けている。第142図456は、第214

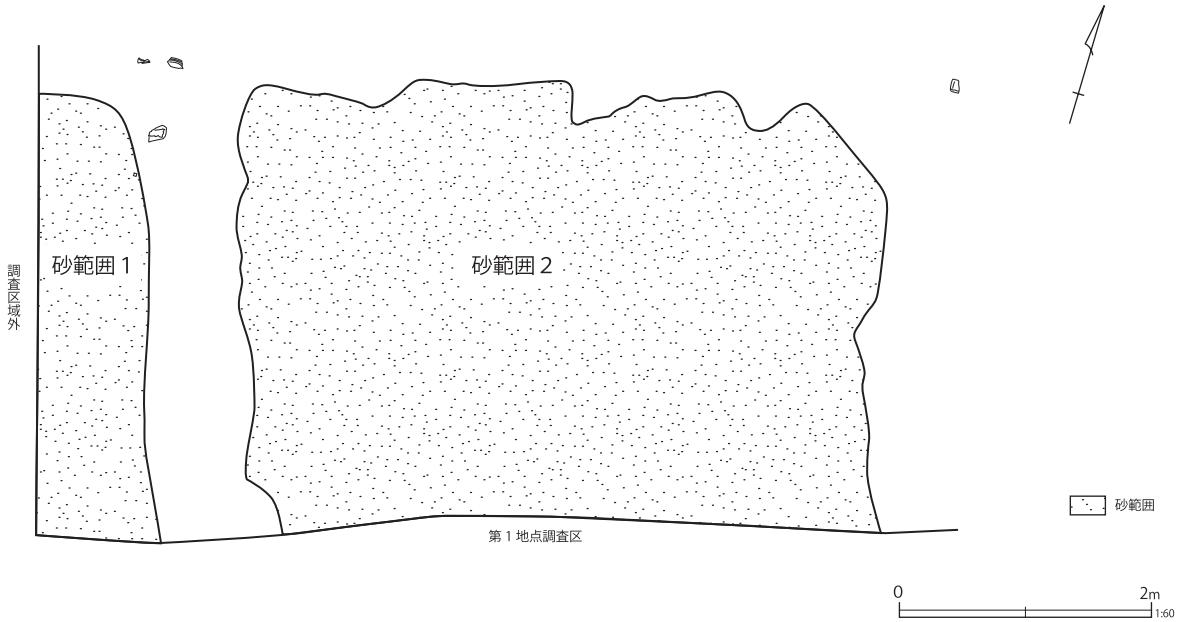
号土壙から出土した瓦質土器の水盤である。栗橋宿では現在の所、第6地点でのみ確認されている器種である。体部下位にケズリ、口縁にミガキの調整が見られる。

第143～145図には土製品を示した。第143図6は第33号土壙から出土した土製品で、京都系「つぼつぼ」に類似する土師質土器の小壺である。ロクロ成形である。第144図4は第10号土壙から出土した火鉢のミニチュアで、京都系である。第145図7は第9号土壙から出土した土製品で、京都系人形の狐である。8・9は第10号土壙から出土した京都系の狹抱き童子人形である。第12号土壙で同品が出土している。11は第18号土壙で出土した小型の鳩笛である。14は第208号土壙から出土した人形で、胎土が砂質であり、在地産の可能性が考えられる。

第146～148図には軒桟瓦・桟瓦・転用瓦、第149～151図には丸瓦・軒丸瓦・道具瓦を示した。第146図9、第147図22は東海式の軒桟瓦である。栗橋宿では一定量が確認されている。第146図15は第33号土壙から出土した転用瓦である。元の器種は軒桟瓦の可能性がある。刃物痕が多数あり砥具転用が示唆される。

第152～155図には、木製品を示した。下駄の出土が多い。下駄は多様性があり、陰卯下駄(1・5・9・10・14・19・20・23・31)、連歯下駄(4・18・29)、無眼下駄(6・21・22・32)、割り下駄(30)の4種が確認された。第152図2は第8号土壙から出土した算盤玉である。12は第11号土壙から出土した漆椀である。赤漆が塗られ高台内には黒で「〇」に「吉」、「いの」の文字が見られる。第154図33は傘のろくろである。黒漆が塗られている。34は団扇である。基部のみの出土が多い。第155図36は第214号土壙から出土したまな板で、裏面に切り込みが4条見られる。

第156図には金属製品を示した。4は第7号土壙から出土した鉄製品の平ノミである。職人の存



第160図 砂範囲（1）

在が示唆される。8は第13号土壙から出土した銅製品の煙管雁首である。方形の陰刻が無数に見られる。11は鉄製品の鎌である。24は第37号土壙から出土した銅製品の釣針である。27は第208号土壙から出土した鉄製品の火箸で、中央が螺旋状にねじれ、断面が方形の特異な形をしている。

第157・158図には石製品を示した。第157図の26・27、第158図30～34・37～46は滑石製石筆である。第33・35・37・38号土壙から出土している。いずれも第13・14・15・20号建物跡と同一敷地内に位置し、石板と共に明治35年の『營業便覧』に見られる栗橋學校関連遺物と推定される。第13・14・15・20号建物跡からも多量に出土しており、栗橋學校跡地の可能性が窺える。35は扁平礫に墨書が書かれており、所謂礫石経の可能性が示唆される。51は第212号土壙から出土した焜炉である。粒径が粗く、極めて脆い砂岩製である。内面底面にツルハシ状の工具痕、内側面に幅広工具痕が見られる。窓部は被熱し、煤が付着している。52は焜炉の可能性がある。黒色の極めて多孔質な安山岩転石を割り抜いて作られ、特異な形態を呈している。内面は刃幅の広い工具に

よる加工痕が見られ、外面側は自然面である。

第159図には硝子製品・骨製品を示した。硝子製品はほとんどが笄である。9は第10号土壙から出土した簪の玉、14は第34号土壙から出土した蓋のつまみと思われる。

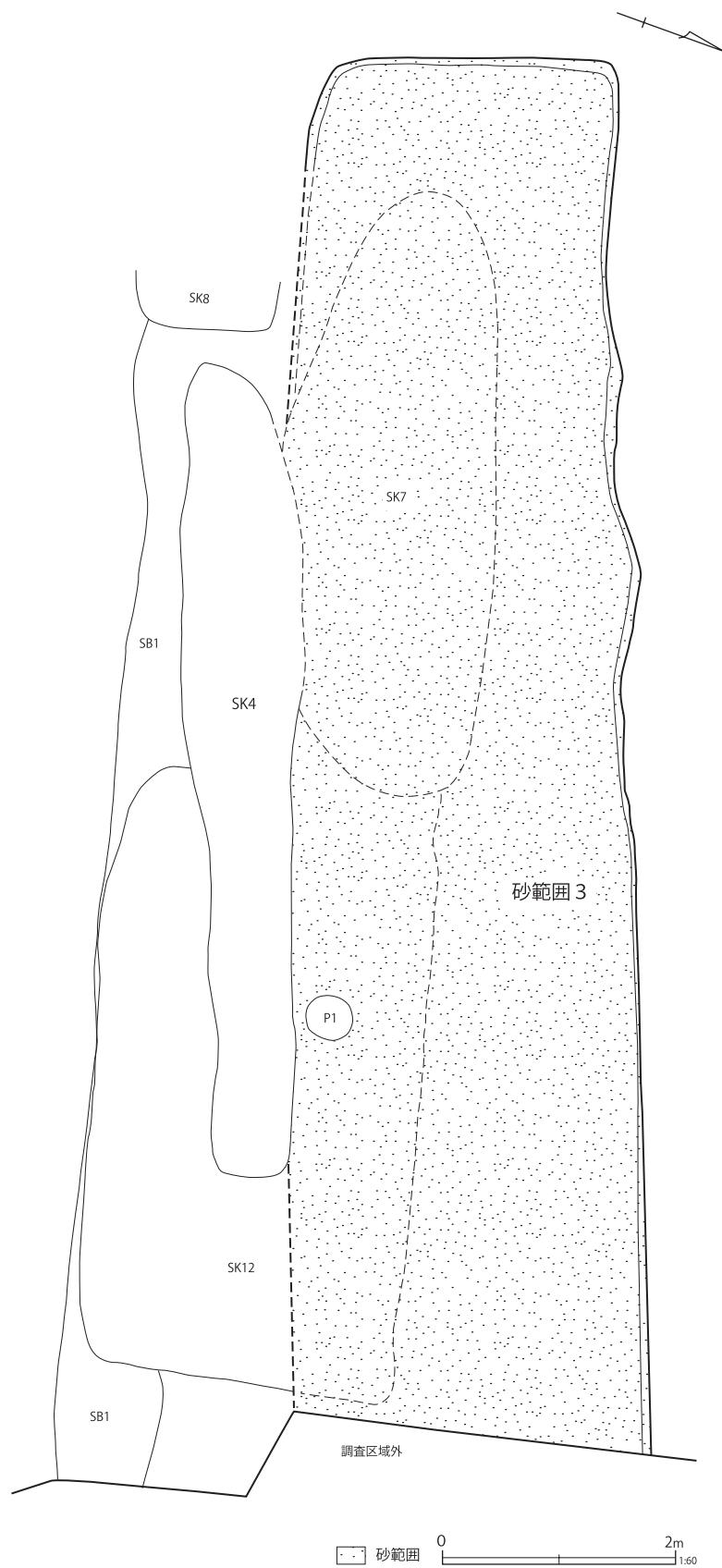
(10) 砂範囲

砂範囲は3箇所確認された（第160・161図）。調査当初は、遺構として認識されていなかったが、その後の発掘調査で栗橋宿本陣跡第477号土壙のように人為的に砂のみを入れた長方形の土壙が確認された。そのため、砂の分布状況から長方形の形態をとるものについては、砂土壙の可能性があるとして、その分布範囲を砂範囲として報告する。なお、基本土層の西壁、東西壁に複数の砂土壙が確認されており、一定量の分布が見られる。

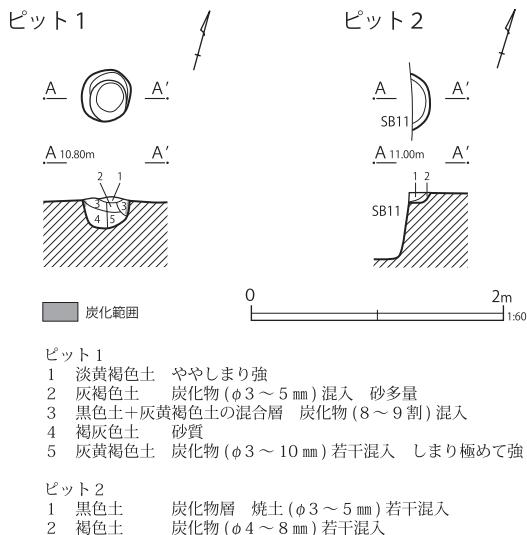
砂範囲については遺構精査が行われていないため、位置・規模の基本情報にのみ留めておくこととする。

砂範囲1は、D 6-h 10、D 7-h 1グリッドに位置し、長軸3.54m以上、短軸0.90m以上である。西・南側は調査区外へ続く。

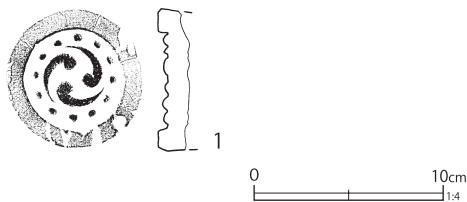
砂範囲2はD 7-h 1グリッドに位置し、長軸



第161図 砂範囲 (2)



第162図 ピット



第163図 ピット出土遺物



第164図 遺物集中地点

第42表 ピット出土遺物観察表(第163図)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	径	胎土	焼成	色調	遺構名	備考	図版
1	瓦	軒棧瓦	[1.4]	[3.4]	1.4	7.5	7.5	C	良好	灰白	P1	右巻 12連珠三巴文 銀化	

5.16m、短軸3.54m以上の長方形ぎみの不整形である。南側は調査区外へと続く。

砂範囲3はD 7-g 1・2グリッドに位置し長軸9.25m、短軸2.52mの隅丸長方形である。

(11) ピット

ピットは第一面で2基が検出されたが、いずれも単独であり、建物跡等を想定するに至らなかつた。第162図に遺構図を示した。

ピット1はD 7-g 1グリッドに位置し、平面形態は円形、長軸0.44m、短軸0.40m、深さ0.23mである。出土遺物は第163図に軒棧瓦を図示した。

ピット2はD 6-d 9グリッドに位置し、平面形態は円形、長軸0.45m、短軸0.13m以上、深さ0.06mで極めて浅い。第11号建物跡に壊され

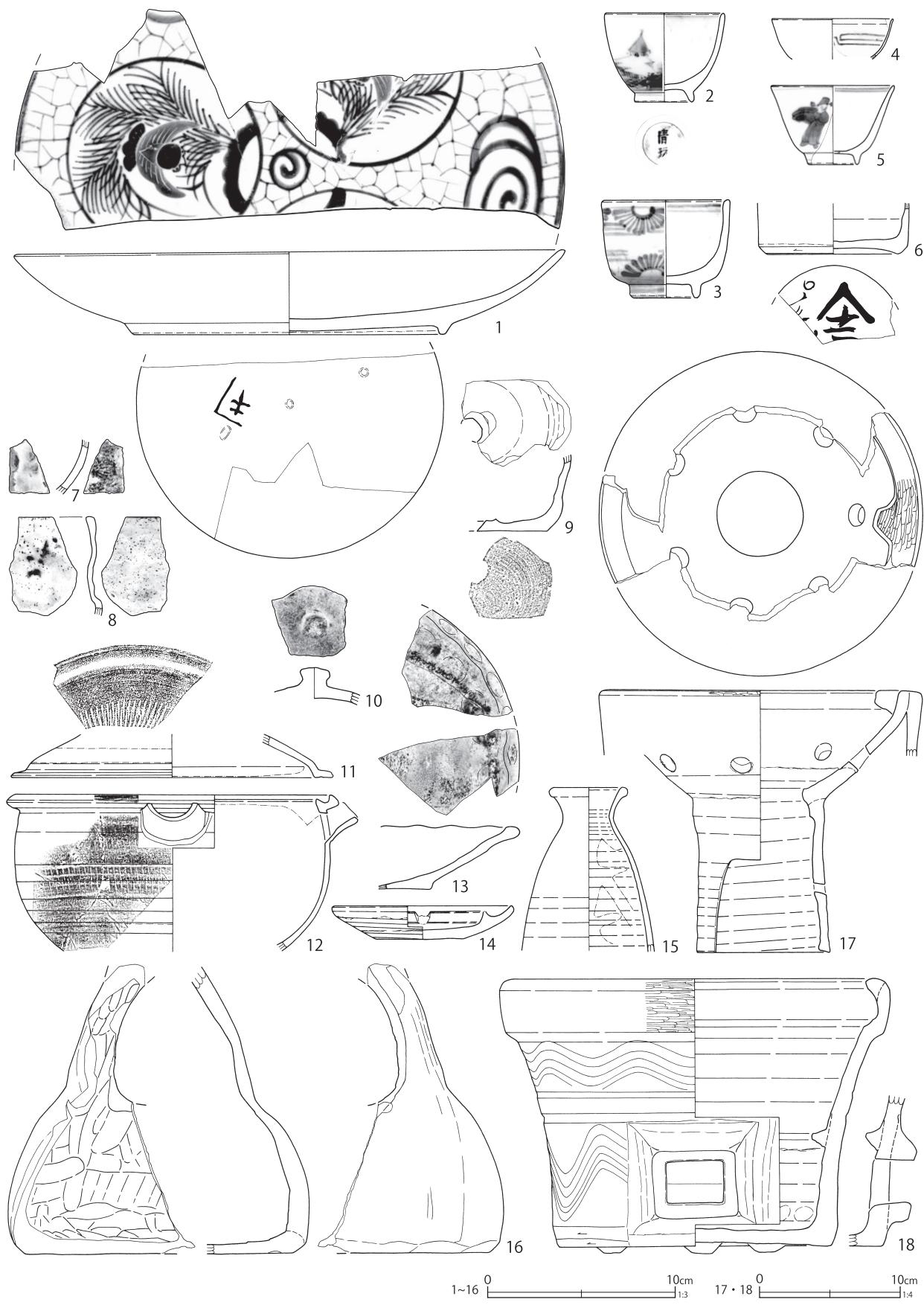
ている。

(12) 遺物集中地点

明確な掘り込みを持たず、遺物が集中して出土する範囲を遺物集中地点として扱った。第164図に遺構図を示した。D 6-e 10・f 10グリッドに位置し、東西3.75m、南北2.70mの範囲内に遺物が分布する。

出土遺物は第165図の1~18に陶磁器を示した。

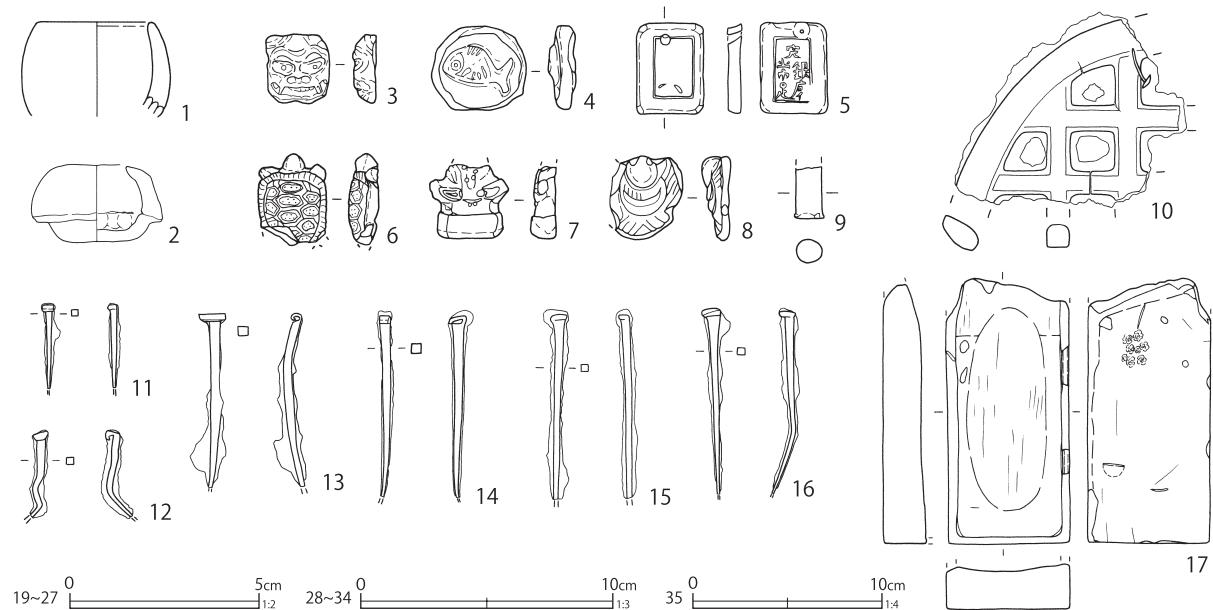
1は肥前系磁器の大皿で高台内にピン痕3箇所、釘書き「カネ」に「キ」が見られる。第207号土壙と接合関係にある。2は瀬戸美濃系磁器の壊で高台内に「清玩」の染付文字が見られる。6は瀬戸美濃系陶器の爛徳利で底部に墨書「ヤマ」に「吉」が確認できる。7・8は大堀相馬系陶器の碗である。7は外面にフジツボ状の型押し模様が見られ、



第165図 遺物集中地点出土遺物 (1)

第43表 遺物集中地点出土遺物観察表(1) (第165図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	皿	(28.8)	4.5	16.2	K	65	良好	白	SX201	肥前系 施釉 内面染付 口紅 高台内ビン 痕3残存, 釘書「 元 」被熱 SK207接合	57-5 59-16
2	磁器	壺	(6.2)	4.7	3.0	K	45	良好	白	SX201	瀬戸美濃系 施釉 染付	
3	磁器	碗	(6.5)	5.2	3.3	K	50	良好	白	SX201	瀬戸美濃系 施釉 染付	
4	磁器	壺	(6.4)	[2.1]	—	—	10	良好	白	SX201	瀬戸美濃系 施釉 内面上絵付(青)	
5	磁器	壺	(6.5)	4.2	(2.6)	—	20	良好	白	SX201	瀬戸美濃系 施釉 染付	
6	陶器	燭台	—	[2.7]	(6.8)	HIK	35	良好	灰白	SX201	瀬戸美濃系 外面灰釉 底部墨書「 吉 …」	59-14
7	陶器	碗	—	[2.8]	—	IK	5	良好	黄灰	SX201	大堀相馬系 外面灰釉 内面糠白釉	57-6
8	陶器	碗	—	[5.2]	—	HIK	5	良好	灰白	SX201	大堀相馬系 灰釉 胎土砂鉄含	57-7
9	瓦質土器	植木鉢	—	[4.1]	—	IK	5	良好	灰白	SX201	回転糸切(右) 内面強いクロナデ	
10	陶器	蓋	—	[1.8]	—	I	25	良好	にぶい黄灰	SX201	松岡系 外面うのふ釉 被熱 土瓶	57-8
11	陶器	蓋	(17.0)	[2.2]	—	IK	15	良好	灰白	SX201	行平鍋 鉄釉 外面トビガンナ	
12	陶器	行平鍋	(16.8)	[8.3]	—	IK	20	良好	黄灰	SX201	鉄釉 外面トビガンナ	
13	陶器	皿	—	[3.3]	—	IK	5	良好	にぶい黄橙	SX201	源内焼風軟質施釉陶器 外面透明釉 内面 銅緑釉 刻印「 三●焼 」被熱	57-9
14	陶器	油受皿	9.4	1.7	4.6	—	100	良好	灰白	SX201	瀬戸美濃系 柿釉 底部拭き取り 外面輪状 重ね焼き痕	
15	陶器	燭台	3.7	[8.6]	—	IK	20	良好	灰白	SX201	京都信楽系 外面灰釉	
16	土師質土器	手焙り	—	[15.4]	—	CIK	10	普通	にぶい橙	SX201	型成形 外面雲母付着	58-1
17	瓦質土器	焜炉	20.0	18.6	9.4	CHIK	80	普通	にぶい橙	SX201	外面ミガキ, 施文 燻す	58-2
18	瓦質土器	焜炉	(25.5)	19.4	19.3	HIK	50	良好	灰	SX201	砂目底 外面ミガキ, 檻描き, 下端ヘラケ ズリ 燻す	58-3



第166図 遺物集中地点出土遺物(2)

第44表 遺物集中地点出土遺物観察表(2) (第166図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	胎土	焼成	色調	遺構名	備考	図版
1	土製品	小壺	(2.5)	[2.1]	—	2.3	CK	普通	橙	SX201	江戸在地系か	94-1
2	土製品	ミニチュア	2.0	2.4	2.0	17.0	HIK	良好	橙	SX201	江戸在地系 釜 型成形 雲母付着	94-13
3	土製品	芥子面	1.8	1.7	0.6	1.8	HK	良好	橙	SX201	江戸在地系 一枚型 中実	96-6
4	土製品	芥子面	2.2	2.5	0.7	2.9	HK	良好	橙	SX201	江戸在地系 一枚型 中実 雲母付着	96-7
5	土製品	貨幣	2.4	1.8	0.3	2.3	—	良好	橙	SX201	江戸在地系 一枚型 中実 雲母付着	96-9
6	土製品	人形	[2.4]	[1.8]	0.8	2.5	CHIK	良好	橙	SX201	亀 一枚型 中実	96-8
7	土製品	人形	[1.9]	2.1	0.7	2.3	IK	良好	橙	SX201	江戸在地系 一枚型 中実	96-10
8	土製品	人形	[2.2]	[1.9]	0.8	2.2	K	良好	橙	SX201	江戸在地系 一枚型 中実	96-11
9	土製品	人形	[1.4]	0.7	0.7	0.9	K	良好	橙	SX201	江戸在地系 ぶら人形の脚 手捻り 中実 透明釉	

番号	種別	器種	法量	遺構名	備考	図版
10	鉄製品	火格子	縦 [7.3]cm 横 [8.8]cm 厚さ 0.9cm 重さ 202.2g	SX201	銅製鉢付着	
11	鉄製品	釘	長さ [3.3]cm 幅 0.3cm 厚さ 0.3cm 重さ 1.2g	SX201		
12	鉄製品	釘	長さ [3.5]cm 幅 0.3cm 厚さ 0.3cm 重さ 3.1g	SX201		
13	鉄製品	釘	長さ [6.9]cm 幅 0.4cm 厚さ 0.4cm 重さ 5.9g	SX201		
14	鉄製品	釘	長さ [7.2]cm 幅 0.4cm 厚さ 0.4cm 重さ 4.7g	SX201		
15	鉄製品	釘	長さ [7.3]cm 幅 0.3cm 厚さ 0.3g 重さ 5.7g	SX201		
16	鉄製品	釘	長さ [7.4]cm 幅 0.3cm 厚さ 0.3cm 重さ 4.1g	SX201		
17	石製品	硯	長さ [14.0] 幅 6.5 重さ 341.7	SX201	器高 [2.4] cm 砂岩 裏砥具転用	113-4

8は胎土に砂鉄を含み、外面に褐色の斑状模様が浮かぶ。10は松岡系陶器の土瓶蓋である。13は軟質施釉陶器の皿で、内面に銅緑釉が施され、外面に刻印「三■焼」が押されている。16は土師質土器の手焙りである。17・18は瓦質土器の焜炉で、外面にミガキが施され、燻されている。18は栗橋宿では出土例がほとんど見られない形態である。2・3・5の磁器が最新期の遺物と考えられ、19世紀第3四半期の遺物組成を示している。

第166図の1～9に土製品、10～16に鉄製品、17に石製品を示した。1は土師質土器の小壺、2は釜形土製品である。5は銭貨を模している。9はぶら人形の脚である。10は鉄製品の火格子、17は砂岩製の硯で砥具に転用している。

(13) グリッド出土遺物

栗橋宿跡第6地点では、表土掘削時、遺構確認時に膨大な量の遺物が出土している。第167～174図には第一面の掘削時、或いは遺構確認作業に伴って出土した遺物を示した。陶磁器については特に特徴的な文字資料を図示した。

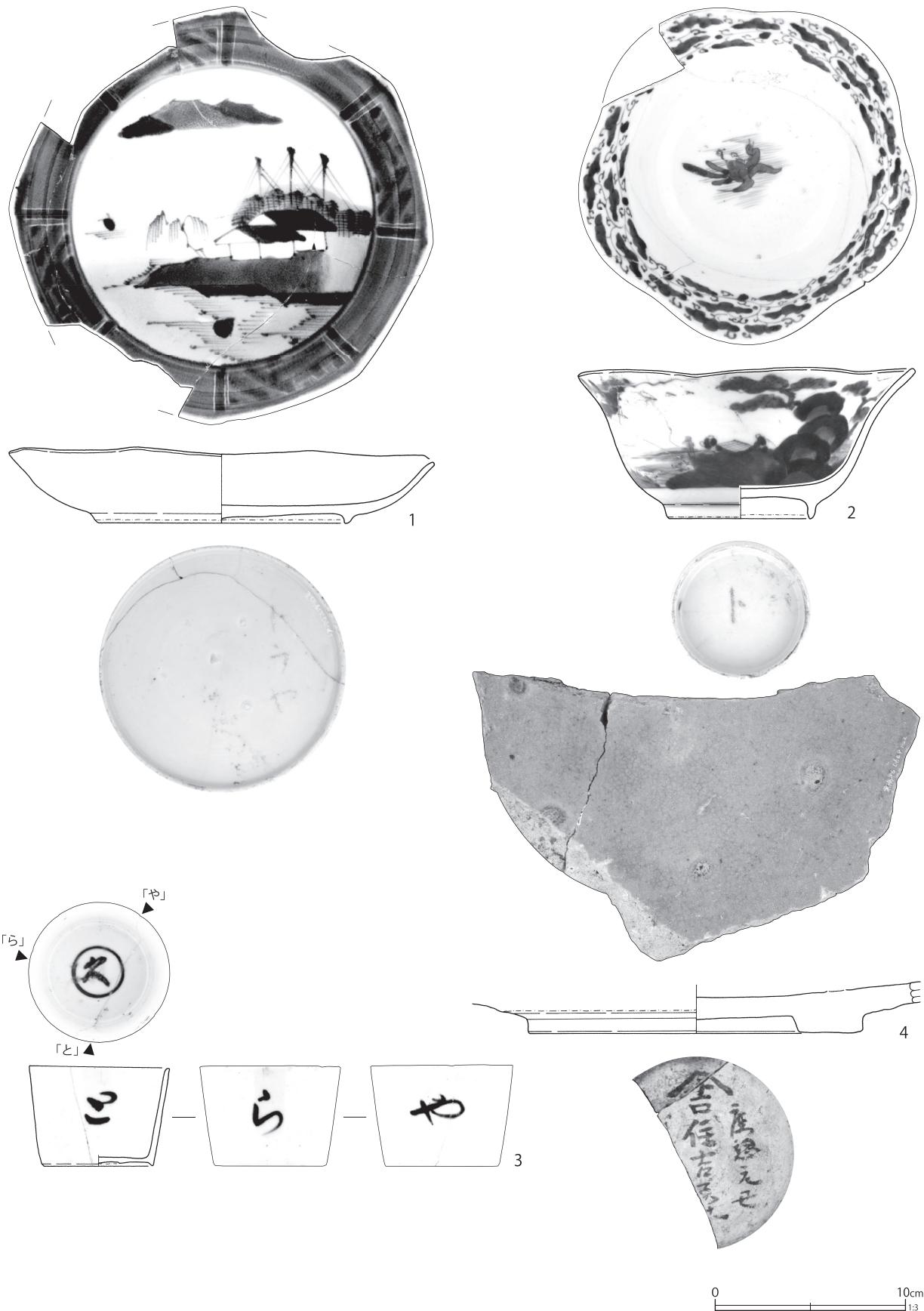
第167図は陶磁器である。1～3は肥前系磁器で、1は肥前系磁器の八角皿である。内面に一枚絵の染付を施し、高台内に「トラヤ」の釘書きが見られる。2は五弁花を呈する鉢で、高台内に「ト」の釘書きが見られる。3は猪口である。内面に「〇」に「久」、外面に「とらや」と染付が施されている。同品の遺物が栗橋関所番士屋敷跡で加藤家屋敷跡の盛土中から出土している（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2018）。これらの文字資料は、栗橋宿西本陣跡に比定される脇本陣の屋号「虎屋」と同様

であるが、詳細については第VI章で述べる。4は瀬戸美濃系陶器の石皿である。高台内に「慶応元年 ヤマ吉 住吉屋」の墨書が見られる。出土位置はD 6-e 9グリッドである。遺構確認時に遺構検出面の整地層に突き刺さる形で出土した。慶応元年は1865年であり、栗橋宿跡の調査当初から幕末頃と推定されている第一面の年代を示す基準資料である。

第168図には、土製品の小型器種及びミニチュアを示した。1は瀬戸美濃系磁器の紅坏、2は陶器の小壺である。3は江戸在地系の蓋のミニチュアで、開口タイプの一枚型整形である。4は植木鉢のミニチュアである。

第169図には土製品の人形・玩具類を示した。1は江戸在地系の姉様である。中空タイプの前後合わせ二枚型成形である。表面には雲母が付着している。2は瀬戸美濃系磁器の人形である。女性を象ったもので赤色の上絵付で口紅が表現されている。3～5は江戸在地系で、3は一枚型成形の恵比寿、4は泥面子、5は芥子面である。6は瀬戸美濃系磁器の土玉である。手捻りで作られ、無釉である。表面に黄色で十字状に薄く着色が施されている。同様の製品が第8号埋設桶で出土している。

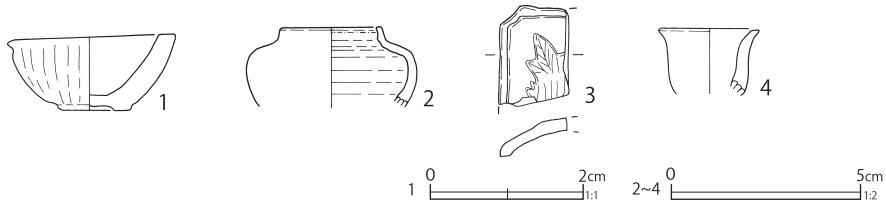
第170図に瓦を示した。1～6は軒桟瓦である。1は江戸式で、瓦当面に「〇」に「上」の刻印が押されている。同様の刻印が第2号基礎状遺構で出土している。2は江戸式の変形タイプで中心から伸びる唐草紋が二重になっている。3は江戸式で、渦巻き唐草紋である。7は桟瓦である。半裁



第167図 グリッド出土遺物（1）

第45表 グリッド出土遺物観察表(1) (第167図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	皿	22.0	3.5	12.9	—	90	良好	白	D6d9	肥前系 施釉 内面染付 高台内ピン痕4, 釘書き「トロヤ」	58-5
2	磁器	鉢	17.3	7.7	7.4	—	95	良好	白	D6d9	肥前系 施釉 染付 高台内釘書き「ト」	58-4
3	磁器	猪口	7.2	5.2	5.2	IK	95	良好	白	D6d9	肥前系 施釉 染付「とらや」「匁」	58-6
4	陶器	皿	—	[2.6]	17.4	DEK	10	良好	灰白	D6e9	瀬戸美濃系 灰釉 内面目跡4 残存 高台内墨書き「慶応元丑 合 住吉屋」	59-15



第168図 グリッド出土遺物(2)

第46表 グリッド出土遺物観察表(2) (第168図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	胎土	焼成	色調	遺構名	備考	図版
1	磁器	紅坏	2.2	1.0	0.9	3.1	—	良好	白	D6d9	瀬戸美濃系 型成形 施釉	
2	陶器	小壺	(2.6)	[2.1]	—	3.1	—	良好	浅黄橙	D7g1	外面鉄釉	
3	土製品	ミニチュア	[2.6]	[1.8]	[1.1]	3.0	HK	良好	橙	表採	江戸在地系 蓋 一枚型 開口 外面透明釉	
4	土製品	ミニチュア	(2.1)	[1.2]	—	1.7	CIK	良好	橙	D6c10	植木鉢 型成形 雲母付着	



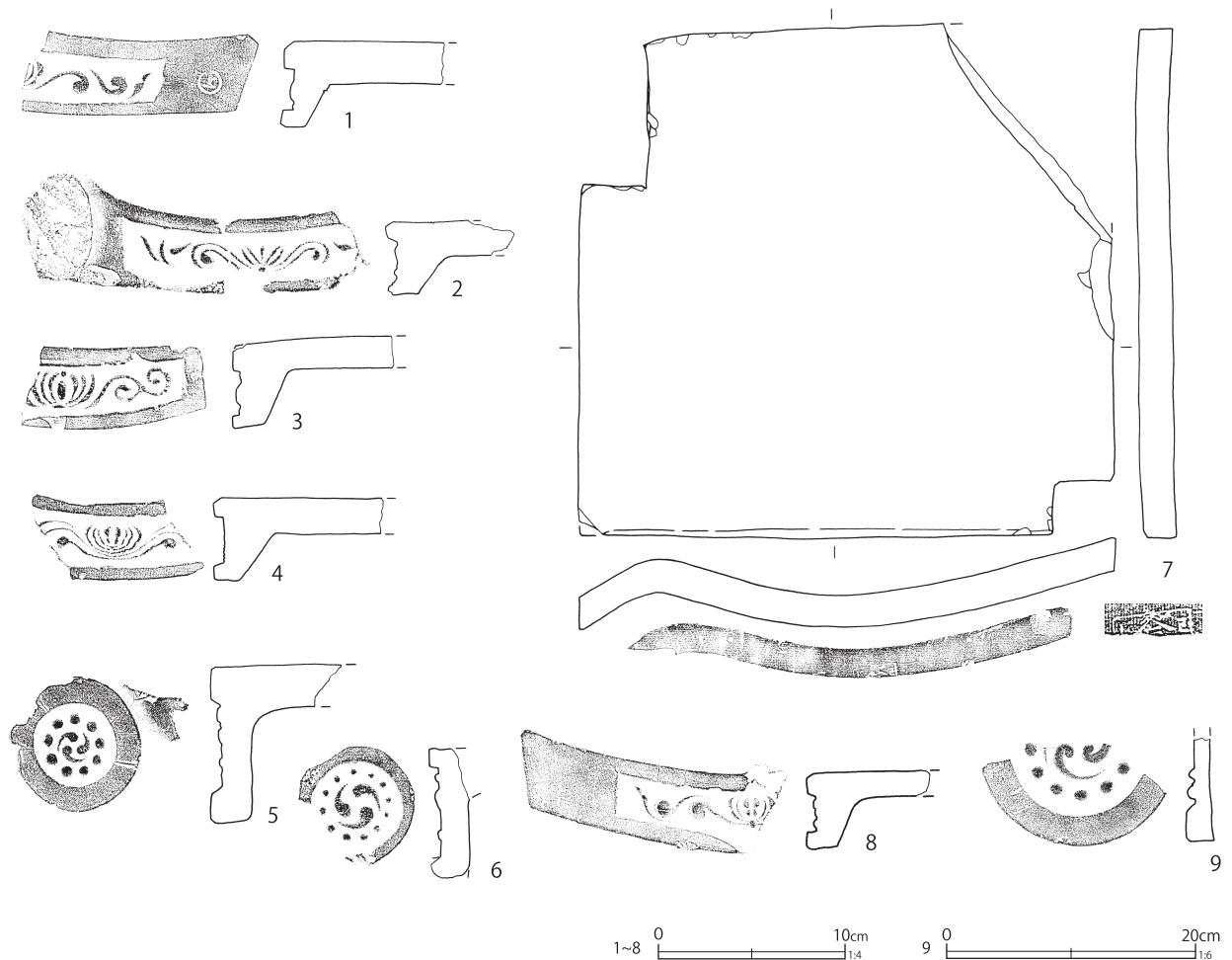
第169図 グリッド出土遺物(3)

第47表 グリッド出土遺物観察表(3) (第169図)

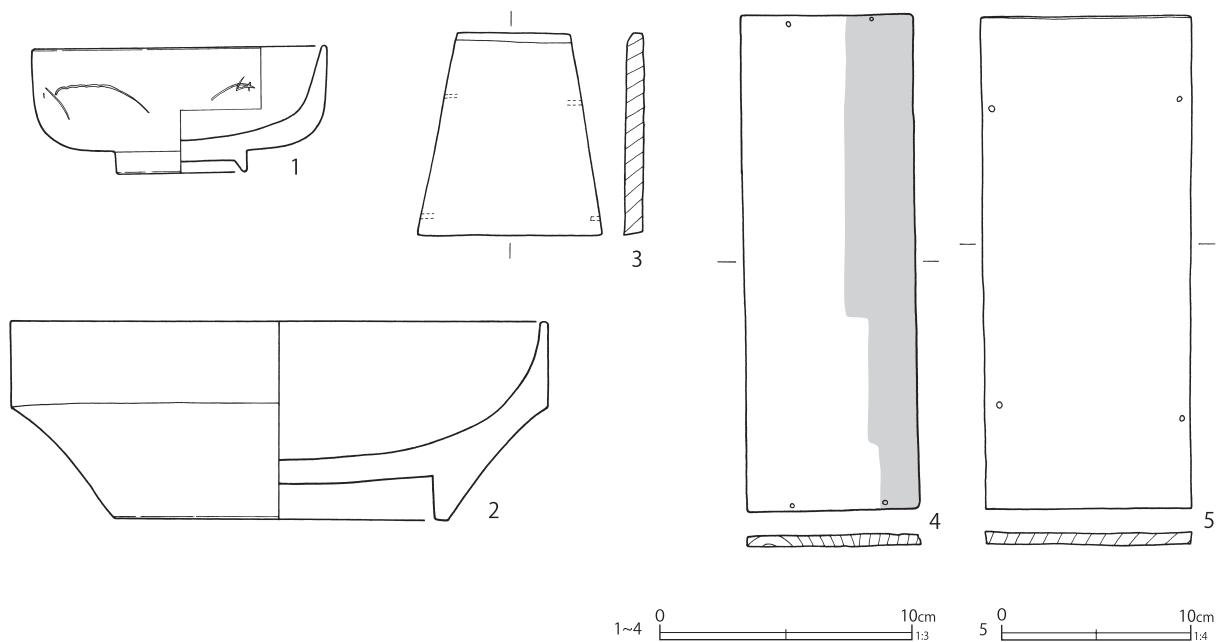
番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	色調	遺構名	備考	図版
1	土製品	人形	[3.5]	[3.2]	[1.6]	9.2	K	良好	橙	D6c10	江戸在地系 姉様 前後合二枚型 中空 雲母付着	
2	磁器	人形	[2.6]	[1.8]	[2.7]	8.4	K	良好	白	D6d10	瀬戸美濃系 施釉 上絵付(赤)	
3	土製品	人形	3.3	2.5	1.0	5.1	K	良好	にぶい橙	D6d10	江戸在地系 恵比寿 一枚型 中実	96-12
4	土製品	泥面子	径2.3			1.1	HIK	良好	橙	D6d9	江戸在地系 一枚型 中実 雲母付着	95-2
5	土製品	芥子面	2.7	2.4	0.8	3.7	HK	良好	橙	D7e1	江戸在地系 一枚型 中実	96-13
6	磁器	土玉	1.7	1.8	1.5	6.0	—	良好	白	D6d9	瀬戸美濃系 手捻り 着色(黄)	96-14

第48表 グリッド出土遺物観察表(4) (第170図)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	径	胎土	焼成	色調	遺構名	備考	図版
1	瓦	軒桟瓦	[8.5]	[12.9]	2.3	[4.3]	—	K	良好	灰白	D6e10	江戸式 刻印「上」銀化	100-11
2	瓦	軒桟瓦	[7.3]	[18.0]	2.0	[4.0]	—	K	普通	灰白	D6d8		100-12
3	瓦	軒桟瓦	[8.5]	[10.4]	1.7	[4.9]	—	IKL	良好	灰	東壁セクション	江戸式か 漏巻唐草 砂利含 銀化 被熱	
4	瓦	軒桟瓦	[9.1]	[10.6]	1.9	[4.3]	—	C	普通	灰白	D6d8	江戸式	
5	瓦	軒桟瓦	[6.4]	7.4	2.1	7.7	[7.6]	K	良好	灰白	D6d9	右巻 9連珠三巴文 銀化	
6	瓦	軒桟瓦	[2.8]	[6.8]	1.5	[6.8]	—	CK	良好	灰白	D6e10	左巻 12連珠三巴文	
7	瓦	桟瓦	27.4	28.6	1.8	3.7	—	CK	良好	灰白	D6b10	刻印 銀化	100-13
8	瓦	軒平瓦	[7.5]	[14.8]	1.6	[4.8]	—	CIK	良好	灰	東壁セクション	江戸式 銀化 瓦当面シャープ	
9	瓦	軒丸瓦	[8.2]	[14.3]	2.3	—	—	普通	灰白	D6c9	右巻 連珠三巴文 銀化		



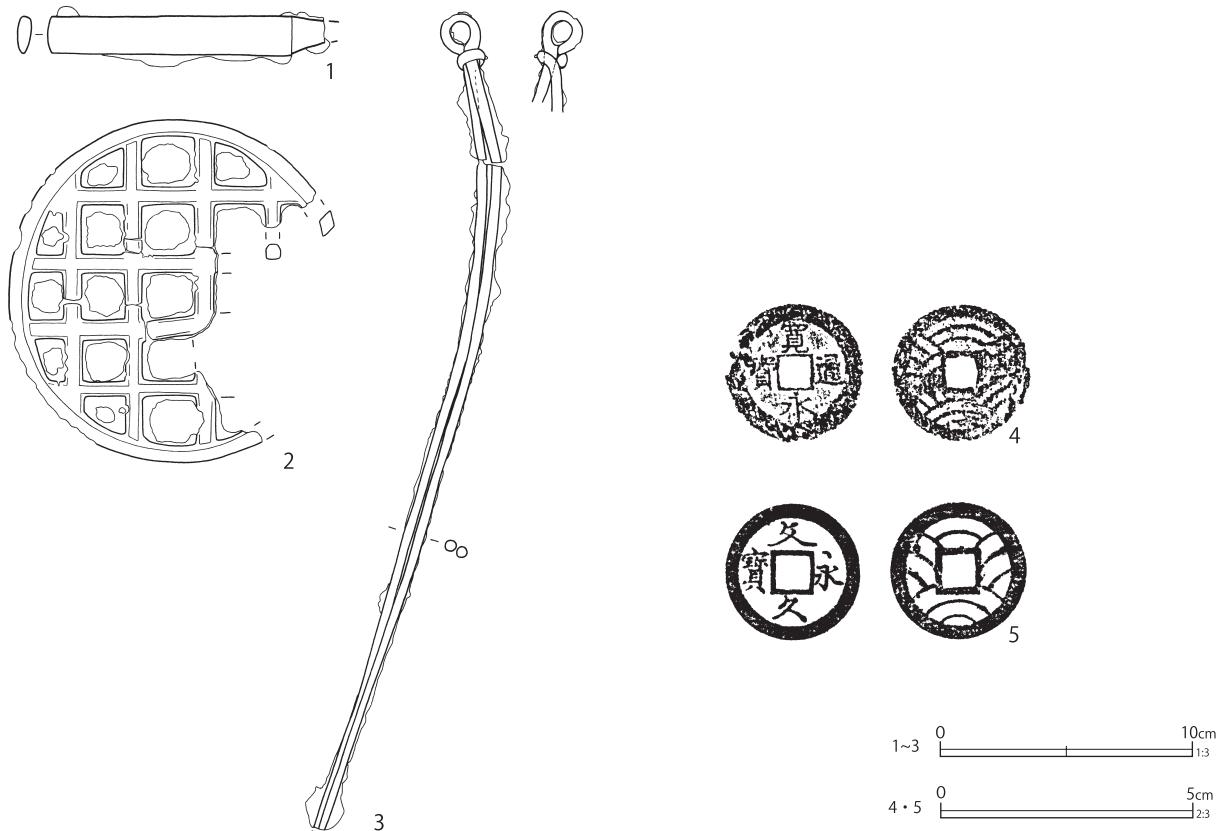
第170図 グリッド出土遺物 (4)



第171図 グリッド出土遺物 (5)

第49表 グリッド出土遺物観察表（5）（第171図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径	木取り	遺構	備考	図版
1	木製品	漆椀	—	—	—	(11.4)	4.9	5.0	横木取り	D7f1	内外面黒漆 外面に金で文様	
2	木製品	鉢	—	—	—	21.3	7.7	13.2	横木取り	D6c9	内面黒漆 外面赤漆 底部黒漆	
3	木製品	箱枕	8.0	7.3	0.7	—	—	—	板目	D7g1	墨書 木釘残存 木釘穴	
4	木製品	木札	26.1	9.0	0.6	—	—	—	板目	D6c9	一部赤漆 墨書 木釘残存	
5	木製品	木札	19.4	8.3	0.5	—	—	—	柾目	D7g1	墨書 木釘残存 文字 157	124-19



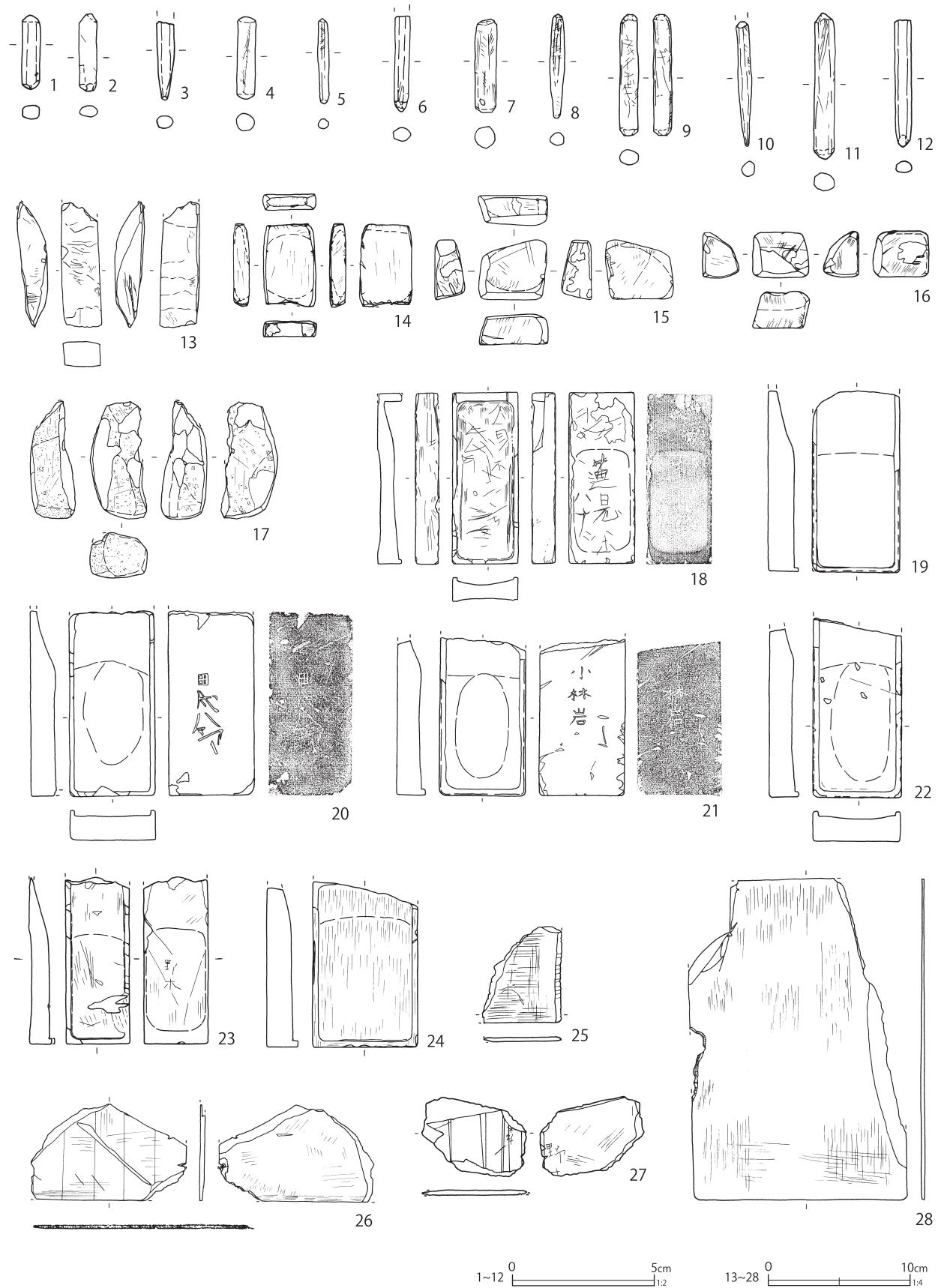
第172図 グリッド出土遺物（6）

第50表 グリッド出土遺物観察表（6）（第172図）

番号	種別	器種	法量	遺構名	備考	図版
1	銅製品	小柄	長さ [10.9]cm 幅 1.5cm(最大) 厚さ 0.5cm 重さ 38.9g	D6d9		109-3
2	鉄製品	火格子	縦 13.6cm 横 [12.1]cm 厚さ 0.7cm 重さ 250.4g	D6d9		109-3
3	鉄製品	火箸	長さ [32.4]cm 厚さ 0.4cm 重さ 31.1g	D6d9	丸形	109-3
4	銅製品	錢貨	径 27.0mm 厚さ 1.0mm 重さ 3.8g	D6c10	寛永通寶(新) 四文錢	
5	銅製品	錢貨	径 27.0mm 厚さ 1.0mm 重さ 3.1g	D7d1	文久永寶 草文	

第51表 グリッド出土遺物観察表（7）（第173図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	遺構名	備考	図版
1	石製品	石筆	2.6	0.6	—	1.5	滑石	D6f10	両端使用	
2	石製品	石筆	2.7	0.6	—	1.5	滑石	D6f10	両端使用	
3	石製品	石筆	[2.8]	0.6	—	1.3	滑石	D6f10		
4	石製品	石筆	2.9	0.7	—	2.4	滑石	D6e10	両端使用	
5	石製品	石筆	3.0	0.4	—	0.7	滑石	D6e10	両端使用	
6	石製品	石筆	[3.4]	0.6	—	2.3	滑石	D6f10		
7	石製品	石筆	[3.3]	0.8	—	3.9	滑石	D6e10		
8	石製品	石筆	3.7	0.5	—	1.4	滑石	D6e10	両端使用	
9	石製品	石筆	4.2	0.7	—	3.4	滑石	D6e10	両端使用 刻書	

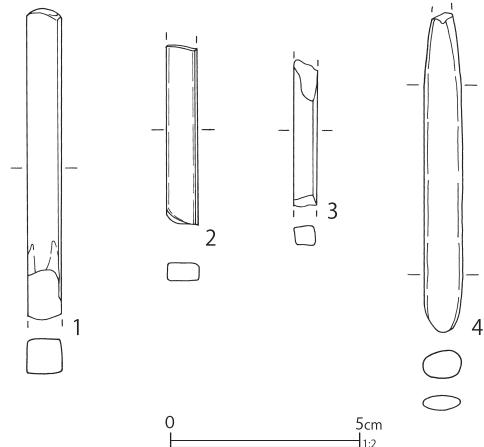


第173図 グリッド出土遺物 (7)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	遺構名	備考	図版
10	石製品	石筆	[4.4]	0.5	—	1.3	滑石	D6e10		
11	石製品	石筆	5.1	0.7	—	4.7	滑石	D6e10	両端使用	
12	石製品	石筆	4.4	0.6	—	2.6	滑石	D6f10	下端使用	
13	石製品	砥石	[8.8]	2.8	1.8	212.1	凝灰岩	D6d9	砥面 4 刃物痕	
14	石製品	砥石	5.8	3.7	1.1	45.9	流紋岩(緑色)	D6f10	砥面 6	
15	石製品	砥石	4.2	4.8	2.1	63.3	流紋岩	表採	砥面 6	
16	石製品	砥石	3.2	4.0	2.5	45.0	流紋岩	表採	砥面 5	
17	石製品	磨石	8.2	3.4	3.0	48.1	角閃石デイサイト	表採	多孔質 自然面残存	113-8
18	石製品	硯	12.0	4.6	—	166.2	粘板岩	D6c10	器高 1.6 cm 刻書「蓮見ハナ」	
19	石製品	硯	[12.7]	6.1	—	237.3	砂岩	D7f1	器高 2.1 cm	
20	石製品	硯	[13.0]	6.0	—	212.1	凝灰岩	D6d10	器高 2.1 cm 刻書「田代ハマ」	
21	石製品	硯	[11.0]	6.0	—	185.1	凝灰岩	D6d10	器高 2.0 cm 刻書「小林岩」	
22	石製品	硯	[12.5]	6.2	—	217.0	凝灰岩	D7f1	器高 2.1 cm	
23	石製品	硯	[11.7]	5.5	—	146.3	粘板岩	D6f10	器高 [1.5] cm 刻書「野木」朱墨付着 破損後使用	
24	石製品	硯	[11.6]	7.4	—	288.0	凝灰岩(中粒)	表採	器高 2.2 cm 研磨痕	
25	石製品	石板	[6.7]	[5.5]	0.3	23.6	粘板岩	D6d9	側面工具痕	
26	石製品	石板	[6.7]	[10.9]	0.3	39.0	粘板岩	D6e10	罫線 側面工具痕 穿孔 1	
27	石製品	石板	[4.8]	[7.3]	0.3	17.8	粘板岩	D6d10	罫線 刻書	
28	石製品	石板	22.7	[15.4]	0.2	244.4	粘板岩	D6d8	側面工具痕	

第52表 グリッド出土遺物観察表(8)(第174図)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	遺構名	備考	図版
1	硝子製品	笄	[8.2]	0.9	0.9	19.7	D6d9	黄褐色 中実 搅拌棒か 被熱か	116-1
2	硝子製品	笄	[4.7]	0.8	0.5	6.4	D6d9	青色 中実 被熱(白色)	116-1
3	硝子製品	笄	[3.9]	0.6	0.5	3.5	D6d9	透明か 中実 被熱(白色)	116-1
4	骨製品	ブラシ	[8.4]	1.0	—	5.9	D6c10		116-1



第174図 グリッド出土遺物(8)

された屋号と思われる刻印が押されている。片方は別の瓦に押されていると考えられる。8は軒平瓦である。栗橋宿での出土例は少ない。

第171図には木製品を示した。1は漆椀である。黒漆が塗られ、外面に金彩を施している。2は鉢である。内面・底部に黒漆、外面に赤漆が塗られている。3は箱枕である。木釘が残存、墨書が確認される。4・5は木札で、墨書が見られる。

第172図には金属製品・銭貨を示した。1は銅製品の小柄である。2・3は鉄製品で2は火格子、3は火箸である。4は寛永通宝の四文銭、5は文久永寶である。

第173図には石製品を示した。1～12は滑石製石筆である。第13・14号建物跡、第15号建物跡及びその付近土壙や遺構外から多量に出土している。13～16は砥石である。17は多孔質の角閃石デイサイト転石を利用した磨石である。18～24は硯で、18・20・21・23には裏面に刻書が刻まれている。23には朱墨が付着し、破損後も使用していることが確認できる。25～28は粘板岩製の石板である。26・27には罫線が見られる。

第174図には硝子製品・骨製品を示した。1～3は硝子製品の笄である。2は青色で中実である。4は骨製ブラシで、第4号土壙に同品がある。2方向からの穿孔が見られる。栗橋宿では出土例が少ない器種である。

報 告 書 抄 錄

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第456集

栗橋宿跡Ⅲ

首都圏氾濫区域堤防強化対策における
埋蔵文化財発掘調査報告
(第1分冊)

令和元年9月13日 印刷
令和元年9月27日 発行

発行／公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4丁目4番地1
0493(39)3955
<http://www.saimaibun.or.jp>
印刷／山進社印刷株式会社